



（岡山製本）

大正四年七月二十日印刷
大正四年七月廿三日發行

有朋堂文庫（非賣品）
修紫田舍源氏下

編輯兼發行者　三浦理　東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登　東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場　東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店　東京市神田區錦町一丁目十九番地

偐紫田舎源氏　終

國貞画 種彦作

[illegible]



浄書 上州 [illegible] 下河 金川

[illegible]

假にも亂れし振舞なし。彼は女の手本ともなるべし。斯く人々の言寄りて、心を誘へど玉葛は、なるべき者と光氏も、折々ごとに譽めけるとぞ。

藤ばかまの卷をはり。

小袖など女ども、手に手に前に持出づる。是は近きに室町へ、参り給ふ餞に、ことよせての例の文ども、言合はせたるが如く、落合ひて來りしなり。玉葛は取上げて、文などを見る事もなく、腰元が讀聞ゆるを、たゞ聞流すばかりなり。かの汜廉が贈りしには、

思ひたのめし日數も早、はつかばかりの空の景色、霜より先に消えかへる心地して

數ならば命厭はん長月と

月のたちなば室町へと、光氏定置かれしを、聞置きしゆゑ斯く言ひしや。正倚はいとこと短に、言ふにかひなく今は早、別に聞えん方もなきを、

玉笹の霜をば消しそ花見ても

いとかじけたる下折の、笹の葉に初霜の、おきしを落さず結びたり。此外にもありしかど、うるさければ書漏しつ。女どもはこれらの文、また繰返しく、「この紙の色この墨付、しめたる匂のなつかしさ、室町御所へお上りの、後には斯うした事はなし、申さばこれがお名殘」ト、すゝめられて玉葛は、いかなる心か正倚のみへ、返をいさゝか認めて、

日を厭ふ葵も消たずはたれ霜

ほのかなれども玉葛が、あはれを聞知るいひなしを、いと珍らしと正倚は、打置かで眺めしな

方盡きて出て行かば、行けと口には言はざれど、捨てものにしてかへりみず、汜廉よりは三ツ四ツばかり、年の上にてありければ、をば君よをばごぜと、打戯れて名をだに呼ばず、いかにもして事ゆゑなく、縁を絶たんと心に思へば、おのづから面にも、現るゝを賤機は、見るにつけつゝ彌ましに、氣を揉みあせり臥勝にて、心すゞしき日とてはなし。保養のためと遊佐の家へ、行きて便も更にせず、最早是を限りかと、思ひの外に案内もなく、又歸り來るなど、心狂ぜし故やらん、更にわかちはなかりけり。

されば光氏この多京が、玉葛を望む事、疾く知りながら許さぬは、對面こそせね賤機は、紫が姉にてあり、それを己が娘に等しき、玉葛ゆゑに押のくるも、憫然からんと思してなるべし。此汜廉は若き時より、色めかしく打亂れし、事は假にもなかりしが、今玉葛が事につきては、さま〴〵心を盡しつゝ、高直主も似合はざる、縁組なりとあながちに、思ひ放ちもし給ふまじ、女は兎角宮仕を、物憂く思ふ由なれば、たゞ此上は光氏君の、御心ひとつにて、己が願は叶はんと、袖の香なんどを手なづけ置き、うち〳〵の氣色をも、能く聞知りて仲立の、事をさま〴〵責むるなるべし。

はや九月も末になりぬ。初霜むら〳〵見え渡り、をかしき朝其所此所より、玉葛への贈物、帶

てより、柏之助が思ひは止み、昔の如く懇に、打語らふゆゑ汜廉は、好き幸ひと玉葛の、仲立をあからさまに、柏之助へ頼みしかば、うち心得て折を見合せ、父高直に斯う〳〵と、聞出したりしかば、高直暫く打案じ、幸壽君の世を治め、給ふ時には汜廉が、勢つきておのづから、人の用ひも格別なるべし、さすれば婿と呼ばんにも、不足はあらじと思へども、光氏君の室町へ、差上げ給ふを止むるは、わが力には及びがたし、斯くまで君の深切に、あつかひ給ふは故のある、事にやあらんと打任せて、置くより外にせん術なしと、取合はざれば柏之助、ふたゝび又思案をかへ、今宵父の使を幸ひ、玉葛に多京が事を、ほのめかし出で樣子を見んと、思ひの外にかくの如く、遠く隔てゝ置きたる故、いと腹立たしく思ひしなり。

さて一色の汜廉は、既に前にも記しゝ如く、幸壽丸の御母上、立田の前の兄なれば、高直にこそは及ばね、室町にての權臣なり。奥方は賤機とて、遊佐國助が惣領娘、紫の上の姉、殊には本腹人柄も、さこそと思ふに引かへて、その振舞蓮葉者とか、いへる女に異ならず、悋氣深くてかりそめの、事にも目をつけ耳を欹て、夫とも言はせばこそ、口さがなく罵りて、女どもなばはしたなく、打叩きなどせしが、募り〳〵て何時となく、物狂はしくなりしかは、汜廉ほとほともて倦み、男女の子をも擧けしものを、今更に離別せんは、快からず思ひながら、せん

伺ひに參りました。何ぞ怪しいお夢でも」ト、問かけられて氏仲は、ありの儘には言ひがたく、口籠りしが床間に、御曹子牛若の、懸畫のありしがふつと目につき、打點きつゝ、「されば〳〵、夢はをかしきものにてあり、鞍馬山にたゞ一人、蹈迷ひしと思ひしが、丈高き一人の山伏、わが行く先へ搖出で、己は僧正坊にてあり、汝年頃武術の執心、淺からざる故奧儀を傳へん、それそれと下知すれば、數多の小天狗群り來り、木太刀を持つて打かゝる。心得たりとやゝ暫く、戰ふうちに時計の車の、軋る音の耳に入り、目覺めて見れば是も天狗に、摑まれてや來りけん、思ひがけなきゆかりが居れり。女どもは知つてか知らずか、是は明石の乳母の娘、朝霧の方目をかけ給ひ、今まで卽ち艮の、館に居たりと彼が話。物恐しく思ひし樣子、送り返してとらせよ」ト、さもありさうに言ひければ、花鄕はじめ女ども、言葉を揃へ「幾重か〳〵、締つてあるのに此お子は、どうして此所へ不思議な」ト、打連れ皆々歸りしかば、氏仲は夢の中に、田貫が言ひし事、繰返して案じつゝ、又夜の物引被ぎぬ。

さて又前に說きし如く、柏之助が玉葛の、對面せざるを恨みしは、別にひとつのいはれあり、そも〳〵此柏之助は、一色多京汜廉と、年頃中の好かりしが、さいつ頃より玉葛に、互に心を懸けし後は、何とやらん疎々しく、面を合せず過ぎたるも、又高直が娘ぞと、確に素性の知れ

の、血筋を避けん爲なりと、申す事は唯今も、聞えし如くに知る者なし。御父君をはじめまゐらせ、たゞ氏仲が不義なりと、偏に思しとり給はん。又二ッには雁音樣の、御心根もいたはし。あまりに道を立過され、道に背きし御浮名を、取らせらるゝがいと悲しく、御腹立もかへりみず、言上いたし候」ト、ふたつの守を差出す。氏仲いよ〳〵心得がたく、「ふぢばかまのなぞなぞの、句をもて日外玉葛が、心を誘ひしそのもとは、我より外に天地の、間に知る者なき筈なり。そも〳〵おん身はいかなる術を、得られて人の胸中を、斯くまで察し給ひしぞ、是に上越す不思議はあらじ」ト、田貫の顏きつと見れば、ありし形は烟の如く、消えて跡なくなりにけり。これはと驚くわが聲の、耳に入つて目を開けば、是いつするの夢にして、八ッの時計ぞ響きける。茫然として起上り、不圖枕邊を打見やれば、いと愛らしき一人の少女、かの夢に見し二ッの守を、手に捧げつゝ跪居たり。さては正夢なりけるかと、かの守を取隱し、顏さし覗きよく〳〵見れば、明石姫のお乳の人、菫野の娘なり。ゆかりも此時心つき、邊をきよろ〳〵打眺め、「私はどうして若君樣、此所へ參つて居りました。千鳥と一緒に唯今まで、部屋に寢んで居たものが、まアいつの間に來た事か」ト、投首する折花鄕は、腰元引連れ入來り、「いかう魘はれ遊ばす御樣子、お起し申すも憚と、お次に宿直の女ども、知らせます故お案じ申し、

なして果てたりと、人の傳へに聞きたるが、いかにしてかは健かなる。又某には何の用」下、問はせ給へば頭を上げ、「名雙寺の尼柒園は、むかし己がゆかりの者、君の知召す如く、現太夫に語はれ、赤松殿の御息女に、對面の御仲立、それが畢竟人違へに、おはせし故に過なし、さなき時には騒の因、重ねて右の筋なる口入、屹度致すべからずと、柒園を叱り置き、現太夫彌二郎二人、兵庫よりして又都へ、歸らん催したりし間、風を起し浪を立たせ、陸へは船を寄せさせず、辛き目見せて本國へ、送り歸し候間、御心安う思召せ。さて又件の彌二郎が、名雙寺にて物語りし、玉葛様の御素性、もれ聞かせ給ひしより、よし不義者といはれても、室町御所へは差上げずと、お心配は道理ながら、はや世もたてば人も變り、義正公を敵と恨みし、者の血筋といふ事は、光氏君のその外に、知つたる者は曾てなく、何のさゝはり候まじ。さはさりながら御安心、なされ難く候はゞ、こゝに不思議の守あり、二ッを分けて男女に持たせ、或は丸じて食に交ぜ、食するか若し其事も、遊ばしにくき其時は、影をうつせし茶を二人に、飲ませてなりとも奇特は目前、たとへば今まで仇敵、ほどに背きし中なりとも、忽ちかはる魚と水、いづれへなりと玉葛様の、御縁は御心まかせなり。世にありがたき賢才の、君に向ひて意見がましく、申すも恐多けれど、不義者になり給ふのは、勿體なくや候べき。義植公と敵どち

もあらねど、世の人に比べても、是もをかしとうら若き、腰元どもは目を留め、「光氏君と赤松殿の、擧け給ひし御子達は、男も女も打揃ひ、みやびやかなも不思議ぞ」ト、密にさゞめきめであへり。

此夜さり氏仲も、月のさえて面白きに、庭を其所此所うち廻り、玉葛が住居の方へ、何心なく來かゝりて、不圖座敷を差覗けば、柏之助が怨みがましき、事の數々聞ゆるを、袖の香も山吹も、もて飽み居る樣子なり。兄弟と知らざる前は、我をさへ打頼み、心を盡したりけるが、今は何をか言ふならんと、小柴垣に立隱れ、件のあらまし聞取りつゝ、さまで腹立つ事にもあらぬを、かど〳〵しく言ふが故、いよ〳〵恥ぢて玉葛は、逢はざるなめり己が言葉を、添へて對面さすべしと、既に入らんとなしけるが、いや待てしばし夫よりは、後にてゆる〳〵玉葛が、心を取りて兄弟の、中睦ましうなる樣に、計ふ方こそ宜からめと、幸ひ人も見咎めねば、密に住居へ立歸り、又机に倚り書を繰開き、寢よとの鐘に枕を取り、打まどろみしが、「若君〳〵、申し〳〵」と呼ぶ者あり。誰にかあらんと起かへり、見れば怪しや一人の法師、枕のもとに手をつかへ、「君まだ幼き御程には、御めみえも致したる、名雙寺の住職田貫、申上げたき事ありて、御眠を覺させし」ト、恐入つて蹲る。氏仲はいと訝しく、「貴僧は大井の館にて、切腹

しとても今俄に、ちかしくなさんは人聞宜からじ、年頃床しく思ひしを、たまく〳〵あひ見て心ほど、語はれぬも珍らしき、世なりかし」とてたゞすぐよかに、聞えたまふが眩くて、柏之助は默然と、吐息と共に、

雲と見し惑も絶えて妹背山

「あゝ怨むるも皆己が、誤なり」トうめきしが、此方へ洩れて聞えけん、

花もなや妹背の山の惑ひ道

と口の中にて吟ぜしを、山吹やがて此方へ傳へ、「始よりして姫上は、御同胞といふ事を、知召しておはすれば、忍び〳〵にとやかうと、仰ありしを花もなき、此身に戀にはよもあらじ。同じ御胤といふ事を、誰か傳へて睦しき、方にやあらんとお心の、惑ひしといふ此お返、みづから聞え給はぬは、世を憚らせ給ふ故、おのづからにお心の、今に解くるは知れた事、深くお案じ遊ばすな」ト、とりなし言ふも無理ならねば、柏之助うち點き、「長居せんも何とやら、物むづかしき心地なり、よし〳〵次第に勤勞積り、重々しくならんには、人もあながち輕しめまじ」ト、言流して立上がれば、月くまもなくさしのぼり、空のけしきも艶なるに、秋草すりたる袴のそば、搔取りたるも華やかにて、いとあてやかに淸げなり。雲井之丞の氣色には、立竝ぶべく

今日は取分けおき上り、などする事もいと苦し、それに斯くまで角立ちて、咎め給ふがなかなかに、疎ましき心地なん、し侍る」など取繕ひ、いとまめだちて傳へければ、柏之助打笑ひ、「さほどまでに惱ましく、思し給はゞ御枕の、屏風のもとまで進入る、事をば許させ給ふまじや。よし〳〵道理を申すのも、却つて心のなきに似たり。さて父高直が申越せしは、室町御所へのおん參りは、いつの頃にか詳しき案内、今日までも更に聞かず、光氏君に問はせられ、内内に宣ひ知らせ、給ふ樣にと密の願、たゞ何事も人目を憚り、此御館へ出でがたく、御目通にて聞えぬ事なん、本意なきさまに候」など、忍びやかに聞ゆる序、わが身の事をも又取交ぜ、「去りし頃まで某に、いとはしたなき振舞ありと、申す者などありし故、斯く疎ましくし給ふよ。それは遁れぬゆかりぞと、ゆめ〳〵知らぬ昔の事、今は却つてあはれぞと、御覧じらるゝ筈にてあり。まづは今宵の御もてなし、表立ちたる晴の方、賓客なみに据置かれ、給ふが更に心得ず、取散したる納戸やうの、所へ密に召入れて、御身のごとく重立ちたる、女中こそは立まじる、事をも厭はめ下仕、はしたなんどの人々と、打語らはゞ心も長閑く、嬉しからんをさまざまに、珍らしき世を見る事」ト、打そばみつゝ恨み續け、言ふもをかしと袖の香は、すべり入りて斯くなんと、玉葛に告げければ、少し片頰に笑を含み、「實は兄弟なりける事、知られ

お心を盡されたは、知つて居るのに手の裏を、返したやうに俄に行儀を、作つてそしらぬお顔つき、あゝしら〳〵しくなるものか」ト、人々寄りてをかしがる。世の諺に人事を、言はゞ目代を置けとやらん、庭傳ひに柏之助、いつの程にか入來り、今もなほ忍びやかに、伺ひ〳〵照る月の、あまりに明きを恥らひてや、桂の木の蔭に隱れ、父高直の使として、參りしよしを言入るれば、今さゞめきし後言、聞かれやせんと女ども、恐る〳〵立出でて、玉葛が居る所より、二間ばかり隔てたる、簾の中へぞ迎へける。はや兄弟といふことを、人能く知れば隔つるにも、及はずながら玉葛は、みづから逢はんもつゝましく、山吹をして仰の趣、いかなる事ぞと伺はすれば、柏之助式代なし、「斯くいへばわが家を、誇るに似たれど召使ふ、侍あまた侍ふに、某えらびに預りて、夜中使に參りしは、人傳ならで聞え知らせ、給はん事にぞ侍るべき。斯く物遠く隔たりては、申すも詮なき心地なり。わが身は數にも候はねど、列なる枝、血筋の絲、絶えぬ諺も侍るを、いかに思しておはするならん、いと古めきたる言事ながら、おなじ根生の小松ぞと、聞くより此方は賴もしき、ものに思ひて侍るを」ト、今人傳を快からず、思ひしさまに見えければ、山吹は引入りて、頓て袖の香出來り、「玉葛樣の御意なさるは、仰なくとも年頃積る、それやこれやの御物語、聞えまほしきは山々ながら、此頃風の心地にて、

義植公も豫てより、聞召入れられし、事の無きにもあらざれば、かく延々になり行くを、心もとなく思しよとか。ましてや今まで心を盡せし、人々はいと口惜しくて、御所へ上らぬその前にと、袖の香はじめその外にも、玉葛が氣に叶ひし樣なる、腰元どもを手なづけて、さまぐ\に責むれども、いづれもく\せん方つき、よしや吉野の瀧つ瀨は、手をもて遮り止むるとも、今となりては御仲立、いとく\難き事なりと、文だに取次ぐ者のなし。雲井之丞もなまじいなる、事をさる頃打出でて、いかに思ひて居るやらんと、底の心の苦しきまよ、いと懇に後見を、する樣によろづもてなし、父の許へ使になど、駈り步きて其後は、輕らかになまめかしき、事は假にも聞え給はず、いかにもなして室町の、宮仕は止めんの、心は失せしにあらざれど、是たはやすく言出でん、事にもあらねばもてしづめ、事の樣をぞ見居たりける。

かくて月のさやけき夜、玉葛の腰元づとめ、若き女の三四人、緣の端へ立出でて、外には人もあらざれば、打くつろぎつよ聲潛め、「世にをかしいは赤松の、若殿達があれ程しげく\、氏仲樣をすよめては、お供でおいでなされたが、此頃は寄付かれず。眞實の御兄弟と、いふが知れたら猶更親しく、なされて今度室町へ、お上りなさるお世話をば、人さきへなさる筈」ト、いへば側なる一人がかいとり、「その中に罪の重いは、御總領の柏さま、私等までにも追從して、

野伏どもは一人も來らず。春之助怒り吹けども〳〵所詮首尾は、爲おほせ難きを見て取りけん、今世を安くの齒を嚙み、「我々ばかりか母上も、玉葛樣の御緣により、光氏君の御扶持に預り、今世を安く過ぎ給ふ。然るに汝たゞ一人、現太夫に加擔人して、恐多くも姫上を、奪取らんとする橫道者、八裂にしてあきたらぬ、奴にはあれど氏仲君の、御仰が重いゆゑ、此度は歸しやる、ありがたう思ひ居れ」ト、はら〳〵淚に暮れにけり。雲井之丞は現太夫を、彌二郎が側に蹴遣り、「名雙寺にてさいつ頃、彼等が振舞心得がたく、宮城に言付け誘はせしに、果して網にかゝりし魚、時過ぎたれど放生會。こりや春之助、宮城を今朝ほど遣したる、その後より又人をやり、伺はすればあわたゞしく、旅宿を片付け玉葛を、連れて立退く船の用意は、彌二郎が伏見にて、調へおきしと確に聞き、それにて二人を追追し、ふたゝび都へ足向すなと、汝よく〳〵言付けよ」ト、駕籠の中なる驛路の鈴、とりて打振り給ひければ、數多の同勢出來り、「さア立をれ」ト現太夫、彌二郎二人を中に取籠め、警固は則ち春之助、いと嚴重に連行くを、打見送りて氏仲は、心靜に乘物に、乘りつゝ館へ歸りけり。

月たちて九月になりぬ。昔よりして此月は、人の出入を忌みければ、十月ばかりに玉葛を、室町へまゐらすべしと、光氏密に沙汰してけり。

むらと、立ちたる邊に二人は潛まり、待つ間程なく向へ乘物、はやかいくらみ時なれば、確に見えねど宮城なるべし、被衣姿の女一人、その外侍二三人、かひ〴〵しげなる者は見えず。しやござめれと二人は樹蔭を、躍出でて道を遮り、「物申す事のあり、その乘物止めよ」ト、刀のきりは打廻し、仁王立に突立つたる、その勢に恐れしや、附從ふ侍ども、咎めもやらず進みもせず、言ふがまゝに乘物かき据ゑ、控へて樣子を伺ふさま、現太夫はさてこそわが威に、呑まれしと心おごり、つか〴〵立寄り乘物の、戸を押開き差込む手先、しつかと捉へてしづしづと、内より出づる雲井之丞。これはと驚く現太夫を、筋斗を打たせはつたと投げ、起きんとするを足下に踏へ、にこやかに打笑ひ、「蟲に等しき身をもちて、姉玉葛に心を懸け、狼籍ひろぐいたづら者、切つて捨てんな易けれど、今日服脫の歸路に、血をあやさんも憚あり、命は助け得させん」ト、宣ふ言葉もかほばせも、いと愛らしきに似もよらず、習ひ覺えし武術の力、現太夫はさながら骨も、碎くるばかりに苦しくて、許させ給へも出でばこそ、たゞ手を合せ泣き居たり。彌二郎は案に違ひし、此有樣に恐れながら、流石に一人も逃げがたく、宮城に向ひ大聲あげ、「おのれ何の意趣ありて、我を欺き大事の旦那を、辛き目に逢はせし」ト、立寄る襟髮かい摑み、被衣をとるは宮城にあらぬ、思ひがけなき布之助。いよ〴〵狼狽へ相圖の呼子を、

もお供、お附の女中は多けれど、御歸がけに玉葛樣、はじめて都へおいでの時、お心安うなされた人に、忍んでお逢ひなされるには、他の人では目口もうるさし、手前行つてくれとの御意、他へは必ず御沙汰なし、七ツ頃にお歸の、お乘物の中は空、加茂の社人の住居へ内々〳〵、お殘りなされて男の乘る、目だたぬ駕籠で人顏の、確にわからぬ時分を考へ、女のお供は私ばかり、僅な人數でそつとおいで、遊ばす所が有るといふは、御不足のないお身分でも、心遣は同じ事、さうした大事の御用を聞くも、お少いからお側に居て、お心安い私が冥加と、聞きもせぬ事長たらしく、囀つたのが此方の幸、道に待受け玉葛殿を、引攫ふには上なき便宜、それ故旅宿を仕舞はせ申し、伏見までは駕籠の用意、伏見からは船の用意、あなたへは沙汰なしに、手づかへもなくぬかりも無く、調へ置きて候なり。まだその上に此川原の、野伏非人に物取らせ、語ひ置いて若し二人が、手に餘りなば呼子の笛を、相圖に力を助くる筈。さて爲おほせなば何ばかりの、褒美をや賜はらん」ト、はや掌に握りし如く、したり顏にぞ語りける。もとより思慮なき現太夫、大方ならず打喜び、「そは屈竟の事にてあり、いよ〳〵聞きしに相違なく」ト、言ひも切らぬに彌二郎うち笑み、「お心づかひ御無用々々。なほ宮城めをたらし込み、戻の道筋いとこまかに、聞置きたれば違はあらじ、此方へ來らせ給へ」とて、榛の木四五本むら

三十八編　下

秋の夕風肌寒き、加茂川堤を北へ北へと、彌二郎に勸められ、かの信樂の現太夫、當途もなくて來りしが、遠き路にや疲れけん、邊の石に尻うちかけ、何かは知らず向をのみ、見つめて急ぐ彌二郎を、引止めて側へ近付け、「今日ひる前より汝一人、飮込顏にて吉き事あり、幸ありとて俄に旅宿を、取片付けさせ日の入りて、うそ淋しき此加茂川原、そゞろ歩くは確に夜の、殿にやおん身は魅まれけん。まづ〳〵睫毛に唾を塗り、心を鎭め給へよ」ト、いへば彌二郎うち笑ひ、「初よりして樣子を言はゞ、必ず心はやらせ給ひ、爲損ずる事もやと、己一人で目論みたる、仔細といふは今日四ツごろ、妹の宮城が圖らず旅宿へ、尋ねて來たと思召せ、我も少しく用ありて、他所への出がけ彼方は來がけ、門の口にて行逢うて、内へ入らねば御存じない筈。その時宮城が申した事を、まねびて聞かせまゐらせん。まづなまめかしく此樣に、小褄をちよつと搔取つて、私も今は思はぬ出世、むかしに變る被衣姿、お前に見せて喜んで、貰ひたいから寄りました。今日はあの氏仲樣と、玉葛樣のお服ぬぎ、貴船と加茂の御社へ、お詣遊ばす私

りて某へ、密に告げし」ト言ひければ、光氏は打笑ひ、「それは似合はぬ事にてあり、室町へ差上ぐる、事だにはや疾く高直に、語りて既に彼も得心、女は稚きその程は、親に從ひ嫁しては夫、老いての後は子を頼む、これ誰々も知る三從、それを違へて親にもあらぬ、己が心に任せん事、いとあるまじき筋なり」ト、答へ給へば又氏仲、「朝霧の方をはじめ、それかれ年頃御恵を、受けたる者のお館に、多くおほせば玉葛を、かの方々と押並べ、置かせらるゝも憚ある、事の出來て捨てさせ給ふ、代に御所の御ぐしあげ、所詮わが物ならじとて、見放ち給ふを人前は、いとかしこくも取扱ひ、給ひしなりと申しゝを、確に人の語りし」ト、聞上ぐれば、高直は實に〳〵左様に思ひしなめりと、光氏は心にをかしく、「さて直ぐならぬ言ひやうかな、彼は元來推量を、爲過す事の常にあり、身の行も近頃は、我意を隱して人前を、飾る事のみ專と、心がくるに引比べ、實に至らぬ隈もなく、さて細やかに考へし。今おのづからさにあらずと、思ひ知ること現れん」ト、笑ひ給へる御氣色は、潔けれど氏仲は、野分の朝の御素振、如何あらんと疑とけず。光氏是より言葉なく、かく高直が推量りて、その圖に落つるはいと口惜し、己が心の淸き事、いかにしてかは知らすべき、室町へ差上ぐるも、未練の殘りし様ならんか、とやせんかくやと案じけり。

見ると、捨置かれぬが己が癖、それ故よしなき人にまで、かゝる恨を負ふ事あり、情が却つて仇となり、輕々しきと笑はるべし。玉葛が母はまだ、年いと若くて病に臥し、いと〳〵あはれに言置きし、事ども忘れざりしかば、ある山里に心細く、彼がある由傳聞き、高直が尋ね求むる、氣色なければいとほしく、知つての通り迎取り、住居も營みもの〳〵しく、傅かするゆゑ高直も、何とやらん羨ましき、心になりしにやあらんずらん」ト、眞僞とりませて、物語りつゝ又言ふやう、「さて玉葛が人柄は、宮仕こそいと宜からめ、今樣姿になまめきたる、樣には見ゆれどさすがにかしこく、うかとは人の言葉に乘らず、過はすまじく見ゆ。つね〴〵の物言は、あどなき樣に聞ゆれど、事ある時に人に對し、斯樣々々斯う〳〵と、述る言葉は男の如し。御所君もあまりにしどなき、女は好み給はねば、御心に叶はん」など、宣ふ樣を氏仲は、つら〳〵見上げなほ父の、心の中を探らんと、いよ〳〵側へ近く寄り、「年月かくて玉葛を、育み給ふ御志の、深きは知らず世の人は、ひが心得をするもの多し。既に去る頃一色泥廉、赤松の館へ赴き、玉葛を貰受けんと、おほめかして言ひたる時、高直は吐息をつき、娘ながら彼が身は、我儘には計ひ難し、光氏君のもし御心、ありて据置き給へるか、さある時には憖ひに、申出して御承引の、なきのみならず御不興を、蒙るべしと答へし由、當吉が次の間にて、聞取

氏仲は直様に、それより巽の館へ行き、光氏の前に出で、玉葛が返事細やかに聞上ぐ。光氏は打聞いて、「室町へ仕うまつる、事をば彼は敢て好まず、しぶ〳〵にこそ返事をしつらめ。正佝などは下ざまの、事までもよくあきらめて、萬に馴れし浮世人、それが心の甚深き、あはれを盡して言寄りしに、もしや心の移りしかと、思へば心なき樣にて、宮仕をもすゝめ難し。されど御所君去年の冬、大井川へお出の節、玉葛が密に見上げ、いとめでたしと思ひし樣子、若き女はほのかにも、見奉れば御側へ、出づるを願はぬ者はなし、彼も大方その心と、思へば捨ても置き難く、今日もその事言遣りし」ト、言へば氏仲少し進み、「さて玉葛は人の妻と、なるが相應致さんや、又宮仕がよからんや。まづ當時御寵愛の、類ないは磯菜の方、内君とてもやんごとなき、御覺にておはすれば、たとへ何程御所君の、御心に叶ひしとて、かの方々と立ならび、候事はかたかるべし。宣ふ如く正佝君、いと懇に思したる、それを知りつゝ室町へ、差上げ給はゞよしお寢間へ、召さるゝ奉公ならずとも、何事ありて引違へ、られたるならんと御心、置き給はんも御兄弟の、御なからひの疎々しく、ならん端にや候べき」ト、いとおとなおとなしく、申し給へば光氏思案し、「此答はたやすく爲がたし。かの高直がある故に、己が心ひとつにて、とり計はん人にもあらぬを、一色の汜廉さへ、我をこそ恨むなれ。すべて人の落目を





郎に、語ひ寄りて玉葛に、心をかけしは何者ぞ」ト、ふたゝび問はれていよ〳〵驚き、「玉葛様もその事は、深く隱しておはすれば、申上ぐるも憚あれど、知召されて御尋ね、あらせらるるに左樣の事は、なしと申すも恐あり。御父君にも必ず〳〵、仰上げられ給はるな」ト、かの信樂現太夫が、その始末を殘なく、彼に恐れて逃上りし、事まで語りたりければ、氏仲は打點き、「能くつゝまずに言聞せし、神妙々々。さりながら、兄にも親にも背きし彌二郎、それに何故玉葛は、光氏の娘と披露し、高直が實子ぞと、人の知りしは近頃と、いふ事をなど語りし」ト、言はれてはつと顏うちあかめ、恐入つてさし俯く。氏仲少し言葉を荒らげ、「其事よりして此頃既に、大事に及ぶべかりし處、思ひの外なる事ありて、かの現太夫は呆れはて、物笑ひとなりて止みぬ。彌二郎が京の旅宿は、聞置きたるや」ト宣へば、宮城少し面をあげ、「木屋町と申す事は、承り置きましたれど、現太夫が上りし事は、唯今までは夢にも存ぜず、女の淺い心から、彌二郎に欺かれ、大事のことを漏したる、無調法の段々は、申上げん言葉なし」ト、ほろりと泣けばあはれと思ひ、「これさ何も其樣に、氣を痛めるには及ばぬ〳〵。言譯なしと思ひなば、まづ斷くせよ」ト何やらん、やゝ久しく宮城に囁き、「畚之助にも我直に、言聞かせて置くべき間、住居へ密に來るやう、言聞かせよ」ト宣ひすて、急ぎ歸らせ給ひけり。

ん」ト打歎き、歸らんとする向より、宮城は何の心もなく、玉葛の機嫌を聞かんと、うか〳〵として入來り、氏仲を見て打驚き、傍へ退き平伏す。此方も少し會釋して、次の間まで出でけるが、不圖心づき立止り、山吹を呼出し、「あれへ行きたる女はたしか、田舍よりして玉葛に、傅き來りし宮城とか、いへる者にはなかりしか」ト、尋ね給へば、「仰の通り、畚之助の妹に侍り、若君樣にはようお見知。たゞ今では夫を迎へ、住居する家を戴き、お側には居らぬから、お人をおよけ遊ばしたも、存じませずにつか〳〵と、お前へ參りぶしつけな」ト、なほ何やらん山吹が、いふを氏仲耳にも入れず、「わざ〳〵呼びても逢ひたいところ、あの女には用のあり、向の人なき座敷へおこせ」ト、仔細ありげに宣へば、山吹急ぎ仰の事ども、宮城を招き傳ふるにぞ、何事やらんと恐る〳〵、宮城はお前に立出づれば、氏仲「これへ」ト近く呼び、「此二月まで玉葛の、素性を父君我にさへ、深く隱しておはせしが、高直が娘ぞと、知らせ給ひし其後に、疾く世を去りしそちの父、彌五六郎の義心をはじめ、畚之助がその遺言を、守りし事などあらあらとは、語り聞かせ給ひしかど、まだ父君も知召されぬ、事あるやうに覺えたり。畚之助のそのほかに、そちに一人の兄あるべし、名は何と申すぞ」ト、仰に宮城は訝りながら、「彌二郎とてこれは國に」「いかにも殘りてありつらん。さて其方達が筑紫に在りし、その時にかの彌二

はなれたる野べの露なら濡れもせん
「かうよりほかの御請は、知り侍らじ」と聞ゆれば、氏仲少し打笑ひ、「己が住居は此つゞき、同じ野邊でも草の種、別々なれば離れし同然、室町君より御招、さすればいよ〳〵輕からぬ、御身と思ひ諦めても、兎角心のしづまらぬを、いかでか知召さるべき。さはさりながら言出さば、なか〳〵疎み給はんも、わびしきが故心の中に、深く籠めては居たれども、今はたおなじ難波なる、身を盡してと思ひつめ、恥をも忘れ聞ゆるなり。柏之助がさる頃よりの、氣色を定めて見給ひつらん、我をさへ頼みしを、人の上にはいとをかしと、心の中に笑ひしも、今はわが身の上となり、思ひ知らるゝ事多し。彼は却つて同胞なるを、聞きしが故に仇心、失せて行末睦ましく、語り暮すを樂みに、するさまなるが羨まし。よしや情はかけずとも、あはれとだにも思せよ」など、いと濃かに聞え知らせ、給ふ事ども多けれど、煩はしければ記さず。玉葛も憎からずは、思ひながらに光氏の、聞召さんも恐ろしく、かつ雁音が手前を憚り、何とも答なしかねて、頭痛し胸苦しと、病にかこち奥へひき入り、いとむづかしと思ひたる、氣色を察し氏仲は、かゝる序に今少し、聞えまほしく思ふ事、なきにもあらねど是も座を立ち、「あら心うき御氣色かな。ひとはな心の戯ならぬ、己が心はおのづから、思ひ知らせ給ふこと、必ずあら

知れましたら、なんで服を受けて居たと、疑受けるも何とやら、恥かしう思はれます」ト、答ふるは能く心得しと、感じながらに氏仲打消し、「いや、さほどにつゝみ給ふもよしなし、忌あり服あるその中は、悲しき中にもまだ少しは、心頼みもあるやうなれど、それ過ぎぬれば力なき、いよ〳〵心地せられん」ト、いとあはれげに言ひければ、玉葛は目をおし拭ひ、朝夕お側においで遊ばし、御看病遊ばした、御身でだにもそのお歎、おん名を聞きしもまだ近頃、一度も御目にかゝらずに、直に別となりはてし、妾が心を推して」ト、打しめりたるその氣色、常の女が愛敬を、つくりたるより娟妍なれど、氏仲は目もやらず、默然として居たりしが、不圖心づきそれよ〳〵、女どもを遠ざけて、此序にと思ひしを、今の歎に忘れたり、何とかせんと邊を見廻し、蘭の花の面白く、咲きしを一本きり取つて、玉葛につとさしつけ、「わが心こそ是にてあれ、よく見給へ」ト言ひければ、何心なく取らんとするを、なほ其儘に放さねば、玉葛無理にもぎ取る袖、氏仲は引動かし、

解けて寢よ同じ野邊なるふぢばかま

「露にぬるゝが願ぞ」ト、言かけられて玉葛は、思ひがけなや恥かしと、思へどそしらぬ風情して、

れ見よと、嘲けられやし給ふらん、兎角己が不埒者と、なるより他に思案はなしと、思へど邊に人目あり、打點いて聲をひそめ、「その外にもまだ父君の、御傳言もありしかど、これは人には包むべき、筋にてあれば」ト何とやら、事あり顏に邊を靜に、見廻らし給ひければ、腰元どもは心得て、皆々お次へ立ちて行く。心安しと近く進み、「御所君は淸らなる、御姿にておはしませば、御次々の女ども、恐多きと知りながら、心をかけぬは一人もなし。されば人目に立つばかり、御心に叶ふ時は、妬を受けて思はざる、難儀に及ぶ事あらん、かねぐ〵にその心して、みやづかへし給へ」など、斯樣の筋を取綴り、光氏が言ひもせぬ、事を語りてこゝろみれば、何と答もなしやらず、吐息のみして恥かしげに、差俯くも美しゝ。その中に不圖氏仲は、實に父の宣ひし、傳言を思ひ出で、「肝心に聞ゆべき、事のありしを忘れたり。さて御服を脫ぎ給ふは、はや此月の廿日頃、その日はさゝはる事あれば、十三日と定めたまへ、親だつ者の某が、許せば更に障なし、その日には衣服を改め、神に詣づる例なれば、加茂貴船こそ宜からめと、はやその用意をし給ひぬ。我もその日は連立ちて、參詣せん」ト言ひければ、玉葛少し顏をあげ、「そはありがたき事なれど、お連れなされて下さつたら、あまりに目立ちませうから、私ひとり忍びやかに、參るのが宜く侍らん。光氏君の御娘と、人は存じて居りますれば、もし夫が

て、聞えかぬるが故にして、誰にも深く思はるゝを、願ふが女の情ながら、たゞあさ〳〵と御心を、留め給はずに捨置かれ、靜に隱れ住ひなば、嬉しからんと世の人に、似ぬ身の上を案ずれば、つくねんとして夕暮の、空の景色のあはれなるを、端近に出で見上げし姿、まだ小毬の服あれば、薄黑色の帷子に、綾もなく縫もなき、黑き帶して常には變り、更に裝ひ飾らねども、生れつきたる麗しさに、色無きもまた能くうつり、却つてそれが華やかなり。

かゝる處へ、氏仲は不圖入來れり。これも服を脫がざれば、白に淺黃に目立たざる、一重の衣も人柄に、ひかれて劣らず淸らなり。はじめの程は實の姉と、思ひし故に隔なく、遊び戲れなんどせしを、今同胞にあらじとて、俄に行儀正しくせんも、何とやらん角だてば、なほ其時の樣に變らず、玉葛もいと親しげに、御物語など聞ゆ。今氏仲の來りしは、室町よりして宮仕の、事を急がせ給ふ事ども、光氏の傳言を、言はん爲にてありければ、まづその由を述べ給ふ。玉葛は靜に打聞き、御返事つゝましげに、言竝ぶるその氣色、いと懷しげなるにつけ、野分のあした光氏の、心安げに玉葛に、戲れし事思ひ出で、室町御所より度々の、御催促あるが故、よんどころなく其事を、此方へ仰越さるれども、實は手許を放ち給ひ、差上げんといふ御心は、無きよりえんにんなすにやあらん、さある時には汜廉へ、高直が言ひたる事の、圖に當つてそ

を斷め、自害せしとも光氏に、討たれたりとも推量の、說のみにしてさだかならず。かの黃昏は母に似ず、心の優しかりしかば、せめては彼が追福の、爲にもならんと玉葛を、いたはり給ふといふ事は、確に聞留め置いたり」ト、始終を物語る。

此方の一間に雲井之丞、始終の樣子を立聞きて、心に深く打驚き、今言ひし凌晨を、實に切捨て給ひしなら、玉葛が身に取りては、父君は祖母の敵、よしさなくとも謀叛を企て、義正公に討たれたる、敎具が血筋の玉葛、殊にはかゝる雜人の、いまだに心をかけゐるものを、何の故にか室町へ、差上げんとはし給ふならん、立歸りなば父君を、諫めて此事止めんか、いや〳〵それも嗚呼がまし、はて何とせんかとせんと、手を打組みて暫く考へ、それよ〳〵玉葛へ、不義言かけて妨げし、義植公の御側へ、近寄せざる樣にせば、譏らるゝのは我ひとり、ほかに障は更になしと、心に問ひ心に答へ、心を遂に定めけり。

風の音なひ雁の聲、秋もやう〳〵身にしむる、葉月のはじめとなりにけり。玉葛は此頃の、空より心の定まらず、あながちに宮仕を、厭ふといふにはあらねども、實の父は光氏君の、思さん事を憚りて、こまやかにはあつかひ給はず、右も左も見も知らぬ、人に交り憂き事の、ありとも語らん人はなしと、思ふは賴む二人とも、位のあれば威も備はり、かうであゝでと打明け

ひ、「それなればお前方は、玉葛様を御存じで、それかと思ひ逢ひたいと、おつしやつたのに侍るか。あなたはたとへ高直様の、御胤にもせよ光氏君の、姫上なりともてはやせば、あの様に軽々しう、御出は絶えてなし。あれは近江の堅田様、高直殿もよしない者を、尋出したと御後悔、投やり者にしてござれば、女中衆まで軽しめて、居るからお逢ひもなされた」ト、語るにいよく力を落し、「それではどうで望は叶はぬ。それはさうと高直の、娘をなんで光氏が、それ程までに大切に、さるゝであらう」ト現太夫、問へば彌二郎うち頷き、「御合點が行かぬ筈、さて唯今は推量ちがひ、申分のない代り、其事はとつくりと、お話を致しませう。己の父彌五六郎は、伊勢の國板畠、教具の元は家來、かの教具謀叛を企て、義正公に亡され、皆滅亡に及びし時、いかにしてかは横雲とか、凌晨とかいふ娘一人、遁出でしが世に落ぶれ、あやしき者の妻となり、女子を舉けて黄昏と、その名を呼なし五條の住居、高直の若きほど、その女の許へ通ひ、是もまた女の子を、生みたるその子が即ち玉葛。父彌五六が知らるゝ如く、主あしらひも教具の、正しく曾孫にてあればなり。さて程もなく黄昏は、かの高直と縁を切り、又光氏に逢馴れしが、母凌晨は光氏を、父の敵の子なるが故、討つて恨を散ぜんと、狙ひ寄りしが本意を遂げず、黄昏ともに一夜に最期。その時の有様は、見し者なければ凌晨は、所詮及ばぬ事

かしこいやうでも宮城は女、とう／＼彼をたらし込み、はじめの程は光氏の、胤と披露し高直の、娘と人もおろ／＼知るは、まだ此頃の事なりと、詳しい話を聞置いたる、折も折とて今日の便宜」ト、打喜べば現太夫、「併し顔を見たばかりは、思ひの種」トいふのをおさへ、「幾人ついて居たりと女、此所は尼寺手にたつ者の、なきこそ幸ひ飛掛り、掻抱いて裏門より、走るかよしや其事は、叶はぬまでも見屆けて、置きだにすれば此寺へ、又參詣の道に待伏せ、手段はいくらも候」ト、囁く處へ柒園は、あたふためいて立歸り、「お喜びなされませ、逢うて遣らうと御意遊ばし、おしつけあれへ」ト知らする程なく、腰元どもが附添ふをも、待たずに先へ輕輕しく、堅田はとつかは走り來て、「田舍から來て私に逢はうと、言入れたのは此方衆か、定めて近江の者ぢやらうが、つひぞ見た事はない」ト、言ひつゝよく／＼顔さし覗き、「此方の鼻の大きな人は、栗本の天王の、社務殿にどこやら似てぢや、お前は兄か弟御か。後のどん栗眼の人は、どうも思ひ出されぬ」など、例の早言へら／＼と、竝べ立てたる近江訛、筑紫人には聞取れ難く、呆れて物も言はざれば、腰元どもは氣の毒がり、はや御歸と勸め立て、誘ひ入れば現太夫、興さめ顔に投首し、「穢げはなけれども、玉葛には似もよらず、その上蓮葉なあの物言。彌二郎そちが才覺で、とんだむだひまかゝせた」ト、言ふのを聞いて柒園は、から／＼と打笑

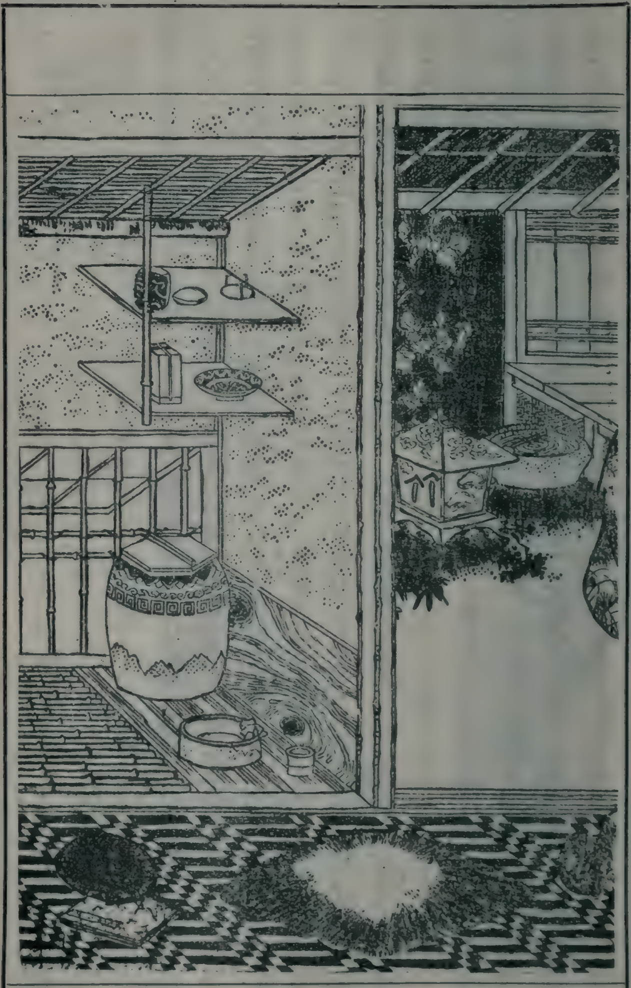
あちこちより呼びに來り、又は物など問ひに來る、尼なんどの出入も、繁かりければ氣の毒に、思ひやしけん現太夫に、柒園は打向ひ、「赤松の高直樣の、御母上が當春御死去、御葬所は鳥部野なれど、當寺へも又別に、御廟所を建てられて、光氏君の御嫡男、氏仲さまは百日の、その間は日毎におまゐり、はやその日數は過ぎたれど、しげ〳〵おいで遊して、御懇に御讀經、あれ〳〵お聲が聞えます。まだお服の中ぢやとあつて、お月代をも遊ばさず、今日は又高直樣、田舍より呼取らせ、給ひたる姫君の、御參詣にて御覽の如く、何やら寺は騷がしゝ。重ねて來らせ給ひなば、書院座敷廣庭など、案內なして見せ申さん」ト、いふを聞いて彌二郎は、現太夫と顏見合せ、少し前へ進出で、「執權職と仰がれ給ふ、赤松樣の姫君は、どんなものか話の種、おめみえをしたいもの。なア申し信樂樣」ト、目まぜを悟り現太夫、「一寸見上げ申せば宜い。むかしの誼取計ひ、お賴み申す」ト柒園が、袖に縋りて何やらん、打入れたりけん袂の重み。もとより心は賤しき生、につこりと打笑ひ、「なりさうもない事ながら、お姬樣には似合はぬお氣輕、お心安うおいでの度、お言葉を下さるれば、まづ〳〵願うて見ませう」ト、立行く後に彌二郎は、あたりを見廻し聲をひそめ、「此頃も申した通り、畚之助となかたがひと、いふにもあらねば尋ねゆき、玉葛殿の身の落著、いろ〳〵問ひしが我を疑ひ、あののものと言聞かせず、

部野に廟參なし、その外は日每々々、名雙寺にぞ參りける。
これはさて置き、肥後の國の鄕侍、信樂の現太夫は、京に所用のありければ、見物ながら去る頃上り、木屋町の座敷を借り、かの畚之助の弟なる、彌二郎を供に連れ、洛中洛外あなたこなたと、每日遊び步きしが、七月のすゑつがた、大井川の方へ行かんと、まづ太秦の藥師に詣で、かたびらが辻を通るに、向より來る尼のあり、何心なく不圖見るに、姿こそ變りたれ、そのむかし都に久しく、逗留をしたりし中、三筋町にて馴染を重ねし、茂しほ屋の夕汗と、いひし遊女に疑なし。其後に又上りし時、尋ねたりしが行方知れず。今不圖彼が面を見て、むかし戀しく思ひければ、行くべき方へは行かずして、うか〳〵彼が後につき、行けば程なく田舍まで、音に聞えし名雙寺の、門の中へ入らんとす。こらへかねて袖を曳き、「卒爾ながら」ト問かけんと、する時尼はふりかへり、「久しかりし現太の殿、御覽の通りの今の姿、名は柒園と言ひ侍る。人の聞きては惡しかりなん、夕とも汗とも宣ひそ。澁茶一服まゐらすべし、此方へ來らせ給へ」とて、彌二郎をも諸共に、部屋めく所へ入れにけり。旣に前にも記しゝ如く、むくつけ者の現太夫、さらに床しげなきものから、むかし物よくくれしが故、「柒園は今も忘れず、菓子など出してもてなすは、その恩を思ひてなるべし。さて四方山の物語、するその間に柒園を、

三十八編　上

是よりはなほ室町へ、上り給へと誰々も、頻に勸めたりければ、玉葛はいと胸痛く、親と頼みし人さへも、怪しと思ふ御氣色あり、ましてや御所の御身近く、仕へまゐらせ思はずなる、もし御言葉もかゝりなば、富世の前磯菜の方、それかれ心おき給ひ、はしたなき事出來んか、又した〴〵の者なんどは、妬心に善からぬ事を、見出し聞出し笑はんと、打擧りて目をつけられなば、兎角につけて安からぬ、ことのみ多くなりぬべきと、まだ若けれど辨は、はやある年の程なれば、さま〴〵思ひ亂るれど、これらの事を打かすめ、語り交さん母もなく、心ひとつに人知れず、物歎かしさぞ重なりける。

その中に彌生廿日、小毬は竟に失せぬ。氏仲が悲歎の事ども、赤松の館の騷、くだ〳〵しければ記さず、推測りて見たまふべし。鳥部野の菩提所に、二葉の上政則と、押竝べて葬りぬ。さて氏仲は小毬の、剃りたる髮を請受けて、父のさる年開基したる、名雙寺に是を埋め、此所にもまた小毬の、墓を築きて數多の尼を、集めて追善供養を營み、七日七日に當りし日には、鳥

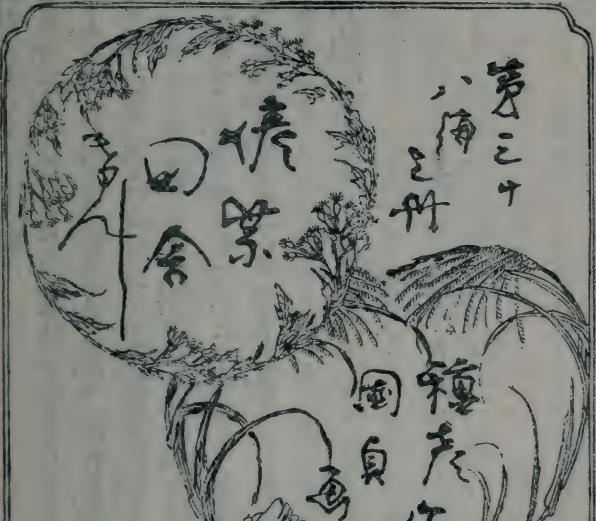




偐紫田舎源氏第三十八編序

延寶四年撰[至來集]定興の句に、「名にも似ず月こそ出づれ丸行燈」といへるは、賴政の謠をやつし、名にも似ずと其形を難ぜしなり。又近く安永九年の作[隣壁夜話]の序に、「女郎の實と玉子の四角は、無い物と歌ひしに、行燈は丸く、四角な五徳が出來、重寶といひし云々」と見え、(延寶より安永まで)其間百餘年、暗合の同論あり。今は座敷の行燈は丸い物のやうに心え、箱火鉢でつかふ五徳は角なる物と定まりしは、專に流行はれ、目に馴し故にてあり。此草紙に光氏が、大將鬠を海老の尾の、やうに割りしは龜戸の案じ、初めの程は異な髮と、おのれまで思ひしが、繪馬羽子板押繪の類、開帳庭の納め物、又吉原の軒燈籠、團扇はもとより煎餅形、悉此姿を寫すに目馴れ、怪しき髮の風ともいはぬは、前にあげたる二箇器の、論の止みしに是同じ、畫の流行せし功なるべし。それにひかれて自然、拙作も源氏といふ、名にも似ずとの誹もうすらぎ、いよ〱末まで續かんかと、角なる五徳を譬に假り、我身勝手を如レ斯。

柳亭種彦誌


第三十
八編上冊
偐紫
田舎
源氏
種彦作
国貞画
通油町
鶴屋
梓

りて喜び居たり。
屛風などの後にて、立聞きしたる腰元は、をかしさかうじて死ぬべく覺ゆ。中にも笑はやき者は、こそ〳〵とすべりいで、遠く退きて腹を抱へ、內君も御面、あかみてさても見苦しの、彼が育と思したり。高直やがてお前に出で、「舌早にての高聲は、よく聞えて候はん、女にはなき申文、何事をか書きいでん、是もまた一興なめり。氣の結ぼれて物むづかしき、折には近江の娘を見るこそ、よろづに紛れて藥なれ」ト、たゞ笑草もてあそびものに据置きたりけれど、浮世の人は高直が、娘の恥を隱さんため、わざと斯樣にはしたなく、取あつかふならんなど、心々に言ひけるとぞ。
御幸の卷をはり。

と御所樣とは、御夫婦合のことなれば、あれを遣うて下されと、つい一口に賴まつしやつて、下さつたらば直に埒が、明きさうな事と思うて、萬事あなたへ打まかせ、安堵して居ましたが、玉葛とやらいふ姊御が、もうその役にならつしやるに、きまつたといふ事を聞き、夢に榮耀榮華をし、面白かつたを胸に手を、置いたで吃驚さめて仕舞つた、樣な心地で侍る」ト、いふ舌ぶりも爽かにて、いと忙しなく聞苦し。高直ふつと吹出す、口へ手を當て笑をこらへ、「下ざまの夫婦と違ひ、かゝる事まで內君の、おん直々に御所樣へ、仰せらるゝものにはあらず。覺束なきを賴まんより、さういふ望あらんには、まづ人先に願出づる、これ近道を行く道理。玉葛は光氏君の、御娘におはすれば、やんごとなくとも我もまた、深切に申さんには、聞召し入れさせられぬ、事はあらじと思ふなり。今にてもまた申文、その願書をとり綴り、美々しう書きて出されよ。長歌の詞など、その中に取交ぜしを、御覽ぜんには捨て給はじ。君は一體お情深く、思込みたる人の願を、無下には見過し給はじ」など、いと宜う賺すは親げなく、賴もしげなくはや言ひても、詮なき者と捨てられて、瞞さるゝとは堅田は知らず、にこ〳〵と打笑ひ、「和歌はあやしくも、どうかつゞけ侍りなん、むづかしい字で書く事は、あなたよりして申させ給はゞ、その尾について淨瑠璃の、脇を語る心もち、お聲を賴みに致しませう」ト、手を押揩

疑なし」ト、笑を含んでやはらかに、いふに引かへ柏之助、「それともに又腹立の、止まずは天の岩戸の中へ引籠り給ふべし。さすれば世界は常闇に、ならんずらん」ト嘲弄し、お暇願ひ梅之丞、もろともに立ちければ、堅田はほろ〳〵打泣きて、「力に思ふ人々さへ、皆すげなうし給へど、たゞ〳〵内君さまばかり、御目を懸けて給はるから、それを力に御奉公、致しまする」ト目を拭ひ、氣輕に立ちて忙はしく、下女童なども、讓りあひてせぬ事さへ、皆搔取つて立走り、あなたこなたと惑ひ歩き、心のかぎり宮仕する、暇には御所樣の、お側へ出し給はれと、心安げに内君を、さま〴〵に責聞ゆれば、あらあさましや物言ふ術さへ、知らぬわが身もかへりみず、いかに思ひて言ふ事ならんと、内君は興さめて、更に物も言はれ給はず。

かくてある時高直は、富世の前の御前にて、堅田が願の事を聞き、いと華やかに打笑ひ、何思ひけんお次へ立出で、「近江の娘近江の娘、此方へ來よ」ト呼びければ、「おい」ト答も輕々しく、出來りてわが體を、投出すやうに坐るを見、高直をかしさ押隱し、「此頃は見違へる、ばかりに行儀も正しくなり、御所君の御身近く、仕ふる女中に交りても、似合しからぬ人柄ならず、御ぐしあげの望あらば、など疾くよりも打明けて、己に語らざりしや」ト、信實めきて言ひければ、堅田は嬉しさ顏に現れ、「さうおつしやつて下さるを、實は願うて居ましたけれど、内君殿

し。みんな聞いて置きました。御所様のおぐしの事を、あづかる役に出らるゝげな。私が急いでこれ此所へ、上りましたもそんなお役を、おつしやり付けて下さるゝ、事もあろかと思うたから。おはしたさへも厭がる事まで、引取つて働くが、内君様には見えませぬか。一體あながお情ない」ト、恨みかくれば皆微笑み、誰とりあげて挨拶を、する者なければ柏之助、又もや前に進出で、「そのお役があいたなら、某望んで世に出んと、かねぐ心懸けたるを、おん身が願ひて出でんとは、そりや横道といふもの」ト、聞いて堅田は打腹立ち、「女の代にどうして男が、出らるゝものかよい程に、嘘をもついて置くのが能い。近江に居ると氣のもめる、事もなんにもないものを、あなたが人をお下しなされ、探しておいて今では何かに、つけて人を阿呆にし、あんまり輕い取扱ひ、さうなさるが宜うこざります」ト、手をついては後へずるり、ずるりぐとゐざり退き、ぢろりと此方を見やりしは、憎げはなけれど腹立しげに、眦を屹と引あげたり。柏之助はかく言ふに、つけても實によしなき者を、尋出せしと思ふより、吐息を隱してさし俯ぶく。梅之丞おとなしく、「下ざまのする事まで、身に引受けての宮仕、内君様の御目に留らば、よも疎略には思すまじ。さはさりながら性急に、事をするのは破のもと、心をしづむる其時は、堅き巖も泡雪と、なるとやらんの諭あり、されば願も遠からず、叶ひ給ふに

上は室町へ、召さるゝを妨げて、手に入れんずと是よりは、さまで憚る氣色もなく、文など送り給ひければ、柏之助も仔細を知り、姉とも知らず心をかけ、氏仲までも頼みし事を、深く恥ぢて人々に、顔見らるゝも面目なく、おのづからに六條の、館へは遠ざかり、暇ある日は室町の、御所へのみ參りしが、富世の前とは同胞なれば、他の武士とは事かはり、奥殿までも御許を、受けて折ふし立出でけり。

さて高直はある時密に、かの玉葛が身の上を、富世の前ばかりには、こまやかに聞上げ、暫しは外へ洩さじと、つゝみかくしてありけるが、口のさがなき浮世人、自然に此事いひもらし、次第々々に噂の高きを、かのさがなもの堅田が聞きて、富世の前の御側に、柏之助梅之丞、なにかお伽の物語、申上げて居る處へ、つか〳〵と出來り、「おらが父御は今一人、娘をまうけ給へるなり、おめでたや〳〵。どういふ譯で光氏樣と、二人でほんさうなさるやら。聞けばこれもおとり腹、え知れぬ女の子ぢやげな」ト、あとさき構はず言ひければ、内君はをかしさと、又氣の毒さを取交ぜて、何とも物を宣はず。柏之助は苦笑ひ、「君と父との御二方、かしづかるべき故ありて、さはせさせ給ふなるべし。さて誰人の言ひしを聞き、つきほもないにうか〳〵と、言出し給ひしぞ。口數多い女中など、耳に留むればよからじ」ト、いふを押へて、「あゝ喧

て段々とのお心配、お禮を申さん言葉もなし、世に例なき御恵、たゞ恨めしきは此頃まで、何の故にか斯く祕置き、御物語あらざりし」ト、嬉しき餘りに愚痴をも取交ぜ、夜も更けぬれば御暇、たまはりて歸りしが、その夜は更に眠られず、篠淸に打向ひ、「おん身は親しく玉葛の、傍へ寄りたれば、思ふまゝに見もしつらん、我は心のあらたまり、更に面を見きはめねど、姿もよくて淸らなる、生なるゆゑ光氏君の、かく傅きて置かるゝならんと、思へばいよ〳〵床しさ添ひ、いかにもして今一度、靜に逢ひたう思ふなり、遠からぬ中室町御所へ、差上げ給ふの御噂。知つての通り去りし頃、富世の前の御側へ、堅田を差上げ置いたれば、かの不束な有樣を、玉葛に見られんかと、それが今より恥かしい。さていつぞやの夢判じの、巫は上手にありし」など、その事この事言ひいだし、ひとり喜び居たりしかば、篠淸はよき程に、答しながら心の中に、かの玉葛をも磯菜の方の、樣にあつかひ給ふべし、さあらん時には富世の前の、御寵愛の又劣る、端とや是もならんかと、ひとつの苦をぞ求めける。

正尙も此夜さり、廣間に來り居たりしが、高直夫婦が奥へ入り、あまりに久しく手間取りければ、樣子こそあるらめと、庭へ下立ち障子を隔て、立聞きして大に喜び、初よりして姪にはあらじと、推量はしつれども、高直が娘とは、更に心のつかざりし、今はいよ〳〵心安し、さて此

高直は篠清を、引連れて靜に通り、向ひの方を打見るに、數多の腰元を左右に從へ、玉葛とおぼしき娘、正面に坐し居たるが、小袖の縫泊玳瑁の、髮の飾とともし火と、三ツの光の輝き合ひ、更に面は見もわからず。今まで床しと思ひたる、心に引かへ言出でん、言葉もなみださしぐみつゝ、たゞ茫然となし居たり。

篠清も何とやらん、心臆してためらひしが、氣を取直しにじり寄り、初鐵漿の式作法、事なく終りしその時に、祝儀の盃持出づるを、次に待ちてや居給ひけん、光氏は出來り、赤松夫婦に會釋なし、頓てまうけの席に著き、「表だちてはわが娘、うち〳〵にては汝の胤、予の盃を親の戴く、作法はあらじまづわが飮み、慮外をなさんその盃、玉葛にさゝれよ」ト、一ツ受けて干し給ひ、それと差圖に介添が、直に三方高直が、前になほせばはつと平伏し、「御意をもどかん道理はなし、然らば御許蒙らん」ト、盃を受け持つ手の、頻りに顫ふは嬉しきにや、又光氏がもてなしの、こと〴〵しきに恐れしにやと、側目にはいと見苦しき。玉葛は父の盃、押戴いて恥かしき、樣して是も物言はねば、光氏は又進出で、「某の娘となり、こゝに居ること高直は、さぞや不審に思ふべし、そのゆゑよしを語らんと、思へど昔の事よりして、言はねば分らず言へば又、祝儀の席には忌む事多し」ト、仰に少し顏を上げ、「その儀は重ねて承らん。さ

此日表の廣間には、大ぜいつどひ集まれり。是はかね〴〵玉葛が、鐵槳の祝に酒一獻、まゐらせたしと光氏より、内々觸れて置きたる故なり。かの席に列なる中には、玉葛に心をかけし、それかれも交るめり。柏之助も此所までは、許しを受けて來りけり。さて高直の夫婦には、晝のほどは騷がしからん、夕暮過ぎて事鎭る、時分を考へ參るべしと、昨日仰はありながら、さいつ頃珍らかなる、御物語を聞くよりも、しきりに床しく今日の日を、指折りかぞへて居たりしかば、心せかれて日の高きに、篠淸を催し立て、直に御館へ罷出で、參上のよし言入るれば、是をもかの廣間へ通し、酒の泉肉の林の、諭はものかは珍膳佳殽、おんもてなしのたいさうさ、更に言葉に述べ難し。不思議の緣にて御心を、留め給へる辱なさ、母の不運に引かへて、果報いみじき娘ぞと、思はず淚を落しけり。程なく夜にも入りぬれば、歸る人あり醉ひしれて、猶動かずに居るもあり、或は舞ひ或は謠ひ、おの〳〵興に入りぬれど、高直はたゞ玉葛が、事の心にかゝるが故、盃を手にだに觸れず、御しらせを今か〳〵と、奧の方を差覗き、立ちて見、居て見、待ち居たり。

光氏はその心を、察しながらに重々しく、玉葛をもてなして、いよ〳〵床しがらせんと、わざと時刻を延し給ひ、四ツの時計の響きて後、女どもを使とし、奧へ迎へ給ひけり。

には笑ひて玉葛に、件の文を見せながら、命あるうち此孫に、逢はせん事は覺束なしと、思へば心に泣きにけり。

磯菜の方より小袖炷物、その外ところ〴〵より、とり〴〵の贈物、優らず劣らずはな〴〵し。又糺の内君よりも、唐倭の錦の帶、例の早百合が持て參れり。かの帶箱の上に添へて、帛紗に包みし物のあり、何心なく光氏は、取上げて開き見るに、鷄の羽の鐵漿筆三本、安藝の宮島名物の、染楊枝一袋、紅白の水引にて、恭しく引結び、短册の添へてあり。

七所かねの響や小夜ぎぬた

光氏は打笑ひ、「また紅が贈物、例の同じ筋なる發句、これはとりわけ聞え難し。いそがしけれど此返事は、己が書かう」ト料紙を取寄せ、

砧かな又きぬたかな砧かな

「名句であらう」ト見せ給へば、玉葛は興さめ顔、「それはあんまりいとほしよ、どうかあはうにした樣な」ト、氣の毒がれば、「さう言やんな、そなたは詳しく知るまいが、是は糺の門守の、娘でそれはをかしい女、あちらの好な言葉故、とん〳〵拍子に砧をかさね、遣つたら嘸かし喜ばう」ト、早百合に渡し給ひけり。

くばかり、御心つけては給ふまじ、世にありがたき事かなと、思ふものから實の親に、あふを嬉しと思ひけん、匂ひやかに微笑む顏、氏仲は打まもり、野分の朝あやしやと、目をとゞめしは我ながら、能く推せしと心にをかしく、彼室町の御身近く、出づると聞いて高直は、願うてもなき幸と、さぞかし心に喜びぬらん、某と雁音が、中をさけたる意趣はらし、玉葛が心を誘ひ、又さまたげして笑はんか、いや〳〵たとひ假にもせよ、今までは姉と呼び、我には遙に年增したり、父も祕藏にし給ふ女、それも騷の端ならん、親こそ憎けれ雁音には、更に恨もなきものをと、思ひかへすは若きに似ず、例の思慮ある君ゆゑなり。

さて初鐵漿の日になりて、小毬より忍びやかに、玉葛へ使あり、櫛の筥など淸らに調へ、上書に「たそがれ」と、書いたる文の添へてあり。光氏も來合ひ給ひ、取敢ず披き見れば、

かゝる事には人の忌む、髮を切りたる身なれども、命長きにあやかり給へ。いと珍らしき事を聞き、床しくも嬉しくも、思ひに堪へかね申すになん。君の御氣色よしや惡しや、伺ひて後御披露。

と、打ふるひ〳〵、いと古代に書なしたり。「あゝ痛はしや文がきの、むかしは上手といはれし身が、年に添へて斯くばかり、あやしく老行くものなるか。能くもおん手の顫ひけり」ト、上

るやうな事ではないか」ト、ひが心得して玉葛が、事とは心つかざりけり。
高直は篠清に、まづ此事を物語り、心の中に思ふやう、これは堅田と事かはり、わが子なりとて直に迎へ、親がらんのも悪しかるべし、そも〳〵君の玉葛を、尋ね給ひしはじめを思ふに、かの黄昏は御心に、適ひし様にてありしかば、それが娘を御寝間の、伽にと内々思しながら、紫の上方々の、思さん事をかね給ひ、御子と披露をし給ひしが、それにてはまた御添臥に、招き給はん便なく、せん方なさに汝の子と、明させ給ひしものなるか、さすれば敢て辱なき、事にもあらねど縁に縁を、求めて彼所の御館へは、宮仕を願ふが多し、それを思へば彼は仕合、光氏君にその御心、もし無き時は室町へ、いや〳〵これも富世の前の、思さん事も恐あり、とにもかくにもわが方にて、尋出さぬが過なれば、光氏君の御心に、任せて置かんと誰ありて、語ふ人もあらざれば、ひとり心を定めしは、是二月のはじめなり。
かくて後に光氏は、氏仲を引連れて、玉葛を訪ひ給ひ、「おん身に鐵漿を含ませんと、日をえらびしが十六日は、彼岸のはじめ吉日なり、幸ひに小毬も、此程すこし心地よく、鐵漿親には篠清を、日外より頼置けば、高直も來るべし。おん身の事をも密に彼へ、言聞かせて置きつれば、はじめて逢ひなば斯様々々、しか〳〵に言ふべし」など、細に教へ給ふにぞ、親といふとも斯

人は、いかにせしぞと人知れず、たゞ今尋ねて居るさなか、眞に思ひかけず」とて、開いたる口を塞ぎもやらず。さもありなんと光氏は、心にをかしと思ひながら、「むかし戀しき物語、その事かの事思ひ出で、立別るゝも苦しけれど、夜ははや甚う更けぬらん、今一度小毬に、逢ひて」ト席を立ち給へば、すは御立と人々が、さゞめき渡りむかしにまさる、御勢を見るにつけ、小毬は又二葉の上の、御事を思ひ出で、しを〳〵と打泣く顔、光氏はつく〴〵見やり、これが此世の名殘かと、打しほたれて氏仲を、後に殘して出で給ふ。此序にも雁音の、事をば更に宣はず、是氏仲を侮りしを、快からず思してなり。又高直も御氣色の、なきに差出て娘をとも、言出で難く其事は、睨めくらべに今宵も止み、遠侍まで送り參らせ、「直樣これより六條へ、御供とは存ぜしかど、却つてそれは騷がしく、候はんかと是にてお暇。今宵の無禮の御詫には、別段參上致さん」ト、平伏すれば會釋あり、「小毬が惱も日あらず、宜しうならんかの日には、篠濤もろとも約束を、違へず渡り給へ」など、機嫌よげに言流し、立歸り給ひければ、館の者ども不審して、「光氏君は何事をか、主人にひそ〳〵宣ひけん、先年かゝる事ありて、程なく今の執權職に、なり給ひしが又何ぞ、御吉事のことなるか」ト、言へば一人が傍より、「いや〳〵最早執權の、上には進み給ふべき、御位はなかるべし、宗全ごときの謀叛人、また有

んかと、今まで憚り候」ト、言へば光氏うち笑ひ、「御機嫌を損ぜしとは、此方からこそいふ事なれ、昔に變り近頃は、何か心に物あり顏に、言ふのも承知」ト御氣色の、少し變れば彼の事と、察して高直恐入り、さし俯けば光氏重ねて、「はじめ思ひし事とは違ひ、本意を遂げずなるのも浮世、誰が身の上にもある事なり、それらの事は打捨てて、をり〳〵館へ參られよ。今宮町の執權にて、重き身ながら他とは變り、心安きが昔馴染、あまりに久しく顏をも見せず、斯うは爲さうもないものと、愚痴な樣ぢやが恨めしう、思はぬでもない高直」ト、仰にいよ〳〵恐入り、「御意の如くその昔は、朝夕お側に侍ひて、ぶしつけをもかへりみぬ、程に親しく仕へし身が、器重に應ぜぬ今の大役、早く申せばそれに倦み、あれのこれのと暇なく、御機嫌をも伺はねど、かく人々の尊敬も、君の御恩といふ事は、ゆめ〳〵忘れは仕らず。はや初老をも越したれば、若き程より氣根も薄く、それ故の怠りと、御許を蒙りたし」ト、額に汗して蹲る。その時光氏膝を進め、邊を憚り小聲にて、かの玉葛が身の上を、ほのめかし出で給ひければ、高直驚き大方ならず、「いとあはれに珍らかなる、事にこそ」とて目も打うるみ、「唯今も申す如く、君の惠に人數にも、列なるにつけわが子ぞと、さまよひ歩かば家の恥辱と、既に田舍へ下しゝは、尋ねとり候が、彼は心の足らざれば、そのかたくなさ見苦しさを、見るに猶更いま一

様に見せずに此方へお入を、お勧め申して來いとの仰、光氏様もあなたに御用が、あるやうなお噂も、御座りました」ト言ひければ、高直は小首を傾け、何事の御用かと、打案ぜしが是もまた、思ひ違へてにつこと笑み、「あゝ此雁音が事につき、冠者の君の恨がましく、宣ひしが御耳へ、入つたる故にてあらんずらん。母も此世の名残近く、見えさせ給ふその中にも、彼が事のみつねぐ〜仰せ、光氏君が憎からぬ、ほどに一言添へ給はゞ、それを否とは言ひ難かるべし。然らば君のお言葉に、從ひ顔にて許しもせんが、母小毬と言合され、我に否應言はせじの、御心なれば此方も意地、斷り方はしなぐ〜あらん」ト、雲井之丞が詫もせず、わざとつれなくもてなすを、いと安からず思ふより、己が心に己が迷ひ、默然として居たりしが、母の仰光氏君の、逢はんとあるは捨置きがたく、衣服を改め子供を引連れ、小毬が部屋近く、別間に御座をしつらはせ、光氏を請じつゝ、海の魚山の珍物、さまぐ〜もてなしまゐらすれば、盃は彼方へ廻り、此方へ流るゝその中に、はや初夜過にぞなりにける。光氏は珍らしく、高直に對面し、昔の事ども思ひ出で、かの雁音が事に付き、快からぬ事ありしも、差向ひては打忘れ、さまざまの物語、隔てず聞え給ふにぞ、高直もこまやかに、御請をなし御杯を、戴きながら少し進み、「これへ渡らせ給ひし事、疾く承はり候へども、召なきに參りなば、却つて御機嫌損ぜ

今まで噂もせざりしや。さう宣へば去りし年、何とかいへる女に馴れ、子を擧けしがどういふ譯か、又その女がお情を、受けしとやらん高直が、言ひたる事の侍りしが、其時にはいと腹だたしき、事のありしに能くも聞かず、その女の子がおん勢の、あるのをより〱承り。御子と名乘りて出でたるならん」ト、聞ゆれば光氏點き、「その女に違はあらじ。さて此事はかりそめにも、人には洩し給ふなよ、賤しき女を圍女と、するのは武士の行ならず、世に知られては我も恥。さる故にこそ氏仲へも、今まではつゝみたれ。追ては披露の仕方もあらん」ト、口固め給ひけり。

高直この夜館に在つて、母の方へ光氏君、渡らせ給ひし由を聞き、あなたには人少く、御褥をまゐらする、者だにもなかるべし。雲井の君も御供に、おはせしならんに御もてなしは、いかにすらんと心もとなく、酒肴菓子の類を、俄に取寄せ柏之助、梅之丞等を近く呼び、某彼所へ參りなば、物騷がしき樣ならん、我に代りて然るべく、もてなし申せと言付くる。折から當吉走り來り、「雁音樣の御名代、小毬樣の今宵の御樣子、伺ひに參りしに、思ひがけなく光氏君、久しぶりにてお目見いたし、下らうと致したを、小毬樣が私を、密に小陰へお呼び遊ばし、今見る通り君のおいで、お話のお相手に、なる人もなく物淋しい、程に此方から迎へに遣つた、

三十七編　下

今聞ゆべき事ありと、言ひしはそれらの事にはあらず。まだ若き程高直が、思はぬ方へこぼし種、その撫子を思ひ違へ、不意に尋ねて取植ゑたる、其頃は誰が根分ぞと、能くも糺さで明石に雲井、たゞ二本にてわが花園、淋しきゆゑに夫へ列ね、さまで眺めもせざりしが、いかにしてかは室町の、御耳へ入つたりけん、御ぐしの事をつかさどる、その役に召し給へり。彼には仰の事はつゝみ、たゞ此方より差上ぐる、樣にこしらへ置きたるが、其事につきかの女の、年の事など能く問ふに、わが子にあらず疑も、なき高直が娘なり。まづその事を内々より、知らせまほしく篠濤を、かの女の鐵漿親とか、いふ者に賴まんと、さきに使をおこせしが、おん身の惱を言立てて、わが言葉に從はず。あゝ折惡しと其事は、まづさしおきておん身の容體、心もとなく來りしが、思ひの外に氣力もたしか、全快は近きにあり、其時めでたく篠濤を、勸めておこし給はれ」ト、聞いて小毬訝しく、「それは實に侍るか、その樣な筋の者をば、あちこちと人を遣り、細に拾ひ集めながら、いかなる事にてそればかり、あなたのお子と間違うて、

つめ聞えてさま〴〵に、小毬が氣を慰め、やう〴〵に歎を止め、「さて當館の主は定めて、しげしげ是へ參らるべし、かゝる序に對面したし、密に聞え知らすべき、事のあれども近頃は、何とやらん疎々しく、絶えて面をあはせず」ト、仰を小毬打聞いて、「室町御所の事繁きや、又私の心ざし、冠者の君ほど深からぬか、たま〳〵ならでは尋ねもせず。冠者の君の高直を、いと恨めしと思したる、御氣色もありしとやら。始の事は知ねども、今はあなたを隔てがましく、もてなすが目にかゝりし故、たちそめし名はもう消えぬ、夫では何か我意に誇る、樣に聞えて世の人の、刧つてあらぬ事までも、言洩さうとより〳〵に、意見すれども近年は、一廉あつてかたくなな、心になりしあの高直、用ひし樣子は侍らず」ト、此氏仲と雁音の、事と思ひて言ひければ、光氏は打笑ひ、「言がひもなき子供どち、是も緣ぞと打捨てて、置かるゝやうに夫となく、打かすめしかど膝元へ、引寄せおきていと嚴しく、意見されたる由を聞き、かのはじめほのめかせし、事を後悔なしたるなり。何事にも淸めといふ、事のあなれば取返し、雪がんといふ心でも、所詮濁りし末の世に、澄みたる水は得がたきを、いつを待ちてか居るならん。

〔たゞちに下に續く〕

何をいうてもうろ〳〵と、好な書物も取出でず、おん身の事のみ打歎けば、いかやうなる有様かと、いと覺束なく思ひしが、その體を見て安堵せり。疾くにも見舞ふ筈ながら、室町などへも去り難き、事のなければ出仕せず、引籠り居てはや仕を、辭したる人と同じ樣、我より遙に年老いて、屈みし腰を杖に伸し、苦しみながら其所此所と、打廻るもなきにはあらねど、斯う何事も懶くなり、顏出しするのもむづかしきは、愚に生れしわが身の癖、それ故今まで怠りし」ト、聞え給へば小毬は、さも嬉しげに顏をあげ、「年の積りの惱ぞと、思へば歎かず驚かず、はや幾月か過ぎたるが、今年となりてはいよ〳〵賴みも、少きやうに成行きて、もう一度も御目には、かゝられまいと心細く、人に言はねどくよ〳〵と、その事ばかりは歎きしが、願叶うて今日こそは、命延びぬる心地すれ。若き程は心なく、夫に別れ子を先だて、長生するは何の因果と、人の上にて笑ひしが、今はわが身の事となり、少しも早くあの世へ出立ち、それを願ひは願ひながら、冠者の君が此やうに、おいたいけに遊ばして、夜も寐ずに御勞り、仰の通りお學問も、うち捨置かれ御心を、騷がせ給ふありがたさに、惜むに足らぬ此命も、かけとめられて今日までも、思はず長びき侍る」ト、たゞ泣に泣入りて、聲うち顫うぞあはれなる。此時に氏仲は、小毬が背をうちさすり、涙に暮れておはしゝを、光氏は目でとゞめ、むかし今の物語、あ

暫くあつて空衣尼、六條へ立歸り、光氏の前に出で、「仰の趣篠清に、申聞かせて君の斯く、思召しつかせられしも、富世の前樣御おぼえ、いと目出度に玉葛樣を、あやからせ參らせたき、御心に侍るべしと、取繕ひて聞えしかば、篠清は殊の外、喜びながら打案じ、世にありがたき事なれば、早速お請も申したけれど、去年の冬より母小毬、惱はけしういろ〳〵に、養生いたせどおこたらず、高直は日毎の出仕、留守がちに侍れば、妾は館を離れがたし、冠者の君もお心を、痛めさせられ夜晝側を、離れ給はず御介抱、僞ならぬ是が證、お殘おほやとねんごろに、申譯を致されし」ト、聞いて光氏吐息をつき、「あゝ折惡しきを如何せん、小毬の病氣とは、氏仲にも疾く聞いたり、若き者すら定めなきに、況んや年を積みたる身、今にも失せなば玉葛の、忌服を受くるを知らず顏、つくりて居んも本意ならず、彼が世に在るその中に、言きかするこそ宜からめ」ト、心を定め空衣には、暇を賜ひ小毬が、樣子を見んと赤松の、館へ夫より至り給ふ。あゝ世に類なき形好き、君にておはしましゝかば、若き程は麗しう、年加はれば威の備はる、昨日に今日はいよ〳〵光を、添へ給へる心地して、いと珍らしと小毬は、見上ぐるより身の惱も忘れ、起返りつゝ脇息に、凭りて弱氣に見えながら、物などはよく聞ゆれば、光氏は打微笑み、「さまでに重き事にもあらず、それに居る氏仲は、たま〳〵ならでは館へ歸らず、

職人ども、我劣らじと細工を勵み、蒔繪切金さま〴〵の、淸らなるを取揃へ、座敷も狹しと飾立つる。是のみならず光氏は、たゞ內々にて濟さんと、思ふ事までおのづから、たいさうになりもて行くは、つね〴〵にその德に服し、敬ふ人の多きが故なり。ましてや是は高直へ、此序に知らさんの、心もあれば事を省かず、いかめしくせられければ、見る人は目を驚かせり。さてある日空衣の、尼に光氏あひ給ひ、密やかに玉葛が、素性を語りて宜ふやう、「親子の緣は盡ざるものなり、されば竟には高直が、聞出ださんは必定せり。故にわきより洩れざる前に、我此事を言聞けんと、思ふについて此度の、玉葛が鐵漿親に、高直が妻篠淸を、招きて賴まん心あり。おん身一度早百合の名を、僞りて赤松の、館へ來りし事ありしが、年月もたち姿も變り、見知りたるものあるべからず。今より我が使となり、大儀ながら彼所へ行き、篠淸に對面し、わが娘とも確に言はず、玉葛といふ不便の女、人知れず養ひおき、はや年頃になりしに依り、近きに鐵漿を含ませんと、その用意は調ひたり、然るに今の世のならはし、鐵漿親とかいへる者、なくて叶はぬ由を語り、其事を取賄ひ、給はれかしと賴みて來よ。實を明せしその上では、玉葛の母は篠淸、なさぬ中でも餘所ながら、まづ對面をせさせたし」ト、事細やかに宣ふにぞ、空衣は畏り、お前を立ちて赤松の、館へ直に赴きけり。

御寢むしろをも敷かせんと、初の程は思ひしかど、磯菜をさきにわが方より、參らせおきて重ね重ねは、人の思はん手前も恥かし、さればとて又高直が、娘と押晴れ言はんには、富世の前に憚あり。玉葛もそれらの事に、心づき居るさまなれば、言出しても得心は、せまじとさまざま打案じ、さてこそ夫とは事かはりし、みぐしの役を勸めしが、此返の趣では、それをも否といふにはあるまじ。さてそれかれの遠慮なき、若き女は御所君を、ほのかになりと見上ぐれば、どうしてなりと御奉公に、上りたいと言はぬはない」ト、宣へば、「ヲヤいやよ、たとへどれ程美しい、君ぢやというても女の口から、お側へ出たいと氣を揉むとは、あんまり出過ぎて自惚な」ト、につこり笑ふ紫の、顏を眺めて、「さう言やるな、そなたとても見上げたら、どんな心にならうも知れぬ」ト、戲言に打紛らし、まづ其事はそれぎりに、程なく年の暮なれば、何くれと事忙しく、又初春は式日多く、暇のなくて玉葛の、事は捨置き給ひしが、はや正月も末となり、少し心も長閑なるに、つけつゝ光氏また彼が、事を取出でつくぐ〳〵思ふに、打向ひては若やかながら、はや玉葛は二十も越えぬ、室町へ差上げんに、白齒のまゝは似合ふまじ、さればとて今又眉を、拂はせんのもいとほしく、まづ鐵漿ばかり含ませおき、いよ〳〵その日の定まりし、折に元服せさせんと、「初鐵漿の調度道具、用意すべし」ト宣ひければ、その道の

雪深き跡を尋ねよ立つ雉子の

これは昔芹川の、御幸の事に擬へられ、今日光氏の供せざるを、殘多しと宣ふなるべし。そのころほひの事を記しゝ、書も稀には傳はれども、聞誤りし事もやあらんと、詳しくは爰に言はず。

次の日に光氏より、玉葛へ文のあり、いかなる事ぞと打見るに、

昨日は道にて室町君を、親しく見上げ給ひつらん。宮仕し給へと、かねぐ〜勸めし、わが言葉に、今こそ從ひ給はめ。

など、打解けず又固からず、細やかに書い給へり。をかしの仰と思ひながら、又わが心の中を能く、おし量らせ給ひしと、人知れず微笑まれ、御返は言短に、

雪散る空の朝曇、さやかに光も見えわかず。蜑の子なれど今を盛の、花の波間を分けんのは、いと覺束なき事にこそ。

と書いたる文を使の者、もて歸りたりければ、光氏急ぎ打開き、紫にも見せ給ひ、「御所のみぐしの事をあづかる、女一人缺けたる間、玉葛に上らずやと、そゝのかして置いたる故、その身を蜑の子と言ひなし、花の御所の宮仕は、覺束なしと聞えしなり。彼は生れのきよらなれば、

差圖をしつゝ玉葛は、忍びやかにぞ歸りける。
かくてその日義植公は、嵯峨野にしばし駕籠を停め、物淋しげなる枯野の景色を、打眺めておはせしが、豫てよりして大井川の、岸近く幕をうち、休らひ給ふべき所を、設置きしと聞召し、頓てそれへおはし著き、御供の人々に、酒肴を賜ひければ、こはありがたしと始の程は、謹みて飲みたりしが、次第々々に打亂れ、深く醉ひし若殿ばらは、御前を退り出で、大井川の岸に臨み、打くつろいで遊びしが、一人の小小性誤つて、手に持つ扇を水面へ、落すとひとしく逆卷く波に、浮きつ沈みつ流るゝが、いと面白くて又一人、わざと扇を打入るゝを、義植公遙に見給ひ、「こはをかしき遊なり、それ〳〵」ト宣ふにぞ、供奉の面々我も〳〵と、投入るゝ扇の色合、青きあり黄なるあり、筏士あらば水上の、嵐を問はん風情して、興あること大方ならず。今に至りて屛風の繪、衣の模樣なんどにまで、扇流しの形あるは、是より起りしその證據、扇ながしといふ地名、大井川に今なほあり。(大井川にて扇流しの事、雍州府志九卷に見えたり。)かゝる處へ光氏より、酒果物を進らせらるゝ、使の者の謹しみて、兼ては供奉と存ぜし處、俄に風の心地にて、心に任せぬ由を述ぶる。義植公聞召し、誰が投げたりし扇にか、岩にはさまれ水に落ちず、柴に雉をつけし形を、描きたるがありければ、取上げ給ふその端に、

取合はず、色黒く髯がちに、見えて假にも女に心を、かくべき樣はなかりけり。それ侍は弓馬の稽古に、夏の日にさへ面をさらすは、此汜廉に限るべからず、館の女は廣き所に、すまひて日の目もろく〳〵見ず、其上に磨きたて、紅白粉に粧ひし、顏の色に日やけせし、武士の面のいかでか及ばん。それを思ひくらぶるは、道理更に聞えねど、若き心に玉葛は、いづれもいづれも見貶しけり。兎角する間に御供の、下部までみな行過ぎて、あたりも靜になりける時、宮城に向ひ玉葛が、聲を潜めて言ひけるは、「さりし頃より光氏君、たび〳〵妾へ仰には、室町君のおんぐしの、事をあづかる女三人、今は二人で一人足らぬ、これは氏ある者の娘か、又さなくとも久しく御側に、仕へ馴れてだん〳〵に、出世した者でなければ、勤めさせ給はぬ掟、折惡しくその役に、取上げらるゝ女もなし、そなたは上る氣はないか、御所の樣を見習へば、立居振舞しとやかに、なるものぢやとて御勸、ありがたいことながら、田舍育の見苦しい、此有樣で宮仕、及びもないと其心の、今まではなかりしが、御所君を見上げたら、どうか上つて見たい樣な、御親みを受けるといふ、御奉公の筋でもなければ、私の樣な不束な者でも、お側へ出られ樣か」ト、物語る折春之助、にじり出でて手をつかへ、はや御立と勸むるにぞ、「それなら後は道すがら、話さうから宮城は側へ、其餘の者は少しあとへ、引退つて供しや」ト、

深に顔を隱し、とある出茶屋の筵を借り、かの御供の人々が、我劣らじと挑み顔なる、その有様を見るうちに、御乘物の近づきたり。右左の戶を半開き、いと靜やかに練行けば、御かんばせもいと能く見ゆ。さはあるべき事ながら、その氣高さ麗しさ、他にたぐへん人はなし。御側近きそれかれの、名をいちく\に春之助に、尋問ひて人知れず、わが父に目をつけて見るに、物淸げにてきらく\しう、實に執權の位備はり、人々に比ぶれば、勝れたれどもたゞ人なり。御乘物の中より外に、目の移るべき方はなし。若殿ばらも數多なれば、常には形の好きもあらんが、皆消えかへりて見る影なきは、室町君の類なう、おはします故にてあり。御かほばせを細に言はゞ、光氏によく似させ給ひ、思ひなしにや今少し、美しう位高う、威は備はりておはしながら、かどく\しき處なく、悠然と見え給へり。すべて貴人は物淸げに、常の人とは事かはり、あてやかなるものとのみ、玉葛は打心得、今日まで居たるは光氏氏仲、二人に目馴れし故なるを、今さまぐ\の人を見るに、義植公の御にほひに、けおされたるかは知らざれど、おなじ目鼻と思はれず、不具に近く見ゆるもあり。正尙も居給へり、君を月に譬へなば、螢ばかりの光はありて、世の人よりは目にたつめり。かの幸壽丸の御傅役、一色の汜廉も、御供に從へり。彼は素より重々しく、苦みて見ゆる男なれば、今日のはれ著の華やかに、出立ちたるに

をば花郷に、預けて却つて母君と、申上ぐべき紫の、上とは隔て給ふかと、心の不審は晴れざりけり。

野分の巻をはり

みゆきの巻

花も紅葉もなき頃なれど、冬枯の景色もまた、をかしからんと義植公、嵯峨野をはじめ大井川、嵐山の邊まで、遊覽あるべき催しあり。すでにその日になりければ、いざやおいでの樣を見んと、京中の人騷立ち、その道々には出茶屋掛茶屋、隙間もなく押並び、棧敷をかけぬばかりなり。かの六條の館よりも、忍びて出づる人多かり。今日は常の遊覽の、樣とは變り人々の、裝束もきら〳〵しく、花を染め紅葉を摺りし、大紋素袍の袖を列ね、國司に至るまで、殘る人更になく、御供に加はらざるは、たゞ光氏一人なり。頃は師走のなかばにて、雪いさゝか打散りしが、程なく空の麗かに、晴たる氣色は春に似たり。さて玉葛も光氏が、稀の事なり行きて見よと、勸めにしたがひ立出づるに、畚之助と宮城とを、供の中に打交ぜたり。これはむかし心安く、使ひ馴れたるのみにもあらず、畚之助は室町の、式日には必ず參り、昵近は更にも言はず、稀々に出仕する、外樣の武士の面まで、よく見覺えしと宮城より、玉葛かねて聞きしかば、あれは誰これは誰と、彼に問はん爲にてあり。もとより人目を憚れば、被衣目





腰元ども、いよ〳〵文を床しがり、董野が目顔にて、止めても止まらずさし覗けば、氏仲心にいとをかしく、「見たくは見よ」と投遣り給ふ。文は此頃都にて、名代の本屋平樂寺と、まんぢうやといへる二軒へ、注文し給ふ書付にて、女どもは見れども〳〵、唐本の外題ゆゑ、一字も讀めず呆れ居る。

かゝる折に姫君の、歸らせ給ふと打そよめき、氏仲が居る次の間に、褥を敷き小屏風を、引廻しなんどする、程なく例の愛らしき、聲の此方へ聞えしかば、昨夜見つる花の顔と、此莟をまづ見くらべんと、思へば常のおとなしき、振舞には引變り。「氏仲はそろ〳〵と、間の襖を細目に明け、さし覗きて見たまふに、明石姫の居る所と、その間は近けれども、傅の女ども、邊に大勢居めぐりたれば、細やかには目屆かず、薄紫の帷子に、振下髪は打ひろごり、取上げたるはいと少く、唐輪に結びしその容體、いはん方なく美しゝ。此頃までも雛事の、相手などして遊びしが、暫しの間に見まさりし、まして盛はいかならん。かの先々に見たる花、彼をば櫻それをば山吹、これをば藤の花とやいはん。小高き岸より咲かゝり、風に靡きしなやかさは、ほそくかよわき姿に似たらん。實のひとつだになき花を、御胤と披露し給ひしは、心得がたき事ながら、櫻にそひて藤を擧け、旦暮眺めておはします、果報いみじき父君が、何とて我

埒もなうなりました。かうして置いては御機嫌が、悪からうとて皆寄つて、その荒御殿の繕ひに、困つて唯今居ります」ト、物語るうち氏仲は、何か俄に思ひだし、「其方達の使ふ硯が、あるなら鳥渡貸してくれ」「はい」ト答へて腰元女、明石姫の御厨子より、紙を一巻とり下し、硯の蓋にそれを載せ、差出すを打見やり、「濃紫の薄葉か、それはあまりに結構すぎる。戯書ぢやなに是には、及ばぬ事」ト氏仲が、云ふはすゑ〴〵室町の、内君となる明石の硯、ことわりもせず我儘に、使ふは憚るべき事ぞと、心に思ふ故にてあり。されども外には使ふべき、硯もなければつく〴〵と、思ひ返して末はともあれ、今は現在妹にて、實の母は山名の娘、遠慮はいらじと心をとゞめ、墨押磨りて筆の先、見つゝ細に書きければ、女どもゆかしがり、「お文を物の枝につけるは、紙の色との取合に、心を用ひるものとやら、あゝ何が宜からう」と、言ふ傍から一人の腰元、「これがどうやら宜さゝうな」ト、差出すを又一人が見て、「吹亂れたるそれは刈萱、紫の紙には似合はぬ。薄の方が武藏野に、縁があつて宜い」などと、立騒ぐを氏仲止め、「手前たちはさて〳〵物識、さう細には己は知らぬ。さりながら此文は、何の枝にも付けずと宜い」ト、斯様な若き人々には、殊更言葉すくなにて、常の人とはかはりて氣高く、靜に又も書き給ひ、誰をか使に遣らんとて、打案じ給へる様、たゞならず見えければ、かの若き

り、これは我へ贈らんとの、用意ならんと點きながら、さらぬ風情に手に取上げ、「これも雲井に著せ給ふか、若き人には似合ふべし。かゝいふ物を著る年に、あゝ今一度たちかへらば、嬉しかるべし」なんどとて、それより直に巽の館へ、歸らせ給へば氏仲は、暇を請うて立出でしが、昨夜ひと夜さ眠らざる、その上に又日たくるまで、いと氣づまりなる供をなし、くたびれし事大方ならず、打休まんと思ひしかど、明石姫はいかにかと、心に懸り彼所へ行くに、常居る一間に姫は見えず、菫野急ぎ出迎へ、「能うおいで遊ばした。昨夜の野分の荒々しさ、姫君樣はどうであつたと、お案じなされてそれ故の、おいでと推量致したに、たしかに違は御座りますまい。風が怖いとおぢさせ給ひ、おくたびれで御寢なつて、今朝はとんと御ひんならず、さまざまお瞞し申したら、やうやうに御機嫌直り、母樣の御見舞に、行かうとあつて先し方、彼方へお渡り遊ばして」ト、聞かけて氏仲點き、「さこそあらめと推量り、昨夜參らんと思ひしかど、小毬がいと心苦しう、覺えし樣も見捨てがたく、彼所にて夜を明したり。さて問ふべきは姫が常々、大事に守る雛の御殿に、昨夜の風は當てたるか、どうぢや」ト言ひて微笑めば、菫野はじめ在合ふ女、みな一時に笑ひだし、「扇の風が當つてさへ、あれ何が飛ぶこれが落ちると、姫君樣は手を當てる、やうにお厭ひなさる御殿、どう障子を閉籠めても、隙間の風に吹亂され、

三十七編　上

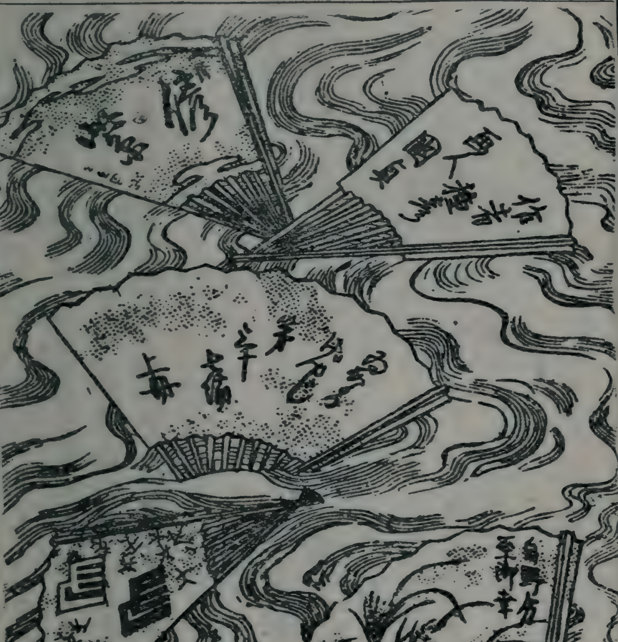
此玉葛が住居の續き、花鄕の居る方へ、光氏それより渡り給ふ。今朝は朝寒なりければ、暑きほどより縫針の、手業をするには心安き、故にやあらん年たけし、女多く花鄕の、前に集りいろいろの、美しき衣引散し、裁物に精を入るゝ。又彼方には細櫃の、やうなる物に綿を引かけ、摘延しなんどする、まだ若き女も見ゆ。此頃はまだ塗桶と、稱ふる物はなかりしなるべし。光氏はあたりを見廻し、「來月節句に氏仲が、室町へ出仕の時、著せんとての用意か」ト、問へば花鄕會釋して、「仰の通りに侍るなり。三月には花の宴、九月にもまた菊の宴、一入にはれがましき、御遊の折なれば、今樣色の珍らしきが、宜からうやうに存しまして」「ヲヽよう氣がついたが惜い事には、今年は左樣の遊はあるまい。室町の花園も、かく吹散して養植ゑし、菊も大方うち亂れ、眺むる花の唉出でぬに、何事をかし給はん。さて凄じき秋なり」など、言ひつゝ件の淸らなる、衣の多きを細に見、斯樣の事は紫の、住居の樣にも劣らじと、心に思ひ猶つくづく、目をとゞむれば其中に、松の綠の高砂染、當世人の專ら好める、殊にをかしき綾のあ




冷泉院に比する
足利義植公

初午の鱅魚。鯛残えらじ。節分の赤鰯。鮮をかざ笑ふ。吹革祭にハ乳柑子を投らる例の絶てなければ蜜柑ハ我ものの顔に誇る。長せの品たくさんかつぐべき衣なければ後の月見家せの下座にこそ着べかれ。是せ寺の類ハ時と節と自然に浮る勢ひあそ常の位にかくしらぶと。これを思ふに大晦のんや近づきて松やく竹やくのせんしうき声にせぶれて一夜明れば扇く白酒白酒一枚絵草ざうしと呼の紙もむ心も春めく其をりにそ拙作を見あふ人もされあるらめ。是初午の鱅魚あそ書籍の鯛にまさらぬ如時。不意近年彫ぶ揃へば葉さく頃から春の新板。おくれ又おくれまり。撥が散ても売出とぞ。まで長ぶふ奥も長物語むるの絵草紙かく時節とするにまだ三月の抗延責ある人更にるく。作者も七月も鐘の色揚の請その頼人のるハやうふかりのるべき節分あの赤鰯歯ぎしりの噛でも田作よとらふおん敢慶物とあるべし

柳亭種彦記



の人情は、互に疎くなり給ふか、心得がたき事にこそと、心の中に實の姉に、あらざる事をおほよそ察し、いと細やかに玉葛が、有樣に目を留むるに、父君にも妹にも、似たる所は更になし。さりながら娟妍にて、昨日眺めし霞の間の、櫻の花には劣りたれど、八重山吹の咲亂れ、露重げなる夕ばえを、不圖思出で野分の時には、打合はざる比へ事と、心に笑ひひとり點き、そしらぬ樣しておはしけり。

なく引散し、埒もなくなりたるに、玉葛が粧はぬ、姿ばかりは鮮かに、物清げなる様なるが、日の華やかにさし出でたれば、残るくもなく見遣らるゝに、光氏は不圖そのむかし、五條に宿り刈萱の、尼に逢ひたる朝ぼらけ、しどけなかりし黄昏が、姿を今見る心地して、常よりもいと親しく、例の風の事なんど、懇に問ひ給へども、玉葛は何やらん、物むづかしき風情にて、「心憂き身に侍れば、今宵の風にも誘はれて、何所へぞ行きたうなりました」ト、すげなく言ふにいとよく笑ひ、「風につきて行かんとは、さて輕々しき事にてあり。しかし飛舞ふ塵だにも、終には止まる所あり、風につきて行かんとは、心に願ある故か」ト、尋ね給へば玉葛は、はつと驚きいふまじき、事を思はず聞えしと、笑に紛らし打赧めし、顏は譬はゞ酸漿とか、いふ物のやうに見え、ふくらかなるが美しゝ。氏仲は一間二間、隔てし此方に控へ居て、袖の香なんどを相手とし、物語しておはしゝが、父の笑ふ聲するを、何心なく差覗くに、その間は遠けれど、昨夜の風に衝立障子の、類もとりて片寄せたれば、彼方までいと能く見ゆ。あな怪し腹こそ異れ、明石姫もあの玉葛も、同じ御胤姫を大事と、傅き給ふに打つて變りて、玉葛をば側女なんどを、あつかふ如く戯れがましき、事も聞え心安げの御有様、生れし時より人に預け、おとなになるまで逢ひ給はず、それ故親子

問、これへ渡らせ給ひしにて、伺はずとも皆々樣、御機嫌ようおはするは、推量られてお嬉しや。雲井の君は見上げまする、度毎に御成人、この程は御學問、ばかりではなく御武藝も、御上達と申す事、恐れながら薙刀小太刀の、御指南を願ひたし」ト、野分の風にはとりてもつかぬ、事まで細に言竝べ、悠々として手づから茶など、點てすゝめまゐらすれば、光氏は風の騷を、問はんと思ひし調子の狂ひ、ありあふ琴を少し調べ、「察しの通り紫は、ことない驚明石姫は、思ひの外に怖ぢもせず。我に似たらば言がひなからん、播磨の祖父が氣性を受けてや、雷も地震もさまでに思はず、まづ是が一安堵。さて此館も定めて損ぜし、所もあらん明日は早早、繕ひを言付くべし」ト、ひとつふたつ物語り、隙を求めて又こそと、立歸り給ひければ、

朝霧心やましげに、

　身にぞしむ荻の葉すぐる風の音

獨語ちて見送りけり。

又玉葛は恐ろしと、思ひ明して疲れしかば、いつの程にかまどろみて、思ひの外に寐過して、今ぞ鏡に打向ひ、漱などする程なりける。

光氏は氏仲ばかり、供に從へ音もせで、忍びやかに入り給ふ。屏風なども疊み寄せ、物しどけ

はさまでになまめかずと、思ふも親の慾目か」ト、鏡にうつるわが顔と、心に見くらべ給ふなるべし。頓て衣服を改めて、氏仲を引連れつゝ、磯菜が住居をはじめとし、尼の空衣村荻を、住まする部屋をも差覗き、夫より直に乾に通り、朝霧の方を見るに、宗入よりも侍を、あまた附けしがその中の、老臣だつ者は見えず、たゞ下仕ともいふべき男、草の中に交りてあり。此所にも又女の童の、をかしげなるが庭へ下り、笑ひなどして立騒ぐは、朝霧が心を留め、植ゑさせおきし龍膽朝顏、心地よげに昨日まで、這交りたる籬垣も、散亂れしをとかくして、引起さんとする樣なり。朝霧は野分の風、物のあはれにおぼえければ、その心を慰めん、爲にやあらん小高き座敷の、端近に褥を敷かせ、例のをかしき琴を取り、かい弄りつゝ荒れたる園を、靜に眺めて居たりしが、君の渡らせ給ふといふ、しらせを聞くよりなえばめる、姿を改め衣紋を正し、手をつかへて迎へる樣、今まで打解け居たりしとは、更に別の人の如し。光氏もその樣を打見、ほか〳〵の女ども、怖惑ひしもには引かはり、驚きたりし色目も見えず、さすがは負じ魂の、宗入が娘ぞと、心に思ひ打通れば、朝霧は端の方に、身をへりくだり謹みて、「明石に育ち浦風の、荒きに馴れし妾さへ、恐ろしかりし夜の樣、都の外はしろし召さぬ、紫の上をはじめ、姫君の御機嫌は、いかゞとたゞ今此方より、御使と存ぜし處、世にありがたき御訪

ふたり立出でたり。氏仲靜に父君の、宣ひし事傳ふれば、更科は謹みて、仰のおもむき御方へ、申上げんと立行く後へ、腰元女の持出でし、茶など打喫み十六夜に、浮世語をなしながら、氏仲あたりを見廻すに、女どもが最前の、打解姿は見る人も、あらじと心の緩びしにて、氣高く住みたる氣色有樣、內君とても是にはいかでか、勝るべきなど思ふ中、又更科が出來り、御返を聞ゆれば、氏仲は取急ぎ、巽の館へ立歸るに、雨戸殘らずあけ渡し、遙むかふに女數多、集りたるが微に見ゆ。これは昨夜紫が、見捨て難く思したる、花どもの吹亂され、あはれに萎れ伏したるを、打眺めておはするなりけり。

氏仲は此方の緣に、待つ間程なく光氏の、出來らせ給ひければ、形を正し靜やかに、「野分にだにも驚くは、あまりに心の若々しと、思ひながらに鎭まりし、後にも胸は騷がれしが、今朝問ひ給ひしありがたさに、氣もおのづからのどやかに、なり侍りぬ」ト、磯菜の返を、申し述ぶれば光氏點き、「かしこき生にありながら、年には似合はずいとあどなし。さは言ひながら女ばかり、物恐ろしき夜の樣、しか思ひしも道理なり。我も其所此所うち廻らん、それに待ちて供せよ」ト、言流して一間に入り、鏡に向ひ鬢のほつれを、搔上げなんどさせながら、紫に打向ひ、「雲井之丞が朝げの姿、一際勝れて淸げなり。まだ前髪のある中は、女めかしきものなれど、彼

るものなり」ト、宣ひながら、「それよく〳〵、磯菜の方の此程より、逗留しておはしゝが、此方にははかぐ〳〵しき、おうなもお側に侍ふまじ、我も行かんがおん身まづ、先へ參りて夜もすがら、いとすさまじき風の音は、いかゞ聞召しつらん、その吹亂り侍りし、時も時とて我もまた、風の心地に打惱み、尋ねまゐらせざりしなど、取繕ひて申すべし」ト、仰を氏仲畏り、廊下を傳ひ庭へ下り、築地の中を廻りつゝ、彼所へ赴き東の、廣間の南の小門に立ち、磯菜の方の住ませ給ふ、座敷を遙々見渡せば、雨戸をところぐ〳〵開き、まだほのかなる朝ぼらけ、簾を捲きて人々居たり。手摺にも押かゝりて、若やかなるが數多見ゆれど、あけぐれの程あざやかならず、いろ〳〵の打解姿、いづれもく〳〵をかしげなり。女の童を庭へ下し、むし籠に露をかはす。萩薄女郎花、時に逢ひたる縫模樣、四五人ばかり打連れて、此所彼所の叢に、いろいろの籠どもを、手に手に持ちてさまよひつ。撫子などの風にあひて、いとあはれげなる枝どもを、折添へてまゐる樣、立籠めし霧に隔て、朧に見ゆるぞいと艷なる。折から吹來る追風の、さと薫れるは簾近く、磯菜の方もおはするならんと、氏仲は忍びやかに、打音なひて歩み寄る。まだ前髪のある程なれば、折に觸れ女の中へ、立交り給ふが故、人々見知りまゐらせて、さのみには驚かねど、寢亂姿を恥らひてや、みなく〳〵あわて退り入り、御取次には更科と、十六夜

ず、靜まりかへつて人もなし。呼出さんもむづかしと、手づから窓の障子を開き、おしかゝりて見渡せば、築山の木を吹靡かし、枝ども多く折伏したり。叢は更にも言はず、檜皮瓦あなたこなたの、萱門枝折戸板垣竹垣、みだりがはしく成行きて、昨日見し樣にも似ず、朝日わづかにさし出でたるに、いとあはれげなる庭の露、きらく〳〵として空まだ暗く、霧立おほひ物凄し。まづ試みに扇を鳴し、打咳き給ひければ、障子の中に光氏聞付け、「聲づくりしは確に氏仲、夜はまだ明けまじ」なんどとて、何か言ひつゝ起出でて、屛風かいやる音すれば、女の聲は聞えねど、紫もおはするならん、憚るべき所まで、うかく〳〵來り御機嫌に、逢ひやせんと遠く退き、待てば程なく光氏は、寢卷のまゝにて出來り、「いかにぞ昨夜小毬は、喜びつらん」ト問ひ給へば、「仰の通り僅なる、事につけても涙脆く、言がひなき某を、力となすがいと悲し」ト、眼の中うるめば光氏點き、「もう久しうは此世に居まじ、心のかぎりまめやかに、仕うまつるが人の道。あの高直はこまやかに、心をつくる本性ならず。其事は小毬も、密に歎くと噂に聞く。そもく〳〵彼が身の行、人に勝れて華やかに、親に仕うまつるさへ、ぎやうく〳〵しき事いと多く、高直は孝行者と、見聞く人を驚かさんの、心はあれど誠にしみて、深き處はあべからす。さる故におのづから、母子の間に隔あり。昔は知らず末の世には、賢き人ほど難癖は、定まりてあ

あればなくても宜いもの」ト、心解けざる氣色にて、言ふに小毬心憂く、是非早うとも聞えやらず。高直も心がら、早く申さば女の子を、持つは苦勞を求むる種、家を續ぐべき男子だに、あればなくても宜いもの」ト、心解けざる氣色にて、言ふに小毬心憂く、是非早うとも聞えやらず。高直何か吐息をつき、「夫に次で又一人、いと不束なる娘を擧け、持惱み候」ト、役首する顏差覗き、「それは合點のゆかぬ事、おん身の實の娘なら、幸なかるべき樣はなし。たとへ心は足らずとも、何とて人の侮るべき。妾の知らぬ孫ならば、近江へ預けた娘であらう。今ほどはさぞ成人、それをも雁音もろともに、逢はせ給へ」ト小毬が、言へど答へず頭振を振り、「見苦しき事いと多し、いかでか御目にかけらるべき」ト、餘の物語に移しつゝ、頓て住居へ歸りけり。氏仲は默然と、此物語を聞き給ひ、心にをかしと思ひながら、面には現さず、なほ高直が後に殘り、小毬が寐ねかぬるを、介抱しつゝ居たりしが、曉方に風すこし、なぎて程なく村雨の、やうにさら〳〵降出でぬ。六條の館にて、打離れたる亭などは、倒れたりなど人言へば、又それも心もとなく、はや風も止みたれぱと、暇を乞ひて氏仲は、歸りを急ぐ道の程、よこさめ雨の冷やかに、乘物の中へ吹入れ、空の氣色はまだ凄し。まづ花鄕が住居を訪ふに、たゞおぢおそれて一所へ、みな打集り居たりしかば、はや風も吹くまじなど、力を添へ氣を配り、男どもを呼出し、まづ假に繕ふべき、ところ〴〵の差圖しつ、直に巽の館へ行くに、まだ雨戶をも開渡さ

ゆゑ、事なき時も光氏と、小毬が機嫌を日毎に、尋ね給ふにましてや今日、かゝる空の氣色により、風の騷におはすべき、所にはおはさずして、彼方此方と步き給ふは、いとあはれげに見えにけり。

小毬は冠者の君の、參り給ふのしらせを聞き、いと嬉しくも賴もしく、待受けて近く請じ、「訪ひ給はりしはありがたけれど、お道の程はいかなりし。もしやお供の中などに、怪我せし者はなかりしか、お駕籠が損じは致さぬか。これほど年は積みたれど、まだ斯くばかり騷がしき、野分にあひし事はなし」ト、打わなゝくを言慰め、光氏の宣ひし、事など傳ふる其中に、大きなる木の枝なんど、折るゝ音して家根の瓦も、殘るまじう吹散す。今とても此館は、勢なきにはあらざれど、政則の世にときめきて、光氏常に來通ひし、其時に比ぶれば、何とやらん物淋しく、今宵の如く騷がしき、折なんどには心細し。高直も母の機嫌、伺はんとて入來り、氏仲に一禮し、ますますおどろおどろししく、音する風に打惱む、母の心を慰めんと、わざとしづまりのどやかに、物語らへば小毬は、雁音の事言出し、久しく見ぬが悲しとて、たゞ泣きに泣きけるにぞ、高直暫し面を垂れ、物をも言はず居たりしが、思ひなほして顏を上げ、「さほどに思し給ふなら、遠からぬ中參らせん。彼はとにかく物思はしき、氣色日に日に打添ひて、衰へ行く

親ともおぼえす若やかなり。又ひとおとし風荒れて、そこらの障子を吹放ち、閉てる所も次第次第に、あらはになれば彼方より、見えもせんかと恐しく、氏仲は立退きて、板縁を打廻り、今來る樣に聲づくるを、光氏は聞耳立て、「さればこそ男あれ」ト、女どもを奥へ遠ざけ、誰にかあらんと立出で給ふ。此方に氏仲手をつかへ、「巖をも吹上ぐべき、風の烈しさ御機嫌の程、いかにかと心にかゝり、伺ひに參りたり。今日の風は艮の、方より吹けば此御殿は、餘所に比べてまだのどけし。北の方の高殿は、いと危げに見ゆるとて、騷ぎ罵り候」ト、聞いて光氏、「さもあらん。それはさしおきおん身は今まで、何所に居たる」ト問ひ給へば、「私事は赤松の館に晝より侍ひしが、風いたく吹きぬべしと、人々申しつる間、覺束なさに夫よりこれへ、今は歸りて小毬は、小き子どもの樣になり、僅の事にも怖ぢぬれば、ましてや烈しき風の音、嘸かし心細かるべし。お暇願ひて又彼所へ、參りなん」ト聞ゆるにぞ、光氏は打點き、「それ〳〵早う行くが宜い、年老いて又若うなるを、側目に見ては打笑へど、これ定まりし老の癖。小毬に申さうは、斯く騷しきにさぞ心を、惱ませ給はん其事は、察しながらに氏仲に、任せて別に我よりは、おとづれぬよし傳へよ」ト、あはれがりて宣ふを、畏りて直樣に、この館を立出でしが、野分いよ〳〵吹募り、道のわびしさ大方ならず。前にも度々言ふ如く、孝心厚き氏仲

巽の館も前栽を、繕はせ給ひける、折にしも斯く風騒ぎ、薄は折れ萩は飜れ、露もたまらず吹散すを、紫は端近に、打見やりておはする時、氏仲は不圖來かゝり、小障子の開きたる上より、何心なく差覗けば、腰元女數多居たり。紫の上のおはする、邊近くは憚るべしと、つねぐ\父の宣ひければ、すこし後へ引下り、音もせで窺ふに、屛風も風に吹倒され、押疊みて片寄せたれば、あらはに彼所の見通さる。腰元女も清げなる、姿なれども紛るべくも、あらず氣高く愛敬は、匂ひ飜れて樺櫻、霞の間より咲出でしを、見る心地して打向はゞ、彼方の匂のわが顔にも、移るべくぞ思はれける、世に珍らしき御樣と、打眺めてたゝずみしが、風はいよく\烈しくて、簾を吹上げなどするを、おさへんとして腰元女の、打こけたるか音するを、あらあぶなやとふりかへり、少し笑ひ給へるが、殊更にいみじう見ゆ。この紫も草花の、みな萎るゝが心憂く、見捨てても入り給はず。さて光氏はさきにより、明石姫を打案じ、彼方へ行きて居たりしが、今いそがはしく立歸る、氣色に驚き氏仲は、立隱るればそれとも知らず、光氏は座敷に入り、「さてあわたゞしき風にてあり、皆雨戸をばさし固めよ。かゝる折には男どもも、垣のあふつを防がんと、庭前近く立入るべし、あまりに是はあらはぞ」ト、聞え給ふを又立寄り、氏仲は打見るに、何事やらんひそく\と、紫に物語り、打微笑みたまふ樣、花と花との盛の姿、

こそわが妻にと、思ひ絶えねば近づきし、かゝる序を幸と、胸は躍れど是もまた、思慮ある生なりければ、更に行儀を打亂さず、琴さへも打解けては、彈かずに愼み居たりけり。

篝火の巻をはり。

野分の卷　坤の館の庭へ、秋草を植ゑし事、去年より今年は見所多く、いろ〳〵の數を盡し、或は竹或は柴の、籬垣を結交ぜつゝ、何所にもある花なれども、枝ざし姿しほらしく、所がらにや朝夕の、露も玉かと輝きて、つくり渡せる野邊の色、打詠むれば櫻咲く、春の山さへ忘られて、いとすゞしく面白く、心も浮立つやうなりけり。かの巽の花園に、心を寄せし人々も、またひきかへし此景色を、めでつゝ騷ぐは移り行く、世の人心の樣に似たり。磯菜はこの花に見ほれ、久しく此所に逗留し、昨日に今日は色まさるを、打ながめて暮しゝが、常の年より野分の風、いと恐しく空の色、變りてさつと吹出でぬ。花の凋るゝ事なんどは、心もつかぬ人さへも、あらいとをしき事なりと、心の騷ぐ程なるに、ましてや見る〳〵叢の、露の玉の緒亂るゝばかり、心惑ひもしぬべく覺え、磯菜は深く打歎き、かの古歌に大空を、おほふばかりの袖もがなと、願ひしは春これは秋の、風にも思出でられて、詮なき事を打歎き、暮行くまゝに物も見えず、雨戸などくりぬれど、花の上のみ案じわび、その夜は更に眠られぬなるべし。

る」ト、直に立ち行く袖の香と、打連立ちて氏仲の、供には例の柏之助、梅之丞も引添うて、頓て此方へ出來れり。光氏は三人を、傍なる座敷に伴ひ、「秋は殊更物淋しき、風の音なひ笛竹の、音色床しく聞なして、更くるも厭はず迎へたり。誰そあるか琴持て」ト、いと懐しく彈き給へば、氏仲も取敢ず、面白く笛吹きたり。光氏ほと〳〵興に入り、「謠へ〳〵」ト宣ひても、柏之助は一間にて、かの玉葛が聞かんかと、其方に心づかひして、あとしさりして聲を出さず。「遲し〳〵」トありければ、梅之丞が忍びやかに、謠ひ出でたる聲細く、鈴蟲にまがひたり。二唄ばかり謠はせて、琴をば柏之助に讓り、「簾の中には物の音を、よく聞分くる人もあらん、その心して彈くべし」ト、仰に恐入りながら、唄も謠はず又琴をも、辭しなば御意に違はんかと、せん方なくて搔鳴す。げに高直が爪音に、をさ〳〵劣らず華やかに、面白くこそ聞えけれ。山吹は盃を、持て出でて勸むれど、光氏は手にも取らず、「はやわが如く盛の過ぎし、人は酒を飮むだにも、心得なくては過あり、深く醉へばその序に、今まで包み隱せし事も、うかと言出す事のあり、末には知らする事ながら、まだ早し〳〵」ト、打笑ひつゝ宣ふを、玉葛は一間にて、まことにあはれと聞居たり。あゝ疑もなき兄弟の、絕えせぬなかの契ゆゑ、おろそかならず目に耳に、留めて深く思ふとは、夢にも知らぬ柏之助、心のかぎり盡しても、此姫を

手にさはらば冷やかならん、前髪は額に垂れ、鬢もそゝげて散りながら、衣紋は深く掻合せ、衣の著なしは打解けず、裳の亂れとり集め、つゝましげに思したる、氣色はいとゞ麗しゝ。歸り憂くや思ひけん、光氏はたちやすらひ、「絶えず庭に人を置き、篝の消えぬやうにせよ。夏は更なり秋とても、暑きほどの月なき頃、庭に光の見えざるは、物淋しげにて風情なし」ト、いひつゝ案ずる氣色もなく、

散らすなよ戀の烟をはつ嵐

と言流し給ひければ、玉葛はいよ〳〵怪しの、御有樣ぞと深く恥らひ、

露に消せ篝と共に仇し名も

人の何とか思はんかと、心苦しき樣なれば、「さらば」トばかり言捨てて、立出で給へど玉葛は、暫しと言ひて止めもせず、御見送もそこ〳〵に、一間の中へ引入りけり。

折もこそあれ東の、高殿の簾の中に、琴に笛を面白く、吹合せしが聞えけり。光氏は耳を欹て、是はかの氏仲が、つね〴〵に參り馴し、高直が子供らと、今宵も遊び給ふなりけり。「雲井之丞はまだ寢ぬな」ト、言ひつゝ後をかへりみて、「ヲヽ袖の香それに居るな、彼方へ參つて申さうは、いと影すゞしき篝火に、引止められて思はずも、これに在る由告げ知らせよ」「畏り侍

もてなしやうで、かう悪様には言はれまじ、さぞ高直は後悔せんと、事の序に山吹に、物語り給ひければ、山吹よりして玉葛も、この仰を傳聞き、親といふのを頼みにし、わが身も彼所へはじめより、行きなばかゝる恥がましき、事のあらんを思ひもかけぬ、恵にあづかり後指、人にさゝれぬありがたさを、いよ〳〵思ひ知りにけり。

秋にもなりぬ。初風すゞしく吹出でて、單衣の衣のうら淋しき、心地なしつゝ光氏は、玉葛をしば〳〵訪ひ、琴など教へ遊び暮す。五日六日の頃なりけん、夕月は疾く入りて、すゞしく曇れる空の氣色、荻の葉を渡る風の音も、次第にあはれなるに、光氏は又例の、玉葛が住居へ行き、琴を枕に臥居たるが、かく打解けて夜をふかさば、人の怪しと咎めんかと、歸らんとなしける時、ふと庭を打見るに、焚捨てたりし篝火の、すこし消え方なりければ、山吹袖の香二人を呼出し、差圖をしつゝともしつけさす。此庭にはいと淸き、遣水ありてその邊に、氣色殊に廣ごり臥したる、大きなる檀の木あり、その下に篝の臺を、据置きて焚くべき木を、折りては打入れ打入るゝ、故にこれを折松と、名づけて竿に釣りて焚く、篝火とは又異なり。二人の女はよく心得、炎のさまでに烈しからぬ、程をはかりて焚上げたるが、光氏の居る所とは、その間遙に隔てしかば、打眺むるもいとすゞしく、をかしき程なる光に不圖、玉葛が様を見れば、

三十六編　下

堅田は此返を見、歌の心はわからねど、立出でよとは來いとの事、松とは待つといふ事と、おほよそに合點して、甘たるきかの炷物を、返すぐ〳〵も炷しめつゝ、はうべき赤くかいつけて、髪を取上げ装ひし、その樣は賑しく、愛敬はあるものから、都の人とは思はれず、室町へ參りなば、差出がましき事もあらんか。

常夏の卷をはり、篝火の卷に移る。

此頃の人每に、女の形の田舍びたる、又は言葉のなまりしを、見聞くごとに赤松の、今姫君の樣なりと、さがなき口に言散すを、光氏は聞召し、今まで更に人知らず、籠居たらんその娘を、物々しげに召出し、かくまで人によからぬ噂を、言はるゝこそは心得ね、わが娘とだにいふ時は、形のよしあし賢きにも、愚なるにも係らず、都の中には侮るべき、人はあらじと高直が、心に誇り權威を恃み、深くは彼がひととなりし、樣をも尋ねずもでいでて、今更己が心にも、叶はぬ故におのづから、かくはしたなく言はるゝなるべし、たとへば何程愚しき、女なりとも



田舎源氏

三十六編 下冊







種彦作
國貞画

鶴屋板

は常陸なる、いかごが崎の忘貝、拾ふかひなき物にもあるかな、元眞集にたしか見えた、たとへ取上げ給ひても、かひなきわが身といふ心。近江で育つた者ゆゑに、いかごが崎をいかが崎と、覺え違ひか書過ちか。この終の七文字は、たれ〳〵も知る古今の歌、田子の浦波立たぬ日は、あれども君を戀ひぬ日はなし、妾を絶えず思ふといふ、道理は聞えてある」ト、先の心は知らねども、さもありさうに言くろめ、「文もおほかた歌詞、たゞ安らかな返では、輕々しう思ふであらう。似つこらしげに認めて」ト、仰に吳竹なほ繰返し、「歌の詞が縺れあひ、此御返は聞えにくし。殊に仰書めいたら、本意ない事と思召さん。たゞ御文の樣に」とて、書きしを内君見給へば、

常陸なる駿河の海の須磨の浦に浪たちいでよ箱崎の松

「箱崎は筑前名所、それでは國が又一ツ、ふえてあまりに戯言がましい。實に妾が歌なりと、人の言はんも恥かし」ト、宣ふを吳竹うち消し、「實か虛かは聞く人の、方で存じて居ります」ト、いひつゝ文を押包み、頓て使へ差出す、互にをかしき口つきなり。

とばかり書き、かへすぐ\に、
今宵にも參りたう侍るなり、うるさき者と思すほど、生憎に慕はしゝ。折れても切れぬ蓮の根の、絲筋よ。
とてさて歌あり、
草若み常陸の海のいかが崎いかで逢見ん田子の浦浪
角々しき手に假名とも字とも、見分けがたきが打交り、のの字は圓くしの字は長く、能き書めかして書いたる行は、更に揃はず風の强き、雨の脚ほど横すぢかひ、倒れぬべく見えければ、打微笑みて側へおき、「そなたの所へ當吉が」ト、問はせ給へば中垣手を突き、「お使のかへりと申して」「久しぶりで妾も逢ひたい。まだ居やるなら是へと言や」ト、宣ふ御側に吳竹が、いと近う侍ひしが、文のはしぐ\差覗き、「今樣めかしき御文章、殊にお歌の珍らしさ、いかが崎とは近江の名所、田子は駿河常陸を合せ、三國一の名歌ぢや」ト、よもや主人のはらからとは、思ひも寄らず若き人々、もろとも聲立て打笑ふ。富世の前おししづめ、「假名も知らず本末も、無く見ゆれどもこれはこれ、古歌を集めてわが心の、中を知らせしものならん。實は妾がちかしき緣、草若みとは伊勢物語の、寐よげに見ゆる若草を、含みて同胞なるをいひ、その次の句

木にて、覺えし古歌の詞をそれかれ、思ひ出して書きたりしが、歌を詠まんもむづかしく、ふと天狗俳諧と、いふ事を思ひ出し、歌書取出しそちらの五文字、こちらの七文字鬮にして、一ツ開き二ツあけ、だん〳〵に書續け、三十一文字にしたりけり。
此所の事は暫くおき、室町の事をいふべし。その夕暮の事なりけん、富世の前は腰元ひきつれ、庭に遊びておはしょ折から、撫子の花に結びし、文を中垣もてまるり、「おはしためきたる風俗ながら、淸げなるまだ若き女、赤松の館より、御使の由を述べ、内君樣へ御直に、これを參らせ給へとて、今まゐりで勝手を知らぬか、御茶の間へ差出す、丁度其所へあて吉が、久しぶりで私へ、逢ひに參つて居つた故、どなたへ仕へるお人ぢやと、承りましたれば、堅田樣とて近江から、御迎へなされ館では、今姫君といふお方に、お附き申して來た女、見しりごしにて物言うた、事はないと申す事。御文の參るべき、御心當りも侍るや」ト、細く小く卷結びし、文引ほどき御覽ぜさす。内君は點き給ひ、「その近江より迎へし娘を、妾が側へ差出したいの、噂は最前聞置いた。まづ文とはしほらしい」ト、床几に休らひ見給ふ文章、
蘆垣の間近き程に住みながら、お後影をも拜まぬは、勿來の關をや据ゑられけん、はゞかり多くも武藏野の、ゆかりといふはあなかしこや〳〵。

う私と、ひとつに口をきゝやんな。たいそう過ても呼取つて、下さる譯があればこそ、お呼迎なされたのぢや」ト、いと腹立たしき顔付は、浮世に馴れて愛敬あり、打解姿のうはく〳〵せしも、また見所の無きにはあらず、たゞいと田舍び怪しき下人の、中に生立たりければ、物いふ術を知らざるなり。總じて人は詞遣に、心をつくべき事にてあり、何の譯なき物語も、のどやかにおししづめ、言出したるは聞く人も、珍らしき樣に覺え、面白からぬ歌にもあれ、まづなだらかに打吟じ、さてその歌の心など、解くにも詞多からず、殘をしく思はせしは、自然と耳に止るかし。この堅田の如くにては、たとへよしある心の深き、事を言ふとも宜しき筋を、聞分くるものあるべからず、取締もなき聲音にて、言出づる事ぎごちなく、言葉訛りて田舍の乳母の、懷に居て習ひし樣の、今に失せぬぞ瑕なるべき。さはいへ歌は三十一字、發句は五七五文字の、數を知らざる程には無けれども、我儘に綴る故、本末さらに打あはず、何か案じて居たりしが、硯取出し獨語、「さて内君殿へ參れよと、いはれたを捨置いて、遲うなつたらせうことなしに、來たのであらうと思はれう。しかし父御が又と世に、無いほど私を大事にして、下さつたとて行先に、構うてくれる者が無いと、御所とやらには居たゝまれぬ。今は内君殿にもせよ、もと姉妹の事なれば、文を進ぜて樣子を見やう」ト、墨摺流しこれもまた、薄雪草紙錦





らば、水を汲んで戴いても、御奉公をしませう」ト、快げなる有様にて、前よりはなほ早言に、囀りければ言ひたりとて、詮なき事と叱りもせず、「いやさ何も下立ちて、菜を摘み薪を拾はずとも、おとなしやかにお側へ出よ。たゞかの其方をあやからせた、法師が遠くて殘念な」ト、戯れ事にいひなせど、堅田は更に心もつかず。そも〳〵此高直は、國司のその中にも、御覺いとめでたく、器量勝れてもの〳〵し。さればなみ〳〵の武士なんど、うち對ひては物だにも、言にくき氣色なるも、見知らねばいと馴々しく、「さていつか内君殿へ、參りませう」ト不圖問へば、高直は座を立ちながら、「宜しき日などをえらんで後。よし又それもむづかしと、思はゞ今日にも參るが宜い」ト、言捨て興のさめたる體に、部屋を立出るその折から、近習の武士大勢來り、「室町御所より急の御召、これより直に御出仕かと、御服を持參致せし」ト、差置けば高直は、直に著かへて打圍まれ、歸り行くその勢の、いと嚴しきを堅田は見送り、「さても立派なわが父御や。その胤ながらむさくろしい、小家でなぜに育つたやら」ト、いへばお節もくつ〳〵笑ひ、「あんまり大層過るので、お側に御座るも恥かしさう、とてもの事なら常體で、あなたに似合の親御があつて、それが大事になされた方が、宜ささうに思はれます」ト、聞いて堅田は目に角立て、「人の言葉を言けなす、又例の差出者、今までとは違ふぞよ、是からはも

れたに、あやかつたものであらうと、御苦勞になされました。今更しやう樣は無い」ト、暫し案じて氣を取直し、「しかしあなたもそれ程に、おつしやりますれどどうかして、この舌ばやを止めませう」ト、俄に騷ぐに孝行の、心の深きは顯れて、高直はあはれと見やり、「産屋近く入立ちたる、その尊き法師こそ、思ひがけなき恨を受けし。大藏經とてありがたき、經を前世に誹りし罪の、報によりて此世にて、啞言吃と生るゝとか、何事もこれ前の世の、約束なり」ト言ひつゝも、心の中に室町の、内君とても實はわが、娘ながらも御位、自然と備り給ふなるに、かくの如くにうか〳〵する、堅田が樣を見せ申さんは、いと恥かしき事にてあり、そも〳〵彼が斯く怪しき、氣色をよくも聞定めず、迎へたるこそ過なれ、數多の人の目に觸れなば、言つぎ見つぎいよ〳〵噂を、言散さんとつおひつ、思へどさすがに捨て難く、「折に觸れては富世の前、わが此館へ渡り給ふ、其時なんどはお前に出で、人の有樣見習はれよ。さまでにかしこからざる者も、左樣な方に交らへば、自然と立居とりまはし、おとなしやかになるものなり。かの舌ばやを愼しみて、仕うまつらん心なら、館へおいでを待つにも及ばず、室町御所へ差上げん、いかに思す」ト問ひければ、「それは嬉しき事にこそ、其樣お方とひとつらに、なつて居るのを寐てもさめても、年頃願うて居りました。内君樣がお許しなされ、呼んでだに下さ

頃懐しかつた、お顏を毎日見ぬばかりは、二六でかためおろされぬ、樣な心地でござります」ト、投首すれば高直點き、「身近く使ふ女の中に、はか〴〵しきも無き間、それにしておき見習せんと、かね〴〵は思ひしかど、まさかにさうも爲しがたし。すべて人に使はるゝ、女は氏の有るも無きも、皆一列に打交れば、些細な事に目も耳も、とめぬ者にて心安し。さは言ひながら夫だにも、ちと人がましき者の娘は、彼は誰が子とおのづから、知られて親や兄弟の、恥となる事なきにもあらず、ましておん身は某が」ト、不圖いひかけてわが位の、高きを誇る樣なれば、言葉を止め恥かしき、氣色も知らず堅田は摺寄り、「それは立派にお側へ出る、人と肩を並べる氣なら、心づかひもあらうけれど、手水所の掃拭、そんな事して奉公を、するには氣骨も折れはせぬ」ト、いへば高直堪へかね、聲を出して打笑ひ、「夫はあまりに赤松の、息女の身には似合はぬ役、たまさか逢ひし此親に、孝行せんの心あらば、その物言を今すこし、のどめて聞かせ給へかし、さあらば命も延びなん」ト、打戯れて聞ゆれば、堅田は頭振打振りて、「此舌のべら〳〵するは、生付にこそ侍らめ、私のぐつと小い時から、母樣もこれを氣にして、あゝめつたな事はせぬものぢや、其方を生んだ其時に、どうぞ達者に育つやうにと、妙法寺の別當とて、尊いお方を産所へ迎へ、お經をあげて貰うたが、それは〳〵口早に、たつ〳〵と讀ま

勝に乘りしか聲高く、「其方が振つたはぐし〳〵と、なくは深山の時鳥、私のはそれさゞなみや、志賀の都でさアおきな。今度も續けてさつと散れ。それ山櫻々々」ト、いふ聲ぞいと舌はやき。あなうたてやと高直は、供に連れたる近習の者も、かへしやりてなほ障子の、隙間よりして窺ひ居る。此お節は近江より、連來りし女にて、此所の館の腰元は、行儀正しく氣づまり故、堅田はとかく彼のみを、相手とすればお節もまた、もとより心安だてにて、主とも思はず負色に、なりたるに氣を迫込みて、「ゑへ、かさねめが出くさつて、らりにされた返報に、今度はどうぞ」ト筒取上げ、捻りながらに早くも振らず、「何が出やうか斯う持つて、居るうちが樂しみな」ト、甘へて言へば堅田は手を、押揉み〳〵、「小い目が、出まして何にも無い所」ト、餘念もなげなるその姿、士氣は拔けねど愛敬は、さすがに有りて黑髮の、麗しきにて餘の難は、隱しながらに額は猫の、顏の如くにいと狹く、物いふ聲の調子に外れ、早言なるぞ瑕なりける。こゝぞ好しと取立てて、いふにはあらねど高直も、鏡にうつすわが顏と、思ひ比べて見る時は、子にあらじとは爭ひ難く、これも宿世の約束ならんと、思ひ〳〵內に入り、「知らぬ人の中に交り、打籠りてのみおはすれば、さぞうひ〳〵しく思ふべし。我も何かと事繁く、此頃、は尋ねず」ト、言へば堅田は例の舌ばや、「かうして居れば何事も、物思ひは侍らず、しかし年

女中に心得させ、憚る事なく教諭し、言懲させ給ふべし。御腰元の若き者に、笑はせて給はりそ。そは〳〵として落著かず、世にせん方なき育ぞ」ト、打笑ひつゝ高直が、聞上ぐれば富世の前、しとやかに會釋あり、「さほどの事にはよもあるまじ、兄弟どもや召使が、見ぬ前からして娟妍なの、御發明でと言騷ぐを、聞いた後に逢うた故、あの樣ではない筈と、見ゆるのは親の慾目。彼方では又知らぬ人の、中に交りて心も臆し、言出る言葉も後や先、それ故そは〳〵するやうに、思うであらう」ト恥かしげに、聞え給へる御有樣、いと麗しくは見えながら、こまやかにはをかしげなく、たゞ懷しき樣添ひたり。譬へていはゞ面白き、梅の花の半ほど、開きかゝりし朝ぼらけ、殘おほかる風情したり。さはいへ知らぬ姉妹に、逢ふを嬉しと思しけん、微笑み給へる愛敬は、又餘の人には似給はず。高直は吐息を隱し、「御察しあられし通り、人なみなみの女ぞと、柏之助が聞出し、某にも深くつゝみ、預けおいたる近江へ人を、下して名のりいづる樣、取計ひしと後にて噂。若き者のする事は、しどなきものに候」など、言ふも堅田の身に取りては、賴もしからぬ事なりけり。

かくてそのまゝ高直は、御前を引下り、館へ歸り堅田を住ませる、部屋の戸口に密にたゝずみ、内の體を覗き見れば、簾高く押張りて、お節といへる腰元女と、をりはを振つて遊び居たるが、

に某が、思案して置きたり」ト、いとほしげに顔まもりつゝ、いふのを聞きて雁音は、言葉はなくて差俯き、昔は何の辨なく、わが身のみかは若君の良からぬ お名まで立てまゐらせ、館の騒を引出し、よく其時はをめく〳〵と、父に面をあはせしと、今ぞつく〴〵思知り、胸塞がりて恥かしき、有様なれば高直は、物語を又ほかへ移し、暫く休み別を告げ、わが住む方へぞ歸りける。

小毬よりは雁音が、疎々しくて過ぎぬるを、つね〴〵恨み聞ゆれども、かく高直の言ひつる後は、いよ〳〵愼み彼所へ行かず、これは若し冠者の君が、おはしあはする事もやと、心づかひをしてなるべし。

さて高直は不束なる、堅田を今更もてあぐみ、あゝ如何せん賢だてに、よしなき者を呼迎へ、世の人兎角に誹るの由、さればとて又近江へ、歸しやらんも輕々しく、物に狂ふに似たらんか。とありて此儘据置かば、愛に溺れて彼をさへ、まこと大事に傅くかと、人の笑ふも腹立たし。富世の前の御側へ、差出しなば祕藏して、籠めおくなんどの噂は止まん、見し事もなくおしあてに、不具のやうに言下せど、形はさのみ見苦しからぬも、それにて自然にあらはるべしと、ある時に富世の前の、御側近く罷出で、しか〴〵の由を述べ、「見苦しからん事などは、老いたる

何故に打やすみし。腰元どもも邊に居ず、心得難き振舞ぞや。たとへ見る人なきとても、女は心づかひして、常々に身を正しく守り、愼めるこそ肝要なれ。心を安く打捨て、我儘なるは品もなし。望ありて願掛を、するにも觀音地藏なんどは、なまぬるしとて不動尊に、向ひて陀羅尼を讀みなどし、ゐんざう作りて居るのも憎し。これ神佛ばかりでなく、女の身に似つかはしきと、につかはしからぬがあり、人まじはりはなほ大事、なれて善い人惡い人、それを見わけず誰にもあれ、近づけもせず言葉もかけず、あまり隔てがましきは、氣高きやうには見ゆれども、人に憎まれ美しき、心といふにはあらざるなり。光氏君が室町へ、すゞはまゐらせんと、かの姫君を習はし給ふ、教はよろづなだらかに、物識めきてかどかどしき、事を戒しめ又何の、藝の道にも疎々しくは、あらせじとその程を考へ、いとゆるやかにしつけ給ふ。道理はさにてもあるべきが、人は專ら好く道と、好かぬ業とはおのづから、持ちて生るゝものなれば、思ふ樣にはゆかぬもの。この姫君のひととなり、室町御所へ出し立て、給はん時の世の氣色が、今から床しう思はるゝ。さておん身をもわが思ふ、やうになさんの心懸、不慮の事にて違ひしが、いかにもなして後指、人にさゝせぬ仕樣もと、思ふにつけて人の上、さまざまなるを聞く每に、いろいろ思ひ亂るゝぞや。深切めきて言ふ人の、言葉にうかと欺かれ、給ふな密

へる御癖常にあり、これも必ずその類」ト、言ひながらまだわが娘と、いふをば更に心つかず。さていづれへか縁邊を、定めらるべき正尙君とは、御中もとりわけよく、その上たしか此程は、獨住にて居たまふ由、おほかた是に」ト言かけて、雁音が事胸に浮み、冠者の君の事なくは、彼をも左樣に深く傅き、人にも見せず若殿ばらに、床しがらせし其上にて、本意の如くしなさんと、猶も心に口惜しく、光氏君の懇に、口をいれさせ給はぬ中は、許し難しと氏仲が、心靜に此方より、手を下ぐるのを待ち給ふ、とは知らずしてさま〲に、思ひ廻らし不圖立ちて、物をも言はず雁音を、住ますする部屋の方へ行く。梅之丞は何とやら、父の素振を訝しと、思ひながらにしりにつき、彼所へ行くに雁音は、午睡をしつゝ餘念なし。薄き物の單衣を著て、透通りたる肌つきも、いと美しくをかしげなる、手つきをなして半開きし、小さき扇を持ちながら、腕を枕に打やすらふ、いと尋常なる姿ゆゑ、暑かはしげには更に見えず、亂れし髮の眞白なる、手にかゝりしもいと艶なり。腰元どもも皆物の、後に隱れ打くつろぎ、坐睡して居たりしかば、殿の渡らせ給ひしと、搖驚かさん者もなし。高直は立ちながら、持ちたる扇を打鳴せば、雁音何の心もなく、見上ぐる目元愛らしく、顏の少しあかめるも、親の目にては一入に、美しう見ゆるなるべし。高直靜に座に著きて、「うたゝ寐は宜からぬ事、枕だにせず物はかなき、樣して

父高直に打向ひ、「姉上を近江より、尋取り給ひしを、何人よりか光氏君、聞召されて實かと思ひがけなく御尋、何とお答へ申さんかと、ほと／＼當惑致せし」ト、言へば高直打笑ひ、「あなたにこそは年頃音にも、聞えぬ實の女を迎へ、こと／＼しく傅かるれ、迂濶に人の上の事、誹り給はぬ君がなど、我等しきの内證事、耳に留めてさげすみし、仰は更に心得ず。よし／＼夫も高直を、人がましく思してなれば、嘲らるゝが却つて手柄」ト、打笑へば又梅之丞、「君の呼取り給ひしは、田舎に育ちしまゝにはあらず、正尙君など御心に、かけさせられてさま／＼に、思ひ煩ひ給ふの噂、見ぬ人さへもなみ／＼の、姿にあらじとおしはかり、心浮かるゝ者多し」ト、言かゝるを押止め、「いやサそれも光氏君の、姫上なりと思ふから。ふきでの痕も靨と見るは、今の世のなべての人情、必ず左程に勝れはせじ。はて何故といへ人がましき、程なら年頃かう／＼と、人が噂を是非する筈。世は十分にゆかぬもの、御才德世に過ぎたる、御身なれども紫の、上の御腹に御氣色の、ありし事だに今になし。これに姫君おはしなば、めでたからんと人々の、願へど前世の約束にて、君は御子の少きなめり。お腹こそは劣りたれ、明石に生れ給ひしは、必ずおしつけ幸あらん。今こと／＼しく言騷ぐ、その玉なにとか呼なすは思ふに實の御子にあらじ。光氏君は事なき事を、事ある樣に取なして、人を惑はし打興じ給

三十六編　上

かくて後に光氏は、人の怪しみ思はんかと、しげ〳〵には玉葛を、訪はねど折に觸れては渡り、琴など敎へ給ひければ、おのづからちかやかに、馴寄りなんどする事あり。玉葛もはじめこそ、いと恥かしううたてくも、覺えたりしが斯くの如く、なだらかなる御心を、やう〳〵に知り目に馴れて、今はさまでに心もおかず、答などもなれ〳〵し、からぬ程には聞え交すを、見るにつけつゝ光氏は、いよ〳〵あはれの者に思ひ、此所に据置き折々に、はかなき事を言交し、慰みなんやと思ふ折も、なきにはあらねど然する中に、もしわが命なくなりなば、不便なるべしさまでに祿は、重からずよし位の卑き、侍にもせよそれが妻と、定まりていと睦しう、添ひなばそれこそ彼が仕合、さていづれへか送らんと、心の中に思ひけり。

さて赤松の高直は、近江の國より堅田といふ、娘をさる頃迎へしが、物言忙しくよこなまり、とりまはし不束なれば、館の者もとかくに輕しめ、世に傳聞く者も、何の故にか高直は、さる女を呼取りけん、まだおいぼるゝ年にもあらずと、誹り言ふを梅之丞、聞くも苦しくある時に、





偐紫田舎源氏第三十六編序

石山形の硯石は、二ツ連ねて鯉と牛と、木瓜の裡に彫てあるは、濃墨淡墨の印なりと歟。鯉に濃の響はあれど、牛は何なる由縁歟知らず。日讀の丑の前は子なり、鼠色の次なれば、薄墨であらうとは、あまりに廻りくどい料簡。それはどうでもよいにして、偖この草紙の初編の刊行、文政己丑の年なりし、その丑に因あれば、彼古硯を表紙の裏に、寫させて置きたりしが、石山よりは遠からぬ、勢田の長橋ながく續き、大津八町牛車、ぐるりと轉て今年天保辛丑の春となり、牛の角文字二ツ文字、鯉の鱗の三十六編。はじめは何の意もなかりし、それさへ用にたちしに似たり。若龍門へ逆のぼる、運も來らば獅子飛の、浪に鰭ふり宇治十帖へ、渡りて全部となさんといふ。

天保辛丑孟春　　　　柳亭種彦

ト、感に堪へて居たる樣、火影にいとゞ美しゝ。光氏又庭を眺め、「皆の者は遠慮して、此所へは來ずに撫子を、面白さうに眺めて居たが、いつの間にやら皆歸つた。あゝ高直にもこの花園はやう見せん」ト玉葛が、顏打まもり世の中は、定めなきこそ定めなれ、烏瓜とかいふ物の、白く咲きしを手折らせしも、たゞ此頃の樣なりと、ふつと昔を思ひ出でぬ。

おつしやるはまアどの様で」ト、床しがれば、「チヽさうか。筑紫琴と一口に、言へば其方の住んだ國の、やうに聞えてをかしけれど、唐は知らず日の本では、まづ鳴物の是が親。親といへば高直に、おしつけおん身習ふが宜い。さて彼が彈くのをまづ、聞かせたいものなれど、いづれの道も上手となれば、輕々しう手は下さぬもの、されども遂には聞くであらう」ト、しらべ少し彈き給ふが、いと面白きに玉葛は、つくぐ〲聞惚れこれに勝る、音はよもあらじと思ふより、親の床しさいよ〱まさり、あゝ此琴にていつの世か、打解け彈かせ給へるを、聞かんと思へば又涙の、胸までせぐり來るなるべし。

光氏は細聲に、

ぬき川のやはら手まくらやはらかに、寐る夜はなくてくよ〱と、思ふも愚痴かさりとては、つれない親に隔てられ、

と唱ひしが不圖氏仲と、かの雁音がその中を、いふ様なるに心づき、打笑ひつゝ琴おしやり、「いざ彈き給へ何の藝も、人に耻ぢてはあがらぬもの」ト、切に勸め給へども、「片田舍にて怪しげなる、老女なんどが京の者と、いふのに少し習ふたばかり、嘸かし唄も片言だらけ、手も違うて居りませう」ト、たゞ耻入りて手も觸れず。「いかなる風の吹添ひて、かうは響き侍るぞ」

は御中宜からじと、人の言ひしは僞ならず、かくては父にわが身の事、急には明し給ふまじと、たゞ何氣なくもてなす樣、泣くよりもまたあはれなり。

月もなき頃なれば、銀燭あまた持來るを、光氏は押止め、「火の近いのは暑くろし、此所はほのかに照しおき、それ庭の燈籠を、洩さぬやうに點して」ト、差圖をしつゝ玉葛が、涙ぐみたる體を見て、思はず知らず高直を、惡樣に言ひたるが、心に障りしものならん、よしなき事を語りしと、心に思ひ傍の、琴ひきよせて少し調べ、「おん身が琴のすきなる事、此頃までは知らざりし、秋の夜の月影の、冷しき頃に端居して、蟲の聲に搔鳴し、合せたる時などは、堅くろしい笙篳篥より、しどけないので面白し。全體女の彈くために、こしらへたる物なれば、むづかしい事はない、樣にはあれど又上手に、彈き得るのは難い事。高直は武藝の暇、ほんの心慰めに、覺えたれども何として、今では及ぶ者はなし。誰が彈いても同じやうな、すがきなども彼がのは、萬の物の音も籠り、雲井に響き登るかと、思ふばかりに面白し」ト、語り給へば玉葛も、おろ〳〵知れる道なれば、耳に止りてさまでによく、彈き給ふ事訝しく、「御館のお遊の、その折などに承はる、事がいつぞは御座りませうか。田舍などにも習ふ者、數多ある故おしなべて、あんなものであらうとばかり、愚な心で存じましたが、あなたが夫程勝れたと、

これ道理。度々うるさう言ふ樣なれど、人の氣色の深さ淺さを、見習ふもまた却つて女の、たしなみとなる事もある」ト、ざゞめき聞え給ふ。

彼方の庭には、件の若殿ばら、心々に遊び戯れ、籬面白く結なして、唐と大和の撫子の、種を盡して植ゑたるが、夕日の殘りし雲に照り、いと美しきに立寄りながら、心の儘にも折取らず、立やすらふを光氏は、遥に見やり玉葛を、呼出して彼所の方を、扇にて指示し、「あれ見給へよかりそめに、花をめづるも心を用ひ、行儀正しき者どもなめり。今日は見えねど柏之助、これは殊更靜な生、年つみし身も彼には却つて、心おかるゝ程にてあり」ト、聞え給へば玉葛が、「どれ〳〵も同じ樣な、お姿といひ殊には黄昏、さだかに見分け難けれど、氏仲樣お一人は、きらきらとして紛は無い。腰元どもがお噂を、申上ぐるをほの聞けば、赤松の息女の中に、御心に叶ひしも、おはしましたと申す事、それ聞かれなば喜んで、催馬樂にも謠ふ通、大君來ませ婿にせんと、言ふべき處を引かへて」「イヤ御肴には何よけんと、もてはやされん〳〵願はしからず、たゞ幼きどち結びおきし、心も遂げず年月を、隔てられしがちときつくわい。まだ部屋住にて位もなきが、不足と思はゞ知らず顏、つくりて己に任せて置けば、まさかに彼が家の恥と、なる樣には計はぬ」ト、ほつと吐息をつき給へば、玉葛心に打驚き、さては昔に引かへて、今

外の梢で慰めんに、何の別儀はない事」ト、嘲弄めきて宣ふは、この若君を輕しめて、かの雁音を膝元へ、引つけたるを快からず、豫て思しゝ故にてあり。梅之丞は今の仰、心得難く何とやら、御氣色惡きその上に、いと不束なる姉堅田を、迎へし事を知召しゝに、恐入つて差俯き、心苦しく思ひけり。

夕づけゆく風いと涼しく、光氏は心地よげに、打解け休み涼みつゝ、「次第〳〵に此樣な、若い者の中に交ると、氣をつめらるゝ年にもなつた」ト、言流して玉葛の、住居へ行けばこの人人、御送りにと皆參る。光氏ゆく〳〵心の中に、高直はぎやう〳〵しく、よきと思へば事々しく、もてなしつ又惡きをも、輕しむる事たいさうなり、わが嘲弄を梅之丞、たとへば彼に語るとも、思ひがけなきその處へ、あの玉葛を差出し、對面させなば腹立も、忘れて俄にもてはやし、をかしからんとひとり點き、彼所に到りさし覗けば、山吹ひとり端近く、居たるを呼出し聲潛め、「玉葛をちと庭の方へ、出るやうに勸めてくれ。誘ひて來りしは、いとよく馳る若駒を、ほしげに思へる若殿ばら、氏仲が偏窟ゆゑ、更に此所へは連れて來ぬ。さりとは子ながら心なし。さもなき人の娘すら、深き窓に籠置けば、床しと思ふが世の人情。わが此館のうち〳〵は、むさくろしくても他よりは、美々しき樣にいひはやせば、夫にて傅く姫上はと、見たう思ふも

な心地にいつとなく、なつたで世間の事は知らぬ」ト、仰に皆々はつとばかり、御受はすれどこれぞとて、聞えん事も覺えねば、涼しき手摺へ背を押向け、愼みてこそ居たりけれ。光氏扇をはたとおき、「それよ聞いたる事のあり、高直が妾腹の、娘を此頃尋出し、傅くといふ噂せし、人のありしが實か」ト、梅之丞に問ひ給へば、手をもじ〳〵と顏を垂れ、「御耳へ入るべき程な、こと〴〵しき事にもあらず、兄柏之助は其事を、疾くより承知仕り、當春彼が住む田舍へ、人を遣しその實否を、詳しく糺させ彼方より、名乘出でて歸るやう、父にも知らせず計ひしと、申すもほんの人の噂。さる頃迎を下したる、その後に父高直、私どもへはかう〳〵と、たゞ一通の物語、詳しき事は更に存ぜず。さて呼迎へは迎へたれど」ト言ひかけてにつこと笑ひ、「實に珍らしき世語に、人々の申すべし、えては斯樣の事よりして、家の名までも出す事。世界に多く候」ト、聞上ぐればさては噂を、聞きしは實なりけりと、心の底に打笑み給ひ、「澤山に子を持ちながら、慾に限はさて無いもの。我は子の乏しければ、名のり出でて呼寄せんと、思ふもあれど却つて先で、迷惑がらうと捨てておく。高直も若き程は、龍王の使となり、明石の月をも訪ひたる者、其所や彼所に影留めて、おきしもあらんが底清く、澄まぬ水では曇なき、ながめとするは覺束ない。氏仲や、左樣な落葉も拾ふ人、蕾の花は殊更に、大事であらう夫よりは、





んどは常なれど、昔は養女といふ事の、いと稀なれば此判斷、よく當りしをさも覺えず、いかなる事にてあらんなど、柏之助にも打語ひ　まだ光氏が子と披露、したるは心つかざりけり。

螢の卷終り、これより常夏の卷へうつる

いと暑き日　東の、池水へ造りかけし、座敷の緣に立出でて、光氏は涼み給ふ。小五郎晴命雲井之丞、その外親しく語ひ給ふ、國司の子息ども、御側に侍ひて、桂川より進らせたる、鮎をはじめ程近き、加茂川の石伏とか、稱へる魚の類の物を、それ〳〵に料理する。折から赤松梅之丞、氏仲君を訪ねつゝ、御學問の御相手に、しげ〳〵出づる若き者ども、誘ひて參りければ、光氏は打見やり、「あまり淋しく睡氣を催す、折に宜うこそ〳〵」ト、冷やかなる水を取寄せ、それに飯を打入れたるを、みづからも食ひ皆々にも、相伴を言付けて、酒打飲みなどし給ひしが、此頃は水無月の、名もいちじるく雨降らず、風はいとよく吹きながら、曇らぬ空のきら〳〵しく、西日になる頃蟬の聲、いと苦しげに聞ゆれば、光氏は吐息をつき、「水の上も賴みにならぬ、さて堪へられぬ今日の暑さ、無禮は御免」ト打戲れ、羽織もとつて肱枕、「かうして居ても暮し難いに、室町へ勤仕する、者どもは皆帶紐も、解かれずさぞや苦しからん。コレ皆の者此頃世に、聞及んだ珍らしい、事があらば睡たさましに、話して聞かせよ己もはや、年寄のやう

ば、わが目にかゝる近き邊へ、忍ばせて置かんには、今の思ひはよもあらじ。彼を生みしは氏もなき、女ながらに賤しからぬ、心なりしがその母の、貪欲邪慳に倦んじてより、多くもなき女の子を、失ひぬるこそ口惜しけれ」ト、子には語りて聞かせにくき、事を語りて聞かするも、富世の前は磯菜の方に、寵愛を奪はれ給ひ、雁音を又室町へと、思ひ寄りしも氏仲の、事にて心の儘ならねば、ともかくもして黄昏が、生みし娘を尋出し、母に似ば眉目も好からん、行儀を教へ義植公へ、又差上げんと思ひてなるべし。柏之助はかく聞きても、まだ玉葛がそれなりとは、心もつかず打案じ、「むかし御手をかけられて、御子を擧けし女ありしを、近江へ下し給ひし事は、承はり及びしが、いま一人姉上の、おはしょと申す事は、今何ふがはじめてなり。此上は人の噂に、心を留めてお行方知る、手掛も候はゞ、直樣申上げん」とて、皆その席を退きけり。

かくて後に高直ある夜、怪しき夢を見たりしかば、其頃夢を能く占ふ、巫のありしを招寄せ、かうかうと語りければ、かの巫まづ高直が、年を問ひ扇の骨にて、何やらん數へなどし、「是はいとよき御夢なり、もし年頃御行方の、知れぬ御子の侍らば、それが思ひもかけぬ人の、御子となりておはしますを、聞召しいづる事の、候ふべし」とぞ判じける。女が人の妻となり、婿取な

之丞が心安げに、語ひ給ふ折を見て、ほのめかしたりければ、打笑ひつゝ、「かゝる事を、人傳にてはもどかしかるべし。姉玉葛に直に言へ」ト、宣ふ人には姉ならで、言寄る人には姉なりと、夢にも知らぬぞ淺ましき。この氏仲にざれたる心、おはしましなばかへぐ\に、又雁音へかうぐ\と、柏之助を賴まんが、すでに前にも記しゝ如く、高直に手を下げさせんと、うちあがりし心ゆゑ、かくすげなくは答へしなり。

さてある日赤松の、高直は柏之助を初とし、子供等を呼集め、ひそやかに語りて言ふ樣、「おん身らの知らざる娘、二人までを某持てり、若きほどは打忘れ、更に思ひも出さどりしが、年を積むに從ひて、人知れず心に掛りぬ。折も折とて光氏君、何所よりか姫上を、尋出して傅き給ふと、聞くより頻に羨ましく、近江の國へ預けおきたる、娘は當春彼方より、音信もありつる間、さる頃人を下したれば、おしつけ連れて歸らんが、いま一人はいかになりけん、その行方更に知れず。それが母ははや疾くに、空しくはてしを餘所ながら、見きはめておきたるが、わが娘といふ事は、母無きとても人より告げん、よしさなくとも書殘して、置いたるもまた知るべからず。世に落ぶれて淺ましき、姿となりて赤松の、實は娘と言ひ歩かば、此上もなき家の恥、さる名乘する者の噂、おこと等は聞かざるや。今更思へば母と緣、切つたればとて娘を

樣をも、尾に尾をつけて珍らしき、事どもを取集む。それも是も皆此世に、無き事にてはあらじかし。唐國にて作りし書は、才の用ひ方の違へり、大和のも昔と今とは、變る事もありぬべし。たゞ人情の深きと淺きは、萬里を隔て千年過ぎても、聊か違はあるべからず。只管に物語を、虛事なりと言消さんも、かたくな過ぎて又惡しゝ。世にありがたき慈悲心にて、佛の說きし經文にも、方便といふ事ありて、悟りなき愚痴の者は、疑を起すべし。その道理を說明せば、善もなく惡もなく、煩惱卽ち菩提なり。さればとて又邪も、正しきもこれ一ツぞと、悟りだてして我儘に、身を持なすは人の瑕。「これ見給へよ善き人の、一旦は世に落ぶれ、さまぐ辛苦なしたるも、末は必ず世に出づる、惡き人の榮はしばらく、天罰來りて身を亡す。はかなき是等の物語も、見樣によりて空しからず、敎となりぬ」ト細々と、語り聞かせ給へども、とにかくに玉葛は、光氏が心を疑ひ、かの珍らかなる世がたりに、此身の上を殘さんかと、顏を襟に引入れて、しかぐ答もなさゞりけり。

柏之助は光氏が、勢猛きが羨ましく、此君を舅とせば、人の用ひも格別ならん、玉葛は早はたちを、越したる樣には聞きつるが、幸ひに若やかにて、似あはしからぬ程にもあらねば、何卒妻に請受けんと、思へどさすがに打出し、光氏には聞え難く、外に便らん方もなければ、雲井

し。明石姫が腰元の、女なんどに讀ますするを、とき〴〵に立聞けば、昔よりして物よくいふ、人も多くありけるかな、虚事をよく言馴れたる、口より出でし事ならんと、我は思ふがおん身はいかに、さは思さぬか」ト問ひ給へば、玉葛は例の如く、打恥らひて聲低く、「宣ふ如く僞りなれ、浮世に馴れたる人たちが、さま〴〵に工みしとは、浮世になれたる人の目には、分りも致しませうけれど、私などにはたゞ實の、やうに存じられます」ト、かの物語を寫しかけし、硯を傍に押遣れば、光氏はなほ打笑み、「イヤこれは粗忽な事を申した、氣に當つたら堪忍しや。神代よりして世にある事を、記しおきける日本紀などは、たゞ聞傳を宜いほどに、書いた物にて取るにも足るまじ。この繪卷物の中にこそ、道理に叶ひし事があらう、讀んで手本にするが宜い」ト、笑ひ給ふを玉葛が、實の樣に思はるゝと、言ひしををかしと思ひし故、わざと正しき日本紀を、惡樣にいひづるなり。光氏少し膝を進め、「今も既に言ひし如く、物語にしなじなは、あれども作者の心を用ひる、處にかはりは敢てなし。是は誰が身の上と、ありの儘にはいはねども、善きも惡しきも世を經る人の、有樣にまづ心をつけ、見て面白く語りても、人に飽の來ぬ筋にて、わが胸にのみ籠めおき難き、事ある時は後の世に、言傳へまほしきより、作りそむるものにてあり。善き人を譽むる時は、善きが上にもいよ〳〵善く言ひ、又惡き人の

に盗出させんと、したる處を危くも、かの姫上は遁出で、住吉のしるべの許に、隱れ住み給ひしと、いふ所を讀みながら、かの現太夫に思はれしを、不圖思ひ出で心にをかしと、思ふ處へ光氏は、何心なく來りしが、此頃は行くさき〴〵に、繪卷物ども打散りつゝ、目に離れねばほとほと飽き、「あゝ見るだにもむづかしや、女はうるさき事ともせぬ、大概どれも同じ樣に、實はすくなき物語、根もない事と知りながら、うか〳〵夫に心を移し、たゞ居てすら暑くろしき、五月雨時に寐みだれの、髮をもあげずかき寫す。いつたい女は虛事を、作りしものに欺かれん、僞に生れしものならん」ト、打笑ひしが思ひ直し、「さは言ひながら昔の風俗、その代の樣を知らんには、物語より外便なし。實に何の所在もなき、この徒然をこれなくは、いかでか紛れ給ふべき。さて物語に作りたる、その僞にもしな〴〵あり、まづ一ツにはさもあらんと、あはれを見せて詞のつゞき、よく道理に叶ひしは、跡なき事と知りながら、おのづからに心動き、いと美しき姫君の、物思へる樣なんど、わが身の上に取りなさば、女は胸も塞がるべし。又二ツにはこれは世に、いとあるまじき事かなと、はじめの程は思ひながら、こと〴〵しくとりなしたる、書振に目も驚かれ、不圖實かと思ふもあり。靜に讀みて考ふれば、道に背き義理に缺け、憎むべき物語も、打見にはいと淸うありて、これは誰が身の上の、事かと思ふも又あるべ

も遊びて居給ひしが、不圖雁音と幼き時、ひとつに住みしを思ひ出で、雛の殿の給仕など、いと能くしながら折々に、打したれ給ひけり。あゝ氏といひ眉目といひ、並ぶ方なき公達なれば、彼所の姫上此所の娘、見しは更なり聞いてさへ、思をかけてほのめかすも、少からねど戯言に、たゞ言なしていよ〳〵深く、思はぬ樣に程よくあしらひ、己が心の留れるも、あれどよく〳〵思びかへ、身を愼むは高直が、侮り思ひて引放ちし、口惜しさを忘れやらず、今おして言出さば、許しもせんが夫よりは、此身いよ〳〵世に出でて、娘を何卒まゐらせたしと、彼方より手をつかせんと、心に思ふ故にてあり。されば住居に引籠り、學問のみに氣を凝せば、いよ〳〵其事胸に絶えず、忘れんとして此所へ來れば、雛事にて思出づる。實に波の音聞かじとて、山路へ入れば松風の、音かしましきうき世ぞと、心やましく思ひしなるべし。
その次の日も次の日も、いよ〳〵降りて雨やまず。玉葛はとりわけて、繪物語の珍らしく、或は讀み或は又、繪に心ある腰元に、かき寫させなんどして、それにて長き日を暮す。實にや僞にや、さま〴〵に珍らかなる、人の上をいひ集めし、中にもわが身の有樣に、似たるは無しと見る中に、住吉といふあはれなる、物語にあてやかな、姫君を宮仕に、まゐらせんとしたりしに、その繼母が父君へ、さま〴〵に讒言し、七十ばかりのきたなげなる、翁を語ひ姫君を、既

じと、心遣をし給ふ故なり。今日もまた姫君に、見せんと思し此頃より、ゑがかせ給ひし巻物を、多く取寄せそれかれと、えりわくるその中に、たひのや姫といふが有り、是には心かたましき、繼母が娘を深く、憎む事のありければ、紫がこれを見て、愼めといふあてことかと、思ひもせんかと心づき、それをば手早く袖に隱し、其所を立出で明石姫の、部屋の間近く來りしが、何やらん賑やかに、笑ふ聲など聞えければ、襖の隙より差覗くに、雲井之丞と機嫌宜げに、雛事をして居たり。わが顏を差出さば、氣をつめんかと立寄らず、乾の館へおはしけり。

そも〳〵この氏仲をば、紫の方へ親しく、來ることを制し給ひ、さる頃までは明石姫とも、遠ざけてのみおきたるが、ある時光氏思ふやう、己が此世に在る中は、それ〳〵に心を配り、人となさんはやすけれど、老少不定もし今にも、命をはらば兄妹の、その中あまりに疎々しく、互に心おかるべし、幼き時より習はして、おくにはしかじ彼は素より、おとなしやかなる生なればと、氣は許しても女のみ、集る茶の間はまだ許さず、たゞ姫の部屋のみは、心まかせと宣ひければ、雲井之丞は喜びて、しげ〳〵渡り給ふなりけり。光氏が斯く嚴重に、もてなし給ふも一人の、男子にておはすれば、殊に大事と思してなるべし。」

氏仲は明石姫を、いと優しくし給ひつゝ、まだいはけなき雛遊の、側についゐて諸共に、今日

は知れてあれど、蓮葉な女の身の上を、さもありさうに書いたのは、讀むにも心恥かしう、面白うも侍らず、さればとて又うつほの中の、藤原の君の姫宮、發明であてやかで、瑕なき人にておはすれど、思ひ思うて言寄りし、あまたの男に恥かゝせ、あまりにつれなくしたりし故、みな〳〵姫を打恨み、髪を剃るやらこがれて死ぬやら、氣が違うてかわが家を、燒いたもあるに知らず顔、つくりて我身は大内へ、參りて事を濟したは、操正しい樣なれど、偏窟過ぎて女らしい、ところがないかと存じます」ト、言へば光氏打點き、「それもこれも今の浮世の、人にも多くある事なり、あまりに心をかたくなに、持つのも惡しゝみだらなは、いよ〳〵以て人の瑕、たゞ宜き程といふ事を、忘れず身をば愼むべし。賢き者と人もいふ、親が心を隨分に、つけて育てしその娘が、たゞ大樣にばかり見え、これこそ好けれと言立つる、處のなきは今まで何を、敎へし事ぞと親までも、人の誹を受くるなり。それに引かへ子が好ければ、親をも人が輕しめず、えては乳母や傅の、女どもがこれの館の、姫上はお聲も美し、琴も能う遊ばすなどと、言ひたがるは主人への、追從でもなく育てた慾目、言葉のかぎり譽めしを聞き、さてその業を見し時に、實にもと思ゆる事のなきは、興のさむるものなれば、心なき者どもには、つねづねによくいひ敎へ、譽めさせまじき事なり」など、宣ふはたゞ明石姫へ、人に點を打たせ

出して繪をかゝせ、明石姫の方に贈りぬ。紫も明石に見するを、かこつけにして人々の、祕置くを借り或は新に、作らせなんどしたりしが、その中にとりわけて、いと能く書きし古滿野といふ、物語繪を見給ふに、

古滿野の物語の名は、枕草紙にも見えたれども、今は絕えたりとぞ。鉢かつきの草紙のたぐひに、取かへんと思ひしが、似よりたる物語を見いでざれば、これとうつぼと住吉は、源氏のまゝにて改めず。

まだいと小さき女ぎみの、何心なく午睡して、居たる所の有りければ、昔の事を思ひ出で、「此姫上も目がさめなば、折角伏籠に飼ひたる雀、なぜ逃したと腹立てて、叱るであらう」ト側に居る、犬吉を見て微笑めば、光氏も差覗き、「其所はどうやらおん身の事に、似たやうなれど己がやうに、その姫の生立つまで、心長う待つては居ぬ。その後を開いて見給へ、同じ樣に小い若衆と、ざれ狂うて居る所があらう。明石姫の前などにて、この世馴たる物語は、必ず讀んで聞かせ給ふな。まだなんの頑是なく、をかしと心はつくまじけれど、かゝる事も世に有りけりと、見習はさんは宜からじ」ト、そとした事まで大事をとり、實の娘を生立つる、をしへを玉葛もれ聞きなば、いよいよ親とは賴み難き、御心なりと疑ふべし。紫繪卷を傍にさしおき、「作り事

し又教訓し、活つ殺しつおはする樣、いと若やかにて著たる衣の、つやも色も澄るゝばかり、薄き單衣を打かけしに、透とほれるがなほ淸く、此世の人の染出し、たるとも見えず懸香の、程よく薰るも思ふ事、なくて見るなら一入に、をかしかるべきお姿ぞと、玉葛は人知れず、心の中に思ひけり。

正尙より忍びやかに、使ありて文もて來る、たゞ白き薄葉に、よしある手にて書なしたり。

引く人もなしや六日のあやめ草

長き菖蒲の根に結びつ。光氏をかしと見なしながら、雨はれ高くさし昇りし、日の影を打仰ぎ、返をも見まほしけれど、今日もまた室町へ、出仕なせば心にまかせず、はやその時刻と急がはしく、立歸れども玉葛は、いと懶げに送りもやらず、また正尙の文もそのまゝ、うち捨て手にも取らざれば、せん方なくて又例の、袖の香が御代に、につこらしげの返を認め、急ぎ使に渡しけり。正尙はそれとも知らず、いと若々しき書ぶりかな、手に今少し位のあらばと、思ひながらに好ましく、飽かず眺めて居給ひけん。

今年はとりわけ五月雨、ふり續いて晴間なく、徒然なればいづれの館も、物語繪の卷物など、讀みては心を慰め給ふ。朝霧はこれらの事も、よく心得て珍らしく、人の知らざる昔語を、取

住めどもかくて逢見れば、心安くこそあれ」なんど、戯言をのどやかに、宣ひながら花郷に、暇をたまひ枕屏風、ひき隔てて光氏は、靜に獨臥しにけり。

さて又前に記したる、玉葛が住居には、忍ぶとすれど此夜の事、腰元女は能く知りて、次の朝お手水など、持出でたるが次へ退き、若き者ども打擧り、「正倚樣のまめやかに、物宣へる御聲音、お姿までも光氏君に、似させ給ひて娟妍な」ト、一人が言へば又一人、「そりや御兄弟の事なれば、御かほばせはどこやらが、お似申しては御座らうが、御深切なる光氏樣に、所詮及ぶ事ではない。玉葛樣へ何から何まで、御心つけての御介抱、女親の遊ばす樣、お側で見てさへありがたい、事ぢやと涙が溢れる」ト、ひそめき言ふを洩聞く玉葛、はやく實の父上に、廻り逢ひて赤松の、娘と知られ人がましく、なりし上にて此樣に、いたはり給はゞ御心の、まゝになるとも似合しからぬ、程とは人も思ふまじきを、僞にもせよ親と呼ぶ、人に此身を打頼まば、末の代までも汚れたる、名を殘さんかと心の中に、思ひ惱むを光氏は、もとよりさせるこゝろざし、あらねば夢にも知り給はず、花郷の住居より、歸りがけに急がはしく、此方へ來り差覗き、「正倚はいかにぞや、夜の更くるまで居たりしか。たゞ釣寄せて心の深さ、淺さを試し見るまでにて、あまりに近く寄せ給ふな、彼も頗る嗚呼の者、迂濶に心ゆるされじ」ト、そゝのか

三十五編　下

光氏は彼所を脱出で、巽の館へ歸らんと、思ひしがはや夜も更けて、五月雨頻に降りしかば、花郷が方に泊り、物語など聞え交し、暗き空を打仰ぎ、見給ふ折に螢三ツ四ツ、垣を越して飛來れば、さきのにやあらんずらんと、心にをかしと思ひつゝ、「正倚が此頃は、しげ〲に來るよし、形などは勝れしと、いふにもあらねど用意氣色、よしありげにて憎からず。此程は心安く、語ふならん」ト問ひければ、花郷は會釋して、「御弟にておはすれど、君よりはお年上の、樣に見えさせ給ふなり。嵯峨にて密に見上げしより、さまでに年はたゝねども、俄にふけさせ給ひしかば、若殿樣とは申されず。さりながら晴命樣の、莟に比べて見ますれば、盛は過ぎさせ給ひても、御人柄のうちあがり、位備はる花のおほぎみ、櫻に譬へんお姿」ト、答ふればたゞ點くばかり。光氏は人のよしあし、いふ者を忌嫌へば、今花郷が人をよく、見しりし答も快からず、心の中に一色多京は、晴命にも又劣れり、もしそれを玉葛の、夫となさば彼はいよ〲、誹るならんと疎ましく、思へば更に言葉に出さず、たゞ何氣なく打微笑み、「朝夕は隔たりて、

も玉葛が、恥らひながら俯したる、容體の憎からぬが、暗うなりても目に殘り、實に光氏が案の如く、正尙の心に染みて、

消えはせじ聲なきむしの光だに

「思ひ知り給ひぬや」ト、言かけられて斯樣のかへり、深く思ひ廻さんも、心ねぢけしやうなれば、早きをせんに玉葛が、

身は焦れ言ふにまさらめ螢こそ

と果敢なく聞え袖の香に、傳へさせてみづからは、奥に引入り打散りし、螢と共に影だに見せず。正尙は屛風に身を寄せ、今玉葛がいと遙に、隱れし體を窺ひ知り、せん方なくて袖の香に、恨などいふ時こそあれ、俄に五月雨降來り、あたりもしんとしづまりければ、人なき所にうかうかと、長居せんもはしたなく、軒の滴も苦しさに、濡れ〳〵夜深く出で給ひぬ。時鳥などかゝる折には、必ず鳴きもしつらんが、うるさければ聞きも止めず。

思ひがけなく打ほのめく、光ををかしと見る程なく、袖の香が團扇にて、あふぎ散して取隱しつ。されども殘りて消え〴〵に、なりし光もなほ艶にて、心をとむる端と見ゆ。ほのかなれど

呆れたり。これは此夕暮方、螢を多く羅に、包みたるを光氏持來、庭に放ちて眺めんと、思ひし中に袖の香を、引連れて此所へ來り、この脱掛けし帷子の、ありしを幸ひその袖へ、光を隱して置きつるを、そしらぬ樣にて斯く俄に、放ちて驚かしたるなり。玉葛はこの明かなる、光に照され打解けし、姿の見ゆるが淺ましくて、扇をひらき差隱す、かほばせもいとをかしげなり。思ひがけなき光を見せば、正倚も覗きなんと、光氏が斯くまうけしは、娘と僞り傅ける、噂を聞きて不具には、あらじとばかり正倚は、打心得て言寄るにて、姿かんばせ斯くばかり、瑕なきまでは推測らじ、さればいとよくその樣を、見せんと思しゝ故にてあり。實の娘ならんには、かくもて騷ぎ給ふまじ、たゞ黄昏が誠ありし、心を忘れずその形見を、世に出さんとて尋ねしのみ、不便と思ひて大切とは、思さぬ故に戯れがましき、事を構へてその身は頓て、人の心のつかざるうち、密に拔出で歸りけり。

正倚は玉葛が、居る所まで遠からんと、推測りしより近やかに、正しくそれと覺しき氣色、聞くに心もときめきて、屏風の隙より見入るれば、少し隔ちし向の方に、打屈み居る樣なりしが、思ひがけなく打ほのめく、光ををかしと見る程なく、袖の香が團扇にて、あふぎ散して取隱しつ。されども殘りて消え〴〵に、なりし光もなほ艶にて、心をとむる端と見ゆ。ほのかなれど

倚が、かね〳〵思ふ心のたけを、言續けたるその言の葉、おとなしやかにて一向に、女をたらす浮世人の、樣にはあらでなみ〳〵の、若殿ばらと異なるを、いと〳〵をかしと光氏は、ほの聞きてこそおはしけれ。

玉葛は少し引入り、襖に凭れて居たりけるに、この仰を聞えんと、ゐざり入る袖の香を、光氏密に傍に招き、「玉葛はいとあまりに、情を知らぬもてなしなり。何事にもあれその程々に、するこそ宜けれ今は早、只管に恥かしと、隱れてのみ居ん年にもあらず。よく〳〵に思へばこそ、一人忍びて訪寄りし、彼をさへ遠く置き、人傳に聞えん事は、世にあるまじき事なりかし。聲を惜みて此方より、物のたまはずと少しは近く、進みて彼方の言葉はみづから、聞き給へよ」などひそ〳〵と、諫めこしらへ給へるを、玉葛は聞きながら、いと苦しくて動きもやらず、打案じてのみ居たりしが、既に前にも記しゝ如く、此程は光氏の、心を深く疑へば、もし此事にかこつけて、近くおはさば如何せんと、それも是もわびしければ、する〳〵とゐざりいで、かの隔てなる竹屛風の、許に身を寄せ袖の香を、賴みとしつゝ俯しけり。正倚はなほ何くれと、事長く言ひ給へども、只一言の答もなさでやすらふに、光氏はつと寄來て、屛風に懸けし帷子を、引下し給ふとひとしく、さつと光れるもののあり。手燭を誰かさし出でたると、袖の香も

ず、夜はまださまでに更けねども、臥所に入らんと帷子を、單衣に脱更へひき廻しょ、簾屛風へ打掛けて、まだ敷設けぬ夜具に凭れ、たゞ一人淋しげに、暗き庭を眺めて居れり。

さても四郎正尙は、光氏が袖の香と、語ひあはせて待つぞとは、夢にも知らず玉葛が、宜しき返を珍らしと、忍びやかに來りしかば、袖の香はうち心得、此方なる小座敷に、まづ褥をまゐらせつ、これ竹屛風ばかりを隔て、玉葛が部屋近き程なり。光氏も心して、空炷物心憎き、程に匂はし床しげに、思はせ給ふは實の親の、すべき仕業にあらねども、正尙が心の誠を、見て許さんと思してなるべし。袖の香は光氏が、差圖にかくは計らひしが、もし山吹が聞付けなば、腹立ちて叱られん、又正尙への答をば、何とか言はんと氣も臆し、引退くを光氏が、後より突出し、「心弱し」ト小聲にて、打笑はれてうろ〳〵と、せん方なげについゐたり。はや夕月は疾くに入果て、空一面にうち曇り、あやめもわかぬ五月闇、うち濕りたる正尙が、姿も見には及ばずながら、人にくらべていと艶なり。かの屛風を廻らしたる、内よりほのめく追風に、深く薫のみち來るは、彼方に隱れし光氏が、衣にとめたる匂のいとゞ、立添ひしとは正尙知らず、豫て思ひ計りしよりも、をかしき氣色と心を留め、透し見れどもいと暗く、それかと思ふ人影だに、見えねば此所とは隔たりて、居るなるべしと推量し、かく傳へよと袖の香に、打向ひて正

れよりは、思ひの外なる辛苦の添ひ、さま〴〵思ひ亂れけり。かの筑紫にて信樂の、現太夫に思はれて、憂かりし樣とはひとつらに、あらねど是はかりそめにも、親と名乘らせ給ひし君、淺ましき名の洩れんかと、心ひとつに思ひつゝ、船にて遁出でしとは、事は異れど疎ましく、早何事も思ひ知る、年にてあればさま〴〵に、思ひ集めて母上の、此世におはせずなりにける、口惜しさも亦繰返し、惜しく悲しくのみ覺ゆ。されば此頃光氏が、何心なく言出づる、言葉もとかく玉葛は、御心ありて宣ふと、聞違へては胸潰れ、苦しきものからはしたなく、言聞ゆべき人ならねば、そしらぬ風情にもてなす樣、おもくれず又賤しからず、愛敬づきていつとても、心輕げに胸の中の、辛苦を更に見せざれば、正倘なんどはまめやかに、せめ聞え給ふ文、折に觸れては打眺め、此方に身をまかせまゐらせ、かく心憂き光氏君の、御氣色を見ぬ事もがなと、流石に戲たる心づき、さてこそ見入るゝ時もありしか。

今日は菖蒲の節句なれば、藥玉なんど美しう、造りなして諸所より多く、贈り越し給はるを、見るにつけつゝ玉葛は、筑紫の波に沈みぬる、うき身が思はず唉出でし、花の都のこの榮は、喜びながら人に疵、つけずわが身も後指、さゝれず世を經る仕樣もがなと、思へば心浮立た

聞上げし故、をかしの女と光氏も、思して此頃心安げに、語ひ給へば大方それと、推して聲を低くなし、「又玉葛へ何者か、文を送りし事なるべし、密に見せよ」ト宣へば、袖の香は土に手をつき、「仰の通り正尙君、馬場よりのお歸りに、立紛れておはしまし、今宵は是非に玉葛が、返を取りて我に見せよ、館に歸らずそこ〳〵に、待つて居るとの御仰。玉葛樣の御覽に入れゝば、少しはお心解けしやら、見入れ給ふやうなれど、お返は思ひもよらず。如何計ひ侍らん」ト、件の文を差出せば、光氏は打披き、燈籠の火影に透し、

神代よりして五月雨は、婚禮にこそ忌むと聞け、ちかきほどの許を受け、聲だに聞かせ給ひなば、積るおもひははれなん。

と、讀かけて卷收め、「心ありて言寄りしを、とりてもつかぬ答せば、情知らずと却つて人に、笑はるゝ事のありと、玉葛に敎へても、心地惡しとて聞入れず。幸ひ其方は手なども宜しく、書くよしを山吹が、噂に聞けり」ト小座敷へ、袖の香を連行き給ひ、料紙硯を取寄せて、靡きもするやと憎からぬ、ほどの返を言ひ敎へ、給へば袖の香憚らず、仰書を認めをはり、かの正尙が待ちおはする、所へ頓て持行きけり。

玉葛は光氏が、寢おびれてちかやかに、寄添ひたるを只管に、心を誘ひ給ひしと、打心得てそ

し、馬の達者不達者は、更に見分け難けれども、附從ふ侍さへ、小袖袴に綺羅を盡し、きたなげなるは一人もなく、面々主人を大事ぞと、馬に添ひて馳廻るを、いと面白くぞ見居たりける。

此馬場は遙南へ、押通していと長ければ、巽の館の二階には、ゐながら斯樣の若き人、明石姬に傅きて、見物なして居たりしが、打毬は殊更興ありて、白き毬赤き毬、飛交ひく、勝負を爭ふ聲、いと騷しく罵るも、夜に入りぬれば何事も、見えずなりはて人々は、暇を告げて立別れ、女どももそれぐの、館へ歸りしづまりぬ。光氏は若殿ばらと、爭ふもおとな氣なしと、たゞひとわたり騎射のてだれを、見せて傍に引退き、差圖のみして居たりしが、夕暮前に密に馬場を、脫出でて花鄕を、住まする館に立戻り、休息する中日も暮れて、さらぬだにまだ影薄き、夕月に雲おほひかさなり、いとゞ小暗き庭の面、燈籠の火の細々と、見ゆるもをかしと庭下駄を、穿きて其所此所うち廻り、眺めてたゝずむ後より、密に寄來る者のあり、光氏は訝しく、誰ならんとかへりみれば、玉葛が腰元女、かの物よくいふ袖の香なり。彼は前にも記しゝ如く、まだ今まゐりの者ながら、浮世に馴れて馴染を重ねぬ、人にも早く馴安き、女にてありければ、正倘はじめ汜廉なんどに、仲立の事を賴まれ、光氏の機嫌を伺ひ、取つくろひ程よく

へ建置きたり、其所より馬場を見通すに、程遠からねば腰元の、若き者ども彼所へ參り、渡殿の戸を開けて見物すべし。馬の達者弓の上手も、多くありて大内の、眞手つがひに劣るまじ」ト、言流し雲井之丞を、引連れて立出で給へば、さまでもなき事をさへ、見たがるが若き女の、常なれば皆打喜び、玉葛の傅へも、此事を直に言やり、取急ぎかの高殿へ、連立ちゆき渡殿の、戸を取放ち青簾かけ渡し、押合うて見物する、顏はさだかに馬場より、見えわかぬども簾の隙に、飜出づる衣のいろ〳〵、或は裾濃あるは曙、色の司の紫は、いと好ましき振の袖、長き五尺の菖蒲草、蓬を交ぜて染めたるは、今日の祝の裝なめり。三ところの館の童、さては若き女ども、ひとところに集ひしなれば、我劣らじと挑み顏なる、そのもてなしも見所ありげに、思遣られてまだ若き、殿ばらなどは其方にのみ、目をとめ鬢を搔撫でて、衣紋をつくろひ氣色ばむ。

未の時ばかりにぞ、光氏馬場へ出でにける。實に室町の公達も、殘りなくおはし集ひ、かの大内の眞手つがひの、作法とは又事かはり、若殿ばらはわが馬の、達者を見せんと合圖も待たず、乘出して制せられ、後れて恥をかく者あり、思ふ矢壺を射當てて喜び、思はぬ方へ矢はそれて、無念とあせり馬より落ち、笑はれつ又譽められつ、其日は遊び暮し給ふ。女どもは弓のよしあ

さて又汜廉正侚の、二人はとかく玉葛を、思ひこがれて山吹は、物堅きにより袖の香とて、都にて抱へたる、まだ若くこざかしき、玉葛が腰元女と、ちかしくなしてたらし込み、光氏が年の程も、相應しゝと言ひたるを、正侚は彼より聞き、いと頼もしき事に思ひ、汜廉は又妻ある上には、送り難しと宣ひしを、是もかの袖の香より、聞きてほと〳〵力を落し、いよ〳〵工夫を運せば、柏之助は實の血筋を、今もつてゆめ〳〵知らず、何卒して光氏が、許を受けて娶らんと、そゞろに浮れ惑ふめり。

胡蝶の巻こゝに終り、これよりほたるの巻にうつる。

五月五日のまひるの頃、光氏は華やかなる、帷子に弓籠手を懸け、乾の館を差覗き、「氏仲々々」ト近く呼び、「今日は東の馬場にて、まづ競馬騎射を催し、すゑに打毬の遊をせんと、人に知らさず心がまへを、密になせしが正侚はじめ、若殿ばらの聞付けて、室町より大ぜい來らん、その由只今言こしたり。おのづからに事々しき、催とこそなるべけれ。おん身も用意し給へ」など、聞え給ふを花郷も、洩聞きて頓て立出で、「犬追物や打毬の折の、御裝には華やかが、宜いとかかね〴〵承はる。御帷子はつぢが花、御袴は撫子の、若葉の色」トえり出し、著せまゐらすれば光氏も、機嫌よげに打眺め、「東の館に並び、常には人の住まざる高殿、構の中

いと靜なる夜の樣なり。腰元どもは光氏が、寢おびれたる聲を聞き、御目のさめて濃かなる、物語をし給ふぞと、憚り思ひて遠く退き、風にあふちし燈火を、挑立つる者もなく、微になりたる光にて、光氏は不圖玉葛を、透し見れば覺めてもまだ、昔の心地のみせられて、あはれに思へど氣を取直し、元の褥に立戻り、「をかしき夢を今まで見たり、その事を語らんと、思へども早二十日あまりの、月さし昇り夜は更けぬ。むかし戀しき慰め草は、おん身を除けて外に無し。果敢なき事ども打交ぜて、重ねてゆる〳〵聞ゆべし。同じ心に答へ給へ」ト、言ひつゝ衣紋搔裝ひ、人も怪しと思ふべければ、取急いで出で給ひぬ。是より後はしげ〳〵に、渡り給へる事も止み、今までほどにちかくもてなし、給ふ事もあらざれど、とにかくに玉葛は、此夜光氏寢おびれて、浮きたる振舞せし事の、只管に氣に懸り、夢にかこちて自らが、心を誘ひ給ひしと、思違へて浮名にも、なるべきかなと淺ましく、實の父におはしなば、たとへこれ程眞實に、して下されずと此樣な、せつなき事はあるまじと、それから萬安げなう、思ひ亂れてくよくよと、歎くは年こそ重ねたれ、浮世の中の有樣を、田舍に育ちて見習はぬ、故にやあらんそれよりは、顏の氣色も惡しければ、腰元どもは御心地、惱ましげに見え給ふとて、藥よ加持よともて騷ぎぬ。

ん身に、似たりと心もつかざりしが、見馴るゝほどに姿かほばせ、ものいふ聲までその身そのまゝ、それかと思ひまがへられ、あはれに覺えし時多かり。かの玉葛に打向ひ、おん身の母をば心にかけ、いまだに忘れずその代に、見ん人もなく年月を、いたづらに過ぎぬるに、今かくおん身を呼迎へ、夢にやと思ひなすと、言ひしは眞の夢なりけり。玉葛は昔の事、度々聞くをむづかしと、思ひやしけん俯臥に、背きし姿も懷しう、思ひし」なんどしめ〴〵と、語り給へど黃昏は、更に答もなさゞれば、光氏は訝しう、「なぜに物をば宣はぬ、心地にても惡きや」ト、袖を捉へて引かんとし、今ぞ實に夢覺めて、わが身を見ればいつの間にか、脇息を傍に押やり、褥も離れて玉葛が、ほとり近く臥して居れり。玉葛は光氏が、寢おびれて何やらん、言ひつゝ近く寄來るに、驚きながら呼覺す、事も流石に憚あれば、たゞ心憂くいかにせんと、覺えて隅に打屈まり、戰かるゝ有樣の、いと著ければ光氏も、やう〳〵に心づき、さては夢に黃昏と、見えつるは此玉葛なるべし、いとちかしくは語へど、常には行儀をかりそめにも、崩さゞる身が寢おびれて、打解姿のしどなきを、見習はざれば玉葛は、さぞ疎ましと思ひしならんと、心の中に恥かしく、言ふべき言葉もなかりしかば、吐息と共に打背き、不圖庭を打見るに、日暮れてより又一しきり、降すさみたる雨止みて、風の竹に鳴るほどに、月華やかにさし出でて、

語ひつゝ、庭に植ゑたる呉竹の、いと若やかに生立ちて、そよ吹く風に打靡くを、眺めやりて居給ひしが、はや寒からず暑からぬ、程にてあれば心地よく、光氏頻に眠氣さし、脇息に打凭れ、思はずまどろむ樣なれば、玉葛は心をつけ、騷しくてはあしからんと、女どもは次へ遠ざけ、その身は御目のさむるまで、宿直心に姿を正し、御側に附添ひつゝ、眠り給ひし光氏の、顏つれ〴〵と打まもり、實の父のかくばかり、親しく語ひ給ひなば、いよ〳〵嬉しかるべきを、いつの折にか聞え知らせ、給ふならんと心もとなく、不圖涙さしぐみしが、思ひ返していやいやいや、父上なりとて遂に一度、見給ひもせぬ妾をば、かう細やかに御心を、つけては下し給ふまじと、世にありがたき光氏が、情のほどを思知り、人にいふべき事ならねば、心の中にさまざまと、打案じてぞ居たりける。

光氏はなは前後も知らず、打やすみて居たりしが、賢き人も夢の中は、愚になれるものにてあり、目はさめねども目さめし心地に、光氏あたりを打見れば、凌晨が五條の家にて、傍に黄昏は、三味線彈いて遊び居たり。怪しき事をあやしまず、怪しからぬを却つてあやしみ、黄昏が側に寄り、「さても不思議にいと長き、夢をこそ今まで見つれ。おん身は死して忘形見の、玉葛といふ娘ありしを、ある山里より尋出し、しか〴〵なして置きつるが、初のほどはさまでお

程ながら、我は顔に憎げなる、側女のありと豫て聞けり。さればいかにも和に、心を持たね。ば美しく、彼とは連添ひ難からん、少しも心に癖あらば、かの妾に讒言せられ、飽かるゝ事の出來なん。それかれの心遣を、さするは我も心苦し。一色の汜廉は、わが身より年增したる、妻を持てるがその心、あらくしきのみならず、悋氣强きに持あぐみ、さてこそ只管玉葛を、乞求るにあらんずらめ。そのふる妻を離緣せし、とにもあらねば是とても、身をまかせなば煩はしき、事もやあらんと人知れず、心に思ひ定めかねぬ」ト、宣ひながら襖の陰に、半隱れし玉葛を、光氏は差覗き、「斯樣な事は親などにも、あからさまにわが思ふ、胸をば語出で難き、ものにはあれどおん身は早、顔うち赧め振袖のみ、まさぐりて居る年にもあらねば、了簡なき事よもあらじ、我をむかしの黄昏に、思ひなぞらへ何事も、隔てず明し給ひなば、嬉しからん」トまめやかに、宣ふがいと苦しくて、玉葛は差俯き、しばし言葉もなかりしが、かくてはあまりに若々しと、思さん事も恥かしと、思ひ直して顔を上げ、「幼き時より親といふ、者は見習ひ侍らねば、かういふ事は言うて宜い、是は惡いの差別をも、更に辨へ侍らず」ト、いと安らかに聞ゆれば、光氏は實にもと思ひ、「さあらば浮世の譬にも、後の親を親とせよと、いふ事のあんなれば、愚ならぬ志、われも見せんおん身も夫を、見きはめて後打頼み、給へ」なんどと

聞ゆれば、光氏もにつこと笑ひ、「それはおん身が年足らはず、物の心を知らざりし、其時なればば頑是なく、さう思うても居たらんが、玉葛は早はたちの上、我にくもりし心のあらば、何とて打解け頼まん」ト、言かゝりしが何とやら、むづかしければ其儘に、そこ〳〵に立出でつ、彼所へ渡り見給ふに、玉葛は手習などし、女ばかりの中なれば、打くつろいで居たりしが、光氏が来るを見、起上りて亂れたる、衣引つくろひ恥らふ顔の、色あひなんどもいとをかし。光氏は見ぬふりを、つくりて庭を打眺め、さて山吹に打向ひ、「其後に又文を、持來りし者やある。さる頃も言ひし如く、迂濶に返事をせさすな」ト、宣へばにじりいで、「御覧に入れたる三ッ四ッの、外にはたとへ持参りし、者ありとても留置かず、御返は殊更にて、これ〳〵へは聞えよと、御差圖のありしだに、玉葛様はいと苦しう、思してしか〴〵遊ばさず。たゞ難儀なは赤松の、若殿達が姉上と、知召さねば折節の、事にかこつけ給ひつゝ」ト、言ふを光氏押止め、「はて夫とてもおのづから、聞傳へなば自然と止む。高直に彼が事、物語らんとはじめより、思ひしかども都の樣、まだ見習はぬその前に、繼しき母や異腹の、兄弟多きその中へ、差出でんには心苦しき、事もあめりと今日が日まで、包み隠して置きつるは、彼に素性の賤しからぬ、夫を持たせ其後に、高直に仔細を聞え、對面させせんと思ひてなり。さて正倚は獨住、年も似合の

三十五編　上

卯月の末とはやなりぬ。ある日小雨の打降りしが、程なく空の晴渡り、いと靜なる夕つ方、光氏は常に住む、一間に淋しく居給ひて、柏の梢若楓、青やかに茂り合ふ、庭を眺めて又例の、玉葛が事いかにかと、思出して忍びやかに、行かんと思し紫に、聞え給へば打背き、「假にもお子と名がつけば、その樣にもおかはいゝ者か。とにつけかくにつけ、しげ〳〵に彼方へおいで、彼が母は氣弱な生、あまりに內場過ぎし故、心の張のなかりしが、玉葛はそれに引かへ、人の目顏に心も悟り、世馴れて見ゆると日外も、お褒めなされたその利發で、なぜまアあなたのお心の、底をば知らず眞實の、親同然に思ひなし、うらなく打解け賴まるゝが、妾は笑止に侍る」ト、悋氣を含みて言ふぞとは、知れども光氏知らず顏、「我より外に賴もしう、語ふ者はなき玉葛、何とて打捨ておかるべき」ト、言へば紫つれ〴〵と、光氏の顏打まもり、「妾が身にて覺あり、はじめの程は實の父、國助よりも心安う、親と思ひて甘へしが、終にはそれに引かはり」ト、言ひかけほつと吐息をつき、「昔の事に今の事、思ひくらべて見ますれば」ト、打微笑みて




螢の巻の詞
雲井之丞氏仲
暇ある日ハ妹明石の
伽して遊む

偐紫田舎源氏第三十五編序

虚を實に見するは、凡夫三千人に式部ひとり歟なり。實をいうてうそつきになる事、拙きが故なりと、歯がみをなせども是非なしとは、其角が著したる吉原源氏五十四君の序に書きたる述懐なり。その名を隠して、作者淺茅の尼と記す。予も亦式部小路のお藤の名を假しばかりは似たれども、衿白粉の雪と墨染、黒人に向ひて面かぶり、爭頭のあがるべき。夫文の走る事、山風のおろし節、陀羅尼をよむよりいちはやく、此詞のくだ〱敷は、うろ覺なるめりやすの、爪彈よりも最まだるし。おもふに尼が實を説いて、虚に聞かれんを歎ぜしは、才力のあるが故なり。娘は初編にいひし如く、歌の兩家は松水岡安、物語は實盛か熊谷かといふしどけなし、空言を見よとてうそを綴る、妄語の罪に沈みなば、彼淺茅の尼公を請じ、田舎源氏の供養をたのまん。

天保十二年辛丑初春　　柳亭種彦識

らず、返をも書きえずと、思はれんのも口惜しかるべし、とく〱筆を執り給へ」ト、いへど、玉葛打背き、恥らう様もいとをかし。撫子の縫模様、この頃垣根に咲く花の、色の肌著に紅絹の裏、姿もてなし今めきたり。さはいへど田舎びたる、名殘にはたゞ悠然と、細に心配らざる、樣に見えしが六條にて、人の有樣見習ひて、此頃は姫上らしう、化粧なども心して、薄らかにつけければ、こゝぞ惡きと言立つべき、ところもなくて華やかに、美しう見えたりけり。光氏はなほ年よりも、いと若やかに見え給へば、押泣びておはするを、山吹はつく〲見上げ、親と聞え給はんに、誰かはまことゝ思ふべき、よき似合の御中ぞと、心の底に打笑みけり。

よく書き給へ。弟を譽むるやうなれど、彼は形も風流にて、文書く事もなみ〳〵の、人には遙に勝りたれば、又何とか言おこさん。妻も失せて此程は、獨住にてあり」なんど、聞え知らせ給へども、玉葛は恥かしう、思ひてしかぐ〳〵答もせず。又かの一色汜廉の、文を取りて見給ふに、いとまめやかに書なしたり。髯廉といふあだ名をとり、日頃は女をかへりみる、氣色だになくかたくろしき、顔に似合はぬ事かなと、釋迦も孔子も戀には迷ふと、むかし謠ひし小唄さへ、思出されて光氏は、心にをかしく彼方此方、見くらべて取集め、山吹に渡し給ひ、「人の心の深さ淺さを、ためした上にて玉葛を、送らんと思ふに依り、その文は留めおかせたり。されば先の人をえらび、答などはせさすべし。今樣人に誘はれて、あだし浮名を立てらるゝは、男ばかりの科にはあらじ。されにもせよ言寄りし、その時女のつれなき答を、あな情なし恨めしと、思ふは常の習ながら、年月たちて其後に、あの時うち解け語ひなば、わが身の爲にあしかりなんを、思ひはかりて心強き、返事をこそはしたらめと、心づきて男の却つて、喜ぶ事も世に間々あり、つれなき答に猶増すあり、それにて思ひ絶ゆるあり、心にさまで思はねども、人のぞめきに言寄るあり、左樣の者はかへりみも、せぬが女の愼ぞ、後の難儀となる事あり。さて正倘はおん身の今まで、山里にて生立ちしを、知りたらんも計り難し、されば物の心も知

みにて口へは出さず。雲井之丞は實の姉と、思へば何の隔なく、暇ある日は打解けて、遊びなどし給ふを、女は却つて恥かしと、思へど此方は心つかず。此若君の御供に、柏之助梅之丞も、常に參りてもろともに、戲れごとなど言かくるを、玉葛は弟ぞと、能く知るからに心苦しう、少しも早く實の父、高直にわが身の事、知らせまほしく人知らず、思へど是も言葉に出さず、偏に打解け光氏を、賴み聞ゆる樣なんど、似るとはなけれど黃昏の、氣色の思ひいだされて、いとゞあはれと光氏は、見る度每に思ひけり。更衣の頃にもなりぬ。霞消えたる空の氣色も、靑々として心地宜きに、光氏はさせる用も、なくて長閑におはしゝかば、やゝもすれば玉葛が、住居へ渡り給ひつゝ、山吹に豫て言付け、受取置かせし人々の、文どもを見給ふに、正尙はまだ言寄りて、程もなきを年月こがれ、答なきに心いられし、樣なる事ども書きあつめつ。光氏はひそ〳〵笑ひ、「兄弟多きその中にも、とりわけて睦しきは、正尙なりしが若きより、斯樣の事は深くつゝみ、けぶりに出しゝ事もなきを、今おとなしくなりて後、はじめて見るこそをかしけれ。玉葛を妻にせんと、思ふ心の實あらば、まづ我にほのめかし、しやうもやうも有るべきを、あだ〳〵しき振舞は、心得難き事にてあり」ト、打呟きて玉葛に、此文を見せ給ひ、「まづ試に此返を、打解けずまた角立たぬ、やうに程





ことの菩提心、起りし樣は見え候。これも偏に佛の慈悲。やゝ柴園、元より廣き惠ある、君に向ひてなか〱に、お詫申すは恐あり、瞋恚の炎は消えて涼しき、風に心の塵を拂ひ、たゞ御佛に仕ふるが、肝要なり」ト靜に立ち、繩解きほどけば柴園は、たゞ伏拜み〱、菫野に打向ひ、「お目に掛るははじめてなれど、名をば互に聞知りて、定めて昔は私をにくう、思はれもせん今とても、恨もあらうが姿をかへ、今日より心もかへたれば、許してこれから睦しう、打語ひて給はれ」ト、泣くどきなどする中に、日は疾く暮れて又讀經を、はじむるかねを打鳴すを、聞きて磯菜は權花尼もろとも、設の一間へ行き給へば、光氏は菫野ゆかりを、引連れてかの春の、住居へ歸らせ給ひけりとなん。

玉葛は形もすぐれ、心も優しき生にて、光氏君の重くもてなし、傅かせ給ふ氣色、世に洩聞えたりければ、心を靡かす人多く、便につけつゝ氣色ばみ、言に出でて聞ゆるなど、數あるうちに正尙は、實の姪にあらざる事を、何所にてか聞出し、文を通はす事繁し。又高直が總領の、柏之助は姉なる事、夢にも知らず光氏の、婿にならんと思ふから、己よりは年增なるを、厭はず心をかくるもをかし。一色多京も思ひやまず。かく人々の玉葛を、望むといへど光氏は、いまだいづれへ送らんと、いふ事を定めかね、高直にまづ彼が事、知らせんと折々に、思へるの

思ひながらに心もとなく、かの寺へ密かに行き、樣子を窺ひ居たりし處へ、田貫も馬刀も昨夜、大井の館にはてたりとて、二人の死骸を舁き來れり。田貫の骸ははや、棺の中に納めたれば、確に見とむる事もならず、馬刀の死骸は筵にくるみ、これは殊更憎き奴、赤裸にして埋めよと、下男が言ひ騷ぐを、そ知らぬ顏して立寄り見れば、咽より頸へ突傷、朱に染みて死してあり。さては昨夜二人とも、大井にて切害されしに、疑なしと思ひきはめ、恐れながら夫の仇、一太刀恨みまゐらせんと、狙へど近づく手段なく、空しく月日を送りし處、不圖名雙寺の尼公の弟子と、なりなばお前に立出づる、便もあらんと心づき、近頃斯樣の姿となり、世にありがたき此度の、御法筵に列ねられ、田貫が跡弔ひ給ふ、御仁心をばゆめ〱知らず、手むかひなしたる御詫は、尼公よりして聞上げ、給はれかし」とぞ打泣きける。光氏は始終を聞き、「田貫が死するまで、隱妻を持ちたるは、憎むべき事ながら、慚愧に自殺なしたれば、今更昔の罪をば言はず。汝は心得違ひながら、遊女に似合ぬ貞婦なり。槿花尼はよい弟子を、まうけられし」トありければ、珠數爪繰りつゝ頭を下げ、「君に野心を挾む、者とも知らず差置きしは、妾が落度に侍れど、折も折とて田貫が、最期の事どもいと詳しく、御物語あそばしたを、障子の外に漏聞いて、彼も慚愧後悔なし、今こそま

てあり。こは何者の仕業かと、立寄る槿花を光氏押止め、「我厠より立出でて、手を浄めんとする時に、その尼に渡置きし、わが差添を抜打に、切らんとせし故蹈落し、簾を巻きし紐ひきちぎり、そのまゝ搦めて置きつるなり。やい尼、此所へ列なる者どもに、言聞かする事ありて、心せくまゝ最前は、その仔細を問ひきはめず、何の怨に某を、害せんとはなしたるぞ」ト、問はせ給へば栄園は、恐る〳〵顔をあげ、「只今聞召されたる、三筋町の夕汗は、この尼が事にてあり。剝三郎に誘出され、六條を駈落し、丹波の國にいさゝかなる、知邊ありしに身を寄せて、私をば密なる、所に隱し又元の、僧となつて愚しい、姥嗅をたらし込み、道に背きし金を得て、身のまはりを取整ひ、京へ出でしは田貫が、中上げしに違なし。思ひがけなく富徽様の、御心に叶ひて出世。私も後より上り、太秦邊に圍れ女と、なりて居たるは知る者なし。仰ありし桂川の、御下館に事ありし、その夜半過太秦の、隱家へ田貫が、顔色かへて立歸り、今宵は豫ての企の、いかにして漏れたりけん、光氏に恐しき、目を見せられしと物語。その次の年春の すゑ、夕暮方に田貫が、弟子の馬刀を誘ひて、私の住家へ參り、光氏最前大非の館へ、來りし由を確に聞けり、しかぐ〳〵なしてと何やらん、馬刀と暫く密談し、曉頃には歸らんと、袈裟も衣も預けおき、暮るゝを待ちて立出でしが、夜は明果てても音信なし。兎角する間にその日

にかきくれて、「打捨てられし其時は、仇敵より憎かりしが、此子が次第に物ごころ、ついて私の父樣は、何所に御座ると問はるゝに、つけつゝ昔の腹立も、忘れてどうぞ心立、直つて尋ねてござれかしと、心に思へど未練らしく、口へは出した事もなし。夫なら彼方でもゆかりが戀しく、それゆゑ惡念發起の御最期。その心がまそつと早く、ついたらたとへ元の樣に、夫婦にならずと折節の、訪ひおとづれして暮したら、此子の便にならうもの、果敢ない事を」トむせかへれば、ゆかりもしく〴〵打泣きて、「父樣は遠くにおいで、おとなしうして居ると、おしつけ呼んで逢はせてやると、なぜおだましなされた」ト、母に取つき押動かし、不圖光氏が顏を見て、涙を隱し手をつかへ、「左樣ならちひさい時、私は父に逢ひまして」ト、しとやかに問ひければ、「ヲヽサ覺えて居はせまいが、大井へ來た立派な僧、子の愛憐に惡念發起、さすればそちは孝行者、名雙寺へ墓をば己が、其時建てておいた程に、參つて念佛申してやれ。千部萬部の經よりも、彼はさぞかし喜ばう」ト、慈愛の言葉聞分けて、歎の中に喜ぶゆかり。磯菜もあはれと打見やり、「名を聞くだにもはじめてなれど、妾が爲にも正しき叔父、父の菩提ともろともに、弔ひ給はれ」ト權花尼を、打頼み給ふ折、障子の外にて、「恐れながら、此所開け給へ」トいふ者あり。誰にかあらんと菫野は、つと立ち障子おし開けば、かの柒園が小腕を、後に捻上げ搦め

る」ト、袖もて顔を打覆ふ。「ウヽあらまし聞きしに違なし、名雙寺の前の住職、田貫といひしが即ち、その剣三郎がなれる果、磯菜が父の前齋が、弟にして陸奥生、今より五年ばかり前、切腹して此世を逝れり。ヲヽ鷲はもつとも〳〵、彼おん身を捨てて後、丹波の國に暫く隱れ、又元の僧となり、田貫と名を改め、再び都に立歸り、この光氏に恨ある、人に頼まれさま〳〵と、手段を運らし法を修し、我をおびやかさんずと、桂川の下館へ、赴きし其時は、徒黨の人數を集めしかど、その陰謀を早く悟り、南蠻の火術にて、彼を却つて驚かせし。それより心臆したる、有様なりしが守袋の、切よりゆかりをわが子と知り、終に惡念發起なし、大井の里の朝霧が、住居に某宿りし時、馬刀といへる弟子を殺し、しか〴〵言ひて腹切つたり。其時の彼が懺悔に、六條の遊女に、馴染を重ねとばかり聞え、流石面目なかりしか、連退きたりとは言はざりし。我も用なき事なれば、遊女の名をも田貫が、俗なりし其時の、姓名をも終に問はず、今聞きたるが初なり。これゆかりそちが父は惡人ながら、善にかへりて潔く、命を捨てしがあはれさに、せめては父の死顔なりと、見せて遣らうとそちを千鳥が抱いて出たれどたわいなく、眠つて居る故手を持添へ、拜ませてやつた時は、朝霧はほろ〳〵泣く、己も悲しう見て居た」ト、猶も詳しく彼がいまはに、物語りし事どもを、聞え給へば菫野は、そゞろ涙

り、「花生釋の田貫。この法師は私の、寺にもと住職いたし、すなはち墓も山にあり、何の故に磯菜様の、御父上に此僧を」「されば夫には仔細あり」ト、言ひつゝ此所へと菫野を、光氏は近く呼び、「そのゆかりを擧けしおん身の、夫の名をいまだ知らず、詳しく語れ」ト、思ひもかけぬ、仰に菫野顔打赧め、「ゆかりの父の名字は奥墨、名は剝三郎と申す者、父宰左衛門へ申込み、婚禮致した其時は、浪人者といはれしを、眞の事と思ひの外、元は何とかいひし僧、身を持崩し墮落の還俗、實はかうとの物語、よしない人に連添ひしと、思へど最早居馴染し、その上なればせん方なく、是も縁ぞと諦めて、うか〳〵暮して居りましたが、一年ばかりは酒をも飲まれず、身を愼みて學問を、申立に奉公すると、あちこち口を聞合せ、目見などにも出られしが、不圖又好な酒に亂れ、三筋町の茂しほ屋の、夕汗といふ遊女に馴み、意見するほど猶募り、呆れはてて宮内の、家へ私が歸るのを、待たれるもよく知りながら、因果と此子が腹にあり、泣く泣く其所で生落した、その程もなく剝三郎は、家出して行方知れず、茂しほ屋でも夕汗が、驅落したとむづかしう、いうて度々來たれども、相手に取るべき剝三郎が、居らねばせん方ないかして、彼方の騒はそれぎり鎭り、私は木屋町へ、歸りし後の事どもは、かね〴〵知召す通り。子までなしたる夫に飽かれし、御物語致すのは、恥かしけれど仰なれば、是非なく聞え侍

り、はるか彼方に扣へたる、湫園を打招き、「御手水をまゐらすべき、女中をも連れられず、お供をして」ト指示し、又磯菜に打向ひ、佛の利益の事なんど、物語するその中に、厠の方にて何やらん、物音のなしければ、心得難く差覗けど、一間隔てしその先の、板緣長くて樣子は知れず。菫野もこれを聞きつけ、打驚いて立上ると、等しく光氏入來り、障子引たて座に著けば、槿花菫野言葉を揃へ、「今彼所にて物音せしは、何事かは」ト尋ぬれば、「イヤ其事はまづ後にて、ゆる〳〵と語るべし。それよりはまづ磯菜に、密に問ふべき事のあり、そも〳〵今日の法筵は、何の故に執行ふと、いふ事を我にも告げねど、あらかじめ推測るに、おん身の父石卷前齋、歿したる年月を、この光氏は知らざれど、その年忌に當りたる、故にてあらん此席には、憚るべき者を置かず、つゝまず語り聞かされよ」トありければ磯菜の方、涙をうかめ手をつかへ、「仰の如くに侍るなり。父の失せさせ給ひし年月、母の阿古木が存生の、その中に聞置きて、十七回忌に當りし時、願出でんと心には、思ひながらに折もなく、打過ぎたる申譯、今年は年忌といふにもあらねど、明日が卽ち命日ゆゑ、追善供養のいとなみも、皆御光によりての結構、世にありがたき事なりと、父も喜び侍らん」ト、目を押拭へば光氏點き、「ヲヽさもあらんさもあらん。その序に此者をも、弔うて遣られよ」ト、一片の紙取出し、渡し給ふを槿花尼うけ取

様を、聲美きものに習はせて、それを樂屋に人知れず、廻しおき唄はせ給ひたりしかば、一入に華やかにて、琴琵琶笛にうちあはする。舞振のいと興あり。されば衣裳も蝶鳥の、模様を染めし常の小袖の、上著の袖を脱ぎかくれば、下は實の蝶鳥の、羽がひの如く仕なしたり。人々飽かず見る中に、日も西山に傾きければ、舞も終り讀經も、日暮れて後まで暫しの間、打休まんと法筵を、ひとまづ退きそれ〳〵の、設の席に歸りて後、磯菜の前に舞童、八人を呼出し、蝶には露の玉の櫛、鳥には塒の花の簪、その取合をかしきを、皆々に賜はりつゝ、雲井之丞には奉る、物もなきとて打合はねど、女の衣服をまゐらせなどし、さて紫への返には、昨日は思はぬ風に誘はれ、御園の花に遊びたる、わが宿の鶯の、羨ましかりしなど、くさ〴〵の事書きたる末に、

　胡蝶にも誘はれなまし垣なくば

八重山吹の、とばかり記し、渡し給へばさあらばと、皆打連れて立上り、舞童にも暇を賜はり、歸りけるが光氏の、差圖によりて菫野は、ゆかりと共に殘り居るを、頓て光氏呼出し、此方へ來よと奧深く、誘ひ給へば靜なる、一間の中に磯菜の方と、槿花尼とたゞ二人、物語して居給ひぬ。その末座に菫野親子を、居らしめて光氏は、手を淨めんと縁を廻り、立行く様を槿花見遣

の櫻、少し打散り山吹の、枝もゆらめきほろ〳〵と、落つる露さへ美しく、頓て童は縁に上り、花どもを奉れば、槿花の弟子にて今日の事、よろづあづかる栄園と、いふ尼が取次ぎて、瓶に水をさし加へ、佛前へこそなほしけれ。この舟に雲井之丞氏仲も乘來り、磯菜の方の前に行き、「御法莚のそのはじめに、空晴れ風も靜にて、喜ばしき」など聞えつゝ、紫よりの文取出し、渡せば磯菜押いたゞき、披き見給ふその奥に、

花の蝶秋まつむしや疎く見る

紅葉の返なりけりと、微笑みながら眺れば、昨日彼方へ行きたる腰元、この文をさし覗き、「實に春の景色の好さは、言けなしやうもなし」ト、花の盛に我を折りつゝ、密に聞上げにけり。此時に奏するは、迦陵頻といふ樂なり。調の靜なる中は、鶯の麗かなる、音色に通ひ調の急に、なりはつる程池の水鳥、そこはかとなく囀り渡るに、おのづから打合ひて、面白き事かぎりなし。かの紫の園の胡蝶も、山吹の籬の下に、咲翻れたる花の陰より、飛交ひつゝ舞出でぬ、これ花をもて來し童なり。彼方の館を出立つ時、光氏は俄に舞に、心得たるをと宣ひしが、紫の上の館には、豫てよりその用意、ありしとおぼしく、全くの舞樂にあらず、新につくりし今

されば光氏が方に昨夜より、遊びあかせし公達殿ばら、遙に此聲を聞き、何の法事か知らねども、いと尊げにて哀なり、御供に召連れられ、拜ませ給へと言ふもあり、又は今日は去り難き、用事ありとて歸るもあり。今日紫の御志にて、佛に花を奉らんと、その使の女童、をかしきをえらせ給ふを、光氏は打見やり、「それこそはいと宜からめ、とてものことに舞まふ事を、心得たるに言付けて、法樂を舞はせ給へ。昨夕呼びたる樂人をば、はや先へ遣りおきたり。此頃ゆかりが姫の相手に、來て居るこそ幸ひなれ、菫野に後見させ、何の用には立たずとも、その中へ打交ぜて、おこし給へ」ト言置きて、秋の館へ午の時、ばかりに渡り給ひければ、かの公達若殿ばら、あとに續いて彼所に赴き、座に著きて見渡すに、まん中に權花禪尼、その外もうら若き、尼どもありて美しき、有樣ながらなまめかず、佛の莊嚴經の飾、その法莚の嚴重さ、目を驚かしこれ全く、光氏君の御光に、よりてならんと息を呑み、思はず頭を下げにけり。かかる折から紫より、花奉る童八人、蝶と鳥と四人づつ、模樣を分けし振の袖、姿を異に調へさせ、鳥の方には白銀の、花瓶に櫻を插し、蝶は黄金の瓶に山吹、何所にもある花ながら、その取合面白く、例の舟にて山際より、此方の岸に漕著けて、手に手に花を捧げつゝ、いと麗かに空晴れし、霞の間より立出でて、篳篥の響に合せ、靜にお前へ練來るに、風うち吹きて瓶

召に應じて皆參り、折にあひたる雙調に、吹立つれば光氏は、琴の調を花やかに、搔立つるが此方まで、仄に聞えてかの磯菜が、側仕の女ども、心あるは感に堪へ、空の色も物の音も、春のしらべ響には、まことに秋も及ばずと、今こそ思ひ知りしなるべし。その中に夜も更けければ、お暇賜はり女どもは、件の舟にて歸りけり。

此所等邊に住居すれば、何事も辨へ知らぬ、賤男さへも此館の、門の前に隙もなき、乘物馬の立場に佇み、管絃亂舞のある時は、小首を傾け耳を欹て、美々しき御殿に面白き、遊をなして暮してこそ、まことに生けるかひはあれと、思はず打笑む者多かり。今宵磯菜も物隔てて、響を聞きたるその處へ、腰元どもが立歸り、斯樣々々と物語らば、今は足らざる事もなき、身にてあれど羨ましと、心の中には思ひしなるべし。

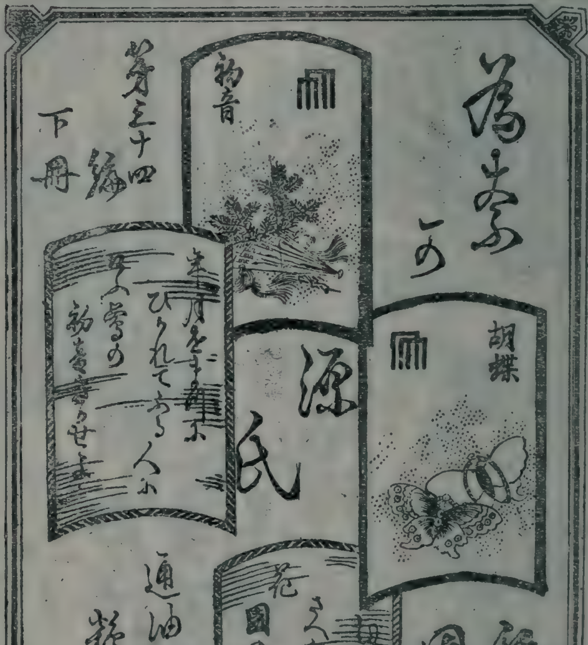
そもそも此頃磯菜の方、こゝの館へ來りしは、全く遊山のみにもあらず、僧を請じ經を讀ませ、佛を供養し奉らん、願ありて其事を、室町御所に聞上げ、七日の暇を乞ひたるなり。光氏もその由を聞き、さあらばわが建立せし、名雙寺の槿花尼を、招きよせ給ふべし、名僧智識を請ぜんより、女どちは相互に、心安くて宜からんと、已に用意も整ひければ、かの寺へ言遣り給ひ、槿花尼は弟子數多、引隨へて入來り、讀經のはじまりしは、前段の次の日なり。

方へ漕廻る、その舟の唐めきたる、のみにもあらず梶取棹さす、童は皆びんづら結ひ、衣服までも唐土めかせて、さる大きなる池の中に、さし出でたれば眞に知らぬ、國に來たらん心地して、あはれにも面白く、女どもは皆思ふ。中島の入江なる、岩陰に差寄せて、見れば石の組方も、唐畫にかきたる樣に思はれ、此方彼方霞みあひ、梢は錦を引渡し、紫の住み給ふ、方ははろ〴〵見遣られて、色をましたる柳の絲、枝を垂たる桃の花、えもいれぬ匂を散し、外は盛の過ぎたる櫻も、今眞盛に微笑みて、廊を繞る藤の色も、濃かに開けゆき、ましてや淸き池水に、影を映しゝ山吹は、岸より飜れて黄金を散す。水鳥どもの番を離れず、群れつゝ遊び細き枝など、くひてはぱつと飛交ひ、波の綾の紋がらに、五色の絲にて鴛鴦は、縫ひたる如く小袖の模樣に、つけまほしき風情したり。實に斧の柄の朽つるも知らず、わが行く方も歸らん家も、忘れぬべうぞ思はれける。かくて此舟艀づくりの、座敷の下にさし寄せられ、皆々上りて打見るに、丸木の柱萱の軒、田舍めきたる造り樣、奥床しきに紫の、側仕の若き女、われ劣らじと衣裳を飾り、いと嬌かしき其姿、柳に花をこき交ぜたる、錦に劣らず見え渡る。此女ども磯菜の方の、腰元を座敷に迎へ、夜に入るまでさま〴〵もてなし、諸共に遊びけるが、光氏の方にも今宵は、例の正倘はじめ、年若き者を呼集め、亂舞管絃の催あり、それ〴〵の樂の師も、

三十四編　下

彌生廿日あまりのころほひ、春の館のその景色、櫻は更なり花のいろ〳〵、數を盡して咲き匂ひ、はや山里には聞ふるしゝ、鳥の聲さへ珍らしう、見る者聞くもの面白きに、まだうら若き腰元の、心はいとゞ浮立ちて、泉水の舟に棹さし、山の木立中島の、わたりの苔さへ青々と、色まさりしを見廻るめり。この舟は唐土の、形を摸して造らせられ、さる頃下させ給ひしなり。さて秋の館に、此程より磯菜の方は、逗留しおはしましたりければ、春まつ園へと去年の秋、いひこし給ひしその返、今こそなさめと紫は、心に思ひ光氏も、この盛を磯菜に見せんの、心はあれども義植の、今は寵愛厚ければ、輕々しくわが住む方へ、呼寄せて遊ばせんも、憚あればまづ磯菜が、腰元女に盛の樣を、見せなば歸りてかう〳〵と、物語らんは必定せり、しかして床しがらせんと、舟にて迎をやり給ふ。そも〳〵此所の泉水は、いと廣くして秋の館と、全く隔てしやうには見ゆれど、山の陰に水門ありて、夫れより彼方の池までも、通ふやうに仕置きしかば、それより遣し給ふなり。頓て磯菜の腰元を、取乘せてかの山のさきより、此方の




初音
胡蝶
源氏
第三十四編
下冊
種彦作
國貞画
通油町
鶴屋板

まざまの遊ありて、光氏より年のたまもの、それ〳〵に贈り給ふ。物數ならぬ下部さへ、此館へ參るには、はれがましうて身のほど〳〵の、心遣をなすにましてや、若やかなる公達は、常の年より綺羅を飾り、花の香さそふ夕風の、長閑に吹きて御前の、梅もやう〳〵紐解きて、物の調も面白き、折にこそとて光氏に、琴とりいでて勸むれど、柱の立て樣も忘れしとて、明石姫に彈かせつゝ、時々聲を添へ給ふが、なほ懷しうめでたく聞ゆ。彼方の館の高樓に、朝霧は耳をすまし、聞とれて居る心の中を、譬へていはゞ極樂に、生るゝにも種々あり、蓮の中に年を經る者、三ツ足らざる事のあり、一ツには佛を見ず、二ツには說法を聞かず、三ツには佛を供養せず、この蓮の中の世界に、その身はありてまだ花の、開けざらん心地なるべし。

初音の卷をはり

づる、折から紀の紅を、去年賜はりし衣のお禮と、いつもの早百合が連來る。今日は眉毛は引かねども、柳に蹴鞠の模様を著し、その姿のをかしげなるに、紫もやう〳〵に、打笑ひなどし給ひて、「女の腰の細やかなに、譬へし柳が其方には、よく似合うて愛らしい。著なし給へる人柄に、よるといふに違はない」ト、聞え給ふを紅は、嬲らるゝとはさら〳〵知らず、「お上でさへその樣に、おつしやるものをこの早百合が、其方の小袖は柳より、立臼にする松の木の、模樣をつけるが相應ぢや、しかし蹴鞠は頰べたの、高いによく似てまんざら緣の、ないでもないと憎い口、お叱りなされて下されませ」ト、打解け頼み聞ゆる樣、あはれに見ゆれば紫は、華やかなる帶取出させ、「それは早百合が心得違ひ、灸でもすゑて懲してとらさう。その光もなく黑い帶を、捨ててこれを締めたがよい」ト、投やり給へば打笑ひ、「醍醐のお寺へ參つた時、阿闍利樣とかいふお方が、此樣に光る袈裟掛けて、御座つたを羨ましう、思ひました」ト嬉しげに、押戴いてすべり出でぬ。

今日は年始の客あるに、打紛らして元日の、夜泊したる面目なさを、光氏は隱しけり。昨日一日室町に、詰めたる者は殘りなく、皆此館へ參り給ふ。四郎正倘五郎晴命、そのほか數へも盡し難し。まづ新年の盃を、法の如くに取交しゝ、其後は打くつろぎ、雀小弓蹴鞠茶の湯、さ

に、かはりてもてなし參らする。その中に夜も更ければ、新しき年の初に、巽の館の騒がれも、厭はざるにはあらねども、今宵は此所に泊り給ひぬ。果して此夜紫の、傅までもお歸の、なきを恨みつ御おぼえ、外に異なる朝霧を、妬しと思ふ者多かり。まだ曙に光氏は、起別れ給ふにぞ、朝霧もいそがはしく、姿つくろひ廊下まで、御送に出でたるが、かく紫の妬心、はしたなきまであらんとは、わが打あがりし心にくらべ、思ひがけねば此所とても、同じ館の中にして、お忍び歩きといふにもあらず、何の故にか斯う夜深く、歸らせ給ふと思ふより、一入名殘の惜まれて、あはれに彳み居たりけり。

光氏はわが住む方へ、立戻りしが紫の、さぞ待わびてありつらんと、心の中に推量られ、「昨夜はあやしき假寢し、思はずも夜を明したり。いと若々しく打倒れ、前後も知らず眠りしを、など此方より人をおこし、搖覺しては給はらぬ」ト、機嫌をとるもをかしと見ゆ。紫は顏を背け、「村荻ところへお迎の、人をあぐれば花鄕の、方へといふ故花鄕へ、遣しますれば玉葛の、住居へお出で又それで、問はせますれば日の暮れぬ、うちにお歸りなされたと、承つて夫からは、驚かしまゐらすも、憚のある所ゆゑ、たゞ夜どほしにお待ち申し、皆も休まず居りました」ト、ばかりに物もいはざれば、煩はしくて夜著引被ぎ、空寐をしつゝ日の高く、あがりて後に起出

朝霧が居間に近き、南うけたる廊下の戸、押あくるより帳臺の、追風さつと嬌かしく、吹匂はして方々の、住む方よりも又殊に、氣高く思し入りたまふに、朝霧は其所に見えず、東京錦の縁とりたる、事々しき褥の前に、をかしげなる琴うち置き、古き形や摸しけん、よしある火桶に炷物を、くゆらしょが衣桁に懸けし、小袖にしみし懸香の、香にまがへるもいと艶なり。何所へか行きけんと、見まはし給ふに書棚の上なる、硯のあたり賑しく、雙紙繪卷を取散し、手習の反古ども、ありしをとりて見給ふに、世の人の筆にまかせし、戯などとは事かはり、言葉のつゞき賤しからず、恐く文字なるさへ、わが才を現さず、見るに見安く書すさび、小まつの返を珍らしと、見たりと覺しくあはれなる、ふる事どもを書交ぜて、

めづらしや古巣を訪ひに人來鳥

光氏は打微笑み、筆を執つてさしぬらし、その傍へ何やらん、書かんとする折朝霧は、しとやかに立出でて、まづあら玉の壽を、恐れ多げに聞上げ、身をへりくだり敬ふ樣も、人に異りて位備はり、かの摺箔の輝くまで、粧はねどもおのづから、淸らを盡し鮮かなる、髮のさらりと肩のあたりへ、かゝりしもいとなまめかし。はや火を點す頃なれば、光氏は袴をとり、うち解姿が恥かしき、心地なすのを見てとりて、朝霧も衣服をあらため、屠蘇白散もあたゝめ酒

仕馴れざる館ぞと、思ひしよりはをかしく仕なし、手道具類も細なるは、まだ揃はねどそれかれの、取合美事に飾り、物清げに構へたり。玉葛もいと麗しく、著なす衣紋は六重七重、八重山吹の縫模様、裾を流るゝ玉川に、しなへる花の水鏡、曇ると見ゆる處なく、いと鮮かにきらきらし。年月田舎に佗住せし、その物おもひの所爲にや、髪の少し薄らぎしも、なほ清げなる樣したり。光氏は靜に居寄り、「はじめて逢ひしは去年ながら、はや年かはれば久しく側に、おきつる樣に思はれて、一入に心安く、本意叶ひてこの春ほど、目出たき事は又あらじ。おん身も物ごと遠慮せず、わが住む方へもおはせよかし。まだいとけなき琴習ふ、姫も彼所にあんなれば、諸共に聞ならし、心おきなく遊び給へ。人の姿のよしあしを、目に角立てて誹りあひ、又は言葉の言あやまち、耳に止めて笑ひなど、すべて左樣のはしたなき、心を持ちたる人はなき、所にこそ」ト宣へば、「世にありがたき御仰、たゞ何事も宣はん、まゝに」トばかり玉葛は、言葉少なに答へながら、かく光氏がいと親しく、語ひ給へばたまふ程、親にもあらざるその人の、何故にか此樣に、あつかひ給ふといと怪しく、夢のやうにて心の隔は、いよ〳〵止まず顔と顔、うち對ふのもいと苦しく、さし俯きて居るのもをかし。「さあらば折もあらんには、迎の人をおこさん」ト、光氏は立上り、暮方になる程に、心急がれ艮の、館へそれより渡り給ふ。

れたのが賤機様と、心の中に思ひながら、仰の事はいち〳〵に、畏つて侍れども、御離縁のないその中には、申し出さん樣もなし、承れば奥様には、姫君もおはすよし、上つ方でもしたじたでも、繼しき中の美しう、見ゆるのは表面ばかり、底には針を持つのがならひ、恐れながら姫上を、御大切と思召さば、かりそめにも仇々しき、御心をお愼み、左樣なさると奥様の、お心もいつとなく、和ぎ給ふは知れた事と、御意見を申したら、お腹をもお立ちなされず、その文持つてすご〳〵と、お歸りなされたその後に、雲井の君をお訪ひなされた、お歸りがけぢやと正佾樣が、私をお呼びなされ、其方が今傅き居る、玉葛を兄光氏の、娘といふは僞ならん、物の蔭より此ごろ姿を、ちらりと見たがまだ島田に、結ひては居れど二十の上、あれまで行方を尋ねもせず、捨てて置くべきいはれなし、我添馴れし妻を失ひ、獨身なるこそ幸ひなれ、仲立せよとこれは又、お主筋だけ嚴しい御意。深い樣子は存じませぬが、實のお子ぢやとおつしやりますと、人の來たのを幸ひに、逃退いてから其後は、四郎の君には隨分お目に、かゝらぬやうに致します」ト、語れば光氏打笑ひ、「どうで何所へか緣付けて、やらねばならぬ玉葛なり、左程に心を痛めずと、文を持て來し者あらば、受取り置きて我に見せよ、品によりては返をさせ、又眞實にこゝろざし、深きがあらば送りもせん」ト、かの建擴げし方へ通るに、まだ

ひながら、お目通へ出ましたれば、彼方ではよう御存じて、此所へ〳〵とお側へ召され、光氏君の御娘を、迎取られて傅の、女頭は其方のよし、何卒して某が、婦妻に下し給はるやう、申しなしてくれまいか、まづその前に密にこれをと、玉葛樣への御文を、お出しなされてわりないお頼。私は喫驚して、あなた樣の奧樣は、お腹こそは異りますれ、紫樣の御姉上、その樣なお仲立が、出來ますものかと申したら、さればさわが妻賤機は、母の梓の氣性をうけつぎ、その心かたましく、悋氣の深きが年々募り、せん方なくて近きに離別と、心の中に定めたり、妬めば去るの故事あれば、道に背きし事にもあらず、されども此所に難儀なるは、紫の上の父たる、國助の憎みを恐れ、しかする時はわが後妻に、娘を送りこさん者、都の中にはあるべからず、光氏君の御息女なら、流石の遊佐も口を閉ぢ、一言もいふことではないと、おつしやるからあなたはまづ、玉葛さまの御事を、どれから御聞き遊ばしたと、問ひましたれば汜廉樣が、己が知行は大和の國、初瀬寺の近きわたり、奧賤機が久しい願で、去年參詣した時の、坊が其方と同じ事、襖越に玉葛どのと、そちの話を洩れ聞いて、歸りし後にかう〳〵と、その事我に物語、それより後に人々の、噂するに耳をとめ、さてこそ詳しく知つたるなれと、おつしやつたので考へれば、その夜さりかの觀音へ、この國司の奧方ぢやと、嚴しう人を拂ひ、參ら

行儀いと正しく、化粧せざるがなほ娟妍に、見ゆれど果敢なき事なんど、宣ひかくべき人ならねば、むかし今の物語、たゞ何となく聞え給ひ、「我は日に〳〵暇なし、されば心に思ひながら、久しく訪はぬ時もあり、これ等閑に捨置くならねば、必ず恨み給ふまじ。命のあらんそのかぎりは、世を安く送らせん」ト、眞實に語ひ給ひ、さればとて座を立ち給ふ。今この君は室町の、御後見にて上もなき、身におはすれどもかりそめにも、心たかぶり我意に募り、ほこりかなる事はなく、その人の程々に、心安く打語ひ、遍く惠みたまふ御蔭に、年月を送るもの、更に數へも盡し難し。それより乾の館へ行けば、雲井之丞は室町より、いまだ歸らず花郷のみ、夕方なれど光氏が、送りし小袖をそのまゝにて、今は化粧もうす縹、にほひやかには粧はず、額に波は寄せねども、海松の綠の黒髮の、盛はいたく過ぎにけり。今は強ちちかやかに、語ひ抔はし給はねど、その睦しさは昔に變らず、去年ありし事今日の事、それかれの物語、聞え給ひて其後に、かの建添へし玉葛が、住居へ行かんと廊下の戸口に、たゞずみ巾を覗へば、山吹は早くも知り、御迎に立出でて、送り來りし花郷が、歸るを持ちてあら玉の、ことぶきをまづそこそこに、聞上げしが折よくも、邊に人のなかりしかば、近く寄りつゝ聲を潛め、「去年の暮、一色多京汜廉樣がおいでなされ、山吹に逢はうと仰、一度もお目にかゝらぬ御方、不思議な事と思

村荻が、衣の模樣も萩芒、その七草も春なれば、菘すゞしろすゞむしと、竝べていはん散し縫、去年贈りしを著て居れり。序ながら空衣の、尼衣のすむ局をも、さし覗きて見給ふに、わが身は狹き所にかゞまり、佛壇ばかり大きく取なし、蓬萊には引かへて、佛經をあはれに飾り、閼伽桶花皿とり散しゝも、心ありげの有樣にて、念佛讀經のその外には、梔色の無地小袖、肌著の袖の裏のみに、むかし殘りし紅の、ほの見えたるが懷しく、不圖光氏は中川の、螢の夜さり逢坂の、紅葉の朝思ひ出で、「某嵯峨へ移る時、おん身の家へ方違、宿りし時に村荻と、思ひし故に戲言、言ひかけしもはや二十年ばかりの、むかし談となりしも夢の間、今かく近う住みつるも、これかりそめの緣にもあらず。いかなる故に尼となり、かく佛には仕へ給ふ。左程に思ひ切らずとも、又せん方もあるべきに」ト、尋ね給へば空衣は、淚ぐみたる顏をあげ、「此樣にあさましい、姿をお目にかくるのが、娘といつはり御心を、暫しが間も苦しめし、その報にて侍るなり。若きほどは前後の、辨もなき戲れより、川次郞に帶を盜まれ、富徽樣へ其事を、申上げしが御落度と、なりて都を御開きと、聞いたる時のその苦しさ。君のみならず夫にまで、恥を與へし身のいたづら、年をつむほど思ひ知り、佛に懺悔するより外、今はしやうも侍らず」ト、元日をも打忘れ、聲立て實に打泣きぬ。いにしへよりも恥かしげさ、まさりて

りかはり、人々此所へ參りこみ、物騷しかりけるが、夕つ方やう〳〵に、事鎭りて三所の、館をひとまづ廻らんと、衣を著更へて引つくろひ、立出でんとし給ふ處へ、姫君へとて朝霧より、割子鬚籠五葉の松の、つくり枝の程よき所へ、絲にて造りし鶯の、美しきをとまらせたるを、お使の千鳥が持て來、文もろともに差出すを、光氏とりて見給ふに、

鶯の初音聞かせよ小松原

と文の奧に書きてあり。打吟じて明石姫に、渡しながらつれ〴〵と、打まもりて吐息をつき、旦暮見てすら顏色の、今日はよき今日は惡しと、心もとなく思へるに、ましてや年月隔たりて、いかに戀しと思ふらん、去年よりしてはとりわけて、間近き所に住みぬれど、對面さすべき折もなし、あはれの事やと心に思ひ、「この返をば今直に、みづから聞え給ふべし。他とは違ひ初音を惜み、給ふ方にもあらず」とて、硯取寄せとかくまかなひ、書かせ給へば姫君は、いと美しげに筆とり上げ、臆しもやらず、

巢立せし松は忘れず鶯の

幼心にまかせし文章、くだ〳〵しくとも其儘に、やるこそ宜けれと光氏は、この返を千鳥に渡し、今年の惠方に當りし故か、まづ西南へわたり行くに、秋をむねとの館には、名も因ある

ら、のびらかに見ゆるかし。ましていはんや玉を敷ける、この六條の新館、庭よりはじめて見どころ多く、磨き立てたるその有樣、筆を執りても記しがたく、口に言はんに詞足らず。その中にもかの春を、むねと造りし巽のおんまへは、とりわけて淸らをつくし、軒端に近き梅の香も、空炷の匂にまがひ、極樂淨土もかくやと覺ゆ。女どもも若やかに、すぐれたるを明石姫の、傳にえらせ給ひ、相手の童も多ければ、此所彼所に群居つゝ、手鞠つくあり羽子つくあり。かくきらびやかなる館ながら、室町御所とは事かはり、打解けてやすらかに、住みなし給へば仕ふる人も、心おきなく遊び戲れ、今年の元日は、子の日にてありければ、庭へおりたち小松を引き、轉び倒れて打笑ひ、屠蘇酒過してよろめけば、蓬萊食摘引寄せて、柑子を剝き榧を割り、火に打くべて食ひなどし、我を忘れて高聲に、言ひたいまゝをいひ散すを、不圖聞付けて光氏は、障子の隙より差覗き、「千歲の蔭を映すてふ、鏡餠大内の、例にてあれどいかさま武家の、齒固の祝には、堅きに勝栗それこそ宜からめ。何事ありてかよろ昆布、面白さうに笑ふのが、いと羨まし」ト宣へば、皆々はつと打驚き、懷手引直し、俄に行儀つくるやら、袖にて口を押拭ひ、逃行くはづみに三方を、蹈覆すやらわけもなし。

今日は未明に室町へ、光氏は出仕を遂げ、歸りて後も新年の、壽を述べんとて、立かはりい

のむねわり三荘太夫。彼が父は糺の門守、その親父めが若い時、語りしならん淨瑠璃本、今はせん方なき物ゆゑ、返しやりし」ト言ひければ、「それは併し珍らしい、書寫して明石にも、お見せなされればよかつたもの。はかない雙紙も昔のは、あはれな事のいと多し。彼方此方の持傳へも、今は大方むしばみて、見分けがたし」ト紫が、いふを光氏おし止め、「いや〳〵女は何事にも、あまりに深く立入りて、それに染るは却つて惡し。幼き時よりくさ〴〵の、雙紙を見するは益無き事。いかにも心は正しく持ち、さればとても角立たず、すなほに育てばさまでに物を、知るにも女は及ばぬもの。さはいへあまり文盲にて、薄雪や錦木の、雙紙を手本にかいたる文は、それその樣になまめかし」ト、宣へば紫とり上げ、「紅は愚しい、生と日外おんはなし、それにしては優しいこと。このお返を」ト勸められ、心安げに光氏筆取り、

まないたのきぬたや鴨のから衣。

「門守が草鞋を作る、藁砧を聞習ひ、口癖になりたるも、道理なり」ト笑ひたまふ。

作者申す　乙女の卷と玉葛をうちまぜて作りしも、こゝに終り、是より初音の卷に移る。

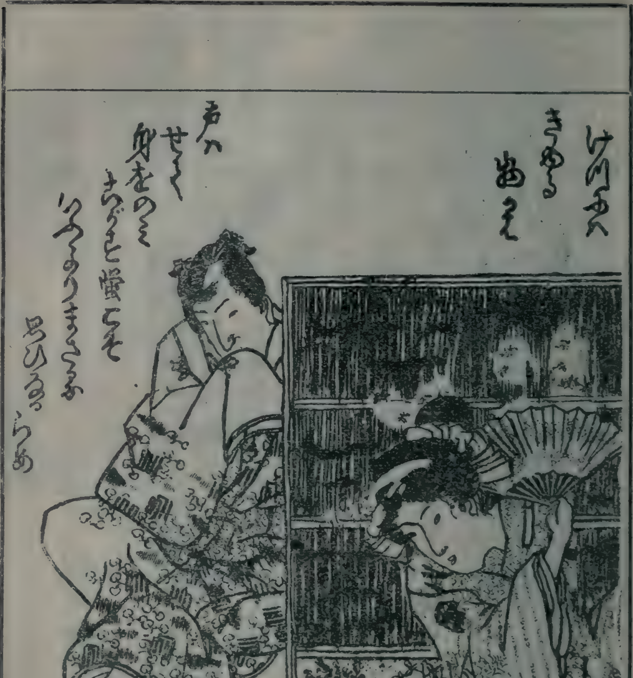
年たちかへる空の景色、くもりがちなる去年とは變り、麗かに晴渡れば、賤が垣根のうちだにも、雪間の草の若やかに、色づきそめて霞みゆく、山に木の芽も打けぶり、人の心もおのづか

三十四編　上

この衣配の使には、小辨犬吉そのほかも、みな側廻りの女にて、とり〴〵返を持て歸る。そのなかに言の葉が、打笑ひつゝ光氏へ、密に出しゝ返事あり、うち點きて押開き、讀みては片頬に笑を含み、又繰返してにこと笑ひ、暫くうち置き給はねば、紫は訝しく、さし覗きて見給ふに、還魂紙とかいふ紙ならん、ちら〳〵塵の交りたるに、

唐衣うちおかでこれをきぬた哉

文字は鐵釘、假名は鹿角菜と、いふ海草の亂れし如く、それに似合はぬ文章は、いと嬌かしくつぢつま合はず。呆れてイみおはします、紫のその風情を、言の葉は打見やり、思ふに違ひ給ひたる、お心の中察しやり、笑を隱してすべり出でぬ。光氏はかの文を、紫の前に投やり、「いと珍らしき返なるべし。大原祭のまなびをせし、其時に紅より、若やかに裝ひて、小百合が誘ひ來りたる、かの紅が筆にてあり。五文字が足らぬと夏冬の、差別もなくて砧かな。さりし年に紅が、父より讓受けたる草紙、大事の品に侍ると、おくり越せしを何ぞと見れば、阿彌陀


玉葛


足利四郎正尚

修紫田舍源氏第三十四編序

寛政の頃、東圓といひし軍書讀、同事を竝べいふ口癖あり、譬へば、狼煙天を焦し、合圖のけぶり立登ると、一むら茂る森の裡より、馬烟うまけぶりを蹴たてていふ類なり。笑ふ人も多かりしが、うま煙では語勢弱し、音では聞えのわろきが故、又訓にいひかへす、是も一派の釋法なるべし。予この草紙に、うち咳きて、聲づくり、手道具、調度なんどいふ、添言重言は、是よりの案じなれば、物識人の若したまく、見給はんにはいとをかしと、おぼす事の多からんが、お子様方にわかり安きを、専とすればなり。さて是から面白き、ところで後は明晩とは、常連のある講釋仕、又來る春を待ち給へは、上手の作者でなければゆかぬを、お人集の前座の予が、長い物を說いだし、應仁の修羅場が濟んで、張扇の張合ぬけ、いよく眠氣が御見物に、さすも承知のうへながら、席亭の仙鶴堂、行燈をひかざれば、この三十四編目は、とりわけてをかしからぬ、初音胡蝶の讀切なり。

舌師　柳亭種彦

秋の野に、蟲づくしの散し縫、梅の折枝蝶鳥の、飛交ひしに唐様めきし、文字を鹿子に結びわけて、摺箔したる時代模樣。艶やかなる白綾に、打重ねてむら濃染の、くび帯を朝霧にと、えり出でたまへば紫は、その色品に目をとゞめ、彼は田舍の者なりと、身はへりくだりてありながら、その心はうちあがり、かりそめには賤しげなる、事をば嫌ふと豫て聞く、噂に違はずなみ〳〵の、女にあらじと是もまた、人知らずこそ思しけれ。空衣の尼にまで、梔色の小袖を見つけ、光氏みづから著んための、淺黄無垢を添へ給ひ、文かい認め何方へも、同じ日に使をたて、それ〳〵贈り給ひけり。

似合うたる濃紫、くでん鼠の今やう色、友禪ぞめの櫻さく、遠山眉の銀通し、手を盡したる縫の絲、勝れたるとはおん身の著料に、し給ふべしとて衣桁へ掛けさせ、是は模樣も愛らしき、手鞠羽子板ぶり〳〵毬杖、肩より襟は烏羽玉の、闇の黑きをほの〴〵と、曙染は明石姫。島に洲崎に立波を、染めたる色は薄縹、海松の緣にしやれ貝の、白く亂れてかうとう向、梅も櫻もその貝の、名にはあれども匂ひやか、ならぬのをばかの花郷へ。次は隙行く駒とめて、盛を見んとや山吹の、縫の小袖に曇なく、赤き肌著を取添へて、なほ水色の抱帶、その玉川の玉葛に」ト、贈るを紫見ぬやうにて、心の中に山吹の、花は美事にありながら、枝ぶりすげなく匂もなし、あの高直が華やかに、淸げなれどもにこやかならぬ、夫にこそ似たらめと、推量れども色には出さず。光氏早く色目を悟り、「この定めを聞付けなば、必ず腹立つ人ありなん。衣の色の好きは好し、惡しきは惡しと見ゆれども、人の心は姿によらず」ト、言ひつゝ又小袖を取除け、「柳に蹴鞠唐草の、裏をつけしは何事ぞ、今ほどは京見物の、田舍娘もこれをば著ず。それよ是は糺の腰元。紅にかの大原の、神事の時の練物に、來た褒美ぢやというて遣り、文をも添へて贈らん間、返事をとりて來るべし。稻舟には何をがな」ト、田面に鳴子の綱を引延へ、簑笠著たる鳥をどしを、褄上りに染めしをえり出し、「是こそ宜けれ」ト傍に除けおき、村荻には

紫は玉葛を、高直が娘と聞き、たとへば深く我君の、思しゝ女の子にもせよ、御胤にもあらざれば、急ぎ逢ふにも及ぶまじと、そのまゝに打過ぎて、年の暮にぞなりにける。

さて光氏より方々へ、春のまうけの帯小袖、贈り給ふが年々の、ならはしにてありければ、玉葛はじめその腰元に、召使ふ女まで、いよ〳〵田舎めかざる姿に、しなさんと思しければ、常の年よりなほ多かり。膽熊の紺搔は、濃き赤きなどさま〴〵に、世になき色合匂ひを染め、西陣の織殿は、我も〳〵と手を盡し、目もあやなるを工みたり。それ〳〵に縫上げて、小袖簞笥小袖櫃、數多に詰めしを言の葉小辨、その外數多の腰元共、打返し〳〵、「その下著の上にはこれ、あれにはそれがうつらん」など、とり〴〵言ふを光氏は、さし覗き見て、「色數の、多きことかなかた〴〵に、恨なき樣これを分くるは、目移りせん」ト宣へば、紫はさし寄りて、「おとりまさりは更になく、どれ〳〵も美事ながら、著給ふ人のお姿に、思ひよそへて進らせ給へ。たとへば何程美しい、模樣にもせよ其人に、似合はぬは見苦しい、ものに侍る」ト、言ひければ、光氏は打笑ひ、「知らぬ顏してまだ逢はぬ、人の姿を推測らんと、かくは宣ふものなるべし。さればおん身はこの中にて、いづれをか著給ふ」ト、言はれて紫顏背け、「それを手本に遊ばすとや、私にはどれが似合ふか、存じませぬ」ト恥らひ居る。「それなら己が見分けてやらう。名に

にわが子と言ひなしたり。さりながら此事は、人に沙汰ばしし給ひそ。雲井之丞も姉なりと、思ひ居りなば同じ館に、住みたりとてもみだりがましき、事のあるべきいはれなし。我も只管親めきて、あつかひながら實の血筋に、あらざる故に思はずも、慰みがましき事を言ひ、咎められてはほと〳〵赤面。いや慰みにはおん身を一人で、置きなばこゝらの若侍が、さま〴〵に氣をもみて、さぞ面白かるべきを、不量見にわが妻と、定めて後悔するなり」ト、笑ひ給へば紫は、面あかみておはする樣、いと若やかにてをかしげなり。

少し程經て光氏は、山吹を近く招き、「玉葛に傅きの、多くなりて乾の館は、混雜すべきと思ふにより、別に厨臺所は營みて、其所を預くる、役目は即ち、舂之助と名は知らねども、宮城の夫兩人に言付けん。彼等が父彌五六郎と、やらんよりしてまめ〳〵しく、仕へし事を玉葛が、深く喜び居る由なれば、今更國へ歸すのも、本意なし」ト宣ふにぞ、山吹は此事を、直に傳へたりければ、二人は更なり母朽葉も、喜ぶこと大方ならず、急ぎ筑紫へ使をたて、妻と夫を迎へけり。舂之助は年頃田舍に、沈みし心地もあらたまり、人の羨む御館へ、朝夕に出入りし、人を隨へ指圖して、刀さす身となりたるは、此上もなき面目と、なほも忠義に仕へしとぞ。

出してもいみ〳〵しい」ト、小聲に語りあひにけり。

光氏はわが住む方へ、立歸りて紫に、玉葛を迎へたる、由を語りてさていふやう、「さる山家にて育ちしかば、田舍めきてをかしからんと、心に侮り居たりしが、なか〳〵に都の者も、恥かしきまでしとやかにて、じんじやうなる生付、花鄕がしめやかなる、心になりしにひかれてや、」彼所の館は物淋し。彼をおきなば正倘晴命、その外若き者どもが、聞傳へてとひおとづれ、さし覗きなんどして、賑やかにこそなるべけれ。まだ言約束せぬ娘ある、家には常に浮れ人、集るが世の習ぞ」ト、言へば紫うち案じ、「さういふ事を制するが、親の役にて侍るを、人の心を浮立たせ、御慰みになさらんとは、けしからぬ思召。正倘樣晴命樣は、玉葛の叔父上なり、昔は姪を妻ともせし、事のなきにはあらざれど、今はさういふ事をば聞かず。さすれば何程玉葛が、麗しきとて戲れがましき、事を何とて宣ふべき」ト、言詰められて光氏手を打ち、「問ふには落ちず語るに落ちると、言ふ諺はこれなるべし。日外も聞えし如く、黄昏は實にわが、あはれと思ひし女ながら、夫より前に赤松高直、かれに通ひて擧けしが、かの玉葛にてわが胤ならず。それを何故館へ迎へ、傅かすると思はんが、紛失なしたる家の寶、小烏丸の在所を、確に知りしは黄昏が、命を捨ててその舟を、諫めし故にてあんなれば、その恩に酬はんため、假

かへ、「姉上のおはする事、只今まではゆめ〳〵存ぜず、數ならずとも私へ、昨日にも御物語、これあらんには最前これへ、渡らせらるゝ其時の、御迎に參らんを、今承はり驚きし」ト、仰を山吹打聞いて、心のをかしさおのづから、顏に出づるを光氏は、目まぜにて押止め、「人に深くつゝむのあまり、そちへ言ふのも忘れたり。是より隨分中よくせよ」ト、後々の事山吹へ、言付け置きて立ち給ふを、かの玉葛が腰元ども、襖障子の隙間より、差覗いてひそ〳〵聲、「光君とは子供の時より、お噂を聞いたれど、其後は浮世の事に、かまけて思ひも出さなんだが、不思議な御縁で見上げた」ト、言へば一人が引取つて、「大兒樣に居た時に、廣さも廣しこのやうな、立派なお家はあるまいと、思つて居たがこのお館を、見たれば彼方は影もない」ト、言ひかけて不圖宮城が顏、見やりて口に袖おほふ。宮城はにつこりうち笑ひ、「それは知れた事ながら、思つたよりもまた格別、物凄きまで光氏君の、娟姸におはするは、その筈の事でもあらうが、あの若君の麗しさ。どれ〳〵も御樣形の、風流やかなと研き立てた、此御殿の結構に、目移りがしてどき〳〵する。日外はせの觀音で、郡司の奥方に、玉葛樣をしたいとて、母上が一心に、拜んでおいでなされたを、山吹樣に笑はれたと、おつしやつたが此御樣子を、見上げて初めて合點がいた。ましてや信樂現太夫が、おしかけて姫君を、貰ひに來たを今更に、思ひ

ずか」ト、屏風を少し押遣られ、玉葛はたゞ只管に、恥かしければ打そばみ、顔を背けて居る有樣、麗しければ光氏嬉しく、「今少し光を見せよ、暗き方に隠るゝが、心にくし」ト宣へば、山吹心得燈をかゝげ、少し此方の方へ寄す。「まア恥かしい事を、する人や」ト少し打笑ふ、口もと目もと愛らしう、實に山吹がさりし頃、彼は母にも勝りしと、言ひつる事の違はざるを、心に思ひ光氏は、なほ親めきていと親しく、「おん身の行方を不圖失ひ、今は何所に住む事と、忘るゝ隙のなかりしが、不思議にもかく廻りあひ、さながら夢の心地して、過こし方の事どもを、思ひ出していと悲し」ト、言ひつゝ指を折數へ、「親子の中のかく年月、隔てて逢はず便だに、聞かで過ぎしは稀なる事、今はさほどに初々しく、若び給はん年にもあらず、年頃の物語、きこえなどもし給ふべきを、俯いてのみおはするは、いかなる事ぞ」ト打恨み、給へど何と言出でん、言葉もなくて顔うち赧め、「父母はいかにあはれと思ひけん、三年になりぬ脚立たずして。それは蛭子を詠みし歌、岩樟舟にあらねども、筑紫の海へ突流され、沈みし後は何事も、有るか無きかに世を送り、物もさら〳〵覺えず」ト　仄に聞ゆるその聲の、かの黄昏にいとよく似て、若びし樣もそのまゝなり。光氏は微笑みて、「その沈みしを知らずして、今まで心を痛めし」ト、言ひつゝ彼が今の答、賤しからぬをほと〳〵感じ、居給ふ所へ雲井之丞、罷出でて手をつ

ければ點き給ひ、「彼が母は心優しく、いふが儘なる生付、おん身の心によく似たれば、それゆゑ預けおくなり」ト、是よりいよ〳〵玉葛を、迎へ給ふもよほしは、頻なれども内々の、人には光氏みづからの、子といふ事を包みしかば、いづれも〳〵不思議に思ひ、「お忍び歩きといふ事の、近年なければまだ須磨へ、下られざりしそのむかしの、ふる者を何所よりか、尋出させ給ひしならん。御癖はまだ直らずや」ト、誹れる者もありしとぞ。

其頃は神無月の、するつ方とも霜降月の、はじめともいひ確なる、事は知らねど玉葛を、迎へ給ふその日になりぬ。山吹が此頃うち、それ〳〵指圖をしたりしかば、宮城をはじめ附添ふ女の、姿なども田舍びず、御迎は疾く來りしかど、態と日暮れて新館の、西の門より打通り、山吹が何事も、よく心得て導なし、まづ玉葛を花鄕に、對面させて假の部屋の、しつらへおきし一間所に、誘ふ程なくその夜直に、光氏君渡り給へり。廊下の戸口に亻みて、「此所開けよ〳〵の、お聲に山吹打驚き、走り行きて鎖を、かい放てば笑はせ給ひ、「けしからぬ是は用心、宵の約束なければと、みだりに人は入れぬ氣か。雪洞の火のいと暗し、これは又忍ぶには、どうか便が宜さゝうな」と、設の席を打過ぎて、かの玉葛が落著きたる、一間所の近くへ坐り、「屛風の陰のが玉葛ならん、親の顔は床しきものと、昔よりして言習はす、おん身はさほどに思は

葛が衣服の類は、光氏よりして贈りこし、支度大方調ひけり。

此趣を山吹より、聞上げたりければ、さらばとて光氏は、かの乾の館へ渡り、花郷を近く呼び、「我まだ若き其頃に、あはれと思ひし女ありしが、世を憂きものに思ひとり、果敢なき山に隠れたり。それに擧けし幼き人、年頃行方を尋ねしかど、更に知れる者もなく、娘ざかりは疾く過ぎて、花ならばはや散りがたに、なりしを此頃思ひもかけぬ、所よりして聞出でたり。この西の書物藏を、他へ移して館を廣くし、此所へ呼ばんと思ふなり。雲井之丞を預けし上、重ね〲に心なき、頼み事にはあんなれど、彼をも後見して給へ。賤女めきて生立ちたれば、言葉もさぞやよこなまり、聞にくき事多からん、折に觸れてよく敎へ、武家の行儀を見習はせ、主と思はず妹と思ひ、しつけてくれるが肝要ぞ。母も疾くに失せたれば、今は不便のものなり」ト、いと細やかに宣へば、花郷は打驚き、「實に左樣の御方の、おはしますとは知らざりし。姫上はたゞ御一方、お淋しう思さんと、存じあげしが夫こそは、めでたき事に侍るなれ。御文庫を餘の所へ、移し給ふまでもなく、このお館はなほ廣し、雲井の君は男御子、殊には日にましおとなしく、ならせ給ひて私どもとは、御遊びも遊ばされず、旦暮隙にていたづらに、たゞうか〲と暮すばかり。是よりは賑やかにて、嬉しき事に侍る」ト、例の通りやすらかに、答へ

ながら、「ほんに申すも恐れな」ト言ひければ、賤機は吐息をつき、「ほんに申すも恐れながら、妹二人は又と世に、たぐひ稀な仕合者。妾が連添ふ多京殿も、香壽君の御傅役、立田様との御縁もあれば、人の用ひも格別にて、何の不足はなけれども、兎角に止まぬほか心、私が年が二ツばかり、上ぢやというて己が姉、己が姉とて賤機と、名を呼び給ひし事もなし。私をもまそつと遲く、お生みなさつて下さつたら、此樣辛苦はあるまい」ト、梓の機嫌を直すべき、その言なしを幼き者に、敎へられても夫をば言はず、わが述懷のみ竝べ立つる、心よりしておのづから、遂に夫に厭かれしなるべし。これを手本に悋氣嫉妬は、愼しむべき事にこそ。山吹は光氏の、仰を受けて六條の、新館より程近き、父の家にひとまづ歸り、玉葛をも忍びやかに、その家にぞ移しける。腰元女は御迎への、其時に君よりして、參らせ給はん筈ながら、心安く使ひ給はん、人もなくては悪しかりなんと、思ふに折よく筑紫にて、都の樣子を玉葛に、見習はせんとて抱へたる、女の先年暇を乞ひ、京に歸りて住ひするを、宮城がふつと聞出し、其所へ急ぎ尋ね行き、その手筋より彼所にて、使ひ馴たる女ども、幸ひにまだ夫をも持たず、都の中の奉公なら、又願ふよしいふ者を、彼方此方よりもとめ出し、夫にてもまだ足らざるをば、女商人やうの者に、しか〴〵と賴みければ、都は廣き所にて、いとよく尋ねて連來り、玉

にこ打笑み、「來年某五十の賀を、此度新に營まれし、御殿にて内君に、祝はせて給はらんとの、仰をしか〳〵蒙りたり。さいつ年光氏君、須磨明石への御留守中、糺へ貢を怠りし、申譯に腹切らんと、なしたる折も寛仁の、御沙汰によりて命を助かり、今又老の末に至り、かくまで厚き惠に預る、己が果報も娘ゆゑ。御寵愛の人々も、多かる中にとりわけて、御思ひの勝れしかば、内君と仰がれ給ふ。結構言葉に述べがたく、春を旨と造られし、御園に植ゑし梅の薫、わが家までも匂ひ來て、面目にこそ思ふなれ」ト、語れば國茂進出で、「光氏君の御仁德は、世に隱れなくおはしながら、わが輩へは只今まで、さほどに情も懸け給はず、憚りながら父上の、御不首尾ゆゑならんかと、心の中に思ひしが、御館にて御年賀を、祝はれんとは家の譽、世の聞えといひ、此上の御喜は候ふまじ。仰の如く是まつたく、内君の御執成に、候べし」ト其他の、子供もひとしく口を揃へ、目出たきよしを述べけれど、妻の梓はしぶ〳〵に、答のみしてさまでには、喜ぶ氣色の見えざるを、氣の毒にや思ひけん、まだ九ツか十ばかりの、巻衣は手をつかへ、「祖父君樣をその樣に、光氏樣が御大切に、遊ばしますはおつしやる通り、紫樣のおいで遊ばす、夫故でござりませう。此頃は又薄雪樣、義植君の御心に、叶はせられて磯菜樣と、同じやうに御寵愛。さすれば頓て御祖母樣の、賀の御祝の其時は、室町樣で遊ばすに、

心なくうつくしげに、この物語を聞き居たまふ、その愛らしさを紫は、不圖かへりみて此姫を、生みたる母の事なれば、重くあつかひ給へるも、道理ならんと思ひかへさる。かくいふは九月の事にて、まだ朝霧が艮の、かの夏の館へは、引移らざる前の事なり。

此折に「遊佐の國助、お目見願ひ候」ト、御取次の言の葉が、申上ぐれば、「此方へ」ト、直にお前に召し給ふ。國助末座に蹲り、「まだ此御殿へ罷出でず、拜見旁御機嫌を、伺ふ」由を述べければ、光氏紫それ〳〵に、言葉をかけてさて其後、「これへ〳〵」ト光氏の、膝元へ近く呼寄せ、「汝はや當年は、四十九になれる由、紫に此頃聞けり。年賀を祝ふは誕生日に、するが昔の例なれば、來年そちの生れし日に、紫の住居へ參れ。五十の賀を珍らしく、新館にて祝はせん。その用意も言付けて、大方に整ひし」ト、聞いて國助恐入り、「世に有難き御意を受け、なかく〵に御禮を、申上ぐべき言葉もなし」ト、猶さま〴〵に浮世語、聞上げて御前を、退くより直に乘物を、飛ばせて館に立歸り、此上もなき吉事ありと、神に御酒を捧げさせ、先祖の位牌に打向ひ、披露に及びなんどすれば、妻の梓總領民部、國茂をはじめとし、先年一色多京へ嫁せし、娘の賤機折よくも、父母の機嫌を聞かんとて、館に來り居たりしかば、それが生みたる卷衣とて、まだ幼き娘をさへ、引連れて國助が、邊に居流れその仔細を、問へば國助にこ

故に人に隱し、墓は營み取らせたり。それが形見の娘の行方を、ふとした事より失ひて、いと口惜しと思ひしが、圖らずも山吹が、尋出して此頃は、近き邊に居るなれば、やがて呼取り花郷に、預置かんと思ふなり。おん身も逢ひて給はれ」ト、いとあはれげに昔の事、思ひ出でさせ給ひたる、氣色の顏に現れければ、紫も打しめり、「それは悲しい御話、さほどの事をなぜ妾に、今まで包ませ給ひし」ト、恨み給へば光氏打笑み、「世に在る人の事ならば、問はず語りをふと仕出す、事もあらうが彼は早、夕の露と消えたる身、玉葛が事の序に、語るが心に隔なき、しるしと思し給へよかし」ト、聞いて紫なほ摺寄り、「世になき人と宣へど、それならいよいよお物語り、遊ばしても宜い筈の事。たとへば賤の娘でも、君のお胤を宿せしもの、年忌月忌と墓參は、私が致すが道。君ゆゑ最期と宣へば、非業の死とでもいふ樣な、事ではないか夫なれば、いよ〳〵不便に侍るなり。玉葛とやらんをば、少しも早く迎へ給へ。母もながらへおはしなば、打そひ渡り給はんを」ト、言さし涙さしぐめば、光氏も吐息をつき、「存生にて居つたなら、大井の里の人ほどには、して据置かんを果敢なくも」ト、宣へば頭振を振り、「世におはしても夕暮を、朝の氣色と一列に、押竝べては見給ふまじ」ト、言ふはつね〴〵朝霧を、あまりに重く取扱ひ、給ふによりてみづからも、心置るゝ故にてあり。その傍に明石姫、何



[illegible]



人のあまりに繁けれぱ、再び又思案をかへ、坤なるかの秋の、館へ行きて打見るに、磯菜の來るはたまさかにて、空衣村荻親子のみ、斯樣の人を預けんには、いと靜にて宜けれども、此所へ置きなば玉葛をも、村荻と一列に、空衣が娘と思ひ、わが子と人の聞知るまじ、又君一郎も繁々に、來りて逗留することあれば、さがなき名をや立てられん、艮の冬の館は、淋しけなれど花鄉は、打語ふにも心安く、むかしの蓮葉に引かはり、身を愼しめば召使ふ、者まで自然に靜なるを、見きはめて雲井之丞を、旣にさる年預けたり、玉葛をも彼にまかせて、置かんに如く事あるべからず、さる山里にて生立ちたれば、華やかに騷がしき、邊よりは忍びやかなる、方こそ却つてよからめと、或時に紫に打向ひ、「いつぞやおん身を俄に語ひ、小袖を贈りしわが娘、玉葛を生みたるは、黃昏とて賤しき者の、娘ながら故ありて、我ゆゑ無慙の最期を遂げたり。あの人の心立は、氏素性には更に因らず。父君の御血統に、疑ひもなき女にだに、執念の恐ろしきが、ありしを見たる事のあり。かの黃昏が母は世に、類稀なる邪慳の生、娘はそれに引かへて、心すなほにしかも利發。さはいへ息女とあがめらるゝ、武士の娘の一角ありて、きつとしたには及ばねども、たゞ何となく愛敬あり、たよ〳〵として情深き、方は類もなく覺ゆ。さる

人には所詮及ばぬ事」ト、傍の人々に、見せ給ひしかばいづれも打寄り、「其上に恐れながら、この御手の美しさも、類はあらじ」と感じけり。

此時春の館にて、光氏はかの使の、歸りし後にて紫に、打向ひて宣ふは、「おん身が何と書やりしか、それは知らねど今はまづ、おほよそに捨置きて、年立返り來る春の、花の盛の頃を待ち、その時返は聞え給へ。此頃紅葉を惡ざまに、言なさんは立田姫の、思はん所も憚あり。今は枯木に等しくとも、櫻の木蔭に立隱れ、おはしましなばその花の、開く折にはおのづから、強き言葉も出でなん」ト、まだ年足らはぬ娘なんどを、賺すやうに宣ふも、いと若やかに見どころ多かり。實に盡せぬおんなからひ、かくの如くに世を安く、思ふ儘に過し給ふも、若き程より宗全が、事にてさま〴〵辛苦なし、遂には彼を討滅ぼし、世を平かに人の氣を、安うさせ給ひたる、その餘慶に因りてなり。

さて朝霧はかく方々の、引移り住みて後、數ならぬ身はいつとなく、紛らはして行かんと思ひ、神無月にぞ渡りける。寵愛厚き姫君の、母上にておはしければ、自らは密やかに、し給ひたれどほか人より、もの〳〵しくもてなし給ひ、夏の館の結構は、春にも劣らざりけるとぞ。

光氏は玉葛を、わが住む方へ迎へんと、はじめには思ひしかど、客をもてなす書院座敷の、ほ

三十三編　下

この館の惣構を、四ッに隔てし築地の上へ、高殿より高殿へ、廊下をかけて行通の、たやすき様になしたりければ、磯菜の召使は、その反橋を渡りて、頓て此方へ参る。大きやかなる女の童、折にあひたる紫苑の模様、紅絹の裏さへ色づきし、楓と見えていとをかし。室町の奥深く、仕へ馴れたる者なれば、その取廻し外に似ず。取次には小辨が立出で、紫の上のお前へ差出せば、直に取りて開き見たまふ、磯菜が文のその末に發句あり、

春を待つ園へ紅葉や風の便

此方の若き腰元ども、かの使をさま〴〵に、もてなす樣のをかしきを、紫は見やりながら、硯の蓋に苔を敷き、岩などのやうに作らせ、返は五葉の枝に結び、渡し給へばかの使、受取りて立歸る。磯菜は急ぎ開き見るに、是もまた返の奥に、

風に散る紅葉は輕し松の蔭

繰返しては打吟じ、「色ある紅色を思ひもかけぬ、緑の苔にかへ給ひし、卽座の發明なみ〳〵の、

し傅くも、これ光氏が勢なるべし。此所に逗留ある中に、折よく時雨の降りければ、紅葉むら〳〵色づきて、えも言はれず面白し。風打吹きたる夕暮方、すゞりの箱の蓋にいろ〳〵、花紅葉をこきまぜて、磯菜の方より紫の、上にそれをまゐらせらる。

びし所に設けしなれば、堀には菖蒲を植ゑ繁らせ、その向は馬屋なり。西より北を築地にて、隔てし外は御藏なり。から竹松の木いと繁きは、雪を詠めん爲なるべし。冬のはじめ朝霜を、むすぶぐさ菊の籬、我は顔なる柞原、その外をさ〳〵名も知らぬ、深山木までも移し植ゑしが、所がらによるにやあらん、いと面白く見えにけり。

さて移轉は一度にと、定めさせ給ひしかど、騒がしきやうなりとて、朝霧は從はず、磯菜も重ねて緩やかに、參りて見んとて延べさせられ、たゞ何事も宣ふまゝなる、花鄕ばかり雲井之丞に、傅きて其夜移れり。光氏は世の譏を愼み、供人も大方はぶき、紫も夫に準じ、密に移り給ひければ、後にて聞きて御供に、洩れたる事を口惜しと、思へる者もありけるとぞ。さて紫のおはする方は、春の設の木草ゆゑ、此頃にはあはざれとも、中にもとりわけ館の造、磨き立てて高殿より、遙に望めば六條の、廓通ひするうかれ人、編笠を打かぶり、をかしげなる姿して、ゆきかふ樣も幽に見え、いと珍らかなる事多かり。かくて四五日過ぎて後、磯菜の方は此事を、義植公へ聞上げ、暇を願ひかの秋を、むねとなしたる坤の、此所の館へ來り給ふ。その有樣は光氏が、移りし時の供人より、遙に多く嚴しょ。世に幸の優れしとは、是をこそ言はめなんど、たま〳〵昔を知りたる者は、心憎くも思ふもあり。併しながらちかく磯菜を、重くもてな

みづから夫婦の住居。乾の方は朝霧を、呼迎へんの用意なり。いづれも館の結構は、言ひ盡すべうもあらず。もとありきたりし池をも山をも、見る樣惡きは覆へし、水の趣山の姿、更に造り改め給ふ。又紫は常々に、春こそ宜けれ磯菜は秋の、眺に如く事なしと言ひし、その願の心の如く、木草をも植ゑられたり。まづ南東は山高く、櫻は更なり桃海棠、花の木の數を盡し、池の樣面白く、御前近き前裁には、五葉紅梅藤山吹、岩躑躅などやうの、都て春のもてあそびを、專らに植渡し、秋の草をばむら〳〵に、その中にほのかに交ぜたり。さて磯菜の遊山所の、方には西へ押廻し、をかしき山のありければ、元のまゝにて紅葉の色、濃かるべきを繁く植ゑ、泉の水はかの山の、裾を遠く打廻らし、遣水の音まさるべき、岩を組上げその末は、瀧に落して秋の野を、遙に續けしその果は、目も及ばぬばかりなるが、其頃盛りに咲亂れ、錦を敷きしに異ならず。武藏野の原宮城野の秋、といふとも是にはいかで、及ぶべきとぞ見えたりける。又艮には涼しげなる、泉ありて夏によれり。軒端に近き呉竹は、下風涼しかるべく思はれ、木高き森のやうなる木ども、木深ぎもいと面白く、山里めきて卯花垣根、殊更にしわたして、むかし覺ゆる花橘、百合撫子などやうの、花のくさ〴〵又春秋の、木草をもその中に、彼方此方へ打交ぜたり。押通して東は馬場なり、或は騎射或は打毬、又は五月の競馬、遊

ば、如何あらんと案ぜしが、是にて心おちつきたり。誰々も知る如く、我六條へ館を構へ、近きにそれへ引移れば、其後彼をも彼所へ迎へん。御身の里も六條とか、さすればひとまづ玉葛を、父の家に呼取り置かば、いよ〳〵便よからん」など、こま〴〵語ひ給ひけり。

是よりは六條に、光氏が館を新に、營みたるその由を言はん。素より嵯峨は花桐の、母の住居を次第々々に、建廣げしにてありければ、心に叶はぬ所多し、同じくは廣く見所ある、地に移りてかの大井の、山里人など呼集め、近く住ません心にて、そこゝを撰びしが、桂川の別館は、眺もありて面白けれど、あまりに人里離れたり、六條は遊女を、集へし里の構ありて、騷しきには似たれども、少し道を隔たれば、田を見晴して氣色よく、此所には富める商人の、別莊とか名づけたる、下屋敷多くありて、泉水築山庭なんどの、をかしきもありければ、黄金を積みてそれを求め、さゝはる町の家を毀ち、道を附換へなんどさせ、いと廣き構として、夫を又四町に割り、築地板垣なんどにて、十字形に仕切りたり。此春より打掛り、已に此頃造りはて、吉日を撰みて移り給ふ。さて四ツに割りたる、坤の方は、町家を毀ちし後にて、阿漕がひと度住みたる地なり。その緣により此所へ建てたる、館は磯菜が折節の、遊山所と定めおき、常の留守には空衣村荻、二人を住まさん設なり。艮は雲井之丞、例の花郷これに傅く。巽は

御子はたゞお二人、御總領は離れてお住ひ、お側には姫君ばかり。紫樣がどれほどに、あてやかぢやとて申さばあなたの、母君樣も同じ事。さすればあちらへお移りでも、お心は置かれませぬ。さうしておいで遊ばせば、おのづから高直樣も、聞付け給ひて遠からず、お逢なさるは知れた事。親子の契は絶えぬもの。あなたのお目にかゝりたく、ほんの雲を攫むやうな、私が願も神佛の、御導きにて遂には叶ふ。これはましてやおはします、所も知れておいでなされば、必ず御苦勞遊ばすな」ト、言慰むるその折から、光氏が使の者、唐櫃やうの物を荷はせ、山吹を尋ね來り、これ其方へと渡しければ、舂之助が受取りて、内へ舁入れ唐櫃の、蓋を取れば玉葛に、贈越されし帶小袖、うづたかきまで入れてあり。これは今日紫の、上にもこの玉葛が、事を光氏物語り、彼の方よりの計ひなるべし。織物縫物絞纈、その美しさ田舍びたる、目には殊更珍らしく、宮城は更なり朽葉さへ、打返しては眺めけり。

その中に日もたけければ、山吹は用意せし、唐の紙の美事なるを、取出して「御返を、さア是へ遊ばせ」ト、勸められて玉葛は、田舍者の片言に、書きたる物をと恥かしく、思ひながらにたゞ仄に、書流しゝを山吹は、受取るより道を急ぎ、嵯峨の館に立歸り、直にお前に差出せば、光氏は打開き、「手はまだ手弱く見えながら、筆艶ありて卑しからず、さる山里にて生立ちたれ

代なりせば、かくはあらじと昔戀しく、人目を憚り泣きにけり。さなきだに年老いれば、心の僻むものなるを、是はましてやさがなさ勝り、實の子の義倘さへ、母の機嫌を取苦しく、心を痛めし時もありとぞ。

山吹は此日にかの、光氏が文を持て、九條へ行かんと思ひしが、紫の上より召され、一日お側にありて行かず、その次の朝光氏に、かう〳〵と聞えしかば、光氏暫く思案して、我思ふ仔細あり、さあらば今日午過に、御身まづ彼所へ行き、後より重ねてわが使の、行くのを持ちて居るべし」ト、玉葛の假住を、詳しく問はせ給ひければ、山吹はかしこまり、仰の時刻を考へて、さて九條へ赴きて、ありし事ども細に語り、御文を渡しければ、玉葛は押戴き、打開いて讀みをはり、「世にありがたき事ながら、一筆なりとも實の父の、御示しに預からば、それこそは嬉しからめ。田舎に育ちて不束な、此身がいかで見も知らぬ、さるあてやかなる方々の、おはする邊に交はん」ト、たゞ只管に苦しと思ふ、氣色の顔に現れければ、山吹は膝すり寄せ、「先頃も申した通り、高直樣は御子の多き、故にやあらんあなたをつひぞ、お尋ねなされた噂もなし。光氏君は黄昏樣の、御縁ぢやとて年頃月頃、御心にかけられし、お行方が知れたとて、殊の外なる御喜、己が眞の娘を今度、尋ね出したと人にも言ふ、彼にもその事言へとの仰。君には

香壽丸は富徽の前の、正しき孫の事なれば、あひ見たう思されん、これまで來ながらわが前を、たゞ蹈過ぎしは、又あるまじと義植公の、後に止り香壽丸を、誘ひ彼所へ行きければ、富徽の前打喜び、急ぎ對面し給ひけり。顏なども甚く瘦せ、白髮はさながら雪の如し。世に惜まるゝ花は散り、茨はいつも緣なり、長うも世に在するものかな、佛の說ける宿世の約束、前の世に善根を、施し給ひしものならんと、心の中につく〴〵と、光氏は思ひしなるべし。富徽の前はいとたゆげに、脇息に打凭れ、「老さらぼひて何事も、今は忘れ侍りぬ。嬉しくも訪はせ給ひ、昔の事のそれかれを、今更思ひ出でたり」ト、打泣けば香壽丸、いたいけに手をつかへ、「遠く離れて室町に、たゞ今では住みます故、度々お目にもかゝられませぬ。父君ははや先刻、先へお歸り遊ばしたれば、今晚は急がれます、また〳〵重ねて參りませう。御機嫌宜う」ト言ひければ、光氏も言葉を添へ、宜き程にこしらへて、そこ〳〵に立上る。表の方に控へし供人、すは御歸りとひしめく聲、さきを追ふ聲かまびそしき、響を聞くにも富徽の前、胸打騷ぎあらけしからぬ、光氏の勢かな、命長くてかゝる世の、末を見るこそ口惜けれ、あゝ義尙の

れ、天性の御才智。如何思ひ給ふにか」ト、學者どもに尋ねければ、十人とも恐入り、「たとへばお腹におはしましゝ、時より學ばせ給ふとも、二十年には遙に足らず、年老いるまで我々は、何をして居たりし事ぞ、後世恐るべしといふ、聖賢の辭を今、思ひ當りて候」ト、口を揃へて言ひければ、義尙は機嫌よく、「雲井之丞を是よりは、義植の師と仰がせ、學寮の司とせん」ト、豫て用意やなしおきけん、その位の裝束を、賜ひければ雲井之丞は、更にも言はず光氏も、大方ならず打喜び、親の名までも揚げよと言ひし、本意は今日こそ叶ひしと、義尙にあまたたび、禮を述てかの裝束を、次へ立ちて著換へさせ、「汝は先へお暇願ひ、赤松の館へ行き、小毬はじめいづれへも、披露せよ」トありければ、雲井之丞畏り、再びお前に立出でて、「不肖の身にありがたき、事にこそ」ト拜謝なし、急ぎ赤松の館に至り、裝束のまゝ打通り、今日の事ども宣ひければ、小毬あて吉はじめとし、二葉の上の頃よりして、館に仕へし者どもは、たゞ嬉し涙に暮れ、暫しは物言ふ者もなく、稍ありて小毬は、冠者の君の手を執りて、佛壇の前に誘ひ、二葉の上の位牌に向ひ、生たる人にいふ如く、かう〳〵と打語ひ、又伏沈み泣きにけり。

さて東山にては、その日もやう〳〵暮果てて、囃かはりて樂となり、月ほの〴〵とさし出でて、庭の景色も一際優り、築山瀧口中島の、燈籠の火のちら〳〵と、水に映るも面白し。はや遊も

を打交ぜて、義尙自ら題を出し、詩文章を作らせ給ふ。此は是雲井之丞が、學力如何あるべきと、試み給ふものなるべし。

其所より少し隔たりし、座敷には囃あり、まづ笛は義尙公、鼓の役は四郎正尙、太鼓は小五郎晴命と定め、謠は光氏唄ひ給ふ。高砂、つぎに、松風なり。その外遊さま〴〵にて、彼所にては歌を詠じ、此方にては連歌を催す。それ等の事を知らずして、せん方なげなる人々は、庭より下り立ち舟に乘り、棹さし池に離れ出でて、釣を垂るゝ者も多かり。此時謠は末になり、須磨の浦波どう〳〵と、打あげ給へば折にあひたる、松風さつと吹合せ、池のさゞ波さわだちて、いと面白き有樣なり。雲井之丞は文章を、綴りながらもかの池にて、魚釣る樣の目にかゝり、耳に囃の音色を聞き、かく人は餘念もなく、遊べる中に我ばかりに、など苦しき目を見せ給ふと、世を恨めしく思ひつゝ、眞先に作りはて、書きはてて差置けば、學者どもはこれを見て、若君に先越されしと、心のせけばせかるゝ程、文章のくだらぬにや、書き過ち書き過ち、打案じてのみ居たりしが、やう〳〵に認めをはり、頓てお前に持出でければ、義尙これをつく〴〵見るに、詩も文章も雲井之丞に、及べる者一人もなし。我ばかりかく思ふにやと、學問を年頃好める、昵近の侍を、呼集めて見せ給ふに、いづれも〳〵驚き譽め、「冠者の君はまことにこ

させ給ひしよし、その代りには兎も角も、玉葛様を引助け、給はゞ罪のおのづから、消え給はん」ト打泣けば、「思ひがけなき悔を聞く」ト、微笑みながら打濕り、「寶詮議の爲にして、色に泥むといふにはあらねど、深切に我をいとひ、自害して母を諫めし、その貞心は今も忘れず。形見と見るは友達の、そちばかりにて身寄もなし。その玉葛がわが實の、子ならばせめて」ト言かけて、口に手を當て紫を、かへりみ給へばすや〳〵と、睡りて實に聞かざる様子、心安しと筆ばやに、書いて「この文娘へ」ト、投やり給へば山吹は、受取り部屋へ下りけり。

あけの日將軍義植公、香壽丸君もろともに、東山へ參り給ふ。光氏も雲井之丞、引連れて供奉したり。その外警衛の人々は、晴れたる夜半の星より繁く、華々しき道の行裝、見る者の目を驚かせり。さて東山にても、豫てまうけの事なれば、書院座敷は黃金を鏤め、庭には玉を敷列ね、結構いはん方もなし。幸ひに空晴れて、紅葉はまだしき程なれど、秋の千草の咲亂れ、池水清く山青く、詠に飽かぬ有様なり。今日も生憎義植公と、光氏の衣服の色、同じ事にてありければ、いよ〳〵ひとつものの様に、輝きて見えまがひぬ。義尙公もいと淸らに、年加はり給ひし故か、一入に位備り、庭を見晴すはれの方に、靜に座につき對面あり。今日はなみ〳〵の文人は省き、その才のいと賢しと、音に聞えし學者十人、呼寄せ置きてその中に、雲井之丞

は起直り、「形などはかのむかしの、昏黃に劣らずや」ト尋ね給へば、「私もどうかと案じられましたが、生れ優り給ひしほどに、娟妍な御かんばせ」「夫は其方もさぞ喜び、まづ誰ぐらゐの器量と覺ゆ。是とはどうぢや」ト紫を、指さし見すれば、「イヤ左程には」「それなら己に似て居るか」ト、言ふのは彼を光氏が、實の娘にとりなして、此後に呼迎へ、親しくする時紫の、氣を安うせん爲なりとは、山吹更に心得ず、さしよりて聲を潜め、「かの方の父上は、斯樣々々」ト言ふのを抑へ、「高直には數多の子あり、是は同じ胤にもせよ、夫が母とは疾くに緣切れ、これまで便もなさゞる娘、今更にかの多くの子、立交りなばなまなかに、心苦しき事もありなん、夫よりは此光氏が、實の娘と披露せば、却つて心安かるべし」ト、打囁きて夫よりは、紫に聞かせんと、高々と打笑ひ、「不慮の事にて多くもなき、娘の行方を失ひて、年頃口惜しかりつるを、いと嬉しくも聞出でし。幸ひに當春より、六條へ館を營み、此頃やう〳〵成就して、我もまた珍らしく、彼所に住まんと思ふなり。彼をも夫へ頓て迎へ、髮の飾衣裳の物好、紫に差圖させ、今樣の姿にうつし、若殿ばらが目をつくるを、慰みとすべき」など、語ひ給へば山吹は、いと嬉しく思ひつゝ、又も聲低くなし、「赤松樣へはまづ包み、給ふとも又ほのめかし、給ふともそは我君の、お心まかせに遊ばしませ。詳しい事は知らねども、あの母上は君ゆゑに、敢なく消え

吹に足ひねらせ、「年寄同士も又あまり、打解けすぎなばなう紫、むづかしう言やるであらう」「はい年寄も年寄に、よりけりとやらめつたには、油斷のならぬも御座ります。なア山吹」ト聞傳へし、水原の事など言出し、笑ひなどし給ふ樣、世馴れて一入愛敬あり。光氏は機嫌よく、「己もかの宗全が、事に就いては浪花に下り、播磨に移りてさま〴〵苦勞。近年はやう〳〵と、長閑に暮して居らるゝ故、明けても暮れても此樣な、わけもない事言つて遊ぶ。さて山吹、そちが昨日、あはれなる人を尋出でしとばかり、後を言はぬが氣がかりな、どんな人ぢや長谷寺に、行ひ澄して尊い法師と、いふやうな人でも」ト、聞え給へば頭振を振り、「いえ〳〵何のその樣な、醜い者ではござりませぬ。それは〳〵美しい、かの黄昏に果敢なく散りし、花の露の消え殘りし、玉を見つけて歸りました」ト、聞いて少し枕を攲て、「實にあはれなる事にこそ。今まで何所に居たりし」ト、問はれて田舎にかう〳〵と、あからさまにも言ひ難く、「ある山里に御住ひ、私がちかづきの、昔の人の殘りても、ありて其の世の物語、今更に悲しうて、互に袖を濡しました」ト、目もうるめば光氏も、古寺の事思ひ出で、胸塞ればおのづから、顏に憂のあらはれて、いかなる事かと紫の、疑はんかと心遣、したまふ樣を紫悟り、「あらうるさや眠たきに、何おつしやつても聞えぬ」ト、兩袖に耳うち塞ぎ、彼方を向きて臥しにけり。光氏

三十三編　上

その次の日もはや黄昏、燈を點す其頃に、山吹は光氏の、御前に出でけるが、紫君と打解けて、並びおはする御有樣、櫻といはんに匂あり、これに譬へん花もなし。內君もはや年增盛り、此頃暫く見上げねば、又淸らの勝り給ふ、心地せられて山吹は、吐息を襟の中に隱し、玉葛樣を此君にも、劣り給はぬ御器量と、思ひしはわが此乳で、四ツまで育てし慾目にて、思ひなしにや內君は、一際優りし御かんばせ、それも幸有ると無きとの、違によるかと人知れず、心の中に見くらべける。光氏は座を立ちて、「明日は室町義植公、東山へおいであり、我もお供に隨へば、早う寢て早う起きん。寢つくまで大儀ながら、山吹足を擦つてくれ。若い者に言付けると、嫌がるやうぢや年寄は、年寄同士が心安くて、宜いではないか」と打戲れ、給へば側の女中ども、聲を忍んで打笑ひ、「お心安う遊ばすを、誰かいやとは岩橋の、夜の契は及びもない、私ら風情へお戲談、おつしやつたその時に、一言主の一言も、申しやうが無い故に、皆が難儀がるのぢや」ト、つきしろひつゝ言ふは實に、明くる侘しき顏なりけり。光氏は枕を取り、山


玉かづらの巻


光氏初て玉葛に對面の圖

偐紫田舎源氏第三十三編序

観音様の御噂をきゝひくまうして石山で噴鼻とのさまされんもかしこけれども既にかの分身ならずその數の三十三編となりて法華經妙音の巻へうつるにおよんで普門品第二十五帖目の螢の巻へも近づいたれば刀疵殿く趣向にはまり六條の院を光氏が新館に取なして其結構を並べられれば覗き機捩の言えその如く玉葛の末にまつりつ人の悪かる衣配り風俗文に直しなば山本土佐が古浄瑠璃の小袖賣の景事など云ふが似かよりしも四句の文の口拍子のおのづからうつりしなるべし

天保庚子正月

柳亭種彦

偐紫田舎源氏

第卅三編 上冊

柳亭種彦作
歌川國貞画
仙雀堂梓

六條新館之圖



に入らば隔ある、様に思してお心に、却つて障る事もやあらん、はや過去りし事なれは、たゞ此儘あからさまに、言うてよきやら悪きやら、思ひ亂れて、「其事は、ハイ、只今に、只今に」ト、いふうち人々お前に參り、騒がしうなりければ、それなりにして言さし止みぬ。

はんと頼もしく、心の中にぞ思ひける。此坊は小高き山の、がけづくりにて御寺へ参る、人々の有様も、見下されて初瀬川の、流も手に取るばかりなれば、欄干に打凭れ、皆々眺めて居たりしが、秋風谷より吹上り、いと肌寒きに何となく、あはれを催し打濕るを、山吹は言慰め、もしまた行方を失はゞ、悪かりなんと京の宿を、詳しく聞きて書留め、「幸ひ妾が親里は、程遠からぬ六條なれば、便好し」とて後々の、事どもを語ひおき、三日の籠も濟みけるにぞ、まづ一旦立別れ、玉葛はかへりまうしに、夫より八幡の宮に赴き、山吹はかの六條の、父の家に足を休め、玉葛が六條の住居へ、まづ文の音信して、其後嵯峨へ立歸り、此事かすめ聞えんと、心は急げと其夜は何か、事忙しくてお前にも、まゐらで局に臥しけるが、又の日に山吹が、歸りし由を光氏聞付け、召出されて何とやら、晴がましき心地なし、手をつかふれば光氏見給ひ、「などか里居は久しくしつる、又若返りてをかしき事の、ありつる故か」ト戯れ給へば、山吹は恐入り、「御暇願ひてより、七日に過ぎ侍れども、面白いといふ事は、何所にもありがたし。夫はさしおき又例の、初瀬の山ぶみし侍りて、あはれの人を見出しゝ」ト、聞いて光氏眉を顰め、「そは何人ぞ」ト問ひ給へど、押竝びで紫の、おはしますゆゑ山吹は、その御答にゆきつまり、もし又此後人傳にて、黄昏の事内君の、お耳

ト、なほ今の都の様、あるは昔の物語に、その日は暮れて通夜に上り、又坊へ歸りなどし、やう〳〵に玉葛も、心安く山吹と、物語するその序に、「四ツまであなたに育てられ、母より御恩の深い事は、朽葉や宮城がつね〴〵はなし、お腹が立つか知らねども、私はほんの母上に、お目に懸りし心にて、その嬉しさはいかばかり、それに私に樣つけて、お呼びなさるは聞えませぬ、玉葛さうせよかうせよと、おつしやつて下さりませ」ト、言ふを山吹押止め、昔は昔今は今、さきにも申上げた通り、嵯峨へお移り遊ばせば、光氏君のあなたは姫君、その時は山吹と、私を召さねばなりませぬ。宮城どの〳〵、かう言うたら氣に障らうが、お前も母御も京に居た、時とは姿も物言も、變つた中に玉葛樣、お一人は都女郎、かく麗しいお生でも、田舎めいたら玉に瑕、どうしてお育て申したかと、感心して居るわいな」ト、いふ折朽葉も出來り、「黄昏樣はたをやかに、たゞお心よいお生付、あなたは氣高く美しい、中にどこやらきつとして、見えさせ給ふは父君の、筋目によるかと彌五六殿、つね〴〵申して居りました。赤松樣は、唯今では」「昨日も申した執權とて、此上もなき重き御身、御子も數多侍りて、今室町の内君は、腹こそかはれ玉葛樣の、妹君にて侍る」ト、山吹がひそ〳〵聲、玉葛はうち聞いて、思ひがけなや父上は、さる貴人にておはせしよな、されば人にも知られざる、この下草も萠出づる、春にあ

様を、勝れたりとは申すべし」ト、顔をながめて打笑めば、朽葉は嬉しくさし寄りて、「このお姿を怪しき所に、沈め申すが悲しさ故、家も竈も皆打捨て、子どもらは女房に離れ夫に別れ、此母も今は却つて、知らぬ國の心地する、京へ遙々下つたを、あはれと思し山吹樣、宜きに導きしてたべよ。今ほどは高き家に、宮仕へし給へる、御身なればおのづから、便もあらん姫上の、父御にかくと聞上げ、世に出し參らせて」ト、涙ながらに頼むにぞ、玉葛は恥かしう、後を向きて居たりけり。

山吹は打頷き、「此身は數にもあらねども、光氏君の御前近く、召使はれ侍れば、立歸りなば申上げん」ト、聞いて朽葉は小首を傾け、「光氏君のいと目出度、榮えさせ給ふ事は、田舍にも知り侍るが、その樣に麗しき、奥方や召使も、數多あればまづ實の、親にておはする赤松殿に、同じくは知らせて」ト、言へば山吹片頰に笑み、「黄昏殿のはかなき最期を、忘れ難く悲しき事に、光氏君は思し給ひ、聞けば彼が娘あるよし、尋出して得させよかし、我には子も少きが、淋しきなればその娘を、わが子を尋出でたると、人に知らせて慰まんと、豫ての仰を受けたれば、君へだに申しなば、御出世はまのあたり。高直殿は奥方の、悋氣強くて側女に添へ、近江とやらん田舍へ遣られし、娘御もありとやらん。さすれば此事聞えても、御對面も覺束なし」

は甚くやつれたれど、人柄のうちあがり、恥かしげに覺えし樣、いと娟妍なりければ、心の中に嬉しくて、手を執り膝の邊に近づけ、「昔は一人で歩きし此身が、思ひがけなくさる年より、嵯峨の御館に宮仕、ところ〴〵のお使にて、さま〴〵の方々を、見上げたれども嵯峨の內君、紫の上に似たる、御形は侍らず。打續いては明石の姫君、これは又父上の、御面形をうつし給へば、麗しうおはす筈、御寵愛も世に竝なし。なう、朽葉殿、此やうに、寢亂れておいでなされど、玉葛樣はその方々にも劣り給はず、妾が喜推してたべ。光氏君は義正公の、御時よりしてよきといふ、女は殘らず見集め給ひし、御目にも美人といふは、今室町の御母上、さてその次はわが娘、大井の姫と宣へり。妾もいつぞは見奉り、くらべて見んと思へども、藤の方には御目見せず、明石樣はきようには、渡らせ給へどお年が足らず、たゞ生先はさぞかしと、おしはからるゝばかりなれば、光氏君の御機嫌の、よい折に其事を、申上げて誰彼より、內君樣の上越す人は、世界の中には侍らじ、夫をば何とも仰せられず、お心にくやと聞えしかば、なに紫か、あれは己と、竝んで居ればその樣に、美しうは見えぬ筈と、酒の上にておたはむれ、實に見上ぐる度々に、思はず心もうき立つほど、麗しいは紫さま、それにもあなたは恥かしからじ。物は限のあるものなれば、勝れたりとて眉間より、光を放つ女はなし。かの內君や玉葛

折には我々も、身の相應に衣裳を飾り、御禮參まうさん」ト、額に手を當て念じ入る。山吹はいとをかしく、「あないみ〱し田舍めきたる、言ばしうかと宣ふな。あなたの父御高直殿は、昔よりして御覺、目出度かりしが今は猶更、執權職にておはするなれば、郡司なんどいふ、祿の少き武士の妻に、いかでか送り給ふべき。又光氏君の取扱ひ、給はゞいよ〱目出度おん身に、成り給はん」ト言ふのも朽葉は、聞入れずして頭振を振り、「耳喧しや執權と、やらんも暫く措き給へ。さる年筑紫の郡司、何某殿の北の方、かの國の觀音寺へ、まゐり給ひしその勢、帝の行幸に劣なし。言ひけなし給ひそ」ト、拜み入りて餘念なし。

さて玉葛は、此寺に三日籠らん願なり。山吹は今宵かぎり、下向なさんと思ひしが、かゝる序にゆる〱と、物語聞えんため、これも共々籠るに定め、親しき僧に對面し、「御佛に月頃願ひ、行方を尋ねしその人に、此頃廻り逢ひたるなり。貴僧よりもよくお禮を、申してたべ」トありければ、件の僧も打喜び、「夫は目出度事にこそ。愚僧もつね〲たゆみなく、祈りし驗にあらんづらん」ト、皆佛前に誘ひ行き、いと騷がしう夜一夜行ひ、明けぬればかの僧の、坊に人々おりたちぬ。堂は兎角に騷がしければ、物語を快く、せんとて此所へ來りしなるべし。

山吹は衣など著換へ、華やかにさし出でて、曇なき朝日の影に、玉葛をつく〲見るに、旅に

前と隔たりたれば、是へ誘ひ参らせん」ト、心安げに山吹が、言ふに朽葉は喜びつゝ、直に彼所へ迎へに行き、畚之助に後の事、まかせてとつかは玉葛に、傅きたれば山吹は、なほにこやかに「さア〳〵是へ」ト、打招かれて玉葛は、今途すがら山吹の、事を詳しく聞きしかば、何とやらん恥かしく、さし俯きて言葉なし。此方は行方を失ひし、娘に廻り逢ひたる心地、手をとつて親しく寄添ひ、「かく不束なる身なれども、只今では光氏君の、御館に侍るなれば、見給ふ如く供人を、僅に連れたる道にても、狼藉をする者はなし。今宵はとりわけ籠人も、大勢入込み騒がしき、中には善からぬ者ありて、田舎人ぢやと見侮り、てんごふせまいものでもない、妾が側におはしませ」ト、なほ物語もせまほしけれど、讀經の聲銅鑼鐃鉢、その騒がしきに催され、佛を拜み奉る、山吹が心の中に、この人をいかにもして、尋ね出させ給はれと、日頃の願空しからず、逢見し事の嬉しさよ、光氏君も豫て床しく、思して仰を受けたれば、かくと聞えば喜び給はん、なほ御佛の利益にて、幸あらせ給へなど、懇にこそ祈りけれ。此頃はとりわけて、この觀音ははやらせ給ひ、京の者田舎人、御堂に多く集ひあつまり、この國司の内君も、今宵まゐり給ひしが、その嚴しき勢あるを、朽葉は見やりて羨ましく、我を忘れて聲を上げ、「南無觀世音菩薩、數々の事は願はず、わが姫君を郡司の、奧方になし給へ。其

れば、思はずもこの人々を、打越して疾く御堂に著く。朽葉等は玉葛が、歩み惱むをいたはりつゝ、兎角隙どり寺にははや、初夜の勤をする頃に、やう〳〵に上りけるが、參詣の人立込みて、思ひの外に騷がしゝ」。

そも〳〵この初瀨山は、豐山長谷寺本願院と號し、本尊は十一面の觀音にて、大門より九十九間の、廊下を傳ひて詣づるなり。さて山吹は東の方を、假の局にしつらひて、佛のお前にいと近し。これは親しき坊ありて、それの法師の差圖なり。玉葛は遙に遠き、西の座敷を借りて居れり。朽葉は急ぎ山吹を、尋ね來りてありし事ども、まづあらまし語りて後、帛紗包を取出し、差寄りて聲を低くし、「これがあの玉葛樣の、御臍緒に侍るが、赤松太郎高直の、むすめと確に記してあり。過行かれし彌五六殿、思ふ仔細のある間、玉葛さまに此事は、まづ申すなと言はれし故、今に隱して見せ申さず。されば却つて自らは、父の御名を慥には、知らせ給はでおはすべし。この春京に上りて後、それとはなしに人に問へば、高直樣はすこやかにて、おいでなさるといふ取沙汰、さればとて迂濶には、言上げ難く畚之助、思案にあぐんで居る樣子、どうぞして逢はせます、便を求めて給はれ」ト、賴めばにつこり打笑ひ、「其事はかならず〳〵、お心づかひ遊ばすな、よしなに計ひまるらせん。まづ夫はさしおいて、玉葛樣のお局は、佛の御

入りて物語れば、朽葉は夢の心地して、春之助と諸共に、出來りてこの隔の屛風、殘りなく取拂ひ、山吹と顏見合せ、しばし言葉も泣交し、茫然として居たりしが、朽葉やう／＼涕うちかみ、「あなたへむかし預置きし、玉葛樣をたゞ一夜、泊りに借ると虛言言うて、肥前の國へ連れ申し、下りし後にてさぞやさぞ、お腹立もありしならんが、是には深き譯あること、恨を捨てて此子等が、力となりて給はれかし。今は都に知邊もなく、明日をも知らぬ老の身の、我を便とするなれば、さぞかし心細からんと、それのみ心がかりぞ」ト、又打泣けば山吹も、眼に持つ涙ふり拂ひ、「夢になりともおはします、所を見んと大願を、立つれどそのかひなきのも道理、さては今まで遙なる、世界に住ひ給ひしとな。風の音にも聞傳へぬが、いみじく悲しかりし」など、それからの事一ツ二ツ、物語る中主の僧、罷出でて、「御燈明ははや捧げ候なり。疾く御參詣あるべし」ト、急がしたつれば朽葉親子、何か心のあわたゞしく、「さあらば御堂へ參りて後、又ゆる／＼」ト暇を乞ひ、立上れば山吹も、いざもろ共にと思ひしが、供の者の怪しまんと、心づきて少し下り、別れ／＼に宿を出で、人知れずかの人々に、目を留めて能く見れば、その中にゐるなかびず、美しげなる後姿、旅に疲れて鬢の髮、うち亂れしも愛らしく、氣高き生の娘あり。四ツの時に別れしは、是にこそあるらめと、思ひながら山吹は、少し足馴れたりけ

はもし彼の方の、御事なるかと胸轟き、近く寄りて差覗けど、燈火暗くて其方は見えず。かの人の連來りし、下女を招きて問はんとすれど、食物に食入りて、物言かけても見向もせず。山吹はいと憎く、わが連來りし女を呼び、宮城の方を指さしなし、「あの女中は私の知る人、お目に掛らん此方へとて、誘ひ申せ」と言ひやりければ、その女に引立てられ、しぶ〳〵宮城は出來り、「あなたは更に覺えぬお方、筑紫の國に二十年ばかり、住所求めし賤しき身を、京女郎の知らせ給はん、いはれは更に侍らず。都の人よ能く見たまへ、人違ひにこそおはすらめ」ト、寄きたるその風情、强々しき衣など著て、髮のかゝりもどこやらゐなかび、いたう太りて年ふけたり。京に住みし其頃は、まだ子供にてありける者が、かく姿の變りしを、思へばわが身は猶更に、顏も變り年も老い、見苦しからんと山吹は、恥かしけれど燈火を、近く寄せて、「能く見給へ、我をば見知り給はん」ト、顏さし出せば宮城は手を打ち、「山吹樣にておはしけり。嬉しや〳〵何として、此所へは來らせ給ひし」ト、言ひつゝ涙さしぐめば、山吹はいそがはしく、「まづ彌五六殿御夫婦は、御無事にておはするや。玉葛さまはいかにぞ」ト、問はれて宮城は眼を拭ひ、「父は去る年亡せ給ひ、母は今にすこやかにて、あれへ來ておはするなり。玉葛樣もはや大人に、ならせ給ひてその御身の、お願につき此所へ參詣。まづその樣子を母樣に」ト、走り

りし者は皆、他にて宿を取らすべし、彼方のお客の狭からぬ、程に宜しく計ひ給へ」ト、打潜まりて是も亦、心遣をしたりけり。さて此女を誰ぞといふに、別人ならず山吹なり。前にも度々説きし如く、紫の上に仕ふる、人々のまじらひも、快からぬ身を倦じ、いかにもして玉葛の、行方を尋ね傅んと、光氏の許しを受け、ところ〴〵を打廻り、黄昏が世に在りし時、此所の御寺の觀世音を、深く信心したる事を、不圖思ひ出で此春より、たび〳〵參詣したりしかば、はや事馴れて都より、さまでに遠くも今は覺えず。されども徒歩路に歩みくたびれ、倚臥しながら彼方を見れば、一人の男隔の屏風の、もとに寄り來て、膳を手づから拭ひ清め、その連の女に向ひひそ〳〵と、「これをあなたに差上ぐべし、器具は小く椀は大きく、さて取合は見苦しけれど、旅にてあればせん方なし、さぞむさくろしく思さん」など、いふを山吹洩聞きて、さては主人に傅きての、參詣ならんと思ひつゝ、不圖かの男を差覗くに、見し心地する顏ながら、誰とは確に覺えやらず。是はいと若き頃、逢ひたるまゝにて年月たち、ふとりくろみて窶れたれば、畚之助といふことを、急には思ひ出さぬなりけり。又彼所にて年老いし、女の聲して「娘々、姬上の召しますよ」ト、呼ばれてあいと出來る女の、顏もまた見しやうなり。不審に思ひつく〴〵と、打案ずるに宮城に似たり。さては男は彼が兄、畚之助に疑なし、姬上と

湯をつかひ、兎角するうち秋の日の、いと短くてはや暮れぬ。主の法師立歸り、この人々の宿りし體を、打見やりて妻に向ひ、「さる頃も兩三度、お宿をしたる都の女中、今宵は又おはすべき、しらせのありてお迎へに、今朝早く立出でしと、知らざる事はよもあらじ。それに我にも語らずして、田舍人と覺しき者を、なぜ留めては置きつるぞ。相宿ありといはゞ、御機嫌を損ねべし」ト、打腹立ちて言ひけるを、快からず𡸴之助、洩聞く中にかのあるじが、迎へし人々入來る。物の隙より玉葛宮城も、差覗いてつくぐ〵見るに、是も徒歩にて來りしにや、乘物はなく荷物をば、馬につけて後より曳かせ、暗うてさだかに見えねども、よろしき女二人ばかり、下女下男も、數多き有樣にて、深く忍びて出立ちながら、淸げなる男もあり。あるじの僧はさまぐ〵に、かの人々に追從しつゝ、此所に宿さまほしげにて、頭掻きつゝあちこちを、走り歩くを𡸴之助、打見るも氣の毒ながら、今更宿を取直すも、わびしければ連來りし、荷持の男を彼所へ遣り、此方は人も多からねば、奥の方の小座敷へ、打こぞり申すべし、遠慮なくその方々を、是へ請じ給へと言はせ、皆一所へ集りければ、あるじは深く打喜び、屛風衝立やうの物を、隔となしてぞしつらひける。この來りし一群も、主人と見ゆるは女にて、きらく〵しくは裝はず、いかうやつして物言も、心輕げに主に向ひ、連來

即ち佛に仕ふるなり、たゞ此儘に」ト言ひけるにぞ、衾之助は何事も、玉葛の言葉を背かず、さあればとて徒歩よりと、定めて打連れ出でにけり。かくはいひしが玉葛は、遠き徒歩路にならはねば、いとわびしくて苦しけれど、宮城が語り慰むる、それを力に歩みつゝ、いかなる罪の深き身にて、かゝるうき世にさまよふならん、父上もはや此世に、おはしまさずはみづからを、あはれと思し冥土とやらんへ、早く導き給はれかし、もしも此世に居給はゞ、一度逢はせてたび給へ、母上は御顔だに、覺えね中に過行き給ふ、殊更これは非業の御最期、助け給へや觀世音、繰言ながら親達の、おはしましなばこの樣に、悲しき事はあるまじと、わが身のせん方なきまゝに、その事この事取重ね、心に歎き辛うじて、椿市といふ小初瀨の、麓の里に京の住居を、出でしより四日目の、巳の時ばかりに生たる心地も、なくてやう〳〵著きにけり。かひぐ〳〵しげには出立ちながら、脚の裏動かれず、せん方なくて打休みぬ。昔はこの椿市に、妻を持ちたる僧のあり、參詣の人を宿し、旅籠の事など賄ひければ、衾之助はよき程の、家を見立てて宿を乞ふに、主の僧は他へ出で、妻の留守してありけるが、快く受合ひて、座敷を拂ひ入れけるにぞ、人々漸く心落付き、さて草臥もやすまらば、今宵御寺に通夜なさん、百八の燈火を、御佛にたてまつる、その料は何程か、宜きに計ひ給へ」など、此家の女房に賴みおきて

御願籠ありし由は、宮城よりして承はる。さすれば八幡に詣で給ひ、神の利益の著く、今ほどは恙なく、都に住所求めしと、禮を述べられなほ行末の、事ども祈られ然るべし。途すがらの秋景色、御慰めにもならんか」ト、いふに朽葉は打喜び、「それには幸ひ八幡の坊に、私の知りし老僧あり、まだ齢のいと目出度、この頃途にて行あひし。是を頼みて姫上を、詣でさせ奉らん。又かの御神に打續き、利生あるべき御佛は、いづれならん」ト問ひければ、畚之助うち點き、「そも〳〵佛の御中には、大和の國初瀬の觀音、この日の本はいふも更なり、むかし〳〵吉備大臣、遣唐使に赴かれ、野馬臺の詩をよみわびたる、其時にかの御佛、蜘蛛と現れ導き給ひし、夫よりなしてあらたなる、驗を現し給ふとは、唐土にさへ聞えしとか。是を祈り給はんに、如くべからず」とぞ答へける。此時に玉葛は、次の一間に在りけるが、洩聞きていと嬉しく、隔の襖おし開き、「亡き母上の御形見と、妾に與へし守の中に、今物語りし初瀬の御影、此の如く入れてあり。さては母の信心ありし、御佛ならんと思ひ取り、筑紫に在りし時よりも、朝な夕なに拜みしぞや。なほもわが身を觀世音に、打頼みまゐらせなば、惠あらんに疑なし。とく〳〵連れて」トありければ、さればとて取急ぎ、乘物の用意などするを、玉葛おし止め、「この山城とは隣國、さまでには遠からぬ、所とかね〴〵聞いて居た。よし遠くとも歩みを運ぶが、

し如く、春之助はその心、いと頼もしき者なれば、如何にもして玉葛を、世に出さんと思へども、今世にときめく高直に、表立ちては言入れ難く、さればとて又密に、知らせんにはよすがもなし。たゞ水鳥の陸に迷へる、心地なしてせん方盡き、たゞうかくと用もなく、明し暮して淋しきあまり、つくぐ〜と案ずるに、弟にさへも中違ひ、夜脱にしたる國へ今更、をめくとは歸り難し、返すぐ〜も是ぞといふ、目的もなくての京上りは、わが過失にありしよと、口に言はねど心の屈託、自然と顔に現るゝを、母の朽葉は見て取つて、「おん身は西の京にて生れ、故鄕ながら今ほどは、はや相識れる人もなき、所に再びさまよひ來て、苦勞しやるを旦暮に、見るもいとほし思案をしかへ、國へ戻つて又どうか」ト、いふを打消しにつこと笑ひ、「私が身はさゝいな事、玉葛樣の御身にかへて、おちぶるゝならおちぶれ次第に、父上の御遺言を、守るが道と申すもの。住つけた肥前に在りて、たとへば何程勢ある、身の上と我なつたりとも、姫君を現太づれが、手かけになし參らせては、本意に背きて快らず。さて姫君の御出世は、神佛のお導きに、依らずは急には捗るまじ。此所よりは程近き、八幡の宮と申すのは、誰々も知る應神天皇、また肥前の國にて玉葛樣の、御信仰あられたる、鏡の宮は神功皇后、即ち八幡の母上にて、同し社に候なり。當春國を離れ給ふ、その折も姫君の、鏡の宮に數々の、

みく／＼ならずと世の人の、譽めぐさなりしも昔に變る、事のみまさるがいと悲しく、命長きも恨めしょ。夫には變り生先の、遠き御身に聊なりと、御心を屈しさせしも、只今申した昔に變る、彼が心ひとつより、出でたる事にや侍らんと、思ふにつけても恨めしき、世なるかな」とて泣居たり。

作者まうす。又玉かづらの巻へうつり、これより前の事よりしるす。春之助親子三人、玉葛に傅き上り、假住せしは九條にて、都の中にはありながら、いと淋しげにはかぐ／＼しき、人の住みたる邊ならず。すはいとかいふ女商人、かもじ捻る髪の落買、さては怪しき説教よみ、猿曳なんどの小家の中にて、いぶせきにつけ世の中を、いよ／＼思ひ續けつゝ、兎角する間に秋にもなりぬ。殊更に淋しさ彌増し、こし方行先さまぐ／＼に、悲しき事のいと多かり。そも／＼肥前の國よりして、この人々の立出でしは、今年の春の末にてあり。此所に宿を求めし頃、朽葉はむかし黄昏の、はかなく消えし古寺を、彌五六郎と連立ちて、訪ひつる事のありければ、玉葛を彼所に誘ひ、黄昏の墓を尋ね、詣でさせしが思ひの外、石の玉垣五輪の塔、塵もなく掃清め、潔く立ててあり。これ光氏が彼を憐み、密に營み得させしなるべし。それより後も玉葛は、宮城なんどと連立ちて、此所へ度々參りしとぞ。さて前にも言ひ

三十二編　下

暫しの中の事ならんと、思へど夫ゆゑ式日には、猶更出仕の心にそまず。政則此世におはしなば、戯れにも人の侮る、事はさら〳〵あるまじと、思へど夫はかひなき愚痴。父君も隔なく、とりあつかひては給はれど、あまりに嚴しくさし放ち、たやすくは御側へも、參り馴れ侍らず。たゞ花鄕が住居へたま〳〵、渡らせ給ひし時ばかりは、御前に侍るなり。あゝ花鄕が心を用ひ、我に仕へていたはりくるゝ、夫につけても思ひいだす、その秋風に柞葉の、散失せ給はず此園に、茂りておはしますならば、何につけても物思ふ、事はあらじを御顔だに、知らぬ中に」トに、翻れ落つる、涙を紛らし給へる氣色の、いとあはれなるに小毬は、尙ほろ〳〵と打泣きて、「母に早く離るれば、悲しき事も多けれど、親はなくても子は育つと、下世話にも言ふ通り、人となるのは夢の中、年加はればおのづから、輕しむる者はない。さういふ事をば心にかけず、御身を大事に持ち給へ。光氏君のおはすれば、何御不足はあらねども、宣ふ如く政則が、今暫し世に在るならばと、思ふにかなはぬ事のみの、多きが故にうき世といふ。高直が心ざしは、な

眺め、「節句などには室町へ、行くべき心更になし。何の爲にかその樣に、俄に仕立て給ひしならん」ト、聞え給へばうち微笑み、「蕾のお年にありながら、老くづほれたる人の樣に、今の仰は何事ぞ。いみ〳〵しや」ト諫むれど、氏仲は尙うち濕り、「老いねど心はくづほれし」ト、獨語の樣にいひさし、俯いて居る風情、もし高直が連行きし、雁音の事御心に、かゝりてかくは宣ふかと、思へば心苦しくて、小毬は聲を潛め、「男はたとへ下ざまの、奉公しても身の程より心高く勢ある、者は必ず世に出づる。なぜその樣に心を屈し、うき〳〵と遊ばされぬ。みづから不吉を招くとて、夫は愼しむ事なり」ト、言はれてやう〳〵顏ふりあげ、「某には今もつて、素袍をだにも著せられず、いつも變らぬ四布袴、綾や錦で仕立てても、人は輕しめ侍るなり。〔たゞちに下に續く〕

ば、心の中に訝しく、何の故にか父上は、彼方へ移し此方へ迎へ、彼を憐れみ給ひしならんと、思ひしが又打かへし、形よしとて雁音が、如くに絶えておとづれせぬ、つれなき者を思はんより、彼樣に心柔かにて、情深きが添馴れては、よき故いたはり給ひしか、さはさりながら差向ひ、見苦しきのもかひなしと、固より人に語るべき、事にしあらねばさま〴〵と、心に思ひ亂れけり。げに夫も道理なり、小毬は白髪の髻、切拂ひて打見には、恐ろしきやうなれども、人柄のうちあがり、年老いぬれど顔清し。そこにもこゝにも腰元にて、つかふ女は眉目をえらび、きたなげなるは近くへ出でず、人は形のよきものと、夫に目馴れてあんなるを、花鄕はもとよりも、勝れし姿といふにもあらず、若き程は粧の、華やかなるにて目をつくる、人もありしが稍盛も、過ぎて化粧に顔は荒び、痩過ぎて髪も少く、なりたる樣を氏仲は、かく譏らはしく思ひしなり。

九月の節句の近づくまゝ、小毬は冠者の君の、室町へ參り給ふ、御小袖よ上下よと、さま〴〵に物好しつ。雁音には打絶えて、逢ひだにせねば此君の、御事にのみ打懸り、取急がせていろいろなるを、淸らに仕立上げたる所へ、氏仲折よく來りしかば、小毬は打喜び、これは御氣に入らざるや、あれこそは宜からめなど、目通りへ持出づるを、見るも懶く氏仲は、庭の方を打

どは行儀正しく、假にも人と爭はず、心すなほになつたる間、氏仲を彼に預け、暫く彼所に住ませんと、或時に花鄕の、部屋に誘ひ行き給ひ、「知つての如くこの冠者は、生れて直樣母に離れ、祖父政則もはや世を去り、赤松の館にも、小毬ならで眞實に、いとしと思ふ者はなし。その上是も年老いて、賴み少く思ふが故、我この東へ迎へしが、あまりに彼所は人氣遠く、淋しき體にて何とやら、氣むづかしきを見るのも苦しく、同道なして來りしなり。おん身はもと赤松に、仕へし者にてあんなれば、小毬が亡き後は、彼に代りて氏仲に、傅きくれよ是よりは、心安く見習はせん、その爲預けて置くべし」ト、聞え給へば何事も、宣ふまゝに承引きて、心すなほになりたる花鄕、これはましてや願うても、無き仕合と深く喜び、「若き心のいたづらより、政則樣御夫婦の、御機嫌を背きたる、その昔の申譯、愚なる身の心かぎり、氏仲君に仕うまつらん。御心安う思召せ」ト、夫よりしていと大切に、あつかひながらあまりに折目、正しくなさば氏仲の、氣づまりならんと宜き程に、懷しう語らひなどし、日數を經れば氏仲も、離館に在りしより、少しは心も晴やかに、なりて學問怠らず、其暇には花鄕と、雙六なんどを打ちながら、つれ〴〵と見給ふに、顏も姿も此所こそよけれと、思はるゝ處はなし。赤松の館に古く、仕馴れたる腰元の、口さがなきが問はず語りに、中空と言ひし昔の、噂も豫て聞きしか

て言ふやう、「私づれの妹でも、人と思召されなば、當もない室町の、宮仕より此方から、願うてなりとも差上げん。御父君を見習ひ給はゞ、一旦見そめ給ひし者をば、無下には捨てさせ給ふまじ、されば行末頼もしゝ。宗入は兄に與せず、利口者仕合者と、世の人彼を擧つて譽む、運よくばこの惟吉も、彼ほどにはならん」など、はじめには引かへて、機嫌よけれど底氣味惡く、三作ひき連れ小藤は急ぎ、その場を立ちしが恥かしう、思ひやしけん御文の、返は遂になさゞりけり。

氏仲も又彼方より、返事もなきにおし續け、文をやりなば輕々しき、心なりとて笑はれんと、思へば重ねておとづれず、たゞ雁音が事心にかゝり、月日のたつほどなほ床しく、いつか逢はんと思ふより、他の事なく赤松の、館に行けども年頃日頃、遊び馴れたる所のみ、思ひいでられその人の、見えぬにいよ〳〵胸迫れば、小毬よりはしげ〳〵に、迎をおこせどかの館も、心憂くて此頃行かず、又わが部屋に籠り居て、人にも絶えて逢はざりければ、光氏は此體を見て、心もとなく思ひつゝ、彼は素より小毬が、寵愛深く女の中に、人となりたるものなるを、俄に是へ呼迎へ、見も知らぬ男のみ、附けおく故に住憂くて、心結ぼれ晝夜とも、たゞ打臥して居るなるべし、いかにかせんとつく〴〵思ふに、花鄕はその昔、はすはなりしに引かへて、今ほ





よりも、ざれてやありけん又は君の、心をかけて送られし、文とは心づかざりしか、さまでに恥づる氣色もなく、手に取上げて打見るに、綠と黃なる薄葉を、いと好もしく打重ね、手は若けれど生先見えて、いとをかしげに書續け、

桂より心かけけり花踊

ふたり打寄り見る處へ、惟吉ふつと入來れり。恐ろしう呆れ惑ひ、引隱すべき分別も、なくて面を打赧め、うじ〱すれば惟吉は、早くも文に屹度目をつけ、「やよ三作、戻りし事を我にも告げず、小藤と何かひそめくを、心得難く思ひしが、善からぬ取次したりしな」ト、目に角立つれば慄ひ〱、逃行くを近く呼付け、「年も足らはぬ汝をたらし、この文は誰が頼みしぞ。さアあり樣に言へ聞かん」ト、責めさいなめばいよ〱怖れ、「冠者の君が其方の叔母の、所へこれを屆けてくれ、いやといふと己は此所で、腹切るとおつしやるから」ト、聞いて惟吉おそろしげに、今まで澁面つくりたる、顏を俄に和げて、にこ〱と打笑ひ、「はて愛らしき御戲心。三作そちも若君の、お年にあまり違はねど、紙鳶に走り廻り、狗子を抱へ歩き、明けても暮れても惡あがき、あなた方と比べては、役に立たぬほんの子ども。手巻々々、早うまづ此所へ來て、このお文を拜見せよ。文章といひ御手の美事さ、恐入つた」ト頻に譽め、手巻に見せてさ

かしきを、紫の上愛せられ、折節召さるゝ由を聞き、これ幸と氏仲は、かの三作をたび〳〵招き、手なづけおきて或時に、常よりも親しく語ひ、叔母の小藤は又いつか、踊に来る」ト問ひ給へば、「確とは存じませねども、七月は上りませう。なぜに夫を」ト不審さうに、言ふに氏仲聲を潛め、「いと美しきかほばせを、そゞろに戀しう思ふなり。其方がつね〴〵見るであらうと、思へば夫が羨まし。どうがなして又我にも、見せてたもや」ト宣へば、三作は頭振を振り、「私がうつかりと、見て居てさへも人の顏に、祭は渡らぬ何をきよろ〳〵、男の子といふものは、何事も荒くれしう、己は嫌ひぢや其方行けと、近くへさへも寄付ねば、ましてやあなたにお見せ申す、事は自由になりませぬ」ト、いふに氏仲打頷き、「夫ならせめてこの文を」ト、渡し給へば小首を傾け、「こんな事の取次は、せぬものぢやとて父がつね〴〵」「はてさて夫も人による、惟吉は父上の、家來なれば己も主人、さら〳〵叱ることではない。その代には此頃譽めた、硯箱も机も遣る。言ふ事聞かぬと腹切つて、己は死んで化けて出る。早く歸れ」ト嚇されて、こはさもこはし子心にも、御心根を痛はしく、思ひやしけん「左様なら、持つて參つて見ませう」ト、澁々お前を引下り、家に歸りて小藤が部屋を、覗けば一人机に凭れ、手習なして居たりしかば、こは〳〵側へ立寄つて、「雲井の君が叔母樣へ、これを」ト言ひて差出す。小藤は年の程

「打つけなりとや思されん」ト、言ひかけ給ふはいと若う、をかしき聲と聞きながら、誰人なりとも女は知らず、物むづかしとや思ひけん、「顔なほさんに鏡臺へ、燈を近う」トつと立てば、遊び歩きし介添女、またきたなげなき男の子、この聲聞いて立戻り、近う寄りて衣裳を著せかへ、それ紅よ眉刷よと、人騒しうなりければ、いと口惜しう氏仲は、其所を空しく立去りしが、四五日ありて此祭、室町御所の御覽も濟み、其後人の噂するを、氏仲心をつけて聞くに、此度の練子どもは、光氏君と義清のは、勝れたりとめでのゝしる。その中にもとりわけて、美しげなるその樣は、光氏君の方こそ勝らめ。髮の飾衣裳の綾、當世風に仕立てたる、容體なんどの殊更に、見どころありてをかしかりしと、言騒ぐを聞きもし夫かと、それとはなしになほ詳しく、人に尋ね問ひ給へば、果してわが日の留りしは、父光氏の出されし、小藤といへる娘にて、惟吉の妹なり。直樣に室町へ、留置かれんとありしかど、病氣と言立て惟吉が、連歸りたる由を聞き、されば彼所へ今更に、尋ね行くともその邊、近くへだにも寄せまじと、まだいと若く恥かしき、程にてあれば心には、歎かしけれど思ひやみぬ。されども彼が樣形、目前にありて高直が、心辛くて引放ちし、人の代に見んものと、案じわびて居たりしが、去りし夜小藤に附來りし、かのきたなげなき男の子は、惟吉の悴にて、三作と呼び年よりも、あどなくてを

鼓の音、いと賑しきに彼所へ行き、見物なさば少しは心の、慰む事もあらんかと、立出で紛れ歩き給ふ、かんばせのいと麗しく、靜やかにして何となく、なまめかしき樣なりければ、まだうらわかき腰元なんどは、我知らず目を留るなるべし。つねゞゝは紫の、おはする方の障子近くも、光氏制して寄附けず。これはみづから若き程、藤の方に親しくなし、浮名をとりしに懲りたる故か。今日はこの騷しき、ものの紛れに女のみ、住む方までも遠慮なく、立入り遊び給ふなりけり。

はや神事舞はひとわたり、濟みて暫く暇を賜り、とある座敷を衝立屏風に、しきりて假の樂屋とし、練子どもの打休みて、居る邊まで氏仲は、うかゝゝと打廻り、何心なくやをら寄りて、覗き給へば最前の、舞にや甚くくたびれけん、襖に凭れて額に手をあて、さし俯き居る娘あり。かの雁音が年の程と、おぼしく見えて今少し、丈は高き心地せられ、姿なんどのをかしき樣は、夫よりも勝りて見ゆ。薄暗ければ細やかには、見えねどいとよく似通ひて、戀しき人の殊更に、思ひいでられあながちに、心移るといふにもあらねど、たゞ打過ぎんも心にかゝり、衣の裾をひきならせせば、女は何の心もなく、怪しと思ふ樣なるに、

誰が注連をかけて折らせぬ伊勢櫻

り。はや四十にも近からんを、眉を濃く島田を高く、丈と等しき振の袖、いと華々しく粧ひたり。物に動ぜぬ光氏も、是には流石驚きけん、言葉もなくて打まもるに、その昔黒髪ばかりは、若やかなりしも年頃に、衰へゆきて瀧つ瀬の、白き筋さへ打交り、變らぬものは霞にも、紛れぬはなの色のみなり。打向ふだに恐ろしきや、光氏少し顔を背け、「稲舟がしか〴〵せよとの、指圖か早百合そちの案じか。裲襠にせし織物は、美しけれど丈高く、痩せたる故か見すぼらし。たゞ綿厚にふく〳〵と、したる小袖が似合はん」ト、仰に紅輕忽に、聲を出して打笑ひ、「内君やあの早百合が、これを著ると姿がよう、なるというて皮胴著も、取られて寒く侍る」ト、いふ聲もわなゝきて、身を打慄ふがあはれさに、絹綾綿など取寄せて、光氏は彼に賜ひ、いづれも是より館にとめおき、神事に詳しき大原の、巫を呼寄せ集めおきし、女どもに教へさせ、衣裳の事など取急ぎ、はや室町の御覧に入れても、恥かしからず稽古も調ひ、よろづ揃ひし趣を、聞いて光氏「さあらばまづ、その下ざらひ打ならしは、此館にてせさせん」ト、以前の如く棧敷を構へ、かの廣庭を渡らせて、舞風を見たまふに、とり〴〵に美しう、捨てんと思ふは一人もなし。

氏仲君は胸のみ塞がり、物などもしか〴〵まゐらず、打臥してのみおはしゝが、唄うたふ聲太

なれば力なく、小藤を明日は參らすべき、その用意をこそしたりけれ。次の日に嵯峨の館へ、召に應じて集るは、仁木良清が娘の紋彌、是は良清勘當を、受けざる前に擧けしにて、幼き頃よりその生みし、側女に預置きたるを、此頃屋敷に迎へしなり。紀よりも神事の練子を、參らせんとて畠山、重篤が末の娘、八重梅をぞ出さるゝ、介添は早百合なり。大井よりは愛らしきが、よきとやゆかりに千鳥が添ふ。その外近習の侍ども、或は娘或は妹、いみじきをえりとゝのへ、夕かけて集りければ、光氏は機嫌よく、「我も御所へ奉らん、その爲に設置きし、童あり」とて最前に、呼寄せ置きし例の小藤を、招きよせ給ひければ、打恥らひて跪居たる、その娟妍さは花の中の、花といふべき樣なるを、早百合はつく〲打まもり、「何所よりか匂ある、玉を取出でこれ見よと、お心憎い遊ばし方。さりながら紀には、玉にも優る黃金あり、お次までは誘ひしが、二人まで差上げんは、如何と存じ差控へ、またせおき侍る」ト、聞上ぐれば光氏打笑み、「遠慮なすも事による、夫こそ望む處なれ。はや〱是へ」と宣へば、早百合は靜に立ちながら、「彼をお前に出しなば、今まで花と見給ひしも、深山の朽木とならんのが、いかにしてもお笑止な」トさげすみ笑ひにお次へ出で、頓て誘ひ御前近く、押直すを見給へば、思ひがけなやかの紀の、荒果てし頃門守の、翁がいつき娘なる、はなの色の紅な

此頃神事のて室町の、御覽に入れんと思へども、此館の腰元女を、出立てては珍らしからず。此頃神事のその夜さり、汝が妻の手卷が顏よき、一人の娘を引つれて、庭の群集に打紛れ、彳み居たるを見たりし故、かへるさに人をつけ、詳しき事を聞き來れと、言付けやりしがその者歸りて、かの娘は汝の妹、名は小藤といふよし告げつ。かく愛らしき妹ありと、今まで更に知らざりし。かの室町の御覽の練子に、彼を某差上げん。御目に留れば留置かれ、召仕はれんの御沙汰なり。明日はまづわが方へ、それかれ集ふ筈なれば、汝も小藤を連れ來れ」の、仰に「畏み候」ト、惟吉は又取急ぎ、立戻りて妻妹に、件の事ども詳しく語り、「我にも言はず小藤を誘ひ、嵯峨のお庭へ祭の夜、參りたるあやまちの、功名となり光氏君の、御目に止りてかゝる仰は、世にありがたき事ながら、そのまゝ御所へ留置かれ、召使はれんは願はしからず。いはずと知れし某は、光氏君の御取立、その妹にてあんなれば、室町の朋輩に、侮られんもいとほしく、且は君の御手のかゝるを、待ちてしかせしなんどとて、人の譏もうたてし」ト、いふを手卷がとりなして、「内々にては姫君と、傅く程な歴々の、娘御さへも御所勤は、願うて上るが世のならはし、何の恥か侍らん」ト、道理を盡しなほさまぐ\、言はれて惟吉手をこまぬき、「あゝ同じ奉公も、嵯峨の御館にあるならば、快からんものを」とて、いとわびしげにて居たりしが、仰

誰々も目をとむる、風情を手巻は心づき、明果てぬ中家に歸り、かの祭の興ありし、事ども夫に物語れば、惟吉は眉を顰め、「己はもと名乘出づる、名字だになき輕き者の、悴なりしが光氏君の、御相手に不圖召出され、須磨明石へも御供し、そちも彼所の浦曲まで、辛き目を見て立越えし、それかれの功あるにより、竹藤といふお家にて、舊臣の名字を賜り、赤松仁木の歷には、劣るといへども昵近の、武士の中には重立ちたる、人に取上げ給ひしなれば、昔の如く輕々しき、夜あるきなんどは然るべらず。かの明石への御使の、その折そちも紫の、上より直の仰も受け、お目見は猶更もつて、度々なしゝ事なれば、練物見物いたしたき、願を言上げ御次へ、何とて罷出でざるぞ。雜人どもに打交り、御庭先へ立入りしは、はしたなき事なり」と、言諭しゝがそれより四五日、過ぎて俄に惟吉に、罷出でよの御召あり、何事かはと取る物も、取りあへず立出でければ、光氏あたりの人を遠ざけ、惟吉を近く呼び、「大原祭は昔の風俗、殘りてありと義尙公、聞及ばれて東山へ、此頃招きて見物あり、わが此館へも呼寄せしが、又その事を室町へ、申上げたるものありけん、我も見んとの仰あり。されどもいづれも田舍人、うたふ唄は片言まじり、風俗も不束にて、御目に觸れんは憚あり。さればかの今樣めきし、小唄もをかしく作りかへ、練子の女も見苦しからぬを、此方にえり出でかの神事の、樣を摸し

り給ふべく、豫て光氏觸置きければ、右左の廊下をしきり、棧敷としてそれ〳〵の、席へ列り給ふ序に、花鄕は紫へ、目見えなしょが「見物の、間はこれに」ト宣ひて、一處におはする故、屛風ばかりを隔てたり。

雲井之丞より案内やありけん、高直が忰ども、此方に罷集ひしが、せきれいやうの若衆髮、櫛簪の飾も見えず、伽羅の匂もなきものから、いづれもかんばせ娟姸なれば、女にまさりてはなべし。

さて又庭へ女の分は、貴賤をえらまず立入りて、見物苦しからざる由、觸れられければ聞傳へ、群り集るその中に、惟吉が妻の手卷、夫の妹の小藤を誘ひ、たち隱れてありける中、夜はほのぼのと明け行くに、雪やゝ散りてそゞろ寒きも、厭はず社人は神樂を奏し、練子どものやうやうに、唄うたふもかの鄙びたる、聲の却つてしほらしく、棧敷の御方々、いづれも劣らぬ今樣の、縫箔摺箔染小袖、袂も裾も御簾屛風に、飜出でたるその色合、春の錦にたとへたる、柳櫻をこきまぜし、霞の中かと見渡され、げに心ゆく見ものなり。

この惟吉が妹小藤は、年は待宵ほどなれど、顏は櫻姿は柳、梅の匂を懸香の、薫もいとゞなまめかしき、風俗にてありければ、暗き中こそ人々の、心もつかね曙の、空白みゆく頃よりは、

三十二編　上

大原野の祭は、二月はじめの卯の日なり。かの業平の朝臣が、神代の事も思出づらめと、詠み給ひし所にて、いとふるき御社なれば、祭も古の風俗残り、をかしき事どもいと多く、田舍びたる嫁娘を、所がらなる黒木賣、又は潮汲む蜑なんどに出立たせ、神輿について大路を練行き、或はだみたる聲うち上げ、今樣めきたる小唄を唱ひ、聊か舞風など摸すもありて、なかなかに興ありと、義尙公聞及ばれ、東山へは彼所より、はるばるの道ながら、呼寄せて見物せんかと、光氏君に宣ひければ、そは御慰めに然るべし、序ながらわが方へも、招きて見んと日を定め、その事を大原へ、言遣し給ひければ、里人どもは打喜び、その日はとりわけ粧ひ飾り、夕暮方より出立ちしが、まづ東山に赴きて、それより嵯峨の館へ參る。道の程のいと遠くて、夜の明方になりにけり。入方の月曇なく澄まさりて、薄雪の少し降れる、庭の景色もたゞならぬに、かの田舍の娘どもは、場うてやしけんしかぐに、唄うたふ者もなく、たゞ差俯きはづかしげに、練行くのみにてひとさしの、舞まふ事もせざりけり。內君はじめ方々は、物見に渡


大原野の祭ある
仁壽元年
辛未二月一日
乙卯の日



修紫田舍源氏第三十二編序

羽二重は絹の最上なれども、雨衣にしたらんには兜羅綿にだに劣り、縮緬の前垂も、手を拭ふに心地惡く、木綿程用はたりまじ。野良帽子の紫は、承應より今に廢らず、赤裳ひきと詠みしを見れば、萬葉時代も長襦半は緋なりし事必せり。されば色も地あひも、ありふれたるに及く事なし。とは知りながら足利絹で、五ッ衣を仕立てかゝりし、不案じもとかくして、十二一重の十二年、續きて乙女の巻に至り、五節の舞の衣裳にこまり、大原祭の田舍模樣、梅に鶯初音の巻の、男踏歌と縫あはせ、玉葛の筑紫綿を、おしこんで見たれども、原來雅言の借物なれば、横堅も揃はぬを、知らぬ書房は是をさへ、春著にせんと急ぐもをかし。

天保十年庚子孟春

柳亭種彦誌

太夫、例の負けじ魂に、追來なんかと思ひはかり、早船とて造り樣、異なる船を借りたるに、追風さへも吹進めば、危きまでに走りのぼり、音に響の灘も過ぎ、海賊の船にやあらん、小き舟の飛ぶ樣に、來るなんどいふものあり、海賊よりも恐ろしき、かの人の追手かと、魂も身に添はず、唐泊を押行きて、川尻近くなる程に、はや此所までは追ふまじと、生いづる心地すれば、又國の事案じられ、夫や妻の旅立つを、知らざる事はよもあらじと、跡に殘しゝ二人の者を、彌二郎がさいなまんか。此事も言置くべきを、それ〳〵も忘れたりと、少し心の靜まりてぞ、さま〴〵に思ひ續くる。實にこの人々の身の上は、岸を離れて波風に、漂ふ舟よりいと浮きたり。現太に憎まれ家にさへ、中違ひし者出來しかば、歸るべき所もなく、又都にいき著くとも、これと頼まん方もなし。たゞ姫上の御爲と、父のいまはの言葉を守り、淺はかにも出立ちて、末はいかにならんずらんと、今更呆れて覺ゆれど、如何せんとて急ぎ登り、九條にむかし朽葉が知れる、人の殘りてありしを訪ひ、その邊にまづ住ひけり。

敵となりて語ひあはさん、人とても他になく、かの現太に憎まれては、身動きせんも難かるべし。なまじひなる事仕出して、姫上にまで憂目を見せ、奉らんも圖られず」ト、途方に暮れゝば玉葛が、差寄りて聲を潛め、「折々妾が夢の中に、私は其方の母なりと、いと娟妍なる女中の見えて、物語などし給ひしが、涙の種と思ひし故、御身達には今まで語らず。この春の節分に、敷寐したりし寶船、次第々々に大きうなり、閨は忽ち青海原、怪しと見るうち例の母上、妾の手を取りあの船にて、東の方へ行く時は、幸ありとて諸共に、乘りしと思へば夢は覺め、あまり不思議と寶船は、流しもやらず此所に在り。正しく母の告なれば、都へ誘ひ給ふには、何の障もなかるべし」ト、語るを聞いて畚之助、もし今これを辭みなば、思ひつめて姫上の、御自害あらんも圖られずと、心づきて「さあらばいよ〳〵、御供せん」ト二郎にも、隱して用意を整へければ、現太は其事夢にも知らず、日毎の樣におとづるゝを、宜きほどに答へおき、畚之助を先に立て、母の朽葉妹の宮城も、玉葛に附添ひて、夜迯出でて船に乘る。現太夫は肥後に歸り、四月にならば日をえらび、迎に來んと言ひつる故、その前にとて迯ぐるなりけり。宮城も都へ立歸るは、嬉しきものから年月馴れし、夫を此所に殘置くと、松浦の宮の前の渚の、景色のみは忘れかね、かへりみがちにいと悲し。かく迯げぬるよしおのづから、聞出しなば現

なく、たゞ口に出づるまゝに、

散りやせん花の鏡の宮なれば

といふ聲もわなゝきたり。現太はこれを聞咎め、「違はじとこそ我は言ひつれ、花によそへてあだく〳〵しく、心の散ちんと疑ひしは、心得難し」ト思ひもかけず、目に角立てて立歸る、その氣色の凄じさに、おびえて朽葉は色もなし。宮城は遠く立退きて、たゞ打笑ひ居たりしが、朽葉が驚き恐れたる、有樣を見て走りいで、現太が前に手をつかへ、「今母の申しゝは、お心の散る事ならず、君の浮名が花の樣に、はつと立たんを厭ひし心、鏡の宮の神かけて、それに違は侍らじ」ト解諭せば、「いか樣さう、いか樣さう」ト打點き、「さて面白き言廻し、己などは田舍者の、名こそ侍れ物知らぬ、土百姓とは等しからず、都の人とて何も別に、變りしことは無きものなり。京鎌倉の事どもは、能く知りて侍れば、思ひ侮り給ひそ」とて、又歌詠まんとさまざまに、打案ずれど詠み得ずや、ありけん其儘彌二郎を、引連れてこそ出行きけれ。朽葉は心も心ならず、「二郎が彼に荷擔して、御筋目の事不具とは、僞なる事言ひしとおぼし。今まで賴みにしつる子さへ、かく恐ろしき心となれば、はや此國に姫上の、おはさん事は危し」ト、春之助に京上りを、急ぎ責むれば小首を傾け、「如何してかは此所を逃れん。宣ふ如く弟まで、

の位に、劣らぬ様に傅かん」ト、いとよげに言續く。朽葉はほつと息を吐き、「かく宣ふは幸ながら、いかなる前世の報にや、人に見せんは憚ある、御身に生れつかせられ、その仰にも從ひ難き、妾が心苦しさを、推し給へ」ト言ひければ、からくと打笑ひ、「イヤその遠慮はさらく無用、たとへば目つぶれ足をれでも、一旦貰ひ受けたるを、見捨つべき某ならず。肥後は更なりこゝらの近國、社の破損寺の修繕、やれ敷石の鳥居のと、いふまでも皆己が厄介、すりや國の中の佛神は、皆靡き從うて、あちから却つて此方を拜む。それらのものに言付けなば、いかなる不具もなほるは必定、さてそればかりの事ならば、何も他に障はない、當月の廿日すぎ、いつかが宜しう御座らう」ト、己ひとりで呑込顏、朽葉はほうど持餘し、「三月は櫻ざめとか、忌む月なればあとくから、申上げんなん」どとて、言遁るればさらばとて、現太は下りて行く際に、歌詠まゝほしかりけん、やゝ久しく思ひめぐらし、やうく發句に取纒め、

たがはじな花の鏡の神かけて

「彼所に淸き御手洗を、花の鏡に取なしたる、この發句は我ながら、いたし得たると存ずるが、御返は如何ぞ」ト、打笑みたるも初心らし。朽葉は彼があらくしく、物言ふだにも恐ろしければ、更に返の胸に浮まず。宮城や嫁に勸めても、かゝる事は知らずとて、取合はざればせん方

かびたる、打笑ひてかいやりすて、重ねてのは見る者だになし。現太夫は心いられ、かの語ひし彌二郎と、打連立ちて案内もなく、押付に此家に來れり。年の程三十ばかり、丈高うもの〳〵しく、太りて穢氣なけれども、おもひなしうとましく、あらゝかなる振舞は、赤本に畫がきたる、公平とも見ゆめれど、己は顏色こゝちよげに、しわがれ聲を打あげて、あのゝものゝと囀り居たり。そも〳〵女を慕ふ者は、夜に隱れて來るこそよけれ、さらずは秋の夕なら、あはれにも見えなまじを、是は樣の變りたる、春の晝にてきら〳〵し。朽葉は豫て勢ある、者なる由を聞きしかば、その心に逆はじと、まづいであうて初對面の、禮儀を述ぶれば現太は、う、う、とばかり答へて髭搔撫で、「こゝの主人彌五六殿、人をなつけ世帶を賑はし、手廣にさるゝを傳聞き、いつぞはおとづれ相親しく、語はんと存ぜしが、その心ざしも見せざる中、かくれられたる代には、孫姫なりと迎取り、せめては年忌佛事なりと、執行ひて亡き後に、仕うまつらん心ざしを、起して今日は只管に、罷出でて候が、その姫上は實は貴人の、御胤なるよし承る。さすればいと恐多し、妻女と申すは表向、內々は主君と思ひ、某がこの頂に、捧げて敬ひ奉らん。御身の何か澁々に、おはしげなるも疾く承知、宿によからぬ妾なんども、數多抱へて侍るを、聞召されし故ならん、などしやつぱらと同じ樣に、取扱ひ申すべき、姫上をば后

邊に住居は難かるべし。姫上はよき人の、御血筋とは申せども、その父君も取上げ給はず、人にも知られずおはしなば、何のかひかは候べき。たとへ素性は賤しくとも、黄金を積みて不足なき、此人のかく懇に、思をかけて言寄るは、御幸福とこそ覺ゆれ。よし逃隱れ給ふとも、是に上こす事はあらず。かの者負けじ魂に、怒るときんばいかなる仇を、なさんも知らじ」と言嚇され、いかにせんかと母朽葉、畚之助を見かへれば、につこと笑ひにじり出で、「こは珍らしき事を聞く、京に誘ひまゐらせよと、くれ〳〵父は宣ひしが、田舎人の妻にせよとの、御遺言は覺えず」ト、更に承引く氣色なし。宮城は涙目にもちて、「父上の仰には、黄昏樣は優しきお生、家に迎へて傅かんと、思ふにかひなく御行方知れず、剰へ古寺にて、果敢なくならせ給ひしと、聞きしに相違はよも有らじ。さすればあなたの御形見は、この姫上とて勞らせ給ひしものを荒男に、立交り給へるを、など打眺めて居られんか」ト、泣惑ひなどする事は、夢にも知らず現太夫、己かくまで心を盡すを、彼方にもおろそかには、思ふまじと自ら誇り、早くも此國に立越え、彌二郎と語ひあひし、所にまづ足を留め、其所より文など書きておこす。唐の紙の美しきに、日のとまりけん玉葛が、宮城とともに披き見るに、手などはさまでに穢げなう、文章の續けがら、いとをかしう書きたりと、己は思ひしなるべけれど、その言葉ぞゐな

それりはひのため京へもゆきかひ、人に多く交らひて、心輕き者なりと、或人の言ひければ、それこそよけれと現太は喜び、急ぎかの彌二郎を、わが家へ呼迎へ、酒肴を列ねてもてなし、さて玉葛が事を聞え、「己が思ふ樣になりなば、いづれもとは緣者なり、心をあはせて萬の事を、執行はゞ勢を、近國に振ふべし。米穀織物綿の類、何にもあれ商ひ物、みな手許より送るべし。和殿もみそぢは越えたまはんが、いまだ妻女のなき由聞けり、わが召仕の女ども、心に叶ふ者あらば、いづれなりとも望みたまへ、見苦しからず仕度して、參らせん」など善き事を、揃へて語りきかせしかば、はじめの內こそこの現太が、妻となし參らせんは、あまりに似氣なくいとをしき、事なりなんど思ひしが、遂には慾に心迷ひ、彌二郎は打點き、「さほどまでに思されなば、母の手前を取繕ひ、兄にも得心さすべきなり。それ〳〵の所まで、あとより來られ音づれを、待ち給へ」とて手筈を定め、彌二郎は家に歸り、朽葉が機嫌を見合せて、かの現太夫が玉葛を、わりなく懇望する由を、言葉を飾り言つらね、「かの國人は恐ろしき、人のやうにも言なせど、是みな富貴を羨ましく、思ふよりの嫉みにて、仁義の道をも能く辨へ、その行いと正し。されば是より我々が、身の寄邊と賴まんに、上もなく賴もしき、人といふはこの現太なり。その恩を蒙るもの、此國にさへ多ければ、彼が言葉に從はず、憎みを受けなばこの近き、

こゝに隣る肥後の國に、信樂現太夫とて、親族一類いと廣く、彼所にては名をも知られ、勢嚴しき士ありけり。鄕侍にはありながら、代々此所に住馴れて、田畑多く持傳へ、家富み榮える程に、させる由緒もあらざれど、貧しき暮しの百姓ども、彼が目の前に出づる時は、「太夫の殿〳〵」と、尊敬するに思ひあがり、陰言に源太めと、誹らるゝ事をば知らず、なみ〳〵の國司は、我には及ばじものをとて、日にそひ心たけ〴〵しく、人を惠み人に情を、かくる事は露知らぬ、かくむくつけき男ながら、女にのみはいと優しく、思ふまゝに形ある、女を集めて見んと思ひ、これには財を聊か惜まず、數多妾を抱へけるが、肥前の國より來りし者ども、玉にもあれ衣にもあれ、白く艶ある物を見ては、大貮の姬のやうなりと、言あへるを不圖耳に止め、遂にこの玉葛が事を聞付け、そは何程の不具なりとも、打見だに苦しからずは、わが廣き住居の奥に、籠置きて人にもあはせず、隱し持たんに憚なしと、いと懇に人を以て、言ひ入るれども例の如く、尼になりなん願なりと、答へて更に承引かざれば、現太いよ〳〵それは惜き、ものにてありとて思ひ止まず、なほ大貮の家内の樣子を、聞合するに乔之助は、たゞひとむきに心正しく、かたくなにしてかゝる筋の、語ひ人とはなし難し、その弟彌二郎は、な

我は一度垣間見しが、指も五本、口も二ツ、たしかに有れは唖かも知らじ」ト、言へば一人が頭振を振り、琴を彈きて唄謠ふを、己は日外洩聞きしが、その聲の麗しさ、谷の戸出づる鶯の、初音もいかで及ぶべき。されば唖にも有らじかし。思ふに夜半に首が拔出で、油を嘗むるにあらん」など、心々に噂するを、朽葉は追々傳聞くも、又いみ〲しく、「いかにもして、都へお供し父君に、知らせ申さんかくばかり、あてやかなる御樣を、見せまゐらせなばおろかには、し給ふまじ」など言ひ歎けば、春之助宮城等も、心の中には京上りを、急ぎ思へど妻をよび、夫を迎へて其等の者の、身寄をはじめ知人も、次第に多く初には、厭ひし田舍に今は住馴れ、却つて離れかねたりし、都ははる〲遠ざかり、年月もたちたれは、如何あらんと覺束なく、出立ちかねてためらひぬ。玉葛ははや十十ははたちと、いふ年も已に近づき、つく〲と案ずるに、母には幼き時に別れ、父はあれども便無し、元は家臣の筋にもせよ、さまでに縁も無き人に、養はるゝこそ怪しけれ、とにもかくにも世の中は、憂きものなりと思ひ知り、守袋に大和の國、初瀬寺の觀音の、御姿ありしを亡母の、形見と思ひ旦暮に、念ずるのみにてあながちに、京へ上らん心もなし。この大兒の住む所は、平戸の莊となんいひける。その邊に近き者、玉葛が日に添ひて、なほ麗しく尼にもせざるを、見るからにかの不具といひしは、僞なりと

之助、孝心厚き者なれば、父がいまはに言おきし、事どもを心にかけ、年月經れども露忘れず、この姫君に傅くこそ、卽ち父に事ふるなれと、入目を厭はず京よりして、腰元女を召抱へ、又は琴を教ゆる者を、家に留置きなんどして、都の風をおのづから、玉葛に見習はせ、彼所へ上りし其折に、人に笑はせまゐらせじと、彌五六郎が世に在りし、時にもまして心を用ひ、何不足なくしたりしかば、さらぬだに田舍には、似氣なく見えし玉葛の、ますく高位の姫君にも、恥かしからぬ行儀となり、手なんども拙からず、歌俳諧の道さへも、おろくは覺えしかば、遠き近き田舍人、その姿を見たるは更なり、たゞ聞傳へし者さへも、戀慕ひつゝ傳手を求め、文玉章をおくる事、更にその數を知らず、又押付けて婿にならん、嫁に迎へんなんどいふ、仲立は引きもきらず、いやが上に重りて、門前は市をなし、腰元どもは玉葛が、手にだに觸れぬ玉章を、取捨つるを勤とし、母の朽葉は仲立に、斷りいふに日を暮し、更に暇のなかりしかど、いかでか斯かる片田舍の、人に添はせまゐらせん、いみくしやと思ふが故、誰のもく聞入れず、「見たまふ如く顏形は、まづ人竝に侍れど、いみじき不具者なれば、なかく人にはまるらせ難し、尼になしてわが生涯、傍に置く心なり」ト、言散したりければ、仲立はじめ戀慕ひし、人々は不審して、「故彌五六が孫娘は、不具といふ事にてあり、あゝあたら者惜むべし。

ふは、心にかけそ」ト聞え知らせ、婿と嫁との二人へは、主の血筋といふをば知らせず、わが孫ながら傅くべき、ゆゑある方といひなして、兄と妹が上京せば、淋しからんが此所に留り、家を大事に守れよ」ト、残る事なく遺言し、其夜俄に亡せぬれば、家内の歎大方ならず。それらの事を記さんには、くだ〳〵しければ例の漏しつ。程なく忌もあけければ、たゞ京の出立を、人々心にかくれども、この合戰なほ亂れ、宗全が軍兵ども、はや浪華まで押下り、光氏君の假館を、燒拂ひたるに據り、かの君明石へ移られしを、宗入のひとり娘、たんきりとかぶつきりとか、甘さうな名なれども、心あくまで不敵にて、戀慕に事よせ光氏君を、害せんとせし天罰にて、高潮よせて海に沈みし、靈魂龍女の形と化し、夜な〳〵海に現れしを、きがるゐんと云ふ修驗者、祈りしづめんその爲に、禊に出でしを過つて、光氏君に射留められ、彼所の騷動都に勝り、かの軍兵ども此國へも、今に攻來るなんどとて、有りし事をそのまゝに、語りてだにも物凄きに、僞をさへ取交ぜて、風聞頻りに有りければ、京上りの事は更なり、此所に居るだに恐ろしく、我にもあらず年を過すに、蕾なりし玉葛が、花のかんばせやゝ咲出で、母黃昏にも淸らさは、勝りし上に父高直の、筋さへ加はる故やらん、人柄のうちあがり、美しげにて心いと、賢けれども打見には、たゞ柔和にて人あい能く、假にも蓮葉の事はなし。元よりも春

く思ひつゝ、子供の年も加はりて、所にも住著きたれば、己は無くとも事かげまじ、さればまづ姫上を、京へ誘ひまゐらせんと、その用意をこそしたりけれ。此時に彌二郎は、例の商ひ物を積み、さる頃船出したりしが、漸くに都まで、行著きぬらんと思ふ頃、早くも歸り近きに父が、玉葛に傅きて、上りなんとする由を聞き、草鞋も解くや解かず、彌五六郎に打向ひ、「まだ聞召されずや、都には山名音川、今合戰の眞最中。しかのみならず室町の、御二男の光氏君、須磨とやらん明石とやらんへ、下らせられて西國武士、山名へ加勢する者を、制し止め給ふとて、船の通ひたやすからず、己もそれ故播磨より、乘戻して候なり。よし勢ある人にもせよ、彼所は通り難からん、御上京はまづ暫く、待たせ給へ」ト止めければ、すが〱しくも出立たず、ためらふ中に彌五六郎、重き病に打臥して、死なんとする心地にも、玉葛が美しき、有様をつら〱眺め、「母上は疾く亡せ給ひ、賴み給はん方もなし。我さへ打捨てまゐらせなば、いかなる御身に成行かん。あやしき田舎に生立ち給ふも、恐多き心地せられ、いつしか京に御供して、縁を求め父君はじめ、それ〱へ知らせ申し、世に出しまゐらせんも、都は廣き所なれば、いと心安かるべしと、急ぎつるを此儘に、命絶ゆるぞ口惜しき。さはいへ積る年の上、歎くも愚痴の至なり。三人の子供等よ、たゞ此姫を都へ移し、奉らんと思ふべし。わが後世を弔

留守に置き、家内を引連れ立出でて、かの御社に到り見るに、山はさまでに高からねど、木立ものふり神々しく、向は名におふ松浦潟、砂は玉を敷きたる如く、風に狂ひし松の姿、波にさらしゝ巖の形、鹽屋の煙は近く靡き、帆かけし船は遠く走り、その景色いはんかたなく、是にぞ少し月頃の　物思ひは忘るゝなるべし。これ夏の頃なりにけん、道に咲きたる姫百合を、宮城が手折りて玉葛の、手に持たせしを彌五六郎、打見やりてにこと笑ひ、「折も折所も所、これ姫百合と御名をかへよ、との御神の告なるべし。その事を如何といふに、今まで度々聞えし如く、板島の御血筋に、紛れなければ我知らず、姫君よ姫上よと、呼びまゐらする事のあり、もし人の怪しみて、咎むる時は姫百合と、呼ぶ故なりと言ひなば、何の仔細無かるべし」ト、是より假に名を改め、家内の者は君といはんも、耳立たんとて姫樣と、呼べば田舍の心安さは、誰聞咎むる者もなく、却つて近きわたりの人は、大兒の姫君彌五六郎の、孫姫は好い子なりと、とりぐに噂しつゝ、是より事なく年月たち、夯之助は妻を迎へ、宮城には婿取せしが、いづれも心まめくしく、夫婦中よく父母に、孝行を共に盡し、玉葛へ大切に、仕へて睦しかりければ、次第に家は豐になり、田地を多く買求め、彌二郎は又商ひの、道を覺えて京浪華へ、常にゆきかひなんどして、夢の間にはや玉葛は、十三になりければ、彌五六郎今ははや、心安

く、その上若うおはせし頃は、御身持もよからぬ樣子、何者を夫にされしか、語られもせず問ひもせず。それに引かへ黃昏樣は、物事やさしく御氣輕にて、心若き方なれば、かく船路の面白き、ところ〴〵を見せ申さば、さぞお喜びなさらうに。しかし此世に御座るなら、我等も筑紫へ下りもせまい」ト、聞いて朽葉も宮城は殊更、京の事ども思ひいで、返る波も羨ましく、心細きに船子ども、あら〳〵しく聲打あげて、

田舍女郎に京女郎、なぜに京から此所へ來て、波にもまれて濱風に、色のくろいがお笑止や。

と謠ふを聞いて母娘、二人對ひて泣きにけり。なほ人々の心々に、語合ふことぐさは、あはれなる事いと多く、うるさければ書漏しつ。鐘が岬なんどを過ぎ、日數を經て心ざす所に、到著きしかど、彌二郎の外には一人も、彌五六郞は身寄もなく、朽葉も都の生ながら、父の故郷なるにより、かの彌二郎を打賴みし、從兄弟はいとこなんどいふ、遠き由緣の者は多し、まづこれを力として、やう〳〵に住著きけれど、遙に都の隔たりしが、心細う其方の空のみ、眺められてたゞ玉葛を、かしづきものに明し暮し、少し心も靜まりければ、まづ當國に聞えたる、鏡の宮に參詣し、御行末の事どもを、賴みおかんと彌五六郞は、彌二郞に案內させ、畚之助を

「その母上は」ト顔見合せ、朽葉も宮城も打泣くを、彌五六郎制し止め、「船にて涙をこぼすのは、不吉なりとて忌む事なり。御利發ながらまだお四ツ、うかとした事聞ゆるな。いと美しう只今から、氣高く清らにおはしますを、雜人どもの乘る船にて、御傅もしかく〴〵なく、いとあはれなる御有樣。先祖よりして高恩を、蒙りたる主君の形見は、この一方より他に無し。赤松の父君に、ほのめかせよと此頃朽葉は、勸めしかども疾く緣を、絶たれて見知り給ふまじ。よし又それに定められ、取上げ給はゞ彼方へ置かれ、最早お顏も見られまじと、それも悲しく誘ひ申し、人がましくなし參らせん、心なれども我ははや、六十近く御成長まで、傅かん餘命はなし。朽葉はいまだ四十に足らず、わが亡き後も御主君の、御血筋といふ事を、必ず忘れそ大切に、守り奉れ」ト思はずも、目をしばたゝけば總領の、舂之助がさしいでて、「母上や妹の、打泣きたるを止められし、あなたが不覺の御落涙、心得難く候なり。及ばずながら私が、命にかへても玉葛樣は、世に出しまるせて、御本意は達します」ト、父にも劣らず心いと、正しき者にてありければ、深切見えて聞ゆるに、彌五六郎も氣を取直し、「ヲヽ賴もしよ、彌二郎と語合ひてよしなに賴む」ト、また物語をほかへ移し、教具君の御氣性を、受續がれて凌晨樣は、御心あらく〳〵し

然らば是より教具の、餘類の詮議嚴しくあらん。疾く浪人はなしたれども、もと板畠に仕へし某、捕へられなば言分むづかし。何とかせん」ト案ずれば、朽葉も胸を痛めしが、心つきて打點き、「それには幸ひ玉葛樣の、臍の緒の書付に、赤松太郎高直の、娘なる事書きてあり、此人は今勢ある、左衞門政則殿とやらんの、嫡子にておはするよし、是に便りて御身の難儀に、ならね樣に計ひ給へ。後の證據と思ひし故、玉葛樣を預くる時、取隱してこゝにあり」ト、見すれど夫は頭振を振り、「道理に似たれど夫も危し。我ゆく〳〵は肥前へ引込み、世を安く送らんと、思ひし故に彌次郎は、早く彼所へ下し置く、家內を引連れかの國へ、我も行きなば安泰ならん」ト、遂にこれに心を定め、いそがはしく用意を調へ、密に家をも人に賣り、かの山吹に預置きし、玉葛を暫しが內と、言ひ欺きて迎取り、夜に紛れて都を出でぬ。宮城はその年十三なれど、いと怜しき生なれば、まだ頑是なき玉葛を、さま〴〵に賺しこしらへ、おきやがり小法師振皷、山ざきの小櫃なんど、道々にもてあそびを、調へて機嫌を取り、早く宿り遲く立ち、ゆる〳〵と浪華にいたり、船をもとめておの〳〵取乘り、少し心は安まれど、玉葛は山吹を、慕ひて兎角むづかり止まず。朽葉もさま〴〵介抱し、「かの山吹と言はるゝは、あなたの實の母上ならねば、さまでに戀しう思すな」ト、聞いて幼き心にも、訝しうや思ひけん、「そんな

三十一編 下

いと物凄く荒まどひし、書院とおぼしき縁先を、差覗いて案内を乞ひ、去年八月月見の夜、しかじかの事ありしやと、懇に問ひければ、預りの僧にじり出で、「如何にもさせる事の有りし、詳しき事は存ぜねど、光氏君にておはすとやらん、實に光るばかりなる、若き殿の顔よき娘と、たゞ二人宿られし、夜半ばかりにあれなる襖を、蹴破りて怪しき女、顯れ出でてその殿を、害せんと懐劍拔持ち、突かゝるを物陰より、差覗きて見たりしが、その樣の恐ろしさに、そろそろと其所を立退き、其後の事をば知らず。後にて聞けば怪しき女は、はじめの娘の母なるが、光氏君に何やらん、恨ある者のよし、光氏君に討たれしとも、叉及ばざる無念さに、自害せしともまちまちの、噂は定め難けれど、言はるゝ如く親子ながら、此所にてはてたり」ト、語るを聞いて彌五六郎、心に驚き立歸る、道すがら朽葉に向ひ、「光氏は凌晨樣の、爲には親の敵の子なり、それと知りつゝ家に宿し、もてなさるゝは心得ずと、思ひ居りしがさては娘を、をとりにして釣寄せおき、せめては敵の片割なりと、討つて恨を晴さんの、御心にてありしよな。

却つてうるさき事に思ひ、常に病氣と言なして、たまくならでは逢ひもせず、おのづから遠ざくる、風情を悟る彌五六郎、かつその行のみだらなるを、見聞く度々深く歎き、あゝ世につれてあさましや、板畠の姫君と、言はれし御身がたゞ一人、擧げられたる娘御に、婿君を迎へんの、心もなくて遊女も、同じ振舞させ給ふは、いかなる事ぞと心には、思へど語ふ者もなく、打過ぐるうち黄昏が、生みし娘の玉葛を、人に遣らんといふを聞き、正しく主君の曾孫にてあり、我もり育てせめてはそれを、人がましくなし參らせんと、貰ひ受けて山吹が、望むにまかせ預けおき、なほ凌晨の家の樣子を、他所ながら窺ふに、此頃は光氏の、忍びおはすといふ取沙汰、こはけしからぬ事なりと、思ふ程なく月見の夜、凌晨も黄昏も、何地行きけん更に知れず。その次の年かの親子は、なにがしといふ古寺にて、自害してはてたりと、告ぐる者のありければ、心得難く彌五六郎、妻の朽葉を誘ひて、かの古寺へぞ到りける。

家を追出しぬ。彌五六郎は力なく、この西の京へ立退きし、程なく教具謀叛を企て、籠城なしゝが遂に敵はず、義正公に打滅され、板畠の家絶えしかば、彌五六郎は口惜しう、思へど更にせん方なく、元より二君に仕ふべき、心も無ければ浪人し、其後朽葉は娶りしなり。彼板畠家に仕へし頃より、美食を好まず衣裳を飾らず、倹約を守りしかば、貯乏しからざりけん、斯くて後三人の子を持ちし後も、さまでに家は貧しからず、朽葉が父の故郷なる、肥前の國にいさゝかながら、豫て田地を求め置き、彌次郎をばはや疾くに、彼地へ一人くだし遣りつ。かくて後に彌五六郎、五條の町を通りし時、とある家の門にたゝずむ、女の顔を不圖見れば、故主の娘横雲の、面ざしに能く似たり。いと訝しくあたりの人に、樣子を問ふにあれこそは、凌晨といふ寡なれ、娘と二人住むよしを、語るを聞いてさては姫君、落城の折遁れ給ひ、憚りて名を呼かへられしに、疑ひなしと横雲凌晨、縁ある言葉に大方悟り、直にその家に行き、凌晨に對面し、わが事をまづ先として、語合ひしに教具の、息女に相違なかりしかば、彌五六郎は大に喜び、是よりたび〳〵おとづれしが、もと凌晨は武士の娘に、似合はず若き頃よりも、蓮葉の生なるが上、今は猶更世におちぶれ、年を積みて我儘募り、彌五六郎がもの固く、主人の如く敬ふを

よも劣り給ふまじ、さまでに深くは思さゞる、方々をさへそれ〳〵に、捨てさせ給はぬ御心の、長さを見るに是はまして、思ひしみさせ給ひし御樣子、氏ある人と一列に、こそあらざらめいづれへか、御下館をいとなまれ、長閑に住ませ給はんものをと、返らぬ事のみ悔みつゝ、せめてはかの玉葛が、行方を尋ね仕へんと、心に思へど打出しては、言はぬ色なる山吹の、樣子を光氏推量し、人なき隙に彼に向ひ、「其方がかね〴〵戀しう思ふ、かの黄昏が忘形見は、我も床しく見まほしゝ。館にありて心にのみ、慕ふは詮なき事なれば、京は更なり近國を、廻りて行方を聞出せよ。それとはなしに我よしなに、計ふべし」とて明石姫、なほすこやかに成長すべき、その爲に所々へ、祈願を籠めしと代參を、山吹に言付けられ、近き邊の加茂貴船、松尾鞍馬をはじめとし、あるは近江の比良唐崎、あるは浪華の住吉なんど、殘る隈なく尋ねさせ、たまへどいまだ是ぞといふ、手懸りだにも無かりけり。そも〳〵かの玉葛が、幼き頃の事どもは、前の卷に山吹が、物語にほゞ聞えしかど、なほ繰返して昔の事より、詳しくこゝに記すべし。光氏のいと若き頃、京西洞院に、大兒彌五六郎といふ者あり、妻を朽葉といひ、三人の子を持てり。總領を春之助、二男を彌次郎末の子は、女にて宮城と呼べり。既に前にも言ひし如く、彌五六郎若き頃、凌晨の父、板畠敎具の家臣にて、伊勢の國に在りけるが、心正しき者なる故、

れ、御歎を増んな必定、直樣我と來るべし、跡にて宜く申しなさん」ト、心すゝまぬ雁音の、手を取り其夜は小毬に、對面もせず引返せば、氏仲は歸るにも、歸り難くて止りしが、人のさげすみ思はんかと、心疚しく例のわが、住みし一間に臥したりしが、廣庭傳ひに人の行く、聲の間近く聞えしも、次第々々に遠ざかるは、これ高直が歸るならんと、思へば心も靜ならず。小毬は冠者の君の、おはしましゝ事を聞き、此方へ渡らせ給へとて、腰元に言はせけれど、寐たる樣にて動きもせず、淋しく明して霜のいと、白きに急ぎ出で給ふ。人に面を見らるゝが、いと恥かしく小毬に、逢ひなばその事この事を、打歎かんも苦しければ、嵯峨へ歸りて心安く、一人住まんと朝まだきに、取急きて出で給ふなりけり。途のほど心細き、事のみ思ひ續くるに、空の氣色もいたう曇り、まだ暗かりければ霜氷、結ぶに袖へ何が降る。

　乙女の卷はしばらく置き、玉葛の卷へうつる。

遙に年月古寺の、草葉の露と消果てし、かの黃昏があはれなりし、樣を光氏今に忘れず、菫野が召仕の、山吹をさへその形見と、思へばさる年とりあげて、明石姬の傅に、加へさせ給ひければ、山吹は世に有難き、惠を嬉しく思ふにつけ、是もいかなる緣やらん、たゞ黃昏の事のみ戀しく、今までながらへ居たまはゞ、紫の上ほどの、御寵愛はあらずとも、朝霧の御方には、

し年頃は、さまでに思はざりしにや、語ふ隙のある時も、隔てて住みしが今更に、悔しうこそ」ト聞ゆれば、「此方も同じ思ひぞ」ト、微に答へ雁音が、打泣く顔をあはれとまもり、「御身も我も父と父の、許へ是より引分れ、顔見る事も叶はぬ様に、なりなば淋しき折々は、戀しう思ひ給はんや」ト、いとあどけなく問ひ給へば、少し點きたりし様、なほ幼げにてかはいらしよ。此時にはや座敷々々は、銀燭を點しつれ、晝よりもなほ明かにて、殿の渡り給へると、先觸の聲聞ゆるにぞ、雁音はいと恐ろしく、身も打慄ひ迯退かんと、するを氏仲「まづ暫し」ト、押しづめて靜に坐し、敢て驚く風情も見えず。是は所詮高直に、言騒がれて立ちたる浮名は、今更に消え難し、人目を深く忍びしは、たゞ恥かしき故のみなり、我に向ひて何とかせんと、心を定めし故にてあり。はた雁音の傅にも、かの當吉に引かへて、高直が機嫌に入らんと、追従する女どもは、「雁金様は何所にぞ」ト、彼方此方と走り廻り、遂には此所に尋ね來り、この體を見て打驚き、「後室様の御部屋の御次、さすればあなたは御存じでか。もし此事を殿様が、お聞付けなされたら、夫こそいよ〳〵後室様を、お恨みなされて親子御の、御中が御不和にならうも知れぬ。早く此方へ」ト雁音を、無理に誘ひ行く折節、はや高直は入來り、雁音が出迎へしと、思ひ違へて打喜び、「能くこそ〳〵母上に、御暇乞なすならば、いよ〳〵名殘を惜ませら

君と、同じ樣に心得てお側に仕へ馴れたるを、此方へおこせと殿樣の、御意はあまりのお我儘。モシ雁音樣この上に、父君が他所外へ、緣付けとおつしやるまいものでもないが、必ず御合點遊ばすな」ト、言はれていよ〳〵恥かしと、思ふか更に言葉もなし。小毬は珠數爪繰り、「むづかしい事言ひやんな。定め難きは人の宿世、善きも惡きも因果ぞ」ト、念佛となへて居たりけり。あて吉はなほ差出で、「冠者の君を平侍の、姿でお置き遊ばすを、殿樣までが侮りたまひ、見けなして御座れども、あれはあなたに御學問を、勵ませ申さんその爲に、光氏君の御計ひ、今に御出世遊ばすと、頭の上る者はあるまい。人に劣り給はぬを、早うお目にかけたし」ト、腹だたしさに精一杯、言ひつゝ一間をふと見れば、屛風の後に冠者の君、なかば隱れて此方を窺ひ、人や咎めん怪しまんと、思ひ給ふか身を潛め、心細げにおはする風情、御いたはしく思ひやり、小毬には「御佛に、はや御燈をあげたれば、御看經を遊ばせ」ト、兎角その場を取繕ひ、夕暮の騷がしき、人に紛れて雁音を、冠者の君の忍ばせ給ふ、その傍へ當吉が、誘ひて行きしかど、面と面をあはすれば、さすが互に恥かしく、胸塞りて物言はず、寄添ひもせず引離れ、たゞ差俯き居たりしが、やゝありて冠者の君、「高直が心辛く、わが事よりして人にまで、難儀をかくるが苦しき故、思ひ絶えんと思ふ程、生憎になほ忘られず、ひとつに住み

しき事ありしを、あからさまに知らする道理、まづ一度は引離ち、其後事を計ふとも、まだ遲からじ内君の、御徒然にかこつけて、此方も彼方も取つくろひ、何事なくわが方へ、連行く初の思案ぞよきと、心に問ひ心に答へ、いそがはしげに歸りけり。

小毬は高直が、後影を遙に見送り、腰元女に打向ひ、「さいぜんたしか雁音も、此次の間まで來かゝりて、今の樣子を立隱れ、聞いて居たのをちらと見た。高直こそ今までとは、うつて變つて妾が氣に、逆ふ故に此方から言ふ、言葉も兎角かどだつなれ。雁音は此祖母を、よもや怨みもしやるまい。さすれば心おかずとも、此方へと呼んで來てたも」ト、言葉の中に雁音は、姿をかしく引つくろひ、靜やかに入來る。年はやう〳〵十四なれば、大人と子供の間といふ、中にもどこやら幼けて、まだ子めかしく美しゝ。小毬つく〴〵顏打まもり、「今まで片時側を離さず、旦暮のもてあそび、ものと思うて樂みしを、彼方へ渡さば淋しうて、私は命もたまるまい。命といへばもう先の、短い齡のそのうちに、其方の嫁入は見られまいと、案じて居たれど生ながら、見捨てられんといふ事は、更に思ひもつかざりし」ト、涙落せば雁音も、いと恥かしきと悲しきに、顏をも持上ず泣きにけり。當吉は出來り、「氏仲君はまだ御腹に、おいでなされた昔から、御附き申して居つたれば、大事に存上ぐるのは、申さずと知れてある。雁音樣をもその

の君も雁音も、互にさういふ心なら、疾くより妾へほのめかし、給はゞ計ひ様もあらうに、心に隔のありし故、人の難非を受けらるゝ。しかし是は幼きどち、高直は又物事に、能く行屆くと世の人には、譽めらるゝ身にありながら、兎角に妾が心を疑ひ、今雁音を連行くとも、篠淸とはなさぬ中、美しうは行かぬが習、殊には仕へまるらする、その内君は彼には妹、繼しき母の實の娘と、思へば幼い心にも、しんせつには大切と、思はぬよりしてもて惱み、其方後悔じやるな」ト、涙ぐみつゝ言ふ折しも、冠者の君參り給へり。それはもしも隙あらば、雁音に物言はんとて。月に三度の掟を破り、此頃繁くおはするなりけり。高直が近習の武士、遙此方に控ゆるを、氏仲は遠目に見つけて、さては左衛門此所に在りと、心づくより恥かしく、小毬の方へは行かず、わが住馴れし一間の内へ、やをら隱れて入り給へり。御供には高直が、子供をはじめ小小性など、數多附添ひ來りしかど、この君の御かんばせの、娟姸さには似る者なし。高直は室町へ、これより又出仕して、雁音の迎には、夕つ方參らんと、出行きながら冠者の君の、渡らせ給ひし樣子を知り、さては兎角に彼が事、思ひ切られぬものなるべし、さなきとても今までの、噂も高くはや人も、知りたる上は香壽君の、御添臥には差上げ難し、されば此儘冠者の君に、まゐらせんかと思ひしが、又つく〴〵と打案じ、さする時には館の内に、猥がは

直は、打喜びてその次の日、おのれが館へ内君を、請じまゐらせおんもてなしの、事どもは篠清に、打まかせ置き夫より直に、母の住居へ立越えて、今日室町の内君の、渡らせられし事を語り、近く摺寄り言葉を低くし、「今更申すに及ばねども、雁音事は御手許へ、預置きまゐらすれば、心がかりはあらざりしが、彼も早おとなに近く、成長もなしたるなれば、なま心つかせられし、御方と立交り、隔なき遊なんど、せさせんははや憚有り。然れば彼をわが方へ、一先渡し給はれ」ト、思込んで述べければ、小毬は本意なく思ひ、「たゞ一本の二葉の上、枯果て給ひし其後は、心細くいと淋しう、過せし折に嬉しくも、あの孫を得て死ぬまでの、かしづきぐさと思ひ取り、老の心のむづかしきも、是にぞ今まで慰めぬ。それに思はぬ事起り、御身の心に何とやら、隔あるこそ辛けれ」ト、しけ〴〵顔を打まもられ、高直は恐入り、「いかでか隔の候べき、隔の無き故心に思ふ、事をそのまゝ聞えしなり。只今も申す通り、富世の前の御心、あまりに屈し給はんと、館へ迎へ参らせたれば、雁音も諸共に、遊びて慰め申させんと、思ふよりほか仔細なし。長の年月育み給ひ、人となさせ給ひし大恩、よも疎略には思はじ」ト、屹度見上ぐるその顔ばせ、所詮今更止めても、止まるまじき様なるを、小毬は見て取りて、いと口惜しく思ひけん、常より言葉も荒々しく、「あゝ世の人の心ほど、定まり難きものはなし。冠者

今まで心安かりしを、惡き事とや知りたりけん、是より絶えて文も送らず。されども久しく仕へなれし、年長し女なんどは、人目の隙を覗ひて、一言ばかりの通はせの、便はたま〳〵有りしなるべし。

高直は小毬を、怨めしと思ふにや、それより絶えて此方へ來らず。ある時妻の篠清と、物語するその序に、「我室町へ出仕の度々、今の内君富世の前の、御有樣を見上ぐるに、晝夜君の御側を、離れずおはしますなれば、その身は更なりつき〴〵の、女どもまで暫しがうちも、打寛ぐ隙のなく、苦しと思ふ折もあるべし。故にまづ此館へ、迎へ參らせゆる〳〵と、御心を慰めて、其後歸し奉らば、君も一人珍らしと、みそなはして御寵愛も、まさらんと思ふなり。内君館に御逗留の、その中のお伽には、雁音を呼寄すべし」ト、かの冠者の君の御事は、氣色にも顯さで、おのづからに其中を、さけんと心ひとつに思ひ、たゞ内君のおん氣ばらしの、事にかこちて聞えければ、篠清も「打絶えし、御顏を見上ぐるが、いと嬉しゝ」ト喜ぶにぞ、さらばとて高直は、取急ぎて御所へ赴き、件の事ども言上に、及びていまだ義植公は、しか〴〵に内君へ、御暇のゆるしもなきを、なほさま〴〵に言なしつゝ、富世の前のつき〴〵へ、俄に用意を觸れければ、君も今は止め難く、思しゝにやさもあらば、暫しの中はと澁々に、御許容ありしを高

み跳り目も合はず。されば二人が閨近く、今宵臥したる女どもは、其方此方の氣色を悟り、御心根をいとほしと、思へど憖ひ物言はゞ、惡かりなんと互に思ひ、更に知らぬ風情して、そら寢してこそ居たりけれ。

雲井之丞はなほ一人、歎息しつゝ小夜半の、風も一入身にしみて、

　吹きそふやかりがねだにも淋しきに

呟きけるが小毬の、部屋に並びて臥したれば、もしや目さめて聞かんかと、其後は聲をも立てず、うちやすめども何となく、恥かしうて朝夙く起き、さる頃まで住馴れし、一間に至り引隱し、文は書けどもあて吉はじめ、親しき女にいであはねば、それを送らん便無く、さればとて又雁音が、部屋へは今更行き難く、胸塞りてつく〴〵と、心の中に打案じ、たゞ口惜しく思ひながら、すご〳〵嵯峨へ歸りけり。

雁音もまた高直が、言騷がしゝ事どもは、恥かしけれど、かくてわが身の末如何ならん、人々はいかゞ思ひて居るやらん、とまでは深く心もつかず、常の如くに女どもと、打語ひてさまでに父の、打腹立ちしを歎かざる、幼心を乳母どもは、あはれと思ひ折に觸れ、はや御年も加はれば、かりそめにも男子とは、親しく語ひ給ひそと、さま〴〵に諫むるにぞ、自らも我君と、

打笑ひ、「過ぎつる事は是非もなし、今より人の口の端に、懸らぬ樣に御心を、つけ給へ」とて物語を、他へ遷せど氏仲は、何事も耳に入らず、これよりしては文などを、通はさんも難かるべしと、思へばいと〳〵歎かしく、御湯漬など持出づれど、ほしくなしとて箸をも取らず、閨へ入れどもうか〳〵と、心も空にて眠りかね、人靜りしを窺ひて、中障子を開かんと、すれども常には尻差を、差固めもせざりしが、今宵は錠をやさしたりけん、押せども引けどもいと固く、更に開くべき氣色なく、人音もせず秋風に、燈火しば〳〵瞬きて、心細さは限なし。閨にも戻らずそのまゝに、かの中障子に打凭れ、吐息してこそ居たりけれ。

此時に雁音も、寢間にてふつと目を覺し、軒端に近き呉竹の、風に戰ぐもいと淋しく、わが名の雁の鳴きわたる、聲も仄に聞ゆるにぞ、まだ年足らぬ心にも、兎角に思ひ亂るゝにや、「雲井の雁もわが如や、悲しと鳴きて過ぎぬるか」ト、獨語するその氣色、いと若やかにて愛らしゝ。冠者の君の寢所と此所は、その間遙に隔たれど、聞馴れし聲なるが故、氏仲これを聞付けて、心もとなく思しけん、「此所開けよ〳〵。當吉は何所にか」と、呼び給へども音もせず。此方の一間に雁音も、耳を欹て當吉を、呼び給ひしはもし今の、思はず言ひし獨語、君は洩聞き給ひしかと、いと恥かしく夜著の中へ、顏引入れて臥したれど、同じ思ひにこれも又、胸の

三十一編　上

赤松の館にて、かゝる騒のありし事は、氏仲夢にも知召さず、何心なく渡り給へり。これさりし夜は人目繁く、思ふ事ども雁音に、聞えず空しく歸りしかば、押續けて靜なる、夕つかたおはしゝなるべし。小毬常には待わびし、その樣面に現れて、喜び打笑みもてはやすを、今宵は何か物ありげに、あるべきかゝりの御物語、聞上ぐるその序に、「君の事より事起り、高直妾を打恨み、側使の女どもは、さん〴〵叱り懲されたり。いかなる高位の姫君を、迎へ給ふも御心の、儘なる御身におはしながら、あさ〳〵しき事をしも、思ひそめて妾にまで、物思はせて給はるが、心苦しく侍るになん。此事言はじと思ひしかど、人のかくまで言騒ぐを、知召さでおはさんも、いとほしければ聞ゆるなり」ト、涙さしぐみ摺寄るにぞ、氏仲は元よりも、心にかかる筋なれば、はつと思ひて面も赧み、しばし言葉も無かりしが、さあらぬ體にて打微笑み、「何事にか侍らん、靜なる所に籠り、學問にのみ心を入れし、其後には打絶えて、人に交る事なければ、恨を受くる覺もなし」ト、口にはいへど恥かしき、氣色に見ゆるがあはれさに、小毬も





修紫田舎源氏第三十一編序

道中雙六の宮の所と、源氏繪の玉葛には、必ず船がなくてはならねど、走馬燈釣花生、折居の舟までも、はや前に出したり、三挺猪牙のやうな形は、後の浮舟に用あれば、なう〱此舟畫きてたべと、五渡亭の註文に、ほと〱棹のさしつまり、思ひつきたる寶船、江戸は正月二日なれど、京は節分の夜にてあれば、それにならひし夢物語、筑紫を出て都まで、浪乗船の音信に、よき便きく初瀬まうで、長き夜泣に按じても、とをの眠りの日ざましき、趣向の胸にうかばねば、是はことに作りざま、異なる冊子に侍らず、唯早舟のはやきを専とし、いそげど近づく歳暮、ひゞきの灘は物かはなる、大晦日になりしかば、ちひさき提燈飛ぶやうに、來るなどいふは海賊の、ひたふるなるよりおそろしき、掛乞の追來るにやと、思へど更にせんかたなし、やう〱鷄のうたふ聲に、少しいきいづる心地する。

天保己亥元旦　　柳亭種彦

達、月卿雲客の姫上とも、縁を組んで赤松づれの、娘をたやすく嫁には取らぬと、思ふも愛に溺るゝ故か、其方は何と思やる」ト、言ふを此方に高直は、まだ立去らずに聞きたるか、聞かずか夫はよくも知らず、若し漏聞きなば小毬を、いよ〳〵心に恨むなるべし。

すべき」なんど呟きつゝ、なほ忍びて彼が事、女どもに言置くを、此方の一間に洩聞く小毬、夫も是もいとほしく、思ふ中にも冠者の君、かくと聞召されなば、さぞや悲しと思すべし、昨日今日まで懐に、抱かれておはせしが、早くもおとな恥かしき、心にならせ給ひしと、かの過をし給ひしが、猶更に愛らしく、心に思ひ餘りけん、あて吉を呼寄せて、「高直は冠者の君の、御事を情なく、世にあるまじき事の樣に、言ふのが私は合點が行かぬ。其方も豫て知つての通り、雁音は妾腹、その女も程なく下り、高直もどういふ事か、雁音をばいとしがらず、篠清は猶更にて、傅く者のないのがあはれさ、私が手許へ引取つて、あの樣に美しう、育てた故に香壽君に、奉らんの心もつけ、それほど大事の娘なら、初から側をはなさず、屹度番して居るが宜い。既にさる年高直が、湯殿がかりの女に手をかけ、これも女の子を生みしが、篠清がむづかりし、故か知らねど其女に、娘もつけて館を出し、今ほどは近江の國に、居るとは風の便にきく。雁音もその通り、妾が取上げ養はずは、何所に住むも覺束ない、身になつて居やうも知れぬ。さて室町の内君にと、思ひし的が外れなば、冠者の君よりその外に、勝りし人はよもあらじ。雁音もいとほしき、孫なればこそ許しもすれ、もし又冠者の君ばかりが、私の孫におはしなば、誰あらう室町御所の、御後見の御總領、御形御才智、ひとしき人の世になき公

へありし由、むかしく〳〵の物語に、記したるは誰も知る。それは大方仲立の、勸めし事に侍れど、それは旦暮立交り、年頃おはしましつるにて、まだいはけなき程なればと、後室樣のそのまゝに、さしおかるゝを私どもが、隔てまゐらす樣はなし。一昨年よりはあなたの仰を、守らせられて御遊も、ひとつにはし給はず、冠者の君はお行儀正しく、戲言なんどは假初にも、宣はぬお生ゆゑ、よもやと思ふ誰々も、心の油斷に此頃まで、それと知りたる者はなし。たゞ今となりかう〳〵と、申上げても詮ない事、夫ゆゑ控へて居りました」ト、言解かれて面を和げ、「はや隱れあるまじき、事なるべけれど此上に、ふたりの噂をする者あらば、かつもつて無きことゝ、浮名を言やむ樣にせよ。近き中に雁音も、わが方に引取らん。かの若君と語ひしを、其方達も善き事と、思ひはせまじ」ト言ひければ、乳母どもは悲しき中にも、嬉しき仰と打喜び、「女御更衣その上にも、位の高いお人があらば、お育て申した身の冥加、それにしてあげたい願。冠者の君もあてやかに、おはしませども光氏樣の、お若い時に似申したら、それやこれやで雁音樣の、お氣のもめる事があらうと、案じこそすれ善い事とは、さら〳〵存じませぬ」など、言ふを高直うち聞きて、「さもあらん〳〵、雁音はまだ教訓も、言がひなき幼い生、それ故今は強ても聞えず。汝等我になり代り、能く說諭せ如何にして、いたづらにならざる樣、な

方ならず、心せく事あるにより、某を見忘れて、立騒ぐがをかしさに、我こそ太郎高直と、名乗りてもまだ心付かず。尤も是は光氏君の、御計策のある事にて、あながちに黄昏に、御心をかけられし、とにもあらねど二心を、抱く者なら病氣と言なし、此お供をば致さぬ筈。宗入にわが貰ひかけ、くれぬ娘に手をついて、敬ひ傅きその事この事、口外へ出さぬは、君を大事と思ふから。されば娘が事につきても、光氏君と挑み爭ふ、心は更にあらざれど、いと口惜く安からぬ、事には思ひ候」ト、座を蹴立てて立上れば、かの一夜の陰言の、女どもは顔見合せ、何のためにか打解けし、物語をしたりけん、それから起りておいとしや、皆様へ御難儀かけ、此まア末はどうなる事と、打擧りてぞ歎きける。

雁音は此事を、聞きしかいまだ聞かざるか、何心なく居る樣の、いと愛らしきを高直は、部屋の口より差覗き、幼心のはかなくて、誘はれしまゝ何時となく、つひ打解けしものならん、さうとは知らず行末は、人に勝れし身とせんと、思ひし我こそ彼にもまして、はかなけれとて出でんとせしが、なほ憤に堪へかねてや、雁音が乳母をはじめ、傅き女を呼集め、さま〴〵に叱り懲し、さいなみければ女どもは更に返さん言葉もなく、皆さし俯き居る中より、あて吉は恐る〳〵、少し前へ進出で、「斯樣の事のあやまちは、みかど樣の大事に遊ばす、姫君にさ

ん」ト、いふに高直懐より、一通の文取出し、「浮きたる事には侍らず、あれに列なる女どもは、殘らず知りて母上と、我のみ心付かざるを、目引き袖引き笑ふなり。まだその上に雁音が、小袖を縫はせん手本にと、持たせ歸りし彼が衣の、襟に狹みて此文あり」ト、見すれば小毬言爭ふ、言葉もなくて吐息をつき、「腹の立つのは道理ながら、もう言うても詮ない事、篤と心をまづしづめや。あの犬猫といふものは、常は中よく戯れむつみ、遊んで居れど食物に、臨む時はそれを爭ひ、中惡くなるものにてあり。人は女の色香に迷ひ、又子の愛に溺るゝ二つの、爭ひよりして親しき中も、疎くなるのが世のならはし。是等の事より必ずしも、光氏君を恨めしと、假にも思ひ給ふな」ト、教訓すれば涙を浮め、「子のかはいさに心迷ひ、女色に耽りて君恩を、打忘れ候程な、道知らずにも侍らず。大井の里のおもひものは、己心をかけたる女、夫のみならず若き程、通ひ馴れて女の子まで、生ませたる黄昏と、申す女の候ひしが、その母のかたましき、心にうんじて金を與へ、緣切つて後光氏君、わが事をば知召さず、彼が許を訪ひ給ふ、忍びのお供を命ぜられ、その上にかの黄昏を、連退き給ふその夜さりは、御跡へいりかはり、かう〳〵せよとの御差圖、それさへ辭み奉らず、それまでは彼等親子に、逢はざる樣に計ひしが、今ははやせん方なく、見咎められなば夫までと、臥したる折から彼が母、立歸りしが大

て、館に止置き參らせしと、人の譏を受けんもうたてし。仲立なくての婚禮は、輕き者だに忌む事にて、冠者の御爲にも、善からぬ事にて候なり。只さし離れ珍らしき、所へ嫁らせ娶るにも、知らざる女を迎ふるが、よしとは今更申さずとも、誰々も知る事にてあり。今室町にてときめく磯菜は、君より遙に年上なり、いと若やかなる御程には、物心知る御側仕が、御機嫌に入るものなるゆゑ、雁音をば香壽君に、奉らんと思ひたる、事もかひなくなり行きし。光氏君も其事を、薄々知召したる故、此頃嵯峨へ冠者の君を、迎取られしものなるべし。ましてや朝夕御側に、附添ひ給ひし母上の、左樣の氣色を御覽じ知らぬ、事のなしとは思はれず。冠者の君も御孫なれば、その愛に溺れ給ひ、年月幼き人々の、心にまかせて捨置かれしが、恨めしう候」ト、言葉忙しく聞えけり。夢にも知らぬ事なれば、小毬はいとあさましう、覺えていよ〳〵顏色變り、「さう宣ふは道理なれど、神かけてこの人々の、下の心をさら〳〵知らず、いと口惜しとはおん身より、妾がまして思ふのを、二人の者と心でも、合はせた樣に此身にまで、罪を負せて恨みやるのが、又此方からも恨めしい。幼き時より預りて、其方達が思はぬ事まで、とやかうと心をつけ、育上げしが心の闇に、惑ひていつがいつまでも、子供の樣に思ひしは、老いに耄れたる私が過失。さて其事は誰が告げし、さかしら言を實とせば、君の御名や汚れ

ならよし聞えても、宜からうと思うたから、言ひたきまゝの陰言、もしお聞きなされたら、さぞ御苦勞に遊ばさう」「その御苦勞はよけれども、はしたない奴等ぢやと、私等の御暇が、出やうも知れぬ」ト投首溜息、顔も青菜にしを〳〵と、後は言葉もなかりけり。

是より二日ばかり日をおき、高直また小毬の方に來れり。しげ〳〵見ゆるを嬉しゝと、思ふか殊に機嫌よく、笑を含みて何やかや、聞ゆる母の言葉も耳に、入らざる體にて高直は、常に變りて氣色悪しく、「かく座してあるその中にも、わが顔を女どもが、打まもらんかと恥かしく、もとより愚の身なれども、母の仰は聊も、背かじものと思ひしを、娘が不所存なるにより、御心に逆らふべき、事の絃に起りしなり」ト、いふを聞きて小毬は、笑を含みし顔色たがひ、眼も大きうなり、「そはいかなる事にかあらん、餘命もなき老の末に、心がかりの事を聞くこそ、安からね」ト驚くも、いとほしけれど高直は、慣鎭めがたくて近く進み、「娘一人は何事をも、打頼置き參らせ、己夫婦はなか〳〵に、幼き時より目もかけず、扨その妹は篠清が、手許に育て室町の、内君とはなつたれども、御寵愛深からず。其事を歎くにつけつゝ、せめては是なる娘なりと、人になさんと樂みしを、思ひの外なる事こそあれ。冠者の君は御才智、殊に賢く天が下に、竝ぶ人なき學者とは、なり給はんが高直は、初よりしてわが娘と、めあはさんの心に

居る。とは知らずして茶の間には、腰元女が寄集り、「皆は何と思やるぞ、今までひとつに置き申した、若君と雁音樣、此頃俄に中をさけ、今日もたま〳〵若君が、おいでなさると彼方行けと、琴の音さへも聞えぬ程な、遠い所へ追遣られ、雁音さまは悲しからう。雛事にも是が若君、これが私と押竝べ、羽子板持つても殿樣かみ樣、頓て中よくかうしてと、みわたし嫁御になるのが樂み。御物心もつくばねの、戀ぞ積りしお二人の、中を今更隔てたとて、もう所詮仕方はない」ト、言へば一人が打點き、「ほんに此方の殿樣ほど、お利口な人はないと、世間でもいふけれど、いつまでも子供ぢやと、思うておいで遊ばしたは、あまり賢い沙汰ではない。親馬鹿とやら世話にもいふ、子に掛つてはふだんの智惠も、役に立たぬ」トいふ側から、又一人がさしいでて、「まだ若君が此方に御座つて、子を見ること親に如かずと、本をお讀み遊ばすを、たびたび聞いたがさうして見れば、書物も當にならぬ」など、わが身の噂を高直は、耳を留めて篤と聞き、思ひ寄らざる事にはあらねど、まだいはけなし幼しと、心の油斷はわが過失、世は憂きものに有りけるかなと、つく〴〵思ふその處へ、當吉小袖を持來しかば、直に引連れ音もせず、出行く影をかの舉りし、女共は遠目に見つけ、「殿は今こそ歸らせ給ふ、いづれに隠れて居給ひけん」ト、一人が言へば皆々驚き、「御袴の音のしたは、冠者の君のたしかにおいで、さう

引籠りておはしなば、御病氣の出でんかと、恐れながら母小毬、心を痛めて居る樣子。御隙あらば繁々に、渡らせ給ひて又外の、御遊びをも遊ばすべし。禮と樂とは聖人も、竝べ言ひて笛の音にも、ふるごとはなほ傳はるものと、承はりて候」ト、差出せば氏仲は、取上げていと若う、をかしげなる音に吹立つるが、面白ければ小毬は、我を忘れて拍子をとり、その身若くは立上り、舞ひもなすべき有樣は、時鳥より聞く度に、いと珍らしき心地なるべし。高直少し膝を進め、「御父君も彼樣の遊を、好み給ひて室町の、忙はしき事どもは、大方己に讓らせられ、次第にのがるゝ御心なり。誠に思ふまゝならざる、浮世の中にはわが好ける、遊をなして暮すこそ、身の得ならめ」などいふ中、くらうなれば火を點させ、御湯漬果物など、もてなしまゐらせ猶さま〴〵、物語に時移り、さて御暇たまはらんと、母小毬にも別を告げ、高直は立出でしが、「それよく〳〵忘れたり」ト、獨り點き臺子の間の、此方まで立戻り、邊を見れば幸ひに、當吉が居たるを呼び、「雁音に贈らんと、篠淸が物好にて、衣を染させ置きつるが、縫はせんにゆき丈知れず、手本に彼が小袖をひとつ、持たせ歸れと言ひつるなり。仕立あげなば篠淸が、みづから是へ持來るならん、まづ夫までは母上にも、知らさぬやうに其手本に、すべきを早う」ト言ひければ、當吉は心得て、立行く跡に高直は、人に逢はんも懶く思ひ、身をかい細りて忍び

不圖うちまもれば恥らしきを、小毬は限りなく、かはゆく思ひて眺め居たり。ひて、少し背くる横顏のなほあてやかに、左に拍子を取る手つきなど、雛師が造りし樣にて美の半開、柳の髮に炷きしめし、伽羅の仄に打薫り、嬌かしきを高直が、

高直は由なき事を、言出して母の心を、痛めしを悔い思ひ、氣を慰めんと傍に、ありあふ笛を取上げて、吹合する音のいとさえて、庭の梢もほろ〳〵と、木葉のこらず飜るゝは、この響かと人々も、屏風の後にこぞり寄り、感にたへてぞ聞居たる。

高直輿に入つたりけん、雁音になほ琴を彈かせ、その唱歌をうたふ聲、面白ければ小毬は、餘念もなげに聞惚れて、孫は更なり四十にも、はや遠からぬ高直をも、いとうつくしと思ふ折、又うつくしみを添へんとや、冠者の君まゐり給へり。御供には梅之助、御刀を持てかしこまる。高直驚き雁音を、まづ退かせ此方にとて、上座に請じ引下り、「室町御所の事繁く、近頃は嵯峨の御館へ、罷出でず候問、打絶えて御目に觸れず。さて御學問御出精は、一段の事ながら、あまりに深く其道に、しみれば却つてかたくなに、心のなりて世の人と、立交るにはさまたげと、なる事ありとは光氏君、思し知りておはすれども、左樣に御意のある時は、君にはそれを善き事とて、更に書を讀み給ふまじと、わざと嚴しく片時も、怠るなとは宣ふならんが、かく

ひも出さず、撥持つ樣も忘れし」ト、口には言へどひと手ふた手、面白う彈鳴し、「朝霧といふ御方は、藝能ばかりかお心も、人に優れていと賢く、すなほにおはするものならん、光氏君には御子少く、殊には又珍らしい、女の御子を擧けながら、自らの手に養はず、ときめき給ふ御方へ、讓り給ひし取計ひ、なみ〳〵のかたましい、女心に及ばぬ事」ト、母の言葉に、「されば
されば、女はたゞ心ばせの、よきより世にも出づるなり、今の內君富世の前、幼き時より教訓し、すぐよかにおいたてし、夫故にこそ今かゝる、幸は得給ふなれ。世にありがたき事ながら、たゞ〳〵心に懸れるは、やゝともすれば彼の磯菜に、けおされ給ふ御有樣。とかく浮世は思ひの外なる、事の出來るものにぞ侍る。月日のたつはいと早し、香壽君の御元服も、只今の事なるにより、其時にはこの雁音をと、人知らず思ひしに、明石の浦より呼上され、淺くは思さぬかの方の、御腹といひ殊には嵯峨へ、移植ゑてし姫百合の、咲出で給はん花の御所、此上にこす人やある。されば又此事も、叶ひがたし」ト打歎けば、小毬も吐息をつき、「二葉の上の御機嫌よう、渡らせ給はゞその樣な、苦勞もなくて何事も、心の儘になりなんを、世を早う過ぎさせられ、剩へ政則殿も、はてられたれば誰にかうと、問ひ談合の相手もなし」ト、猶さまざまに打案ずる、心の中はつゆ知らぬ、雁音は又琴引よせ、調子をかへて彈すさむ。譬はゞ花

小毬はその昔、二葉の上の化粧所を、住居となして遙に左衛門、高直が居間よりは、隔たりて遠ければ、日毎には親と子の、對面もする事なし。その上今は亡父の、職を高直受繼ぎて、室町への出仕しげく、母小毬とはおのづから、疎々しく過ぎたるが、ある時常より早く下り、明日も幸ひ取急ぐ、事もなければのどやかなる、心地せられてひとわたり、時雨降り過ぎたゞならぬ、荻の上風そよ〳〵と、いと靜なる夕暮方、母の機嫌をゆる〳〵と、伺はんとて此方へ來り、久しぶりにて雁音に、琴など彈かせて聞きたるに、小毬は若き程より、絲竹の道に詳しく、雁音には幼きより、能く敎へしと覺しくて、年の程にあはすれば、いと床しう調べけり。高直心の中に感じ、「琵琶こそ女の彈ずるに、形は憎き樣なれど、華やかならぬその音色は、却つて床しきものにてあれ。されども是は今の世に、名を得たる者を聞かず、女の中には光氏君、大井の里に籠置き給へる、人こそその父に習ひ、殊に上手と聞き侍れ、かの宗入は其道の、達人に隨ひて、傳を受けし由なれども、それははや昔となり、濱邊に年を經たる人、さほどに優れし藝とも覺えず、ましてや娘はそれに習ひ、彈合すべき者もなき、田舍におひたち光氏君の、お耳に留りその噂を、折々仰ある程の、上手となりしは珍らしゝ。琵琶と申せば母上のを、打絕えて承らず、御慰みに遊ばせ」ト、勸められて打笑ひ、「四ツの糸より六時の勤も、近頃は思

に梓がために公へ、迎取りて義植公へ、差上げんと思はれし、事にて有ればかく言ふも、道理なりと梓には、よしなに答へてかへしやり、程もなく薄雪を、義植公の側仕に、差上げ給ひけりとなん。このもよほしは藤の方、心に疾くよりありしかど、光氏よりして出されし、磯菜が事にて今までは、ひきしろひて置かれしが、はや程も過ぎ薄雪も、年頃になりしかば、かく計はれしものなるべし。

人多からぬを、幸としてしみ〴〵と、打歎きたりければ、藤の方もさる年より、梓がためには繼子の紫、世にときめくを羨ましく、思ふならんと推察し、實の娘薄雪を、迎取りて義植公

雲井之丞氏仲は、赤松の館におひたち、今の左衛門高直が、總領の柏之助、又その弟梅之助と、いふ者なんどを相手とし、殊更に雁音とは、いと親しくてよそめには、まだ物心もなき樣に、見ゆれどいかなる中なりけん、離れがたなき樣なりしを、思ひがけなく去る頃より、嵯峨の館へ氏仲は、住居かはりて一ト月に、三度ばかりの逢瀬となりしを、雁音はいと心憂く、冠者の君も又彼を、忘れがたう思しつゝ、筆の運びは幼けれど、美しき手に書交す、文なんどなまだしどもなく、袂へ入れしが自から、落散る事も度々なれば、當吉はじめ雁音が、腰元の女どもは、ほの〴〵知れるもありけれど、誰に語らん樣もなく、御似合の御中らひと、思へば假にも二人の中を、隔つる樣にはせざりけり。

恐入れば光氏は、一入に機嫌よく、「かく出精するならば、才なき我には勝るべし。子に較ぶれば愚なりと、人に親を譏らする、それこそ却つて孝なれ」ト、氏仲に教訓し、かのそげものの儒者二人を、御前近く呼出し、「おん身らの丹精は、はや顯れて過分ぞ」ト、身に餘るまで祿を賜り、このおん德にて忽ちに、生れ變りし身となりぬ。ましてやこの氏仲君、世にときめき給ふ時節の、來らばいよ〳〵兩人は、御用のあらんかし。又此頃の事なりけん、ある時遊佐の國助が、妻の梓は藤の方の、御機嫌を伺ひに、室町へ出でたる折ふし、藤の方にはこの梓の、むすめ薄雪召連れられ、庭のお茶屋へおいでの由、聞いて梓は直樣に、御後を慕ひまゐらせ、人丸の社の前にて、御目に掛りおん茶屋へ、お供なして四方山の、物語ども聞上ぐる、その序に不圖言出づるは、「妾の夫國助こと、さき〴〵の御所樣より、相變らず御恩を蒙り、總領民部太郎國繁、さいつ年に召出され、父もろともに御所の勤、その姊娘賤機こと、是もはや疾く一色多京、氾廉の許へ嫁し、女の子を一人まうけ、その次は吾子といふも、恐れある嵯峨の內君、さればこの三人は、心にかゝる事もなし、たゞ〳〵行末を案じらるゝは、それに居る薄雪ばかり。血の餘りとか下々の、諺に申す通り、とりわけ國助愛子ゆゑ、兎角に彼が身の上を、宜しき樣に御計ひ、給はる樣に御機嫌を、見合せて願へよと、かね〴〵夫の申付」ト、傍に

その中にとりわけて、めでたき詩ふたひらあり、「誰が作りしか」ト問ひ給ふに、衣裳殊に見苦しく、片隅に打かゞまり、始よりして物をも言はず、二人共に一對の、やつ〳〵しき男なり。「彼等は浮世のそげものにて、人に追從する事なく、諂ふ術を知らざるゆゑ、才ほどは用ひられず、貧しき暮しをするなり」ト、能く識れる者ありて、詳しく申上げしかば、光氏は打點き、「それこそ心奥床し」ト、直に館に留置かれ、其餘の者にはさま〴〵の、物を賜り又遲く、來りて這入る席のなく、控へ居りし儒者までへも、賜多くありければ、喜びてこそ歸りけれ。

かくて後氏仲に、かの留置きし二人を附置き、學問をせさせ給ひ、僅に月に三度ばかり、小毬が許へ行く、事をぞ許し給ひける。氏仲は今まで知らぬ、人の中につと籠り居て、心細くいぶせきあまり、我を何とて父上の、辛くもてなし給ふならん、かく苦しき目を見ずとても、立身なして世の人に、用ひらるゝは多くありと、恨みし事もありつれど、心すなほの生なれば、是も親の慈悲ならんと、つく〴〵と思ひ返し、さらば早く書を讀果て、人に交り世に出でんと、たゞ四五ヶ月ばかりの中に、史記などいふ書は皆あきらめ、いよ〳〵勵みて僅の間に、學問上達赤松の、館に在りし其頃の、師は及び難き程に、文章なんどを綴り給ふを、高直は拜見し、驚き褒めて、「父政則、今までながらへあらんには、さぞ歡ひ候はん」ト、猛き目元に涙を浮め、

らけ、「我々風情は輕々しく、出づる事も叶はざる、御前にて御酒までも、賜るは是非常なり。されば作法も式も捨て、御意に隨ひ打くつろぎ、禮を捨つるが卽ち禮なり。さいふ御身は誰なるぞ」ト、目に角立つれば咎めし男、悠然と髯搔なで、「あはれわが名も知らずして、儒者なんどとは嗚呼がまし」ト、大聖孔子の再來せし、顏付するがをかしさに、人々は皆聲を上げ、笑ひぬればかの男、「あら音高し鎭り給へ、甚だ以て無禮なり。座を退かれよ」なんどとて、嚇しかくればありあふ者ども、いよ〱笑ひて鎭らず、口々に姦しく、罵りをる顏どもも、夜に入りぬればなか〱に、燈火の影いと明く、かの怪しげなる姿まで、鮮かに見え渡るを、正倚なんどは珍らしく、興ある事に思ひけり。さて光氏は珍らしき、題を數多えり出させ、かの儒者どもに賜りて、律詩作るべき由を命じ、みづから正倚氏仲等は、絶句を作り給ひしが、夜の短き頃なりければ、明果てて後近習の侍、靜に披講に及びけり。もとよりもさる事に、馴れたる者にありければ、讀上げたるほど面白し。方々はかゝる高き、家に生れて榮華にのみ、誇り給はん御身なるを、あるは窓の螢に睦み、あるは枝の雪になれ、學び給ひし事なれば、光氏のは更にもいはず、正倚も氏仲も、こゝろ〴〵に作りたる、句每にいと面白く、唐土にも持渡り、傳へまほしき程なりとぞ。光氏はなほ儒者どもが、作りしを手許に取寄せ、つく〴〵と見給ふに、

べき、我こそは〳〵と、おの〳〵嵯峨へあつまるよしを、聞及ばれて四郎正尚こは珍らしき事なりと、弟小五郎晴命はじめ、それかれを誘ひあひ、かの當日には午下る、頃よりして彼所へ赴き、光氏の側に在りて、追々に入來る、學者どもを見給ふに、づぶ〳〵と肥えたるあり、あはれげに痩せたるあり、或は髪をおどろに亂し、或は繪にかく達磨の如く、髭がちなるを剃りもせず、形の淸きは一人もなし。その中にはいと貧しく、今日の衣服に差支へ、借著をやして來りけん、ゆき丈の合はざるを、引伸し押縮め、兎角すれどもかたくなしき、姿を耻づる氣色もなく、その顔付聲遣、容體らしくもてなしつゝ、座に押竝び唐土の、禮にやあらん作法を始め、見も知らぬ取廻の、をかしさを正尚はじめ、若き者はこらへかね、目を見合せて微笑みぬ。光氏は之を制し、惟吉におとなしき、人を添へて銚子盃、肴を座に列ねさせ、まづ打くつろぎ酒飲みてよ、我ばさらなる姿にて、此席には列なり難しと、御簾屛風の陰に隱れ、方々の人柄の、善惡をぞ御覽じける。されば昔も今の世も、漢學する輩に、下戸なるはいと稀なれば、忝しと一禮し、ひきうけ〳〵飲む程に、思はず醉ひて御前も忘れ、誇り顔に一人が、盃を取上ぐるを、いま一人側より咎め、「申さば今日は此殿の、若君が大學に、入らせ給ふ御式なり、最前より伺ふに、御身更にその作法を、辨へざる様子なり」ト、いへば此方も言葉を荒

三十編　下

母の早くも世を去りて、祖母の手に育ちし子どもは、ひととなりても柔弱にて、無藝になるがいと多し。その故をいかんといふに、わが子を育てし頃とはかはり、教へ諭さん氣力薄く、且は又親のなき、ものなりとことさらに、いとほしみあまやかし、子より孫には何とやらん、義理のある心地せられ、叱り懲す事をせず、我儘にさせ置くより、斯く無能にはなれるなり。されば晝夜小毬は、冠者の君をうつくしみ、たゞ幼子の樣にもてなす、その樣を光氏は、見給ひて心に思すは、いつまでも彼所に預け、物習はせては用には立たじ、靜なる所に籠め、思ふさまに學ばせんと、かの朝霧を住まさんとて、しつらはれたる東の、館へ頓て雲井之丞を、迎取りて氏仲と、これより名乘らせ給ひけり。さて今までの學問の、師をさくるにはあらざれど、なほ廣く學びし者を、撰出して教へさせん。八才にして小學に入り、十有五にして大學に、入るは聖の道にてあり。さらば都に名たゝる儒者の、貴賤をえらばず呼集め、詩を作らせ文を書かせ、學力を試みんと、その日を定めて觸られければ、今勢ある光氏の、召をいかでか辭む

れどその父死せぬれば、人に輕しめ侮られ、寄邊なき身となるものなり。されば廣く書に渉り、萬の道に詳しければ、年を積むほど人も崇め、世に用ひられ榮ゆべし。我よりは猶いと早く、母に離れし雲井之丞、いとしと思ふその故に、却つて優しき言葉はかけず。小毬もよく心得て、稽古怠る其時は、叱り懲してわが亡き後も、人に笑はせたまはるな」と、聞え給へば小毬は、打歎きつゝ顔を上げ、「恐れながらお學問は、生博士は及ばぬ程、日を逐つて御上達。まづそれはさしおきて、親の權威を借るべからずの、仰は道理さりながら、正しく君の御總領、はじめて御所へお參りに、御家臣並の御衣服、例に違ひし遊ばし方、冠者の君にも口惜しと、思召して」ト言かくるを、光氏は押止め、「さてはかれまでおとながましく、某を恨みしな。あゝまだ心はいと幼し、學問勵みていま少し、物の心を知るならば、その恨はおのづから、解けなんものを」と言捨てて、その日は歸らせ給ひけり。

之丞と、駕籠を並べて室町へ、或時に出仕あり。赤松の館の人々、雲井の君は御所をはじめ、御方々へもはじめての、見參にておはするなれば、烏帽子裝束華やかに、粧はせ給ふならんと、思ひの外に其事なく、平侍の姿にて、同道ありしは何事ぞと、ひそ〳〵と語合ひ、小毬は取わけて、打恨みし山光氏に、告ぐる者のありければ、さもあらんとて打點き、少し日を經て何氣なき、風情にもてなし赤松の、館に至り給ひしが、高直は家にあらず、直に奥へうち通り、雲井之丞小毬を、押並べて靜に坐し、二人に向ひて宣ふ樣、「我母上に別れしは、僅に五才の時にてあり、それ故やらん父君の、御寵愛殊に深く、奥殿にのみ生立ちたれば、浮世の中を更に知らず、夜晝御前に侍ひて、學問はしつれども、それも深くは學び得ず、賢き父の御教訓も、愚なる身の悲しさは、夫をよく〳〵心に留め、廣く渉らん事能はず、果敢なき遊の笛琴の、調さへ音の足らざれば、ましてや其餘の藝能は、人に及ばぬ事多し。かひなき親に子の勝る、例は難き事にてあり。雲井之丞は我に劣り、その子は彼に劣りなば、行末いかにならんかと、心もとなく思ふが故、學問怠る事なかれと、年ごろ月ごろ言ひつるなり。位高く勢ある、人の子と生れし者は、書をも讀まず藝も勵まず、心たかぶる者多し。時に隨ふ世の人の、胸の中には物識らずと、譏りながらにうはべには、追從しつゝ機嫌を取り、從ふ中は人がましく、見ゆ

より小毬が、引取りて育てしにて、初花にはふたつばかりの、姉にはあれど本妻の、生みたるならねば却つて彼を、妹の様に人の貶しめ、初花のみを傅きけるが、過ぎつる年義植公の、お年の程には初花が、似合しきとて忝くも、室町へ迎へられ、富世の前とてならびなき、幸あるを姉の身にては、さぞ羨ましく思はんかと、一入に雁音を、小毬は不便と思ひ、是をも又手許を離さず。さればかの冠者の君と、ひとつに育ちたりしかど、おの〳〵十に餘りて後は、たとひ近しき縁者たりとも、女の身にては男子に、打解くまじきものなりと、父高直が雁音に、教訓なして近頃は、隔つる様にぞしたりける。されども幼き時よりして、花につけ紅葉につけ、武藏雙六雛遊、中睦しく戯れし、その癖つきて冠者の君の、兎角に彼を心安く、もてなし給へば雁音も、さまでに今も恥らはず。小毬はそれもこれも、子供の様に心得て、ひとつに遊びておはするに、心をつくる氣色もなし。さて光氏は雲井之丞に、元服をせさせんとて、そのもよほしありけれども、小毬は例の如く、ちごの様に思ふが故、美しきあの御前髪、剃らせ給ふはまだ早しと、只管惜み歎きしかば、老いたる人のこゝろざし、破るのもあしからんと、其事はまづ光氏も、思ひ止まり給ひしが、いつまでも館にのみ、籠らせ置きて世間の様子を、見せざる時はその心、かたくなになるものにてあり、さらばまづ御所の様をも、見習はせんとて雲井

手を差入れて、ちひさき乳をかい探り、顔に顔を押あてつゝ、餘念もなげに眠り給ふ、面ざしの能く似通ひて、花と莟に異ならず、誰かはよその胤と見ん。光氏もさぞ心の中に、嬉しう思ひて詠むるなるべし。

其年も程なく暮れ、是より二年ばかりが間、記すべき事なくて過ぎぬ。

さてこれよりは乙女の巻にて、玉葛は又例の横のくだりにあんなれば、その中に取まぜてつゞりたれども、狂言おほく、意は違ひたる事のみなり。

さきの年夕霧丸の、幼名ははや似合はずとて、雲井之丞と光氏の、差圖によりて名を改め、是よりして若君と、言ふことなかれと宣ひければ、赤松の館の人々、雲井の君或は又、冠者の君とも申しけり。年よりはおとなびて、見えさせ給へど小毬は、たゞいつまでも幼きやうに、思ひとりて片時も、御側を離れ得ず。それも實に道理なり、まづ主從の禮儀はさしおき、とりわけて寵愛せし、二葉の形見はこの君のみ。されば同じ孫なれども、柏之助をばさまでに思はず、たゞ旦暮に冠者の君に、傅く事のみ所在として、後世の勤も怠りぬ。又高直に雁音とて、人柄形美しく、いとく利發の娘あり、是は妾の生みたるにて、その女は暇を乞ひ、今はほかへ嫁入して、實の母のあらざれば、高直が本妻たる、篠きよが手にかけんよりはと、幼き時





のながら、面白さもあはれさも、是に上越す詠はなけれ。凄じきものの例に言置きけん、昔の人の心淺さよ」なんどとて、障子を殘らずあけさせ給へば、月はなほ隈なく照り、ひとつ色に見え渡され、凋れたる庭の蔭、心苦しう遣水も、甚く凍りて音もせず、物凄き樣なりければ、何をがなして紫の、沈みし心を引立てんと、かの今まゐりの山吹が、傍にありしを顧み、わらはどもを呼出させ、差圖をしつゝ庭へおろし、雪轉しをせさせ給ふ。中にも大きやかなるは、事馴顏に裳を褰げ、袖捲りして立向ふ、姿は月にはえてをかし。まだ少きはしどけなき、帶をも結ばず喜び走るに、鼻紙扇も取落し、いと大きう轉ばさんと、思へど力の足らざれば、押動し得ず立騷ぎ、髮の亂るゝさへも知らず、髻はそこね或はゆがみ、元結切れて肩に掛るも、白き庭には隈なく見ゆ。犬吉なんどは緣に立ち、「まだ小きに彼方の方へ、轉してよ」など思ひ思ひの、事を言ひつゝ打笑ふ、聲を聞つけ菫野は、何事かはと姫君に、傅きまゐらせ立出づれば、機嫌宜げに姫君は、つく〴〵立ちて面白き、事をするぞと思しけん、母上あれを見給へと、紫の袖を捉へ、引立て給ふ愛らしさに、やう〳〵此方も心解け、いざとてみづから搔抱き、端近く歩み出で、外の方を打見れば、雪の光月の光、かう〳〵と澄渡り、いと靜なる夜の樣なり。暫しが中は姫君も、打詠めておはせしが、眠たくやなり給ひけん、につこり笑ひ紫の、懷へ

地あしげに紫は、しか〴〵物をも宣はず。光氏は打ほゝゑみ、「常に變りし紫が、その氣色こそ心得ね。鐵蔓の病にかこち、かの菊咲を訪ふなどゝ、告げたる者のある故か、今ぞ實を詳しく語らん。あの鐵蔓を伯母なりとは、跡形もなき僞りにて、又菊咲に心をかけし、樣に見せしも虚事なり。仔細ありて彼等親子は、髪を切りて尼となり、菩提の道に入りたる間、名雙寺へ送遣りぬ」ト、宗全が娘なる、事をば包み其餘の事は、こま〴〵語り給へども、思ひがけなき事なれば、紫更に眞とせず、いよ〳〵背きて物も聞えず。光氏はなほ親しく、「よし〳〵さまでに疑はしく、思さば明日にもかの寺へ、詣で給はゞおのづから、菊のきせ綿花の帽子に、變りし樣を見給ひてん。年月馴れしわが心を、知らざる樣にくねるとやら、いぶるとやらいふその振舞、ねたみ恨みはかう〳〵する、ものと敎へし事はなし、誰に習ひてかこちぐさ、葉末の露本の雫、人の命は明日知らぬ、浮世は物事打捨てて、心長閑に暮すぞよき」ト、さま〴〵に日一日、言慰め聞え給ふ。又今朝よりして雪降りそへ、いたう積りし前栽に、竹は皆横をれふし、松は眞直に立ちながら、梢下枝も重げなり。夕暮よりして空晴渡り、月山の端をさし昇れば、御姿も光りまさり、打竝びておはする樣、そのまゝに繪にかゝまほし。光氏空を打仰ぎ、「人の心を移すめる、花紅葉の盛より、冬の夜のすめる月に、雪のひかりあひたるこそ、色はなきも

附けさせ置きたれば、朝顔は父の舊地を、受繼ぎしも同じ事、かだぐ〳〵不足はあるまじ」ト、仰に二人は手を合せ、たゞ伏拜むばかりなり。水原は下座へ膝行出で、「かくまで御手の屆かせられし、とも知らずして調太夫、さまぐ〳〵にお諫め申し、年寄りて用にも立たぬ、私までに斯う斯うせよと、言付けた愚さを、さぞ御心の中にては、をかしと今まで思しけん、此後屹度差出ぬ樣に、申聞けるでござりませう」ト、いふを光氏押止め、「さな言ひそ調太夫、なかつしばこの朝顔を、宗全娘といかでか知らん、されば御劍戻りしも、其方の夫の功なり」ト、又此方をふりかへり、「松枝は事馴れぬ、下ざまの奉公して、思ひがけなき辛苦をしつらん。夜も明行かば朝顔親子を、名雙寺へ送屆け、夫より糺へ歸るべし。我も歸館の其後に、かの寺の事どもは、人を遣し取まかなはん。今宵眞の小烏丸、手に入りし事どもは、ゆめ〳〵洩す事なかれ、却つて人の疑はん」ト、打囁きて出で給ふ。此時空は晴渡り、月さし出でて薄らかに、積れる雪にひかりあひ、いと面白き夜の樣なり。

光氏は人知れず、小烏丸を室町の、寶藏に納めんとて、夫より御所へ駕籠を向け、其夜は彼所に宿直して、嵯峨へ歸り給はざれば、紫は心ならぬ、風情は人に包めども、ほろ〳〵と打溢るゝ、涙を怪しと傍の、女どもは思ふめり。やう〳〵次の日午下りに、立戻り給へども、心

し、おん身親子を彼所に住ませ、尼寺と改めん。朝顔は槿花禪尼、鐵蔓はそのまゝに、鐵蔓尼と呼ぶべし」ト、仰に歡ぶ母娘、願を叶へ給はるか、あらありがたしと朝顔が、笄抜けばばつたりと、前に落ちたる島田髷、思ひ切髪潔し。後れじものと鐵蔓も、髻拂ふ薙刀の、蛭巻の名も恐ろしや。「無間に沈み修羅に迷ひ、浮む瀬更にあるまじきを、仁ある君が德風に、迷の雲を吹拂ひ、眞如の月を詠めん」ト、言ひつゝ立つて宵の程、縫あげ置きし衣包、開く中には豫てより、娘が願に調へけん、振袖に見し色ながら、法の衣ははでならぬ、花の帽子も取揃へ、差出せば朝顔は、靜に上に打はおり、禮儀亂さずついゐたり。光氏はいよ〳〵感じ、「松枝はいづくにか」ト、仰にはつと次の間より、立出づるさはしが姿、見しには變る振の袖、やの字結の館風、お刀捧げしとやかに、御後にひかゆるにぞ、これは〳〵と親子が驚。光氏立つて衣紋を正し、「不審に思ふは道理至極、この女は畠山、重篤の娘松枝。さいつ年より稲舟の、傅にて糺に在り、心きゝて怜しき生。いつぞや此所にて使女を、尋ぬる由を聞出し、彼を語ひ住込ませ、密に樣子を問ひしかば、何かは知らず朝顔が、大事にかけて肌身に添へ、所持なす短刀あるよし告げつ。それぞ子烏丸ならんと、今日しも詮議に來りしなり。宗全が舊領は、我請受けて稲舟へ、贈りし故に今その夫、足利義兼これを知行す、その中よりして尼鳳山の、寺領を

劍を、光氏君にまゐらせよと、扨こそかくは計ひし。又これよりは宗全が、側女鐵蔓光氏君に、問ひ參らする事のあり、それ君子は其罪を惡んで、其人を惡まずと、御口辯にも宣ふよし、夫に何ぞや宗全が、首を盜みて築込めたる、塚を無慙に發かれし。この御言分なき時は、恐れながら薙刀の、切味御目にかけんため、山名の館に仕へし折の、姿に復りて候」ト、裲襠の裾ひらりとはおり、薙刀おつ取り突立つたり。此時既に夜は更けて、風の氣色も物凄く、鐵蔓が顏色も、先に變りてりゝしげなり。光氏はにつこと笑ひ、「彼の塚を築きたるは、おん身親子が業なりと、今までは知らずといへども、忠臣か孝子ありて、しかせしならんと心には、感じ思ひし夫故に、發き捨てしと言觸し、實はその儘据置いて一字の堂を建てて隱せり、その證據を言聞かせん。かの御身等が建てたる墓に、あらし山名におふ花と、山名の文字を、込めたる發句を彫りてあり、その意を捨てず尼鳳山、名雙寺と我名づけぬ。山號の山寺號の上の字、もとの如くに山名とつゞけし、夫のみならず雙は宗なり、名雙禪寺と稱ふる時は、文字こそ變れ山名宗全。又實名を持豐と、呼びつる故に持を尼にかへ、豐に鳳のひゞきを假れども、わが名づけし故世の人の、心づかぬか又たまく、心づく者ありといへども、憚りて言はざるか、是までその沙汰する者なし。田貫が失せて後、彼所に住する僧のなく、尼の字のあるも奇緣といふべ

よりして此劍を、光氏に返し與へ、娘が命を乞ふならば、助けぬ事はよもあらじ、光氏は義を守り、仁心厚き者にてあり、わがかくなりしは自業自得、誰を恨まん道理もなし、人死する時言ふこと善しと、今こそわが身の非を知りしと、言捨て立出で給ひしが、此世の名殘に侍るなり。此事治り明石より、君御歸洛の其後に、都の人の取沙汰して、さる頃山名の亡びしは、光氏が宗入の、加勢を止めし故にてあり、かの君だに世になくは、宗全もをこの者、よもやみやみとは討たれじと、ひそ〳〵と語るを聞き、わが爲には敵も主人、味方も主人といふ中に、足利の恩は薄く、山名の恩はいと厚し、男なら弔合戰、叶はぬまでも企てねば、ならぬ處と思ふより、仰の如く折を伺ひ、君を密に害せよと、朝顏に言含め、御奉公に差上げしが、其後あれが申すには、父上も仰せの通り、光氏君は道を守り、たやすく人を罪し給ふ、御本性には侍らず、親の事をあしざまに、いふ樣なれど己が罪、己に報ふとおんみづから、懺悔ありしを今更に、讐なんどと刃向ひなば、孝は却つて不孝とならん、私といとこの朝霧殿、その生み給ひし姫上は、猶更に御寵愛、それ羨むではなけれども、同じ血筋にありながら、山名の娘といふ事だに、ならぬ此身は日陰者、はかなく凋む朝顏と、名をついたのも因緣か、わしや父樣が恨めしい、少しも早く尼になり、心靜に暮したいと、くよ〳〵歎くが道理さ。それなら實の御

叶ひし人を迎へ給へ、此事よりして音川と、爭ひ給はゞ室町の、御憎しみを受け給ひ、御身の滅亡遠からじと、さまぐ〳〵諫を入れしかど、富徽樣の傅に、白糸とてその心、いとかたましき女あり、是よりさまぐ〳〵内通に、宗全はいよ〳〵腹立ち、かの鬱憤を聞えんため、長櫃の中に隱れ、室町へ忍入らんと、その用意あるに驚き、こは勿體なき事なりと、止めてもいつかな聞かず、剰へ女のいらざる、諫言だてとてさん〴〵に、宗全妾を打擲す。此方も最早これまでと、胸を定め屹度居直り、さほどまでに御心に、叶はぬ者の生みし子は、御胤ながらいとしとも、かはいとも思されまじ、さればこゝには置き難しと、この朝顔を掻抱き、立退く時に追ひもせず、其後便もなかりしが、いかなる邪慳の心にも、わが子が不便と思ひけん、月を經て後妾親子の、隱家を聞出し十年あまりの久しい間、世を安く送るほど、貢るゝ中折に觸れ、この子を連れて再び館へ、歸るやうにと誘はれしが、主人ながら行の、邪非道の疎ましさ、朝顔さへも送遣らず。さていぬる年宗全が、合戰敗れ討死の、はや三日前私の、住所へ忍んで自ら來られ、絶えて久しき朝顔と、親子の對面ありし時、宗全が申すやう、幸ひにして此娘、今まで館にあらざれば、わが胤と知る者なく、室町よりの咎もあるまじ、もしやその沙汰あるならば、鐵蔓

感ずるに餘あり。さて問ふべきは嵯峨の館に、望んで奉公なしたるは、親の敵と我を恨まん、その爲ならんと心をつくれど、させる氣色は曾て見えず、今又事なく寶の劍を、還しゝ心の訝かしさよ」ト、尋ね給へば鐵蔓が、「その事は私が、申上げん」ト言ひながら、屏風かいやり恐れげなく、御前近く進出で、「今更に若がへる、心地せられてはづかしながら、昔の事より聞えあげん。室町御所に私が、宮仕してまだ年は、二十の上を多くも越えぬ、其頃に或人來り、山名宗全おん身を垣間見、手かけに抱へたきよし言へり、あの如くむくつけき、荒男にてあんなれば、心には染むまじけれど、行末の爲宜からんと、言葉を盡し勸められ、此身の榮耀は望まねど、まだ其頃は世に在りし、父と母とを安々と、過すが嬉しく仲立の、言ひたる通り見るだにも、恐ろしげなるその人と、添寢は苦しく思ひながら、宜しく計ひ給はれと、遂に此身を打頼み、室町御所へは親の病氣と、御暇を願ひ出で、それより山名の屋敷に奉公、この朝顏をまうけし後、只今の藤の方、まだ音川の館におはし、御名はたしか猪名野谷と、呼び給ひし頃宗全が、年にも恥ぢず心をかけ、さま〴〵に言寄りしを、彼方もうるさく思しけん、尼になるよし宣ひて、御假親を遊ばされ、室町へ移らせ給ふを、宗全が傳聞き、以ての外の憤。その時私申す樣、義正公は御主君なり、音川は執權職と、いふ中にもとりわけ寵臣、何と思召さるゝと

心動かぬかたいぢ者、光氏君のねんごろに、御心盡し給はるを、却つてうるさき事に思ひ、姿を變しと世の人に、謗らるゝのも厭はねど、正しき君が御心と、知らずさがなき口の端に、掛くるが恐多き故、心に思はぬ紅白粉。わが君も亦御心に、思はぬことを宣ひて、雪の夜道も厭ひなく、通はせ給ふ戀人は、是にこそ侍らめ」ト、短刀一口取出し、光氏の前に置き、妾親子が賀茂川の、邊に住みし其時に、御雨宿あらせられしと、宣ひたるは宗全が、娘朝顏なる事を、知召されし其故に、心を探り見ん爲の、御僞りに疑ひなし。御手水を持てまゐりし折、君のお側に侍ひし、男の名をば忘れしかど、父の使にかの住家へ、來りし者といふ事は、後にて思出したり。此方も素性を明したれば、御包みなく語らせ給へ」ト、言ふに光氏打點き、「推量に少しも違はず、あの者は片攬とて、山名に一旦仕へしかど、わが腹心の家來ぞ」ト、言ひつゝ件の短刀手に執り、鞘を拂ひ火影に透し、「是こそ眞の小烏丸。さいつ年おん身の兄、統淸の妻村荻に、奪ひ還させ我手に入りしは、是をうつして新た鍛ちし、物と知りつゝ心に祕め、それと言はぬは村荻が、折角の辛勞を、空しくなさんもいとほしく、且は家子郎等の、心を休めんそのために、三ッの寶は恙なく、取戻しゝ由披露に及び、よりくく心をつけし所、御身宗全が愛女と聞き、もしや此手にあらんかと、戀慕にことよせ問ひよりし、わが心をさとし得たるは、

三十編上

嵐山院殿皈泉花生大禪定門と、金字に記しゝ一ッの位牌を、一段高き所に直し、花を供じ燈明をかゝげ、その傍に菊咲は、綾の小袖錦の袈裟、雪の手許に玉霰、水晶の珠數を爪繰り、緣の髪はそのまゝながら、浮世を思ひ捨てたる姿、光氏はきつと見やり、打驚くかと思ひの外、常に變らず親しく寄添ひ、今宵はとりわけまめやかに、恨の數々言ひつらね、「さほどに思ふかいとほしの、一言なりとも聞かせ給へ、せめては夫を思出に、忘るゝ便になさん」など、差添さへも傍へ、押やり置きて用心の、體も見えねば水原はいとゞ、心もとなく思ひけん、立寄る處を鐵蔓が、引戻して薙刀の、石ずゑ取延べおし隔て、進寄らんとなしけるが、かの光氏の打解けし、心の中をはかりかね、屛風の陰に潛み居る。菊咲は涙を拭ひ、「木でも石でもなき此身、その御心に絆されて、つい打解くる筈なるを、解けぬ心は申さずと、君には疾うから能う御存じ。都に思はぬ合戰起り、多くの人の失せたるは、皆父上の心から。その罪科の消ゆるため、せめて此身が尼となり、後弔はん豫ての願。さはさりながら此儘に、髪を剃りなばあの女は、


夕霧丸改名
足利雲井之丞氏仲
冠者の君と稱す


赤松高直の女
雁音

修紫田舍源氏第三十編序

夫良匠の家を作るや、先其材の多少に任せ、長ものは棟とし梁とし、大なるは柱とし杭とし、短は栟とし榰とし、細は椽とし桷とし、其後寢殿母屋葺樹、妻戸遣戸乃至簀子等を作りて後、是を家といふが如く、作文の體又是の如し。我才の多少に任すとは、聞きながら、才の木なく、學といふ竹もなく、請合普請の源氏の間、五十四帖の廣座敷、柱印のいろはさへ、にぢり書なる鐵釘の、折を直して打つけ大工の、手際にゆかぬ大帳場、てにをはの文廻し、語格の曲尺を原來知らねば、他の下墨下振に、かまはず曲なりにして、先二十三帖まで、建ては見たれど質の形代、源氏の間には似もつかず、畫の樣ばかりは大造にて、疊はゞ麻木に宮殿を營み、蜀黍がらにて樓閣を、組あげたるに異ならねば、漸〳〵近づく卷の名の、鈴虫螢の籠にやせんかと、不用の工手間を今更悔みぬ。

天保十年己亥正月　　柳亭種彦

り、「雪も厭はず通はせ給ひし、御心ざしの有難さに、菊咲が心解け、部屋に屏風を引廻らし、これへおいで遊ばす樣、我君に聞上げ、其方達はもう此所へ、參るなとの申付け。お睦言を聞かせじとの、その御遠慮か。はや〳〵あれへ」ト、聞いて光氏急がはしく、行くを水原はなほ止め、「君若しこれへおはするとも、鐵蔓親子が側近く、寄せまゐらすなと調太夫が、申付にて住家へ歸り、日每此家へ入込みしも、いよ〳〵彼へ御執心の、體に見えなば恐れながら、御諫言を申さんため。鐵蔓はそら寢の樣子、聞えを憚り仇めきし、戯れ事にとりなしゝも、うるさく思して御歸、あらせん爲にて侍る」ト、言ふのも小聲此方にも、ひそ〳〵立つて鐵蔓が、綾の小袖に錦の裲襠、姿改め小薙刀、柄短におつ取つて、覗ひ寄ると光氏は、知るか知らぬか物をも言はず、水原を突除け菊咲が、閨の屏風に手をかけて、開き見ればこはいかに。

夫に引かれて鐵蔓も、眠くやなりけん欠して、「年寄といふものは、はや夜中より寐覺がち、明くるをいつも待ちながら、又宵まどひをし侍れば、日暮るゝとはや話する、事も懶くなり行きしも、みな我儘にや侍らん」ト、いふ程もなく針箱へ、凭れかゝりて鼾とか、聞知り給はぬ音すれば、まづ邪魔は拂ひしと、喜びながらそつと立ち、菊咲が部屋の方へ、行かんとし給ふ障子の外、又いと古めかしき咳して、「こゝに在りとは豫てより、知召したらんのに、尋ねても給はらず、義正公は妾の事を、婆よく〳〵と笑はせ給ひ、御目を掛けられ給ひしを」ト、名乘出づるを誰ぞと見れば、花鄕の母水原なり。それよさる頃調太夫が、我堀川に家あれば、彼を下げて夫に住はせ、こゝの親子が有樣を、覗はせんと獨語に、呟きし事のありし、夫故此所には居るならんと、思出づれど驚きたる、風情にもてなし、「何として、東山を下りしぞ。いつも無事にて目出度」ト、言捨て行かんとなし給へる、御裾を水原は捉へ、「室町のお廊下で、これ此樣に妾の裾を、引き驚かし給ひたる、其頃はまだ此髮も、これ程に白うもならず、腰も屈まず風俗も、好かりしものを年月の、立つ程悲しきものはなし」ト、昔を思出でぬらん、齒は脫落ちてをかしげなる、口をも恥ぢず甘へたる、聲遣ひして嬌きつゝ、しなだれ掛りなどすれば、光氏は持餘し、行くも行かれず彳み居る。折から向ひに人音して、さはしがとつかは走り來

凍えたる手の利かざるか、直にも開かずまだるき事と、思し給へど是より他の、男は此家になきなるべし、ぐわちくと響かせて、「錠のいたく錆たれば、急には開かず」ト憂ふるを、あはれと聞きて駕籠の窓より、其所ら邊を打眺め、「此所を訪ひしは昨日今日と、思へど日數も重りて、荒れまさりたる心地ぞする」ト、たゞ口吟に、

荒れにけん雪ふる里といつの間に

やゝ久しくひきしろひ、やうく開けて入れまゐらす。駕籠より直に縁に上り、打通りて見給ふに、鐵蔓は何やらん、衣を縫ひて居たりと覺しく、針箱小葛籠樣の物、うち散して置きたるを、急がはしく傍に押やり、「今宵渡らせ給ふ由、御音信はありしかど、夫より雪の降出でて、道はぬかる寒さは募る、よもやおいではあるまじと、此樣に打散し、置きまゐらする所もなし」ト、言ひつゝ毛氈うち敷きて、まづ其上に請じ申し、「凧よ竹馬よと、餘念もなげのお遊を、見上げし時も私は、はや年ふけて若いといふ、程は過ぎしにその君が、物々しげにならせられ、御子も二タ方おはするとか。それに比べて見ますれば、座敷の中を杖突いて、歩かぬがまだ仕合」ト、是を初に舊事ども、そこはかとなく物語れど、始め訪ひたる其時に、はや大方は聞古し、かつ菊咲はいかにかと、其事心に掛る故、耳にも入らず睡たげに、差俯いておはしければ

「鹽燒衣なれ行けば、辛き事こそ多けれ」ト、あと言さして打背き、涙隱して姫君を、掻抱きて伏し給ふを、見捨てて行かんも苦しけれど、已に今宵おとづれんと、告知らせて置きしかば、せん方なうて立出でつ。かの著馴したる衣服ながら、物好して染させし、色合かさなり好ましく、雪の光にいみじく艶なる、御姿を紫は、つれ〴〵と見送りつゝ、誠に君にあかれなば、我身いかになるべきぞ、かういふ事のあらんとも、知らずうらなく語ひて、過しけるよと思ひ續け、心地惡しとて臥し給へり。

供は例の親しき者を、僅ばかり連れたるが、吹雪に咽びて行惱むを、駕籠の中より光氏は、見るも苦しく近習に向ひ、「室町の出仕より、他の歩きは懶くなり、ましてや雪に立出でん、心は更になけれども、鐵蔓はわが緣の者、外には賴む方なしと、言ひつるも理に、いとほしければ訪ふなり」など、宣ひなせど人々は、御好心のまだ止まぬぞ、あたら君の瑕なりと、つぶやきあひて彼處へ行著き、なほ雪の降しきれば、御乘物を緣先まで、舁込まんとしたれども、門いと狹くて入り難し。人を入れてしかぐ〵の、由を案內させければ、「今日しも渡り給はじと、思ひつるに」ト鐵蔓は、驚きて、「北の方に、用心口の侍るなり、その木戶が却つて廣し、御乘物を廻させ給へ、はやく〵開けよ」ト言付くれば、「あら寒や」とて慄ひ〳〵、男一人出來り、

折聞ゆれど、斯の如くに眞實より、辛しと思へば口にはおろか、色にも出さず胸にをさめ、なほも心をつけ給ふに、光氏はたゞ茫然と、緣に出でては空を眺め、役目の樣に文ばかり、引隱して書き給へば、紫は興もさめ、人の噂も僞りならじ、流石に顔を向ひあひ、宣ひかぬる事ならば、せめては氣色ばかりをも、かすめて聞え給へかし、さあらば爲樣もあらんなどと、あまりに深くつゝめるを、疎ましくのみ思ひ居たり。

頃は霜月半頃、天うち曇り何となく、物淋しきに光氏は、菊咲が事つれ〲と、思ひ餘りてまづ母の、鐵蔓に近づき寄り、彼が心を探らんと、堀川へ人を遣し、今宵自ら訪ふ由を、告知らせ給ひし後、雪ちら〲と降出でぬ。黄昏の頃よき程に、著馴れし小袖うち襲ね、裝ひ給ふは何所へか、おはするならんと思へども、紫は問ひもせず、つきほなければ光氏も、その儘出でんとしたりしが、流石に別は告げんとて、靜やかに立戻り、「伯母鐵蔓の此程より、惱み給ふと仄に聞けり、夫を今宵は訪ふなり」ト、つい側近く居給へど、紫は見遣りもせず、明石姫を弄び、紛らしておはする樣、よその見る目もたゞならず。光氏は少し笑み「さても怪しく御氣色の、變る頃かな己には、咎め給はん罪もなし。鹽燒衣朝夕に、あまり目馴れて見だてなく、思し給はゞとだえ置き、又珍らしと見給ふ時、歸る方こそよからめ」ト、聞え給へは尻目にかけ、

繁御文あり。終には此事鐵蔓が、知るといへども咎めぬは、御年も菊㗛と、似合の程と心の中に、喜ぶ故にやあらんなんど、有りし事をも無き事をも、取交ぜて嵯峨の館の、腰元どもが言語るを、紫は傳聞き、始の中はさほどまで、實に御心かけられなば、菊㗛をかう〳〵と、妾には隔なく、語聞かせ給はんと、思ひ流して居たりしが、あまりにその沙汰高ければ、自ら目をつけ耳を留め、覗ひ給ふに日を追つて、君の氣色の常ならず、思ひあこがれ悩げに、何事も手につかせられぬ、素振の著く見えければ、いと心憂く我とても、藤の方の姪なれば、御血筋にはありながら、彼は正しく我君の、御從妹にてなほ近し、夫に御心移りなば、悲しき事の出來んかと、かの鐵蔓を光氏が、叔母と言ひしを眞と思ひ、人知れず打歎かれ、年頃の御もてなし、我身に竝ぶものはなきを、けおされなばいかにせん、今更に遊佐の家に、歸れの仰はあるまじけれど、幼き時より見馴れ添馴れ、心安さの過ぐるより、我儘言ひても是までは、御腹立もなかりしが、此後さういふ事あらば、雛遊や飯事を、昨日今日までした癖の、まだ治らぬかなんどとて、侮りがましく宣ひて、年たけし後珍らしく、見給ふ人を寵愛あらば、その機嫌に入らんとて、召仕ふ人々も、却つて彼を本妻の、樣に敬ひ傅かんと、さま〴〵思ひ亂るれども、愼み深き生ゆゑ、たゞ假初の戯れにて、さまでに有らぬ事などは、打恨みなど憎からぬ、程に折

君へ御目見と、揉烏帽子引立てて、大紋の袖掻合せ、兩人打連れ出でたる樣、思ひなしにや高直が、人柄のうち上り、年もふけて老臣といふとも、恥かしからずぞ見えにける。光氏は去りし頃、かの菊咲がいとつれなき、もてなしの口惜しさを、忘るゝとにはあらざれど、是等の事にて暇なく、秋暮れ冬の初をば、神無月と言ならはし、祭禮總ての神事なく、都の中も靜にて、春かと疑ふばかりなる、麗かなる日の打續き、少し心も長閑なる、故にやあらん光氏は、今更に若がへり。菊咲が堀川の、住居へ日毎使を立て、いと深切に聞え給ふ。彼所に仕うるさはしをはじめ、蓮葉に育ちさまでに無き、男にさへも靡きやすき、女どもは御文を、羨ましげに差覗き、「私どもなら此方より、願ふ處を又嵯峨から、お使が來たのかと、憫いお顏を遊ばすは、あまりお心強い事」ト、言ふを菊咲おししづめ、「内君のあてやかに、在しますはいふに及ばず、麗しい妾、數多あるのに賤しい私へ、御心移らん筈はなし、是は實のお戯。夫に甘へて仇めいた、御返を聞えなば、輕々しい心やと、お側の女中にお見せなされ、お笑ひぐさは知れた事。さがなき人の物言ほど、恐ろしいものは無い」ト、仇し浮名の世の中に、洩聞えんと憚るか、打解くる氣色なく、果敢なき我身を木草の花に、よそへなどして寄らず障らず、いつとても同じ樣なる、返を光氏見給ひて、世の人に變りしを、心憎くや思しけん、なほも繁

ひけり。
室町將軍義植公、東山義尙公に、香壽丸を請取られ、御嫡子に定め給ひぬ。これ皆光氏義を守り、彼方は何と思すとも、此方は夫に逆はず、孝心厚き君なるゆゑ、富徽の前の御心を、安めん爲のはからひなり。義尙公は更にも言はず、内君龍田の前をはじめ、東山に附添ふ者は、下が下に至るまで、喜ぶ事大方ならず。扨執權は誰をがなと、光氏さま〴〵打案じ、遊佐國助は年ばへ人柄、老臣役には相應ながら、紫が父なれば、贔屓の沙汰と噂せん、赤松の高直も、二葉の上の兄なれど、彼が妻篠淸は、富徽の前の御ゆかり、されば彼こそ宜からめと、或時御前に召呼ばれ、しか〴〵の由宣ひければ、高直は大きに驚き、「遊佐國助畠山重篤はじめ、老功の人も多きに、不肖の某、思ひよらず」ト言ひければ、光氏は笑はせ給ひ、「汝も三十路を疾く越えぬ、されば若年といふにもあらず、殊更父の職を繼ぐを、誰かは蔑せん若し誹る、人ありとて夫を憚り、家の譽となるべき事を、辭退せんは先祖へ不孝、諸事勝元と語ひて、なほ覺束なき事あらば、及はずながら某が、指圖なさん」ト事を分けし、仰に今は辭み難く、さあらばとて御請なし、是よりして太郎を改め、赤松左衛門高直と、父の名をこそ續ぎにけれ。
さて又一色多京氾廉は、龍田の前の兄なる故、御傅役に然るべしと、是も光氏命じ給ひ、香壽

思へども、その悲しさ口惜しさ、半氣違の樣になり、方々と聞合はすれば、黃昏は母もろとも、空しくなりしといふ噂。それなら是は詮方なし、四つまで育てし玉葛に、廻り逢ひたく神を祈り、佛を頼みて十餘年、今まで捜せど在所は知れず。そのうへ夫も去る年果て、心細き折も折、不圖菫野を見掛けし處、仰の通り黃昏に、聲色までがその身そのまゝ。姉とも頼みて戀しい人に、よく似たお方のお側に居たら、心が晴れて宜からうと、人を頼みて申込み、近頃局へ上りました。まァ心ない長物語、さぞ御退屈遊ばして」ト、猶も涙に暮れければ、菫野もさし寄りて、「山吹はさまで貧しき、者の娘に侍らず、私どもの召使に、なる樣な身の上ならねど、睦じかりし黃昏に、面影の似た私へ、せめては仕へたいといふ、その深切では玉葛が、行方も頓て知れませう」ト、この話にて光氏は、醉も醒めはて目も潤み、「山吹が聞合せし、噂の如く黃昏は、或古寺の草葉の露と、消えて敢なく世を去りぬ。娘ありといふ事を、彼はつゝめど母凌晨、いまはの際の物語。しかしその名を玉葛と、聞きしは今が初ぞや。黃昏が形見と思へば、我も床しく思ふなり。此上とても怠らず、尋ねてもしや手がかりを、聞出しなば直樣告げよ。さて山吹は取上げて、是よりしては姬の傅、明日紫に言付けさせん。はや夜もふけし氣色なり、わが家來を連歸り、黎明頃に迎の供、言付け置け」ト言流し、枝折戸開き庭傳ひ、靜に通り給

なければまづ私に、育てさせてと頼みし處、凌晨が申すには、隣では常にゆきかひ、今に物言ふ樣になり、自然と知つて黃昏を、母と呼びなば世渡の、妨なりと聞入れず。それとも他へ移りなば、大兒の方で引取らうと、言ふそれまでは預けんと、聞いて嬉しく彌五六郎の、住居近く西の京へ、引移りたる其後で、今まで住みし五條の家を、斷りもせず凌晨は、わが住居とひとつにし、貧苦に迫りて一人の孫も、養ひかねるといひしに引かへ、見苦しからず取繕ふ。腹は立てども玉葛を、取返さるゝが悲しさ故、胸を擦つて過したる、其後君が忍び／＼に、通はせ給ふその由は、兄弟よりも睦じい、私ゆゑに黃昏が、かう／＼ぢやとの物語。あやかり者よ羨しいと、嬲つて共に喜びしは、かの玉葛が三つの年。どうぞ一度は見上げたく、思へど例の凌晨が、睨む目元が恐ろしく、疎々しく過ぎる中、八月の月見の夜、凌晨も黃昏も、いづれへか行方知れず。母は邪慳の心から、意趣でも受けて殺されてか、夫はどうでもよけれども、たゞ黃昏が事のみが、案じられてさま／＼と、尋ぬれど影も見えず。悲しい上に悲しみを、添へたのはその次の年、玉葛ははや四つなれば、一夜位は乳がなくても、宜からうとて大兒の家へ、彼を泊りに呼迎へ、夜の中に家財を片付け、親子四人玉葛とも、是も亦行方知れず。凌晨の父は武士、彌五六郎は其人の、元家來とかいふ事なれば、玉葛をも大切に、するであらうと

山吹とやらそちやに、承つて居ります」ト、いふに光氏膝を打ち、「はて珍らしき事を聞く。如何して、黄昏を知つて居る」ト、仰の中よりかの女、涙を浮め地に平伏し、「お直にお答へ申すのは、恐多い事ながら、もと私も五條の者、黄昏とは隣どち、年も同じ程なれば、手習三味線舞の稽古、行くのももろとも歸つてから、さらふのも毎日一緒、眞實の姉妹より、互に中よく育ちあひ、黄昏は十五の年より、お名は知らねどよいお人の、閨女となり私は、十六の年夫を持ち、二人とも十七の年、みごもりて同し月に、黄昏は女の子、私は男の子、安々と産みたるが、その程もなく黄昏の、身を打頼みし御方は、縁を切られて通はせられず。凌晨は貪慾に、耽りて孫のかはゆい事も、浮世の義理をも露知らず、三味線を教へる娘に、子のあるは似合はずとて、誰ぞに遣らんと彼方此方を、聞合はするを黄昏は、悲しく思へど内端な生、母の機嫌を損ねんかと、打出しては言やらず、心の中に泣くばかり。其頃西の洞院に、大兒彌五六郎といふ、浪人ありて凌晨とは、昔より親き中、この體を見てあはれと思ひ、我も男女の子のあれば、世嗣に不足はなけれども、さほどまでにその孫を、うるさく思ひ給ひなば、貰ひ受けんと約束を、定めし折に私の、生みし男子は果敢なくなり、懐淋しく黄昏が、擧けし娘の玉葛を、隣づからに借りて置き、朝夕それを慰めぐさ。かの西の洞院にも、子供はあれど皆成長、乳が

主人の乗物誰かは知らず、その傍にてひそ〳〵と、申上ぐるはつゝませ給ふ、事にやあらんと差控へ、その事終りてお側へ行き、「君には何とて只お一人、此所にはおいで遊す」ト、言ふ聲ふつと耳に入り、「劒を抱いて寐るのも樂み、異見聞かぬ」ト目を覺し、「菫野か、何して此所に」ト、言ひつゝ駕籠より立出でて、供待つ爲に設けたる、牀几に腰を打掛くれば、菫野は砂に手をつき、「嵯峨にてお抱へ遊ばした、御乳母に姫君樣、はや此頃は御馴染、すこしの間は私が、居らぬでも宜い御樣子ゆゑ、お暇願ひて夕暮より、このお館へ參りまして、積る事ども何やかや、お方樣へお物語。今宵は泊れの御意なれども、もし姫君が夜半頃、御目覺で私を、お尋ねもなさらうかと、急ぎまして歸る處。まづいつの間に君は是へ」「イヤ今少し前來りしが、珍らしう酒に醉ひ、こゝに今まで醒して居た。さていつぞは問はんと思ひしが、人の聞かんも恥かしう、好き折もなく過したり。我まだ若き其折に、語ふ程なく世を去りし、黄昏といふ女ありしが、おん身を始て見し時より、顏も姿もかくばかり、似たる人もあるものかと、驚くよりして昔の事ども、思出でて忍ばしゝ。もし黄昏はおん身の身寄の、者にてはなかりしか」ト、仰に菫野うち微笑み、「知る人にも侍らぬど、譬へて言はゞ水仙の、葱に紛ふやうなもので、その美しい花のある、お方と賤しい私の、似て居る事は連れました、この私の召使、山吹がつね〳〵噂

近きにありと、覺期を極めしその折に、かの朝顔は幼少より、館にあらねば我子といふ、事をば曾て人知らず、室町よりの咎もなく、世にながらへんは彼のみと、思ひし故にや持傳へし、財を殘らず贈りしとぞ。今鐵蔓が乏しからず、世を經るは此故なるべし。又菊咲と名をかへしは、賀茂よりして堀川へ、住居を移してその後に、宗全が子なる事、いよ〳〵隱さん爲にやあらん。私が家近く、鐵蔓が居る由を承りて候は、此頃の事なり」など、言ふを光氏つく〴〵聞き、「夫なれば村荻菊咲、たがひに面を知らぬ筈。さてさう聞いても菊咲が、事は思ひたえられぬ。重ねて忍んで行きし時、親の讐と懷劒にて、我を刺すとも女の力、彼をも害せん事やすし。思ふ女と刺違へるを、心中とか言ふと聞く、夫こそは本望なれ」ト、醉心地にや言ふ事の、あやもなければ調太夫、思案にあぐんで手を叉き、「鐵蔓は元室町に、宮仕せしものと聞く、水原とは近付ならん、病氣と言立て御暇を、水原に願はせ堀川の、家に一先彼を住ませ、鐵蔓親子が心の中を、探らせ見ん」ト獨語に、なほ呟くを光氏は、聞くか聞かぬか打眠り、重ねて言葉もなかりけり。折から人の來る氣色、袴も著ねば供人とも、見えざる姿をもし人の、怪しまんかと表の方へ、足を早めて出でて行く。

内の方より菫野が、一人の女を供に連れ、是も何かは急がしげに、不圖來掛りて思ひもかけぬ、

御近習もろとも相待ちしが、もし人や洩聞かんかと、途中にては何事も、申上げかね是までお後を、慕ひ參り候」ト、供の者を皆遠ざけ、乘物の側近く寄り、「鐵蔓は女ながら、いとかひがひしき者にてあり、御敵對申さんも、圖り難き彼が家へ、人がましき者だにも召連れられず、渡らせ給ふはいとあるまじき事になん。殊には常に好ませられぬ、御酒さへも召上り、打解け給ひし御振舞、更に心得候はず」ト、云ふを押止め打笑ひ、「心得ずとは汝の事。去年の秋菊喚を、見るより何か打驚き、彼こそは朝顔とて、宗全の娘なれ、心をつけよと囁きし、折好くもその後へ、村荻が來りし故、あの女見覺あらんと、問へども更に知らずといふ。山名へ一度嫁したる村荻、夫の妹を見知らぬ筈は」ト宣ひもはてざるに、調太夫畳みかけ、「その事にて候なり、朝顔生れてまだ幼き、時とやらんに何かは知らず、宗全が無道の事あり、鐵蔓これを諫めしかど、聞入れざるを憤り、朝顔を掻抱き、暇も乞はず館を立出で、去年申上げたる通り、賀茂川の邊に住めり。その當座は宗全も、惡き者と思ひしかど、年月のたつに從ひ、頻に娘が戀しうなり、わが膝下を離れては、不便にこそありつらめと、折節毎に朝顔へ、みつぎの品々贈遣りし、その使に私が、罷立ちたる故にこそ、面體おぼえて候なれ。鐵蔓はいよ〳〵募る、宗全が邪を、見限りはてゝか朝顔を、遂に還さず逢はせもせず、宗全も軍敗れ、はや討死も

似合はず、いと艶やかに見え給ふ。さはしも手持無沙汰なれば、又一人の女出來、いつの間に調じけん、瓶子土器數多の肴、棒げ出でて座につらね、「世間の娘と事違ひ、菊咲は年月の、たつ程心わか〴〵しく、何をいうても顏うち赧め、しか〴〵と御答も、聞えませぬを私どもも、せん方なうてなんぼうか、御氣の毒に侍るなり。何はなくとも酒ひとつ、きこし召されてまづ今宵は、お歸りあるやう錢蔓も、申しました」ト勸められ、いかにも狹き家なれば、彼が母も聞きつらん、年にも恥ぢずすき〴〵しき、心なりとて笑ひしなるべし、面白なやと思ふより、常は好まぬ酒ながら、打亂るゝまで盃の、數を重ねて醉ひ紛れ、なほ果敢なき事なんど、聞え置きて立上り、「かく思ひ窶れたる、姿を今は立出でて、見送りだにし給へ」ト、言捨て別も告げずして、おもてへ立出で給ひしが、好き序とや思しけん、かの大井の川添館へ、それより駕籠を差向けさせ、おはし著きて忍び門の、內に乘物舁下させ、何心なく傍を、不圖打見れば思ひもかけぬ、かの片攪の調太夫、供の中に交りてあり。「何として來りし」ト、仰も待たずかしこまり、「私の住所は堀川、近年嵯峨のお構內へ、住居を下し賜はりし、其後は彼所の家を、人に貸して置きたるが、其所に聊か用ありて、參りがけに不圖見れば、わが軒續きに見識ある、御供人の待ちて居れり。承れば鐵蔓が、家に忍びて御座との事。是はけしからずと御歸を、

二十九編　下

暫くあつて縁を廻り、女一人出來り、光氏が前に手をつき、「私はさはしと申し、菊咲が召仕、お館にてはお目に觸れる、事もならざる賤しき身、お忍びあるきのその先は、別の事ゆゑ御免あそばせ。菊咲申上げまするは、これへ渡らせ給ひしは、去年の秋朝顔を、遊したるお發句の、お脇を其時附けましたるが、御心に逆ひし、樣にも聞召させられ、その御憤に侍らんが、有りし事は皆夢と、思召されて許させ給へ、覺めて果敢なき心地にて、妾は何も覺えずと、深く恥入り御目にかゝる、樣子は更に侍らず」ト、聞え出したりければ、光氏は頭を傾け、「我が言ふ事は餘所になし、とりても付かぬ答かな。館に在りしその程に、つれなかりしは紫が、思はん事も心憂く、夫故ならんとわざ〳〵此所へ、訪寄りたるは何の障も、なき所にてさま〴〵に、思ひ續けし事どもの、その片端をも言はんため。それに顏だに見せざるは、心強き仕方ぞ」ト、恨みながらに奥の間へ、強ては立ちも入り給はず、靜に座しておはするは、昔にかはりおとなしく、見えさせ給へど愛敬の、世に類なき故やらん、室町君の御後見と、いふべき年の程には

老の癖、許させ給へ」トさし俯く。光氏はこの言葉、耳に留りてなほ詳しく、問はんとせしが思ひかへし、廊下よりして東の方を、伺ひて見給ふに、これ菊咲が部屋なるべし、僅の庭に秋草の、亂れあひしもいとをかしう、のどかに眺めて居るやらんと、風になまめく女郎花に、つけても彼が有様形、いと床しくて座を立上り、「菊咲は病氣とやら、かくたまさかに訪ひながら、このまゝ歸るも志、無きやうなるを彼方へ行き、いかなる心地か尋ねん」ト、頓て廊下に立出づる。暗うなりたるほどなれど、伊豫簾に透影見え、さと吹通す追風に、衣の薫もなまめかし。こゝは殊更いと狹き、所なれども襖にて、なかを仕切りて二間とし、その彼方に菊咲は、引入りたるさまに見ゆ。夫へ行きなばわかくしき、心なりとて笑はんかと、かの立切りし襖に身を寄せ、「大内にもあれ御所にもあれ、年月勤をおこたらねば、褒美を賜ひ位も進む。去年の秋よりおん身の爲には、人目を包み言葉を盡し、心遣は室町の、勤よりなほ辛苦にて、今まで更に怠らず。その恩賞に情ある、一言なりとも聞かせよかし」ト、打戯れて宣へども、更に答ふる者はなし。

いつぞは逢ひて物語を、聞かんと思へど暇なく、今日やう〳〵に訪ひたり」ト、宣ふ顔を鐵蔓は、つく〳〵と打まもり、「御年は加はりても、清らなるは變らせられず。唯今の室町様、君のお顔に生寫しと、人々は申せども、夫はあなたのお若衆の、時をば知らぬ者の噂。御圓額にお振袖、まだ嵯峨のお祖母様の、御機嫌ようおはしゝ頃、お遊びに入らせられたを、餘所ながら見上けしが、その美しさ娟妍さ。夫には今の室町君も、恐らく劣らせ給はんと、推量り侍る」ト、古き事ども取出でて、いと長々しく語れども、光氏は菊咲が、事の心にかゝれるか、くはしくは聞きも入れず、「身は山賤と成下り、かの須磨明石にさまようて、心の甚くくづほれたる、夫に引かれていとゞさへ、醜き形のなほ窶れぬ。義植公の御有様は、輝くばかりに渡らせ給ひ、古の世にもをさ〳〵、竝ぶ人はあるまじと、誰々も申すなり。見奉りし事もなく、いと怪しき推量かな。怪しと言へば心得ぬは、おん身の年の程にてあり、昔の事を語るを聞けば、はや六十にも近からんが、顔つやゝかに髪黒く、まだ四十にも足らず見ゆ。かく差向に長居せば、怪しむ人のあるべし」ト、打笑ひ給ふにぞ、鐵蔓も片頰に笑み、「一言宣ふその中にも、自然と籠る御愛嬌、男は靡き從ひまゐらせ、女は君を戀焦れ、命を露塵惜まざる者、數多あるそのうちに、あの菊咲がいとここにも」ト言かけて打驚き、咳に紛らし胸なでおろし、「しはぶきがちは

満つるまで御殿の喜。御髪置も程なく過ぎ、かゝる光の世に現れ、給ふも不思議と驚くほど、美しう渡らせられ、御寵愛大方ならず。御成長の後は猶更、諸人の靡き從ふ君を、何の故にか遠き國へ、遷させられしと御痛はしく、存じ上げしがやう〳〵と、都へ歸らせ給ふと聞き、恐れながら嬉しやと、思ふに程なく東山の、君は果敢なく世を去り給ふ。賤しき身にも萬につけ、心細い樣になり、其中に夫に別れ、家さへ人に奪取られ、定めなき世を同じ樣に、過さんよりは佛の國へ、早う行きたい願なれど、それも心の儘ならず、うか〳〵年を重ねしまゝ、涙がちにて何の用にも、立たざる樣に老朽ちて、あるかなきかの身となりしを、今日はいかなる吉日やらん、圖らず訪はせ給ひたる、玉の光にかくいぶせき、埴生の小屋も輝ける、心地せられて命長さの、恨めしかりし事も失せ、浮世の歎も皆さめぬ」ト、打喜びてかしこまる。光氏心に思ふやう、紫は渦浪が、年の程をも知らざるゆゑ、この錢蔓をそれなりと、こしらへ出でしが言數、多くて聲も不束なる、彼が樣を見せんには、僞なりと悟るべし、己とても渦浪を、見上げし事はなけれども、御血筋にてましませば、高尙き處のおはしけんと、鐵蔓が立振舞、輕輕しきをかしとは、思へど笑を押包み、「父君かくれ給ひて後は、都の中も昔とは、變りし樣にぞ思はるゝ。御所の樣も古とは、違ひし事の多かるべし。それを詳しく知りたるおん身、

渦波とて是則ち、義教公の御息女、父うへの妹君に、紛れなきよし確に聞く。寂寞阿闍利と連立ちて、家出されしは某も、まだ生れざる以前にて、御顔を覺えし者、今は館に無きに依り、それと言はずに室町に、仕へし者と言なして、かの菊咲を奉公に、出されたるはせめてはわが、娘なりとも足利の、家に置きたき故なるべし。叔母上と知りながら、打捨置かんは本意に背けり、晝は人目もあるなれば、今日夕暮より訪ふべし」ト、阿古木が事を思ひ出で、さもありげに宣ふを、聞きて紫うち驚き、「その事知召されしを、彼方も推し恥かしう、思うて再び菊咲を、返されぬといふ樣な、事ではないか仰の通り、樣子を御覽遊した、その上で呼迎へ、腰元どもと一列に、取扱はずどうがな」ト、露僞と思はざる、樣子に光氏心安く、とりわけて供人も、僅にやつし目立たざる、駕籠に打乘り堀川へ、おはして彼が家を尋ね、まづ外面より打見るに、軒端は古りて傾きながら、杉生に聞きし如く、さまでに家は狹からず、西と東と二棟に、分けて造りし座敷のあたりに、廊下と思しき所もあり。案内を乞はせ打通れば、鐵蔓大方ならず驚き、塵を拂ひて請じまゐらせ、まづ一わたり忝なき、事の由を述べ終り、平伏したる顔を上げ、「その昔私は、御暇給はりて、宿へ下りしその後も、御所の事の心に掛り、便について承れば、君は御勘氣受けさせられ、須磨とやらんへ御下り。御誕生の其時は、義正公を始とし鳴

く下りて手をつかへ、おんみづから恥ぢ給ひ、重ねて仰のなき樣に、立廻れども紫の、上に仕うる女どもは、彼がかくまで正しきは、知らず兎角に我君の、御心を懸け給へるを、一人が知れば二人へ語り、その噂館にひろごり、紫の上のお前に、菊咲が出づる時は、言の葉小辨はじめとし、數多並居る腰元ども、目ひき袖引き打笑ひ、囁きなどして誹りあひ、はてゝは一人として、物言交す女もなし。彼は年まだ若くして、いと娟妍なる生といひ、殊には君が一方ならず、御心をかけ給ふと聞き、もし内君の此女に、寵を奪はれ給はんかと、かく人々の妬めるなり。菊咲もそれと知り、此所に在らんも心憂く、國元の叔父病死なし、その服ありと僞りて、堀川の家に歸り、夏も過ぐれど此程より、心地勝れずなんどとて、再び嵯峨へ歸り來らず。光氏は彼が事を、忘れ難く思ふにや、又その外に深き故、あるかは知らず文を認め、いとしげ〳〵送れども、菊咲はかの嫉を受け、煩はしかりしに懲り、打解けたる返も聞えず。程なく秋も半過ぎぬ。光氏は杉生に、彼が住居は堀川にて、家居も廣く召仕も、ありとの事を聞置きければ、彼所に行きて親子が樣を、伺ひ見んと思ひしが、又外々より紫が、聞出してひぞらんか、さればとて又輕々しく、腰元女の家を訪ふよし、あからさまにも語り難く、たばかり事を案じ出し、紫に打向ひ、「思ひがけなき事のあり、菊咲が母鐵蔓と、いへる者の實の名は、

ざと、訪ひ給はるがいと嬉しく、彼方へ移り日に馴れて、侮られんより此所に住む、方こそよけれとそのはじめ、言ひたる事の違はざるを、朝霧は人知れず、心の底に思ふなるべし。光氏は親しき者を、呼出して田貫馬刀が、死骸を密に取隱させ、かの名雙寺へ人知れず、葬るべしと言付けやり、菫野に逢ひたりとも、此事語るべからずと、堅く千鳥が口を止め、明果つるまで閨へも入らず、打眺めておはしければ、かの篝火のあはれなるに、つけて發句などありしならんが、聞洩したれば記さず。

此頃は室町も、嵯峨の館も靜にて、暇を得させ給ひければ、名雙寺にて尊き佛事を、行ふに御心とまり、常よりもこの大井の里に、長居し給ふ折もあれば、やう〳〵に朝霧も、少しは思ひ紛れしとぞ。

藤壺のうせ給ふ條は省き、薄雲の卷をはり。これより朝顔の卷は、例の面影ばかりなり。

光氏は去年の秋、腰元の菊咲に、朝顔を手折らせし、其時の彼が答、あるかなきかの簑虫と、心にくき言なしを、床しく思ひ折に觸れ、ほのめかし給へども、聞知らぬ樣にもてなし、寄らず障らぬ答して、靡くべき氣色は見えず。一旦思ひそめつる事を、忘れぬはわが癖なりとて、はや此頃は言葉に現し、うちつけに宣ふほど、菊咲はなほ行儀正しく、御側へ出づる時は、遠

へ行かうとむづかりしも、むしが知らせし故ならん。かういふ事とは露知らず、お方樣のお側へかと、問うたら眠つて居ながらに、あいと頷くそれならばと、お次まで連れて參り、立聞して居りました。田貫の息が絶ゆると、ゆかりもがつくりくたびれた、樣に眠つてたわいがない」ト、いと憐れげに顏打まもり、手を持添へて合掌させ、伏拜ますれば朝霧も、共に涙にくれたるが、たゞ悠々と光氏は、庭の篝火ちら〳〵と、飜れかゝりてやり水に、夏の螢と見紛ふを、打眺めておはしければ、はしたなしとや思さんかと、氣を取直し元の座へ、靜にかへり世の中の、事なんどを物語るに、更に悲しき風情もなし。是はつね〴〵武士の家に、物驚きをする者は、ふさはしからずと宣ひしを、心に忘れぬ故にてあり。是のみならず朝霧は、よく光氏の戒を、守りて假にも御心に、違ひし事は更になし。光氏も彼が行、あまりに差出過ぎたりと、思ふ事なくさればとて、又あまりに卑下もせず、打見る心安ければ、近き御寺にまゐり給ふ、樣に紛らし今宵の如く、立泊り給ふ事、をり〳〵あれど人里の、遠き館にあんなれば、旦夕に奉る、物もなか〳〵調はず、果敢なき菓物強飯ばかりは、聞食す時もあり、あながちに色香に迷ひ、通ふ樣にはあらざれど、たゞ一時の戯に、假の情をかけし女と、一列にはし給はず、おのづから淺からず、思し給ふ御心ざしも、その中に現れければ、たまさかにもあれかくわ

いぶせく日も昿む、心地するのに琵琶弾けの、仰はあまりの御難題、とは思へども背きなば、武士の娘に似合はぬ臆病、かひなき者とや思さんかと、手に取上げはあげながら、唱歌も更に胸に浮まず。この衝立に畫きしは、まひ〳〵ぶしの伏見常盤、それがやう〳〵目に留り、忘れた所はよい程に、綴合はせて唱ひしを、聞いて猶更ゆかりの事を、思出して田貫が、今の歎を聞くあはれさ。是までにいろ〳〵な、巧ごとは憎けれど、別れしわが子が戀しいとは、身につまされていと悲し。せめては息ある其中に、一目逢うて」ト立上るを、田貫は呼止め、「あら勿體なき御振舞。打捨置かせ給ふべし。愍ひ顔を見るならば、命惜まれ最期の妨。申上ぐるに及ばねども、行末長く御腰元に、差置かれて給はれかし。夫より外に願ひ置く、事はゆめ〳〵候らはず」ト、思ひ切りたる有樣を、光氏つら〳〵打見やり、「奇特の懺悔に無量罪、滅して冥土へ赴く汝に、引導の一偈を聞えん。香壽丸を足利の、世嗣とせんな是順當、疾くより心を定め置く。然する時はいづれか知らねど、賴ませられたる御方の、御心安まり且は又、折角賴まれ奉りし、汝が本意も叶ふべし」ト、仰を聞いて深く喜び、又短刀を取直し、咽を貫き遣水へ、うつ伏し仆れ失せにけり。折から人の來る氣色、死骸を見せじと光氏は、緣に敷いたる蓆を取り、投掛け給ふ此方より、千鳥はゆかりを掻抱き、打涙ぐみ立出でて、「兎角此子が魘はれて、あち

てや涙を浮め、「御謠ひ物は伏見常盤、懐に乙を抱き、兄とはいへどまだ幼い、一人の手をとり誘ひて、行くさき〴〵も敵の中、雪に凍えし其時の、常盤が心はいかならん、放逸邪慳の心にさへ、子ほどかはゆきものはなし。菫野ともに遺置き、出でたる時はさほどにも、思はざりしが年月の、經る程ゆかりが戀しさ見たさ。今年ははや三ッ明れば四ッと、忘るゝ間のなきが故、このお館の幼いが、著けたる守に目がとまり、たしかに是は我が袈裟の、錦のありしを菫野が、頓ての用意とみもごりし、中に縫ひしに疑なしと、心に驚き千鳥とやらん、お腰元に詳しく聞けば、忝なしともなかく〳〵に、申し樣なきお方樣の、御恩は卽ち君の御恩。菫野と添ひし中、司は一度も宿下りせず、逢見し事はなけれども、この子の爲には親身の叔母。その御主人の藤の方と、光氏君とありもせぬ、不義をいひたてわが姪の、仕へ申す義植公を、退けんとせし今までの、巧が心に恥かしく、せめては此事懺悔して、腹切らんとは其時覺期。もとの素地に還り難き、一旦惡に染りし馬刀、恐るゝには足らねども、君に刃向ふ奴なれば、欺きて失はんと、大井の里へ光氏君の、今宵忍びておはするなり、折こそよけれ力を添へん、討つて御感に預れと、誘出して冥土の先驅。あら〳〵樣子は此の如くに、候なり」とぞ物語る。朝霧あはれと打見やり、撥もしどろに調子も狂ふ、琵琶を傍に投捨てて、「人を殺して腹切るを、見るも

ゆめ知らず。御推量につゆ違はず、室町御所の怪事はわが業。その趣意を如何といふに、御名を言はずと知召す、藤の方の御腹なる、義植公に足利の、御家を継がせて置き申すを、口惜しき事なりと、覺し給ふ御方ありて、退けくれよとかたらひ給ふ。姪の磯菜が御側近く、仕うまつるは噂に聞く。その君の御爲に、善からぬ事を巧むのは、道にあらずと知りながら、頼み給ひしかの方の、御志も捨て難く、藤の方の御産の時、世に噂ありし事を、細やかに問ひまゐらせ、義植公に近づきて、君は正しく光氏君の、御子にておはするなり、御所に怪しき事ありしも、御身ふしやうの故なりと、實しやかに言上せしは、自ら御身を恥ぢ給ひ、香壽君に御家督を、早く讓らせ申さんと、この田貫がさかしら言。その後馬刀これを聞き、そはいとまだるき事にてあり、光氏だに世に無くは、何事も御心の、儘にならんは疑なし、我一人の力ゆゑ、須磨にてこそ仕損じたれ、後だてになり給はゞ、忍込んで討取らんと、密に勸め語ふを、己嚴しくこれを制し、桂の里にて法力を、現さんとの巧すら、空しくなりて見も知らぬ、火術に却つて肝を冷され、逃歸りしを忘れやする、此上に敵對なば、忽ち命を失はん、もとよりも義植公、光氏君のふた方を、害しくれよの仰はなし、まづ緩かに事を謀るに、若くべからずと止め置き」ト言かけていと苦しげなる、息吐きながら朝霧が、彈く琵琶の音に耳を傾け、感に堪へ

音色あはれに彈鳴す。手負ははつとかしこまり、「仰なくとも身の上を、聞えて後に果てなん覺期。己生は陸奧、石卷前齋が末の弟、某といひし者、若き時より出家の望、宗門の恥師の恥なれば、あからさまには申し難し、ある寺入して弟子となり、勤學更に怠らず、祈も驗あるなんど、人も尊みその寺を、讓受くべき筈なりしが、酒に亂れ色に耽り、遂に山を追下され、國々をさまよひ歩く、その中に仰ありし、鬼得院に從ひて、怪しき法は受繼いだり。夫より遙に年月たち、都に足を留めし頃、かの菫野を圖らず見初め、幸ひ夫も無き由を、人に問ひて其頃は、ちとの貯ありしかば、髮をのばし俗に還り、浪人者の姿につくり、彼が父宮内の、宰左衞門へ仲立を以て、言入れさせたる處、彼もはや疾く室町の、仕を辭したる身の上なれば、似合の緣とや思ひけん、早速に事整ひ、思ひのまゝに夫婦となり、三年ばかりは過しゝが、又六條の遊女に、馴染を重ね有るかぎりの、財は失ひ負目は多く、せん方盡きたる折も折、菫野は女子を生めり。これを育む術なく、不便とは思ひながら、見捨てて丹波へ身退き、又元の僧となり、愚痴文盲の者どもを、誑かして世を送り、三年四年たちし上、姿も變れば我と知る、者はあらじと心太く、再び京へは出でたれど、もし菫野に逢ひやせん、宰左衞門に見られんかと、かの木屋町の近くへすら、立寄らざれば菫野を、召抱へられ給ひしを、此頃まではゆめ

二十九編　上

「御賢察の忍の者は、召捕りて候」ト、聲を掛けて下屋より、潜出づるは田貫なり。馬刀が襟髪かい摑み、庭前へ突出し、短刀拔持ち乘掛り、吭のくさりをたゞ一刺、口に手を當て息絶えしを、篤と窺ひかの死骸に、腰打掛けて短刀を、逆手に返し我とわが、腹にぐさと突立てたり。光氏例の驚きたる、氣色もなくて緣先の、手摺へ凭れ靜に坐し、「汝は先年わが矢先に、命を落しゝ鬼得院の、餘類の者にてあらんずらん。見し人もなき天變を、實しやかに言ふらし、都の人の心を騷がせ、その虛に乘りて室町の、宿直の者を驚かさんと、怪しき法を用ひし事は、我疾くに知りし故、近侍の武士に言含め、怪しき事を怪しとせず、打捨てさせて置きしかば、忽ちに此事止みぬ。今又我を害せんと、忍び寄りたる其故も、大概心に察しながら、馬刀を刺して己も死ぬは、心得難く思ふなり。仔細に語れ」ト言流し、此方を向きて、「朝霧は、今一句彈じて聞かせよ。早う〳〵」ト琵琶押むけ、いかにするかとその體を、覗ひ見るにひがものの、父の氣性を受繼ぎけん、淚もろにていとかよわき、日頃の樣に引かへて、敢て驚く氣色もなく、

節の舞に靜も出ざれば、八艘飛に浮舟あたりへ、うつらばやと思ひしが、田貫が切腹は、紫式部の正本に、無きことなれば例の我儘、どうやら琵琶でうたひさうな、伏見常盤をほのめかしょは、彼難問を防んがため、丁度所も堀川夜討、女に似氣なき何だ辨慶、懐の箱狭子には、七ツ道具のありもやせんと、拍手にかよつて書つくれば、光源氏と源とが、混雜て予にも分らず、見給ふ人は猶更に、夢の浮橋とだえして、末まではおぼつかなけれど、まづ二十帖稿を脱す。

柳亭種彥

修紫田舍源氏第二十九編序

小倉山房を定家卿の日記とこゝろえ、善惡圖傳を、悪玉蹄の書の事と思へるは、おつときなせの早點頭。又此草紙を或人讀みて、源氏物語の名にも似ず、義經も辨慶も、見えぬはいかにと難じたるは、座興ながらいとをかし。予答へて、わらは病の禁厭に、鞍馬山に登るといひ、實は僧正に劒術をならひ、五條あたりの夕顔の、宿での千人斬、龜井片岡伊勢の齋院、海尊ならぬ常陸宮、石橋山の伏木から、犬君が迯しゝ雀が飛いで、朧月夜の扇の的を、桂樹が小弓で射させ、山名の討手が鵯越を、坂落しの須磨の卷、かの浦にての御祓の日、浪風あらく光氏が、船の危き其所へ、抑これはと知盛の、幽靈があらはれて、悪源太の亡魂が、なる雷となりて落ち、桂川の鵜飼の鵜が、名劒を咥へあげ、忠信は空蟬の、碁盤をなげて敵をふせぎ、逢坂の關いる日しも、富樫が留るといふやうに、彼旗色の紅白源氏、平家の事まで綴りそへなば、をかしからんが初には、更に心のつかざりし。扨此編は鈍色の、袖をかへして入口を招く、薄雲をはりて朝顔にも、宗盛の事はなく、五

ける。

さまでに思はぬ人を置くとも、あはれさは添ひぬべし。ましてや是は見る度に、形用意いよ〳〵調ひ、都の風に推移り、やんごとなき人々にも、さまでに劣る事なしと、世にそげものの親の聞えを、苦しく思す程なれば、心疚しく打向ふ、朝霧は猶更に、渚にひとり捨てられて、いとつらかりし事さへも、思出でつゝ悲しきものから、かくたまさかにも訪ひ給ふは、流石に淺くは思さじと、思ふになか〳〵胸塞り、言葉なければ光氏は、さま〴〵に言慰め、此頃は猶姫君の、紫の上に馴れ、此方も實の子の如く、いたはる事など朝霧が、胸あくばかり細に語り、千鳥を呼びて名雙寺の、守札ありしを指さし、「それにて思出したり、是へ最前來りし時、腰元どもが語るを聞けば、眞柴は風の心地なりしが、田貫をこゝへ招き、祈らせたる故快しと、聞くは嬉しきものながら、彼は身近く寄すべからず、いと心得ぬ事あり」など、宣ふ中に夜も更けぬ。ゆかりは例の朝霧が、側に在りて眠たげなるを、千鳥が抱きてすべり出で、後はいよ〳〵靜なるに、光氏はかの明石にて、小夜ふけたりし琴の音の、又も思出でられつ、まだ一度も聞かずとて、琵琶をわりなく責め給へば、朝霧は恥らひながら、少しばかり搔合する、その調子いと整ひたり。光氏も琴のあるを、引寄せて調べけるが、手をとゞめ眉を顰め、あら心得ざる音色かな。須磨にても此事ありし。必ず我を害せんと、忍び寄る者近くあり、手燭を持て」とぞ宣ひ

ならんと推量り、たゞならず見送り給ふに、明石姫は頑是なく、光氏君のお袴の、裾を捉へて慕ひ寄り、表の方まで出で給ふ、有樣なれば立止り、あはれと思ひ賺しこしらへ、「明日歸來ん待ちてよ」ト、口ずさびて出で給ふ、廊下の口に犬吉を、待たせ置きて紫が、教へしならん聲をかしう、

　蜑の子どもに船とめられて、松に音せぬ磯の浪。

と投節を唱ひければ、光氏は振かへり、匂ひやかに微笑みて、

　蜑がとめなば矢帆打掛けて、歸來んよの磯の浪。

拍子も取らず節も無く、唱歌ばかりを言流す、顏を見上げてにこ〳〵と、何を言ふのか宣ふのか、まだ聞知らず姫君は、ざれ歩き給へるを、いと美しと紫は、見給ふ心に引くらべ、さぞ朝霧は戀しうて、忘るゝ隙はあるまじと、是にぞ少し船とむる、罪ゆるされて姫君を、抱きあげつゝ懐に、顏入れさせていと少く、美しげなる乳を哺め、戲れておはする姿、たをやかにして見處多かり。御前の人々は、「まことに生ませ給ひなば、なほ宜からまし」なんどとて、例の如くに語らひけり。

大井にはいと長閑に住なし、館のかゝりも都には、其樣變りて珍らしけれど、心凄き所なれば、

れ、「あい」ト答へて馳行けば、田貫も禮を述べ、「又こそ伺ひ候はめ」ト、申しおきてぞ退出ける。

其後に光氏は、藤の方の機嫌を伺ひ、人なき隙を伺ひて、杉生に對面し、「さいつ頃義植公、俄に我に家を讓らん、鳩に三枝の禮ありなど、宣ひしこそ心得ね。父の勘氣を蒙りて、須磨へ下らんその爲に、道に背きし行の、ありし樣にもてなしょが、物の序に其事を、もし露ばかりも御所君へ、漏しょ事はなかりしか」ト、問はせ給へば打笑ひ、「譬へばありし事にもせよ、御身の恥となる事を、いかでか聞え參らせん、ましてや是は無き事なり。白糸は失せたれども、もしかの方の女どもの、讒言にてや侍らん、能く御心をつけさせ給へ」ト、答ふるはいと道理と、思し給へど是ならんと、思ひ當りし人もなく、さま〴〵に打案じ、大井の里の徒然をも、心に絶えずおぼしやれど、この事かの事打交ぜて、暇なき身はせん方なし。かの東へ營みたる、館に移住まひなば、心も長閑なるべきを、身の程よりは思ひあがりし、朝霧が性なる故、淋しき目をも見るなれと、思ふものからいとほしく、やう〳〵に隙を得て、今宵は彼所を音づれんと、常より殊に綺羅を飾り、上著下著を引かさね、伽羅炷しめて衣紋を正し、さらばと別を告ぐる樣、隈なき夕日にいとゞしく、淸らに見えさせ給ふにぞ、紫ははやかの大井へ、おはする

眞柴は心爽ぎぬ。朝霧は打喜び、男の住まざる家なれば、千鳥を主の代として、田貫を饗しけり。其時田貫千鳥に向ひ、「さる頃此方の姫君は、嵯峨へまゐらせ給ひしよし、その御相手といふべき程なる、幼き者の見ゆるのは、何人の子なるか」ト、問はれて千鳥はふりかへり、こゝへ〳〵とゆかりを呼び、「是はまだ御方樣の、明石においで遊した、其時に都から、光氏樣のお下しなされた、菫野といふお乳母の娘、ゆかりというてたしか五ツ、それは〳〵かしこい生。母菫野は姫君に、お附き申して參つたれど、お方樣に能く馴れて、此方がよいと嵯峨へ行きたい、心は更に無い樣子。お方樣も徒然の、慰めぐさには彼がよいと、お膝の元をおはなしなされず、夜も御夜著の中へ這入り、今では姫君さま同然、誰も是にはかなひませぬ。併し此方へ光氏樣の、お渡りなされてお遊の、長い時には寢所に、困つていつでも此膝に、凭れて眠るを御覽なされ、ねかしてやれの仰が出て、抱いて寐てやる時ばかり、私にはあやまります」ト、背うち叩き顏打眺め、彼も愛するその樣を、田貫つら〳〵打見やり、「さも御座らん衣服も華やか。あゝ世に仕合の子もあるもの。して彼が母の素性は」「たしかには存じませねど、木屋町とやらいふ所の浪人、この子の叔母も司とて、藤の方のお側仕、その御緣でお抱へに、なつたとかいふ事」ト、物語るうち立浪が、奥より立出て、「ゆかりは何所に、お召しなさる」ト呼立てら

で、譬へて言はうやうがない。櫻の花に梅の匂、柳の枝に咲かせたる、御有樣とはあなたの事。ほんに嵯峨の内君は、どんな果報の御方ぞ」ト、皆口々に聞えあへり。

光氏は館に歸り、閨へ直にも入り給はず、端近う打眺め、心の浮かぬ樣なれば、紫は指圖して、燈籠を遠く掛け、近く人を侍はせ、物語などせさせ給ふに、光氏は是をも聞かず、室町にての仰の事ども、心ひとつに打案じ、物むづかしう惱しげに、見えさせ給へば桃の酒、雛の前の折重詰、言の葉小辨に取寄せさせ、常は飲まねど紫も、ひとつ乾してすゝむれば、光氏も氣を取直し、さきの袷を打披き、「是は磯菜が書きたるなり。最前匂の局にて、此袷につきて春秋は、いづれか好きと問ひしかば、磯菜は秋に心を寄せ、御身は春の曙に、つね〴〵心をしめ給へり。それもあはれこれも道理、時々に咲く木草の花、をり〳〵變る空の景色を、もろともに打眺め、心の留る遊など、のどやかになすべしと、思へど出づれば御所に仕へ、入りては家のせいじあり、心にまかせぬ故にこそ、憂き世の中とは言ふならめ」ト、語らひ打臥し給ひけり。

此頃眞柴は勞る事あり、させる病氣にあらざれど、朝霧は深く案じ、かの田貫が事を聞き、名雙寺に我君の、据置き給ふ程なれば、貴き聖ならんと思ひ、幸ひ彼所へ近きに依り、田貫を館に請じ、祈の事を賴みければ、心安き事なりとて、日毎に來り丹誠を、凝しゝ驗あらはれて、

も曾てなし。唐土にては春の花の、錦に如くもの無しといひ、まつたやまと言の葉には、秋のあはれを好しといふ。その時々に眺むるに、目移りなして花鳥の、色をも音をも辨へね。狹き垣根の中なりとも、その折々の風情を見んと、春の花の木をも植ゑ、秋の草をも掘移し、野邊にすだく蟲をもはなち、住ひてこそは面白けれ。君には知召すまじけれど、六條といふ所は、はる〴〵と田面を見晴し、いと景色ある邊なれば、下屋敷を又彼所へ營み、人々の遊び所と、なさんと思ふが磯菜には、春と秋といづれの方へ、心を寄する」ト問ひ給へば、いと御答聞えにくゝ、思へど知らずと言はんのも、憚あればやう〳〵に、「賢き人だに爭を、定めかねたる事なれば、ましてや女の愚なる、心に辨へ侍らん。げにいつとなき其中に、霜をも待たず柞葉の、果敢なう散りし折なれば、わが身にしむる夕風こそ、あはれに思ひ侍れ」ト、しどけなげに言さして、又打泣けば光氏は、心の中にそれよ〳〵、阿古木は秋の末よりも、甚く惱みて消え行きし、所も卽ち六條なり、返す〴〵も彼が歎を、引出して義植公の、御氣色にいよ〳〵背かば、あしかりなんと言紛らし、「此繪は磯菜が筆ならん、紫へのわが土產に、賜はれかし」ト夫をしほに、歸らせ給ふを磯菜は見送り、母の煩烈しき時、枕に立てし葭屏風の、御透影を思ひ出で、いと悲しくてさし俯く、心は知らずうら若き、腰元共はひそ〳〵と、「此お褥の移り香ま

柱に凭り、打眺めたまへる樣、いろ〳〵の花にまさり、姿の夕榮いとめでたし。垣根の竹の戰ぐを聞き、かの野の宮に立煩ひし、曙の事なんど、思出でて川次郎、岩根が事を勇ましげに、取繕ひて義楨公の、御心を引立てんため、物語し給へば、御側に侍りし、磯菜は母の阿古木の俤、目前にちらめく心地して、打泣く氣色も愛らしく、涙見せじと引下り、袖打覆ふその姿、いとやはらかになまめきたり。光氏はその心を察し、由なき事を言出でて、過にし事を思出し、彼は胸打潰るゝならんと、思ふものから人々に、かく傅かれようい行樣、昔に變りてまほしき磯菜が、體をつら〳〵打見やり、今こそ阿古木が執ねき怨も、解けしならんと心安う、其方の方に打向ひ、「渚に沈みし其時に、汐くむ蜑と語ひて、擧けし幼き人のあり、生先のいと待遠なるは、言はずと知れし親心、君の御不便かけらるゝ、御身に彼もあやかるやう、乳母をそへて折節は、此方へ遊びに參らせん、わが亡き後も勞りて、必ず見捨て給ふな」ト、宣へば磯菜は恥入り、暫が間答もせず、辛うじて一言ばかり、かすめる氣色いと懷し。光氏は又物語を、他へ移して世の中の、事どもを聞上げ、不圖傍を打見れば、吉野山の花の盛と、武藏野の秋の千草と、かきし二枚の繪のありしを、側近く取寄せて、「秋の野の盛なると、春の花の林とは、いづれが好きととり〴〵に、昔より人爭へど、このさだめこそ好けれといふ、事は書に

宣はず、「さあらば早々幸壽丸を、わが嫡子として此館の、主となして給はれ」ト、褥を下り側に寄り、打頼み給ふにぞ、光氏は眉を顰め、「其事は内々に、義尚公にも先達て、聞上げて置きつれば、仰なくとも御望に、任せんなれども遙に早し、時の到るを待ち給へ」ト、言ひつゝつれづれ義植公の、御有樣を伺ふに、常よりも猶懷しげに、語らひ給ふその言葉の、何とやらん慇懃にて、差添をもとらせられ、いと氣色異なるを、もとより賢き光氏の、目には怪しと見たれども、かく眞しげに言上せし、人のありとは思ひ寄らず、訝しながら自らも、脇差を遠く押やり、いよ〳〵禮儀を厚うして、暫が間何や彼や、物語し給へども、兎角にしめりがちなれば、御心を外へ移し、慰めんため勸めまゐらせ、匂の局へ附添ひて、諸共に渡り給へり。

磯菜は始め藤の方の、君まだ幼くましませば、お側に少しは物心、知れる人の侍るも、御伽には宜らんと、仰ありしに露違はず、義植公はおとなしき、相手を得たりと喜び給ひ、年月の經つにそひ、御おぼえいと目出度、かの局のしつらひも、輝くばかりにし給ひて、光氏は只管に、親めき扱ひ給ひけり。

春の雨いと靜に降り、露もたわゝに海棠の、眠たげなるには引かへて、桃の梢は目覺しく、殘りなく紐解きたり。蒲公英菫いろ〳〵の、若草の萠出でて、時知り顔もあはれなるを、光氏は

とて世の中の、日外よりして騒がしく、その上頼みに思ひたる、政則も世を去りて、頻に心あわたゞし。三日にもあれ足利の、世を治めしはわが本望。母君とてもこの上の、御望はよもあらじ。されば是より己に代り、家を續ぎて給はれかし。鳩にも三枝の禮はあり、ましてや人においてをや」ト、物あり氣に語らひ給へば、光氏は頭振を振り、「いとあるまじき御事なり。天變ありとは世の雜說、誰見とゞめし者もなし。世の靜ならぬ事は、必ずしも政事の、歪める故には侍らず。賢人の治めし世にも、よからぬ事の有りし例、唐土の書にも見えたり。既に父上義正公、御德は世界に溢れ、此日本の國司、靡き從ふ中にすら、宗全がよこさまの、亂出來て世は盡ぬる、心地せられし事もあり。まして赤松政則が、七十近く年を積み、時至りて失せぬるを、歎き給はん道理はあらず。此光氏を父君の、とりわけ愛させ給ひしかど、家を讓らせ給はん事は、思召し寄らせられず、たゞ此儘にて今少し、齡重なり侍りなば、桂の館に引籠り、長閑に世を經ん願ぞ」ト、更に承引くけしきなし。義植年頃光氏に、面の肖しはさながらに、鏡の影の如くなりと、人の噂を聞置きたるが、今日は生憎儀式の衣服を、脫ぎあらためて著かへし衣の、色も模樣も一對なれば、違ふ事なく側目にも、見ゆるならんと恥かしく、此事かすめ聞えんと、豫ては思ひ給ひしかど、はしたなくや思さんかと、若き心につゝましく、不圖打出でても

いと恐ろしと申すなり。まだいとけなくましまして、物の心を知召さぬ、その中こそ天も許せ、はやおとなにも近き程、御年も加はりし、時に至りて咎を示し、この御館に怪異のあり。さはいへ君に聊も、御過失のありしにあらず、御親達の犯し給ひし、罪の御身にかゝりしと、しろしめさぬが恐ろしさに、思ひ忘れて洩すまじき、事を洩して尊意を苦しめ、返すぐ〳〵も恐入る。願はくは幸壽君を、御嫡子と遊ばされ、御代を譲らせ給へかし。天子にこそはおはさねど、ふしやうの御身に世を治め、給ふが故に天變の、頻に諭し世の中の、靜ならぬも計りがたし」と、思ひ入りたる樣にもてなし、泣く〳〵聞ゆる其中に、明果てぬれば退出けり。

義植公は夢の樣に、思ひがけなき事を聞き、いろ〳〵に思し亂れ、義正公の御位牌に、對ひ給ふも面目なう、臣下と等しく光氏君の、仕へ給ふも恐多く、さま〴〵に思し惱み、藤の方の御機嫌を、伺はんとて渡らせ給ひ、ふと御顏を見上げ給ふ、その時も常に變り、心の底に恥かしう、杉生に詳しき事、問はまほしくは思ひながら、殊更に母上は、つゝませ給ふ筋なるを、我より彼に知らするも、道にあらずと思ひ返し、光氏君に打かすめ、問ひ聞えんに如くはなしと、心を定め其折を、待ち給ふうち彌生になりぬ。上巳は式日なるに依り、光氏君出仕あり、例の儀式終りて後、奥へ渡り給ひければ、好き折からと義植公、しめ〴〵と宣ひけるは、「天變あり

り。君孕まれておはしましゝ、其時よりも藤の方、御心の中に深く、思し歎く事ありて、ある聖に祈らせ給ひし、その聖はわが師にてあり。男女の道は法師の身の、詳しく知るべき事ならねど、藤の方は御病氣にて、音川の館へ歸られ、その中に御懐胎の、氣色あらはれたるにより、御産延びては御添臥の、月にあはざる其故に、はや御平産あれかしの、祈なれども驗なく、事のたがひめありしにつき、光氏君は自らその、罪を知つて都をひらき、須磨へ下らせ給ひし時、藤の方はいよ〳〵おぢおそれさせられ、わが師に又もや、御身に障なき爲の、御祈どもせさせ給ひし、その德により今君には、世をしろしめすものなるべし。その承はりし樣は斯樣」ト、光氏君の御子なる由を、さもあり氣に言葉を巧み、詳しく語るを義楨公、つく〴〵と聞召し、いとさかしうはましませど、まだ御年の足らはねば、田貫が詐とは、更に心のつかせられず、あさましうめづらかにて、恐ろしうも悲しうも、さま〴〵に御心亂れ、暫し答もし給はねば、田貫は事成りしと、心の中に喜びながら、うはべは恐れし體にもてなし、謹んで御前を、引退くを呼止め給ひ、「心に知らで過しなば、後々までの咎あらんに、今まで忍びて告げざりつるを、却つて恨に思ふなり。又此事を能く知りて、漏し傳へん者やある」ト、問はせ給へば打案じ、「わが師は已に世を去りぬ、杉生の外此事の、氣色を見たる人はなし。夫故にたゞ天の眼の、

世の中の事どもを、聞上げしその序に、なほ聲をうちひそめ、「此事を言上なさば、己罪科に行はれんと、思ふが故に今までは、差控へて候ひしが、知召さずにおはしなば、天の眼の恐ろしく、御身に罪の掛るべし。夫を知りつゝ心にひめおき、愚僧が命終りなば、詮なき事に侍らん。つくづく思へば數にもあらぬ、我身の罪に落ちんを憚り、大事を語らぬしれものと、佛も憎み給ふべし」トばかり言さし打出でず、仔細ありげに差うつぶく。義植公つれぐ\と、彼が樣を打まもり、學德のなま生法師は、心僻める者なれば、口頃怨恨のあるものを、罪に沈めんなんどとて、根も無き事を言出づるか、まづ試に語らせて、聞くべしと思しけるが、おもてはさあらぬ風情にて、打驚いたる體にもてなし、「學匠は東山の、おんおほえ殊にめでたく、嵯峨の御所にも一方ならず、思すが故に名雙寺へ、さる頃既に据ゑられたり。されば己も隔なく、思ふに違ひて何とやらん、心に物を包まれし、その言葉こそ心得ね」ト、宣へばいよく\平伏し、「恐入りたる御仰、たとへば佛の深く祕せよと、戒められたる眞言の、道といふともおし廣め、傳へまつるに憚らぬ、心に曇のいかでかあらん。是はきし方行先の、大事にて候なり。過ぎ給ひたる義正公、たゞ今君の御後見と、ときめき給ふ嵯峨の君、まつた藤の御方の、よからぬ事や世に洩れん。始にも申しゝ如く、罪に當るを覺悟にて、佛天の告あるによりて、聞上げ侍るな

其年洛中騒がしく、空に怪しき雲たなびき、日の光月の影、常に違ひて恐ろしき、星の出づるなんどとて、たしかに見たる者はなきを、言罵りて世の人の、恐るゝ事大方ならず。其上に室町御所にも、怪異の事どもより〳〵あり。二月のまだいと寒く、庭の遣水凍りながら、櫻は今を盛と開き、程よく雨は降りぬれど、井の水涸れて更になし。或は宿直の夜具包、忽ち失せて思ひがけなき、家の棟に載せてあり、或は夜ふけて廊下を歩む、足音のみして人は見えず。これに依て卜者巫、道々の者を召して、占はせ給へども、心々の事をのみ、聞上げて是ぞ正しく、當れりといふ考なきに、人々は怪しう思ひ、何の故といふを知らず。光氏のみなん心の中に、思ひ當りし事ありける。爰にさる年名雙寺の、住僧となりし田貫、東山へ度々參り、富徽の前は日に添ひて、親しき者に思すにより、義尙公もおのづから、御祈の師の如く、もてなし給へば世に賢き、聖のやうに洛中の、貴賤も彼を尊みけり。然るに御所の怪異により、室町へも召されたるが、たゞ此事は故ありて、言上はなし難しと、口を噤みて此怪事の、かんがへ文を差上げず。さあらば宿直すべしとて、田貫を留置き給ふ、その夜は怪しき事のなし。さるによりて是よりは、近習の武士と諸共に、義植公の御傍へ、夜毎彼を置かれけるが、靜なる曉に、皆打休み手を淨めに、或は立行きなんどして、御傍に人無き折、田貫お前に近く寄り、

しはいかにぞと、床しく思ひてしげ〳〵に、大井へ人を通はせつゝ、嵯峨の御館へ姫君を、引取らせ給ひしの、便に驚き胸潰れ、又行末は室町の、内君にとて紫の、上をはじめ御側の、女どもはした女まで、一方ならず敬ひ傅く、樣子も追々聞えしかば、嬉しと思ふ事どもも、多くなんありけるに、少し心も安まりけり。

年も返りぬ。空の景色も麗かなるに、思ふ事なき御有樣、いとどめでたき嵯峨の館、さながら磨き改めたる、心地せられて元三は、更にも言はず七日まで、國司郡司、年賀を述べんとここへ參る、馬乘乘物は引續き、室町御所にことならず。然るに睦月すゑつかた、赤松政則世を逝りぬ。世の重ともなりたる人の、俄に果てし事なれば、義植公を始めとし、思し歎く人多かり。光氏は取分けて、萬の事を政則に、押讓りし故にこそ、今まで暇もありつるを、是よりは猶事繁く、ならんずらんと心を痛め、義植公は御年より、おとなしうましまして、才も殊に勝れたまひ、御後見のなきとても、世を治め給ふべき、器量は自然と備り給へり。さればいよよ政則に、讓り聞えてみづからは、靜に世を經ん豫てより、心なりしが思ふに違ひ、いと口惜しう歎けども、返らぬ事はせん術なく、臣下ながらも夕霧丸の、祖父にてあれば七日々々の、佛事の事など細やかに、取まかなはせ給ひけり。





も止めざりけるを、後悔じつゝ歎き添へたり。眞柴も姫の御爲を、思ひて早く手を放ち、渡し給へと勸めしかど、此頃の徒然には、涙もろにて引籠り、佛に勤も怠りつ、茫然として暮しゝが、たゞ日に添ひて姫君は、紫の上に馴れ、數多の女中に傅かれ、給へる樣を千鳥が見上げ、立歸りては物語るを、聞くは嬉しく何をがな、奉りたく思へども、憖ひな事爲出して、わらひを招くも恥かしく、まづ傅の人々に、乳母をはじめ押並べて、世になき衣の色合を、思ひ急ぎて送りけり。

光氏君も姫の樣を、我より直に聞かんとて、さぞ朝霧が待遠ならん、且等閑に棄置かば、さればよ此方に姫君の、おはさぬ故に訪はじなど、思はんもいとほしければ、暇はなけれど年の内に、忍びて大井の館に赴き、言ひ慰め給ひけるが、さらでも淋しき住居なるに、ましてや今は旦暮の、かしづきぐさにさへ離れ、いとゞ悲しき有樣を、見るに光氏心苦しく、嵯峨の館へ歸りてより、文なんど絶間なく、遣し給へど此程は、かの美しき姫君に、罪を許して紫は、見咎むる事もなく、さまでに恨み給はじとぞ。

さて明石なる宗入は、かの朝霧と別に臨み、捨てたる體にあんなれば、はやわが事を思ふまじ、我も都の事を思はじ、今日こそ長き別なれと、其折には潔く、言放ちしが光氏君の、御心ざ

二十八編　下

大井にてはこの事を、宗入方へも言送り、果敢なき事のみ語りあひ、上下ともに打しめり、近づく春の設もせず。千鳥は取分け姫君の、生れさせ給ひしより、乳こそはなけれ乳母より、なほも親しく抱きかしづき、馴れまゐらせし事なれば、何と仰あるとても、彼方へ渡し給ふなと、さいつ頃より朝霧に、人知らず言ひしかど、眞柴が異見背きがたく、且は仰の重ければ、遂に嵯峨へ姫君を、まゐらせ給ふに定まりしを、千鳥は深くうち腹立ち、病といつはり引籠り、御送にも出でざりしが、菫野にさへ朝霧は、別れて朝ゆふ物語の、相手のなくて淋しげなるを、餘所に見んも道ならずと、やう〳〵心を取直し、お側に出でて諫めこしらへ、もとより嵯峨の館へは、參り馴れたる事なれば、彼所へ御機嫌伺ひに、日毎のやうに行通ひ、しばしなれども姫君の、お顔を見るを樂みに、折に觸れてはゆかりをも、誘ひて出でたるが、彼は母の菫野より、朝霧によく懐き、千鳥が戻る其時に、打連立ちていつとても、大井の館に歸りけり。朝霧は姫君を、盡せず戀しく思ふにも、など我はじめ心弱く、彼方へわたし參らせしと、強て

かし。せめては大井の里へ行き、詳しき事ども直々に、聞上げんと思ひけり。御髮置の祝の儀式は、有ふれたる事ながら、是は又氣色異なり、御しつらひの調度ども、姫君に似合はしき、小さき物のみ揃へしかば、雛遊の心地して、一入にをかしう見ゆ。かく此殿はときめきて、ますます賑ひ仕うまつる、女童に至るまで、物思はしき氣色はなし。その中にかの菊咲一人、姫君を見上ぐる度、打涙ぐみ吐息をつき、「親の因果が子に報ふと、いふ諺を惡き事に、ばかり思ふはあやまりにて、よき身となるも矢張因果、驗は目の前世はさまぐ」と、獨呟く折もありとぞ。

り抱下されても、泣きなどはし給はず、目を打さまし紫の、上の側にて果物など、まゐりて遊びおはしょが、此所は何所なるやらんと、心つきてやう〳〵に、そこらあたりを見廻らし、母様や祖母様は、どれにおいで遊ばすと、見えぬを尋ねて愛らしく、打まもれどもまもれども、知らざる顔に恥らひて、打そばみ給ひければ、菫野を召出でて、慰め紛らし扱ひ給ふ。光氏は大井の里の、淋しさいかにと思遣り、いとほしけれど是より旦暮、側に置きつゝ心の儘に、傅きて見給ふ事は、心の望の足るに似たり。さはさりながら忍女に、擧けしなんどと人言はゞ、瑕とやならん紫が、まことに生まぬぞ口惜しきと、心にさま〴〵思ひ渡りぬ。

姫君はしばしの中こそ、大井の館の人々を、尋ねて泣きなどし給ひしが、愛敬あり慈愛あり、人の懐ける紫は、心ざまなるその上に、とりわけ子どもを愛しければ、程なく姫君馴睦み、膝に凭れ抱かれて眠り、是が實の母上と、思ひて甘え我儘の、日毎に募るがなほ可愛く、腹もいためず愛しき、ものを得たりと打喜び、人手に掛けず抱き扱ひ、もてあそび給ふにぞ、菫野もおのづから、御身ちかく仕馴れ、はじめの案じ引かへて、心安うはなりながら、かく姫君の御機嫌よく、御上に馴れさせ給ひしを、朝霧様に餘所ながら、見せましたしと夫のみが、心に懸り此所にても、乳ある者を又一人、召抱へ給ひしかば、その乳母に姫君の、疾く馴染ませ給へ

やり「母様どれへ行き給ふ。私は殘つてお方様の、お側に待つて居るほどに、おみや持て來てたまはれ」ト、例の如くに朝霧が、膝のもとを離れねば、光氏はふりかへり、「せめてもの慰めに、それこそは幸なれ、姫が尋ねてむづからば、其時迎へにおこさん」ト、乘物を手繰に舁かせ、立出でたまふ此方の一間に、よゝと泣くのはたしかに眞柴。さてはなまなか立出でて、名殘を惜まば堪へられじと、思切つて別の顔だに、打見ず忍び居たるかと、いとゞあはれに思へども、聞かぬ顔して大井を離れ、途すがらもかのとまりつる、親子の心苦しさを、返す〴〵も思遣り、よしなき罪を作りしと、かひなき事を悔みつゝ、思はずも時移り、暗うなりて歸り給へり。

此所も廣縁いと近く、舁下したる乘物の、中より菫野窺ふに、庭には小松を植渡し、撒砂もり砂潔く、雪の降りたる景色もなきが、點しつれたる銀燭の、火影に隈なく見渡さる。待設けたる數多の女、すはお歸りと出迎ふ、いと華やかなる有樣を、田舍よりして附添ひし、腰元なんどは打見るより、己が身を恥ぢいかにして、この人々と立交らんと、思ひつれど此所よりは、打離れて靜なる、西の座敷をしつらはせ、小さき屏風褥ども、美しげに設けおかれ、乳母の部屋には廊下を傳ひ、北に當るを賜りければ、少し心も安まりぬ。姫君は途にて寐たまひ、籠駕よ

んと、心苦しく思ひければ。朝霧が氣をやすめんと、是よりなほも大切に、育てあげん事の由を、宣ひながら迎の乗物、庭口より緣の上に、舁上げさせ給ふにぞ、朝霧は涙を隱し、「賤しき妾が生みし子と、人の譏のなきやうに、傅かせてだに給はらば、此後見ずに過しても、心にかかる事はなし」ト、聞ゆるものからこたへかね、聲を忍んで泣く風情、餘所の見るめもあはれなり。光氏も目を瞬き、「イザ賑やかに面白き、所へ連れて行くべし」ト、すかし給へば姫君は、何心なく、「美しい、あのお駕籠でか」ト乗らん事を、急ぎ給へば朝霧は、泣く〳〵みづから搔抱き、かの乗物を舁上げし、緣に立出で給ふにぞ、片言の聲美しう、「さア母樣も一緒に乗つて」ト、袖をとらへて引かるゝが、いと悲しうて涙ながら、

すゑ遠し木高き蔭を松の苗

言ひも果てずに咽び泣。さほどに思ふかあはれやと、光氏も苦しく思して、

たけくまとならん小松の千代ふらば

「心長閑に見給へ」ト、言葉を盡しさま〴〵に、慰められて朝霧は、いと頼もしくやう〳〵に、心は思ひ靜むれど、兎角歎に堪へざりけり。傅には日頃より、氣に入りの腰元ども、御合輿は例の菫野、御守刀天兒の、類のものを持ちて乗る。ゆかりもなんの頑是なく、此體を打見

ばると、明石へ下りて宮仕　おなさけ深いお心に、甘へまして恐れながら、此お館を我家と、思うて氣象もなかりしを、今更嵯峨の御殿へ移り、知らぬ人に立交らひ、又よそ〳〵のつきあひに、悲しい事もあらうかと、思へば心も安からず。あなたも頓てあの方へ、移らせ給ふ由なれば、お顔を見上げず打絶えて、居るのもしばしの中にもせよ、忘れがたう戀しうて、身も世もあられまじ」なんど、打歎けば朝霧は、いよ〳〵心細さまさり、我は怪しくさま〴〵に、物思ふ身にありけるかなと、心に悔みこしかた行先、思ひ續けて言葉もなし。此雪少し解けて後、光氏は渡り給へり。つね〴〵には待わびて、おいでを嬉しく思ひしも、此姫君を迎へんため、おはしゝならんと今日は悲しく、朝霧は胸ふさがり、わが生みし子のわがまゝに、ならざる事はよもあらじ、まゐらせ難しと言放たば、それをおしてと我君も、宣ふまじと心を定め、進出でしがいや〳〵〳〵、言ひし言葉を今となり、變がへしては武士の、娘に似あはず輕々しき、樣に聞えて父上の、御名までも出さんかと、思ひ直してさしうつむく、母の心は露知らず、姫君は打笑みて、いと美しげに居給へるを、光氏つら〳〵見たまふに、祝は濟まねど此春より、はやおきそめて麗しき、髮のゆら〳〵耳元へ、靡れかゝるも愛らしく、にほひやかなる容貌は、更に譬へん物もなし。あはれや母はかくめでたき、娘を餘所のものとなす、心の闇のいかなら

思ひ知りて打まかせ、まゐらする事の由を、細々と聞えければ、光氏はこれを見て、さては朝霧心折れ、姫を此方へ渡すとよ、いと哀れなる事かなと、思ひながらに迎取る、吉日を撰ませつゝ、その用意はまづ人に隱し、密にせさせ給へども、身近く仕ふる者どもは、誰いふとなく聞くとなく、大方知りてそは目出たき、御事なりとてまだ姫を、呼迎へざる其中より、嵯峨の館はいよ〳〵賑ひ、大井の住居は姫君の、〽おはしながらに御迎の、今日は來るか明日はや、彼方へ渡らせ給ふかと、皆御別を惜むより、日に〳〵淋しく心細き、事のみ言ひつゝ過すほどに、日數もたちて師走になりぬ。雪かき暮し降積り、汀の氷に枯蘆の、あはれげに閉ぢられしを、寐卷のまゝにて朝霧は、打眺めて居る處へ、姫君をかい抱き、菫野は立出でて、「常でもあなたは端近な、所はお嫌ひなされながら、この朝風の寒いのに、お緣先までおいでなされ、お風でもめしますな」ト、言はれて吐息もろともに、此方を見かへる目もうるみ、常よりもなほ姫君を、かひ撫擦り衣紋など、引つくろうて膝にあげ、「返す〴〵も手を放ち、彼方へ任せまゐらするは、いとあはれには思へども、行末の御爲を、思うてこらゆる此胸を、推量してたべこれ菫野、三年が間旦暮の、物思はしさ憂き事も、語り慰め暮したる、御身にさへも引わかれ、今日の樣な淋しい日に、「これから先はどうせう」ト、泣けば此方も共に泣き、「不思議な御緣ではる

ど、武家の娘の身に取りては、上なき幸あらせんと、姫君の御事を、最前君の宣ひしは、幸壽丸とて義尚公に、御男子はありながら、御世讓のその時は、やう〳〵にお二つ三つ、あまりに幼くまします故、義正公の御愛子、義植公を御跡目、光氏ぎみはその義理を、思召されて義植公に、御子なきうち幸壽君を、また御養子に遊され、近き中に御嫡子の、ひろめあるよし世の取沙汰。この幸壽君御成長、あらせられなば御身の生みたる、姫上をその内君に、參らせられんの御心を、内々心のあるなればと、仰せられたるものなるべし。それをうか〳〵留置く中に、光氏君の御側女、氏も賤しからざるが、御子を生みなばこの姫君は、それにけおされ給ひなん。宗入殿も言はれし如く、謀叛人の孫なんどと、噂されなばいよ〳〵大事。仰の如く紫の、上に任せて置き申さば、夫等の瑕は言ふ者あらじ。御髮置の祝の儀式、心を盡していかばかり、美々しくするとも隱家にては、何の映もなかるべし。たゞ我君のお心に、まかせ給へ」ト女ながら、眞柴は思慮ある者なれば、末の事ども思ひやり、事細やかに敎ゆれども、兎に角心を定めかね、卜筮に名高き者など、呼寄せて卜はするに、あの方へ姫君を、渡し給ふ方こそ宜けれと、いづれも等しく考へければ、朝霧も思ひ弱り、光氏より髮置の、祝はいかにし給ふやらんと、言おこせ給ひたる、文の返によろづの事、かひなき身にて傅きなば、御生先もいかゞあらんと、

この身は朽ちなば朽ち次第、生先のある姫君は、彼所へ渡し奉り、その行屆かせ給ひたる、教を受けさせ給ひなば、行末めでたきおん身となるべし。さらば何の心なき、幼き中に譲らんには、しかじと思へど手を放ちて、悲しき事を若し聞かんか、又淋しさをいかにせん、君も姫上おはせばこそ、訪ひ音づれもし給ひつれ、しかするならば此後に、御立寄はあるまじなど、さまざま思ひ亂るゝに、身の憂き事は限りなし。口に言はねど其心を、大方察して光氏も、強ては勸めず又外の、物語に打紛らし、立別れ給ひければ、母の眞柴は一間を立出で、「先刻より仰の事どもは、あれに隱れて洩聞きしが、姫君を是よりして、見奉らず暮さんは、妾も御身と同じ事、いと悲しくは思へども、行末の御爲を、思ひてたゞ〳〵打頼み、渡し給ふに如くはなし。淺く思して光氏君の、宣ふ事にはあらじかし。母方の氏により、思はぬ幸ある事あり、近く譬はゞ義植公、御本腹にはあらざれど、藤の方は執權職、音川の養女にて、その實は義正公と、御いとこどちなるにより、義尙公の御子として、世を治めさせ給ふなり。御順養子はさしあたり、光氏ぎみの筈なれど、御母方は馬島氏、やうやく丹波の郡領なれば、才も器量もあの如く、勝れさせ給ひながら、今弟御を主とあしらひ、その身の程を知り給ふを、なほ尊みて諸人の懷き、室町よりも御勢は、勝れさせ給へども、足利の世は取り給はず。御身は何と聞きしか知らね

かこちて迎取り、給ふならんと豫てより、思ひ設けし事ながら、今更に胸潰れ、落つる涙を押隱し、「今改めて内君の、姫上なりと押廣め、かしづかせ給ふとも、浮世の人の洩聞いて、實はあれはかう〳〵いふ、賤しい女の腹なりと、さがなき口に言立てなば、なか〳〵につくろひ難く、思されん」とて放ち難き、朝霧が心を察し、「さう思ふも道理ながら、繼しき母の手しほにかけ、とやあらんかくやあらんと、疑ひ給ひそ紫は、年經ぬれどもいまだに子無きが、いといと淋しく覺ゆる故、磯菜といひてみづからが、年と同じ程なるさへ、館に移し養はんと、言ひつる事も既にありしが、己思ふ旨ありて、義楨公の傅に、かの磯菜を隱家より、直に御所へまゐらせたれば、紫はまだ一度も、逢ひたる事だになけれども、をり〳〵文を取交し、よろづ子めきて扱ひぬ。ましてや憎み難げなる、姫を見せなばおろそかには、思ふまじき心ばへ　年月馴れて知るからに、さてこそかくは言ふなれ」ト、なほ紫が人を憐れみ、情深き事なんど、語ひ給ふをつく〴〵打聞き、まことに昔は通はせ給ふ、所々のいと多く、浮れ歩かせ給ひたる、その御心の名殘なく、靜らせ給ひしも、此内君の御心に、叶ひ給ひし故なるべし、さすれば上は御容貌の、麗しきのみにもあらず、萬の事に行渡り、人に勝れし御發明も、是にて思遣られたり、夫に竝びて御館へ、移らん事は思ひも寄らず、宮も藁屋も同じ事、大井の川の埋木と、

とぞ。

松風の巻をはり、薄雲の巻に移り、又大井の里の物語なり。

かく疎々しく光氏は、捨置き給ひ故郷とは、遠く隔たり父には別れ、朝霧はいと便なき、心地のみして明し暮し、秋暮れ冬になる儘に、いとゞ淋しき川べの住居、心細さぞ彌增ける。ある夜光氏渡り給ひ、かの朝霧が物思はしき、姿をつく〴〵打眺め、「先にも度々いふごとく、御身を迎へんそのために、東に館を造らせ置く。人離れなる此里を、離れてはや疾くかの近き、所に思立ちてよ」ト、勸め給へば顏をあげ、

宿かへて待つにも見えずなりぬるはつらきところの多くもあるかな

「其所に居ては通ひにくいと、男にたらされ秋風の、立ちしも知らず宿がへした、むかし女の詠みし歌、わが身に能う似て侍らん」ト、答へて言葉に從はねば、光氏は膝すり寄せ、「さあらば御身のその代に、幼き姫をわが方へ、迎取らせて給はれよ。武家の女の身に取りては、上なき幸あらせんと、内々思ふ仔細あり、埋らせては置き難し。紫もかねて聞き、つね〴〵床しがるなれば、これより彼に養はせ、髪置帶解その外の、祝の儀式も押晴れて、はな〴〵しくしなさんと、思ふはいかに」トまめやかに、語ひ給ふを打聞いて、「君には御子も多からねば、殊に

はじめて見たるより、いと愛らしきその樣を、忘れ難くは思へども、あゝいかにせん母方は、いづれも氏なき田舍人、表立ちて言出でんは、憚多き事のみにて、思ひ煩ひわが心を、助けて御身も諸共に、生の子なりと思ひ定め、此所にて育み給はらんや。髮置くほどになりぬるが、罪もなく報もなく、慕ひ寄りなどするなれば、さすがに思ひ捨てがたし」ト、打萎れて宣へば、紫やう〳〵此方をさし向き、「兎角に君は何事も、打かすめつゝ宣ひて、何とやらんお心に隔てたまふ樣なれば、それについて此方も亦、恨がましく聞えもすれ、さまでに現に宣ふを、何とて辭み侍らん。もとより妾は子供ずき、そのいはけなきお心に、叶ふやうに取扱ひ、もう父君も何も入らぬ、この母上があれば宜いと、これ此膝を片時離れず、慕ひ寄らせて御目にかけん。お三ツなれば愛盛り、その美しき程を過ぐさず、此所へ迎へて給はれ」ト、少しも早く抱きかしづき、うらなき心を知らさんと、喜び給へば光氏は、安堵しながら朝霧が、歎きの程もはかりかね、かくは言ひしが呼迎へん、事は心に一決せず、さま〴〵に思ひ亂れ、これより後は殊更に、紫が思はん事の、恥かしければ大井の里へ、渡り給ふは甚難し、かの名雙寺の念佛などに、かこちて漸く月の中に、二度ばかりの契にて、年に一度の七夕の、逢瀬のみには立勝れり。朝霧も及びなき、わが身の程は逢初めぬ、その昔より知りながら、物思はしき折も有り

數、いと多かりしが年ましては、行儀正しく身の程を、能く辨へて側仕の、數に入置き給はるを、いとありがたしと思ふから、恨がましき事を聞えず、顏も形もふけながら、心は却つて世の中を、知らぬ娘の時に戻り、何事も差控へ、いとしとやかに仕うまつる。夫にひかれて召使の、女童もはすはならず、姿なども打解けず、座敷は塵なく掃清め、よろづ心遣ひして、調度なんどを取亂しゝ、事のなければ光氏も、心安くて長閑なる、隙ある折には案内もなく、差覗きなどし給へど、夜たち泊りなどやうに、久しく居給ふ事はなし。今宵は取わけ先により、かの紫が解けざりつる、氣色の心に懸りければ、酒少し打飮みて、たゞ物語を聞え交し、夜更けぬ中に取急ぎ、立歸りて紫が、居間へ入らんとしたまふ折、大非へ最前遣されし、使の者の朝霧が、返を持ちて參りたり。光氏は取上げて、隱しもやらず打見るに、たゞなだらかに書きなして、人の見るとも憎むべき、言葉もなければ紫の、傍に投遣りつゝ、「それを破りて隱し給へ、かゝる物の落散るも、似げなき程に今は早、年もふけし」ト脇息に、凭り居たまひて心には、あはれに戀しう思ひやられ、火を打眺めて言葉もなし。かの文は打ひろごり、そのままあれど紫は、見向もせねば光氏は、つくぐ\と吐息をつき、「取隱す事はさておき、尻目にさへもかけずして、捨置き給ふは何事ぞ」ト、少し打笑み近く寄り、「實はいはけなき者を、此頃

たゞそれを、餘念もなげに打眺め、心の解けぬ樣なるは、例の癖ぞと光氏は、そしらぬ風して、「此頃中、川邊にて夜をふかしたる、その故やらん何となく、今日は心地のすぐれず」ト、打臥しけるが暮れかゝる、程にやう〳〵起出でて、「一昨日の夜の事どもは、磯菜よりして義植公に、定めて聞上げつらんが、なほも詳しき事の由を、直々に言上せん」ト、出仕の用意を言付置き、忙しき中にも大井の里へ、音づれをすべく思ひ、文ひき隱して書き給へば、彼所へなめりと紫は、心付けどもたゞ尻目に、かけしのみにて言葉に出さず。光氏は室町へ、立出でながらかの文を、使に渡しひそ〳〵と、打囁くを腰元の、女どもも見て取りて、たしかそれへと心憎く、思ふそぶりもいと著し。是を見捨てて光氏は、遠侍まで立出でしが、心の中に思ふ樣、今より御所へ赴かば、御物語に時移り、宿直となりて夜の中には、所詮戻り難かるべし、さある時にはいづれへか、又行きたりと疑はん。田貫の一條は、あながちに取急ぎ、聞上ぐべき事にもあらねば、今宵はまづ遠からぬ、所に暫し立忍び、程よき頃に室町より、戻りし樣にもてなさんと、俄に風の心地と詐り、供の者を退かせ、かの乾の新館、花郷を訪ひ給へり。折節花郷廊下口に、何やらん打眺め、彳みて居たりしが、渡らせ給ふを見るよりも、いそがはしく手をつかへ、禮儀亂さず奧まりたる、一間へ直に請じけり。抑この花郷は、あだ〳〵しくて言

二十八編　上

光氏は大井の館を、立離れ給ふ處へ、良清が言ひたる如く、犬吉はじめ迎への腰元、門前近く尋ね來り、又例の斧の柄の事ども、くち〳〵聞えければ、光氏駕籠をしばし止めさせ、「げに朽ちぬべく思ひしゆゑ、今日は是非にと今急ぎ、歸る處にあんなれば、引退りて後より參れ。いと輕々しき隱家を、見顯はしたりなんどとて、犬吉うかと囀るな。雀の子を逃しゝやうに、又紫がむづかりて、重ねて己が居ぬ時に、搜して來いといふであらう。乘物やれ」ト御心の、せく樣なれば御供も、心得て道を早め、程なく館におはしつき、暫が間うち休み、さて紫の方へわたり、「一日二日と言置きしが、思の外に桂の里は、眺ある所にて、鵜飼の手業も面白く、室町よりして風流を、好む者ども尋ね來り、網を曳かせ釣を垂れ、酒うち飲みて遊ぶ程に、此者どもにいといたう、我が歸らんといふを止められ、約束の日の過ぎたれば、さぞ待遠にありつらん」ト、なほさま〴〵の物語、聞え給へど紫は、更に答もし給はず、かの仙人の碁を打つ繪を、床の間に掛けさせ置き、その傍にて側遣ひの、女童にむさしをさゝせ、頬杖突きて




柳亭種彦

偐紫田舍源氏第二十八編序

或人曰、鳴くにさへ笑はゞいかに時鳥。此句江洲日吉の宮、歌仙の額に捨とあり、毛吹草、古百人一句に光貞の室と記し、其角が句兄弟に赤右衛門妻とあれども、人、貝原の捨を知りて、赤右衛門とも光貞とも、夫の名はいふ者なし。紫式部は三歳兒も知りて、是又夫の宣孝をば、書を讀まざる者は知らず。千人子持の鬼子母神、子の無き男は其夫へ、願をかくべきはずなれど、不學の者は名だにも不知。室は愚なるこそよけれ、夫の名をくだすとは、道理か知らねど此句により、毛吹草も名が高く、鬼子母神あるがゆゑ、二階續きの雜司が谷、吾修紫樓も觀音の、化身の利益によりてこそ、ゆくすゑは人にも知られめ。さぞ宣孝はあが佛と、かしづきつらんとおもひやらる。

天保戊戌春　　柳亭種彦

お歸りなさるお姿を、お見せ申したその代、また私があなたの上へ、乘つたらたちまち罰が當り、滑つて落ちて美しい、これこの顏が損ねやう」ト、伸上り〳〵、氣を揉みあせれば朝霧をかしく、「さういふ其方が行々子より、よく囀つて姦しい。今度お供においでの時、あらはに言はずからも見えなくなつた。お二階のお湯殿では、私が踏臺に、なつてあなたに光氏君の、

お歸り

氣色ばみ、素振を見せたら我も思ひ、なきにしもあらざりしを、彼方でも言はれやう」と、打笑ひつゝ名殘淋しう、打眺めしも是にぞ少し、心を慰め居たりける。

し簾を引遣りて、濃かに語ひおき、出で給ひしが立止り、しばし後を振返り、彳みておはしければ、朝霧もはじめには、動き難しなんどとて、いたう心をしづめたる、樣にもてなし居たれども、今は人目も憚らず、かの庭口へ立出でて、つく〴〵と打見るに、光氏明石に下りし頃は、ほそ〴〵として丈高く、瘦姿にてありけるが、此頃はやゝ肉つきて、なりあふ程になり給ひ、もの〳〵しきがなほ艶にて、まことに盛の形なり。いとのどやかにさし歩み、給ふも次第に遠ざかれば、門前の大路まで、能く見え渡る高殿へ、朝霧は座を移し、打詠むれば嵯峨よりの、迎と見えてうら若き、女一群いろ〳〵の、摺箔縫箔染模樣、秋の錦を山風の、吹きおほふかと疑はる。光氏君の御乘物、しばらく止れば女ども、皆一樣に禮をなし、目だたき樣に立別れ、遙お後へ引下るは、何とか仰のありしなるべし。近習の武士は御駕籠を、打圍みつゝのよしりて、歸らせ給ふを見送り〳〵、心細げに彳む折、みつ吹といふ腰元が、あわたゞしく走り來て、「申し〳〵お方樣、光氏君のお刀を、お庭の中は私が、持つてお供を致しましたが、受取られたは明石へはじめて、君のお出のその時に、あなたへもお勸め申し、望遠鏡で見た時から、思ひそめた立派な殿御、鳥のやうなお名であつた、オヽそれ〳〵よしきり樣、浦傳ひなされたる、昔にあらためお裝も華やか、心地よげにてお駕籠に添ひ、お歸りなさるお姿が、もう此所

やりても人には知れまじ、取りて來ん」など言紛らし、後へ戻りて立止り、給へる以前の切戸口、菫野は心得て、姫君抱きてさし出でたり。いとあはれなる氣色にて、光氏は掻撫でつゝ、「なまなかに一日二日、馴れては今より片時も、見では苦しかるべきを、あゝいかゞせん這渡る、程より近きこの大井の、里さへ遠き心地ぞ」ト、吐息をついて宣へば、菫野は打ほゝ笑み、「仰の通りいと近き、こゝへ移らせ給ひしを、今より君が疎々しく、もてなし給はゞかの浦に、遠く隔てて在しゝより、御方さまは猶更に、御心づくしに侍らん」など、ことよく言へば姫君も、手をさしのべて光氏の、立ち給へるを慕ふにぞ、ついそのまゝに引止められ、「いかなる宿世か物思の、我は絶えざる身にこそあれ。この幼きが母上も、など諸共に立出でて、別は惜み給はぬぞ。さあらば少しは人心地も、あらんものを」ト戯れ言へば、菫野は打笑ひ、「左樣に聞上げたれど、御方さまの仰には、なか〳〵に物思ひ、亂れて打臥し侍れば、急いでは動かれぬと、おしづまつて御座ります」ト、聞いて光氏そはあまりに、上臈めかしきしなしぞと、心に思ひて點くばかり。傍の女子ども、そのいろめを見て取りて、御送りにと勸められ、朝霧はしぶ〳〵に、ゐざりいでて掛渡しゝ、簾に姿の半を隱し、差覗き給へるけはひ、たをやかにしていとよしあり、いかなる貴人の姫君と、いふとも更に恥かしからじ。光氏は縁に腰掛け、少

目さめて昨日より、なほも親しく袖に縋り、膝に凭れ寄りなどして、遊び相手とし給ふを、光氏飽かず打まもり、あゝいかにせんかの遠き、田舎は遁出でしかど、又此所とても押晴れし、山名の館といふにもあらねば、たとひ構は美々しくとも、とりもなほさず隠家なり、姫をこゝにて育てんは、いと口惜しき事にこそ、嵯峨に移して紫の、養ひ子となし心のまゝに、もてなす時んば成長の、後に幸あるべしと、心に思へど朝霧が、思はんこともいとほしく、打出してはえも言はず。かゝる折から庭口へ、忍びやかに仁木良清、御迎とて差伺ふ。光氏急ぎ羽織など、引掛けて立出でつ。「いとはしたなき業なるかな、見顕さるべき隠家ならぬを、いかにしてか知りつらん」ト、言ひかけて、「それよく〱、妹に問ひしか母に聞しか、包まず言へ」トありければ、良清はすり寄つて、「御帰を嵯峨の内君、殊の外待わび給ひ、御迎にまゐれとて、言の葉仰を蒙りしが、表立たざる事なれば、若き者こそ宜しからめと、申上げて犬吉はじめ、御腰元五六人、桂の御館へ遣はし給ひぬ。こゝには何とておはせぬかと、立騒ぐその處へ、某折よく參りかゝり、彼等には何とも言はず、拔駈して是へ參上。早く御立あらずんば、此所へ尋ねて參るべし」ト、申す中に忍びの供人、みな打揃ひ騒がしきに、ひかれて光氏門前まで、ついうかうかと立出でしが、姫君の事御心に掛りて直にも歸りかね、「我は忘れし物のあり、言付け

し夜の、事ども思し出でらるゝ。折こそよけれと朝霧は、琴さし寄せて、「その時の、御形見はこれにあり、久しぶりにて御手を觸れ、皆の者にも聞かせて」ト、望めば君も靜なる、折も折なり所も所、えうちおき難くて掻鳴し、「この音色の變らぬ中、また相見んと契りしが、調はおなじ琴の絲、絶えず忘れぬわが心の、誠を今こそ知りつらめ」ト、戯れたまへばにつこり打笑み、「そのかね言をたのみにて、年月君をまつのひゞき、なく音をそへしが御爪音の、その折に引かへし、なほ面白いは玉琴も、たまく\御手に觸るゝのが、嬉しいのでござりませう」ト、年増したれば事馴れて、さらりと應ふる形氣色、はしたなからず重くれず、名に聞えたる光氏の、妻といふとも恥かしからぬ、樣に見ゆるは朝霧が、身に餘りたる幸なるべし。

はじめの程は姫君も、父とは聞けどいと幼き、心地に少し恥らひしが、その次の日も光氏は、此所に遊びて在しければ、やうく\に打解けて、物いひ笑ひ後を追ひ、睦れ寄るを見給ふに、匂まさりていと美し。抱きておはする其樣は、花と蕾に異ならず。菫野は見たてまつり、そも御方には前世に、いかなる善根いかばかりの、功德をかし給ひて、かゝるめでたき殿に添ひ、かゝるめでたき姫君を、擧け給ひしものならんと、心の中に思ひけり。」

又の日は嵯峨の館へ、立歸るべく思しければ、常よりも緩かに、起出で給へば明石姫は、疾くに

給合の、その時までは打絶えて、對面もせず言葉も交さず。輕々しくなあしらひそ。さて田貫が巧の事ども、村荻より聞きしかば、その趣を始めとし、この磯菜を義植公の、樣にもてなし送らるべし、我より外に對面せず、それと思はせ事を計り、又良清を鵜飼の船に、忍ばせ置きて火藥を用ひ、徒黨の者を討取らせ、田貫に肝を冷させ、追遣らん手段まで、詳しく文に書認め、藤の方に聞えし故、男と見えつ女なる、磯菜が怪しき出立に、田貫いよ〳〵驚きて、逃歸りしこそ一興なれ。藤の方には今宵の事ども、心元なく思召され、わが腹臣の高直が、宿直をさいはひ斯う〳〵と、御物語ありし故、船を浮めて良清に、力を合せしものなるべし。兎角いふ間に時移らば、樣子いかにと室町にて、案じわびさせ給ふならん。高直良清衣服を改め、磯菜にかしづきはや〳〵行け。さあらば我も歸らん」ト、供の用意をそれ〴〵に、觸流させ給ひけり。

夜も更けければ廿日あまりの、月さし出でて光氏は、大井の里へ歸り給ふ。朝霧はじめ皆待取り、川を見晴す高殿へ、直に迎へまゐらするに、月の光の波に碎け、そこはかとなく哀なる、景色をつく〴〵詠めたまひ、「四年以前しかも秋、明石に名殘を惜みしも、今宵の樣によく似たり。やがて迎を下さんと、力を添へしが心には、又の逢瀬をはかりかね、悲しかりし」トあり

神の化身と世の人の、あゝ貴むも道理なり。おそれ多き事ながら、室町君の御機嫌は、いかゞ渡らせ給へるか」ト、伺ひ申せば光氏領き、「貴僧は度々御所へ上り、御前へも出づる由、されば憚る事もなし、御目見いたせ」ト宣ひながら、手づから簾を引ちぎれば、中に著座をし給ひしは、義植公にはあらずして、髪を島田に結上げし、まだうら若き女なり。田貫はたゞ恐ろしき、夢見る心地に身は冷汗、何と言ふべき言葉もなく、只はつ／＼と後退り、馬刀引連れ逃歸る。

此時に柴垣の、陰よりそろ／＼空衣村荻、これも腰簑竹の笠、やつす姿をそのまゝ立出で、まづ村荻が御前に向ひ、「最前の仰の趣、良清に傳へし處、さあらば今宵鵜飼の船に、忍びて事を計るべし、集り勢なり殊には雜人、恐ろしい事はない、汝も今宵はこゝに泊り、見物せよと申す事。折よく母の空衣も、君のお文を室町へ、差上置きて此所を尋ね、來たこそ幸ひ諸共にと、目立たぬ様にこのやうな、姿で忍んで居りました」ト、つら／＼言ふに光氏は、いよ／＼蜑の囀を、思ひ出してをかしきなるべし。空衣は伸上り、「私どもは遠くから、お袴ばかり見上げた故、義植公と思ひの外、ても麗しき御女中」ト、言ひつゝ側に消え殘りし、篝の影に顔うち守り、「やァお前は磯菜さま。大きうお成りなされたで、今まで心が付かなんだ」ト、いと馴々しく寄らんとするを、光氏は押隔て、「以前はともあれ只今では、義植公の妾、それがしだに





見物あれと言ひしはこゝ、まづ控へて居られよ」ト、言ひさま手早に羽織の下に、隠し置きたる半弓取出し、合圖の響矢うち番ひ、切つて放せば高鳴し、はるか彼方に落ちると見えしが、かの鵜飼船二三艘、眞一文字に漕歸り、篝火執つててん〴〵に、群り立つたる曲者を、目がけて左右に投付くれば、不思議や此火四方に飛散り、平一面の炎となり、五體を燒かれ烟に咽び、踏滑りて水に溺れ、たま〳〵命を逃るゝ者は、雲を霞と逃散りて、忽ち騒は鎭りけり。田貫ぞつと怖氣だち、色青ざめて打慄ふを、光氏は尻目にかけ、「コレ南蠻の火術にて、まだ此國に傳らざるを、故あつて我のみ知る。法力に奇特あれば、武術にも亦不思議あり。良清、高直大儀大儀」ト、仰にはつと兩人が、鵜飼にやつしゝ簑笠ぬぎすて、高直御前に兩手をつかへ、「おしつけ是へ參上と、申上げ置き船を廻し、良淸と示合はせ、野狐の化損ひは、仰の通り計ひたり。某船に在る事を、賢察ありしは荻の枝に、附けたる小鳥ゆゑならん。誰にもせよ君に野心を、狹む者あらんには、まつ此の如く搦めんと、法に外れしがんじ搦み、鵜繩にあらぬ捕繩も、此處に所持して候」ト、かの田貫を屹と見れば、いよ〳〵恐れ立つしほも、なくて只管平伏し、「かゝる御遊の折にさへ、行屆かせ給ひたる、御備といひ殊には奇術、凡人にてはよも在さじ、

垂れ、そのはづれより御褥、御袴のみ僅に見え、義植公の御顔は、現に見えざる様にしつらへ、その前に光氏君、悠然と坐し給ひ、「田貫是へ」トありければ、憚る色なく罷出で、「先刻申上げたる通り、形を變へて候へば、御許を蒙りたし」ト、弟子馬刀をも引連れて、少し下つて控へたり。鵜飼どもは召に從ひ、どや〳〵と入來るを、光氏遙に見給ふに、雨降らねども簑を纏ひ、或は笠を著たるもあり。詠みたる言葉に何やらん、打呟けるその有樣、男と女とかはれども、蜑の囀思ひ出でらる。彼者どもは繫置きし、舟へ乘りつゝ漕出し、右と左に幾筋かの、繩をたぐりて鵜を放ち、馴れし手業の面白きも、次第々々に遠ざかれば、たゞ霧の絶間々々に、篝火のちらめくは、峰の紅葉を秋風の、誘ふ風情に異ならず。折もこそあれ此岸に、かゝりし筏の苫はね除け、又は葭蘆生茂る、中より怪しの人大勢、現れ出でて聲々に、「是は大井を年久しく、棲所となしたる狐なり。然るを光氏指圖して、草を刈らせ木を伐らせ、館を營みたるにより、親子眷族散り〳〵に、別れて路頭にさまよひぬ。元の如くに住居を毀ち、我々に返すや否や。返答次第に汝は元より、從類を絶すべし。いかに〳〵」ト鋤鍬竹槍、掻込んで勢猛く、罵りながら拔ん出て、岸より上る者はなし。田貫は屹と見やり、「さて〳〵憎き廣言かな。光氏君に敵たふとは、身の程知らぬ畜類ども。わが行力にて退けくれん」ト、立つを光氏押止め、「天狗

付けやる。此方へ取次まかりいで、「田貫とか申す僧、密に申上げたき旨、候由にてお庭口へ、罷出でて」ト言切らぬに、「チヽ宜しく〳〵、是れ呼べ」何をか言ふと心に打笑み、待ち給ふとはゆめゆめ知らず、田貫厚く禮を述べ、恐る〳〵にじり寄り、「今宵の雲のたゞずまひ、星の光もただならず。忍びやかに室町君の、渡らせ給ふと覺えたり。もし然あらんには少しも早く、君もろともに御座所を、他所へ移され然るべし。その故は」ト指折り數へ、亥の刻過には此川の、おもてに怪しき事あらん、御愼こそ肝要なれ」ト、例の如く殊勝氣に、珠數爪ぐりつゝ述べければ、光氏はにつこと笑ひ、「須磨の浦邊の高潮にも、我はさまでに驚かず、ましてや波も立たざる川を、恐れて他へ移るべき。何事の有るかは知らねど、夫こそ却へて一興ならめ。貴僧も共に見物あれ。さあらば猶も岸近き、所に御座を構へん」ト、其方の方を見給ふに、川に臨んで造りたる、座敷の中に室町の、御供の侍ども、皆打舉りて彼方此方、盃たび〳〵打廻り、醉に紛れて川の邊、危げなるに心もつかず、小聲に謠ひ坐して舞ひ、「同じ囃子にありながら、室町に聞きしとは、又格別に面白し。所がらにて物の音も、澄むとは是を言ふならん」ト、なほ盃を引受け〳〵、いよ〳〵醉の加はりて、興に入りしを妨ぐるは、心無きには似たれども、鵜を遣せて見給ふには、彼所こそ宜けれとて、彼者ども拂除けさせ、此所にも亦簾を

ぐのみにして、何事も行屆かず、せめては囃子を御聞に、入れんと存じて其道に、聞えし限りは呼寄せおく。それ〳〵」ト有りければ、所にあひたる鵜飼の謠曲、謳ふ聲はこだまに響き、笛の音色は川風に、吹合せて面白し。藤の方よりお使あり、御文はなく仰のやうは、お直に申上げんとて、司がお前に罷出で、「赤松高直夕ぐれ方、宿直に罷出でたる故、此者には包むべき事にもあらねば今宵密の、御遊の事ども藤の方、御物語ありし處、殘多きありさまにて、昨日にも承らば、御役には立たずとも、今朝より相詰め申すべきを、存ぜぬ事とて友達の、小鷹狩に誘はれて、戻ると直樣これへ出仕、おしつけ桂の御館へまゐり、御目見致さんが、まづ鷹狩に出でたる印に、是を差上げたき趣、申すに任せ取敢ず、司に申付けたりとの、御口上に侍る」ト、荻の枝に小鳥二三羽、つけしをお前にさし置けば、光氏取つて打まもり、「山づととて荻萩に、小鳥をつくるは常ながら、脚を搦み首を纏ひ、さながら人を縛めし、樣になしゝは故こそあらめ。押つけ是へ高直は」「あがりますと申す事」「ツヽ、宜しく〳〵」トかの枝は、傍へ差置いて、「夜中に司大儀であつた。何ぞ其方に取らせたいが」ト邊を見廻し、「誰ぞ來よ」ト、近習の武士を呼出し、「大井へ參つて申さうは、藤の方より思ひがけなく、御使を賜はりしが、女に遣すべき品は、此館には更に無し、絹にもあれ帶にもあれ、有合せしをと請ひ參れ。早く〳〵」ト言

密にさし上げくるゝ樣、密々に賴むべし」ト、親子二人を二所に、引分けやりて此寺を、預け置きたる僧を呼出し、「月々の普賢講、彌陀佛念佛三昧、十五日はた晦に、懺悔の行はいふも更なり、そのほかもなほ信を凝し、勸め怠る事なかれ」ト、堂の飾佛の具、それかれの事懇に、言付け置きて立出でつ。急ぐとすれど秋の日短く、梅津の里を過ぎ給ふ、其頃は長福寺の、入相の鐘近く聞え、黄昏の頃やう〳〵と、桂の里に至りけり。

此處は兼て人知れず、設けられたる光氏の、下館にて名にしおふ、桂川を前にあて、いと面白き所なり。かの紫は家にのみ、在りて此所らの樣子を知らず、たゞ光氏が別館を、忍び〳〵に造らせ給ふと、人の噂に聞きしゆゑ、明石の人を迎へんため、かくし給ふと大井も桂も、ひとつ所と心得て、さてこそいよ〳〵恨みしなり。

さて今宵は義植公を、忍びやかに請待すべき、豫ての催しなりければ、良清密に仰を蒙り、今日東雲の頃よりも、此所に來りてその用意、嚴重にとゝのへしが、光氏なほも心を配り、殘るくまなくしつらへて、待ち奉るに思ひの外、時刻移りて初夜過に、御供も僅にやつされ、ひそめきて渡り給へり。人目を包む事なれば、御乘物をそのまゝに、奧まりたる所に舁込み、御簾屛風引廻し、光氏ひとり御前に出で、「俄の事に候へば、御もてなしに何をがなと、たゞ立騷

遊を勸め、騷がしき事どもを、御目に觸れしと光氏を、不首尾になさん謀と、聞いてかの弟子馬刀とやらが、横手を打つて、奇なり妙なり、己中頃光氏が、勢に氣を呑まれ、從ひたれど何時までも、草履取にて取上げる、沙汰も無ければ暇を請ひ、貴僧の弟子となつたる故、此度こそは世に出づらめ、あゝ嬉し喜ばしと、囁き合ひて侍る」ト、聲音をうつし姿をまね、二人のさまを見る如く、語れど光氏驚かず、却つて深く興に入り、「さて〳〵をかしき奴ばらかな。鶉遣よりもよき慰み。さはさりながら桂の里に、わが別館を構へしは、紫にすらまだ語らず、其地を見立に行くとばかり、聞え置きて義植公を、今宵請待なす事は、殊更人に包みしを、如何にしてか知りつらん。かの二人が密談を、おんみの聞きしは空衣が、大井へ來りしその後ならん。彼はこゝへ歸りしか」ト、仰に空衣、「御後に、先刻から參つて居りました。君よりは遙御先に、此所の御寺へ立戻り、たゞ今の事どもを、娘に詳しく承り、何はとも有れひと通り、申上ぐるが宜からうと、お待ち申して居りました」ト言ふに光氏打案じ、「力もぬけし秋の蠅、打拂ふには易けれど、聞捨てても置かれまじ。村荻は桂の里の、わが別館へ急ぎ行き、兒良清ははや先に、遣しおけば彼に逢ひ、彼樣々に言ふべし」ト、打囁きて筆ばやに、文かき認め此方に向ひ、「大儀ながら空衣は、室町へ立越えて、杉生といふ者を呼出し、この文を藤の方へ、

と通り、まア〳〵お聞き遊ばせぢやが、此所へはどうか人が來さうな、あの小座敷へ」ト光氏を、無理を誘ひ男らしく、村荻膝にしやんと手を突き、「まづ弟子坊主が申すには、今宵光氏桂川に、鵜飼に呼びて魚を捕らせ、義植公を密に請じ、見せ參らするぞ幸ひなる、かの妖術にて討取り給へと、言へば田貫打笑ひ、柔弱に見ゆれども、なみ〳〵ならぬかの光氏、うか〳〵と行はゞ、術は忽ち挫れて、却つて己が命に及ぶは、鬼得院がよき手本、馬刀は現在見しならずや、此度己が賴まれしは、あながちに光氏を、殺害せよとの事にもあらず、それ故構へしひとつの手段、かの宗入が娘を上せし、大非の屋敷を預り居たる、才十といふしれ者あり、其外彼地を年久しく、押奪ひて住みたる人々、今度山名に取上げられ、地を拂はれしを口惜しと、思ふにつけ込み此事は、全く山名の所爲ならず、光氏が斯くせよとの、指圖にてあんなれば、彼をさん〴〵脅かし、地を取返すか返さずは、討取つて怨をはらせ、加勢を遣らむと我に加擔の、百姓どもを送りしかば、才十はじめ思慮なき奴ばら、今宵桂へ押行くなり、思ひがけなき事なれば、光氏はじめ狼狽へん、その時に我進出で、行力にて退けんと、珠數おし揉むを合圖とし、もとより加勢の百姓は、我に一味の者なれば、才十はじめ徒黨の者ども、皆討取りてその紛れに、逃退く手筈に定めたり、一ッにはこれ行法の、不思議を現し二ッには、義植公に夜

年病氣につき、暇を願出でしと聞き、勝手次第と言遣りしが、發心なしゝは奇特々々」ト言流して傍の、經を開きて此方をば、其後更に見かへらず。浪内少し面を上げ、「仰の通り多病の身となり、願を立てて御暇、その後それなる田貫の、弟子となりて只今では、馬刀と申す今道心」ト、猶何やらん言かゝるを、光氏尻目に打見やり、「詳しき事は重ねて聞かん、次へ立て次へ立て。我は是にて用のあり、學匠も休息あれ」ト宣へばはつと平伏し、二人は次へ立つて行く。後影見送りて、水原は急ぎお側へ摺寄り、「只今申上げたるは、富徽樣の御口うつし、恐れながら私の、存じまするはあの田貫を、此所に置かれて御身近く、召させらるゝは宜からぬ事」ト言かくるを光氏押止め、「近頃母の指圖にて、田貫といふ怪の僧、義植公の御前に出で、讒言めきし事どもを、申上ぐるその由は、はや疾くに聞置きたり。何程の事をかせん、釣寄置いて遊ぶべし。日の暮るゝには程あるまじ、東山へは遙の道、急ぎ歸りて聞きたる如く、光氏喜び名雙寺へ、田貫を据置く由を、申上げよ」ト水原には、暇を賜ふその跡へ、村荻そつと立出で、「御大事の事あり」ト、聲打ひそめて言ひければ、光氏騷がず、「是も亦、今の賣僧の事ならん、打棄置け」ト立ち給ふ、袖を控へて、「仰の通り、弟子と二人で巧のだん／＼、手を淨めに參りがけ、彼所の廊下で委細を聞取り、忘れさうな名や所は、鼻紙へ紅筆で、書いて置いたひ

も差上げしが、是も事なく御信仰、幸ひ君には此節嵯峨に、一寺建立し給ふ由、此者を其所の住持に、差置かれなば宜しからんと、仰は斯樣に侍る」ト、申上ぐれば光氏つく〴〵、かの僧を見給ふに、殊勝げにはもてなせども、年まだ三十を多く越えず、色黒けれど汚けなく、目秀で眉黒く、德の有るべき人柄ならねば、いと心得ずは思ひながら、喜ばしげに態と打笑み、「未だ住持を定めざりしに、幸ひにこの名師を得る、母の仰をいかでか背かん。まづ問ふべきは學匠には、何宗を立てらるゝ」ト、仰に田貫恐入り、「師に就いて學びし事なく、名だにも名乘り難き程、不德の身にて宗體を、立つる力のいかでかあらん」ト、たゞ平伏せば點き給ひ、「夫もよし〳〵某も、昔よりして御佛は、信じながらに諸宗兼學、これと定めし事はなし」ト、是よりさま〴〵經論の、事など問ひて試み給ふに、そのうけこたへ滯らず、才も勝れて見えければ、是なみ〳〵の賣僧にあらず、油斷ならじと心にをさめ、うはべは打解け語ひ給ひ、此所に留り居るべしと、許し給へば田貫は、打喜びつゝ禮を述べ、御前を下りしが、頓て一人の弟子を誘ひ、再び御前に罷出で、「おん目通を憚りて、はるか彼方に只今まで、控へさせて候ひしが、はや形をも變へたれば、御許を蒙りて、御詞を下されなば、ありがたからん」ト願ふにぞ、光氏は訝しく、彼者を遙に見やり、「おのれは須磨より召連れたる、草履取の浪内ならずや。さいつ

二十七編　下

此頃にかの嵯峨の御堂、全く成就なしければ、光氏思ふ旨ありて、尼鳳山名雙寺と、名付けられしが預りの、僧のみ置きて未だ是ぞと、思ふ法師のなき故か、住持をば定め給はず、寺領はかの義植君、稻舟姫の御夫婦より、若干の田を附けられけり。斯くて光氏空衣が、歸りし跡にて朝霧および、その母眞柴に別を告げ、「御堂に參り夫より今宵は、桂の里に川狩して、夜中にはまた此所に、立歸らん」ト道を急ぎ、彼所に至り見給ふに、空衣が言ひしに違はず、待久しげなる面色して、水原はつゝくり座してあり。「何事なるか母の仰、まづ承はらん此方へ」ト、招かせ給へば水原は喜び、一人の僧を誘ひ、御前に罷出で、「御用のおもむき外ならず、此者は抖擻行脚、一所不住の僧なるが、學德法德共に勝れ、祈などせさするに、驗を見る事度々なり、そのうへ人の禍福吉凶、未然を指すに少しも違はず。近頃丹波の桑田郡、田貫と云ふ所に住み、偈仰の人多く、その名を問へど答へぬとて、地名をそのまゝ田貫僧都、または田貫學匠など、呼びならはすはかの信者、尊むあまりに侍りて、僧官もなく元より望まず、室町御所へ

上りにくいといふ事ゆゑ、彼は御寺に待たせ置き、私は後家の身なり、殊には遠き田舍に居て、顔を覺えた者もなし。かの赤松の館へ早百合が、名を騙つて參つたを、思ひ出して來ことは來ても、今度は覺悟がなかつた故、名を問はれた時口籠り、笑うてばかり居りました。彼は誰ぢやと私が、歸つた後で朝霧樣が、若し御尋ねなされたら、己を育てた乳母ぢやとでも、おつしやつて下さいませ」ト、言へば光氏頭振を振り、「こゝの腰元千鳥といふは、阿古木に附添ひ居たりし片貝、御身を見知つて居るのは必定、此所へ來ぬ間に歸るが宜い」ト聞いて空衣打驚き、そこ〳〵にして立出でけり。

ず、「珍らしや何として、空衣此所へは來りし」ト、小聲に問へば小聲に答へて、「此程は村荻に、有難き御言傳、仰にまかせお館へ、その日直に引移り、娘の局へ相住に、致しょところ川次郎を、夢に見る事更に無く、僅の間に病氣もなほり、常の樣に健やかに、なりし事ども村荻より、申上げんと致したれば、嵯峨の御堂へ御參詣、お通夜なされてお歸りは まだないと申す事。それも幸ひ夫の菩提、また二ツには川次郎、憎い奴ぢやが成佛して、いよ〳〵夢に來ぬやうに、御佛に願はふと、娘と連立ち御堂へ參り、承はれば今もつて、君は渡らせられぬといふ。東山より富徽樣の、御使に水原とか、年の寄られた女中も今朝、嵯峨の御殿の御留守へあがり、是も御跡を追うて來て、彼所に待つて居られます」ト、告ぐれば光氏打點き、「富徽の前より御使、何事か訝しょ、よくこそ知らせしさもなきと、思ひがけなき事なる故、水原をいつまで安閑と、待たせ置かんも圖られず。既に今宵は桂川に、鵜を遣はせて遊ばんと、鵜遣を呼集め、船の用意の事どもなんど、良淸に言付け置く。萬さしおき母の御用、直に行きて對面せん。夫はさしおき村荻が、局は今年建添へて、わが住居とは隔てし故、御身の來りて住むだに知らず。御身は此所にわが忍ぶを、いかにしてかは知りつらん」ト、宣へば片頰に打笑み、「螢は草の葉にも忍べど、月の光は隱れなし。村荻が申すには、たしか斯ういふ御噂、さりながらどうも夫へは、

せ、世にときめきし小倉太夫が、別館を構へし地なり。おもふに御身は小倉太夫が、末の子か但しは孫か、推量はよも違はじ。然る時には朝霧が、父母共に系圖は正し。我は知らざる昔ながら、小倉太夫が此所に住み、執權たりし其時は、勢猛く都の中に、肩を竝ぶる者もなし。築地のかまへ書院の結構、室町御所にも劣らじ」など、聞傳へし有樣を語らせ給へばかの先に、繕はれたる水の音、石に當りてさら〳〵と、哀を添へて聞えければ、眞柴は庭を打眺め、「仰に違はず若き頃は、此所に住馴れ侍りしが、今立歸る身は老いて、面變りせるのみならず、所の樣も見しには似ず、館は殊更あらたまり、他の家居に假臥する、心地せられて安からぬに、清水ぞ宿のあるじ顔なる、と歌よむ身なら言はまし」ト、あと言消して恥入るさま、奥床しゝと思されけり。

兎角する間にひる下る、頃にや有りけん腰元使の女、御前に立出でて、「三十路は越えしと見ゆれども、いと麗しき女一人、密に申上げたき事の、侍る由にて參りし故、名を尋ぬれど御目見の、其上にてと笑うて答へず、何所からとも申入れず。いかゞ計ひ侍らん」ト、言へば光氏、「何者か、心當りはなけれども、逢ひなば事の樣は知るべし。「あれなる座敷へ通し置け」ト、言付けやりてわが迎に、紫より言の葉を、おこせしなるかと心に思ひ、立出で見れば夫にはあら

を正し、部屋の襖に立寄りて、様子を伺ひ給ひければ、眞柴は驚き走出で、遙か末座に引さがり、「御戯れにも尼君とは、恐れ多い御詞。御推量あそばす通り、姫君を守り奉り、娘と共に此度上京。昨夜早速御目見えに、罷出づべき筈の處、御歸洛の後御誕生の姫君様と初めての、御對面の目出度御席へ、世を捨てたる身は不吉ゆゑ、差控へて侍りし」ト、聞上ぐれば打笑み給ひ、「まづ禮をいふべきは、幼き者を初めて見しに、眞に瑕なき玉の顔、御身夫婦が年頃月頃佛菩薩を祈りたる、その利益にあらずんば、いかでか斯かる目出たき子を、某づれが擧くべき。まつた宗入もろともに、浮世を思ひ離れし御身、姫に傅き遙々と、上られたるぞ忝なき。あゝ妻娘に引別れ、明石にひとり留まりし、心の中もいかならん」ト、御目うるみて宣へば、眞柴は難有涙に暮れ、「栴檀よりも芳しき、ふた葉の松の御生先、めでたく茂り給はんは、いと著けれど荒磯に、根ざしの淺き御身ゆゑ、夫が障とならんかと、心懸りに侍る」ト、打萎るれば光氏は、なほ打笑ひ機嫌能く、「淺き根ざしと言ひつるは、母方の氏なきが、姫の出世の妨げに、なりもやせんと身の程を、かへりみたる卑下の詞。いやさにあらず宗入は、已にわが母花桐と、昔は因ありし中。御身の素性も今日知りぬ。其故はさいつ頃、大井の里に屋敷ありしを、思ひ出でて繕ひしと、言越しゝが來て見れば、是は山名の屋敷にあらず。義滿公に仕へまゐら

人を呼寄せ秋草の、折伏したるに添竹を、さして其所此所つくろはせ、「あの泉水の立石岩組皆轉び失せたるを、尋出して直させなば、なまなか新にしたるより、水草も生ひ苔も深く、をかしからんが斯かる所を、心を用ひて繕ふも、却つて惡き事のあり、その故は此家に、住まひ難き事出來て、たち行く時にかの己が、心の儘に造りたる、庭の景色を見捨つるが、心苦しきものにてあり。ましてや名におふ明石の浦、白き砂綠の松、また立歸りて詠めんも、圖り難くて其折は、いと〳〵名殘惜かりし」ト、昔の事ども宣へば、朝霧は悲しさも、又嬉しさも搔集め、泣きみ笑ひみ打亂るゝ、姿もそのまゝつくろはず。

此所の後の小座敷は、眞柴が部屋にてありければ、御聲を聞つけて、そつと覗きて見上ぐるに、君は東の廊下の下より、出づる水を御覽じて、「あの立石を築直し、此方へ流し岩にて堰止め、又其方へ遣りたるが、風情あり」など指圖なし、繕はせ給ふとて、帶さへ卷きて結びもやらず、打解けたまへる御姿、老も忘れ物思ひも、さらりと晴るゝ心地して、我知らず打笑まれ、娘の果報いみじきを、嬉しと思ひ見るぞとは、光氏更に知らざりしが、不圖閼伽棚に樒を摘みすて、花皿花足の類の佛具、取散しゝに目をとゞめ、「尼君も共に上られ、さては此所に在するか。さは知らずしてしどけ無き、姿なりけり誰かある、羽織を持て」ト俄に衣紋、かいつくろうて容

往來もなく、むかしは田舍の樣なりしが、久しく其所に住むが故、室町及び洛中より、往來繁く物商ふ、家も次第に建續き、今は却つてこの大井の、里より繁華の地となりぬ。住み給ふべき館を豫て、東の方へ設置く、夫へ移らせ給へ」とて、懇に言ひければ、朝霧顏を打赧め、「田舍に育ちてやう〳〵と、都を見しは昨日今日、まだ初々しく侍れば、少しは此所の風俗を、見馴れ聞馴れその上は、仰にまかせ侍らん」ト、聞ゆるもいと道理なり。是よりも猶しめ〴〵と、三年積りし事どもを、夜一夜語ひ明し給ひ、朝のしたゝめ濟みて後、かのふる乳母の立浪も、御目見えに罷出で、「湯をひかせ給へ」ト言ふ。頓て湯殿に至り見るに、明石にては走り井の、上に二階をしつらひて、車に釣瓶をしかけしが、此所は又かけづくりを、舞臺の樣に張出し、大井川に流るゝ水を、すぐに風呂へ汲入るゝ、その設おほかたおなじ。光氏緩やかに湯をひき終り、朝霧に導させ、そこら廻りて見給ふに、かの岡邊の樣をまなび、岸に埒を結ひたるあり。其所に立ちて向ふを指さし、「あれ彼の峰より此方まで、一面に櫻なり、彌生になるを待ち給へ。微に見ゆる岩角に、當りて水の堰かるゝを、千鳥が淵とか言慣はす。戸無瀬の瀧は松の林に、隱れて此所より更に見えず。左の峰が法輪寺、渡月橋の此方なる、細き流が芹川の、古跡と聞けど確に知らず」ト、物語りつゝ園の中を、なほたゞ二人行き廻り、庭に精しき者やあると、

き、「無作法な、下らぬか」ト言ふを光氏押止め、「姫より一ッ上ばかりに、見ゆるは此頃調太夫が、物語りたる其方が娘な。はじめて己が木屋町へ、尋ねし時には懐に、抱かれて居たりしが、大きうなつた」ト是にも亦、果物與へて、「名も聞いたが、何とかいひし」ト案ずれば、菫野少しにじり出で、「ゆかりと申してわんぱくもの。乳母に預けて部屋に置き、育てし所お相手に、丁度宜いとて召させられ、朝霧さまが御不便を、御掛け遊ばす夫に甘へ、私に叱らるゝを、うるさがつて夜までも、兎角御前を下りませぬ。御召下しを下さりまして、姫君さまと同じ様に、遊んで居るは恐多いと、申しても宜いよ〳〵と、私の言ふ事は聞きませず。あれ〳〵また御方様の、御後に隱れて居て、此方を見てはにこ〳〵と、笑うて居る顔の憎さ。これはしたり私の、申上ぐる事ばかり。何より先へ朝霧様、去年の秋住吉へ、御出なされた其時に、丁度君にも御參詣、お心の探めた事を、まアお話し遊ばせ」ト馴々しげに月頃の、物語など聞ゆるを、光氏もをかしと思ひ、「おんみの嫁したる夫の家も、定めて京の中ならん。それを遂に見も知らぬ、播磨へ送遣りたるが、浦の鹽屋の傍に、今まで能くも堪へ忍びし。さぞ淋しくこそ有りつらめ」ト言流して又此方に向ひ、「此所も都にありながら、花なき頃は人も來ず、かの明石よりなか〳〵に、人離れたる心地して、朝霧もさぞ住憂からん。己の館も嵯峨の末、人家も稀に

衣に、やつれ給ひし時だにも、類あらじと思ひしを、今はまして都の水に、そゝぎ上げたる白綾唐織、心を用ひし小袖羽織、引つくろひ給へる御姿、對ふに眩き心地して、今まで思ひ咽びつる、心の闇も晴やかに、積る恐も春の雪、打解けて其事此事、聞え交し給ふうち、菫野に傅かれ、姫君御前に出で給ひ、御機嫌能うもまだ舌の、廻らぬながら行儀正しく　手をつかへて光氏を、つく〴〵と見上げしが、始めて逢ひても血筋は血筋、そろ〳〵側へ摺寄つて、御膝へ凭れ掛り、何心なく打笑みたるが、愛敬づきて匂ひたるを、さて美しう生立ちしと、そのまゝ抱上げ給ひ、「今までの藪原を、かく眺ある庭もせに、造りなしゝも一興ながら、我は何より此姫の、顔を見るが珍らしく、木にも草にも眼は移らじ。今まで隔てて住みたるが、思へば口惜し」ト顔に顔、おしあて愛し給へるさま、淺くはいかで覺されん。御道理と傍の、人も思へば光氏も、心の中に思ふやう、夕霧丸を美しとて、今世の人のもて騒ぐは、執權職の孫なる故、夫に引かれておのづから、氣高く見なす事もあるべし、この幼きがなみ〳〵の、稚兒にまさりてうちあがり、淸らなるこそ夫にもまして、末頼もしと喜びつゝ、傍の果物を、手づから取つて與ふれば、いと嬉しげに押戴き、給ふ處へ次の間より、「私にもその御菓子を、下さりませ」ト言ひながら、走り出でて是も亦、おとなしやかに畏まり、小き兩手を押重ね、差出せば菫野鶯

などさほどまで妾には、つゝませ給ふと心には、恨めど更に口には言はず、手を打鳴して、「言の葉よ、言の葉よ」とて呼び給へば、遙か彼方に侍りしが、走り來つて手をつかへ、「何の御用」ト伺へば、紫は邊を見、「此頃まで掛けてあつた、仙人の碁を打つ掛物、そこらにあらう。ヲヽ夫ぢや」ト、押開かせて、「これ言の葉、眞中に斧を持ち、立つて居るが晉の世の、王質とかいへる者、石室山にて仙人の、碁を打圍むをたゞ一番、見て居ると思うたら、ついて居るこの斧の柄が、その間に朽ちたといふ。すこしの中と思うたれど、これ年月のたつたしるし。我君樣が二三日、どれへか行くとおつしやるが、その日數がだん〳〵延び、斧の柄が朽ちるほど、待遠であらうと思ふが、其方は何と思やる」ト、宣へども言の葉は、光氏が初に言ひし、事を聞かねば合點ゆかず、たゞはい〳〵と返事のみ。光氏は打笑ひ、「今に始めずわが思ふ、心と違ふひぞり言。むかしは山名が事に因り、心に思はぬあだ〳〵しき、振舞をも爲つれども、今はみだらに身を持たぬは、世の人も能く知るものを」ト、何や彼やと紫の、心を取り給ふ程に、思ひの外に日闌けぬ。

忍びやかに御供も、例の疎きは交ぜ給はず、それかれ心遣ひして、大井は近き程ながら、黄昏時におはし著きたり。朝霧も端近く、出迎へて見奉るに、かの浦傳ひの汐風に、顏もくろみ旅

變つたと思はるれば、まして此身は昔の影の、なきも道理、あれ〳〵向ひの、嵐山なる千本の櫻、若木の古木となつたも多い」

花も老いぬ聞きしに似たは松の風

といへば娘も打萎れ、「都においで遊ばした、其頃は盛のお年、今は老木となり給ひ、まだ其上に雌松雄松と、引離れての御住居、御心細いもお道理至極。又わたくしは、

戀わびてさへづるならん鶯のこと

斯樣に親子物はかなく、あかし暮すに光氏も、大井の里はいかにぞと、更に心の安からず、今は人目も憚らで、既に行かんとなしたるが、紫にまだ朝霧の、上りし事をたしかに語らず、例のほかより洩聞きて、打怨まんかと其方へ渡り、紫に打向ひ、「桂の里に下屋敷を、取建置きて折節の、遊び所となさんと思ひ、その所を見立つるため、疾く行べきを事に紛れ、思はず今日まで延したり。又かの浦へ棄置きし、子安見さへその邊、近く上りて待つなれば、見ざるも心苦し。夫のみならず嵯峨の御堂、造り果ててゆる〳〵と、まだ一度も參詣せず。これに通夜し彼所へ行き、二三日は逗留せん」ト聞え給へど紫は、答も更になしやらず。此春よりして阿彌陀堂、俄に造られ給ひしも、實は其所に館を構へ、かの朝霧を呼び上せ、据置き給ふ爲ならん、

有るか無きかに殘る簑蟲
「鳴くと言はねば秋の季に、ならぬといへど私が、朝夕泣いて居ります」ト、顔打掩ふ袖の露、座敷も濕りて光氏は、默然として打案じ、「簑蟲をわが身によそへ、父を戀ふを隱しゝ吟、孝子の心は聞えたれど、露忘られぬ發句には、さら〳〵つかず戀をも受けず、をかしき節は無けれども、流石に捨ても置れず」ト、件の扇つく〴〵と、打まもりてこそおはしけれ。

光氏年も長けたれば、むかしのやうに輕々しく、忍び歩きに出でんのも、家來の手前紫の、思はん程もつゝましく、それかれの心をかね、日數ふれども大井の里へ、まだ渡り給はねば、朝霧いとゞ胸潰れ、此身はともあれ姫君を、見たうはおぼし給はずや、同じ都といふ中にも、間近き所に住換しを、訪ひ給はぬこそ恨めしけれ。浪路隔てて住むうちは、所詮御顔は見られじと、思ひ諦め暮しゝゆゑ、かくまで物を思ひはせじと、心に泣きてなか〳〵に、捨てし住居も戀しうて、いと寂しきにあの君の、形見の琴を取出す、折しも秋の末なれば、哀れさ言はん方もなく、涙もつゝみ難けれど、人離れなる高殿にて、誰見とがめん樣もなければ、打解けて少し彈くに、松風さつと響合ひたり。次の一間に眞柴の尼も、悲しげに寄臥したるが、起上りて障子を開き、「妾が此所に住みたりしも、丁度御身の年の程、山の姿川の流、それさへも其時とは、

其方は驚く。あれ朝顔のあの様に、はや露霜のかゝるも厭はず、咲殘りしはなか〳〵に、盛なるより見所あり、折りてまゐれ」ト宣へば、菊咲なんの心もなく、纒ひし薄もろともに、手折りて御前に差出す、顔つく〴〵と光氏は、打まもりて「これ菊咲、汝はたしか堀川へ、住居を移す夫までは、加茂の社の瑞垣近く、母もろともに住みつらん」ト仰にびつくり、「その事を、どうして君には御存じで」「されば〳〵。去る年水無月祓の日、かの社へ參詣の、戻り道にて俄の夕立、雨具を持たせし供は後れる、せん方盡きて緣先を、暫し借りたる光氏が、面を其方は覺えねど、此方は今も」ト言ひながら、持ちし扇に筆を染め、

　見し折の露わすられず籬草

「さかりは過ぎやしぬらんと、思ふに違ひし花の艶、纒ふ薄の穗にあらはれ、よし人の目に掛からば掛かれ、我はさら〳〵厭ひはせじ。年頃積りし心の中、あはれと思はゞ此傍へ、返しの句なりと脇なりと、書きて見せよ」ト宣ふにぞ、菊咲はたゞ恥入りて、顔をも得上げず後退り。側に聞居る村荻が、胸打躍りて中押隔て、言はんとせしが又つく〴〵、思ひ直せばあの女、實御心に叶ひなば、密にお寢間へ召されんを、人目も厭はず戯れ事、仰ありしは深き故、ある事ならんと御硯、其方へ押遣り、「さア早う、御意を背くは恐あり」ト勸められてせん方なく、

に度々起された、其時はさま〴〵に、言紛らして置いたれど、實をいへば斯うした譯、恥しめたとて叱つたとて、世に亡き人なり殊には夢、何の彼奴が聞譯やう、せん方盡きて髪を剃り、青道心となつたなら、川次郎が思ひもさめ、再び夢に來る事も、わしや有るまいと思ふとて、泣くづほれて居りますから、夜明け次第に御館へ、歸つて君に申上げ、御許があつたなら、其時お剃り遊ばせと、いろ〳〵に言宥め、夫から直に二人とも、今朝まで眠らず私は、髪をも結はず上りました」ト聞いて光氏眉を顰め、「世に不思議なる事を聞く、さばかりに執ねき深き、川次郎を空衣が、今まで夢に見し事なく、此頃となり毎夜々々、來りて兎角に苦しむる、其故を考ふるに、彼淀川の水に溺れ、世になき魂となつたる後も、喜代之助を恐るゝ故、父が此世に在る中は、障碍をなし得ず過しゝなるべし。さあらんには我館には、いかでか彼が怨魂來らん、まづ試みに其方の住む、局へ母を呼迎へよ。北の方に建添へしは、便無き者どもを、住まさん爲にて一間々々に、仕切らせて置きつれば、ひとつに在りて親子互に、心のおかるゝ事あらば、別れて住むとも行末は、心まかせ」ト言流し、給ふ間に手水のすみし、盥を彼方へ持運ぶ、菊咲を光氏指さし、「村荻あれを見知りてか」ト聲を潛めて問ひ給へば、伸上りてつく〴〵見やり、「更に覺の侍らず」「はて知らぬとは訝し」ト、光氏頓て此方へ立寄り、「あれ朝顏。菊咲なんで

たよいて、「さこそ〳〵。寳の劍失せたる後、我と共々さま〴〵に、辛苦なしたる喜代之助、近き中には良清に、家を譲らせ世を安く、過させんと思ひの外、俄の事にて某が、驚きとてもなみならず。歎のあまり空衣は、心地惡うはあらざるか」ト仰に涙押拭ひ、「其事にて侍るなり。御推量遊ばす通り、兎に角に母空衣、食も進まず顔も痩せ、日數立つほど衰へて、更に藥の驗もなし。さればとて又打臥して、枕のあがらぬ樣でもなけれど、賴少き有樣ゆゑ、猶更側に附添ひて、心をつけしが此曉、空衣そつと起出でて、剃刀を取出し、髮打亂して押切らんとするに驚き押止め、年若き身の切髮は、却つて人の目にもつくと、父上の御遺言、早くも忘れ給ひしかと、やう〳〵剃刀挘取れば、母はほつと吐息をつき、切髮は目に立つ故、人にも知らさず尼になる、覺悟きはめてこのしだら、腰元どもの目ざめぬ中、剃つてたもやと言放され、あまりの事に意見もならず、私も胸を定め、夫には樣子がありさうな、其譯お話し遊ばして、お道理の事ならば、決して止めは致しませぬと、申しましたら赧らむ顔を、やう〳〵に振上げて、今更語るも耻かしけれど、假にも親と呼ぶ妾へ、川次郎が無體の戀慕、夫のみならずさまざまと、積る惡事の報は目前、かの淀川の水の泡と、消えてその苦は脫れしが、夫に別れし其後は、夜每の夢に川次郎、來つて妾へさま〴〵の、戯言の煩さ嫌さ、聲を揚げ魘はれて、其方

せ給ふ事もあらば、恐入るとて宗入が、昵近の侍を、彼所へ附置き朝霧様の、御心せくをも押止め、我々はじめ御迎の、人々を殘らず留置き、門の外へ曾て出さず。そのうちに調度手道具、明石より殘らず取寄せ、足らざる事なく殘りなく、支度終つてやう〳〵今朝、ゆるしを受けて言上に、罷歸りて候が、早く御目にかけたきは、姫君の御愛らしさ。菫野の娘ゆかりを、御相手に遊され、はや今朝も御目覺にて、御機嫌ようお遊び」ト、聞いて光氏笑を含み、「都の大家に劣らじと、宗入が例の我慢、さもあらんさもあるべし。播磨へ旅の草臥より、近き程まで歸りながら、安閑としてさぞ退屈。大儀々々」ト宣ふ處へ、盥半插菊咲が持出づれば、「夫へ置いてまゐれ」ト直に追立やり、なほも大井の里の樣子、問ひ給へども調太夫は、その御答はなさずして、かの菊咲が後影、不思議さうに見送り〳〵、「御館には見なれぬ女中、定めし近頃召抱へ、給ひしならんが彼者は」ト邊見廻し恐る〳〵、側へ差寄り囁けば、光氏も訝しと、思ふか小首傾くる。此方に又も人の來る、氣色に驚き調太夫、「迂濶に申上げ難き、大事にて候へば、折を見合せ又こそ」ト、表の方へ立出でけり。

此所へ來たるは村荻にて、父喜代之助が百ケ日も、過ぎたる故に歸りしなり。久しぶりなる君の御顏、見上ぐるより猶昔の事ども、思ひ出でつゝ涙にくれ、言葉なければ光氏も、目をしば

二十七編　上

長月になりぬ。雁の聲木の葉の音なひ、淋しきにつけ光氏は、明石へ下しゝ迎への人の、歸り來ぬが心もとなく、寐覺がちに思ひ續け、常よりも早く起出でて、雨戸を開かせせめては其名に、呼ぶ朝霧を眺めんと、ひとり縁に立出づれば、はや秋草のむら〳〵と、枯れたる中に朝顔の、其所彼所に這纏れ、色も殊に變れるあり。「飛花落葉は世の常なるが、あゝ哀なる朝顔や」ト、獨言に歎ずるを、何と聞きけん次の間より、「御召は何の御用ぞ」ト、かの今まゐりの菊咲が、立出づれば光氏ふりむき、「呼びはせねども來たは幸ひ、嗽手水を持つて來い」ト、言ひやる此方へ小辨が立出で、「片攪の調太夫、何か密に御直に、申上げたき事ありて」ト半分聞かず、「ヲヽよし〳〵、早く是へ」ト縁先近く、招寄せて聲を潛め、「何として遲かりし」ト仰になほも御側へ摺寄り、「世に難有き御迎と、喜びながら宗入は、唯一人の娘の事、明日明後日と出立を延し、名殘を惜むも道理なれば、強ちには引放ち、難くて延引仕る。さりながら大井の里に、上り著きしはあと月すゑ、いまだ館のしつらへの、整はざる内此事を、申上げて若し君の、忍ば




仁木の後室

偐紫田舍源氏第二十七編序

連歌に名だかき宗椿は、源氏を愛づるのあまり、讀みてはなほ足らずとて、書寫する事數十部、遂に朝顏の卷を書さして沒てたりとか。それと是とは事かはれど、原來はかなき草雙子の、さまでに長くは續くまじ、朝顏の頃に至らば、あるかなきかになりなんと、其事をかすかに言たて、阿古木の戀に結びおきしが、既に彼卷ちかくなり、せんすべなさに松風の、松にからむは朝顏に、似氣なけれども其發端を、こゝに綴り入れたるは、薄雲を打越して、齋院の典形を、うつさんとての仕業なり。如此せざれば後〳〵に、おなじ言葉の囘島がうるさし。そも〳〵夕顏朝顏の、名は反對に聞ゆれば、趣向も亦齊くして、遠輪廻には似たれども、かの黃昏は光氏を、思ふのあまり無常となり、菊咲は又戀をうけず、釋となるの句作りは、折のかはりて後に記さん。

天保戊戌條風　　柳亭種彥

主人の外に妾が名を、呼捨て給ふ人はなし、是は確に光氏君、村荻久しく歸らぬ故、忍んでおはせしものならんと、人をも呼ばず燈火を、自ら取つて枝折戸を、開くればぬつと入來るは、思ひの外なるあら男子。はつと驚き逃歸る、裳を摑んで內へ入り、「光氏の聲音をまねし、炭團の樣な光らぬ君の、御顏を拜み給へ」とて、頭巾をとれば川次郎。空衣魂身に添はず、「其方は先年淀川にて」「いかにも舟から落ちたれども、水練得たれば水底を、潛つて命助かりし。こちらから家出して、緣切つたれば親では無けれど、喜代之助が最期の愚痴が、あはれな故に御身の力に、なりに參つた深切者、數ならずとも疎ませられず、何事をも相談あれ。良清と村荻は、實の父の遺言なれば、當座の中はお前を大事に、しても置かうがうはべばかり、底心では侮りがち、後はお腹の立つ事ばかり。例のおぼしそめつる事、絕えぬお癖は斯く申す、川次郎も同じ事。喜代之助が死んだれば、いよ〳〵憚る事はない」ト、よれつもつれつしなだれ寄る。空衣は恐ろしく、誰も居らぬか居らぬかと、呼ぶにも聲の出でやらず、身を揉あせる背をほとほと、打叩いて、「母さま〳〵、お魘れ遊ばす」ト搖起すのは村荻なり。空衣實に目を覺し、「夢であつたか恐ろしい、この冷汗」ト押拭ひ、あからさまにも言ひかねて、「高い所から誰にやら、突落されたと思うたら、其方の聲で目が覺めた」ト、言紛らして打寐みぬ。

練には似たれども、空衣が父土橋政長、病死なしたる其頃は、君一郎はまだ幼年、彼らが其後力とすべき、身寄の能く〳〵無ければこそ、若き身そらで年老いたる、我を夫と頼みしなるべし。我亡き後にも在りしに變らず、彼に仕へて彼が詞を、能く〳〵守り睦しく、實の母と頼むべし。年若しとて友達の、樣に村荻あしらふな。君一郎も萬の事、姉の差圖を受くべし」ト、いと惱じげに言ひければ、空衣は昔の事、思ひ出でつゝ夫にさへ、後れていよ〳〵便なき、憂き身をさめ〴〵打歎くを、喜代之助はつく〴〵眺め、不便と思へど限りある、命は止めん方もなし、せめては此所へ遺し置く、魂もがなあれかしと、老の積りやかひもなき、事のみ心に思ひ續け、同じ繼子にありながら、村荻はまだ朝夕に、馴れもしつれど良淸は、今まで隔てて住みしかば、心おかれて便とも、なるまじなんど悲しき事に、思へど命は心の儘に、止め難くて竟に失せぬ。此後の事どもは、くだ〳〵しくて皆省きつ。

良淸は去年より、中川の屋敷をしつらひ、それに住めば君一郎、もろともに彼所へ歸り、喜代之助がはてたるより、日數も經れどまだ忌の、中にてあれば村荻は、嵯峨へ參らず此所に在るを、賴みとしつゝ空衣は、其儘にかの野の宮の、下屋敷に住みけるが、ある時夜更け人靜まり、裏の小門を打叩き、「空衣々々」ト呼ぶ者あり。寢耳に入りて目を覺し、夫の過去り給ひし後、

事この事、言續けつゝ伏しがちにて、物さへつや〳〵食はざりしが、宗入日ごろ佛神を、祈りし驗か思ふ方の、風のみ吹きて平かに、豫て其日と定めし日を、違へず船に著きにけり。都の人に見られじの、心もあれば乘物も、わざと華やかならぬを求め、大井の里に到り見るに、家の樣も面白う、年頃經たる海面に、風景の似たるが上、明石の館のおもむきを、まなびて造り改めたれば、所を變へたる心地もせず。古き軒端へ建添へし、廊下なんどの風雅に見え、水の流のいとをかし。又細やかにしつらひの、整ひたるにはあらざれど、かくて此所にも住馴れなば、さまで明石に劣るまじと、人々心落著きけり。

さきつ頃より村荻は、光氏が建廣げし、嵯峨の館へ移りしが、此所はかの便無き、人を集めて住まさんと、一間々々に仕切りたれば、わが召使の外餘の人には、顏を合する事もなく、心のおかるゝ方もなし。然るに夏のなかばごろ、父喜代之助病氣のよし、野の宮の屋敷より、告げ來りしに驚きつゝ、光氏に暇を乞ひ、直に彼所へ立戻り、空衣もろともさま〴〵に、看病すれども喜代之助、その詮もなく病み疲れ、おのれも限りと思ひけん、良清村荻君一郞、打揃うて在りし時、重き枕をやう〳〵擡げ、「良清は今幸ひに、光氏君の御心に、叶ひて御側に仕ふれば、我死すとても家は安泰、たゞ〳〵心にかゝるのは、空衣が身の上なり。妻の事のみ言置くは、未





め。されば迂濶にこの所は、動き難し」ト語るを聞き、いと道理と思へども、涙は更に止めかね、立煩ひて居たりけり。

さて都へ赴くに、乘物あまた續けなば、往來の人の目に立たん、さればとて又海と陸と、別れて行かんもむづかしとて、皆一樣に打忍び、船にて上るに定めしかば、追風好しとて追立てられ、せん方なぎさに立出でて、辰の時に船出したり。かく潔く宗入は、言放ちしが後につき、門まではとて立出でつゝ、思はず十間二十間、歩むともなく浦邊に近づき、向ひを見れば菫野に、抱かれ給ひし姫君の、此方を見返りさらば〳〵と、宣ふならん御聲は、はや聞えねどいと小き、手にさし招き給へるも、次第〳〵に遠ざかり、昔の人の歌を取り、名にも呼びたる朝霧に、隔たり行きて娘も見えず、帆影も幽になるまゝに、いと物悲しくあくがれて、たゞ茫然と宗入は、打眺めてぞ居たりける。

船の内なる人々も、皆うちしめりて言葉もなし。とりわけ眞柴は住馴れし、館を見捨つるのみならず、夫に別れし悲しさに、やゝともすれば打泣きつゝ、頓て弘誓の船に乘り、此所の浦より彼岸に、至るを旦暮ねがひし身が、西の方には引かへて、東の空に漕返る、是も宿縁なりけるかと、盡せぬ事どもかき口說く。娘も一人留りし、父の身の上氣遣はしく、又繰返してその

竟に知れず。然るに去年の冬の頃、嵯峨大覺寺の舊跡の、南に一ツの塚を築き、

あらし山名におふ花のちる世かな

と石に刻みて名を記さず。是かの先年盗取りし、宗全の首を密に、餘類の者が埋みしにて、發句の中に山名といふ、字をたて入れしに疑なしと、言ふ者ありけん東山にて、義尙公聞召され、光氏君にこの詮議、いかゞなさんと問ひ給ふ。その時君は笑はせ給ひ、かばかりの事仔細はあらじ、さりながら慗ひに、此事を世に知らせなば、さなきだに宗全が、殘黨ありとまだ都は、穩かならざる人の氣の、いよ〳〵動く事もあらん、たゞ何となく某が、此所へ一寺を建立する、妨なりとて毀たんと、さてこそ御堂を建て給ひし。兄の一族身寄の者は、一人も殘らず討たれしと、思ふに違ひて我も知らざる、ゆかりの者の有るなるべし。今某が面出しなさば、さる頃塚を築きしは、彼が所爲にて毀たれし、噂を聞きて都の樣子、見んために出でしならんと、さがなき人のさかしらに、言立てんのも計り難し。又宗全がむかしの一類、西國に在らんも知れず、此者どもの仕業にて、名も記さゞる墓までを、取捨てられしを無念と思ひ、弔ひ軍なんどとて、若し押出す事もあらば、此所にくひとめ其時こそ、いよ〳〵忠義をあらはさ

いよ〳〵涙に沈み、「世にあり難き御慈愛、今さら申さん詞もなし。此上の妾が願、まづ諸共に船出して、都を厭ひ給ひなば、せめては梅の難波津に、冬籠して給はらば、朝な夕なに便も聞え、住吉詣をかこつけに、お目にかゝるもいと易し」ト、さま〴〵諫めこしらゆれど、宗入は只念佛を唱へ、差俯きて答へもやらず。眞柴は中を押隔て、「言出した事ひかれぬは、若い時からあなたの御氣質、もう〳〵言やんな夜も明けた。さらば」ト言ひつゝ朝霧が、手を取りずつと立上がれば、夫に引かれてよろ〳〵と、力もなげに二足三足、

　鳴くも悲し逢見ん事をまつむしの

「父上御無事であらせよ」ト、涙に咽びて言ひかねる。たまりかねてや宗入が、暫しと二人を呼止め、「某此度もろともに、上京なさぬは父別に、ひとつの仔細ありてなり。深く包める事ながら、歎を見るに忍びがたく、語り聞かせん此方寄れ」ト、近付けて聲を潛め、「おのれたゞ娘を勞り、佛に仕へるばかりにて、分別もなきしれものと、人の譏を受けたるは、兄の謀叛に與すべき、力なきのを世に知らせ、家を全うせんがため、心に曾て油斷せず。光氏君このたび更に、御堂建立し給ふ所以を、都の人は知らざれど、我は密に腹心の、家來を彼所に忍ばせ置き、それらの者より告越す間、此所に在りても能く知れり。先年宗全桂川の、合戰に打負けて、

かば、かゝる田舎にいつまでも、錦を隱して置かんかと、心の闇のはれまなく、歎のあまり佛神を、頼み聞えてふた親の、身は鹽木とも朽ちなば朽ちよ、娘は久しく山賤の、庵に在らせ給はるなと、朝夕言ひし心がとほり、思ひがけなく嬉しき事ども、見るにつけきくにつけ、かの宗全が姪なりと、厭はせ給ふ事もやと、又その事の氣に掛り、とやかう案ずるその中に、兄に同心せざる趣、御聞に詳しく達し、更に御心おき給はず、其上にこれ此樣に、君の光を分け給ひし、玉の御顏を見上げずに、過さん事は悲しけれど、この宗入は捨てたる體、御身たちは是よりして　世に華やかん大事の身、それ故にこそ堪へがたき、歎を堪へて別るゝなれ。おもふに御身は佛菩薩の、假に我子と生れ給ひ、家を興すは應驗利益、哀別離苦の理を、示し給ふはこれ方便、山名づれが婿なりと、言はれぬ程の婿取りて、其上孫まで擧けしは、天に生るゝ喜びなり。今又ひとり捨てらるゝは、三途に落つる苦みなり。これ皆常なき世のならはし、思へばとりもなほさずして、今日こそ長き別なれ。我はてたりと聞くとても、驚きもすな歎きもするな、跡弔ふにも及ばぬぞ、夢の浮世と諦めよ。御身の事もはや思はじ。とは言ふもののこの體、煙とならん夕まで、姫君のなほ健かに、御成長あるべき爲の、祈は六時の勤にも、打交て佛を頼まん、未練とおぼし給はるな」ト、是を言の限りにて、只默してぞ居たりける。朝霧

嵯峨野の月の光のみ、頼としつゝ捨てし世に、また出でんとは思ひも寄らず、とあつて行かで叶はぬ仕儀、心苦しき胸の中、推してたべ」ト泣伏すは、いと道理と見えにけり。朝霧はなほ涙にくれ、「娘に傅き宗入が、重ねて見じと言放ちし、都へ出でしと人言はゞ、御恥辱ともなりなんが、擧けし姫は君の御胤、それを送らせ給ふとも、笑ふ人は侍るまじ。兎角大井の里までは、いざ諸共に」ト勸むれど、宗入は頭振をふり、「われ執權の望を失ひ、それ故當所へ退きしと、言觸らしゝは表向、實は宗全その頃より、專ら謀叛の兆あり、諫めてもいつかな聽かず、とありて兄の訴人なし、我身を立てんも本意に背けり、寄らず障らず某が、身をば堅固に持なして、山名の苗字は斷さじと、一ツは思ひ二ツには、御身を不便と思ふから、都を捨てて此所に移れり。その故を如何といふに、京地にありては親類一族、廣きが故に費あり、明石に住まばそれらの音づれ、自然と絕ゆるのみならず、今まで知行を預けし家來の、職も薄らぎ百姓の、貢は更に滯らず、家の富まんは疑なし、さある時には傅女も、數多抱へて諸藝の指南は、都の上手を呼下し、御身に習はせ心の儘に、躾けんと思ふに違はず、福有の身となつたる故、憚多き事ながら、室町御所の姫君にも、劣らず養育したりしが、あゝ苦の絕えぬは浮世のならひ、この老法師の娘には、生れまさりて婵娟に、生立ち給ひて物心、はや知る年ともなりし

子を窺ひ見て、「朝霧眞柴皆の者は、もう支度しやつたか」ト、力もなげにかしこまり、「姫君も御目覺か、菫野御連れ申してたべ。御面影をそのまゝに、このまアあてに美しさ、夜光の玉の心地して、恐れながら膝に載せ、袖を覆ひて片時も、今まで放ち參らせねば、あなたも馴れて恐ろしい、これ此顔にも怖ぢ給はず、負うて行け抱いて走れ、食べよとお菓子のあがりかけ、髯むさくろしいこの口へ、御手づからに賜りし、時も度々ありしもの。浪路隔てて是よりは、御面影だに見奉らず、なに樂しみに世に在らん。かゝる歎の元はと云へば、兄宗全の邪ゆゑ、此身に曇はなけれども、此所に留置きまゐらせなば、謀叛人の血筋なんど、人の言はんを恐れてなり。なんの因果で惡人の、弟と我は生れけん」ト、例の繰言いひならべ、翁草とも名を呼べば、

たへぬ老の涙なりけり菊の露

御門出に不吉ぞと、目を押拭ひ隱すにぞ、眞柴も共に打歎き、「都を出でし其折も、心細くはありながら、年まだ若く殊には夫婦、打連立ちての旅なれば、それを力としたれども、年老いたるが其上に、

このたびや獨まどはん露の道

中に誓ひしが、思ひもかけぬ事起り、俄にこゝを出立つが、今更心細し」とて、打歎ちつゝ見渡せば、菫野はじめ朝霧の、腰元女も涙にくれ、共に萎れて詞なし。此者どもは都の風俗、朝霧に見習はせんと、皆呼下しゝ女にて、いづれも年の若ければ、この荒浪にいつまでか、沈果てんと人知れず、心の底に歎きしを、今幸ひに故郷へ、歸るは嬉しきものながら、繪にも及ばぬ此濱の、景色を又も立歸り、見る世はあらじと名殘の惜まれ、寄りくる波のかゝるかや、兎角に袖も濡れがちゆゑ、眞柴はなほと一樣に、心の中を察せしなり。此頃すべて打舉り、言ふ事も聞く事も、あはれ〳〵と取重ね、秋のころほひなりければ、心細さぞ彌增しける。

さて出立つべき日の曉は、秋風すゞしく吹渡り、急がはしげに鳴く蟲の、聲にまじりて鉦鼓の音、幽に響くは宗入が、例の如く夜深に起出で、三昧堂の勤なり。悲しき中にも朝霧は、三年隔てし我君に、逢ふ嬉しさも取交ぜて、宵より更に目も合はず、獨つく〴〵海の方を、見渡して居るその處へ、母の眞柴は立出でて、「御身も昨夜は眠らぬ樣子、妾は殊に常さへも、寢覺がちなる老の癖、いろ〳〵の事苦になつて、二夜さ三夜さとろ〳〵と、まどろんだ事もない。もう明くるには間もあるまい。腰元ども〳〵、著換は伏籠に掛つてあるか、鬢のほつれを搔上げて」ト、出立つ用意とりまかなふ。行果ててや宗入も、洟うち啜りて次の間より、こなたの樣

よそにのみ、聞渡りしを愍ひに、よれてほつれし絲芒、露の情のかゝらずは、今の歎はよもあらじと、嵯峨野の花に袖觸れぬ、ひとの身の上羨まし。

宗入は只くよ〱と、世に有難き御迎、誰に憚る事もなく、上るは娘の上なき幸、年頃日頃寢ても覺めても、願ひし事の叶ひしは、嬉しけれども姫君の、御年よりは智惠づかれ、祖父よ祖父よと朝夕に、慕はせられしを見奉らず、なに樂しみに生存へんと、老にほれしや同じ事を、繰返し〱、言ふより外の事もなし。妻の眞柴は娘に添ひ、都へ行けば一方は、安堵しながら又一方、緣もゆかりもなき人さへ、見馴れそなれて別るゝは、悲しきものをましてや夫を、振捨て行くに堪へかぬれど、よしや共にと誘ふとも、都の土は踏まじといふ、心の誓を破るべき、氣質ならぬを能く知れば、言ひも出さずたゞ胸を、痛むるばかりせん方なし。思ひ餘りて娘に向ひ、「若き時よりかたくろしき、宗入殿の事なれば、いつしめ〴〵と打解けて、語ひ給ひし事もなく、老いては殊更一徹の、募りし上に佛門に、歸依し給ひし其後は、妾と住居も遠く隔て、たま〱逢ひても用の事、言はるゝばかりで話もされず、詞に鰾膠なく賴もしげ、なけれど久しき夫婦中、なまなか他人が深切に、言はるゝよりは心もおかれず。殊に御身が孝行に、して給はれば何ひとつ、心に足らぬ事もなし。されば靜に此家にて、迎への雲を待たんものと、心の

石にては海面を、遙に遠く眺めしが、此所は又大井川を、近く望みて所の樣も、似通ひたるがその上に、總て家居も住馴れし、模樣に造りて手道具の、類はもとより屏風燈臺、何くれとなく彼地より、取寄せてしつらへたれば、播磨へ下りし心地せられ、都の中とは思はれず。かの川岸につくりもやらず、自然と振よき松蔭に、丸木の柱萱の軒、心も用ひず侘しげに、建てたる閨の樣なんど、おのづからに山里の、あはれを見せて木を撰び、磨きたてたる御殿より、却つてゆゝしう候」ト、聞え上ぐれば、「朝霧が、住居とするには夫こそ宜からめ。大儀々々」ト光氏は、惟吉に暇を取らせ、さて明石への迎には、誰をか遣らんと打案じ、不圖片攬の調太夫が、かの宗入の館を尋ね、「都の事など物語り、暫く足を留めしと、言ひたる事を思ひ出で、次の日密に彼を呼び、件の事ども言聞かせ、その外親しき者どもに、此事外へ漏すなと、口固めして調太夫、もろとも明石へ忍びやかに、迎へに下し給ひけり。

千鳥も又この人々と、打連れ宗入館に歸り、「姫君もろとも近きうち、都へ上らせ給ふ事ども聞え上げしに光氏君、殊のほか御喜び、御迎のため御近習の、侍大勢下されし」ト、言ふに朝霧今は早、のがれ難くて上らんに、心は疾くと定めながら、年月馴れたる此浦を、離れん事もあはれにて、又父上の心細く、ひとり止り給はん事など、思ひ亂れて萬に悲しく、荻の上風

覺えられぬも道理至極。さて私の嫁しましたるは、遙に西の國の百姓、この春の末夫は病死、身寄に善からぬ者ありて、田畑多く有るのを目がけ、筋なく家を奪取られ、快からず其所に、在らんよりはと貯蓄を、散さず持ちしを取集め、娘に都の風俗も、見習はせたく直に上京。とてもの事に御家の、式作法を覺えさせ、その上婿を取りたき望。何とぞ叶へさせられて」ト、思ひ込んでぞ願ひける。光氏つく〴〵打見るに、親子が人柄卑しからず、年積みて後擧けし子ならん、娘はやうやく二十ばかり、髮黑く色白く、目もとすゞしく愛敬あり。母は若きその程は、麗しくもありつらん、はや六十にも餘りて見ゆ。されど萌出る若草も、霜に痛める枯草も、その葉の形の變らぬは、同じ種同じ血筋、あらそひ難きものなりと、思ひつゝ猶さまざまに、義正公の御身の上、室町御所の事なんど、昔語をそれかれと、せさせてこゝろみ給ふに、その應答滯らず、疑無ければ、「菊咲と、やらん女は彼者の、望の如く留置くべし。杉生宜きに計へ」ト、仰に喜び三人とも、そのまゝ辷出でにけり。

惟吉は日暮れて後、大非の里より歸り來て、彼所の樣はいかにぞと、光氏の問ふをも待たず、急がはしく手をつかへ、「御推量に露違はず、人に劣らじ侮られじと、宗入が豫ての氣質、いつの間に造らせけん、館の結構なみ〴〵ならず、今までの藪原へ、湧出でたるかと驚かれぬ。明

かせ、「宗入が負けじ魂、大井の住居も見どころの、有る樣に造りつらん。汝千鳥と打連立ち、彼所へ行きて見てまゐれ」ト、遣し給ふと引違へ、杉生何か用ありげに、一人は老いたる一人は若き、女を兩人連れ來り、御前に手をつかへ、機嫌を伺ひさて言ふやう、「此者どもは親子にて、母は鐵蔓娘は菊咲、室町御所へ昨日まゐり、私に逢ひたいと、申す事ゆゑ御用の隙に、面談致して用の趣、尋ねし處この鐵蔓は、幼きより義正公の、御側に仕へ父とやらんの、病氣につき御暇を、願ひしは早三十年以前の事、その後に夫を持ち、擧けたる娘を何卒、その御縁にて嵯峨の御所へ、御奉公に差上げたいが、この御館には昔の事を、存じた者がない故に、その願を取次いで、貰ひたいと申す賴。年月も遙に過ぎ、殊には多き女中の事、私とても確には、覺えませねどさう聞けば、どうやら顏に覺もあり、夫なら明日夕かた嵯峨へ、お連れ申して參らうと、菊咲ばかり私が、部屋に留置き鐵蔓が、歸る折に人をつけ、見せましたるが堀川の、邊は寂しき所に似合はず、住居も綺麗にいと廣く、召使も數多ありと、送の者の歸つて話。其外の事どもは、お直にお聞き遊して」ト讓れば鐵蔓なほ平伏し、「たゞ今申上げられしを、繰返すも憚ながら、まだ稚兒髷の頃よりも、室町樣の御恩を蒙り、御暇を賜りしは、君のお産れ遊ばす頃。杉生殿はその時分、眉毛は拂つて居られしが、やう〳〵年は十六七、たしかには私を、

朝霧を、上せまするど申すこと。朝霧さまの仰には、大井は嵯峨へも近いとやら、月の桂の川上へ、光をうつさせたまふ折も、あるなら其時直々に、三年積りし事どもを、申上ぐるを樂み、に、此度御文は差上げぬ、浮世の花には嵐山、障のない中眺めたいと、かのさし下す筏より、氣は浮々と遊ばして、御筆も執れぬ御樣子。右の通で玉章の、御使を致さねば、名をかりがねと變るには、及びませぬ」トつら〳〵、例の通りに囀りけり。光氏は機嫌よく、「都の人に立交るは、いと苦しゝと朝霧が、言送りしは我にも包み、別に館を營みて、そのうへ上らんとてなりしか、心の用意感心せり。又宗入も光氏が、播磨に來るを好き序と、娘を押して送りしなんど、嘲らるゝを厭ふが故、かく計ひて不足なき、家のよけいを知らするも、道理なしとは言ひ難し。夫はさしおき幼き者の、名を一度も言ひおこさず、たゞ姫君と記すゆゑ、我方よりも姫とのみ、言遣りて過したり、何とか呼ぶ」ト問ひ給へば、千鳥は答へて、「申さずと知れたる通り、御七夜に御名をつくるが、例ながら程遠ければ、伺ひまするに日數もかゝり、さればとて私に、呼ばんのも憚あれば、御誕生の地名をそのまゝ、御名のやうに明石姫君、と申上げて置きまする」ト聞いて光氏、「それでよし。明石といへば暮れぬうち、はて誰をか」ト案ぜしが、忍び歩きのその折には、いつも外れぬ惟吉こそ、よけれと點き呼出し、件の事ども語り聞

二十六編　下

かく宗入が娘を都へ、上せんといふ催しは、光氏夢にも知り給はで、上らん事を物憂がる、朝霞が心の中、更に量りかね給ひ、且はたまく舉けし姫を、淋しき田舍に捨置きなば、彼こそは光氏が、父の不興を蒙りて、さまよひ歩きしその中の、子なれと人の言傳へ、娘の疵ともやせん、疾く都へ迎ふるには、若くべからずとさまぐに、打案ずる折もをり、犬吉が走り來り、明石よりの御使と、知らする程なく打通る、千鳥を此所へと側に招き、「明石の磯に打寄する、身は片貝と呼びし名も、因みなきにはあらざれど、須磨の浦より通ふとの、心で千鳥と附換へしが、かの玉章の使には、又雁と改むるが、宜いではないか」ト戲れゝば、千鳥は何にこく打笑み、「貝も千鳥も水邊に、緣があるやら海にも住飽き、飛歸るのは大井川。かうばかりでは流石のあなたも、御合點が參りますまい。入道申しあげまする、田舍育の朝霧を、御館へは憚あり、さればとてまた姫君を、かく凄じき山里に、置き申さんも恐あり、住荒し候へども、大井の里にいさゝかなる、屋敷ありしを思ひ出で、ちかぐに姫君の、御守につけて

たしとて退きしが、才十つく〴〵思ふやう、今勢ある光氏君を、笠に著なして宗入が、事を糺さば是までの、私慾は忽ち現れんと、心疚しく病氣といつはり、引籠りてありければ、宗入は心いられ、普請に精しき家來を選び、日頃家に出入する、上手の匠をあまた集め、萬事は繪圖にて問ふべしと、都へ遣し彼所の館を、思ふ樣にぞ造らせける。

御建立の林木の、餘をもつて嵯峨の御殿を、なほ建廣げさせ給ひ、乾の方に花鄕とか、聞えし方を移し住ませ、北をば殊に黄くしつらひ、是には誰と人を定めず、世に便もなく寄邊もなき、人を集めて住ますべき、その爲ならん一間々々に、仕切りて造らせ給ふよし。東に當りていと美々しき、高殿造は此方の姫上、迎へ給はん御心にて、未だに人は住ませ給はず。明日にも御供致さん」ト、打呟くを宗入は、庭を眺めて知らず顏、つくりて更に答へねば、才十さまぐ〜打案じ、「大井の里の御屋敷に、附きたる田畑さふらひしが、皆いたづらに荒れしかば、何がしくれがし押奪ひ、おほかた人の物となり、今はおのれが作れる分は、其方に年貢を出す」なんど、兎角につけて密にわが、得分となしたる地の、いかにならんと危げに、思ひてづなく憎き顏の、鼻なんどを打赤め、口の邊へ飛來る蜂の、螫すを怖れて吹拂ふ、樣して顏を膨かし、腹たゝしげに言ひかすむ。眞柴はをかしく打見やり、「今更にその田などの事を、宣ふにてはゆめゆめ無し、昔の樣にはならずとも、假の住居に取繕へと、仰が其方は聞取れぬか。妾とても世の中を、捨てたる身にて此年ごろ、尋ねもやらで置いたれば、今改めて言爭ふ、心はなけれど屋敷の繪圖も、沽劵も傳へて此所に有り、もし押領した者どもが、わが地の樣に言募らば、光氏君へ申上げ、取返すのもいと易し。それらの事は案ずるな」ト物多く取らせければ、ありが

假に、住むべき程に繕ひなす、手段ありや」ト問ひければ、才十しか〴〵會釋もせず、「この年ごろ荒れ次第に、捨置かせ給ひしかば、彌が上に草も木も、生重りて一面に、怪しき藪となり行きぬ。僅に殘りし御住居も、風に倒れ雨に朽ち、此程ははや御腰を、掛けさせらるべき所もなし。其上に當春より、大覺寺とかいふ寺の、古有りし南に當り、阿彌陀の御堂を光氏君、造らせ給ふがその所に、いと近ければ林木を、運ぶ車は引きもきらず、番匠壁塗諸職人、朝夕往來なすに由り、酒肴を商ふ店だな、御門前までたち續き、いと騷がしき街となりぬ。かの靜なる名所を、もとめたまふ御心には、入るまじう候」ト、我物顔に年久しく、靜に宿りしその所を、迫遣らるゝがいと悲しく、此事思止らせんと、言葉を巧に言ひければ、宗入は打點き、「我々は光氏君の、御蔭を賴む者なれば、それこそは却つて宜けれ。さぞ嚴しき御堂ならん、頓て上りて拜むべし。見苦しくともまづありふれたる、住居をそのまゝ繕ひ置き、あまりに損ぜし所のみ、取捨てさせて建添へべし。大方の事どもを、計ひ置かば内々の、事は追々せさせん」ト、言へども宿守才十は、なほ心得ぬ顔色にて、「御年若き時だにも、厭はせられし繁華の地へ、六十も越えさせ給ひながら、立出で給はん謂はなし。是は慥に噂に聞く、かの姫君を上せ給はん、御下心と推しだり。其儀ならば藪を伐り、草を刈らせんまでもなし、光氏君がかの御堂を、

「能くこそ心付かれたり、年は長けても懐子、娘ひとりは何とやら、心許なく思ふなり、御身も共に行き給へ。さて其屋敷の普請には、誰をか遣らん」ト言掛くるを、眞柴は引とり身を猶進め、「夫に定め給ひなば、幸ひの事のあり、昔よりして彼の所に、宿守の様にてある、才十とか云ふ老人、此國に用ありとて、さる頃下りてたしかまだ、屋敷の中に侍りし」ト、いひつゝ千鳥を呼出し、「光氏君より御暇賜り、其方がくだつて來る時に、道連になつた人が、居るなら此所へ呼んでたも」ト聞いて千鳥は打笑ひ、「それはあなたの御祖父さまの、御屋敷守とやらいうた、親父の事でござりますか。何とかいふ渡場で、同じ船へ乘つた時、私が供の者と、ふつと話をした所が、この御館へやはり來る人、それならば丁度好い、送つて上げうと言うた故、連立つては參つたれど、夫はく頑な、悪い人でござります。何の御用か知らねども、解れば宜いが」ト呟きながら、走り行きしが程もなく、彼の才十を連來れば、宗入縁さき近く呼び、「この浦浪に世を避けて、鹽屋の煙消果てん、心なりしが末の世に、思ひもかけぬ事ありて、花の都へ返咲、再び住家もとめんと、思へど俄に賑しき、所もうるさしされぱとて、田舎に近きは事足るまじ、古き名所の靜なる、邊に如くはあるべからずと、思ふに幸ひ汝が守る、屋敷は太秦嵯峨野に近く、嵐山渡月橋、音に聞えし邊なり。萬の入目は渡遣らんが、修理を加へてまづ

「義植公世を知しめし、都はいよ〳〵靜なれば、姫君誘ひ朝霧に、疾く上れよと光氏君の、たびたび仰越されしかど、娘は兎角思ひ立たず、室町御所の後見を、遊ばす御身の暇なき、夫故やらん氏素生、正しき寵妾にだに、しみ〴〵情を懸け給はず、つれなの君やと打歎つ、者もあるよし傳聞く、まして此身は田舍人、さる晴がましき方々の、中へ差出で交らはん、產み參らせし姫君が、大切ゆゑにあの樣な、女を召寄せ給ひしかと、人に笑はれ譏られなば、姫君までの御恥辱、數ならぬ身を現すより、又たまさかの御下りを、待つこそ宜けれさりながら、かゝる浦邊に姫君を、置き申しなば末々に、光氏君の御胤ながら、在所育と輕しむる、人もあらんとさま〴〵に、思ひ亂れて只管に、都へとては上らじと、言ひも放さず遠からぬ、內にも思ひ立つ樣に、御受けなして置きつるが、いかになさんと歎くは道理、願かなうて御胤まで、擧げし喜びひきかへて、おのれが辛苦もいかばかり。御身が異見を用ひざる、後悔今さら詮なし」ト、あを息ついて默然たり。眞柴は暫く打案じ、思ひ出しゝ事ありけん、それと點き側へ寄り、「都の西大井川の、邊に妾が祖父に當る、小倉太夫が屋敷あり、其後には住む人も、なくて年頃荒れまどへど、夫をどうか繕はせ、人に知らさず朝霧を、彼所に住ませて光氏君の、御住居も近ければ、密に樣子を聞合せ、其上に兎も角も、計ひ樣の侍らん」ト、聞いて宗入大に悦び、

か光氏君、磯菜を贔屓したまへば、つひには彼に富世の前、氣押れたまふ事もや」ト、心疾しき氣色なるに、高直わざと打笑ひ、「富世の前とは御年も、似合しき程なれば、見馴れ親しみなほ深き、御志ある樣をも、某竊に見上げたり、などさる事の候はん」ト、いと頼もしく答ふるにぞ、さもあらんかと政則も、思ひ直し心安く、立歸りけるとなん。

おもふに光氏かゝる遊を、君に勸め奉るは、此頃未だ山名の殘黨、所々に隱れ住み、近きに合戰起らんなど、風聞ありて隱かならぬ、人の心を安めんと、盛なる世を知らさんためか。またこの春の初の頃、近國の山々より、材木多く伐出させ、車に積み筏に流し、都へ取寄せ給ひしかば、そこ〳〵に砦を構へ、城の普請の用意なりと、之をも專ら噂せしが、さは無くして光氏俄に、嵯峨に寺を建立あり、公の後見したまふ御身の、世を捨て給はん謂もなし、かの黃昏が果敢なく失せたる、また殊更に執ねき阿古木が、跡弔ひて生先ある、御子たち二人の御身の上に、彼等が障碍をあらせじとてか、その故はいと知り難し。

繪合の卷こゝに終り、松風の卷にうつる。

宗入は妻眞柴もろとも、三昧堂の傍に籠り、旦暮佛に仕ふまつり、浮世の事は捨果てながら、たゞ朝霧が事のみは、更に忘るゝ隙もなく、思ひ餘りてしめやかに、ある日眞柴に言ひけるは、

御筆遣ひ。是を見せなば繪師どもは、跡を悔まし逃隠れん。あらけしからぬ御技ぞ」ト、打くつろいて宣ひながら、又操返して義正公の、御事を聞えいでて、うちしほたれ給ふ程に、三十日に近き曙の、月さし出でてまだ此方は、さやかならねど東の天は、白み渡りていとをかし。義植公は人々の、打しめりし氣を引立てんと、亂舞の具足を取出させ、それ〴〵の役を定め、正倫に笛を與ふ。彼光氏には及ばずながら、人には優りて吹立てたり。太鼓は高直みづからは、鼓を調べ給ふにぞ、光氏はたゞ扇を取り、時々拍子をそへたまふが、殊に勝れて面白し。夜も明けはつれば花の色も、人の形も仄に見え、鳥の囀り飛かふ風情、人の心ものびやかに、いとも興ある朝ぼらけ、繪の善惡を定めたる、その恩賞には小袖三襲、正倫に賜りつ。そのほかへも夫々の、程につけつゝ賜あり。光氏は司を呼び、「拙き筆にて寫したる、この浦々の一卷は、藤の方の御手許へ、留置かれ候ふやう、申上げよ」ト言ひながら、義植公の機嫌能き、體を見あげて心に嬉しく、暇を乞ひて立上る、折に杉生走り來り、「この外にもなほ明石にて、かゝせられたる卷あらん、夫をも見せてと御方の、床しがらせ給ひつ」ト、告ぐれば光氏打點き、「かかる序も侍らば、追々に差上げんと、聞置きていづれもはや、退出なして休息せよ」ト、襟掻合せて出でたまへば、政則御次に辷出で、高直に囁くは、「かゝる果敢なき遊にさへ、何の故に

たりと思ふ事もなし。その中にゑかく事は、いと果敢なき技ながら、いかにもしてわが心に、適ふ程にかきなさんと、思ひし事も折々ありて、人にも知らさず稽古せしが、思ひがけなく山賤と、身をやつしたる其時に、須磨や明石の海の深き、心を見しより斯く描かば、をかしからんと能く胸には、疊込みて置きたれども、筆の運は限りあり、心に思ふ半だに、かき取れぬものにてあり。さるに依つて今までは、文庫にかくして置いたるを、今日の序に取出でて、御覽に入れしが今さらに、面目なく候ふ」ト、正尚に宣へば、打笑みつゝ會釋なし、「何の業も心なくては、習ひ難きものながら、その道々の師に就きて、學ぶに道あり法のあり、手に入る入らぬは才に由れど、形の出來ざる者はなし。たゞ筆を執る道と、碁を打つ事のみ諸藝に違ひ、賢き人もなし得ぬもあり、物事愚なる者も、このふたしなには上手あり。さはいひながら貴人には、人に卓越けし者の多し。宣ふごとく父上には、いづれの御子にもよく諸藝を、躾られたるその中にも、取分けて兄上には、御心を入れ給ひ、教へさせ給ひしかば、御學問はいふも更なり、二には琴、三には笛、次は琵琶と父君も、つね〴〵宣ひ世の人も、長け給ひしはこの四いろと、御噂にもいひ出でて、繪はたゞ好ませらるゝが故、筆の序にかきすさび、給ふのみにてさまでの事は、あるまじう某まで、思ふに違ひていにしへの、墨繪の上手も及び難き、この山水の

をよくする上、是はとりわけ海山の、實の景色を見盡して、明石へ移りし其後に、心靜に描きたるなれば、浦々磯の隱れもなく、打見るものもおのづから、感に堪へつゝ吐息をつき、都を離れ此所に、在しましゝ其時は、心苦しくさぞ悲しと、覺しゝ事もありつらんと、光氏の心の中さへ、自然と繪の上に現れ、日記といふにもあらざれど、見聞き給ひし事どもを、何くれとなく書きすさび、給ひし假名の美しさ、あはれなる歌なども、ところ〴〵に交れるを、正尙はじめ皆うち寄り、繰返しては打ながめ、「まだこの類の御筆すさび、祕置かせ給ふもあらば、見せさせ給へ」ト言ひしろひ、あはれさも面白さも、是に上超すものあらじと、萬みな押讓りて、左の方勝になりぬ。なほ興盡きず人々は、御前に打集ひ、夜明も近くなる程に、いとしめやかに打廻る、盃を光氏は、受持ちながら過ぎし世の、物語に不圖移り、「おのれ幼き時よりも、學問にのみ只管に、心を入れて候ひしが、父君の宣ふは、それ文學といふものは、世に用ひられ人々に、侮られじとてする者多く、身の愼にするは少し、此道長けて短命なる、人も和漢にいと多し、不肖ながらこの義正の、骨肉を分けたる汝、文才なくとも輕しむる、人のあらん道理なし、此道を深く習ひ、氣欝の病をひき出しそ、身をこなすには武術ぞよきと、その隙々には遊藝を、さま〴〵敎へ給ひしかば、何をなしても拙きと、いふにもあらず、されぱとて、得

たるが、その中にも取分けて、いみじく描きたる繪どもありて、勝負更に定めやらず、有觸れたる四季の繪も、古の上手どもの、面白き事を撰び、筆滯らず、かき流しゝ、その樣譬へん方もなし。是に合せて右の方より、出したるは今新に、描かせたる紙繪なり。絹地にたがひて機張なく、山水の勢は、見せ盡さぬものながら、細に巧みし筆の綾、心に入れて作りしは、淺はかなるに似たれども、昔の眞を描きしに恥ぢず、いと賑はしく面白き、かたは左に勝りて見ゆ。是のみならず始より、定めかねたる爭ども、かた〴〵興ある事多かり。藤の方は匂の局の、通ひ口なる御簾障子を、なかば明けておはします。昔より繪は好ませ給ふ、道にてあれば善惡を、詳しく知しめすならんと、思へば光氏等閑には、見やり難くて正倚が、判する詞の心もとなき、其折々には夫はかく、是はかうとて詞を添へ、指し教へ給ふ御姿、例の事にはありながら、眩しきまでに輝きけり。されども繪どもの多ければ、優劣をそれかれと、定めかねつゝ夜に入りぬ。はや數とりの花の枝も、たゞ一本となりし折、須磨の卷の出來るに、政則緣より少し進み、老眼ながら差伺ひ、是こそ豫て噂に聞く、光氏君の御筆ならめ、此方も豫て心を用ひ、果の卷は優れたるを、撰殘させて置きつれども、嗚呼須磨の浦浪に、打返されてうつせ貝、碎けて見えずなりぬらんと、密に心騷ぎにけり。さきにも度々言ふ如く、光氏は畫

御著座ありければ、少し下りて光氏君、縁側には赤松親子、その外つねに御身近く、召使るゝ侍は、御許を蒙りて、おの〱謹み控へたり。左は南匂の局へ、いと近ければ礒菜の方、右は北にて富世の前、今一段高う在します。この左右には長押より、純帳やうの絹を打垂れ、あらはには見えざる様に、しつらへながら傅の、女どもはその前に、翻れ出づるもいと多かり。さて繪合の始まるべき、一時に臨みて四郎正尙、御前に出でて一禮し、兄光氏におし竝び、しづしづとこそ坐したりけれ。この正尙も武術の暇に、遊藝を嗜みしが、繪をなん殊に好みしかば、今日繪合の判者にせんと、光氏豫て密に勸め、夫とはなしに義植の、機嫌を伺ふ體にもてなし、斯う〱せよと差圖して、此所へ招き寄せたるなり。程なく礒菜の方よりして、紫檀の箱に繪を打入れ、蘇枋の木にて花形に、脚を透しゝ机に載せ、女小小姓六人ばかり、霞に櫻の惣模様、藤の花房いと長き、唐織の帶結び下げ、皆一樣の姿にて、しづ〱と舁出しゝ、その樣なべてならず見ゆ。富世の前の方よりも、水の流に山吹を、縫箔したる振の袖、同じ樣なる女の童、一時に捧出づる、箱も机も沈香にて、是も左と等しき華足に、總角の房結んだり。右も左も又これに、下机といふものあり、紫萠黄唐高麗の、錦の打敷しき設け、その上にこそ据ゑたりけれ。かゝれば兩方思ひ〱の、繪を打開きて取出すを、正尙仰を蒙りて、この判をなし

しこそ、をかしからめと思ふ」なんど、聞え知らせてなほ多く、畫工どもを呼集め、人に見せじと奥深く、暗き座敷に窓をあけ、描かするよしを義尙も、東山にて聞召され、磯菜をそのまま捨置かば、初め心を懸けしかど、思ひを遂げず却つてわが子の、傅となりたるを、憤るゆゑなりと、人の譏り思はんかと、むかし今の名だたる畫工が、手を盡したる卷どもを、送遣し給ひしが、その中に都より、鎌倉までの名所古跡、見るが如くに道中の、景色を詳しく描きたるあり、磯菜はそれをつく〴〵ながめ、さきつ年伊勢の國へ、下りし事を思ひ出で、その折には母上の、いとまめ〳〵しく此所にては、斯く宣ひし彼所では、しか〴〵仰ありしなど、涙は雨とふりし世の、いとゞ戀しき鈴鹿川、八十瀬の浪も袖による、心地せられてその外の、卷をば能くも見ざりけり。此繪は大内爲光の、祖父某鎌倉に、仕へしをりに時の將軍、賴嗣公の賜にて、家の寶と祕置きしを、娘富徽の前に贈り、義尙すなはち母より得て、今まで祕藏なしたるなり。なほ是等の古き繪ども、富徽の前より富世の前に、贈られたるも多かるべし。

廿日あまりを其日と定め、かく俄なる樣なれど、人々の丹精にて、右左とも珍らしく、面白き繪ども多く、其所此所より集りたり。かくて其日の結構は、富世の前の住み給ふ、奥殿より廊下つゞき、打はれたる西むきの、廣座敷をその場と定め、正面に設置きし、御座所に義植公、

二十六編　上

藤の方の御前にて、繪合ありし事どもを、義稙公聞召され、羨ましく覺されて、光氏君にその由を、聞えさせ給ひければ、光氏は畏まり、「仰なくとも御前にて、催さんそのために、内々にての繪合は、下ならしに候ふ」とて、夫より猶も其事に、紫とも〴〵打かゝり、再びはれの繪合に、人々の目を驚かさんと、中にも勝れし繪巻物は、撰出しておきながら、まだわが方にとめ置きしも、此度はとて悉く、磯菜の許へ送りやる。その中に自ら描きし、彼の須磨明石の一巻をも、取交ぜられしは心の中に、おもふ仔細のある故なるべし。

政則もその心劣らず、高直に密に言ふやう、「光氏君は今新に、描かせんは口惜しゝ、たゞ持傳へてありけん限り、取出すこそよけれなんど、此頃仰ありしかど、己はまたさは思はず、たとへば上手の繪にもせよ、久しく傳來なしたるは、何事も古めきて、女の姿は大津繪の、藤を擔げし娘の如く、男は棒立茶筌髪、角鍔うつたる無反の刀、ひうちを入れたる袖無し羽織、いかつげなる有樣は、若き人の目にはつくまじ。それよりはたゞ今の浮世を、見るが如くに描き



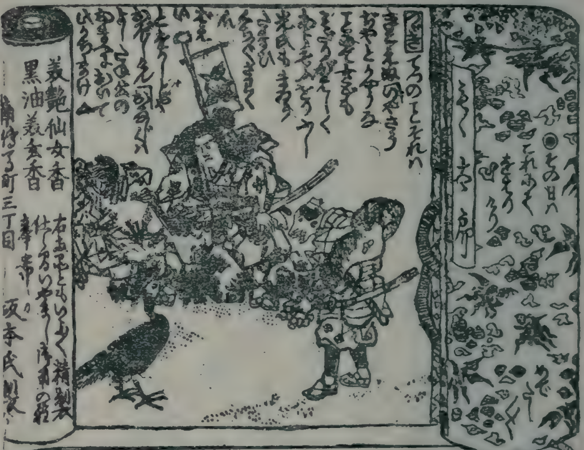


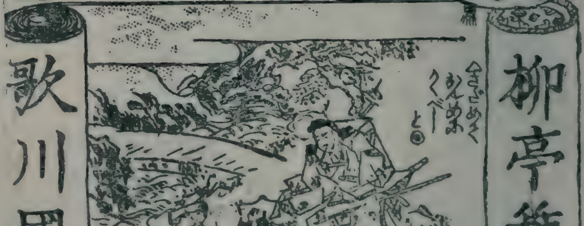
偐紫田舎源氏第二十六編序

小紋絽を袴に仕立て、仙臺平を羽織にする、古戰の記錄で說法は賑ひ、祖師一代記で軍書讀は入をとる。三階からおかるが出で、中二階から勘平を勸むる類、人奇を好めば造化も又、それにひかれて己が名を、忘れて咲くや黃鷄頭、河骨の岡に生ひ、薊の水に開きしを、不思議といひしは昔にて、今は牡丹に鈴蟲が鳴き、時雨の降るに櫻を見る。春と秋との取かへばや、絲鬢奴の豆藝者、文金島田の陰子の振袖、最長々しく繪草紙に、源氏を綴るは淨瑠璃本を、和文に直しょ表裏なれど、彼の絽の袴の類にて、襞の筋も信と通らず、去年今年と古めく程、くだ〳〵しきに自も倦じ、ちと強りと書いて見ると、又平晒の羽織にて、和かみが少しもなし。畢竟が蛙より、力なき身で歌詠の、眞似をしたのが不覺なれど、春の鈴蟲なか〳〵に、鳴出しては音も止めがたく、時雨ふる頃櫻木に、彫めて恥をひろうす。

天保九年戊戌孟春　　柳亭種彦

義植公の、御前において此勝負、定めて御目に懸くべし」ト、其日は是にて終りけり。めでたしめでたし〳〵。


義艶仙女香
黒油義禽香


柳亭種彦作
歌川國貞画
浄書道友

藤の方機嫌能く、「いざあの樣に右には吳竹、中垣も參つて居るか。左は十六夜、更級」ト、差圖を受けてまづ右より、鬼一口に言籠めんと、取出したる大江山入り、左もそれに合するには、日本一の黍團子、桃太郎を持出でて、まだ勝負を定めやらず。吳竹さきの繪を難じて、「鬼を退治する樣は、同じ樣に見ゆれども、此方は名高き四天王、其方は子供すかしの話、桃のついたる差物ばかりで、腹卷もせぬ御大將、連れて打立つ郎黨も、不了簡な取合せ、中の惡い犬と猿、世話がやけてたまるまい。喧嘩相手の無いかはり、とりわけ役に立たぬは雉子」ト、けんもほろゝに言ひければ、更級はをかしがり、「名高い四天王ならば、臆病らしく山伏に、姿をかへずに行くがよい。そのうへ神變奇特酒で、醉うたを討つたは寐首も同然、賴光殿より酒が剛者、鬼が下戶ならどうする氣か」トいひ嘲るを中垣打消し、「酒よりをかしい黍團子、一ッでお供致すとは、意地のきたない御家來方」ト笑ふを十六夜引取つて、「桃の木は邪氣を避ける、德ある故のたとへごと、子供に武勇を敎のため。まづ戰に出立つには、軍用金が肝要と、古き歌にも眞金ふく、きびと續きし詞を取り、日本一の寶の黃金と、いふ謎々に侍る」ト、聞いて中垣猶笑ひ、「いや眞金とは鐵の事、それは聞えぬ」「いやさうぢや」ト、斯樣な事にて女ども、みだりがはしく爭ふ折節、光氏も參りたまひ、口々に騷ぐ心ばへ、いとをかしとや思しけん、「同じくは

を汲んだり柴折つたり、其時の爪はづれは、中將殿の道中を、なされた御足と同じ事、あらびて居たに違はない。して見れば夫は五分〳〵。そんな事は捨置いて、姉娘は中將殿、妹は天子の后にそなはり、かの角岡の鹽屋の煙、雲井へ近く立昇り、文正にも官位を賜り、始より終まで、悲しき事は更になし。それ故に一名を、祝草紙と呼慣し、正月女子が物の本の、讀初めには必ずこれを、見るのが古き習慣ぞや。

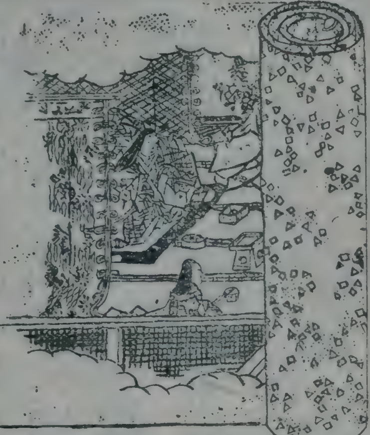
文正の書にあやかれ姫小松

季のなき様に聞ゆれど、かの讀初めの草紙ゆゑ、これ初春の發句にて、ある女の口吟。その鉢かつぎにこの樣な、目出度事はよもあらじ。又繪の樣も大内と、賤が伏屋を取竝べ、描現して見所多し。湯殿の焚火は汐風に、吹消されて影もない」ト言離ちしが藤の方の、御氣色をはかりかね、「さはさりながら此二卷、彼方は長谷の觀世音、此方は鹿島大明神、應驗利益神佛同體、優劣は更になし。司が只今申しゝ發句、緋の袴とは椿の名、匂の黄なるを黄金に擬へ、をかしき見立に侍る」ト、申直して退きけり。此繪は此頃唐土より、歸來りし雪舟が、筆を揮ひて手は名高き、宗祇法師の走書、白き色紙に青き表紙、黄なる玉の軸なれば、目も輝くまで見えにけり。

谷寺で、世に零落れたる父君に、廻りあひても母上は、いかにならせ給ひしかと、問ひもやらずに捨置きしは、その物語の瑕となり」ト口やかましく言消ちたり。この一巻の繪は光興、手は連歌師の能阿が書き、倭の紙に唐土の、薄絹を以て裏打し、赤紫の表紙かけ、軸は紫檀よのつねに、ありふれたりし粧なり。

左の方の杉生は、年も長けて心憎き、事知りなれば先の繪に、何にも言はず文正の、巻物すらりと押開き、「常陸國の角岡に、黄金の花が咲いたりと、童謠にも昔より、唄ふは卽ち此事なり。文正初は文太と呼び、かの國に隱れなき、鹿島の神の大宮司の、下人なりしが角岡に、移りて鹽を燒きて賣る。この鹽を食する者は、老も若やぎ病もなほり、良藥にも優りしとて、買ふ者前後を爭ひて、俄に大福長者となり、鹿島の神にまうし子して、花とも月とも喩へ難き、二人の娘を擧けしに」ト、詞の中より右かたの、女一人差出でて、「天子の御子中將殿、その娘の麗しき、噂を聞召してより、見ぬ戀にあこがれ給ひ、小間物呉服なんどを賣る、商人に姿をやつされ、僅ばかりの供を連れ、京からはる〴〵常陸まで、下らるゝ途すがら、乘物にも召さぬ樣子、御顏は玉の樣にもせよ、お足は定めて胼胝、娘の肌へざらついた、踵が觸つてお笑止や」ト言ふに杉生打微笑み、「變つた事が心懸り、かの鉢かつぎの姫上も、一旦は湯殿に奉公、水





おの句よいそぎ
ひのちのまこゑるうこれてちりつゞき
山まゆみてもよくのごとくれあふぎく一ちのでるおでうあう
をちうりきがさざるおでがあるものいれるがつてつちこえと
まはづくるのしてまつ上て天へのふれいそんとすう月よ
くすものかくれるせのよく ひあふぎをさー かぎーとめ
いそうまではとそあひうて中ちまりの一つろあす
身のうりもいろけのまよめでいえき春又えんべつそく
いひるてすを文せり ようそのさきをまうおさを
おくさて入ぞのぐまうのうちとのひるよもた。そのちくろぞれ
とせてもぞよちおちちられる父きまふめくり あむても

まめかき又文なりこなまづるひめ君おつゞんてそもくとられされ
ひめ君よりまいてれともひせんくこうもうぐせうあるに。
とある川へとせおまけさ月八ちづむさぢへうのてや
みられるかそこでどあるちつきあれたちおかりとりあげそ
つきさうり一れ山くけのさんを中さぞくをのふさくあり
よふけさろひあきくく六の女せんくこうを やわもされるん
四ぎ● 火てきふつされしやそあまのく四ぞんゆめ
あん子ごといあゆりぞのといぶりのひめ君入をかゞやき●
られとのおかるを序りのまるの女ざるがおりとやめ
「うつきー 半ちのふくれがくちり月とおくりて」あうの
山まをみてもおれてあるえれぶんのゆもとをまづさき
あれもせぬよごとをろうえよりんであられたことぢやや
中ってものおきるあわりくでちやとつよう八ばつくき
かぐりをかうつかでかうあがれかうるめおうで
かうそのでなる一●



あり、世に比類なき不具の女、せん方なくや思はれけん、湯殿の火焚に仕はれしを、その殿の四番目の、御子宰相殿といふが、かの姫上を見初られ」ト言ひかくるを左の方の、女どもが押止め、「被ぎし鉢の深ければ、口元ばかり出て居るは、此繪を見ても知れてある、肝心の目元鼻つき、知れもせぬに何所を取柄に、見初られた事ぢややら、ても物好な御方ぢや」ト、笑へば司頭を振り、「心で見るが心見る、目ばかりで見る物ではなし。是はものごしじんじやうに、歌を詠み笛を吹き、何事も優かたなに、思ひしみての忍合。父君母君聞召し、世に淺ましき事なるかな、嫁比べせば鉢かつぎの、恥らひておのづからに、出行くべしと其事あり。果してかかる不具にて、など其席に列らんと、走出でんとする時に、これこの樣に鉢が落ち、中より數の寶物、みつなり橘けんぽの梨、十二一重の御小袖。この繪の樣を發句に言はゞ、

　緋の袴黄金亂れて散り椿

このまア美事にかいた事は。兄君達の嫁御寮、鉢かつぎが來たならば、おもいれ嫐りて笑はんと、羽繕ひして待つ處へ、ほのかに出でんとする月に、雲の懸れる風情にて、檜扇を差翳し、立出でたまふこの粧、動く樣に描きなしたる、繪も物語も一對に、目出度卷に侍る」ト、言流すを又左より、その詞の先を折り、「仇を恩で返すのが、眞の道と言ひならはす、その鉢かつぎは長

を打廣げ、言爭ふ口合の、いとをかしきを聞召し、「花も盛の折なるに、夫をば何とも言はずして、繪の善惡を論ずるを、其方達が此頃の、遊とするこそいとをかし。とても事に右左と、方を分けなば一入に、面白からん」ト宣へば、御側に居合せし、更級呉竹詞を揃へ、「方を別けるとおつしやるは、いかなる事に侍る」ト、伺ひ申せば藤の方、「それならばまづ自らの、女子どもを其方達の、代に此所で繪合の、まなびをして見せう程に、更級も呉竹も、主人よりして預り置く、繪巻物のその中にて、わけて好いのを持つておぢや」ト、取寄せ給ひて邊を眺め、「富世の前は右の方、呉竹の代は司、磯菜は左、杉生は更級の名代に、その外の女ども、思ひ思ひに二つに別れ、物語の意味、繪の善惡、遠慮無しに言うて見や」ト、仰に心得杉生司、それか是かと繪を見分け、まづ御伽草紙の出來はじめ、鉢かつぎ姫鹽賣文正、是を合せて言爭ふ。右の方より出しよが、鉢かつぎなりければ、司は少し進出で、「寶を籠めて母御前の、戴かせ給ひたる、鉢の淺くは見給ふな、繼子繼母の教には、これに上こす話はなし。かの後添の讒言を、實と父君思召し、更に罪無き鉢かつぎを、又歸來ぬ呪に、四ッ辻へこそ捨てられけれ。姫上途方に暮れたまひ、せん方涙もろともに、とある川へ身を投げた、身は沈む、鉢は浮いてぞ流れける。そこで殿御のお心に、あはれと思し取上げて、連歸りしは山陰の、三位中將殿にて

も障なし。かき誤りて醜しきは、取除けたまへ」ト是をもまた、それかこれかと一綴づつ、浦の景色山の有様、さながら其所に遊ぶが如く、さやかに見ゆるを撰出でたまふ。その序にもかの明石の、家居の樣の目にとまり、いかになしゝと心に浮むは、忘るゝ隙の無き故ならんか。斯く繪どもを光氏の、集めらるゝと傳聞き、政則いとゞ心を盡し、繪卷物の軸表紙、紐の飾に至るまで、いよ〳〵目立ちて珍しきを、さま〴〵に調へたり。

頃は彌生の十日の程、空もいと麗かにて、人の心も暢やかに、物面白き折といひ、上巳は過ぎて端午には、遙に遠く儀式の日の、ひまにてあれば室町は、物靜にて斯樣の事に、打かゝらひつゝ遊び暮し、彼方此方とさま〴〵多かり。磯菜は元より自らも、繪を好みて能く描けば、人にあつらへ描かするにも、それ〴〵に心を用ひ、衣服調度を初とし、家居の樣もむかし〳〵の、物語にはその時世に、似つかはしげなる事を撰ませ、富世の前はまだ幼く、まします故にその御目に、とまる事を專として、今の浮世の流行物、新しく珍らしき、事の限りを傅の、女どもが繪師に言付け、いと美しく描かせければ、眞少く僞は、多きに似たれどかの古代を、寫しゝよりも華やかなり。藤の方もむかしより、繪は嗜きたまふ事なれば、見捨て難く思しけん、何となく朝夕の、看經さへ怠りたまひ、義植の側にのみ、附添ひて在しまし、かの女どもが繪

繪を數多く磯菜へ送り、彼より君の御慰みに、參らすべし」ト更級を、まづ歸し遣りたまひ、言の葉犬吉なんどに言付け、「古き繪は是にあり、新しき繪は夫にあり」ト、御厨子文車旅簞笥、總て繪どもを入置きし、調度を出させ押開き、紫と諸共に、「いづれが御目にとまるべき、今樣なるこそ好からめ」ト、撰出し給ふ中に、かの長恨歌王昭君の、二卷の繪は面白く、哀れなれども長恨歌は、馬嵬が原にて楊貴妃の、失はれたる事を記載せ、昭君は胡國へ、圖らず送遣らるゝを、打歎きたる物語、事の初に忌はしと、此二卷は撰殘し、此度は奉らず。かの須磨明石の旅日記の、箱をも取出でこの序に、見せさせ給へば紫は、數の繪どもを脇へ押遣り、つらつらと見給ふに、所々に繪をかき加へ、哀れさ言はん方もなし。たとへばこの光氏君の、御名をだにも聞知らぬ、人に初て見せたりとも、心有らん者ならば、更に淚は惜むまじ。ましてや是はその夜の夢の、さむる折なき心には、昔の事を繰返し、悲しう思出でられて、「など浦住居の御時に、此繪を送りて賜らぬ。須磨や明石を君もろとも、眺めて暮す思して、少しは心の慰めに、なりもせんに」ト今日までも、見せ給はざる怨のかずかず、聞えければ光氏も、あはれと屢目を押拭ひ、「さう宣ふも道理ながら、まだ其頃は合戰止まず、心に暇無かりし故、かき捨てしまゝ取出でず、都へ歸りし其後も、事に紛れて忘れたり。藤の御方ばかりには、御覽に入れて

送遣し給ふべし、されば君も等閑に、捨置き給ふべからずと、月日のたつをぞ待居たる。
斯くてある日嵯峨の館へ、更級來りて御目見を、願ひたき由言入れければ、光氏頓て前に呼び、何の用ぞと問ひける時、更級少しにじり出で、「豫ても知召す通り、室町様は何よりも、繪を御好み遊す故、磯菜様がいろ〳〵の、繪を此頃おしたゝめ、君の御覽に入れられしが、御心に叶ひしやら、しば〳〵渡らせ給ふのを、誰が告げけん赤松御父子、聞及ばれて今上手の、畫工どもに言付けて、見馴れぬ樣の事を撰り、詞をも面白く、書續けさせ富世様へ、それを密にまゐらせられ、君の御出の其時は、一寸御目に觸れながら、あわてた様に押隱し、御側の女中がくちぐちに、我君様の御覽に入れると、磯菜様の御方へ、屹度お持ち遊ばします、彼方は御繪がお上手なれば、お笑草になるのは必定、めつたに御出し遊ばすなと、見せびらかしては御氣をもませ、意地くね惡う申すよし、富世様はまだ何にも、御存じないに惡智惠を、かふが憎さに宜い御智惠を、お借り申しに參りました」ト、聞いて光氏打笑ひ、「高直はまだ予が年に、多くも越えねば子の愛に、溺るゝよりしてさる事も、なさんが夫を止めもせず、心を合せて取るにも足らぬ、磯菜を嫉む政則こそ、さて大人氣なき振舞なれ。さばかりの繪を調へながら、たやすくも御覽に入れず、君を惱し參らするは、いと目覺しき事にてあり。宜しく〳〵我もそれに劣らぬ、

近習の武士が、いと拙き繪を描くさへも、興あるものと人より親しく、思したりしに是は猶遙に優りて描きし繪も、描ける姿も麗しく、筆うち休らひ机に凭れ、いと恥しげに打笑みたるに、御心や染みたりけん、是よりしば〳〵渡らせ給ひ、今までよりも御思の、まされる樣に見えたるを、富世の前はまだ幼く、渡らせ給へば心もとめず、却つて御側に附從ふ、吳竹中垣心を痛め、斯樣々々と赤松の、館に行きて告げければ、政則高直これを聞き、光氏君のとりもちて、送られたまふ由なれど、かの磯菜はその素性、確ならざる者とやらん、富世の前とその女と、威を爭ふは事をかし、何條彼に劣らんやと、勝れたる繪の上手どもを、おのれが屋敷に呼集め、「こは故ありて富世の前に、進らする繪にあんなれば、心を凝し、氣を練りて、又無き樣に仕れ」ト、くれ〴〵も言ひこらし、又類なく麗しき、紙どもを撰調へ、義植公はまだ幼く、渡らせ給へば御耳馴れし、昔々の物語を、描きたるこそ御目に留らめ、同じうはありふれたる、十二月の繪も正月萬歲、二月初午三月雛と、子供遊のはや言にも、言ひ古したる事を省き、珍らしき型もあらんと、さま〴〵の繪を描かせたり。

斯くふた所の傅ども、おのれ〳〵が主を思ひ、爭ふ由を遊佐國助、仄に聞いてわが娘、薄雪をまゐらする事は、暫く思ひ止り、義植君の御年の、加はり給はゞ藤の方、御詞を添へられて、

隙より見たまふに、かぼそき生なるが上、打恥らひて身を縮め、かしこまりたる其姿、小やかにてありければ、おとなは伽に恥しうや、あらんと初め御心に、案じたるには引かへて、をかしの人やと思しけり。

富世の前はまだ幼く、渡らせ給へど内君と、既に定り給ひければ、先頃まで富徽の前の、御座所に住みたまひ、磯菜は是よりそのむかし、桂樹が部屋となしゝ、匂の局を賜りて、まめやかに仕へしが、兎に角に義植は、この日頃御覧じ馴れたる、富世の前は心安う、磯菜は人柄うちじめり、恥しげなる其上に、光氏君の子の如く、あつかひ給ふに御心置かれ、侮りにくゝ思しければ、夜の御伽には内君と、ひとしく參りて御身近く、侍るからに馴れ給ひし、様には見ゆれど打解けたる、童遊に晝などは、匂の局へかりそめにも、渡らせたまひし事はなく、富世の前の方にのみ、いと睦しく在しけり。

かゝる程に年かはりぬ。稚きより義植は、繪を好ませ給ひけるが、すきこそ物の上手なれと、諺にも言ふ如く、はや此頃は繪師にも恥ぢず、いと好く描かせ給ひけるを、かの更級十六夜は、これ幸ひと磯菜を勸め、さまぐ\の繪をいとをかしう、描かせて御覧に入れければ、果して是に御心移り、匂の局に來り給ひ、繪を書交して遊びつゝ、磯菜の様を見給ふに、この年頃

ず此光氏を、憎きものとや思さんかと、胸潰るれど今日となり、思ひ止らん事にしも、あらねばそれかれ言置きて、館へ歸り給ひけり。

この磯菜が六條に、假住をなしゝ時、腰元使に好き女を、多く抱へて光氏より、送遣し給ひしが、既に前にも言ふ如く、頼みがたなき體を見て、皆ちり〲になりたるも、かゝる磯菜が幸を、聞くより又も傳手を求め、大方此所に參り集ひ、いつきかしづきまばしきまで、粧ひ立てしを藤の方、つく〲と打ちながめ、あはれ阿古木の世に在らば、さぞ嬉しとや思はんを、果敢なく過ぎしいとほしさと、逢ひも見もせず今は早、世になき人の事をさへ、情深き心より、思遣りて人知れず、涙に暮れて居たりしが、氣を取直して杉生司、二人を傍近く呼び、「磯菜にかしづき靜やかに、跡より參れ」ト云置きて、其身は先に御所へ赴き、義植の前に出で、はや足利の主なれば、わが子ながらも禮儀厚く、「豫ても申上げたる通り、いと珍しき御伽の、おしつけ參り侍るなり。是ははや童と、言ふべき年にもあらず、根もない事におむづかり、笑はれ給ひそ行儀正しく、御目見仰付けられて」ト、聞召して義植は、常よりもいと美しう、小袖の衣紋搔合せ、心づかひし給ふ樣、御年の程よりは、いみじうおとなび戲ばみ給へり。

兎角の事に暇どりけん、甚く夜更けて參りたる、磯菜の樣を義植君、扇を顏に押當てて、骨の

ひ給へども御心を、計りかねてや更級が、袖に隱して義尙の、文は御前に取出でず。此日も磯菜は次の間に、隱れて此所へ出でざれば、かの麗しき櫛箱を、御目に懸くるに託けて、更級は此方へ來り、此事詳しく告げまゐらせ、御文を差出せど、惱しげにて磯菜は筆を、執るべき體の曾てなし。更級猶も側へ寄り、「かく有難き御志を、嬉しと思し給はずや。御返なくては御使に、言ふべき詞も侍らず」ト、十六夜も詞を添へ、勸め煩ひ聞ゆる氣色、此方へ漏れて光氏も、隔の襖に身を摺寄せ、腰元どもが言ふ如く、たゞに見過したまはんは、いと有るまじき事にてあり、懶く思さばたゞ返の、知るゝばかりも聞えさせ、たまへと宣ふ御聲に、なほ恥しく差俯き、不圖櫛箱を見るにつけ、伊勢路へ下るその時に、文に卷込め光氏より、贈りし櫛を喜びし、幼心も唯今の、事の樣に思はれて、其折には母上の、いと健かに在せしなど、取集めたる悲さに、兎角の事も覺えねど、せん方たなくて書きたる返は、言短にてありしなるべし。

御使には藤の方より、さま〴〵の賜物あり。光氏は磯菜の返、いかなる事をか書きたると、床しうは思せしかど、打出でては宣はず、又繰返して心の中に、義尙君ははや三十路を、越え給ひしかど優かたなる、御顏にて御年より、いと若やかに見え給へば、この磯菜とは宜き程なる、御間にて似氣なからず、夫をまだ稚き、義植公に引違へ、何の故にか送りしと、人知ら

と、仰を傳へ御文を渡し、使は表に控へけり。

光氏もその折に、此所へ渡らせ給ふにぞ、斯う〳〵と更科が、披露に及べばまづ櫛の、箱を取りて見たまふに、いと細やかに媚きて、珍しき樣なりければ、つく〴〵思ひ廻らすに、おのれ播磨へ下りしは、かの宗人を押へのため、とは言ひながらひとつには、富徽の前の御振舞、心に叶はず世の中を、憂しと思ひし故にてあり。その心に比ぶれば、兄義尙もいと若きに、弟を子として家を讓り、今物靜に在するは、世を恨めしと思したる、事のありしも圖り難し、御慰めになる人は、勸めてなりと此方より、進らすべきを彼方より、仰越されし御志を、遂げさせ申さず今かゝる、たがひめ有るを如何に思して、わざとがましくこの品々、贈越し給ひしならん。我若し兄にてかゝる事ども、弟がなさば捨置かじ。富徽の前の若し磯菜が、三筋町にて生育ちしを、聞出し給はんかと、思ひ過しの過より、よしなき事を仕出しゝ。都を某出立つを、止め給はぬ其時は、賴もしからずと兄君を、恨みし事のなきにもあらねど、また其後に父上を、言宥められ富徽の前の、仰に背きて再び京へ、呼戾されし御志に、初め恨みしあやまりを、後悔なしてつかふる身が、返す〴〵もいとほしき、事をなしゝとさま〴〵に、思ひ亂れて暫しが間、打ながめ給ひしが、この返は磯菜より、如何樣に聞ゆるならん、又御文はいかゞなど、問

二十五編　下

はか〴〵しき後見の、磯菜に無きを光氏は、心許なくまづ嵯峨の、館に迎へ室町に、まゐらせんとも思ひしかど、兄義倘への聞えを憚り、此度は思し止り、藤の方に任せ置き、たゞ知らず顔にもてなせど、大方の事どもは、とりもちて何かにつけ、親めき聞え給ひけり。

水原この由傳聞き、大に驚き義倘に、斯樣々々と告げければ、おのれが心を懸けたるを、光氏が横取して、義植に送れるを、いと口惜しと義倘は、思ひながらに表立ち、言爭はゞ他聞の、惡かるべしと心にをさめ、音づれもせず在せしが、猶も密に詳しき樣子、聞合せ給ひけん、藤の方より磯菜を送り、遣したまふ其日になりて、義倘わざ〳〵使を立て、鏡臺櫛箱亂箱、匂袋匂玉懸香種々の炷物を、よのつねならぬ珍しき、壺に納め箱に入れ、又と類のなき樣に、廣き座敷の外までも、いと遠く匂ふばかり、心殊に調へられ、持船とて今の世に、釣臺といふ物の類に、積重ねしは光氏君の、見たまふならんと豫てより、思設けし故なるべし。

日柄も好くて珍しき、人を今日しも義植に、進らせたまふと確に聞けり。こは餞の印にこそ

藤の方のいと優しく、あつかひ給ふに心や解けけん、例の深く物恥する、氣色に引かへ兎も角も、仰は背き侍らじと、身を打任せ頼みしかば、さあらばとて其氣色、さきに在りし薄雪が、事は延して磯菜が館へ、まるりの事を藤の方、心に入れて催したまへり。

澪標の巻をはり。蓬生、關屋のおも影はすでに前に記したれば、これより繪合の巻に移る。

經り月を重ね、只今まで彼所に逗留。朝霧様の御文」ト差出して猶摺寄り、それにも記し給ひしならんが、眞柴も此頃髪を剃り、宗入もろとも三昧堂に、籠りて勤行怠なし。それより聞上ぐべきは、何かは知らず御用有りて、千鳥といへる腰元を、去年よりこれへ留置かれ、未だに還し給はぬ由、少しも早く」ト言ひかくるを、「オヽ宜し」ト光氏點き、「還してくれと朝霧が、言ひしも道理都の噂、聞きたき事も多かるべし。さあらんと思ひし故、近きに磯菜を室町へ、まゐらする其時の、傅には省きたり。是は汝の知らざる事、追つてゆる〳〵物語らん。まづ供せよ」ト門内へ、引連れ入らせ給ひけり。

藤の方はかの國助が、末の娘の薄雪を、義植に送らんと、かしづき騒ぎ給ひしが、磯菜が事の始末を聞き、薄雪は紫の、出世を嫉む梓の子なり、殊にはまた國助も、紲へ貢の怠りし、罪を咎め給はねど、快からず光氏の、思さん事も計り難く、兎角につけて斯う〳〵とは、言出でかねて光氏が、かの薄雪を見知らぬを、幸ひとしておはせし時も、側に在りしが其事は、まづ包置き快く、磯菜の事を受合ひたまひ、光氏が送越すも、待たで迎ひの人を遣り、磯菜を呼びて見たまふに、實に人柄のうちあがり、國司の娘にも、劣るまじう年もはや、おとなしき程なりければ、いと嬉しくて朝な夕な、傍に侍らせ、義植君へ宮仕の、事ども聞え給ひしが、

き事やと彼も言ひつ。さりながらまづ孰とも、御心次第に定めん」ト、聞え給へば藤の方、「いと能く御心つかれたり、義尙君の思さん程も、憚なきにはあらざれど、知らず顏にて差上げたまへ。富世の前もまだ幼く、飾事遊びの樣なれば、御側に少しは物心、知れる人の侍るも、御慰めには好かるべし。義尙公の不圖御目に、とまりし故に御使を、立てられたるもひと花にて、父君うせさせ給ひてより、經を讀み佛を拜み、行ひがちにて在すれば、言葉を背きて義植に、磯菜を送りしなんどいふ、深き咎はよもあらじ」ト、心安げに宣ふにぞ、「さあらば磯菜に更科、十六宵、二人の女を差添へて、近くにこれへ送るべし。まづ御側に差置かれ、萬の事を敎へられ、其後に折を計り、義植公に差上げて、給はるべし」ト返すぐ、賴置きて暇を告げ、夕暮近く嵯峨へ歸り、門に入らんとする時に、不圖傍を顧れば、用ありげに乘物を、見懸けて這寄る武士のあり、何者なるかと目をとむるに、調太夫なりければ、駕籠を停めさせ近く呼寄せ、都はいよく治りて、山名の餘類曾てなし。さる故に須磨を引取り、歸來たれと告遣りしは、夏の央とおぼえしが、何として斯く暇取りし」ト、仰にいよく畏まり、「命に隨ひ須磨を立出で、直樣上る筈の處、若し明石より申上げたき、事どもあらば好き序と、かの這渡る程なれば、宗入館へ赴きて、その由申入れしかば、入道大きに喜びて、何か都の物語、思はず日を

元女、嵯峨へ來りて密に告げつ。因りて思ふに彼が母、阿古木が持ちし勅筆の、短册を手に入れんため、我に心を懸けしを幸ひ、わりなき樣にもてなして、かの短册を得て後は、次第々々に遠ざかり、遂に磯菜が事に託け、伊勢へ下して置きつれば、その恨の心解けず、阿古木は果敢なく失せたるが、そのいまはに臨みし時、くれ〴〵磯菜の事を頼めり。母はともあれ子は罪なく、殊には從姉違女なり、見捨つべき道理はなし。彼を守立て得させなば、草葉の蔭にてかの恨も、忘らんものと思ふから、まづ其儘に住ませ置き、伊勢より歸りし其後は、まだ一度も逢はざれど、文を送りてその才を、試たるがまだ二十に、足らはぬ年に比べては、恥かしからぬ返の文體、館の女のまじらひを、せさせたりとも恥かしからず。されば此度兄上の、望を幸ひ差上げん、とは思へども難儀なり、後日若しや遊女の生みし、娘なりといふ事を、富徽の前の聞き給はゞ、素性賤き者なるを、夫ともいはず進らせたる、罪はおのれが身に及ばん。とありて今更斯う〳〵と、聞上げなば光氏が、好心にて磯菜を惜む。僞なりと思されんか。つくづく思ひ廻らすに、かの水原より傳へし仰を、聞違へたる體にもてなし、この御所へ奉らん。義植公の御年には、七ツか八ツかまさりし磯菜、御伽にし給ふのみならば、更に障はあるべからず。紫にも此事を、申聞かせたりしかば、室町へ上りし時の、好き物語の相手なり、嬉し

恥しく、まづ數多ある娘どもを、呼寄せて見給ふに、その末の子の薄雪と、呼べるが顏もいと淸く、とりまはしも賢げに、まだわらはべの姿殘り、いと愛らしく義植と、同じ程なる年なれば、せめてはこの薄雪を、わが傍に据置きて、ゆく〳〵は義植の、側室となさんと遊佐夫婦に、この由を聞え給ひ、呼迎へられたるは、今年文月のはじめなりし。秋暮れ冬もなかばごろ、ある日光氏申したき、事のありとて渡り給へり。この折に藤の方は、小春の空のうらゝかなる、庭の景色を眺めんとて、人丸の社のこなたに、さる年造り設けられし、茶屋に遊びて在しければ、そのよし光氏聞き給ひ、さあらばとて司を引連れ、彼所に行きてまめやかに、機嫌を伺ひ茶を打飮み、この所は築山の、崖造りにてありければ、泉水を見下しながら、何か心に打案じ、暫しは物も宣はず。藤の方は髮を削ぎ、旣に姿をかへ給ひ、光氏も年加はり、心の靜まる樣なれば、近頃は杉生も、疑解けて中を隔てず。されば今は心安く、藤の方は光氏の、物おもはしき氣色を悟り、傍の人をおほかた遠ざけ、「何事ありての御出か、早く樣子を聞かせて」ト、言ふに光氏近々と、前に進みて聲を潛め、阿古木が事の始終を、落もなく聞え給ひ、「さてそれにつき密に申上げたき仔細はかの磯菜を、桂川にて義尙公、圖らずも見そめられ、召仕はれたき其由を、富徽の前も聞召され、水原が使に來りしと、彼所へ某附置きし、千鳥といへる腰

ばす樣に、申した由を折を見合せ、仰上げられ下されて」ト、なほこまぐ〵と言置きて、立歸りたりければ、千鳥は暫し打案じ、「思懸なき御所の御使、磯菜樣に申したとて、又例の顔打振め、御答はなされまい。光氏君へというた處が、御忌にて籠らせ給ひし、其後は御出もなし。私は今から嵯峨へ上り、御目通の上この樣子を、申上げて置かう程に、磯菜樣が御尋ねなら、宜い樣に更科どの、申して置いて下され」ト、いそがはしげに出行きけり。

作者まうす　富徽の前藤の方等は院號にかへて書くべき例なれども、今までおぼえ給ひし名を新になさばお子樣方の、かへつて讀みにくうおぼさんかと其儘に記す。

東山のあき御殿へ、義尙公富徽の前、水無月はじめに移らせられ、藤の方は音川の、屋敷よりして室町の、むかし住馴れ給ひたる、館に移り給ひしが、今は御子の義植公、家を治め給ふにぞ、誰に憚る事もなく、紫の上もたび〳〵、嵯峨より此所へ渡らせられ、國助も出仕の歸りは、いつとても罷出で、是より願ひて國助の、妻の梓も御伽と、なづけてしば〳〵御前に出で、浮世語のその序に、かの繼娘の紫が、嵯峨の館にときめくを、いと羨しくわが生みし、娘の運の拙きことを、夫とはなしに物によそへ、ほのめかしたりければ、藤の方は其心を、あはれと思し且は又、姪ならざるその故に、胤はひとつの國助が、ほかの娘は捨置くと、思はれんも

れてやう〳〵と、桂川へ忍びの御遊山、その途すがら此方の姫上、磯菜樣を御覽遊ばし、御心に叶ひしや、あの女を側仕に、參らせよとある密の仰、それ故御跡に見え隱れ、人をつけて窺はするに、久遠寺へ御廟參、これ幸ひとお歸りの、其後に住僧に、御名をはじめ萬の事、委しく尋ねさせたる處、なみ〳〵ならぬ御方の、忘形見に在するが、御親なども今はなく、光氏君の後見を、遊ばして此所に、御住ひとの物語、義尙公聞召され、弟君へはうちつけに、斯う〳〵とは宣ひかね、包みては在すれど、いつくしかりし御形、忘れ難う思召すか、折に觸れての御噂。富徽の前も其事を、聞召されて私を、今日御使は極密々。御前方まで伺ひまするは、光氏君の御手懸けられしと、いふ樣な事ではないか。若し夫なれば取繕ひ、義尙公には又申上げ樣も御座りませう、包まず御話し遊ばして」ト、聞いて千鳥は會釋なし、「仰の通り光氏君、萬の事を引受け給ひ、去年までは折々に、みづから渡らせ給ひしかど、磯菜樣は一度も、御對面も遊ばされず。されども君は御懇に、はや年頃にもなりし磯菜、たとへば人が心懸け、言寄るとてもみだらな事の、無い樣に氣を付けよとて、私どもへ御教訓。實の御子の御取扱ひ、御手懸けられしといふ樣な、事はゆめ〳〵なけれども、御宮仕のその程は」ト言ひかけて更科と、顏見合すれば水原は點き、「それなればまづ何となく、水原が參りて磯菜樣を、御所へ御上げ遊

出來、更に音づれ給はねば、いとゞ寂しく心細き、事のみまさるに賴なく、次第〳〵に暇を乞ひ、おほかた此家を散行きて、僅に十六宵、更級、千鳥、その外に二三人、こゝろばせ有る者どものみ、やう〳〵に殘り留り、阿古木の佛事を懇に、せさせ給へる光氏の、有難き御志を、語合ひつゝ喜びて、なほまめやかに仕ふれども、斯く人少なになり行きし、折も折とて秋も暮れ、いとゞ寂しき冬の空、心のしめる故ならん、近くに琴を調ぶるは、耳にも入らず却つて遠き、野寺の鐘の聲々は、胸に響きて磯菜は兎角、袖の干る間はなかりけり。實にそれも道理なり、同じ親といふ中にも、倶に廓の憂き勤、はる〴〵伊勢へ下るにも、誘はれつゝ片時の、間も立離れざりし身が、冥途の旅には捨てられて、是より賴む木の下に、雨もろともにわが浮名の、漏りもやせんと光氏の、底の心を疑へば、其方にも身は任せ難く、さればとて外にたよる、人もなければさま〴〵に、思ひ煩ひ悲しさの、更に類ぞなかりける。斯くてある日の事なるが、表に乘物舁据ゑさせ、内より出づるは一人の老女、案内を乞ひて御附の、女中に對面したきよし、言入れて控ゆれば、何かは知らねど座敷へ通し、千鳥更科立出でて、何の御用と尋ぬるに、まづ彼の老女禮儀を述べ、「私事は水原と申し、久しく御所に仕ふる者、御忌解の其後にも、兎に角に義尙君、引籠りてのみ在するとて、富徽樣の御案じ遊ばし、御勤めなさ

に、參りて表に控へたり。雨降出でて風烈しう、空の氣色の物凄さ、更に春ともおもほえず。光氏も來あひ給ひ、むかしの事ども語出で、哀れなる事多けれど、廻らぬ筆に書續けんは、いといと難くて皆省きつ、されば殊に義正の、寵愛厚き藤の方、片時も傍を放ち給はず、この年頃東山に、住馴れし身にありければ、今は却つて昔川の、屋敷は旅の心地せられ、其夜は更に目も合はず、明し給ひけりとなん。

かゝる後は世の中に、今めかしき事もなく、打濕りて靜なり。光氏は世の定めに倍し、百日の喪に籠り、廟參の外他出せず、程なく忌は解けながら、猶深く身を愼み、忍び歩きは思ひ絶え、たゞ明石へ使を立て、父君かくれ給ひし事を、その當座に告げしのみ、その外へは文だにも、書交し給はねば、心もとなく其所此所に、案じ侘びつゝ人知れず、心を痛むる者多かり。それにつけてはかの磯菜が、腰元使の女まで、更に心の安からず、その故を如何にといふに、初の程は光氏君、親めきて磯菜を兎角、あつかひ給ふは人ぎきの、宜からん爲にてその恩に、懐きて磯菜が心も解けん、しかして後は光氏の、通ひ所と此所もなり、次第々々に賑しき、館とならんと思ひしには、うつてかはりて磯菜は兎角、物恥しつゝ光氏の、渡らせ給へば一間に隱れ、姿を見せしことも無し、斯くては君の思捨て、給ふならんと案ずるうちに、かゝる世の騷

ければ又こそとて、名殘惜しげに出で給ひぬ。飽かぬ程にてしを〳〵と、還らせ給ふを義正も、あはれと思し病の床より、つく〴〵見送り給ひけり。

富徽の前も參り給はん、催しはありながら、斯く藤の方御側に、添ひおはするに心おかれ、ためらひ給ふ其中に、さまで激しく惱み給ふ、體にもあらでかくれ給ひぬ。足を空に思ひ惑ふ、人人多かるその中に、藤の方光氏君、まして勝れて人心も、覺えぬまでに歎き沈み、七日々々の御わざなど、まめ〳〵しく執行ひ、給へるはさあるべき、道理ながら世の人の、哀と見奉りけり。

四十九日に當らせ給ふ、其日までは在すが如く、御座所を設け置き、皆打集ひて附從ひ、それ過ぎぬればちり〴〵に、出行くが此頃の、世の習慣にてありけるが、夢の間に七七日の、御法筵も過ぎしかば、皆他々へと出行きぬ。折しも空の打曇り、晴るゝ間のなき胸の中、藤の方はとりわけて、富徽の前の心をも、能く知り給へば此後に、住み憂き事の出來んかと、悲しき事限りなく、義正公の睦ましう、語り聞え給ひたる、御面影を忘れかね、館を離れ難けれど、斯くて何時まで在すべき、例ならざれば音川の、屋敷へ行かんと出で給ふ。御迎へには勝元自身

思ふ故、國司ともなさずして、嵯峨に住まはせ置きつるは、事有る時は義植の、力とさせん爲にてあり。必ずともにわが心、違へさせ給ふな」ト、なほ哀れなる御遺言も、多かりけれど人の知る、事にも有らねばおしあてに、その片端を記すだに、いとをこがましき事にこそ。義尚公はいと悲しう、「仰をいかで背くべき、御心に懸けたまはず、御養生こそ願はしけれ」ト、返す〳〵も宣へば、義正は打笑みて、「オヽ嬉し頼もしよ。最早此所には用のなし、疾く立戻り義植に、心を添へて室町の、館を守るが肝要ぞ」ト、宣ひ捨てて其後は、更に語もあらざれば、御心に逆はじと、急ぎ還らせ給ふにも、なほ御顏の目に殘り、跡に心のひかされて、夢路を辿る御心なるべし。

義植も今日倶にと、思召し給ひしが、騷がしきにより日をかへて、光氏君と渡り給へり。はや足利の世を治め、給ふ故にや御年の、程よりはおとなび給ひ、美しき御樣にて、今は離れて住み給へば、いと戀しさの積り〳〵、嬉しながらに窶れさせ、給へるが又悲しくて、見上げ給ひし御氣色、いと哀れなりければ、藤の方は涙に沈み、兎角の事も宣はず。義正も此體を見て、さま〴〵に心亂れ、思ふ事ども多けれど、氣を取直して萬の事を、義植に聞え知らせ、光氏にもなほ義植の、後見なして家を守り、世を治めさすべき事ども、かず〳〵宣ふ其中に、夜も更け

べしと、磯菜が眠さめて後、傳へよ」なんど言流し、本意なげに立歸り、給へる樣を腰元ども、見送りて吐息をつき、御腹を御立ち遊ばして、最早御出は有るまい」など、案ずるには引かへて、いとまめやかに懇に、猶音づれて物詣の、序なんどに差覗き、給へど磯菜は心を置き、ほのかに聲を聞かするさへ、たまさかなれば光氏も、せん方盡きて千鳥を招き、磯菜が心をうら問はんと、思す折節花の御所、若木に移るひゞきにて、暇なければ其儘に、磯菜の事は捨置きて、兎角する間に春に移りぬ。

［作者まうす］以下は榊の巻の中なる、桐壺帝崩御の條なり。應仁の亂は義正在世なるが故に、わざと前には書漏して、其事を玆に收む。

義正公は去年よりして、御心地例ならざりけるが、睦月になりてはいと重く在します。世の中惜み聞えぬ人なし。義尙も思し歎き、急ぎ東山へ渡りたまへり。義正は病疲れ、心地や弱くなりにけん、常よりも猶義植の、行末の事どもを、返す〴〵も聞えたまひ、さて次には光氏の、御身の上の事に移り、「我若し此世を去るとても、在りしに變らず光氏と、睦ましやかに隔なく、大事小事に關らず、何事をも後見と、思ひて語合ひたまへ。彼は年の程よりも、思慮ある生にあんなれば、足利の世を讓るとも、をさ〳〵憚あるまじう、必ず人に敬はるゝ、相ある者と

二十五編　上

亡きたまあられの其後にも、光氏たび〳〵文を通はせ、磯菜が返を取りて見るに、書誤らじと謹みて、書きたるなれば思ふ樣には、筆のまはらぬ樣ながら、自然と墨付うちあがり、文章氣高くくだ〳〵しき、ことを省きて言ふべき義理は、能く聞ゆるにその才の、自らに現れければ、行末の賴もしく、おのれ多くの子を持たで、淋しかりし慰めに、好き者得たりと思したまひ、折に人目を忍び、彼所へ渡らせ給へども、磯菜は母の思ひ過ぐして、言ひし事ども聞取りて、若し光氏の恥しき、事を宣ひ出でんかと、思ふ故にや何時とても、一間に隱れて對面せず、千鳥を初め光氏が、此所へ送りし腰元女、更科十六宵なんどいふ、浮世に慣れし者どもが、「是よりしては父君とも、賴みたまへる御方に、恥らひたまふ事はなし。斯くては御身の爲ならず」ト、さま〴〵に勸むれど、磯菜は更に聽入れず、皆々も慰めわび、光氏の前に出で、あからさまにも言ひ難く、「磯菜樣は此程より、御癪氣にてすや〳〵と、御寢りて在する」など、取繕へば光氏笑ひて、「阿古木が我に言ひ置きし、事どももあんなれば、是より後は隔なく、思はゞ嬉しかる




足利義尚忍歩行
桂川にて磯菜を見給ふ

偐紫田舎源氏第二十五編序

偐紫のなか〳〵に、およばぬ筆に寫し給も、いけぬ汀と近隣の、小女が歌ふも我身のうへに、よく相老の松の齡、幾萬代もかはらぬためし、鶴屋が梓に彫めて、をこがましくも九年、それは昔の志賀山風流、これも近江の石山に、綴りし源氏のおもかげにて、三ツイの香の圖は、殊更に因あり。偖是編は秋好む、中宮に比たる、磯菜を懸想て義尙が、妾にほしいとのぞまれて、水原がエイ〳〵六條へ、えつちらおつちらわたられても、其意に隨せず義植へ、緣をさだんの日を撰み、送る荷物は何々ぞ、瑠璃の手筥に珊瑚の櫛笥、玉をのべたる長持の、長物語に手を盡せど、仕立ばえせぬ田舎織も、錦と見なす御取立を、願うて鵜の眞似烏飛、天の岩戸の神樂月より、春の新板賣初て、とつぱひとへに打かゝり、つもり〳〵て是編は、第廿五の三番叟、菘の種蒔種彦が、ようがましくも彼歌の、詞をかりて、序めきたる事をこゝに記すになん。

且義植公はまだ幼く、ましましながら室町御所と、既に成らせ給ひければ、御臺所なくては叶はじと、とり〴〵評議ありけるが、赤松太郎高直は、續々に子數多あり、光氏常に羨ましき、事に思し給ひしかば、是こそは宜からめと、柏之助が次に生れし、初花と呼なす女子、清らかにして若將軍と、年も似合の程なるにぞ、祖父政則が養女にせさせ、藤の方の例に傚ひ、ある雲客の御胤と披露し、二葉の上死去の後、退で散らざる中垣呉竹、その外數多仕へ馴れたる、女を添へて奉り、初花といふ名を改め、富徽の前の一字をかたどり、富世の前と申しけるが、まだ稚なくましませば、義植公は好き遊び、相手を得たりと思したまひ、いと睦じく抑竝びて、在しましたる御有樣、内裏雛に異ならず、目出度見えさせ給ひけり。めでたし〳〵。

人籠りて居たまふ時は、久しく此世に在らんとも、思し給はず萬につけ、心細げの御有樣は、側目にもしろければ、龍田の前を初めとして、御側に侍る人々、心を痛め居たりしが、義尙はいよいよ病の、烈しくなりし故ならん、更に世を思ひ離れ、かねての心構の如く、弟春若に家を讓り、わが嫡子の香壽丸は、又それが世嗣とせんと、その催俄なり。富徽の前は驚きあわて、若き身といひ殊には又、さまでに重き病にあらず、本復近きに有るべしと、藤の方の生み給ひし、春若丸に家を讓るを、快からず思はれけん、止め給へど常々の、孝心厚きに引かへて、母の詞を義尙用ひず、同じ構の內ながら、引離れて住まはんと、急に別殿を營みて、春若丸を改めて、義植と名付けけるが、山名滅びて執權は、勝元のみにて有りければ、幼き者には故實を知る、傅役なくてはあるべからずと、赤松左衞門政則に、執權たるべき仰あり。政則は打驚き、「若き時だに賢き事も、侍らざりし不肖の身、いよ〳〵老の積り添ひ、かゝる大役思ひも寄らず」ト、承引く氣色なかりしかば、光氏も詞を添へ、唐土にては世の亂れを、厭ひて深き山に入り、跡を隱しゝ人だにも、治まれる世に再び出で、白髮も恥ぢず仕へしを、實の聖といひ傳ふ。御身は未だ仕を辭したる、身にもあらぬに折角の、仰を背かば我儘と、却つて人に誹られん。謙退も折に依れ」ト、言諭し給ふにぞ、政則は爭ひ負け、其年六十三にして、音川の相役たり。

につく〴〵と、眺めながらに御返は、妾には聞えにくし、誰ぞ書きてよと見廻す、此方に侍る
千鳥が差出で、「光氏君が私へ、此頃御意遊ばすは、若しや磯菜をわが側に、使ふ事もあらう
かと、阿古木も案じて遺言する、又世の人も疑ひて、居るその處を引違へ、心清く彼を守立て、
ゆく〳〵は室町御所へ、差上げんと思うて居る、手はどうぢや、琴は彈くかと、御懇に御尋。
それゆゑ度々御音信、御代筆ばかりでは、あなたに本意なく思されん。今日は是非々々御直
に」ト、そゝのかし聞ゆれば、倶に附添ふ女子ども、「千鳥が申上げし通り、斯くまで厚き御志、
いと忝なき事なり」ト、料紙硯を取來り、勸められてせん方なく、母の忌中のうちなれば、
華やかならぬ芳しき、紙を取上げ打案じ、

　消えば消えよわが身それとも知らぬよに

濃きと薄きと墨付を、書きまぎらしておもはゆげに、傍に差置けば、千鳥は巻いて文箱に納め、
御使にぞ渡しける。

室町將軍義尙公、御眼の惱は今年となり、いよ〳〵さわやぎ給ひながら、兎に角に御心地は、
常の樣に在しまさず、打臥したまふ程にもあらねば、光氏君を常に召しあり、參りたまひて世
の中の、事なんど隔なく、語ひたまふ其中は、義尙公の御機嫌も、いと麗しく見えたまへど、一

が聞えあげければ、その望に任せられ、立歸らせ給ひけるが、正しく從姉にあんなれば、三日の間は引籠り、それとはなしに精進にて、經など打誦み居給ひけり。

斯くて後に光氏の、つく〴〵と思ふ樣、それ君子は其罪を、惡むのみにて其人を、惡まずといふ本文あり。心執ねく頑しき、阿古木が性にてありしかど、世に亡き人は殊更に、憎むべき謂もなく、其子には猶罪もなし、千鳥がいひしに違ひなく、磯菜は眞の孝子にて、才も勝れたらんには、取立てて猶よき人に、なさんと思してかの住居へ、まづ召仕ふ女どもを、多く送りて今までよりも、賑しくなし給ひ、その才を試んと、文など送り給へども、いと羞しとて腰元の、女に返事を書かせければ、光氏は心いられ、さきつ年朝霧に、初めて筆を執らせしも、千鳥が兎角囀りし、故にてあれば彼こそ宜けれと、密に招きて斯う〳〵と、事の由をさゝやき置き、雪霙搔亂れ、風凄じく荒るゝ日に、磯菜へ又使あり、

歸り來やかひなき人のたま霰

折にあひたる空色の、打曇りたる樣なる紙に、まだうらわかき人の目に、とゞまるばかりに心を用ひ、御手の樣も常とは變り、いと安らかに書きたまへり。磯菜は母に別れし悲しさ、忘るるとにはあらざれど、やう〳〵に此頃は、少し心も靜まりし、折からなれば御文を、目もあや

の名殘と思ふ折、君の渡らせ給へるは、實に深き緣なりと、思ひ取りて少しなりと、磯菜の事を聞えしに、いと賴もしき仰を受け、心弛みし故ならん、ありしより猶身も弱り、物聞ゆるもむづかし」ト、言ふのもいとゞ苦しげなれば、光氏は立上り、「おのれ齡は積みぬれど、たゞ子は二人あるのみにて、夫さへ一人はいと遠く、隔てて住めば淋しきに、慰め草を得たりしと、磯菜にも能く我心を、言ひ知らせ給へ」など、聞え置きて歸り給ひぬ。

それより屢〻人をして、訪ひ給ひしが七八日、ありて阿古木は失せにけり。又他には賴もしき、人も無ければ萬の事、光氏が取賄ひ、それ〴〵に言付けて、まづ彼所に人を遣り、おのれもある夜密に行き、まづ磯菜が愁傷を、察し入る由言入れさせ、樣子を窺ひ見たまふに、さまでに此所は廣からぬ、住居なれども奧まりたる、一間に磯菜は引籠り、泣くづほれたる傍へ、腰元女が差寄つて、光氏君の御出と、仰の趣傳へければ、「たゞ何事も覺えずと、申してたべ」ト顏をも得上げず。光氏は之を聞き、世に亡母の某へ、言殘したる事もあり、されば今より隔なく、思ひ給はゞ嬉しくなん」ト、聞えたまひて人々を、御前に召集め、まづ定まりし野邊送の、事は更なり後々の、事まで細に命じ給ひ、さて阿古木の遺骸は、桂川の邊なる、久遠寺に母淵浪の、石塔のありければ、その傍にかくしくれよと、豫ての願を千鳥が聞置き、しかじ

介抱は、私どもが如何様に、心を盡して仕へても、彼方には及びもない。いづれへ御縁が定るとも、御行末は榮えたまひ、目出たき御身になりたまはんと、とり〴〵申して居ります」ト、物語るうち日は暮れぬ。外の方は暗うなり、内は燈火ほのかにて、かの葭屛風より透徹るを、磯菜も若しや居るやらんと、光氏やをら進み寄り、つら〴〵透し見給ふに、かの幽なる燈火に、顏を背けし阿古木の樣、いとをかしげなる黑髮を、華やかに削ぎたるが、繪に描きたらん樣に見え、美しきが猶あはれなり。後の方に寄居たるぞ、かの磯菜ならんかし、頰杖ついて物悲しと、おぼえたる樣なるが、何となう淸らかにて、髮のかゝり衣紋つき、むかしの禿姿に引かへ、いと嬋妍に氣高きものから、さすが多くの人馴れし、化粧もしろく愛敬づき、親は莟と言ひしかど、はや盛ならんと見ゆ。これより我子に等しき娘と、床しう思せどかの阿古木が、思ひ過して云ひたる事の、心に浮みて詞も懸けず、靜に坐して居給ふ中に、惱烈しくなりたりけん、阿古木はしば〴〵吐息を吐き、「このいと苦しき有樣を、見せ奉るも恐多し。はや〴〵還らせ給へ」とて、磯菜に掻伏せられたりけり。光氏は猶立ちもやらず、「たま〴〵來りしその效に、快しといふならば、なんぼう嬉しかるべきを、心苦しき事を聞く。いかなる心地するやらん」ト、覗き給ふ氣色なれば、阿古木は夜著を引被ぎ、「いと怖しき姿ぞや。亂れ心地に今は早、此世

も、まづ母親に離れぬるは、いとあはれなるものなるを、ましてや是は此後に、力と頼むは人
人の、心を惱し給ひし君。そのかた〴〵が磯菜の事を、聞き給ひなば我知らぬ、怨も受けん彼
方此方へ、心のおかるゝ事もあらん。まことの御子と思召し、情をかけて其方の、情はかけて
給はるな。わが身の上をつく〴〵と、思ふに女といふものは、身に應ぜざる御方と、緣を結べ
ばそれよりして、思ひの外の物思ひを、添へて悲しき事のあり。返す〴〵もあだ〳〵しき、事
は離れて後見を、して給はれ」ト心安う、思ひし樣にて苦しき中にも、笑ひを含み言ひければ、
光氏却つて形を正し、「我は愚の生ながら、年長けたれば道をも知れり。むかし廓に遊びたる、
そのすき心のまだありと、思ひて言ふこそ恨なれ。よし〳〵遂にはわが誠も、おのづから現る
べし、心長く見たまへ」ト、不興氣なれば千鳥は差寄り、「磯菜樣を久しぶりで、あなたが御覽な
されたら、御心が變らうかと、阿古木樣があの樣に、御苦勞なさるも御道理。私が是へ上り、
驚いたのは磯菜樣、はや物々しくならせられ、その美しさ淸らかさ、御噂ばかりでまだ嵯峨の、
內君樣へは御目見を、致した事はなけれども、恐らく夫にも劣るまいと、思はるゝ御人柄。阿
古木樣の只今も、仰の通に御素性、正しき方の御胤と、御教訓ありし故か、お行儀正しく御手
は素より、御繪までを能く遊され、その上に御孝行、お腹を摩り御足をひねり、晝夜御側の御

ず、「世を黒髪と諸共に、思ひきり給ひし由。など斯くまで心弱き、まだ若き身の養生を、加へて早く本復あれ。磯菜は不便と思さずや」ト、宣ふ聲も打濕み、實に思ひ入りし樣に、もてなし給へば女には、似氣なく猛き心なりしも、久しき病によわ〳〵と、なり行く故にや實と聞なし、「斯くまで心に懸け給ふ、とは知らずして此頃中、更に音づれ給はぬを、怨みし事の愚さよ」ト、萬哀れに思ひしみ、いと苦しげに、脇息に、押凭りて此方に向ひ、「色香も失せて散りて行く、身は芥ともならばなれ、殘す莟が心の障、他に頼まん人もなし、恐れ多き事ながら、俄に背丈の伸びたる娘を、擧け給ひし御心に、なりて見捨てて給はるな。世にも人にも憎まれて、あるに詮なき身ながらも、今暫くは世に生存へ、せめて莟の綻びて、唉出づるのを見んものと、思ひし事も夢見草、親木は霜に枯れて行く、心を推し給はれ」ト、消入りつゝぞ泣きにける。光氏さすがに胸潰れ、「其事なくとも磯菜は血筋、見捨つべき謂はなし。ましてや御身の頼と云ひ、わが心の及ばん限りは、何事をも後見せん、心にな懸けたまひそ」など聞えたまへば打點き、「此子の父の前齋を、兄君なりとさいつ年、仰ありしは妾が心を、安めん爲の僞と、知れどもそれを幸ひに、旦暮磯菜に打向ひ、父も氏ある御方ぞと、身を謹みてかりそめにも、賤しき事な見習ひそと、敎へ諭すを彼も聞入れ、蓮葉な事は更になし。まことや後に打頼む、父親のある者さへ





心にとめ、おぼえて居る程靜まりし、村荻が氣質にあらず。殊に此所は逢阪山、遙に隔ちし野の宮の」ト宣ひかくる折も折、京の方より舁來る乘物、側に下させ立出る村荻。母の迎へに來りしかと、光氏見れども知らず顏、つくりてそこ〳〵駕籠に打乘り、「急ぎ參れ」ト供を急き立て、石山さしてぞおはしける。

さる頃よりして阿古木の住める、六條の假家は、はる〴〵と田面を見渡し、物寂しき樣なれど、三筋町へ近ければ、嬖子などいふ媚かしき、女の集ひ所にて、隣には琴を彈き、向ひには鼓を調ぶ、それらを聞いて憂さを晴し、且光氏の心をつけ、送越したまひたる、千鳥はむかしの片貝にて、久しく仕馴れたる者、心安く打語ひ、磯菜は稀なる孝子にて、畫を能く描くに心を慰め、日を送りしが阿古木は俄に、煩重くなり行きて、此世に久しくあるべきとも、思はざるにや尼になりぬ。光氏は聞き給ひ、黃昏が最期の折、二葉が惱みし時といひ、ふたゝび三たび怪しげなる、事を見しより疎しく、伊勢へ下し今都へ、立歸りても音づれず、過せしかども叔母渦浪の、形見と見るは彼のみなるを、逢はで果てなば口惜しからんと、驚きながら渡り給へり。夕暮なれどはや閉したる、戸を敲いて案內を乞はせ、しか〳〵と宣はすれば、千鳥は急ぎ出迎へ、病の床の見苦しきを、隱さむとてか葭屏風、引廻らして隔とし、その枕近き程に、請じ申せば光氏は、未だ著座もするやせ

はざれど、我は心にいつとなく、かの方違の夜の事さへも、昨日今日の心地して、しのばしき事いと多し。その假寢には一向に、村荻なりと思ひし故、すき〳〵しげに憎まるゝ、事をも聞え續けしが、花守ありと知りてより、みだりに手折らん心はなし。思捨てざる印とは、たゞ一時の戯なり。喜代之助を打頼み、御身を伊豫國よりして、呼上せたる其時は、親しく語ひ、早百合と詐り、人目の多き赤松の、館へさへも來りしが、むかしにかへりて蛻のから駕籠、同じ樣なるすさみ事、すべきと我を疑ひてか」ト少し怨みて宣へば、空衣は面をあかめ、「仰の通り阿古木樣の、事については御側近く、侍りて仰を受け、又憚りをもかへりみず、直に聞えあげたる事の、なきにもあらねど其頃は、村荻山名の家に住み、かね〳〵君が御約束の、ありし事を露知らねば、心のおかれざりしかど、今の程は野の宮に、戻りて折々渡らせ給ふ、御噂も聞き侍る。むかし蛻のその夜の事、もし村荻がそら寢にて、聞いて居たなら口へ出して、言ひこそはせね疑ひの、晴れざる上に御詞を、親しく妾へ懸けらるゝを、彼もし見もし聞きもせば、ゆめ〳〵覺なき事に、義理ある娘の恨を受くるも、今はまして恥しう、此所にて御目見致したは、夢の樣におぼえながら、駕籠に隱れて侍りし」ト言ふに光氏いよ〳〵笑ひ、「遠慮なすにも程のあり、君吉にしるべさせ、碁を打つ樣を見たりしは、我前髮を拂ひし當座、むかしの事を

再び出立たず。光氏これを能く知れば、快からずこの年頃、思しけれども色にも出さず、むかしの様にこそあらね、なほも親しき家人の、うちに末には數入れ、吉名は幼げなりとてか、君一郎とぞ召されける。此時はまづ打絶えて、逢ひ給はざる事どもを、言流して後「さて汝は、姉の嫁したる其後に、仁木の家に來りしなれば、喜代之助が勘當せし、良淸にはまだ一度も、面會なしたる事はあるまじ。彼は元より仁義の道を、知る者ながら唯遊里に、通ひし若氣の過失を、物固き喜代之助が、見るに忍びず追放てど、さまでの罪は無き者なり。其後密に我に仕へ、久しく忠義怠らねば、おのれ詞を添へし處、喜代之助が心も解け、打連立ちて關を越えぬ。汝が爲には甥とも言はん、縁にはあれど此後は、兄とも彼を賴むべし。まづ早く行きて逢へ」ト、是も追立て遣りたまひ、駕籠の簾に耳を寄せ、内の樣子を窺ふに、人氣なければ訝しと、戶を引開けて見たまへば、いつ辷り出でたりけん、空衣はあらずして、散過ぎたる紅葉の枝に、鼻紙を結付け、今の脇とおぼしくて、

歎きの中を關の秋風

懷の紅筆にて、しどけなく書捨てたり。心惡しとそこら邊を、見廻したまへば腰元女の、後に隱れて蹲居たり。光氏は打笑ひ、「今更に初々しき、その振舞こそ心得ね。年頃跡絕えて逢

皆々に暇を賜ひ、駕籠にも乗らず色づく梢を、打眺めつゝかの木蔭に、舁下したる女駕籠、數ある中に珍らしき、純子にて張りたるが、特に目立ちて空衣の、乗りたるも著るければ、靜に歩み寄りたまひ、「まことや旅の送迎は、關を限りて行く習慣、唐土にさへ有るとやらん。されば今日の關迎へ、思捨てざる印なるを、此所に隱れて逢ひもせず、わがもの顔の關守を、さも目ざましく羨しと、思ひし故に良清と、ともに先へ立たせたり。都へ戻る日をりもをり、此所で逢ひしは不思議の縁。とは思はずや」ト乗物の、屋根に凭れて、

かひなしや初潮ならぬ海近み

と打戯れて宣ふを、少し後れて來懸りし、君吉が不圖認め、今はおぼし忘れぬべきを、心長くもおはするかな、いと忝なき事なるを、なぜ御請を姉上は、聞えあげずおしだまり、おはするならんと思ひながら、御前に跪き、「去る年須磨へ下りし時、いと有難き御懇の、上意を數々受けながら、其後罷下らざる、罪は今更申開かん、詞も之なく候」ト、恐入りてぞ申しける。抑この君吉は、むかし童なりし頃、光氏深く憐みを、懸け給ひしかば其身も誠の、心を盡して仕へまゐらせ、須磨へ下りし其時も、阿古木への御返を、持歸りて又引返し、君に附添ひまゐらせん、心なりしが富徽の前、あまりなるまで光氏君を、憎ませたまふ世の騷を、恐れて

たまへば此方はいよ〳〵、恐入りて額を砂に、摺付け〳〵手をつかへ、「何をか先に聞えあげん、まづ健かに渡らせたまひ、此上の喜びや候べき」ト、言出づればいと機嫌よく、「汝も無事で歸洛めでたし。今までの辛苦は追つて、ゆる〳〵謝すべし。餘の事は差措いて、まづ言ふべきは其方の嫡子、川次郎が敵に與し、事あらはれて身退き、淀川に落ちて失せたり。さすれば家を嗣ぐ子あるまじ。よつて須磨の供に下り、いと能く仕へし者の中、とりわけて志、神妙なるを取立てて、汝が養子にせさせんと、其事はまだ其方の許へ、言遣らざれども野の宮の、屋敷に此程住ませて置きつ。わが仲立を否とは言ふまじ。途中ながら初めての、親子の對面なすべし」ト、良清を召寄せて、逢はせたまへば有難涙、押拭ひ〳〵、「赤松左衛門政則より、事細やかに申越し、疾くに承知仕る。憎きは川次郎、生の子よりも勞りし、わが恩を打忘れ、君に刃向ふ大罪人。その御咎はさまでになく、遊里に戯れ酒に亂れ、我儘に身を持なしたる、良清が心を改め、僅に君へ仕へしを、賞したまはる寛仁大度。彼に家だに嗣がせなば、死すとも思置く事なし。わが君の洪恩を、おろそかに思ひそ」ト、良清を誡めて、倶に御前に平伏しけり。光氏は打笑ひ、「夫にて我も安堵せり。久しぶりなる面會に、物語る事聞く事あらん、良清は石山へ、供に及ばず父と連立ち、是より都へ歸るべし。その外の仁木の侍、心急かんにはや行け」ト、

闌けぬ。大津打出の濱なんど、打過ぐる頃君ははや、粟田山越えたまふとて、御先を拂ふ人、道去りあへず聞えぬれば、仁木方の侍は、馬乘物より皆下立ち、女どもは駕籠のまゝ、此所彼所の杉の下に、舁下させて木隱れに、おの〳〵潜み遣過し、奉らんと控へたり。下づかへの女なんどは、先立ちて遣りたれど、なほ腰元に親しく仕ふ、女も數多あんなれば、鋲打乘物十挺ばかり、簾を洩るゝ衣の色合、田舍めかず今樣なるは、かの空衣が風流を、見習ひし故なるべし。

世も治りて遊びがてらの、御願解きにおはすれば、數も知らざる御先の、者さへ心のどやかに、祭なんどを見る如く、皆駕籠に目をとゞめたり。此日は九月晦日なれば、紅葉の色々扱交ぜて、はや霜枯の草のむら〳〵、花咲く頃よりをかしう見ゆ。石山までは遠からぬ、道にはあれど御供は、皆一樣の旅裝、關屋をざと外れ出づるを、駕籠の内より空衣を、眺遣りて人知れず、むかしの事ども忘れねば、思ひかへして哀れげに、

清水よりせきとめがたき涙哉

斯くとは知らせ給ふまじと、心に思ひいと悲し。光氏は乘物の、簾下して行過ぎんと、したまひしが喜代之助が、控へたるを御覽じて、下立ち

二十四編　下

蟬の蛻の空衣は、去る年に阿古木を誘ひ、その名に因む伊勢の國へ、夫とも〴〵下りて後、君も都を引離れ、須磨の浦邊の御旅居も、遙に聞きて人知らず、思ふ事のなきにしも、あらねど聞えん便もなし。一度は弟の君吉、阿古木の使に下りしが、彼が思はん事を恥ぢ、その時とても聊の、傳へだになく徒に、年月を經る鈴鹿山、吹越す風の人ならば、言傳遣らんと歎つのみ。さればかの光氏君の、須磨や明石の御旅寢は、いつまでと限りたる、事にもあらねど去年の秋、都に還り住みたまひ、喜代之助にも上京せよと、御使を賜りつ。既に阿古木は病に因り、先立ちて上りしかば、空衣夫婦は心安う、ゆるやかに仕度を整へ、秋の末にぞ立出でける。草津に宿り逢坂の、關入る日しも光氏君の、石山の觀音へ、御願解きに詣でたまふ。喜代之助が宿へも、この事早く聞えければ、老の心の忙しなく、さらば必ず道の程も、騷しかりなん御通行の、妨げにならざるやうと、まだ曉より急ぎけれど、空衣が召仕ふ、女ども多ければ、やつれ姿をそのまゝに、都へ入らんも恥しう、髮をとりあげ化粧しつ、兎角障取り日は

を伺はん」ト、急ぎ御前を下りけり。

磯菜の事を、某に頼置き、その上死なん願にて、喜代之助よりまづ彼が、磯菜を連れて先に上りぬ。よりて二人は野の宮の、仁木の屋敷へまづ假に、住ませつれども彼所には、喜代之助が男女の子、良清村荻あんなれば、磯菜とふたり心安く、暮したしとの願なるを、いかにしてかは其方もむかし、奉公したる三筋町の、二見屋の主が聞付け、勤せし頃德分を、多く己に得させたる、阿古木に恩をおくらんと、廓を離れて遠からぬ、六條の古家を、いと淸らかに繕ひて、此頃よりそれに住ませぬ。萬の賄ひ召仕ふ、男女の事は某が、心をつけて送り遣し、變らぬ樣に何事も、訪ひ聞え情は盡せど、其身は鞍馬の麓なる、野中の里に在りながら、魂ははる〴〵赤松の、館へ通ひし有樣を、思ひ出づるも恐ろしく、自ら行きたる事はなし。病に臥して苦しまば、例の執ねき心や起らん。御身は久しく仕馴れ、阿古木の心を知れる者、今上りしこそ幸ひなれ、彼所に赴き懇に、介抱なして阿古木の心を、和らぐ樣にしたまへよ。さりがたき事ありて、千鳥は此所へ留置くと、我より明石へ言ひやらん。磯菜は利發の生れにて、顏も淸らにありければ、はや此程は丈も伸び、娘づくりしたらんと、是のみ床しく思ふ」など、細やかに宣へば、千鳥は驚顏に現れ、「阿古木樣は御病氣とや、御心細う思すべし。むかしお世話を懸けたる御方、此方より願うてなりと、御看病に參るが道、殊には仰是より直に、まづ御樣子

もろとも、かゝる田舍に埋れて、過させんのも口惜しゝ、御身を何卒貴人高位に、添はせんと思ひたる、わが願のなか〳〵に、叶ひし故にむかしにまさる、心盡しもするなり」ト、父の歎を見るに悲しう、御返は此方よりと、まづ御使は都へ戻し、腰元千鳥が今一度、都へ上りて打絶えたる、それやかれやの知人に、逢ひたき由を折々に、願ひし事のあんなれば、此使には彼こそ宜けれと、御返は事短く、田舍者は何事も、不束なれば都の人に、立交らんは恥しう、迎へを下し給ふとも、出立ち難しと書認め、千鳥に人を差添へて、都へ上せけりとなん。

ある日光氏室町より、嵯峨の館に立戻り、打寛がんとする時に、言の葉御前に手を支へ、「明石よりの御使に、千鳥と申す御腰元、罷上りて御目見を、願ひたしと申入れ、先程より御歸を、あれに待ちて侍る」ト、言ふに光氏「珍らしや、その女此方へ」ト、人無き座敷へ呼入るゝ。千鳥も久しく宗入の、館に仕馴れたれば、行儀を見習ひ詞も正しく、機嫌を伺ひ朝霧の、返の文を差上ぐる。光氏取つてさらりと讀み、心に何と思ひけん、たゞ打笑みて側に置き、「千鳥近う」ト膝元へ、招寄せて聲打潜め、「阿古木は磯菜の事に託け、仁木喜代之助夫婦もろとも、伊勢國度會の、陣屋に遣し置きつるが、はや彼の陣屋に喜代之助、用無き間さいつ頃、迎への人を下しゝ處、春の頃より阿古木は病氣、日に添ひて惱まさり、本復すべくも覺えねば、都へ戻りて

袖濡れぬ田簑の島の名には似ず
と人知れず呟かれ、立歸る途すがらも、興ある遊に人々は、のゝしり合へど御心には、猶かの船を忘れやらず、さま〴〵思ひ續くる折節、此邊の遊女ども、打群れ來れば若やかなる、御供の士は、目をとゞむれど光氏は、そのむかし六條の、廓に遊びて誠少き、遊女の情を知るからに、目にも懸けず心もとゞめず。とは知らずして遊女は、能き客なりと附從ひ、面々思ひつかれんと、なまめきあひて色つくるを、猶疎ましく思しけり。

朝霧は光氏を、遣過して又船を、住吉に漕戻させ、その次の日もよき日なれば、社に神樂を奉り、身の程に應じたる、願ども數々神にまうし、追風嬉しく十分に、帆を引上げて明石へ歸り、ありし次第を父母に聞え、又なか〳〵に物思ひ、添はりて旦暮口惜しき、我身の程を歎きつゝ、今や京に光氏君の、おはし著き給ふならんと、思ふ日數もまだ經ざるに、嵯峨よりの御使あり、遠からぬうち迎へんと、御文に書き給ひけり。數ならぬ身を斯くまでに、いと賴もしう宣ふは、嬉しき事にはありながら、住馴れたりし此島を、いざとて遠く漕離れ、身は浮雲の寄邊なく、心細き事やあらんと、心の中に朝霧が、さま〴〵思ひ煩へば、入道も御文を拜し、「御身を都へ離遣らば、心もとなく案じわび、必定己は病を發し、終には命に關るべし。さればとて姬君

ければ、「今はた同じ難波なる」ト、思はず打誦し給へるを、御駕籠の許近き、惟吉が承り、みをつくしても姫君に、逢はまく思し給へるならんと、懐に持ちたりける、軸短き矢立の筆を、御駕籠を止むる所にて、奉れば光氏も、彼わが心を早く悟り、矢立を與へし用意をかしと、おもひながら鼻紙に、

めぐりあふえにし深しな澪標

と書いて賜へれば、惟吉は受取りまゐらせ、御側に居合はせし、浪内は下部ながら、彼所の案内をよく知るゆゑ、彼に言付け船に遣りけり。

朝霧も最前より、光氏君の又此所へ、渡らせ給ふを遠目に見つけ、夕霧丸と諸共に、駒を竝べ駕籠を列ね、打過ぎたまふに心ときめき、其方を眺めて居る時しも、わづかなれども此書捨を、使の者の持て來しかば、いとあはれに忝なく、覺えてそゞろに打泣きぬ。

思ひ初めみをつくしても詮ぞなき

田簑の島に禊する、折からなれば麻の葉へ、結付けたる形代の、紙に書いて奉る。

浪内急ぎ立歸り、光氏これを見る頃は、日も暮方になりゆけば、夕潮滿ちて入江の鶴も、聲を惜まず鳴つれて、哀れなる折なればにや、人目も包まず朝霧に、逢見まほしくさへ思さる。





かゝり船、昨日遠目に訝しと、思ひながらに見過したる、其事にてあらんずらん。この春二葉と別れたる、緣を連れての宮詣か、知らざりけるよ」トあはれに思す、御氣色見ゆれば惟吉は、なほ摺寄りて聲を潛め、「かの明石の船御參詣の、この勇しき響に押され、漕過ぎぬると見たりし故、人をつけて窺はするに、難波江に船を繫けられ、禊して今日も彼所に、在する由を歸りて告げつ」ト聞えあぐれば光氏は、打點きて小首を傾け、「圖らず參り合はせしも、神の導と覺ゆれど、その用意もなく上りしを、留置きなば輕々しく、人も見下し侮るべし。折を計りて華やかに、迎への人を下すに如かじ。とはいへ此儘捨置かば、嘸つれなしと思はんかし。聊かなる便をして、彼が心を慰めばや。一先是より朝霧が、乘りたる船に遠からぬ、邊に我も赴きて、禊祓をなすべし」ト、その旨供に觸流し、この御社を立ちたまひ、所々に遊びながら、田簑けて難波に到りたまふ。

抑今は水無月の、晦日にのみ祓をする、事の樣になりしかど、むかしは月日に關らず、七瀨の祓なんどいひて、所々に禊する、この難波江は卽ちかの、七瀨の內のひとつなり。

俄の催なりけれども、光氏が勢にて、祓の樣など嚴重に、神主打寄りつかうまつる、堀江川の邊より、遙に向ふを御覽ずるに、明石の船は田簑の島といふ所に繫りしが、いと幽に見え

を、抱取りて舟より下立ち、そなたの方を打眺め、問はずと知れし彼こそは、逝去りたまひし二葉の上の、殘置かれし若君なるべし。さて淸らなる御姿を、見上げるにつけ心の中に、數にもあらぬ妾が腹に、生れ出でさせ給へども、此姫君も御胤は、あの公達に異はなし。頓て都へ迎へられ、あの如く人々に、傅かれ給へる御身に、ならせ給へ守らせ給へと、いよ〳〵社の方に向ひ、伏拜み〳〵、斯く晴々しき人々と、立交らんもはしたなし。殊には見知れる者ありて、それと知りなば我君の、御恥辱となる事もやあらん、嚴しき神事の中へ、いさゝかの事せんに、神も取上げ給ふまじ。さればとて此儘明石へ、立歸らんも殘多し。今日は難波に船をさし留め、姫君なほも健かに、御成長あるべきため、祓をせんとて漕渡りぬ。

君は夢にも朝霧の、詣でし事は知り給はず、いろ〳〵の神事を夜一夜、廣前にて爲させたまひ、眞に神の喜びたまはん、事どもを爲盡して、遊びのゝしり明したまふ。惟吉なんどは心の中に、斯く靜やかに世は治り、須磨の浦邊の雨風にも、事なく難なく再び都へ、還らせたまふも此御神の、德に因れりと思ふ〳〵、光氏が不圖社を離れ、遠く遊びに立出でたる、傍に侍ひて、「住吉も姫松ゆゑに悲しけれ、とは思遣りたまひつらん」ト、聞え出づれば光氏は、暫しが間打案じ、「神かけて忘れやはする浦の浪、實に思ひあたりたり。今姫松と言ひたるは、此所の渚へ

ぞ染めたりける。千鳥はひらりと渚に下立ち、「あれ手を翳してこなたの方を、眺めて立ちしは惟吉殿、遠目に能くはわからねど、その傍に控へたる、是も立派の殿御ぶり、素袍の紋に對雀、切竹染めしは誰ならん」ト、言ふに菫野伸上り、「司の所へ折見舞、東山へたび〳〵上り、名だたる御方の御紋所、御面までも私は、おほかた覺えて居ります。あれは赤松高直殿、二葉の上の御兄君、たしか須磨まで一度は、お下りなされた噂の御方、その後に押竝びし、舞鷺の紋は小櫛、獅子に牡丹は多田萩谷、竪綱は二階堂、立鼓に手毬は内藤家、菊水は楠、藥師寺、鹿は富樫、團扇は兒玉」ト、事細やかに語りけり。此等は皆光氏が、昵近の者どもなれば、人より殊に物思、なき氣色にてかひ〴〵しく、股立姿も淸げなり。すべて明石に見し人々、其時の樣には引かへ、いと華やかに誰々も、皆若やぎて我も〳〵と、いどみ爭ひ太刀刀、馬鞍などまで飾を調へ、磨立てたるその風情、いみじき見物にこそあれと、田舍人は思へども、朝霧のみは御乘物を、遙に見遣ればなか〳〵に、心やましく氣のむすほれ、戀しき御影を見もやらず。陸にはあとより又一群、夕霧丸を限りなく、粧ひ立てて土佐駒の、いと小さきに召させまゐらせ、その馬添の童の年頃、丈恰好まで皆作り、合せし樣に若君に、似合しきを撰びつゝ、紫裾濃花の丸、思ひ〳〵の染上下、いと愛らしき今樣姿、めでたく見ゆれば朝霧は、菫野より姫御子

多くの士、供人美々しく大船に、帆を引あげて詣でたり。此船は澪標を、立てたる邊にとゞめ置き、供人おほかた此所に殘し、親しく使ふ者ばかり、遠淺なれば小舟に乘換へ、頓て岸にさし著けさせ、向ふの方を不圖見れば、誰かは知らずのゝしりて、詣で給ふ人の氣色、渚に滿ちて美しき、瓶子土器幣みてぐら、神寶の捧物、侍どもが持てつゞけ、數多の樂人形を撰び、裝束を整へたり。「なみ〳〵ならぬ御方の、御參詣と見受けたり、疎忽に舟より上るな」ト、朝霧は供を制し、誰が詣で給へるぞと、人に言付け問はすれば、嵯峨の君の御願解きに、詣で給ふを世は廣し、知らぬ人もありけりとて、果敢なき程の下衆だにも、心地よげに打笑ふ。朝霧聞くに淺ましく、月日も多きに今日もけふ、思はず參り會せしは、懸はなれざる緣とはいへ、今嘲笑ひて行過ぎし、下部でさへも物思なげにて君に仕うるを、世間の聞えを憚れば、憖にこの有樣を、遙に見奉りながら、此所に在りとは言ひかぬる、我身の程こそ口惜しけれ。いかなる罪を作りてか、心にかけて君の事、思ひながらにかゝりける、御ひゞきをも露知らで、立出でつらんと心の中に、さま〴〵思ひ續くれば、いと悲しくて人知らず、淚は襟を傳ひけり。岸邊に續く松原の、深綠なるその中に、花と紅葉をこき散す、大紋素袍の濃き薄き、數も知らずに袖を列ね、肩を交へて警固する、中にも目立つ仁木良清、家紋の結び雁金を、霞のうちに

ざる、孝行の德に因りて、かくの如く世に榮え、佐賀輪がみだりに人を侮り、身を高ぶりし報は忽ち、早百合に恥を見せられたり。元より果敢なき繪草紙なれば、名も事も違ひながら、其意は源氏に傚ひて作れり。かの物語は人情を、盡して書きたるものなれば、人の敎になれるといふ、先達の說あるは、實に宜なるか。蓬生の卷の全く茲に終り、又澪標の卷へ復る。
幼き時より光氏は、神佛を深く敬ひ、彼方を拜み此方を拜す、その中にも取分けて、津の國の住吉と、近江の國なる石山の、觀世音を信仰ありしが、須磨に假住なしゝ頃、かの雨風の烈しかりしに、いよ〳〵數の願籠を、なし給ひたる加護にや因りけん、其身は更なり人々にも、あやまちなくて戻りしかば、願解きにと思ひたれど、歸路にて心急がれ、惟吉を代參にて、其身は都へ入りて後も、何やかやに取紛れ、その秋漸く暇を得、夕霧丸を同道して、まづ住吉に詣で給ふ。むかしに勝りし光氏の、勢にてあんなれば、我も〳〵と御供に、加はる者いと多く、實に嚴しき有樣なり。
折しもかの明石の朝霧、この御社へ年每に、必ず詣づる例なりしが、去年の春は光氏に、離れて出立つ心もなく、兎角する中妊りて、この春平產なしゝかば、一昨年のまゝ怠りたる、詫を神へも申上げ、姬の初めて宮まゐり、それや彼や取重ね、おもひ立浪、千鳥、菫野、數多の女

賀輪は平伏して、謹み敬ひ奉る。此時御側に控へし早百合、姫君の方に向ひ、「畠山靱負之丞重篤が妻佐賀輪、久々にての御目見、御詞を下さるべし」ト申上ぐればにこやかに、「いつも變らず健かで、目出たい〳〵。三人は定めて其方の娘であらう、名は何と呼びつる」ト、問はせ給へば姉娘、恐る〳〵顔を上げ、「私の名は松枝、次は小櫻、末は八重梅」「オヽ打揃うて美い器量」ト、仰に早百合進出で、「お心に叶ひなば、三人倶に留置かれ、御腰元に召使はるゝに、何か障の侍らん。佐賀輪殿、只今も申す通り、室町御所にかはらざる、此御殿の御奉公を、よもや否とは言はれまじ。世に連るゝといふ事を、御存じあるが御身の徳」ト尻目に掛けてにこにこ顔。佐賀輪は快からねど、今更言はん詞もなく、はつとばかりに平伏して、溜息吐いてぞ居たりける。母の心は露知らぬ、娘どもは勇み立ち、「有難い御目見を、するのみならず不束な、私どもを御召仕ひ、下されんは上もなき、此身の仕合父重篤の、承らば嘸喜び、母様御禮をおつしやつて」ト、勸められて、「有難う御座りまする」も澁々に、申上ぐるを早百合はをかしと、心の底に思ひしなるべし。

この佐賀輪が身の上には、いま少し問はず語も、せまほしき事あれども、頭痛う懶ければ大方にして筆をとゞむ、又も序あらん折に、思出でて聞ゆべし。抑此稲舟姫、父の道を改め

お噂も御座つた處、御目に掛るも不思議の御縁、お連は定めて御息女方、困しからずは御一緒に、姫君へ御對面。いざ御案内致しませう」ト、さいつ年に姫君を、見蔑りたる意趣返し、佐賀輪を嬲りて遊ばんと、宣ひもせぬ事をさへ、取繕うて勸むれば、佐賀輪はうぢ〳〵答もせず。娘どもは打喜び、「この樣に結構な、御殿を拜した事は無い。左樣ならば宜い樣に、御執成を遊して」ト、言ひつゝ早百合と連立つにぞ、佐賀輪も是非なく、後につき、門の内へ入らんとするを、早百合は押止め、「見ますれば、御乘物も御座る樣子、佐賀輪樣はそれに召して、表門より遠侍の、御式臺へ著けさせたまへ。御駕籠是へ」ト招くに驚き、「何としてかは乘物にて、御門内へ通るべき、恐れ多や」ト身を縮る、佐賀輪が顏を打まもり、「四年以前に乘打を、されたる樣に覺しが、あなたでは無かつたか。覺も惡しといふ程に、私はまだ年も積まず、異つた事や」ト片頰に笑み、皆々を誘引ひて、數多の座敷を打通り、とある一間に控へさせ、早百合は奥へ入りけるが、此由を通じけん、暫くありて側仕と、おぼしく是も麗しき、女四五人出來り、あれへ」ト言ひて佐賀輪を先に、三人の娘ども、上段の下に坐せしめ、向ふの唐紙右左に、押開いたる眞中に、錦の褥打重ね、いとのどやかに脇息へ、打凭れ給ひたる、稻舟姫の御有樣、むかし娘の使ひ人にと、思ひし折には似もつかず、氣高う見えさせ給ひければ、思はず佐

二十四編　上

其時女は打笑ひ、「數にもあらぬ者なれば、御見忘れは御道理、村荻殿をお迎へに、是へ渡らせたまひし折、御取次を致したる、早百合と申す者なり」ト、言はれて佐賀輪は打驚き、よくよく視れば姫君を、連下らんとなしたる時、打腹立ちて兎や角と、言爭ひし女なり。むかしの姿に引かへて、打上りたる有樣に、威を奪はれしか腰を屈め、膝過ぐるまで手を下げて、「年老いぬれば目も疎く、覺も惡く御顏を、見忘れたるは容させたまへ。さて此所が稻舟樣の、御館に侍りしか」ト、なほ訝しげに見渡すを、早百合は心に小氣味よく、「此御殿には、足利先生義兼君とて、室町御所と、連なる枝の御契約、實は世に知る堂上の、御二男ながら武家好み、弓馬に精しく其上に、殿御ぶりがよい故に、稻舟樣の婿君には、丁度宜いとて光氏樣の、御仲立にて御婚禮、目出度濟みしは睦月、山名親子が今までの、領地を殘らず賜りて、まことに豐な御身の上。今日もけふとて稻舟樣の、私を御側に召され、畠山の女房佐賀輪、此頃上りし噂を聞く、彼は妾が艱難を、見るに忍びず深切に、連下らんと言ひし者、逢うて禮が言ひたいと、

偐紫田舎源氏第二十四編序

是第廿四編を、歌舞伎の根本に譬はゞ、口明は澪標の、續きにて作り物、住吉の社の景に、橋掛り一面の松並木、其絲子を明石より、連れてはるゞ宮參り、岸には浪の音高く、陸は初知入行列を、遠見に袖もぬるゝなる、田簑の島や難波江に、道具かはりて口明の、詰は六條田甫の假住、隣家の琴の鳴物に、幕ひらくとは櫻の緣語、是は紅葉にあふ坂山、石山詣もかたからぬ、驛路の鈴に田舍歌、關屋をちよつと二ツ目へ、さしこみ帶の寢所を、駕籠にかへたる世話場を轉じて、時代蒔繪の東山、大紋素袍の諸士の大詰、いづれもおたちの打出しは、又みをつくしにたち戻り、關屋のするゑは後日に殘しつ。

天保丁酉解凍　　　柳亭種彦記

乘物の、門の内より出來るにぞ、家來に言付け彼の供に、「是は如何なる御方の、住ませ給へる御館ぞ」ト、問はせければ件の供、「此所を知らざる田舍者に、言ふも無益」ト嘲笑ひ、行過ぎんとなしたる時、「乘物暫し」ト止めさせ、戸を開いて立出づるは、今咲く花より麗しき、縫箔の小袖に時ならぬ、雪の白無垢肌著に重ね、粧ひ飾りし氣高き女、いと靜やかに歩み寄り、「お久しや佐賀輪樣」ト、言はれていよ〳〵不審晴れず、「さ宣ふは何方ぞ」ト、その有樣にや吞まれけん、常の我慢に引かへて、ねんごろにこそ尋ねけれ。

を、紫は尻目に懸け、「浦より遠に漕ぐ舟の」ト忍びやかに獨言ち、ながめ給へば光氏は、振返りて打笑ひ、「その古歌の下の句は、我をばよそに隔てつるかな。思ひもかけぬ事を聞く。あはれと言ひしはかの浦の、都に變りていと寂しき、所の樣など知る故に、いかに淋しく住むらんと、思遣りたる獨言、聞過し給はずして、怨みたまふが怨めし」など、聞えながらにかの文の、上包ばかりを取り、此方へ向けて見せ給ふに、都の人も恥づるばかり、手などいと美しければ、君の打捨てたまはぬも、かゝればなめりと紫は、心の中に思ふなるべし。

まことや前に記すべきを、事に紛れて漏したり。去る三月なかばの頃、畠山靱負之丞、妻子を引連れ都へ歸りぬ。のどやかなる日の事なりしが、上岡崎の下屋敷へ、摘草に行かんとて、娘どもに唆され、佐賀輪は屋敷を立出でつ、供を多く從へて、乘物にては興なしとて、町の女に姿をやつし、はかなき駕籠を唯一挺、遠く後に釣らせしなんど、皆娘らの物ずきなり。長き日の事にしあれば、下屋敷にも遊び飽きて、吉田の社、眞如堂、來所此所を打廻り、保科寺より糺の橋を、打渡りつゝ不圖見れば、みつばよつばの殿造、その結構室町にも、をさ〳〵劣らぬ御所のあり。四年以前讃岐へ下る、その前までは此所も、度々通行なしたるが、遂に見もせず聞きもせず。抑何人の館ならんと、佐賀輪は近く立寄りて、打眺めて居る折から、美々しき女

の話にて、御所の様をも能く知れば、聞所ある浮世語、光氏君の御有様、世にかしづかれ御勢の、有ることを口に任せ、語り盡せば朝霧も、斯くやんごとなき御方と、添臥したるのみならず、子まで擧けし身の譽、冥加に叶ひし事なりと、今まで思ひ弱りぬる、心もやう〳〵たけくなりぬ。今日もお側に葉野は、附添ひまゐらせ嵯峨よりの、御文を諸共に、つく〴〵と打眺め、姫御子誕生ありし故、思ひの外に斯く目出度、幸を得給へる、人さへ有るに子を持ちしが、猶煩しと捨てられし、世に憂きものは我身にこそと、心の中に不仕合を、さま〴〵思ひ續けしが、乳母の事はいかになど、文の端に心づけ、問ひ給ひたる忝なさに、萬の事も慰めけり。

朝霧の返には、

いかにと問ふ人もなつ野や草隱れ
果敢なき命もたまさかの、御慰めに繋ぐになん。萬の事は御心に、推量らせたまへかし。
砂に交る白玉は、拾取りて御手の内に、据置きたまふ事もがな

と、まめやかに書きたまへり。

使歸りて光氏は、此文を打返し〳〵見給ひつゝ、「あはれの事ぞ」ト長やかに、吐息と共に宣ふ

著きぬ。その日の儀式に使ふべき、道具なんどの類まで、目出度様にしつらはせ、有難うまめまめしき、御訪にて御文には、

　　葺くやいかに縁の影の軒菖蒲

誠に思ひあくがれて、過し難き程になん。されば迎を下しゝ時は、必ず思ひ立ち給ひね。

　京へ移りたまふとも、侮る人はよも。

とばかり、詞を殘して書きたまへり。入道例のよろこび泣に、目をすりては繰返し、物をも言はず居たりけり。實にかゝる折にこそ、生ける詮もつくりいでしは、道理なりと見ゆるなるべし。此館にも今日の壽、衣服調度萬の物、座敷も廣間も所狹く、飾設けたりければ、都に斯くと知る人なく、闇の夜の錦にて、暮れぬべしと人々も、殘多く思ひし處へ、この御使ありければ、立浪、千鳥、はじめとし、打擧りてぞ喜びける。

菫野はたゞ朝霧の、情あるを賴みとして、やう〳〵に住馴れつ、元より此所にも姫君の、誕生あらざる前よりして、待受けの乳母なんど、抱へしが數多ありて、その中には氏素性の、賤しからぬも無きにはあらねど、運拙く流浪して、かゝる田舍に落留れる、者のみなれば年もふけ、朝霧が語ひ人と、すべき女は更になし。この菫野は若やかにて、都の事は更にもいはず、妹の詞

は吐息をつき、「我も涙に浮沈み、消えんとしたる命を生存へ、世を海山に行廻り、再び歸り來りしも、御身の此所に在る故なり。人に恨を受けまじと、思ふも此身を健かに、友白髮まで添ひ遂げん、爲とは知らせ給はずや。心の中が竹ならば、割りて見せんと謠ふなる、小唄も我身の上なり」ト、宣ひながら琴引寄せ、さらりと調子を搔合せ、勸めたまへど紫は、かの朝霧が琴の音の、媚かしかりしなんど、今聞えたまひしを、妬く思ふか手も觸れず、おほやうに美しく、たをやかなれど何所やらに、はや此頃は針を持ち、怨めしげなる樣なるが、なか〳〵に愛敬づき、腹立ちたるも見所ありて、をかしと君は思すなるべし。

夢の間に春も暮れぬ。むかしは平產なしてより、五十日目を五日といひて、とりわけ祝ふ習慣なるが、五月五日節句の日ぞ、かの五日に當るらんと、人知れず光氏は、數へて床しうあはれに思ひ、都にて生れなば、心の儘に待遇して、一入嬉しからましを、片田舍にて擧けしこそ、返す返すも口惜しけれと、兎角につけて此事を、心に懸くるは健かに、成長なさば室町へ、參らする事もやと、男子よりも却つて女子を、嬉しと思す故にして、都に亂の起りしも、彼所へ下りて此子を擧くる、宿世の定めにありけるかと、心の中に思ひつゝ、五月朔日二日の頃、明石へ使を出し立てらる。「必ず其日違へずに、罷著け」ト宣へば、御使は畏まり、五日に彼所へ到

ね知らでもありぬべき、事にはあれど親心、さまでは思切り難し。呼びに遣りて頓て見せん。其時憎み給ふな」ト、聞えたまへば紫は、さつと面の打赧み、「折々に其樣な、心にも無き事どもを、仰あるこそ怨めしけれ。物憎みとかいふ事は、習ひし事もなきものを」ト、打怨みたまふにぞ、此方は最よく打笑みて、「御身も我が心より、外なる事を思遣り、先繰とかして怨みたまふ、それは誰がならはしにか。幼き時より側に置き、左樣の筋はゆめほども、教へし事はなきものを。此度明石へ乳母を下し、心を配りて言問ふは、全く色香に迷ふにあらず、生れし姫を迎へし上にて、思ふ仔細の有る事ながら、其時に到らずして、斯樣〳〵と物語らば、又ひが心得したまふべし」ト、まづ其事は言ひさしつ。都の花の霞には、劣りし浦の朝霧も、所がらにや珍らしく、身を憂き波によそへつゝ、倶にかへらむ口ずさみ、うちつけならねど物によそへ、事に喩へてほの見し形、かの琴の音の媚きし、それかれ聞えたまへる風情、かの朝霧に光氏の、心の留れる樣なれば、心の中に紫は、すぎこし方の事どもを、繰返し〳〵、我は都に棄てられて、悲しさに類なく、泣かぬ日とては無かりしが、その歎には引かへて、君は明石のうら寂しき、御慰めとはいひながら、あだし女子に御心を、分け給ひしこそたゞならねと、さまざま思ひ續けられ、背差向けて居たりしが、「哀れなる世の有樣や」ト、獨言に打歎けば、光氏

君へ、申上げんと心のせかれ、苦しがりて居る様子、御返事を急がせられて」ト、願ふに朝霧の御文を持参りし、御使の者御次まで、罷越して侍るが、斯く健かなる御有様、早く戻りて我硯を取寄せ、光氏より贈りし文には、

磯に實生の姫小松、波を避け風を防ぎ、おろかに待遇したまふまじ

と、返すぐも敎へ諭して、

うちかけん霞の袖を雛鶴に

と有りければ、朝霧も思ふ事ども、少しばかり聞え續けて、

おほふ影を松の緑や鶴の雛

と書きて賜ひければ、使は急ぎ京へ歸り、密にこれを奉る。光氏つくぐ打ながめ、猶怪しきまで心に懸り、床しう思し給ふにつき、さまぐに打案じ、まだ紫へ明石にて、女子平産の事はさらなり、妊りしといふ事だに聞えず、もしほかくより聞出ださば、快からず思ふべしと、ある夜人も靜りて、靜やかなる折言葉に現し、「かうくいふ事こそあんなれ、儘ならざるが浮世の中、いつかはと待ちに待ち、神にまで祈りたる、御身にはさる氣色もなく、苫を敷寢の梶枕、たゞ一時の戯に、思の外の事ありしが、今更に口惜しょ。女なればその儘捨置き、尋





菫野は乗物にて、京の程は行離れ、津の國までは舟にて、夫より彼方は鈴付けし、馬にて急ぎ著きにけり。先走にてこの趣、告遣りければ宗入は、端近くまで出迎へ、待受けて奥へ伴ひ、「賤しき己が娘ながら、御子を産みたる忝なさ、遙々の田舍まで、乳母を下し給ふ事、家の面目世の聞え、此上や有るべき」ト、限なく打喜び、都の方を伏拜み、「斯く有難き御心ばへを、思ふに此度御誕生の、姫御子は更にもいはず、いよ〳〵娘も大切の、身にこそあなれ」ト腰元どもが、聲打潛めし話さへ、あなかしましと押鎭め、菫野を産屋の内へ、誘ひければ朝霧も、心地好げに打見やり、「遠き路をも厭はずして、下りし事の嬉しさよ」ト、聞え給へば此方は平伏し、まづは初めて御目見の、事どもを述べ了り、君の御文を捧げまゐらせ、さて彼の乳兒を抱き上ぐるに、實に玉の如くにて、美しき事類なし。さればや君のいと畏き、御身にて乳母の事まで、御心に懸けたまひ、さま〴〵の進らせ物、疎略ならず仕たまふも、道理なりと見上ぐるに、都を離れ見も知らぬ、怪しき道に出立ちて、今まで夢の心地なりしが、忽ち歎も醒めにけり。子持の君も光氏の、歸洛の後は力なく、月頃物を思ひ沈み、いとゞ弱れる心から、生存へてあらんとも、覺えざりしが此度の、取扱ひに物思ひも、少し慰めらるゝにぞ、頭擡げて隔なき、志を現しつ、物語りし給へば、如何あらんと案じたる、菫野は心安く、「私と諸共に、そ

今止めずに下しなば、取返しつべき心地して、慕ひやせまし」なんどとて、兎角戯れ宣へば、葦野は羞笑ひて、「私風情へうちつけに、別の惜しくと宣ふは、言はずと知れたかこつけ事、君の實を明石の姫君、お慕ひ遊ばす御心とは、ほの〲御顔に現れし、朝霧樣を御呼迎へ、遊ばす時に御供して、頓て目出度御目見。御心安く思召せ」ト、馴聞ゆるをざればみたる、言なしなりと聞流し、立出でたまふ後影、つく〲まもる葦野が、心の中は遙々と、遠く行くより同じくは、君の御側に仕へなば、今まで積る身の憂さを、忘れなましと思ふなるべし。

光氏は嵯峨に歸り、まづ朝霧が許へ送る、文を書くその中にも、孫は子よりもかはゆきと、世の諺にも言ふなれば、かの入道が此程より、いかに姫をいとほしみ、傅くならんとその有樣、思遣るにも人知れず、微笑まるゝ事いと多く、我も斯くまで姫の事、心に懸るは遠く離れ、殊には女子を珍らしく、思ふが故にてあらんずらん、とまれかくまれ淺からぬ、事にこそはありけれと、思ひながらに認め了り、菫野に差添へて、下すべきその者は、心利きて殊に親しき、人を撰みて召出し、深く包む事なれば、必ずともにゆめほども、漏すまじと口固め、守刀宮詣の、小袖やうの物を初め、残るくまなく取揃へ、乳母にも有難う、細やかなる御勞、賜物多く有りけるとぞ。

しき住居に引かへ、女の樣は若やかに、顏麗しく姿優しく、立振舞もしとやかなれば、不圖過去りし黃昏が、事を思出でたまひ、彼がながらへ年まさらば、かゝる樣にやならましと、目も離たずに打まもり、「御身の夫はいかにして、父の家には歸りしぞ、此世を去りしかたゞし又、睦しきより口說して、別れしなんどといふ樣な、事にもあらば又元へ、結合はする仲立せん」ト宣へば顏打赧め、「此子の父は六條の、遊女に馴染を重ね、遂にはそれを連れて駈落、拙い此身は捨てられながら、此子は正しく父親の、有るゆゑ若しや御乳付の、御用もあらばと豫ての願、折好く明石に御平產。他心ある夫に繫がれ、辛苦に引かへ此子も仕合。とはいへ此方は親と親、許して一生連添ふ中、あなたは假の一夜妻、見かへられたが面目なく、人には包む事ながら、其方の夫は此世を去り、それ故里へ歸りしかと、問はせ給へば若し其事が。お宮仕の妨げに、なりもやせんと有の儘、申上げ侍る」ト、差俯けば點き給ひ、「それよ夫の死したる子持は、乳母には忌むものなり。律の宿の垣根には、咲出でながら懷しき、菫を此所に摘棄てて、いかなる花と散行きけん、心強き人なるかな。初めて逢ひたる我さへも、乳母に抱へて遠き國へ、遣らんは本意なき樣にてあり。

ちぎらざる中にも惜しやわかれ霜

し」ト、これを詞の初めにて、朝霧が平産の、事の有様詳しく語り、「都を離れ遙〻と、播磨へ下りたまへとは、思遣なきやうなれど、我も彼所へさすらへて、侘しき住居はしたれども、今立歸りて心安く、世を經る例を思ひよそへ、呼迎へんも暫がうちと、知らぬ國知らぬ家に、辛抱してはくれまじきや」ト、いと親しげにぞ宣ひける。葦野は嵯峨の館に、仕へたきよし花郷に、去年の秋はいひながら、行儀正しき館の奉公、若し勤め得ぬ其時は、妹にさへも笑はるべし、此所に埋れて暮さんかと、とつおいつして今までは、更に心の定らず。今宵わざ〳〵光氏の、訪はせ給ひし有難さに、萬の事も打忘れ、殊には斯くまで懇に、宣ひければ忽ちに、かの浮きたりし心も定り、はつと額を疊に摺付け、「君の仰に侍らば、播磨はおろか唐高麗、言葉のわからぬ國なりとも、厭ふ心は少しもなし。父もかね〴〵私を、お宮仕に上げたき願ひ、さすれば否とは申すまじ。今度の御用は不束な、此身に餘りし事ながら、仰付けられ下さりませ」ト、聞いて光氏打悦び、「明後日はよろしき日なり、父に此由物語り、いよ〳〵承引なすにおいては、明日は急ぎて此方にも、何かの用意をすべきなり。衣服その外旅の支度は、人して送越すべし」ト、宣ひながら其所らあたりを、つく〴〵と見廻らすに、實に花郷が言ひし如く、家の樣は荒れまどひ、流石に大きなる處の、木立なんども疎ましく、いかで過しつらんと見ゆ。斯く淺ま

返すぐも口惜けれ。糺の館の東へ、住むべき所を造らせて、頓てそれへ迎へんと、急ぎ其事命じたまひ、且はかくしき人もあらば、彼地へ乳母に下さんと、思ひ廻らし給ひしが、不圖去年の秋花郷が、斯樣々々に申しゝと、まなび聞えし菫野の、事を思出でたまひ、彼には未だ逢はざれど、妹の司は藤の方に、いと幼き時より仕へ、其父宮内宰左衛門も、侍の果なれば、菫野とてもさまで卑しき、女にてあるべからず。明石の姫の乳母には、彼を下すに如くべからず。とは思へども故鄕を、離るゝ事にてあんなれば、其事を承引くか、否やを問はんと物の序に、いみじう忍び夜に紛れ、かの木屋町なる宮内が家に、案內もなくおはしたり。宰左衛門は他行なし、菫野一人ありけるが、大方ならず打驚き、隣へ渡らせたまひし折垣間見なして御顏を、よく知るからに名乘りたまふも、待たず上座へまづ進め、「花と茨と軒竝び、御門違に侍るや」ト、伺ひ申せばその言葉を、をかしとや思しけん、光氏も打笑みつゝ、「三年以前に須磨へさすらへ夫より明石へ船出して、不圖蜑の子に馴染めて、都へ歸る其時に、連立たんとも思ひしが、磯の海松布を憚りて、岩打つ浪の打別れ、跡に飜れし子安貝、拾取るにも我儘には、彼所へ再び下り難し。せめて明石へ人がましき、乳母を出し立てんものと、思ふに幸ひ御身は去る年、初子を擧けて奉公を、我に望むと花郷を、訪ひたる時の物語。それ故わざぐ音づれ

歸りて惟吉に、此事どもを物語り、急に仕度を整へつ。さきに下りし蓑笠の、やつし姿に引かへて、縫箔の小袖を打重ね、供人を數多隨へ、彌生三日の朝まだきに、都をこそは打立ちけり。

光氏は播磨の便を、心もとなく待つ程に、十九日の朝、「只今歸り侍るなり」とて、手卷は直に御前に罷出で、深く包ませ給ふなれば、御側に侍ふ人を遠ざけ、其身は御膝の許まで摺寄り、「十六日になんいと平に、姫君の御誕生、御血心もあらせられず、御二人ながら健かに、渡らせ給ふ」ト告聞ゆ。男子は一人もちたれど、女の子はいと珍らしと、光氏よろこび大方ならず、京に迎へて產ませざりしを、今更に口惜く、道の疲を休めよとて、手卷には暇を取らせ、心の中に思ふやう、過つる年の春の夜の、夢におはして母上の、明石の浦に移りなば、磯山櫻咲出でんと、仰ありしは小櫻を、擧くる知らせにありけるか。いやしくも我胤にてあれば、其子は必ず高貴人の、妻とならんは必定せり、然る時には入道が、今まで娘を深く憐み、諸士が娶らんと、望むを辭みて傅きたる、本意も玆に叶ふと言はんか。夫といふも親子の者、年頃日頃信仰せし、かの住吉の神の導に、圖らず契を籠めたるにて、假寢の夢と思ひの外、宿世よりして朝霧とは、深き緣の有りしなるべし。たま〳〵擧けし女子なるを、あやしき浦邊に產せしこそ、

野の宮へ參詣し、仁木の裏の小門口、音づれんとて立寄りながら、何心なく見返れば、惟吉の女房手卷、是も此所へ詣でしならん、歸來るを不圖見付け、「あら珍らしや」ト宣へば、此方も驚き土に手を支き、「久しぶりなる御目見、いつも御機嫌麗しく」ト恐入れば、「其方も變らず目出度〳〵。丁度よき所で逢ひし」ト邊を眺め、茶屋の床几のありけるを、是幸ひと腰打懸け、供の者をば皆遠ざけ、手卷を膝元近く招き、光氏は聲を潛め、「我明石へ移りてより、入道が深切なる志に絆されて、彼が娘の朝霧と、假寢の夢を結びしが、圖らずも水無月より、胸苦しげなりし事は、いかにと思ひ片時も、忘るゝ間はあらざれど、室町へ出仕繁く、館に在る日もそれかれの、事どもに取紛れ、思ふまゝには問ひもせず。その水無月より數ふれば、はや此頃やと思遣るに、人知れずあはれにて、誰をか使に遣るべしと、思ふ處に彼地の樣子、知りしは御身の他になし。遙々の道ながら、彼所へ下りてくれまじや」ト、仰に手卷はにつこと打笑み、「人も多きにその御使、仰付けられ下さらば、惟吉もさぞ喜び。お初產は延びるもの、とはいへお當月なれば、少しも早く播磨へ下り、宗入館に逗留致し、御喜のあるならば、直に上りて申上げん。御心安く思召せ」ト、いふに光氏打點き、「人の知らざる事にてあり、惟吉の外ゆめ漏らすな。やがて目出度便を待つ」ト、言流して仁木の屋敷へ、入り給へば手卷は急ぎ、家に

き蓬の下に、年を經たる女ばらは、嵯峨の館の方を向きて、伏拜みつゝ歡びけり。

秋暮れ冬に變りし頃、仁木良清村荻を、引連れて伊豫より歸り、かの川次郎出奔の、其後は荒廢てて、上屋敷は殊に廣く、取繕ふに日數も經べし、野の宮の隣なる、下屋敷にまづ當分、住はんとは存ずれども、父の勘氣の未だ許りず、如何あらん」ト伺へば、光氏機嫌麗しく、「須磨より明石の浦渡ひ、片時も忠義怠らず、都へ上り伊豫へ下り、我ゆゑに今までの、苦心の事ども語りなば、喜代之助の心は釋けん。彼伊勢路より歸りし時、宜しく計ひ得さすべし、心置なく下屋敷の、塵を拂ひて落付くべし。村荻は寶劍を、取返したる功あれども、我も不興を受けたる身を、愼しむ故に須磨にては、つれなく對面せざりしが、今は憚る所もなし、折もあらば音づれん」と、懇に宣ひつ。嵯峨の住居紲の館、赤松の館なんどに、光氏が歸京を待ち、退散らぬ者どもを、あはれなる者に思し、數多物どもを賜りつ。或は又似合しき、所へ緣付けたまふ程に、幸ひ人多くなりぬ。是のみならず御年の、加はり給ふ故なるか、猶むかしより思遣、深うならせ給ふにぞ、諸人はいよ〳〵靡き從ひ、東山室町の、御おぼえもいと目出度、日に添ひて華やぎたまひ、兎角する間に年改まりぬ。睦月は儀式の事繁く、如月もいつか過ぎ、彌生朔日やうやくに、光氏隙を得たりしかば、村荻を訪はんと思ひ、八ッさがりより館を立出で、まづ

二十三編　下

光氏は是を聞き、「さては司に違ひなく、隣は彼が家なりしか。浪人の身に孫を持てる、娘を家に引取りて、育み置くはさり難き、故こそあらめ夫はともあれ、母もなく妹とも、引離れて暮しなば、心細く思ふべし。折もあらば呼寄せて、腰元に仕うてくれん。兎角いふ間に夜明けなば、人の目立ちて悪しからん、然あらば」とて立上り、嵯峨へ歸らせたまひしが、是よりしても猶さまぐ、暇なきその中にも、稲舟姫の御事は、等閑にし給はず、親しき人に命じつゝ、下部など遣して、茂き蓬を刈拂はせ、土を運び砂を盛り、石は御影、檜の木は木曾山、匠は飛彈の國人と、上なき物上なき上手を、撰びて館を造り改め、結構むかしに復りければ、今までは只木草の葉の、哀れに淒く見えたりしも、遣水をかき流し、面白き岩どもを、組上げなんどせし程に、庭の景色の淸しうなり。側仕にはよろしき童、よき女を求め出し、送り遣し給ふにより、雪霜に埋もれたる、花の梢の春に逢ひ、匂ひ出づるに異ならず、館の内やうく　に、人多くなりけるにぞ、見蔑りて暇を乞ひ、散失せし者どもは、今更に後悔し、今まで怪し

な。あれにて思ひ出したり、某これへ來りし時、あの近隣の門なるべし、一人の娘顔差出し、我を見て打驚き、戸を立て内へ入りたるが、彼はたしかに藤の方の、御腰元の司なり。一昨日の夜東山へ、上りし時に茶を點てて、持出でたるが何として、この隣には居るならむ。わが僻目にて面影の、似たる女かまづ隣家は、何人の住居ぞ」ト、尋ねたまへば花郷は、心づきて膝を打ち、「我身の事に取紛れ、頼まれながら申上げず。隣の主人は宮内の、宰左衛門と申す者、義正公に仕へしが、病氣に因りて御暇たまはり、浪人して後妻は失せ、今は二人の娘のみ。妹が卽ちその司、姉の名は菫野とて、まだ若く柔和な生。貧しき男を夫に持ち、子を一人產みて程なく、隣の父の許へ歸り、誰が告げてやら私の、身の上を能く知りて、折節此所へ訪おとづれ。かの女の申すには、妹の司は藤の方へ、小い時から御奉公、私もどうぞと思うても、嬰兒を抱へてせん方なし。光氏樣の御歸洛ありて、御乳付でも入る樣な、目出たい御沙汰があつたなら、願うてくれと御覽の如く、此所の住居になほまして、人知れぬ破屋に、旦暮眺め暮すのが、心細く妹の話に、東山や嵯峨の御殿の、ときめき給ふ事を聞き、其樣な賑かな、所に居たいと思ふ樣子。久しぶりにて姉に逢ひたい、願を立てて昨日の夕暮、司も隣へ宿下りと、承はつたばかりにて、まだ近付にも侍らねば、つい尋ねも致しませぬ」ト、事細やかにぞ語りける。

君を、兎や角と申しなし、邪慳な御方とあてつけて、私の言うたも戯言。御佩刀を寵取り、死なんと覺悟極めたる、命を助けたまはりて、長の年月過しゝも、みな御情に侍れば、たとへ此儘捨果てたまひ、御音信のないとても、何とて恨みまゐらすべき」ト、いよ〳〵涙にあやもなし。光氏わざと打笑ひ、「歸りしも無事、待付けし、その身も無事にてめでたき對面、それに何ぞや不吉の涙、あまり歎くと赤松の、館で別れし其折の、事を今更思ひ出し、己までが悲しうなる。母の水原も息災なる、樣子は聞けどまだ逢はぬ。其方が琵琶を初めて聞きしは、もう何年になるであらう。昨日今日のやうなれど、相馴れてはや久しき中、恨みそ我も恨みはせじ。疑ひたまふな疑はじ」ト、是より例の何所にて、習ひ給ひし言の葉か、眞實見えて媚かず、花鄕が胸あくばかりに、語ひ慰めたまふ程に、夜も更けぬらむ月影は、西の戸口へさし入りて、かの村雨の名殘かや、春ならねどもおぼろ影、いとゞ艶なる光氏が、立振舞に花鄕は、今宵おはすと知らざれば、丸寢せんとて著替へたる、寢卷の裾も亂れ髮、取上げもせぬわが姿の、なほ恥しう思へども、端近う立出でて、倶に眺めて居たる樣、二葉の上の腰元にて、立廻りたる時には引かへ、何となうのどやかにて、厚く粧ひしむかしより、飾はざるが却て見やすし。光氏は不圖垣を隔てて、目さめたる子を賺すならん、唄うたふ聲を聞付け、「若くをかしき聲なるか

の御身とや。さればこそ紫の、雲を西へ迎取られ、その餘の者は爪彈き、花の降るのは嵯峨ばかり。かゝる拙き有樣を、あはれやどうして暮したと、音づれもて給はらぬ、さても邪怪な佛菩薩」ト、ひとりひぞるを洩聞きたまひ、「さいふは慈悲ある佛に緣を、結びかへたる故ならん」ト、言ひつゝ障子押開き、悠々として入來る光氏。花鄕そのまゝ取縋り、泣くより外に言葉もなく、壽庵は醫者に似もつかぬ、姿を恥ぢてや逃入りけり。光氏靜に座に直り、「まづ言ふべきは調太夫、此度召連れ上るべきが、山名の殘黨猶あらば、彼が爲に惡しからんと、そのまゝ須磨に止め置く。堅固にあるぞ安堵せよ」ト、仰に花鄕淚を拭ひ、「君の明石へ移らせ給ひし、御留守に調太夫が、侍るよしは彼所より、手卷の歸りて物語。されば父の身の上は、さまで心にかゝらねど、たゞ旦暮に都より、他をばさらに知召さぬ、御身を聞くも恐しき、高潮とやら津波とやら、寄するほどなる荒磯へ、寄せさせたまひて御過誤の、ありもやせんと案じわび、袖の干る間はなかりし」ト、言ひつゝ又も打泣けば、光氏は身を近く寄せ、「人少なにていと寂しく、深き因緣もなき家に、年頃歸りを待侘びたる、御身の辛苦我とても、なぞ疎略に思ふべき。緣を結びかへしならんと、疑はしげに言ひたるは、只一時の戲なり、心にな懸けたまひそ」ト、宣へば花鄕は、やう〳〵に顏を上げ、「雲によそへて內

尋ねても給はらねば、しづ心なく花郷は、案じ侘びつゝ燈火の、下にて又も光氏の、文繰返し打眺め、ひとり寂しく居る處へ、晝の頃より用ありとて、立出でたるあるじの壽庵、忙はしげに歸り來る、姿を見れば袈裟衣、手に水晶の珠數を持てり。これはと花郷驚けば、さもあらんとて座に直り、「今日はかの光氏君、亡き母上の御爲とて、御八講したまふ間、蓮臺寺へ詣りしなり。貴賤をいはず參詣は、勝手次第と觸れられたれば、我も〳〵とつどひ集り、たやすくは近寄り難し、是を親しく拜まんには、姿を變へて僧となり、燈明の油を注添へ、香を盛換へなんどして、御法席に立交る、方こそよけれと豫て親しき、彼所の寺僧が袈裟衣を、此の通り貸したる故、思ふまゝに拜したるが、經だに讀めば頭數に、それもこれも呼集むる、法事とは事變り、學問に長け才智勝れ、行にしみ尊き僧のみ、撰人にて集めたまひ、向ふに目ばゆき莊嚴の、佛前に列りし、其樣物に喩へなば、當麻寺の曼陀羅が、活きて出でしに異ならず。音樂の音の澄渡り、さながら欄間の天人も、舞出づるかと怪しまる。かく嚴しう面白き、物の限を爲たまへる、光氏君は佛菩薩の、變化の身にこそ在すらめ。五の濁深きといふ、此世へなどて生れ出で、給ひしならんと我も人も、涙に暮れて拜みたり。是らの事を少しも早く、物語らんと思ふから、この袈裟衣を返すのも、忘れてそのまゝ歸りし」ト、言へば花郷吐息をつき、「佛の變化

まり、「然るべく候はん」ト、御請をなしければ、さらばとて乗物を、其方に向けさせ渡り給へり。道の程は遙なれど、急ぐに程なく星月と、書いたる門の目標に、紛ふべき方もなく、やがて駕籠より下立ちて、まづ内の樣を見たまふに、むかしよりしてあざやかに、今めきし家ならねど、いよ〳〵其所此所荒れまさり、物凄げには見えながら、かの蓬生を見し故か、さまでに草の目にも懸らず、庭も座敷もいと狹きが、なか〳〵に頼もしゝ。元より門守る人もなき、柴折戸にはありながら、ふと立入らんもつゝましゝ、さればとて案内を、乞はんも輕忽なるべしと、彳みて在しけるが、此家の隣の門を開け、光氏を月影に、透し眺むる女あり。はやくも心付かせられ、振返らせ給ふに驚き、かの女は礑と戸を、引立て内に入りけるを、心得ずとや思しけん、打案じてこそ在しけれ。

花郷がこの星月、壽庵の家に住みつる初は、花郷が姉千景の方へ、光氏よりして打頼み、繁々通ふといふにもあらねど、旦暮につけ萬の賄、光氏の心付け、贈りたまふを頼みとし、且此家の主壽庵は、千景の方の養ひ親といふばかりにて深き因緣の、有るにもあらねど情ある、者なるが故花郷も、心安く過しゝが、光氏都を去りてより、此所に合戰彼所に夜討、隱れ忍んで聞くにさへ、心細き事のみ多く、やう〳〵にして騒動鎭り、君にも御歸洛ましましながら、まだ

打つて懸かる、伏籠で受けるといふ樣な、騷動が出來ては惡い。過去つた事はさらりと、水に流して置くが宜い。桂樹さうは思はぬか」ト、仰にいよ〳〵面目なく、櫻の宴のその夜さり、かの白糸に勸められ、朧月夜も身の慾に、暗みて危く細殿で、操を捨てんとなしたる事を、今更思ひ出すにぞ、などわが心いと若く、わきまへなしに其頃は、さがなき人の言葉に乘り、あだし浮名を世に流し、夫のみならず此君の、須磨へうつろひ給ひしも、其夜思はず取換へたる、扇よりして起るとか。さすれば斯かる世の騷を、引出しゝもみづからの、過失なりと心の中に、深く悔ゆるは年增して、前後を辨へおのづから、心の靜まる故なるべし。

光氏は心の底に、曇なければ石堂の、妻となりてもむかしに變らず、何やかやといと親しく、語ひ給へど桂樹は、憂きに懲りてむかしの樣にも、あひしらひ聞え上げず。馬之丞は殊更に、恐入つて居たりしかば、やうなき所へ來りたる、心地せられて光氏は、其所を立出でたまふ頃は、日もはや疾くに暮果てて、例の村雨ひととほり、過ぎたるあとは雲もなく、いと靜なる夜なりしかば、惟吉を顧たまひ、「いかゞすべき今はわざ〳〵、忍び歩きに出でんのも、人目を思へばいと難く、かゝる序にあらざれば、立寄る便もあるまじく、かの木屋町の花の鄕、その名にも似ず眺むる人の、なくて淋しく住みつらん。是より彼所を訪ふべきか」ト、仰に惟吉かしこ

ひなば最早今頃は、這纏るゝ子もあらんと、思へば夫が口惜しゝ。知つての通り義尙公、光氏君の御二人ながら、御本妻に御男子あり、さすればたとへ本意協ひ、男の子を擧けても、夫ははやはや二男なり。顏形も人柄も、遙に劣れどわが胤を、宿せば嫡子にあんなれば、家を讓りてわが亡き後も、御身は安く世を過ぎん」ト、行末の事をさへ、語るに桂樹差俯き、いと恥しうも悲しうも、おぼえて何と答さへ、波を畫きし後の襖、手づから開けて光氏の、糸路ひとりを供に連れ、打通りたまひければ、桂樹は更にもいはず、馬之丞も驚き恐れ、「是に御座を存じながら、御目見に出でさる罪の、申譯には似たれども、某は舅の事、忌服は受けねど桂樹は、父沒して明日が、漸くに五十日、同道致し參りしを、憚り存じて此一間に、夫婦潛みて候ひしを、いかにしてか知召され、勿體なき事なり」ト、申上ぐれば笑はせ給ひ、「今日は琵琶之助が、七七日に當る由、國助に昨日聞けり。八講果てて廟參の、序ながら琵琶之助が、墓に詣でて戻り道、糸路に逢うて其方達夫婦は、小座敷に在りと聞き、召連れし者にも語らず、糸路のみに案内を、せさせて此所の襖越、聞いたでもなし聞かぬでも、ないしよ話に限なき、わが深切を現して、女もうらなく語ふ樣に、言なすはまだ夫婦に、ならぬ以前の密會には、誰々もある事ながら、おしはれて婚禮した、中には愚痴の樣に聞えて、夫から口説を引出し、櫻の枝で





の御爲とて、法華八講したまふにぞ、京洛外は更にもいはず、近き田舍の者までも、その有樣を拜まんと、ゆすりて參詣夥しく、寺内の混雜おほかたならず。やう〳〵に群集の人を、拂ひ退けさせかの夫婦は、琵琶之助の墓に詣で、光氏の居たまふ座敷と、引離れたる靜なる、一間を借受け衣服を改め、休息しつゝ馬之丞、つく〴〵と桂樹が、有樣を打見るに、そのむかし蓮葉にて、あだめきたりし姿に引かへ、心細げに世の中を、思ひ歎けるその風情、いと〳〵あはれと思ふより、「御身の父はまだ積る、年にもあらねど果敢なく失せ、母方の伯母君なる、富徽の前は日に添ひて、御惱重らせ給ふ。夫のみならずわが妻と、なりしを憎み給ふならん。今は御身の母にさへ、親しくは語ひ給はず。されば便のなき身ぞと、思ふも道理さりながら、われても末に逢見たる、一方ならぬ夫婦の中、御身はたとひ石堂づれが、女房と呼ばるゝを、不足と思ひ給ふとも、我は只々いとほしう、思ふを力とし給へかし。よしや望のその人に、添ひ給ふともあなたには、妾側室の數多あり。されば情を懸けたまふ、暇のなくて眞實は、よも我ほどには盡されじと、思ふも心苦し」とて、不圖いひ出したりければ、顏はいと赧く、匂ひ溢るゝばかりの愛敬にて、涙落せば悋氣より、心變りのしたるなど、そのむかしの萬の罪、忘れて可愛く思ひけん、猶も親しく側に居寄り、「など子をば生みまたはぬ。かの契深き人と、添

の結構、元の如くに建改めん」ト、聞いて人々安堵の思。稲舟姫は晝寐の夢に、告げ給ひたる父の詞、違はぬにつけ戀しさの、なほ彌增して顔をも上げず。光氏衣紋搔整ひ、「須磨や明石の浦人に、立交りつゝ衰へたる、浮世語は又重ねて、ゆる〳〵聞え盡さん」ト、別を告げたまふ頃は、夜もはや更けて冴渡る、月は南の方に廻り、雨戸の開きし所より、さばるべき廊下なんども、皆打崩れて軒の端も、殘りければ華やかに、さし入りたるにあたり〳〵、能く見渡せば廚子黒棚、屛風衝立脇息褥、すべて内のしつらひは、しのぶ草に窶れたる、外の見る目に引かへて、何とやらん床しげなれば、光氏心の中に感じ、むかし〳〵の子供話に、未來の爲とて親の建てたる、阿彌陀堂をその子は毀ち、芥子畑になしゝとか。それを今は言違へ、堂の圍へ芥子植ゑてと、手毬唄には謠ふめり。かゝる不孝に引かへて、稱舟姫はこの如く、物凄じく荒れたれども、父の住居を改めず、同じ樣にて年ふりしは、一世に有難き孝子なり。たとひ詞に出さずとも、浦曲に隔てて住みける中は、つらき仕方と思ひつらん。あゝいとほしき事かなと、思ひながらに立出でて、嵯峨の館へ歸りけり。

地水火風の四ツの緒の、果敢なく絶えし琵琶之助、空に歸るは水無月、文月、葉月と夢の間に、七七日になりければ、石堂夫婦打連立ち、蓮臺寺へ詣でけるが、此日は主人光氏君、亡き母上

給はん。返すぐ〜も宗全を、あつまり勢と見侮り、須磨へ下りしその後にて、防の人數の足らざりしは、わが一生の過失なり」ト、うらなく語ひ給ふ時、早百合は靜に御前へ出で、「只今も姫君の、仰の通りにあなたをお恨み、遊ばすなどといふ樣な、御心はさら〳〵無し。御艱難のその中に、何やかやと御側から、申上げても取上げ給はず、今暫く辛抱せよ、光氏君のお歸りあらば、よしなに計ひ給はらんと、宣ひながら御胸の中には、お心細う思召すか、御涙の隙はなし。さればとて光氏君は、情なしとも辛しとも、神かけて仰せられた、事はなけれど唯お心に、かゝるとおぼしく玉兎の鏡は、父の形見にあるものを、御手に入らばなど此方へ、返しては給はらぬと、折節の御物語」ト言ふに光氏打點き、「尤もなる事ながら、かの鏡、小烏丸、勅筆の短冊は、武家の三種といふべき寶。さる故に室町の、寶藏に籠置きたり、御用の節は取出さん、暫くそのまゝ差置かれよ。その代にといふにもあらねど、進らする物あり」とて、恭しく袱紗包を取出して渡したまへば、稻舟姫は押戴き、燈火の下に開き、「男文字にて讀め難し、是は何ぞ」ト問ひ給ふ。其時光氏進出で、「此度滅びし山名親子が、今まで領せし所々、取集めて三ケ國あまり、稻舟姫の化粧料に、附けられんといふ義尙公の、御墨附に候なり。明日よりして蓬を拂はせ、この園の見苦しき、あたりは假に板垣を、打固めて繕ひ置き、遠からぬうち館

程もなく、光氏は入來り、絶えて久しき事どもを、代る〴〵に述べをはり、さて光氏は近く進み、「年頃隔てて住みながら、心ばかりは更に變らず、紲の館はいかにぞと、忘るゝ隙は無かりしかど、わが手配の行屆かず、敵の道を塞ぎし事は、驚かし聞ゆる者、なかりし故に斯くばかり、見るもいぶせき草隱れに、過し給ひし年月の、あはれなりしをゆめ〳〵知らず。我生存へてあらん程は、絶えず貢を進らせんと、言ひしに違ひし罪は更に、脱るべき道もなし。今より後は御心に、叶ふ樣に取計はん。今宵わざ〳〵來りしに、めんじられて年頃の、怠は幾重にも、思し容させたまへかし」ト、從弟どちにはありながら、伯父の嫡女にあんなれば、身を謙り懇に、罪を謝びつゝ膝摺寄せ、屛風を少し搔遣りて、稻舟の體を見るに、いとつゝましげに差俯伏き、頓には答も聞え給はず。やゝありて顏を上げ、「分入りたまふ叢の、いと淺からぬ御志、むかしより能く知るからに、何とて恨み侍るべき」ト仄に聞え給ひければ、光氏は猶邊を眺め、「小高かりし松が枝も、雪にや折れけんむかし見し、その庭面ともおもほえず。此所のみならず都の中、變りにける事いと多く、さま〴〵哀れにむかしより、過來し方の年月を、かぞへて見ればこよなう積り、夢の樣なる我身の有樣、御身はなほさら父君母君、早く此世を去りたまひ、花を眺めず月を愛でず、たゞ埋れて暮し難き、その折々の事どもを、誰にか語り慰め

り來、「我こそ早く此世を去りし、御身の父の義勝なれ。庭の萩は霜に枯れ、花咲く宿となりぬべし。あれ見よ〳〵」との詞に驚き、稲舟邊を顧れば、げに〳〵今まで荒果てしも、玉を磨き黄金を展べ、輝くばかりの館の結構。それより日頃懐しき、父を親しく見し嬉しさ。逢ひたかりしと取縋ると、思へばその儘夢覺めて、いと〳〵名殘悲しう思し、かの村雨の其所此所漏りて、濡れたる縁を押拭はせ、褥を敷き屛風を廻らし、取整はせつ欄干に、打凭れ暮行く空を、打眺めつゝ寢もやらず。

さなきだに濡るゝ袂へ秋の雨

古き軒端を見上ぐるも、心苦しき程になん。早百合は忙しく馳來り、「光氏君の御出に、侍るなり」ト告げければ、さればこそ都にだに、歸り給はゞ捨置かるゝ、事にはあらじと待ちたりし、詮こそあれと嬉しけれど、いと恥かしき有様にて、對面せんも心苦しく、思す氣色の見えければ、早百合をはじめ腰元ども、唐櫃を持來り、かの紫の上よりして、今様染の帷子なんど、去頃贈りたまひしが、數多あれども塵積る、館に綺羅のみ飾りても、何かせんとて今日までは、見もしたまはで置きたるを、取出したりけるに、この唐櫃は炷物を、多く籠置きたまひしゆゑ、懐しき香の移りたるを、いざまづ是をと召換へさせ、かの煤けたる屛風を隔に、引廻す

二十三編　上

光氏は思ひ直し、「返らぬ愚痴に隙取りし、片時も早く稻舟姫に、對面せん」と宣ふを、惟吉暫しと押留め、「あれ〳〵蓬のあの露けさ。まづ少し拂はせて、其後分入り給ふべし」ト、申上ぐれば打笑みつゝ、

露時雨深きよもぎや路もなし

「我こそ分けめ」ト乘物より、猶下りたまへば御先の、露を鞭にて拂ひつゝ、やう〳〵にして入れ奉る。實に宮城野にあらねども、木の下露は雨にも勝り、御傘を奉らんと、立騷ぐばかりなれば、御袴の裾なんども、甚う露に濡れしなるべし。むかしだに有るか無きかの、中門なんどは跡もなく、入れば入るほど荒館、何の爲にかかゝる所へ、おはせしならんと見咎むる、人もなければ心安く、惟吉を先に立て、再び案内を乞はせけり。

此館の姫君も、今日は朝より村雨の、折々に降りければ、一入心の結ぼれて、さま〴〵物を打案じ、心氣疲れし故ならん、眠るともなき晝寢の夢に、衣冠正しくまだ若き、人の親しく側に寄





偐紫田舎源氏第二十三編叙

楠死んで太平記、花和尚悟つて水滸傳。そも〳〵源氏も須磨明石の、月にかゝれる薄雲の、巻あたりは讀者の、眠氣のさす所多し。田舎源氏は殊更に、婦女子に見する册子なれば、そこらをば書漏らし、玉葛の巻あたりへ、飛んだらば御見物の、厭がこぬでよからんなどと、無用世話をやく者ありしが、さまでは思ひきりかねて、此編は澪標と、蓬生の打てがへ、關屋も縁語に聞えながら、碁を圍みしを垣間見の、そのをり程は空蟬に、逢ひ給ひてもをかしからず、書もらせよといひし人の、詞の是なるをこゝに知り、唯松風のさら〳〵と、おほむねのみを綴りしかば、更に興なく風情もなし。されども前後の鎖なれば、御もとめなされて歌川の、縮合ばかりも見たまへと、かしこまりて記すになん。

天保丁酉開端　　柳亭種彦誌

さては君の仰の通り、御館にて有りけるかと、惟吉は近う寄り、「今宵密に光氏君、姫上に申させ給ふ、御事ありとて御乘物を、あれに停めて待ちたまへり。變らせ給はぬ御有樣に、侍るならば此趣、申上げさせ給へかし」ト、聞いてやう〳〵心落付き、打笑ひつゝ女ども、縁先まで出來り、「變らせ給ふ事あらば、此樣な淺茅が原を、移ひたまはで在すべきか。御機嫌は宜けれども、見るから知れた今までの、御艱難の事どもは、たゞ推量りて光氏君へ、聞上げさせ給へかし。若い時から久しい間、御奉公申したが、此樣に珍しい、憂目を見たる事はなし。敵が道を取切つて、往來がならぬとやら」ト打くつろいで問はず語も、しつべき樣のむづかしさに、「よしよし君へまづ斯くなん、聞上げん」ト出來れば、光氏は待兼て、「何としてかは暇どりし。むかし分けたる跡だにも、見えぬ蓬の繁さかな」ト宣へば惟吉は、「しか〴〵に申し寄り、樣子を尋ね候處、姫君には御安泰、早百合も變らず居るよしなり」ト、ありし事ども聞ゆるにぞ、しば〳〵吐息をつき給ひ、「斯く草深きその中に、何心地して過しけん。國を隔てて住むとても、斯くと知りなば使を立て、仕樣模樣もあるべきを、あゝ情なき振舞と、今まで我を恨みつらん。その怠を詫びんとすれば、人の非を擧るに似たり。あゝ如何にせん〳〵」ト、歎息してこそ居たまひけれ。

て御入あらば、御供の者も笑ふべし。某ひとり尋寄り、いよ〳〵それか音づれて、試み候それまでは、此所にて待せたまふべし」ト、言ひつゝ門の内に入り、人の音する方やあると、木草の繁き廣庭を、廻り〳〵て尋ぬれども、聊に人氣もせず。さればこそ表より、見入れし如くあき家なれ、人の住みけも無きものをと、歸り出でんとする折に、村雲散りて月明く、さし出でたるに能く見れば、雨戸を二間ばかり開けて、簾の動く氣色なり。僅に人の住めるを見つけ、人氣の無きと思ひしより、却つてぞつと怖氣立ち、恐しくさへ覺ゆれど、立寄りて「物問はん」ト、言ひつゝ内を窺へば、彼方にても此方を怪しく、思ふ樣にて出でもやらず、老女と思しき聲音にて、まづ苦しげに打咳き、「さいふは誰ぞ、何人ぞ」ト、問はれてさすが姫君の、御館は是なるかと、尋ねんも憚なれば、今花鄕は木屋町に、住むと知りつゝ試みに、彼が事を問ひて見んと、戸の隙間より差覗き、「某はやんごとなき、御館に仕ふる者なるが、綾浮殿と聞えし女中に、對面したし」ト言ひければ、「それは他へ移られたれど、早百合といふお腰元が、何かの事を此頃は、心得て居らるれば、御用があらば其人へ、言入れたまへ」トいふ聲も、打わなゝくは光氏の、侍なりとは思ひもかけず、近頃見馴れぬ若男、忍びやかにもてなして、馴々しげに言なすは、かならず狐の變化にて、誑すなるべしと、思ひ違へて恐ろしく、身の打慄ふ故にてあり。

めに法華八講、執行はんと鳥部野の、蓮臺寺へはや先刻、申遣し置きたるが、たしかに青葉の菩提所も、かの寺なる由豫て聞く、七七日に琵琶之助が、當るも不思議の縁とやいはん、序ながら墓へまゐり、對面せん」ト宣へば、國助いよ〳〵涙に搔暮れ、「そは勿體なき事ながら、未來において嘸大慶。とかく申上ぐるうち、日も暮果てて候へば、御暇たまはらん」ト、退出づれば光氏は、頓て衣服を脱ぎ更め、稻舟姫を音づれて、聞ゆる事のある由を、紫へ密に言置き、小門口より出でたまふに、日和癖なる村雨の、今宵も少し打そよぎ、をかしきほどに月出でたり。そのむかし六條の、廓通ひせし折の、道すがらの事なんど、思出でて行く程に、川合の社もはや、過ぎたりと覺しき頃、駕籠の中より不圖見れば、形もなく荒れたる家の、木立は森の樣に繁り、大きなる松に蔦の、纒ひ懸りて葉に置く露の、月影にきらめきて、風にさと靡きたるは、藤ならねどもいとをかし。見し心地する木立かなと、思すははや此館なり。それよと駕籠を停めさせ給ひ、例の忍び歩きには、いつも外れぬ惟吉を、近々と召寄せて、「此所は糺の館ぞかし。今宵わざと訪ふ由は、最前いひきけ置いたるに、側に附添ひありながら、うか〳〵と乘物を、何所まで舁かするぞ」ト、咎めたまへば惟吉は、邊をつく〴〵打眺め、「そのむかしより荒れたりし、御館には候ひしが、此所は正しく藪原にて、其所とは思ひも寄らず。人の住まざるあき家へ、門違し

き。

光氏は願の趣、室町殿にて聞濟まるゝや、否やを案じて在しけるが、其日は暮れて燈火を、掲ぐる頃に遊佐の國助、道を急ぎて來りけん、しとゝ汗に濡れたるを、拭ひもあへず御前に出で、「まづ御心安かるべし、御願の趣を、室町御所にて早速御許容、其事即ち東山へも、言上に及びし處、光氏が取計、神妙なりとてこよなき御機嫌。義尙公の御墨附、御請取下さるべし」ト、差出せばはつとばかりに、身を謹みて押戴き、三寶に載せ給ひ、「漸く是にて安堵せり。彼方此方と隔たる道、嘸かし今日は疲れたらん。さて序ながら問ふべきは、今在京の大小名、昨日よりして追々に、わが此館を訪ひて、大方逢はざる者はなし。たゞ青葉琵琶之助、彼のみ未だ使者さへ越さず、いかなる故ぞ」ト光氏の、仰に國助目をしばたゝき、琵琶之助は當春より、病に冒され六月の、下旬にあへなく世を逝りぬ、たしか明日七七日に、相當るとか承はる。馬之丞御目見に、罷出でたる其時に、申上げんと存ぜしかど、久し振にて尊顏を、拜して目出たき折からには、何とやらんいまはしく、差控へ候とて、御次にての物語。存生に候はゞ、眞先かけて參上し、私どもと同樣に、喜ぶべきを」ト言さして、差俯けば光氏は、一方ならず打驚き、「知らざりし知らざりし。桂樹はさぞ愁傷、あはれに果敢なき事にてあり。明日は母花桐の、菩提のた





踏過ぎて來ざりければ、用心もなき野ら藪なれども、流石に姫の住みたまふ、一間の内はむかしの儘に、そのしつらへ露變らず、掻掃などする人もなければ、机手箪笥すべての調度も、据置きたる所にありて、塵ばみながら失せもやらず、外になすべき事もなければ、古めきたる御厨子を開け、骸守、藐姑射の刀自、赫耶姫なんどいふ、繪にかきたる物語を、まさぐり物としたまひて、明し暮したまふ程に、やう〳〵都の合戰も、音川勝利と聞えし頃、遊佐の國助罷出で、敵に道を遮られ、無據今までの、怠を深く詫び、荒れたる館を取繕ふ、それまでには至らねども、是より萬取賄ひ、國助嵯峨へ出でたる時、この事を聞えければ、紫の上驚きたまひ、稻舟姫を等閑に、捨置きたまふは恐れながら、義正君の御過と、つね〴〵夫の御物語、今までかゝる御艱難を、知らで過ぎしぞ愚なる。まづ取敢ず時の衣服を、まゐらせんとて言の葉を、御使に立てさせられ、稻舟姫はそれかれに、力を得つゝ少し心の、をさまり給ふ程もなく、義正公の御勘氣許り、播摩よりして光氏君、都に歸り給ふとて、上下の男女歡び騒ぐを、姫上も聞付けたまひ、ありしよりは家居も荒れ、淺ましけれど心を配り、はかなき調度を取失はず、待ちに待ちたる詮こそあれと、いと頼もしくぞ思されける。

此所より上册八葉め、（本書四十二頁）國助に命じて、室町へ願を出し給ひし物語のつゞ

妾に見よ、もてあそべ用に立てよと、仕置かせ給ひし手道具ども、など輕々しき人の家の、飾に譲り與へんや。亡き父上の御本意に、違はん事こそ恐しけれ」ト、叱り懲して一品も、さる業はせさせ給はず。霜月ばかりになりぬれば、雪霰間なく打散り、外には消ゆる間もあるを、木立も草も我儘に、繁りて朝日夕日をふせぎ、いと深う積りたるは、越の白山思ひやらる。今は更に訪ひ聞ゆる、人もなき御身にて、たゞ室町の水原ばかりぞ、綾泙が御恩を受けたる、姫上なりとて里へ下る、その折々は御機嫌を、伺ひに出づれども、是もふるめき人なれば、御慰めになるべき程の、浮世語は思ひも寄らず、御いたはしき御有様を、見上げては只泣くのみなり。既に前にも記しゝ如く、下部も次第に散行けば、誰あつて庭の草を、掻掃はんともする者なし。かゝるまゝに淺茅は、庭の面も見えず茂り、蓬は軒を爭ひて追登る。葎は西東の門を閉籠め、弛ぐ氣色の見えざるのみは、門をさしたるよりも、賴もしく思はるれど、崩れがちなる圍の垣を、踏平して路をつけ、春夏は童ども、馬牛を牽來り、草を飼ふぞ目覺しき。八月の嵐荒き年、廊下どもも倒伏し、臺所の屋根なんど、はかなき板葺なりし所は、骨ばかり僅に殘り、此所には止る下司だになく、朝夕の煙絶えて、あはれにいみじき事多かり。盗人などいふ横道者、さては戰に打負けて、引剝なす雜兵も、取るべき財のあるまじと、この館をば見侮り、

聲うちあげて泣臥したるは、かの山猿が赤き木實、ひとつを顔に打當てて、放たぬ様に見えたりけり。口さがなき様なれば、詳しくは茲に記さず。」

此頃都の戰を怖れ、洛東の靜なる、所を尋ねて妻子を引連れ、隱れ住む其中に、有徳なる町人ども、寮と名づけて下屋敷の、面白き家作、好む者等が此館の、池も木立も古びたるを、心につけて放ちたまはゞ、好き價に買はんなど、便を求めていふも有り。例の道を辨へず、心の賤しき女どもは、彼等が望にまかせられ、狹く綺麗にこの様な、怖しからぬ御住居へ、移り給はゞ御心の、少しは安まり侍るべし。御側に候ふ者も、此様にては堪へ難しと、勸めても聽入れたまはず、「人も聞かんに靜に言や。妾が命のある中は、此所をば立去らじ。斯く荒れぬれど父の御影、まざ〳〵とまる心地する、古き住家と思へばこそ、夫に心も慰むれ」ト、袖を押當て打泣きつゝ、家を賣りて他へ移る、事は思しもかけ給はず。又此館の道具ども、いと古代になりたるが、昔様にて麗しきを、此頃はやる生茶人、義勝君の好にて、何は誰にせさせ給ひ、それは彼が造る處と、尋ね聞きて是も亦、黄金に換へんと自から、かゝる貧しきあたりと思ひ、侮りて言ひ來るを、例の辨へ知らぬ腰元、不用の物を黄金に換へるは、世の常にある事なり、目の前の見苦しき、所を夫にて繕はんと、姫君には取隱し、賣らんするを見咎めたまひ、「父君の

上げて御力を、添へらるゝ事もあらんと、夫を便に秋もたち、冬にもなれど音信なし。是は前にも記しゝ如く、光氏愼深くして、村荻に對面せず、兎角いふ間も荒磯を、引立てられて村荻は、其儘過ぎし故なりと、いふは白髪に腰屈り、古く仕へし女ばら、疎き目元をしばつかせ、「盛んなる者は必ず、衰ふるが世の常ながら、あゝ姫君の御運の惡さ。思ひがけなく神佛の、現れたまひて應驗利益を、施したまふ樣なりし、世に有難き光氏樣は、遠く在して近くは戰、頼む方なき御有樣。いたはしさよ」ト呟き歎く。實に義勝卒去の後、絶えて訪ふ人なかりし頃は、それに目馴れて淋しとも、さまで思はず過したるを、なか〳〵に出入も繁く、召仕ふ男女の數も、增して少しは賑しくもなりたるが又元の樣に、復りし故に猶堪へ難く、思ひ歎くも道理なり。多くは此所に仕ふる者、かの光氏が勢を、藉りて我身を立てんと思ひ、實の心あらざれば、此頃の體を見て、暇を乞ふあり走るあり、月日のたつに從ひて、上下の人少くなりぬ。もとより荒れたる館の内、狐なんどの住處となり、木靈などいふけしからぬ、怪しきものまで人目なければ、所得顏に形を現し、琵琶琴の音に引變り、朝夕耳に馴らるゝものは、茂り次第に疎ましき、庭の木立にのりすれと、梟の鳴く聲のみにて、物わびしき事數知らず。姫上もねなき勝に、いとゞ思し沈みたるを、紅は見奉り、愚なる心にも、御いたはしと思ひけん、

集めて髢に作りし、淸らなるがありければ、をかしげなる箱に入れ、衣に留めよと香一つぼを、添へて下し給ふにぞ、村荻は押戴き、涙に咽びて詞もなし。姫も今更名殘の惜まれ、立寄りたまふを隔つる佐賀輪、「暇取る中にあの樣に、暗うなりぬ」ト呟きつゝ、心も空なる村荻が、手を引き駕籠に押入れて、「早く／＼」ト差圖を心得、急ぎ館を立出づれば、只かへり見のみせられけり。姫君も稍見送り、むづかり給ふをさま／＼に、諫め宥め參らする、早百合を初めまめまめしき、腰元どもには引換へて、物も知らざる下司なんどは、此所の住居に倦果てて、佐賀輪とやらんの詞に任せ、下りたまふ方こそ宜からめ。御開運もあるまじき、御身をいかに思してか、此所を守りて在するならん。うか／＼仕ふる所にあらずと、おのれ／＼が身寄を考へ、緣につき主人を變へ、此所には止るまじう思ふ事どもを、口さがなく呟く者もありしとぞ。

上の卷にいふ如く、物語前に戻り、此所は三年以前、光氏須磨へ下りし年の、七月のすゑか、八月のはじめつかたか、その程の事なり。

斯くて後都には、いよ／＼合戰止む時なし。されば遊佐の國助より、この館を賄ひの、それかれを送る事、全く絶えしといふにはあらねど、此騷動の隙を計ひ、たまさかならでは其事なし。故によろづ乏しくて、あるに詮なき御有樣、村荻須磨へ下りなば、この趣を光氏君へ、聞え

ト故主贔屓の腹立聲。此方の一間に聞居る村荻、早百合が言葉は道理ながら、我身彼處へ下りなば、須磨へ立寄り若し君に、逢ひまゐらする事もやと、立出でて彼方此方を、押宥め押鎭め、「物騒しき都より、田舎なれどもお心の、安い所へ姫君の、お供をせんと佐賀輪殿の、言はるゝのは皆もつとも、早百合のいふも聞えてあれど、中に見て居る心苦しさ、推量しや」もひそひそ聲。稲舟姫は遙に見やり、「世につるゝといふ事を、能く知るからに物果敢なき、かゝる住家も苦にはせぬ。光氏君とは一方ならぬ、契もあれば浦吹く風の、つてにてもこの憂身の有様、聞付けたまはゞ使を立て、かならず音づれ給ふべし。若し其事もないならば、斯うながらこそ朽ちもうせめと、心を定めて居るなれば、妾が事は捨置け」ト、助くべうもあらざれば、佐賀輪は言はん詞なく、「さらば村荻殿ばかりを、日暮るゝまゝにはや〳〵」ト急げば心あわたゞしく、姫君に打向ひ、「私方へ参りし書状、兄の手跡に紛れなく、君の仰に侍れば、背くべき謂もなし。とはいへ傅き参らする、人も少きこの御殿を、心の外に出立つが、いと苦しう侍る」とて、歎けば姫の御眼も潤み、「御身にさへも捨てられて、心細さは彌増せど、止めん方も浪路の上、平に著きし便を待つ」ト、涙隠して餞に、それか是かとさま〳〵に、思ひ給へどなれ衣の、汐なれたるは傍に、佐賀輪が見る目もはづかしく、わが髪の毛の落ちたりけるを、取

にこ打笑み、「いかにも道理は左様なれど、夫は皆義勝公の、世に在せし時の了簡、世につるゝといふ事を、思し知るのが御身のため。光氏君をうか〳〵と、賴にされるは大空の、星の光を盥の水に、映して眺る樣なもの、御身の上が遙に違ふ。かくむくつけき御住居も、光氏君の御歸り有りて、造り磨かせ給ひなば、今見し樣には引かへて、玉の臺になりもせん、いと賴もしき事ながら、只今は國助の、娘の外には御心を、移さるゝ方もなく、昔よりして折に觸れ、通ひたまひし所々、みな忘果て給ひたり。ましてやかゝる物果敢なき、藪原に貞節を、守りて暮し給ふとも、我のみ賴む有樣の、不便と心付かせられ、尋ね給ふは覺束なし」ト言ひしらするを漏聞く稻舟、光氏君の仁義を守り、今まで我をみつがれし、とは知らずして添臥を、したる女とひとつらに、思ふがをかしく顏に袖、笑を隱して居たまふを、佐賀輪は見上げてつく〴〵と、泣き給へると心に點頭き、「夫を譽むるやうなれど、重篤を御賴みあらば、御身の落付宜き樣に、計ひて參らせん。良清殿が妹御を、腰元に使うてくれと、言はれても勢は、知れた事ぢや」ト言はせも果てず、早百合は膝を突懸けて、「仁木も伊豫に領地廣く、畠山に劣らぬ大名、村荻樣を奉公に、何の賴まう今山名に、尋ねられる御身ゆゑ、女中のなかへ打交ぜて、連下つて給はれど、言はれしといふ事は、ちよつと聞いても知れてある。それがあなたはわがらずか」

くがよいと、村荻に密にいや」ト宣ふ内、佐賀輪は邊を見廻しく、館は荒れて物果敢なく、垢づくまでにはあらざれども、いとなよやかなる皆練の、單衣を著なして姫君の、心苦しき御有樣を、例の思ひあがりたる、心より見侮り、村荻と諸共に、この姫上をも連下り、娘どもの使人と、なし參らせば方便なく、かくて在すに遙にまさり、素性宜しき人なれば、子供もそれを見習ひて、惡しうはあらじ。今まで噂に聞きしに違ひ、御顏容の麗しきこそ、幸ひなれと、身の程をも顧ず、早百合を次の一間へ招き、「今御琴を遊ばしたるを、參りがけにうけたまはれば、世に類なき御音色、娘どもにも聞かせたし。田舍などはむづかしき、ものの樣にも姫君は、思遣り給はんが、一向に頑なる、人ばかり住むものでもなし。分聞け給ひて諸共に、讃岐へ御下り遊ばさば、よも疎略には待遇さじ。斯くてうかく在しても、又萠出づる春に何時、逢ひたまはんか程も知れず。世の憂き事は見えぬ山路を、尋ぬるとかいふ歌もあり。お勸め申したまはれ」ト生憎氣なる詞ども、聞いて早百合は膝に手を上げ、「御男子なれば世を治め、たまふ御身といふ事は、いはずと知れし稻舟樣を、娘の友達同樣に、連下らんとは餘りの法外。尤も都は戰の中、事鎭まるまで讃岐へ御座を、移さんといふ願なら、重篤殿より室町御所へ、申上ぐべき筈の處、あまりといへば輕々しい、女の差出たおつしやりかた」ト言へば佐賀輪はにこ

居るは知れた事、迂濶に人に逢はするなと、良清へ御言傳、山名の廻者ではないか。其方は次で聞いて居や。早う〳〵」ト村荻を、忍ばせたまふ表には、いつまで斯くて待たすると、心焦られて、「物申さん、案内乞はん」ト再び言はせ、「良清殿のたつての頼み、村荻殿を誘ひたてんの、心にて參つたり、妾の用には侍らず。御取込もはんべらば、畠山の屋敷まで、村荻殿に來らるゝやう、傳へたまへ」ト言ひければ、早百合は會釋し、「何かは知らず、姫君御逢ひなされんとて、あの奥の間に御待ち」ト聞いては流石に立破り、歸りもならず打通り、まづ初めて御目見の、事を述べて膝を進め、「此度夫重篤事、仰を受けて妻子を引連れ、本國讃岐へ下るべき、用意を致しゝ其處へ、仁木良清密に來り、紀河原の御館へ、忍ばせ置きたる妹の村荻、同道なして伊豫の領地へ、下るべき段光氏君の、御内意に候ところ、山名へ餘類の者多く、彼が尋ぬる村荻を、我のみにては連退き難し、幸ひ御身は嫁娘、多くの女を引連れて、船にて下るの由なれば、その腰元の中に加へ、給はれといふ餘儀なき頼み、夫重篤早速承引。然るに敵兵この紀の、道を取切り往來は、自由ならずといひながら、物詣の女なんどは、咎むる者なく候間、乘物も別に釣らせ、妾が迎へに參りたり。證據には此手紙、良清殿の手跡なれば、村荻殿の見覺あらん」ト一通を差出せば、稻舟は腰元の、耳に口寄せ、「兄の手に、相違なくば佐賀輪に逢ひ、連立つて行

二十二編　下

彼方にてもゆくりなく、人の來るを見つけし體にて、あさましう煤けたる、屏風を急ぎ引廻し、出來る腰元女を、佐賀輪つく〴〵打見るに、物思ふ故ならん、形などは衰へながら、なほ物清げに賤しからず。御顏の醜しと、噂の高き姫上と、恐れながら取換へなば、よからましと心にをかしく、夫の姓名わが名を名乘り、村荻殿に用事あれば、逢ひたき由をぞ言入れける。この取次に出でたる女は、早百合にてありけるが、御前に走り歸り、「畠山重篤の女房、佐賀輪と申す者、ぶしつけをも顧ず、御玄關まで駕籠を乘付け」斯樣々々と言上ぐれば、稻舟は琴押遣り、村荻の方を見かへり、「その佐賀輪といふ女子は、其方の身寄か近付か」ト問はれて少し進出で、「身寄どころか遂に一度、逢ふた事もござりませぬが、噂は聞いて居りまする。その佐賀輪は若い時、富徽樣の下婢を、勤めたとやらそれ故か、夫や子供が光氏樣を、お譽め申すと意地を張り、なほ惡しく言ひなして、高慢者ぢやといふ取沙汰。何の用かは知らねども、ならう事なら逢ひたうも、ござりませぬ」ト村荻が、語るを聞いて稻舟姫、「其方の行方を統淸が、尋ねて

在したるがあからさきに、見入れられたりければ、〔直ちに下の巻につゞく〕

此水無月は夕立の、しげ〳〵降りて風荒く、加茂川の水溢れ、館の庭は海となりぬ。程無く水はひきたれど、元よりの古館を假に繕ひ置きたるなれば、半年たつやたゝざるに、又昔の樣にかへり、殊更秋の物寂しさ、推量り思ふべし。爰に畠山勸負丞重篤が女房に、佐賀輪といへる者のあり、彼が素性をいかにといふに、輕き武士の娘なりしが、なほ零落れて富徽の前に、仕ふる女の婢となり、米を炊ぎ水を汲み、下が下の者なるを、いかなる間にかかの重篤、見そめて頓て妾となし、男女の子數多擧けぬ。その中に先妻の、死去の跡へいつとなく、押直して奥方と、今は人にも呼ばするなり。元より卑しく育ちし女、幸ありて多くの人に、崇めらるゝ身となれば、思ひあがるは常なれど、殊更佐賀輪は畠山の、内君とかしづかるゝを、女御更衣に備はりし、思ひをなして我に及ぶ、者はあらじと心に慢じ、ある日取分け綺羅を飾り、好き乘物に打乘りて、別に一挺の駕籠を釣らせ、面持氣色ほこりかに、彼方此方を打眺め、物思なげなる樣して、この紀の館へ來り、頓て門を開けさするに、右左の戸もよろほひ倒れ、道を塞げば男ども、立騷いで引起す。兎角して乘物の、儘にて佐賀輪は内に入り、荒れたる宿にも門の道、井の道厠の三ッの道は、必ず分けたる跡あるに、夫さへ能くは見分け難し、あら淋しき家かなと、まづ見下して南向の、遠侍とも思しき所へ、乘物を寄せさするに、姫君ならん琴を彈いて、

人もなく、いみじう心細かりしを、思ひがけなく光氏の、密に來りて某が、思ふ仔細のあんなれば、此所へ通ふと沙汰あるべし、顏をかしげなる腰元は、紅と名を呼ぶとやらん、山名三郎統清を、欺くまでは御身と彼と、姿をかへて居たまへと、彼義政の愛子なれば、そのいかめしき勢にて、館も其所此所造り改め、若やかなる腰元女を、送りて絕えず此所を訪ひ、賑しくなしたりしに、山名音川確執より、かゝる世の騷出來、光氏須磨へ赴くまでも、此上不自由をあらせじとて、此所の館を賄ひの、事ども遊佐國助へ、賴み置かせ給ひけれど、敵兵糺の道を取切り、往來自由ならざる故、かくては道に背けりと、思ひながらに國助より、貢の物もまゐらせず、光氏はまた宜き樣に、彼が計ふなるべしと、國助を賴として、わざ〳〵文にて尋ねもせず、夫も是も便絕果て、心細さは限なし。此頃には山名統淸、合戰にのみ心を入れ、糺を窺ふ體もなければ、かの假の稻舟姬は、元の名の紅に、かへりて腰元女となり、暫しの間紅と、呼んだる眞の稻舟姬へ、早百合を初め日外より、此所へ預け置かれたる、村荻なんどがかしづきて、兎角慰めまゐらすれど、物事うちはにお心細き生にて在すれば、くよ〳〵思ひ煩ひて、その當座は泣く〳〵も、兎角過し給ひしが、日を經るに從ひて、あはれに寂しき有樣なり。

を見合さん、宅へ歸つて休息せよ」ト、暇を取らせ又伊勢へ、喜代之助が迎には、誰をか遣らんと打案じ、かうやうの事につき、なほ種々に暇なく、かの木屋町に今は住む、花郷へは文ばかり、遣して置き給ふにぞ、浪路隔てて住むうちは、諦めもすれ同じ都に、今は歸りて在しながら、つれなき君やとなか〳〵に、恨めしげなりとなん。

作者謹しみて申す。明石の卷此所に終り、澪漂の卷に移るべけれど、例の横縱入亂れて、書取り難き事のあれば、まづ蓬生の卷を引上げ、元へ歸りて、光氏須磨へ移りし頃の事より記す。文は走り繪の遲るゝは、あれ館の繪のうるさきまで續くを厭ふが故なり。

須磨の浦に、藻汐たれつゝ侘び給ひし、その頃は都にも、さま〴〵歎く人多かり。まづ嵯峨の内君は、幼き時より馴睦み、片時離れぬ御中なれば、別は苦しげなりしかど、家は廣く財は多く、父國助は近くに住み、かしづき數多あるなれば、御留守ものどやかに、かの浦邊の御住家を、度々人して尋ねたまひ、御小袖御帷子、時々につけ物ずきなるを、參らせなんどし給へば、少しは心の慰めにも、なりたまはんが人にも知られず、光氏のみを賴として、世を經しもののの今更に、心を碎くも數多あり。其中にもかの稻舟姫の、御身の上こそ痛ましけれ。義勝公いと果敢なく、夫せさせ給ひし其後は、只僅なる田畑を、讓られしのみはかぐ〵しき、後見の

かき集めたる此藻屑、人に知らせず屆けよ」ト、殊更に引隱し、細やかに書置きたる、文の端に筆を染め、

朝霧や明石の浦を思ふ哉

くれ〴〵も見るめなき、浦にて渡せと件の文を、投遣りて立歸り、「偖高直にいふべきは、昨日御所へ出でたる處、富徽の前の御病氣、善しとも惡しとも御沙汰なし。彼方は何と思すとも、此方に隔つる心はなし。汝の妻は御ゆかりの、者にてあれば是より內々、御對面ある樣に、申上げてはくれまじや」ト問はせたまへば聲を潛め、「此頃はなほ御惱、重く在します由なれば、昨日夕暮方よりして、愚妻篠喜代御容體を、伺ひに罷出で、私今朝出仕の處へ、罷歸つて囁くには、夜半ばかりに義尙公、奧殿へ渡らせられ、善人を佞人の、嫉むは常の事にてあり、その讒言を實と思ひ、弟ながらも罪なき者を、沈めおかば物の報、ありぬべく思ひし故、呼返して只今まで、しめ〴〵との物語、心障を拂ひし故か、心地すゞしくなり侍りぬ。時々發りて惱みたる、目も爽ぎ候べしと、宣へば富徽樣の、水の泡とは消えもせで、また立かへる浦の波、あら姦しやと打臥して、心やましき御有樣、恐れながら頑ましき、御心なりとの物語。御對面あるべき事は、覺束なく候」ト、申上ぐれば光氏は、しば〳〵吐息をつきたまひ、「さあらば折

らざれば、ともに萎れて光氏も、思はず時刻を移しゝが、思ひ直して座を立上り、高直は嵯峨に在りとや、己が歸りを待ちつらん。さあらば」とて立出でたまひ、又乘物を急がせて、館に戻らせたまひけるに、赤松高直のみならず、石堂の馬之丞、遊佐河原之進國助はじめ、忠義無二の者は更なり、心の底には此君を、さまで慕はぬ輩まで、東山の名だたる御愛子、再び都へ歸らせたまへば、人より先にまめ〳〵しき、志を見せまゐらせ、それを便に己が身を、なりいでんと思ふより、諸士の面々雲の如く、嵯峨の廣間に居ながれたり。是は光氏歸京の日、室町より數多の人を、出さるゝにつき其外の、出迎は無用なりと、豫て觸置きたまひし故、今日を待つけ來れるなり。それ〴〵に對面し、皆歸し遣りたまひ、國助と高直の、兩人を留置き、奥へ招きてまづ國助に、打向ひて宣ふやう、「我室町へ願あり、其趣を認めて、唯今汝に渡すべし。可相成は夕暮までに、御聞濟の御返書を、乞受けて來るべし。若し東山へ伺ひて、其上にてとの仰あらば、わが願書を汝直樣、父上の御覽に入れ、事濟むやうに計ふべし」ト、何事やらんさら〳〵と書認めて、「急ぎの用ぞ、能く心得よ」ト仰に國助、「畏り候」ト引退くその跡へ、かの宗入より御送に、これまで參りし侍頭、御暇を賜らんと、申す由を訴へければ、「それ暫時留置け」ト、手箱より文取出し、其者に密に逢ひ、「汝明石へ歸るとや、その歸る波につけ、

し。

長き夜も遂に明けぬ。光氏は母花桐を、さやかに見たりし夢の後、殊更戀しく思ひしが、久しぶりにて杉生に、逢ひたまひしより昔の事ども、猶思出でられて、東山より戻路、まづ鳥部野に赴きて、恙なく歸りしよしを、花桐の御墓に申し、蓮臺寺に立寄りて、花桐及びその母後室、菩提の爲に法華八講、近きに勤めたまはるべし、日は追て沙汰すべしと、賴み置いて又夫より、赤松の館に至り、案内に及ばず直樣に、打通り給ひければ、政則急ぎ出迎へ、「御著の日は御混雜を推量りて差控へ、昨日は御所へ御出のよし、今日御目見を願はんと、既に倅高直は、我より先にはや今曉、嵯峨の御館へ罷出でつ。思ひがけなき御來臨も、枯れし二葉の根を分けし、若君在する故ならんが、世に有難き事なり」ト、涙とともに言上する、その中に妻小手毬、夕霧丸をいと淸う、粧ひたてて當吉中垣、其外大勢此所の館を、退散らず御見知の、腰元女御目見ながら、傅きまゐらせ立出づれば、若君は手をつかへ、「父上には御機嫌能う、御歸り遊し御目出たう、存じまする」も舌まはらぬ、いたいけ盛り愛ざかり。光氏にこ〳〵打笑ひ、「袴の著なし衣紋つき、とりなり行儀政則夫婦の、躾の顯れ感心せり」ト、是を初に何や彼や、物語したまへば、夫婦はかゝる喜に、つけても例の二葉の上の、御事をのみ言出でて、涙はてしのあ

らせられず、御機嫌能う」と御顏を、つく〴〵守りて珍しう、思したまふかいそ〳〵と、悅ばしげなる有樣に、光氏も絕えて久しき對面の、いと嬉しくまづ手を執り、傍へ誘ひて能く見るに、年の程より丈も高く、成長なして立振舞、いと〳〵賢う見えけるにぞ、それかれの事物語り、せさせて試みたまふに、その應答に才智顯れ、かくてはゆく〳〵世を保ち、給ふとも憚なしと、賴もしく思されて、なほも身近く引寄せて、顏打眺め懷しう、語ひたまふを又例の、隙見して立騷ぐ、腰元女が口々に、「春若君は藤の方の、御標致を受繼がれ、御發明でお綺麗で、噂に違はず光氏樣の、御顏を二ツに寫した樣な、月はひとつ影はふたつの光君、まばゆい程ぢや」トいふ聲の、此方へ漏るゝに光氏は、いとうるさしと暇を乞ひ、遠侍まで出で給へば、思ひがけなき四郎正尙、まづ一禮を述べ終り、「今父上の某を、御側へ招かせられ、夜は更けたれども月夜よし、光氏今宵室町に、在るよしなれば汝迎に、彼所へ行きて連來れ、早く〳〵と待わびたまふ、御有樣に候」ト、聞いて光氏大きに喜び、御勘氣の身にあんなれば、差控へ候ひし。さあらば」とて打連立ち、乘物を急がせて、東山に到著き、御前に出でたまふに、室町御所とは引かへて、茶道を好み侘好の、風情して住みたまへば、侍どもは御側に置かれず、平人の夫婦の如く、藤の方も押竝び、御對面ありければ、一入に哀れなる、御物語もありしなるべ

き手段を心に廻し、打くつろいで其夜は眠り、かの赤松の館なる、夕霧丸を片時も早く、見まく思へど次の朝、室町より召されければ、衣服を更め出仕なし、御對面あるべき一間に、悠然と控へ給ふを、物の隙より數多の女、打集りて差覗くに、年長けたまひし御有様、かの若やかに媚きし、御姿よりもはでやかなれば、須磨とやらん明石とやらん、ものむづかしき片田舎に、今までは何として、住ませたまひし痛はしさよと、今更に泣騒ぐは、義正公の時よりも、仕へなれて昔の事ども、能く知りしものなるべし。義尙公も裝束を、引整ひて出でたまふ。御心地例ならず、日頃經させ給ひければ、御顔も衰へながら、昨日今日ぞ少し宜しう、思されけるゆゑ光氏君を、急ぎて召させ給へるなり。是より積る御物語、しめやかにある程に、秋の日早く西に落ち、折しも十五夜なりければ、月面白う東に上り、靜なる夜の樣なり。義尙の宣ふやう、「かね〴〵文にて聞えし如く、己近年多病となり、管弦亂舞の物の音も、久しく聞かず臥しがちに、引籠りてのみ居たりしが、幸にして男子を擧け、香壽丸と嚴しき、名は命けながら彼はまだ、幼少にてあんなれば、兎に角に心細く、いよ〳〵病重りなば、春若丸に家をも世をも、讓らんものと父に願ひ、此程よりして此所に住ませぬ。是へ呼べ」との差圖につれ、侍女に誘はれ、立出でたまひてしとやかに、遙下つて手をつかへ、「兄上には御道中の、御勞もあ

を島田に結ひたる、小辨の姿の見かはすばかり、女なりしたるを始め、庭木の枝の繁くなり、小松の遙におひのびし、見るものごとに珍らしく、まづ喜の酒酌かはし、打休みて後やう〳〵と、心も靜まり紫が、浮立つ顔を見るにつけ、又かのあかず別れたる、朝霧が歎きし樣、目に浮みて心苦しう、夫婦の中は強ちに、包み隱さん樣もなく、須磨に假住なしてより、雷に波にさま〳〵の、憂目を見たれどさいはひに、命は消えず燈火の、明石の浦へ移りてより、宗入が懇に、欵待す義理に纒まれて、心の外にいと果敢なき、假寐の夢を結びしと、告越したるとき曲りたる、御身の返しの何とやらん、いまだに心がかりなり。全く色に溺れしと、いふにはあらず其人の、事どもは斯樣々々と、聞出でたまへる狀を、紫つく〴〵打見るに、氣強き詞に引かへて、心の底はかの浦に、捨置かれしをあはれぞと、思出でたる御氣色の、見ゆれば偖はたゞならず、情をかけ言交し、たまひしならんと思ひながら、詞に出さず素振に見せず、いと睦しく語ひて、それとはなしに忘らるゝ、身をばおもはず誓ひてしと、ほのめかしたまひければ、はや世に馴れし言樣やと、光氏はいとをかしと聞きなし、かく側近く見るだにも、飽かぬ姿を此年月、隔てて住みしも宗全が、反逆ゆゑと思ふより、猶殘黨もあらむには、狩出して再びかゝる、亂だになき其時は、長閑に添はむもいと易しと、いよ〳〵世界を靜謐に、なすべ

とは、さて三郎は仕合者。さあらば拙者は是より船にて、引返さん」ト退く跡へ、惟吉を呼出したまひ、「汝は今より住吉へ、わが代參に參るべし。須磨の浦邊の假住へ、雷落ちて廊下を初め、所々は燒けながら、此身は更なり人々の、身にも聊か怪我のなく、又高潮の寄すると聞き、命も盡きんと思ひの外、明石へ移りし其後に、却つて敵は波の爲に、鏖になつたるなど、皆この御神の加護に因れり。なほ此所まで平かに、著きたる喜くさ〲の、願ほどきにと思へども、見る如く迎の人、送りの者ども立騷ぎ、俄に心急しくて、我此度は詣で難し、都へ歸りてゆる〱行かん。信を凝して是等の事を、いふべきなり」ト惟吉を、御使として申させ給ひ、出立つ時に引かへて、遊び歩く事をばせず、急ぎ京に入り給ひぬ。

嵯峨の館に著きければ、歸りし人も待ちたる人も、たゞ夢の心地して、よろこび涙せきあへず、立騷ぎつゝ鳴も止まず。光氏は住馴れし、一間所へ打通り、設の席に坐したまへば、紫はよろこび泣に、あからむ目元も恥かしく、さし俯伏きて居るものから、命に換へて止めても、かひも渚に散行きし、花の春には引かへて、又廻りあふ月の秋、心も空も晴渡り、嬉しと思ふ氣色現れ、年月積る物思ひに、かのうるさきまで濃かりし髪の、生際の薄らぎたるも、却つてそれが麗しく、もの〱しげにおひたちて、なほ愛敬の彌増り、言の葉が年のふけたる、犬吉が髪

二十二編　上

光氏は浪華に渡り、船より陸を見渡せば、都より迎の人々、數も知らずに立集り、恙なく著きたるを、喜ぶならんどよめきたり。まづ靜やかに船より上り、良清に宣ふやう、「大儀ながら此船にて、汝は明石へ立歸り、是まで事なく著岸の事、及び此度の入道が、心配りそれかれを厚く謝し、夫より直樣伊豫へ下り、村荻を伴うて、しづかに京へ歸るべし。宗全は首を刎ねられ、統淸は搦捕つて、獄中に在るなれば、はや村荻を都に置くとも、憚なしとは言ひながら、彼が豫ての願に任せ、統淸の死罪を赦し、隱岐の國へ流しやらん、その船出すみての後に、歸り來る方こそよからめ。さるが故に取急がず、伴ひ歸れといふにてあり。はた宗全が餘類の輩、大方討たれし體なれば、はや用心にも及ぶまじ。よりて先年伊勢へ下し、度會の陣屋の守を、言附け置いたる喜代之助をも、近々に召上せ、其方にも久々にて、親子の對面せさすべし。村荻にも其事を、よく傳へよ」トいひければ、良清はつと平伏し、「御意の通り妹の村荻、枕こそかはさねども、一度夫と呼びたる統淸、命は助けたまはれと、豫ての願を聞召し、わけられて流罪





修紫田舍源氏第二十二編序

御子様方に告げ奉る。修紫では稲舟姫、本紫では常陸の宮の、姫君の荒れたる宮に、おはしましゝ事を綴りし、蓬生の巻は、源氏の須磨へ下り給ひし頃より、姫君の落居の事までを書載せて、前後へわたる物語なり。近く譬はゞ忠臣藏の、七段目に平右衛門が、細傳を說かんとて、主人の國へ飛脚に行き、歸りて御家没落に、驚きて非人となり、師直をねらへど討ち得ず、古郷へ赴き父及び、勘平が横死を聞き、連判に加はりて、本望を遂げ早うちに、行く事までを記しなば、三段目の前よりして、十一段目の後へわたり、是、横の竝なり。蓬生もそれに同じ。故に明石の次へ繰あげ、僅に大貳の北の方、のぼりて驚く大詰のみを、澪標のうちに加ふ。もしほたれつゝわび給ひしと、前へもどるは一力屋で、敵は用心嚴しくてと、又五段目の前の事を、いひ出すに齊しけれど、唯詞と文章と、かはるが故に混雜せん歟。

柳亭種彦記

で目出たい事ぢややら」ト言へばとも〳〵立浪も、涙に聲の打曇り、「行末遂げぬ縁ぢやとて、あなたがいろ〳〵旦那様を、お諫めなされた其事も、委しう聞いて居りまする。仰の通り朝霧様の、御身に障りはせまいかと、夫が何より私も」ト歎くを見るも宗入は、いとほしけれどたゞ氣脱の、様になりつゝ詞も出さず。都よりは早打にて、宗全ははや首を刎ねられ、其子三郎統清は、搦捕られしなんどといふ、注進あれども天罰にて、さもあらんとて耳にも止めず、晝は一日寢て暮し、夜は却つて更に眠らず、光氏君と娘の事に、打懸りておこなひも、久しくせざれば珠數の行方も、知らずなりしと手を押摺り、只管佛を拜む様、狂氣に似たれば侍どもに、諫められて月夜に出で、きやうだうといふ行に、打廻りさま遣水に、倒れ入りて岩角に、腰を突きて痛はげしく、病臥したる程になん、少し物に紛れける。

つゆの情を身に宿し、枝も重げの折も折、東山より御迎繁く、此度君の御歸洛は、せん方もなき事なれど、打捨て給へる恨めしさ。御面影の身に添ひて、忘れがたなや戀しや」ト、返らぬ事を口說きたて、只涙にぞ沈みける。母の眞柴も吐息して、「最前からいろ〳〵と、欺しても賺しても、聞入れもせず泣いてばつかり。何の爲に此樣に、朝霧に氣を揉まする事を、あなたは好んで遊ばした。女の知つた事ではないと、私のいふ事露ほども、お聞入れない御氣質に、任せて置いたが惡かつた。常の身體でない娘、この歎から若し病氣を、引出したらば」ト言ふを打消し、「ああ姦しい其方まで、同じ樣な口說事、今言ふ常の身體でないが、あれが仕合光氏君の、いかでか思し捨て給はん。我も願うて置いたれば、おしつけ迎の來るを樂み、藥でも飮んでまづ、氣を落著けて居るがよい。目出たい事に忌々しく、泣顏を見するな」ト、口には言へど打萎れ、座敷の隅に寄り居たり。眞柴は猶も呟き止まず、娘の側に慰めわび、投首したる千鳥を烏渡、尻目にかけて立浪の、ト傍へすり寄つて、「其方達までへその樣に、歎をかくる因はといへば、よしない事を入道殿の、思ひそめ給ひし故、いつしか娘を良い緣に、つけて〳〵と年月の、たつも知らずにあまりに婿を、撰び過したその果に、光氏君を迎取られ、今こそ願ひ叶ひしと、喜ばれしは僅な間、娘は一人の事なれば、婿といふのも是が初に、こんな悲しい目を見るが、なん

ば此浦に、生ひて振なき姫小松、御詠にはならずとも、御園へ移植ゑ給へ」ト、御氣色を伺ふに、光氏も彼が體、いとゞ哀れと思染み、ところ〴〵打あかみ、給ひたる御目の邊、いはん方なく美しきを、袂をもつて押拭ひ、「實生にふた葉とわかるゝを、いかでか思ひ捨つべきぞ。今の嘆は喜びと、なるのを待ちて見給へや。あゝその松は都へ移し、また詠むるも安けれど、再び此所へ下る事、あらじと思へばこの住居を、見捨てて行くこそ悲しけれ。都を離れし其折の、

　霞より霧には深き歎かな

いかゞすべき」ト吐息をつき、思ひ切りて足早に、かへり見もせず出で給へば、宗入はいとゞ猶、物も覺えず茫然と、立てばよろぼひ坐れば轉び、思ひなしにや姿さへ、みすぼらし氣に頭を垂れ、只押默りて居たりしが、娘はいかゞの體なるかと、心もとなく杖にすがり、さながら蟲の這ふ如く、岡の家へこそ至りけれ。

朝霧の心地は更に、譬ふべき方もなくて、形見の衣を抱きしめ、うつぶし倒れ居たりしが、父君見えさせ給ひしと、千鳥に抱き起されて、其方のかたを打まもり、「心も愚に形さへ、人並ならぬ身に恥ぢて、一生人に見えじと、思ひ諦め居たりしを、誰が導か去年の秋、庭に見馴れぬ男郎花、あだなる緣の絲薄、靡かじものと初には、思ひながらに張弱く、終に心も亂れ萩、

記さず。
さて入道の今日の設備、いといかめしう仕うまつれり。いつの間に用意やしけん、いと珍らしき旅の裝束、御側の人々より、下の者まで引いたりけり。光氏の裝束はいふべくもあらず、しひて御著替の數々を、詰めたる長櫃押竝べ、都の土産にし給ふべき、御贈物の類、善盡し美を盡し、殘る隈なく奉れば、光氏頓てその衣服と、脱更めて身に馴れたる、今までの衣どもは、かの岡の家へ送り給ふ。御移香を心にしめ、是なくばとて今一重、嘆を添へる形見なるべし。
かくて夜明も近づく頃、供の支度も調ひければ、光氏は宗入を、近く招きて今までの、心遣且は又、此度の贈物、それかれの事懇に、一禮を述べ給ひければ、只はつ〳〵と平伏して、暫しが間詞もなく、やう〳〵にして顔を上げ、衣紋を正し形を改め、「浮世を捨て此岸を、離れまじとは豫てより、佛に誓ひし身なれども、今日御送にまゐらぬ事、あまりに禮なく且は又、御名殘の惜しければ、せめては國の境までと、心ははやれど子を思ふ、闇に惑ひて足元も、さだかならねば夫さへ叶はず、是にて御暇たまはらん」ト眉に皺寄せいとけなき、童の樣に打泣くは、いとほしながら傍に、侍る若き人なんどは、をかしき顔やと笑ひぬべし。宗入やう〳〵涙をはらひ、「斯樣申さばすき〴〵しき、樣にも聞召されんが、思ひ出でさせ給ふ折、侍るなら

づ夫までの形見に」ト、與へ給ふは圖らずも、御胤を宿し其上に、今調べたる爪音を、あかず哀れと聞き給ひ、いよ〳〵彼を振捨て難く、思ひ給ひし故なるか、心の限り行先も、變らぬ契の事なんど、なほ細々と聞ゆれど、朝霧は兎に角に、別れん事の悲しさに、しやくり上げつゝ答さへ、涙に思ひむせたるも、いと道理と見えにけり。

光氏京へ出立の、其曉は夜深き中に、起出させ給ひけるが、御迎の人々も、騒がしければ心も空に、急がれながら朝霧へは、人の隙間をはからひて、

　うら波の立つも悲しや秋の風

と言送り給ひければ、

　波ならば共に歸らんうらの秋

と思ふ儘をつくろはぬ、朝霧の返を見て、忍ぶとすれどほろ〳〵と、溢れ落つる御涙の、顔を見上げて其心の、中を知らざる人々は、一年餘といひながら、住馴れ給ひし此館を、立別れ給ふなれば、さもあるべしと推量るに、良清などは此浦に、かの淺からず思す人、ある故ならんと諸共に、打萎れつゝ言葉もなし。其外御側に侍ふ者ども、故郷へ歸る嬉しきにも、今日を限に此渚を、別るゝ事は哀れがり、打しほたれて口々に、いひあへる事どもは、こと繁ければ爰に

れて、岩越す波路隔たれば、いつか交さん枕絲、心と共に亂るゝ調子、掻合せつゝ細聲に、なげの情の一言を、女心のあさはなだ、心に深く染めて結んで三重の帶、廻り逢ふのを樂みに、泣いて明石の浦千鳥。

唄ふともなき口すさびを、光氏少し打恨み、

又行廻り逢ふまでの、かたみに契る中の緒の、調は殊に變らざらなん。つま音の違はぬ先にかならずと、いふにいつはり波の聲。

唄ひ添へ給ひければ、忍びやかに掻合する、その程拍子上手めきたり。藤の方の調べ給ふを、世に類なく人々の、賞めのゝめきしは顔貌の、いと麗しく在する故、それに引かれて爪音も、ゆかしく聞なす事もあらん、是はあくまで彈すまし、心にくき音色ながら、霞隱れの藤浪にも、をさ〳〵劣らぬ朝霧に、隔たる船の楫の音、いとゞ哀れに懷しう、まだ耳馴れぬ手なんどを、面白き程にして、彈さしたるは殘おほく、思はせんとの業なるべし。光氏ほと〳〵音色に聞惚れ、かくまで上手と知るならば、この月頃押しても所望し、聞べきものをといと悔しう、差俯いて是も又、吐息がちにて居たりしが、目を押拭ひ顔振上げ、「その爪琴は朝夕に、手馴れて祕藏なる間、この浦邊まで持下り、京都へ歸る泊々の、慰めにもと思ひしが、又廻り逢ひ掻合する、ま

姿のめでたき、夫につけ是につけ、世の中はれて我夫と、呼交されぬ身の程を、思ふに盡きせぬ悲しさを、なほ添へよとや波の聲、秋の風には殊に響き、鹽燒く煙かすかに立ち、見る物聞く物哀れさを、取集めたる所の樣なり。

ト光氏書きて見せければ、朝霧は吐息と共に、

　靡かなん鹽燒くけぶりわかるとも

　かきつめて拾ふかひなきうらみ哉

ト言ふも哀れに打泣きて、詞すくなにありながら、光氏殊に心を籠め、語ひ給ふ節々の、答なんどは淺からず、聞ゆるも猶悲しければ、紛らさんとて光氏が、京より持ちて下りし琴を、急ぎ取りに遣して、珍らしき手をいとほのかに、搔鳴し給へるに、深き夜も澄み、音色もすみ、譬へて言はん方もなく、腰元どもも感にたへ、いよ〳〵座敷の靜りて、物言ふ者もあらざれば、件の琴を朝霧が、膝の邊へ押遣り給ひ、「御身は父に習ひながら、却つて其師知義に、手づかひの似たりと聞き、常に床しく思ひしかど、今日まで更に聞かせぬぞ、返す〴〵も恨なる。さらば形見に一言なりと、聞かせ給へ」ト勸められ、朝霧いとゞ悲しさに、止めかねたる涙は落ちて、うみと呼ぶ名の琴にもあれば、夫につけても思遣る、又の逢瀨は長磯に、此身はひとり捨てら

色を見せず時々に、紛れて語ひ給ひければ、朝霧はつれなきやうに、思ひ居りしに此程は、繁渡らせ給ふに依り、御志の深きも顯れ、殊更わりなく語ふは、別れし後に物思を、いよ〳〵添へる種なるべし。

かくて出立ち給ふ日も、ます〳〵近づき、明後日ばかりになりぬる其日は、暮るゝを待ち、かの岡の家へ渡り給へり。常にはいたう夜を更し、此方も忍んで通ひ給ひ、彼方はとりわけ人目を恥ぢ、閨の燈火灰にして、いつも夜明けぬ其中に、立別れ給ふに依り、まださやかには朝霧の、容姿など見給はざりしが、此夜は宵の程なれば、點しつれたる銀燭の、火影は晝より明かにて、隱れん隈なく差對ふを、つく〴〵と打まもるに、高貴人の妻といふとも、はづかしから ず氣高くして、目覺しき姿なれば、見捨てて行かんも口惜しく、殊には胤をも宿したれば、押つけ支度を調へて、都へ迎へん心となり、詞にも左樣にぞ、語ひ慰め給ひける。光氏の有樣は、度々前にも記したれば、今ははた更にもいはず、年頃の物思に、甚く面痩せ給ひしも、なほ美しく見なさるゝは、人柄に依るにやあらん。心苦しき氣色にて、涙ぐみつゝいと哀れに、うらなく契り給へるは、たとへ此儘捨果てられ、再び使のあらずとも、今まで情を受けたるこそ、女と生れし詮あれと、側目にまもる腰元は、密に言ふもあるべけれど、朝霧の心には、情の深き

なる事かなと、今までよりも猶不便に、思ひなしつゝつく〴〵と、我身の上を顧るに、幼うして母上に、別れし此方さま〴〵の、艱苦の果は見も知らぬ、かゝる浦邊にさまよひて、漸く都の合戰をさまり、父君の御心も、解けて都へ歸るべき、時に臨みて撫子の、種蒔きながらその花の、咲出づるをも詠めずして、船出するとは怪しきまで、物思ふべき身なるかな。都を離る る其折も、思ひの外なる悲しき道に、出立つ事とは思ひしかど、世も靜りなば行廻り、遂には歸來らんと、思ひ慰む方もあり。夫に引換へ此度は、嬉しき方の出立ながら、又此浦を立歸り、見るべき時のあるべしとも、思ひがけねば故鄕を、振捨つるより猶悲しと、さま〴〵思ひ亂れ給ふ。朝霧は更にもいはず、思ひ沈みて物だに言はず。夫に引換へ光氏に、附從ふ者どもは、大方ならず打喜び、京よりも御迎の、人々次第に參りつゝ、心地よげなる有樣を、見もやらずして主の入道　淚にくれて月もたちぬ。

秋もなかばとなりければ、あはれなる空の景色を、見るにつけても光氏は、それかれの事思遣り、あゝいかなれば心から、なしょといふにもあらざれど、今も昔も心を痛め、身を惱ます事いと多きは、前世の罪の報なるか。せめては帶の祝まで、此所にと思へど都より、御使のなほ繁ければ、夫も心の儘ならずと、淚勝にて居給ふを、人々怪しう思ふめり。月頃はつゆ人に、氣

左右する間に春過ぎて、夢の間に夏もたちぬ。義尙公の御目の惱、此頃重くならせ給ひて、物心細く思されければ、東山に聞上げ、七月廿餘日の程に、又重ねて光氏君、京へ歸り給ふべき、御書須磨へ下り著きぬ。義政公の自ら筆を、染めさせ給ひしなりければ、とりわけ謹み拜見し、卷收めて頭を垂れ、「定なき世を見るにつけ、我身はいかに成果てんと、心の中に思ひしを、斯く俄なる父君の、許を請けて嬉しきに、つけても既に二年近く、住馴れし又此浦を、離れん事の名殘惜しや」ト獨語ちつゝそれよりして、兎角に心浮立たず、思し歎くに入道も、さあらん事とは兼てより、思ひ設けし事ながら、斯くと聞くより胸塞がり、いと悲しくは覺ゆれど、我君都へ歸らせられ、いよ〳〵ときめき給ひなば、娘も彼方へ呼迎へ給うて、内君同樣に、傅あたま附けられん。其時こそは我願、叶はめなんど己が心を、己が心に慰めて、思ひ直して居たりけり。

光氏もはや別れんに程無き故にや、此頃は人目も包まず夜每々々、わりなく語ひ給ひけり。然るに過ぎつる水無月の、はじめよりして朝霧は、何となう打惱み、引籠りて居たりしが、秋風の立ちてより、やう〳〵心地も常に復り、病の床は離れけれど、氣むづかしくて酸き物を、好む有樣たゞならず、その氣色いちじるければ、光氏いよ〳〵胸を痛め、別の近づく折も折、生憎

三年以前須磨の浦へ、君御下りの其時に、稻舟姫への御貢の、事ども仰置かれし處、宗全勢烈しき頃は、糺河原を取切られ、往來自由ならざる間、御いたはしや姫君は、此程までも御不自由がち、嵯峨の御館の内君は、實はゆかりの者なる故、御不足なく何事も、計ひながら義勝公の、御愛子をば等閑に、捨置いたりと沙汰あらば、申し解くべき言葉なし。此上の御慈悲には、御免蒙り此座を去らず」ト言ひさま既に指添に、手を打懸けて腹切らんず、覺悟の體に見えければ、押止めて光氏は、わざと少し聲を荒らげ、「嵯峨野糺の館を始め、わがゆかりある所へは、敵を間近く寄せさせじと、皆それ〴〵に手配を、いひつけ置きしが思ひの外、敵兵多く諸所より起り、防ぎ難くて糺の道を、取切られしは豫ての備、行屆かざる故なれば、汝には過失なく、我に却つて落度あり、切腹なさば狂人と、笑はれんは必定せり。はや疾く歸りて光氏も、頓て歸洛と嵯峨の館の、塵を拂はせ置くべきなり。打連立ちて歸るのを、今日か明日かと待ちわぶる、處へ汝は腹切つて、我も戻らぬ知らせを聞かば、いかに歎かんそれかれを、思ひ廻らし自殺を止り、此方の無事を傳へよ」ト、今に始めぬ寛仁大度の、仰に國助額を疊に、摺付け摺付け、詞もなか〳〵涙にくれて、取急ぎ御前を退き、折しも追手の風を幸ひ船出して、立歸りけりとなん。

述べければ、光氏頭を打傾け、「世に有難き兄君の、御志にはありながら、宗全敗北したりと雖も、未だ存命にてある中は、我此所は退き難し。御身都へ直様歸り、室町御所へ罷出で、光氏多く犯したる、罪を赦され給ひし事、忝なしともなか〱に、申上ぐべき言葉も覺えず、程を計りて罷上り、御目見仕らんと、言上なして置くべきなり。波路隔てて住みこそすれ、京地の樣子は間者より、日毎の告にて詳しく知れり。宗全の首勝元の、手に握つたる其折は、迎なくとも立歸らん」ト欣然として紫とも、嵯峨の館はいかにぞとも、問ひ給はねば此方より、申出づべきしほもなく、「さあらば早く船出を急がん、頓て目出度御歸洛待ち奉る。某も去年よりして病に侵され、出仕も心の儘ならず、依りて近々願を立て、本國相摸へ引籠る、心懸に候へば、もしやこれが今生の、御名殘も計り難し。御機嫌能う」トすご〱と、立行く裳裾を光氏は、走り寄つてむづと引止め、「天眼通は得ざれども、我人の五音を聞いて、察する處おほよそ違はず。汝はじめ我を見て、涙にかきくれ言葉を出さず、別に望んで言ふ處も、甚だ以て心得がたし。必死の覺悟極めしは、いかなる事か包まず言へ、道理に當らば止めはせぬ」ト見透す言葉にはつと平伏し、「恐入つたる御眼力。室町御所の仰の趣、傳へまゐらせ其座にて、切腹なさんと此の如く、書置は認めたれど、御前を穢すを恐れ、立去る趣意をあら〱申さば、

ならぬ大事ならん」「はや語れ〳〵」ト、せりたて給へば國助は、なほ近々と御側へ摺寄り、「申上ぐるに及ばねど、今室町の內君たる、立田の前は一色郡領、持廉が娘にて、御顏貌も嬋妍にて、殊に怜悧ましませば、御なからひも睦しう、見えさせ給へど年を重ね、御懷胎の樣子もなく、是のみ諸人歎きし處、去年の春よりその御氣色、諸神諸佛へ御祈念の、驗顯れ安々と、玉の樣なる男御子、生れ出でさせ給ひければ、御所は更なり京洛外、上下の喜び大方ならず、然るに唯今申しゝ如く、義尙公の御惱、させる事とは見えざれど、御みづからは御本復、あるまじう思しけん、今年睦月のすゑつかた、某を招かせられ、たま〳〵男子は擧けながら、まだ二ツにていとけなし、春若丸に世を讓り、我は樂く暮さんと、おもへど彼もまだ幼し、後見なして政事を、執行ふべき其人を、さま〴〵思ひ廻らすに、光氏ならで外に無し、弟ながら仁義の道を、守りて我にも優りし孝子、それを浦曲に沈め置くは、いと有るまじき事なれば、終には母上富徽の前の、仰も背きて父君に只管願ひ、たとへばいかなる罪ありとても、光氏を赦されぬべきに定めつ、汝密に彼所へ下り、此事告げよと密の仰。晉川山名の合戰も、勝元既に勝利あらはれし、はや宗全は味方の者、殘ずくなに討なされ、散々になり落行けば、君此所に御座あつて、西國押への御用心にも、及ぶまじく候間、御歸洛あつて然るべし」ト、事細やかに

二十一編　下

年かはりぬ。都にては義尙公、御目を煩ひ給ふ上に、御心地例ならざりければ、世の中いよいよ騷がしく、さま〴〵に言罵るよし、此浦へも聞えけるにぞ、光氏も一方ならず、心を痛め給ひけるが、ある日表の方よりして、あわたゞし氣に走り來るを、誰ぞやと見れば惟吉なり。何事なるかと問ひ給ふも、待たず後に指示して、「思ひがけなく遊佐の國助、罷下られ早是へ」ト聞いて光氏胸轟き、「近う〳〵」ト招き給ふ、御かほばせを見るよりも、國助淚に搔暮れて、言葉もなければ急立ち給ひ、「まづ問ふべきは義尙公、御藥の事ありと、此浦にてもとり〴〵風聞、御所勞の御容體、いかに〳〵」ト光氏の、言葉にやう〳〵國助は、淚拂ひて面を上げ、「久しぶりにて拜顏の、喜ばしさに取交ぜて、嵯峨にまします内君の、常々歎かせ給ふ御事、胸に浮みて思はぬ落淚、義尙公の御所勞の、重らせ給ふ注進かと、思召し違へられ、暫しが程も御心を、痛めし段なわが落度。日每々々に室町へ、出仕致して御有樣を、見上ぐる度に御肥立、御全快にも近ければ、まづ御心安かるべし」ト聞けども光氏安堵せず、「汝が此度下りしは、なみ〳〵

御側(おそば)に侍(はんべ)る女にさへ、深く包(つゝ)み給ひしかば、日記(にき)の様(やう)に書き給へり。いかなる事をか記(しる)されし、それ知る者は無しとなん。

など、かど〳〵しくは聞えねど、心の中に恨めしと、思ふを掠めて書きしかば、いと哀れさの身に染みて、打措き難く見給ひつゝ、此頃使を立たせしより、返を待侘びその文を、見て猶更にこの如く、嵯峨の事のみ思遣り、久しく岡部の家を訪はず、忍の旅寐もし給はねば、朝霧は初より、思ふに違はずかれ〴〵に、なり行き給ふと胸塞り、年老い給ひて行末の、短き親のみ頼として、今まで年月暮しゝも、いと便なく思ひしが、身にもふさはぬ位ある、人と契りて程もなく、拴果てられなば兩親を、力となしゝ時よりも、まさりて悲しき目や見んと、心を惱し今ぞ實に、海に身を投げつべき、心地しながら邂逅に、忍び給ひし折々は、恨めし氣なる氣振も見せず、なだらかに待遇して、憎からぬ樣に見えしかば、月日のたつに隨ひて、光氏もいとあはれと、思はぬにしもあらざれど、嵯峨野に生ひし菫草、ゆかりの人にはあづけしが、覺束なくて年月を、過ぐるに兎に角心に懸り、明石を末の松山に、言ひなぞらへて送りしを、思ひ出づるに心苦しく、獨寢勝に打過ぎて、繪をさま〴〵に描き集め、文の代に都へ送り、返事を聞くべしと、思ふ事ども其上に、さま〴〵に書付け給へり。

實に嵯峨の內君とは、離れておはせど御心は、自然と通ふとおぼしくて、嵯峨の君も物哀れに、慰む方なくおぼえ給ひ、おなじ樣に此頃より、繪をかきあつめ給ひつゝ、やがて我身の有樣を、

にあらねば其事の、胸に浮みてまづ此よし、彼が許へ言遣らんと、いつもよりも細やかに、書いたる文のその奥に、

實や都に在りし時、心の外のすさび事に、紛れ出でしをあだ〳〵しき、心なりとて疎まれし、その折々を今思ひ出づるも、胸の苦しきに、この浦にても又怪しう、はかなき夢を見侍りしが、人の物言さがなきも、磯打つ浪の聲に紛れ、都へ聞えん由はなけれど、我より斯くと問はず語りに、告ぐるに隔なき心を、思ひ合せ給ふべし、誓ひし事をっ

など書きて、

かりそめのみるめは蜑のすさびかな

「この文を嵯峨の住居へ、片時も早く持行くべし」と侍にいひつけて、直に立たせ給ひければ、夜を日についで道を急ぎ、四日ばかり過ぎて後、紫の上の返を、かの使は持て歸りぬ。取上げて見給ふに、何心なく美しげに、書いたる文のそのはてに、

思ひがけなき御夢語、夫にて思ひ合せらるゝ、事の多かる其中に、

はつしほや松より浪の越えんとは

知らずうらなく契りしこそ、いと愚に侍れ。

は打消しにつこり笑ひ、「いえ〳〵、是から申上げぬと譯が分らぬ、宗入様が是程君を慕はせられ、どうぞ娘を上げたいと、思召すお心の、實を女の淺はかな、心ながらも感入り、宗全より忍の使、今に絶えずと密書に認め、御目に懸けしは君を岡邊へ、釣出す爲の背いつはり。宗入様のおつしやるは、腹は變れど種はひとつ、端折屈の兄ながら、天命知らずの不所存者と、宗全とはゝや音信不通、御心置なくいつまでも、此所に渡らせ給ふべし、出名を欺る我君を、又欺りしは我ながら、天晴智惠者」と蜑の子に、劣らず千鳥も囀り散し、持來し文の返事も乞はず、逃行く影を光氏は、見送りて笑を含み、「口のさがなき女郎花、我落ちにきと語らねば、宜いが」ト机に打凭れ、彼が携へ來りし文を、手に取上げしがその紙の、紫なるに不圖嵯峨に、殘し置いたる紫の、事を思ひて吐息をつき、風の傳にも此頃の、事ども彼が洩聞きなば、戲にもせよまづ聟に、ならせ給ふを斯う〳〵と、告知らせもせず包みしは、心に隔ありけるよと、恨みんかとて心苦しく、案じ給ふも取分けて、睦しかりし故なるべし。前にもたび〳〵記すが如く、この嵯峨の内君は、類稀なる利發にて、情深く心優しく、假にも人と爭はず、かくまで柔和の生ながら、かゝる方の事のみは、早く目をとめ氣にとめて、光氏都にありし頃、夜ありきしげ〳〵なる時は、恨み嘆ちて引止め、曲り給ひし事なんどの、なき

氏が常に住む、座敷を窺ひ彳むを、此方は夫と早くも見とめ、「幸ひ邊に人もなし、是へ來れ」と近く呼寄せ、「過つる卯月主より、衣更の衣服とて、我に贈りし衣の袂に、縫付置いたる一通に、密書と書きしは其方の手蹟、何事なるかと密に見れば、宗全よりして忍の使、今に絶えぬは心得がたし、此上ともに宗入が、兒に合體なさゞるため、祕藏の娘朝霧と、語ひ給へと記してあり、夫故にこそ斯くまでに、心を盡し親子の體を、つく〴〵と窺ふに、都よりして音信の、ありし樣子は更になし、忍の使はいかなる姿に、窶して此所へ來りし」ト、問はせ給へば千鳥は摺寄り、「ひとつ構の内ながら、此所から朝霧樣の、お住み遊ばすあの岡邊の、お家までは程も少し、離れてあれば每夜々々、御通ひなさると自から、人も見咎めその中には、物言さがなき蜑の子も、立交りてかうであゝでと、囀り散す事もあらうと、あなたは夫を思し憚り、しげしげ通ひ給はぬを、さればこそその初に、返す〴〵も言ひたる通り、田舎育のこの朝霧、御氣に入らう筈はない。はやもう飽かれて絶々に、なりしとよく〱嫉君の、御歎を入道樣も、聞召されて實にさういふ、事もあるかとかの極樂の、願をば打忘れ、阿彌陀如來の來迎より、君の御入を待ち給ふ。望叶ひて今更に、心を腦し給ふのが、いとほしう侍べる」と、さら〱と言述ぶれば、光氏は眉に皺寄せ、「わが問ふ事は答へもせず、何をか言ふ」ト咎むるを、千鳥

とばかり仄に答へたり。光氏つら〳〵案ずるに、阿古木は流の女なり、是は田舎の娘なり、さりながらふたりとも、素性の卑からざるを、心に思ひてうちあがりし、けはひはいと能く似通ひたりと、小首を傾け言葉なし。既に前にも記しゝ如く、朝霧はこの座敷に、何心無く打解けて、遊び居たりし其折に、忍び渡らせ給ひしを、早くも知りて近かりける、障子の内に隠れしが、尻差や堅めけん、觸れど開かず強くせば、開くべきを光氏は、人の心を破らじと、思へば強て押開けず。されど歸らん風情もなく、此程よりの心盡しを、淺からず哀れに歎ち、叉は一廉ある言葉に、實を現はし給ひければ、御姿のみかは御志も、近勝りするなるべし。若き身にさへ寢覺して、常には長く覺えたる、秋の夜ながら今宵のみ、早く明けぬる心地して、人に見られじ知られじと、思へば心あわたゞしう、細やかた語ひおき、光氏は立歸り、心の鬼に恥かしく、今までよりも忍びやかに、今朝まづ文を送りけり。さて入道は朝霧の、腰元女に語ひ置き、昨夜よりの事どもを、備に聞いて多年の願、今こそは叶ひしと、喜びながら流離の、御身にてましませば、此事を世に洩さじと、深く包みて御文の、使に來りし侍を、ことごとしくも饗應さず、かへし遣りしを宗入は、胸苦しくぞ覺えける。斯くて後は忍びつゝ、とき〴〵通はせ給ひしが、ある夕暮に朝霧の、文もて例の腰元千鳥、光

誰か眺めん懸橋は、吉野龍田の景色ある、所へ渡し給へよ」ト、言捨て奥へ入らんとせしが、あまりにつれ無き女やと、笑はれんやと思ひけん、又光氏が有樣を、ほの見まほしく思ひてや、次の一間に隱ろひて、此方を窺ひ居たりけり。

光氏は吐息を吐き、都にときめく人の娘に、優りて彼が心强さ、斯くまで窶れし某が、身を侮りし故なるか、とありて此儘歸りなば、心くらべに負けたりと、漏聞く人の譏らんかと、さまざまに思ひ惱み、心に案じ口に囁き、亂れ恨み給ふ樣、物の心を辨へし、人にこそ見せまほし。其時に琴の音の、さらりと響くに思はずも、ふつと見かへり給ひければ、近き屛風に脫かけし、振袖の風にあふり、おのづから彈鳴されたる、音と思しく人はなし。褥の邊に爪袋、柱袋なんど打散りて、今までけはひしどけなく、打解けながら此琴を、掻まさぐりける姿見えて、いとをかしさに朝霧が、隱れし方に打向ひ、「娘の調ぶる手遣は、我に優りしなんどとて、入道の話にのみ、聞馴したる琴をさへ、惜み給ふは恨めし」ト、猶さま〴〵に宣ひて、

　世の夢も半は覺めん引板の音

我に彈きて聞かせよな、心に籠めて物越に、言ひかけ給へば彼方にて、

　心惑ひいづれを引かん引板の繩

時の間に駈けれ月毛の駒の爪
と打囁き給ふ中に、何地行きけん千鳥は見えず、訝しながら光氏一人、岡邊の宿に近づきて、そこらの景色を眺むれば、造れる樣のいと木深く、海の面にいかめしく、造りなして打晴れたる、高殿なんどの面白く、又は萱もて葺渡し、賤が家めきて心細く、住みたる樣の方もあり。此所に居ては世の憂さも、自から忘れんと、思遣られて物哀れに、彳み給ふに入道の、かの行を勤むるなる、三昧堂の近ければ、鉦の聲松の風に、響合ひて物悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへある樣なりけり。此所彼所の有樣など、御覽じながら猶近く、分入り給へばいろいろの、草の花ども庭の面に、踏所なく咲滿ちて、蟲の聲を盡したり。かの娘を住ませたる方は、殊に磨き立て、周圍の竹垣結廻し、たゞ一筋の細道なる、槇の戸口を打開きて、おきなば渡らせ給へといふ、心の見えてはすはなり。然ばとて閉寄せて、おくのも心なしとてか、月影細くさしいる程、けしきばかり押開けたり。光氏緣に打憩ひ、障子の內に朝霧の、居るを推してほとほとと扇を鳴し、「ふみ見るもいと危きと知りながら、仲立つ人を藤葛、縋りて渡る言葉の懸橋、峯の木魅の一聲は、答へ給へ」ト宣へど、豫てよりして朝霧は、見えじものと心に深う、思ひ居たりし事なれば、此所へ忍びておはせしが、なか〳〵に歎かしう、「花も香もなき磯馴松、

らしき聲ぞする。此頃はたゞ岸を打つ、浪の音のみ耳につき、いとうるさきに入道が、年頃敎へ置いたりと、物語りしかの物の音を、聞かばやさらずは此浦の、寂しさは堪へ難しと、ほのめかしても答は無し」ト少し曲りて宣へば、につこり笑うて手をつかへ、「主の申上げまする、岡邊の家は打晴れて、今宵は風情も侍らん、只あたら夜のと聞えあげ、御供致せと御駕籠の、用意もされしが構の内、殊には路も狹ければ、御馬の方が宜からうと、私一人が御口取、いざ是に召しませ」ト庭下駄直せば光氏も、片頰に笑みて打點き、「古くは駒の爪と呼び、今駒下駄といふ木履を、馬に乘れとは心憎し。又入道も、

　あたら夜の月と花とをおなじくは心知られん人に見せばや

その古歌の五文字のみ、言致しゝも物好なり。まだ有明の程なれば、ゆる〳〵行かん」ト薄物の、羽織を取つて引つくろひ、さま〴〵積る物語に、夜ふかして出で給ふ。かの岡邊の家は、今まで住みし座敷よりは引離れ、同じ構の内ながら、やゝ遠く入る所なり。路の程も四方の浦浦、手に取るばかりに見渡され、思ふどち、いざ見にゆかん玉津島、入江の底に沈むと詠みし、歌さへ心に浮ぶなる、月の影にもまづ戀しき、人の事を思ひいで、この庭下駄の駒ならば、直に都へ引返し、赴きぬべく思ひつゝ、

曇る君、辛う切ない目を見てから、後悔してもかへらぬ事、目にも見えぬ神佛を、頼になされる宗入殿、光氏君のお心をも、娘が運はこれ程で、あらうといふも分別なく、良聟取りしと思はるゝが、いかにしても笑止なゆゑ、打返し〳〵、御意見申して、彼方へあぐる事をば延べて置くものの、若し忍んでやおはさんかと、さま〴〵思ひ亂れて居る、妾が心は白浪に、千鳥が兎角轉りて、過つる卯月お文の返事を、初めて娘に書かせたも、屏風の陰で聞いて居た。此後屹度たしなめ」ト眞柴はそれかれ心をつけ、兎角思ひ煩ふを、聞入れずして宗入は、召使ふ男女にだに、深く包みて我心、ひとつに何か思案を定め、忍びやかに陰陽師を、招きて吉日を占はせ、心祝ひの事あれば、密に是へ招く人、ありとて娘に物好せし、袷帷子打著せつ、常より髪も艶好くあげさせ、名の木を撰びし懸香は、邊に薫じてさながら立居も、輝くばかりに粧はせ、腰元千鳥を膝元近く、呼寄せて何やらん、打さゝやいて表へ走らせ、妻眞柴にも「密々に、我語ふ事のある間、此方へ來よ」ト宗入が、居間へ誘ひ其座には、若き腰元女のみ、殘して皆皆退きて、既に其日も暮れければ、朝霧も大方は、推して胸の轟くなるべし。

その日は八月十三日、月華やかにさし出でたるを、光氏は只ひとり、打眺めて居る處へ、「御免遊ばせ我君」ト、手燭かゝげて入來るを、誰ぞやと見れば千鳥なり。「幾夜寢覺を訪ふか、いと珍

人に見えず年月を、過さばもしや良縁の、ありもせんかとまだ夫を、かひなき頼とし給はんが、人数ならぬ此身ゆゑ、なか／＼馴れて程もなく、捨果てられなば物思を、妾が添へるのみならず、今にもまさりて父上の、猶御心を盡さんかと、思へば露も我君の、御側へ寄らん心はなし。年頃音に聞傳へ、さういふ御方の御有様、いつぞは見上げ申したいと、口に言はねど心には、とうから思うて居たりしを、思ひがけなく去年より、須磨の浦邊の御住居、其方が勸めに姿を變へ、人目を包めば御顔と顔、たしかに向合はさねど、仄にも見奉り、世に類なき御上手と、人ごとにいふ御琴の、音も松風に連れて聞き、ましてや今は此浦へ、迎取り參らせられ、旦暮の御有様、斯うであゝでと皆の者が、話は御側に居るのも同前、彼方にも妾が事、知召されて戯にも、尋ね給ふは有難き、事と思うて此浦に、おいでの中はたゞお文で、聞え交すが此世の思出、濱邊の蜑に立交り、朽ちぬる身には餘る嬉しさ、能う思うても見たが宜い」ト振向く此方に母眞柴。朝霧いよ／＼羞かしう、千鳥もはつと驚いて、立つも立たれず手をもじ／＼。眞柴はにつこり打笑ひ、「入道殿は年頃の、祈の驗顯れて、今こそ願叶ひしと、喜んで居らるれど、朝霧が今言ふ通り、迂濶に逢はせまゐらせて、田舎育と見下され、物の數ともし給はぬ、其時は又どの様な、歎をせんと末々の、事を思へばいみ／＼しく、世には光ると聞ゆれど、私の胸は

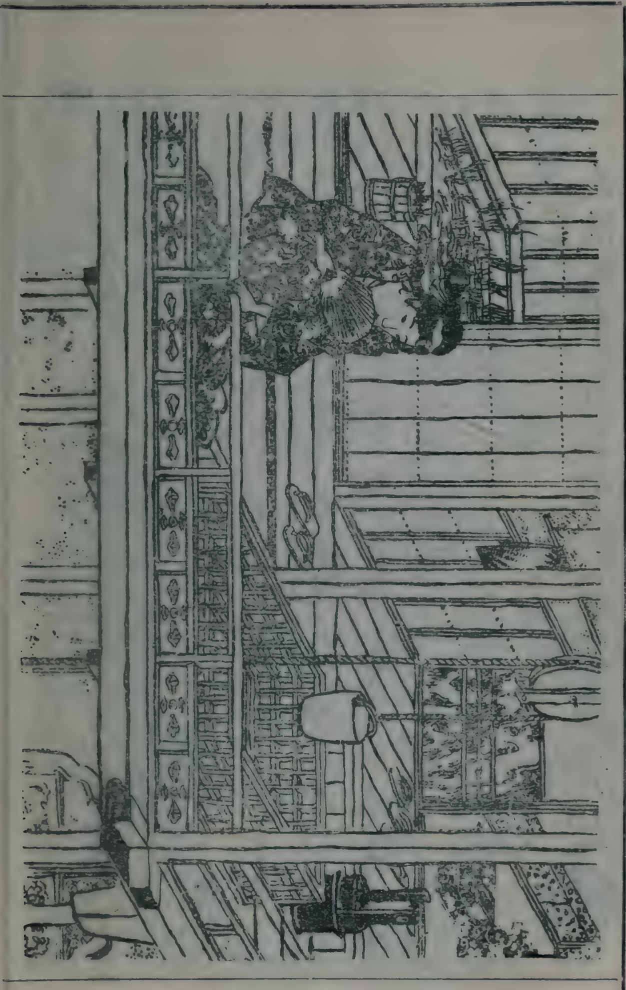
偐紫田舎源氏

柳亭種彦著

二十一編 上

「垣の卯の花咲く頃より、御庭の萩の移ろふまで、お文の取遣ばかり遊ばし、脇から見る目ももどかしい。何所も秋は寂しけれど、此所はとりわけ濱風の、都に變りて御身に染み、光氏君も御獨寐を、侘しう思召すかして、入道樣をお話相手に、折々御側へ招かせられ、事に擬へてあなたを彼方へ、進らせよとは宣へど、此方へ渡り給はん事をば、あるまじう思召し、あなたは又むくつけな、田舍人かなんぞの樣に、初から打解けて輕らかに語らふ業は、せぬものぢやとて思ひたち、此方から御出の氣色はなし、いつがいつまで睨めくら、心くらべを遊ばして、御出なさるが私にはとんと合點が參りませぬ。立浪はじめむづかしい、顏する者は御側に居ず、さア此隙にお心の、底を聞かせて下さりませ」ト千鳥に言はれ朝霧は、襟に埋みし顏を上げ、「妾を不便と思召し、よしある人に添はせんと、所詮及ばぬ親達の、願ひながらも引籠り、





願ひの如く明石まで立消のせず續きしも板元が油町でござり
ますと、利屈ずくの茶番めきくさし出れバ、店に顔を合せし
女清玄墓祭りの錦繪をかし並べ、是が尼の釣舟でござり
ます。海士の囀りとやらシますも、おとゝやっぴいの事でござりませう。
ト清玄尼乃絵をとらへて見せ。源氏ハ假字冊子でござりますから
ひら假名をお用ひなされます。ト盛衰記先陣問答の絵を出し、獨
案覚の床をもらひし、是が千早でござります。梅がえふみつけます
ぜうと、まづくござりますがトいひながら出し、その絵を順よくならべ
繪合せ[illegible]程ハござりませねといへる廿一編の序文にかへさ
[illegible]又腰元[illegible]よりかぶきかゝりに説出せり

天保丙申正月良辰　柳亭種彦述

種彦作
國貞画
卌一編上冊



泊田
霍屋板


廿一編上

修紫田舍源氏 下 目錄

偐紫田舎源氏

下

